鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　21

平成16年度発掘調査報告

（第１分冊）

平成17年３月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　21

平成16年度発掘調査報告

（第１分冊）

平成17年３月

鎌倉市教育委員会

北条時房・顕時邸跡

大倉幕府跡（地点７）

ごあいさつ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ６割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成13年度から平成15年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建設に伴う発掘調査の記録として16ヶ所の調査成果を掲載しています。特に大倉幕府跡（地点６・７・８）は源頼朝が鎌倉幕府を設けた場所と推定され、部分的ではありますが、鎌倉時代初期の遺構が発見され、大きな成果をあげることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成17年３月31日

鎌倉市教育委員会

例　言

1　本書は平成16年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書(第１分冊及び第２分冊)である。

2　本書掲載の調査地点及び収録分冊は別表・調査地点位置図及び目次のとおりである。

3　現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

4　出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。

5　各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

総　目　次

（第１分冊）

ごあいさつ …… Ⅰ
例　言 …… Ⅱ
平成16年度調査の概要 …… Ⅴ

1　北条時房・顕時邸跡（No.278）雪ノ下一丁目264番４
第１章　調査地点の歴史的環境 …… 5
第２章　調査の経過と層序 …… 8
第３章　検出した遺構と遺物 …… 10
第４章　まとめ …… 83
附　編　呪符木簡類似文献史料 …… 87
2　材木座町屋遺跡（No.261）材木座六丁目647番15
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 145
第２章　調査の概要 …… 148
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 152
第４章　まとめ …… 184
3　大倉幕府跡（No.253）雪ノ下三丁目701番14
第１章　遺跡と調査地点の概要 …… 205
第２章　調査の概要 …… 212
第３章　第１地点の調査 …… 215
第４章　第２地点の調査 …… 251
第５章　第３地点の調査 …… 343
第６章　まとめと総括 …… 369

（第２分冊）

4　浄妙寺旧境内遺跡（No.408）浄明寺三丁目126番
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 5
第２章　調査の概要 …… 8
第３章　検出遺構と遺物 …… 12
第４章　浄妙寺境内遺跡の花粉分析 …… 44
第５章　まとめ …… 44
5　無量寺跡（No.196）扇ガ谷一丁目26番27外
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 105

第２章　調査経過とグリッド配置図・基本層序 …… 108
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 112
第４章　まとめ …… 161

6　玉縄城跡（No.63）植木字相模陣425番３外

第１章　調査地点の諸環境 …… 201
第２章　調査の概要 …… 203
第３章　調査成果 …… 203
第４章　まとめ …… 213

7　天神山城（No.384）山崎字宮廻747番３

第１章　遺跡位置と環境 …… 223
第２章　調査の概要 …… 224
第３章　調査成果 …… 224
第４章　まとめ …… 229

8　感応寺跡（No.225）材木座六丁目722番１

第１章　環境と立地 …… 234
第２章　調査の概要 …… 236
第３章　遺構と遺物 …… 238
第４章　調査成果 …… 254

9　北条小町邸跡（No.282）雪ノ下一丁目407番３の一部

第１章　遺跡位置と歴史的環境 …… 263
第２章　調査の概要 …… 269
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 275
第４章　まとめ …… 302

10　坂ノ下遺跡（No.217）坂ノ下53番の一部

第１章　環境と立地 …… 333
第２章　調査の概要 …… 334
第３章　遺構と遺物 …… 334
第４章　調査成果 …… 338

11　円覚寺門前遺跡（No.287）山ノ内字松岡1344番

第１章　遺跡位置と歴史的環境 …… 347
第２章　調査の概要 …… 350
第３章　発見された遺構と遺物 …… 355
第４章　まとめ …… 398

平成16年度調査の概観

平成16年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査３件を含む32件であり、調査面積は1442.09㎡であった。これを前年度の34件、1,750.79㎡と比較すると件数は２件減少（対前年度比5.8%減）し、調査面積では308.70㎡の減少（対前年度比17.6%減）となっているが、ここ数年間の傾向としてはほぼ横ばいの状態とみることができる。調査面積は平均で１件あたり45.06㎡（前年度は45.89㎡）であり、この点からは１件あたりの調査面積が前年度よりさらに小規模化している傾向が窺われる。

調査原因の内訳は、個人専用住宅の建設が29件、自己用店舗併用住宅の建設が１件、診療所併用住宅の建設が１件、賃貸住宅の建設が１件であった。個人専用住宅の建設に関わる２９件の内訳は、鋼管杭打ち工事が19件（65.5%）、地盤改良工事が８件（27.5%）、地下室の築造が２件となっている。今年度も鋼管杭打ち工事や地盤改良工事が発掘調査の主体的な原因（27件：93.1%）となっている傾向が顕著にみられた。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。（調査原因、面積及び期間等については「平成16年度調査地点一覧」を参照。）

1　宇津宮辻子幕府跡（N0.239）

市内中心部の東側を南北に貫く小町大路の西側に所在している。地下室の建設を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片など13世紀から14世紀にかけての遺物とともに方形竪穴建築址、柱穴、土壙、井戸などを発見した。幕府推定地の一角まで海浜部から続く砂丘が広がり、倉庫群が作られていたことは、中世都市鎌倉の都市構造を知る上で新しい知見であった。

2　北条時房・顕時邸跡（N0.278）

鶴岡八幡宮の南西側に所在し、若宮大路から西に35ｍ程奥まった場所に位置する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品など13世紀から14世紀にかけての遺物とともに柱穴、土壙、礎石建物跡、池跡などが発見された。礎石建物跡は東西方向に柱間２ｍ10㎝（７尺）の礎石列が２間分発見された。また、池跡は玉砂利が集中していた。建物と池が同時期に存在していたかどうかは明確になっていない。若宮大路に面していたと推定される屋敷の区域で礎石建物跡と池跡が確認されたことは、中世都市鎌倉の中心部の館の構造を知る上で新しい資料を得ることとなった。

3　若宮大路周辺遺跡群（N0.242）

前述の調査地点１から北東270ｍ程にあたり、小町大路の東側に面する場所に位置している。基礎工事に際して地盤の柱状改良を実施する個人専用住宅にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、小町大路東側の側溝と推定される溝及びその東側に広がる掘立柱建物群が確認された。

4　積善遺跡（N0.440）

市内中心部の東側から横浜市に通じる十二所字二ツ橋に位置し、県道金沢鎌倉線の西側に所在する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、礎石建物跡、土壙、溝、柱穴等によって構成される遺構が発見され、鎌倉時代後期の屋

敷地と考えられる２時期の遺構群が確認された。

5　円覚寺門前遺跡（N0.287）

市内北部、山ノ内に所在するＪＲ北鎌倉駅前を南北にはしる主要地方道横浜鎌倉線から瓜ガ谷に向って約70ｍ程西側に入った場所に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、土壙、柱穴、井戸等の遺構がやや散漫な状態で発見されたが調査範囲が狭小であったために遺構群の全貌を把握するには至らなかった。

6　材木座町屋遺跡（N0.261）

市内中心部の下馬四ツ角の東側に所在し、ＪＲ横須賀線の線路の西側に面した場所に位置する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする賃貸住宅の建設が個人事業として実施されることが調査原因であったが、発掘調査の着手前に鋼管杭打設が行われるという不本意な状況のなか、急遽、発掘調査を開始した案件であった。

調査の結果、床面の四周に長方形の切石を並べた構造の方形竪穴建築址２棟をはじめとする遺構群が発見された。

7　下馬周辺遺跡（N0.200）

市内中心部の下馬四ツ角の南西に所在し、若宮大路から琵琶小路と呼ばれる路地を西側に入った道路の南側に面した場所に位置する。鋼管杭の工法による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀後半から14世紀前半にかけての板壁建物跡、柱穴、木組の土留及び通路状遺構等の遺構群が発見された。

8　円覚寺門前遺跡（N0.287）

前述の調査地点５の南側に隣接する場所である。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、発掘調査の対象となった面積が狭小であったにもかかわらず、中世後半に属する礎板を有する柱穴等の遺構及び当該期の土器類等、若干の出土遺物を発見することができた。当該地における路の東側や西側でよく目にするような木組みの構造を有する側溝が現在の道路の西側に沿って発見された。今後、当該地周辺の材木座地域における都市構造の解明に大きな手がかりを与える成果が得られたと評価できる調査であった。

10　大倉幕府北遺跡（N0.193）

市内中心部のやや東側に所在し、かつて源頼朝が開いたとされる初期の鎌倉幕府（大倉幕府）があったと推定される区域の北側にあたる西御門二丁目に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、調査範囲が狭小であったにもかかわらず、柱痕の遺存する13世紀後半代の掘立柱建物跡等の遺構が発見された。

11 長谷小路周辺遺跡（N0.287）

市内中心部の西側にあたる長谷三丁目に所在し、長谷観音前の交差点から光則寺に通じる路地の北側に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、土壙、溝、柱穴等によって構成される遺構のほか、側溝をともなう道路状遺構を発見することが出来た。

12 佐助ヶ谷遺跡（N0.203）

市内中心部からやや西側によった佐助ヶ谷と呼ばれる谷戸の最も西側山裾に位置している。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、調査範囲の西側において岩盤上に掘立柱建物跡の柱穴が３口発見され、谷戸内での土地利用状況を理解する手がかりが得られることとなった。この建物跡は13世紀後半代の遺構と考えられるものであった。

13　佐助ヶ谷遺跡（N0.203）

前述の調査地点12の東側に位置している。当該地においても基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設が実施されることとなり発掘調査を実施した。

調査の結果、土壙、柱穴、井戸等の遺構が発見された。当該地における遺構の全体像については、今後の資料整理作業において地点12の調査成果とともに総合的に考察をすることとしたい。

14　能蔵寺跡（N0.314）

市内中心部の南東にあたる材木座二丁目に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡、築地状遺構等が発見された。築地状遺構等は基底部に大型の鎌倉石切石を据える堅牢な構造によるものであった。出土品の量は少ないものの、その内容は土器、陶磁器及び木製品類に多彩な内容があり、市街地中心部の調査と同様な状況であった。

15　法泉寺跡（N0.182）

市内中心部の北側にあたる扇ガ谷四丁目に所在し、ＪＲ横須賀線の線路の西側から海蔵寺に通じる道路の北側に面して立地している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡、土壙、柱穴、溝跡等の遺構が発見された。出土品のなかには少量ながら瓦や笹塔婆等の宗教関連遺物が含まれていることが特徴的である。

16　円覚寺旧境内遺跡（No.434）

市内北部の山ノ内に所在し、ＪＲ北鎌倉駅の南東に位置する。調査地の北側一帯は国指定史跡円覚寺境内に指定されている。地下室の築造を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、土壙、柱穴、溝跡等の遺構が発見された。溝跡は断面形が箱堀状を呈する幅1.5ｍの溝でおおむね14世紀代の遺構と考えられる。

17 東勝寺跡（No.246）

市内中心部の東側に位置し、滑川を東側に越えた葛西ヶ谷の最も北側に展開する支谷中に位置する。国指定史跡東勝寺跡は当該地の東側に隣接している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀後半から15世紀前半にかけての中世遺構群が発見された。これらの遺構は礎石建物跡、掘立柱建物跡、柱穴等が主体をなすもので、おおむね３時期に区分することが出来る状況であった。

18 浄妙寺旧境内遺跡（No.408）

市内東部の浄明寺三丁目に位置し、県道金沢・鎌倉線の北側の場所である。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、土壙、柱穴、溝跡等の遺構が発見された。溝跡は南北方向に軸線を有し、木組の構造をもつ溝であった。こうした構造の溝跡は若宮大路を中心とする市街地中心部では多数発見されているが、当該地周辺での発見はほとんど例がなく、この地域の歴史的な様相解明に新たな知見が得られることとなった。

19 東勝寺跡（No.246）

前述の調査地点17北側に隣接する。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、南側に隣接する地点17の調査成果とほぼ同様に13世紀後半から15世紀前半にかけての中世遺構群が発見された。特徴的な遺構の状況として礎石建物跡の周囲の地面を玉砂利で丁寧に敷き詰める状況のあったこと指摘することができる。

20 弁ヶ谷遺跡（No.249）

市内中心部の南東に位置し、海岸部にも程近い材木座六丁目に所在している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、礎石建物跡、掘立柱建物跡、土壙等の遺構が発見された。これらの建物跡にはそれぞれ２回の建て直しが行われた形跡が確認されている。おおむね14世紀後半から15世紀前半という鎌倉の中世遺構としては比較的新しい時期の遺構群であった。

21 若宮大路周辺遺跡群（No.242）

市内中心部に位置し、ＪＲ鎌倉駅とは細い路地をはさんで西側に隣接する場所に所在している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡、柱穴、石列、土壙、溝跡等の遺構が発見された。湧水の激しい場所であったため、出土品には形代や漆盆等の木製品が多く含まれている。

22 大倉幕府北遺跡（No.193）

前述の調査地点10の南側に隣接する。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、調査地点10とほぼ同様の様相が確認された。当該地における遺構の全体像については、

今後の資料整理作業において地点10の調査成果とともに総合的に考察をすることとしたい。

23　覚園寺旧境内遺跡（No.452）

市内中心部の東側となる二階堂に位置し、鎌倉宮から覚園寺に至る道筋の西側に所在する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、礎石建物跡、掘立柱建物跡、通路状遺構、土壙等の遺構が発見された。これらの遺構のうち、14世紀代には火災に遭っている痕跡が確認されている。

24　材木座町屋遺跡（No.261）

市街地中心部の南東にあたる材木座一丁目に所在する。下馬四ツ角からも500ｍ程の位置関係である。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、柱穴、溝跡、土壙等の遺構が発見された。土壙からは15世紀代のかわらけが一括廃棄された状態で発見された。

25　材木座町屋遺跡（No.261）

前述の調査地点24の東側に隣接する。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、調査地点24とほぼ同様の様相が確認された。当該地における遺構の全体像については、今後の資料整理作業において地点10の調査成果とともに総合的に考察をすることとしたい。

26　若宮大路周辺遺跡群（No.242）

市街地中心部の東側にあたる小町三丁目に位置し、小町大路から宝戒寺の南側の路地を東に入った場所に所在する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする診療所併用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、礎石建物跡、掘立柱建物跡、井戸、溝跡、土壙等の遺構が発見された。14世紀代の遺構面にはおびただしい量のかわらけが一括廃棄された状態で発見されている。今回の調査成果からは、現在は若宮大路周辺遺跡群の名称で扱っている埋蔵文化財包蔵地であるが、今後は北側に隣接する北条高時邸跡の一部として理解することにより、かわらけの大量一括廃棄という状況を理解することも可能になると考えられた調査であった。

27　円覚寺旧境内遺跡（No.434）

市内北部の山ノ内に所在し、前述の調査地点16とはＪＲ横須賀線の線路を隔ててほぼ西側に隣接する場所に位置している。また昨年度、発掘調査を実施した地点の東側隣接地でもある。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡、柱穴、土壙等の遺構が発見された。本調査地点に関して興味深いこととしては、当該地を国の重要文化財に指定されている円覚寺境内絵図に対比して見ると、絵図の作成後に蔵六庵が建立された場所の一角にあたる可能性があり、今回の調査で確認された建物遺構等がおおむね蔵六庵建立の年代と大きく隔たらない時期の遺構であることを指摘できる。

28　若宮大路周辺遺跡群（No.242）

前述の調査地点26の西側に近接する。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅

の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、柱穴、土壙、溝跡等の遺構が発見された。溝跡は東西方向に軸線を有する幅約２ｍ、深さ１ｍの規模の大きなものでこのあたり一帯の区画溝的な機能を有すしていた可能性のある溝ではないかと推定されるものであった。当該地における遺構の全体像については、今後の資料整理作業において地点26の調査成果とともに総合的に考察をする必要があろう。

29　下馬周辺遺跡（No.200）

市内のほぼ中心部に所在し、逗子方面に通じる県道鎌倉葉山線の下馬交差点のやや東になる県道の南側、大町二丁目に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設が調査原因であったが、発掘調査の着手前に鋼管杭打設が行われるという不本意な状況のなか、急遽、発掘調査を開始した案件であった。

調査の結果、現在の県道にほぼ直角に突き当たるような南北方向の道路状遺構とこれにともなう断面形が薬研掘り状を呈する溝が道路状遺構の東側及び西側で発見された。

30　大楽寺跡（No.262）

市内中心部の東に位置する浄明寺地区の通称、胡桃ヶ谷と呼ばれる谷戸の南側入り口部分となる浄明寺四丁目に所在する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀後半代の礎石建物跡が部分的に発見されるなど、谷戸内における土地利用の一端を知ることが出来る発掘調査となった。なお、調査は17年度にかけて引き続き実施することとなった。

31　長谷小路周辺遺跡（No.236）

市内中心部のやや西側となる長谷一丁目に位置し、県道鎌倉葉山線が東から西に向かう道筋の南側に所在する。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する自己用店舗併用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、砂丘上に営まれた方形竪穴建築址等の遺構が発見された。なお、調査は17年度にかけて引き続き実施することとなった。

32　佐助ヶ谷遺跡（No.203）

市内中心部のやや西側となる佐助一丁目に位置し、通称御成山と呼ばれる丘陵の西麓に対面するかたちの丘陵の東側裾部分に所在する。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、旧地形となる丘陵を大きく切り崩して形成された平場に中世の遺構が営まれている状況が判明した。なお、調査は17年度にかけて引き続き実施することとなった。

本誌所収の平成13・14・15年度発掘調査地点一覧

第1分冊

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
①◎	北条時房・顕時邸跡(N0,278)	雪ノ下一丁目264番4	自己用店舗併用住宅	城館	188.00㎡	平成14年2月4日～平成14年4月30日
②★	材木座町屋遺跡(N0,261)	材木座六丁目647番15	個人専用住宅(杭基礎構造)	都市	21.00㎡	平成14年8月12日～平成14年9月10日
③★	材木座町屋遺跡(N0,261)	材木座六丁目647番10	個人専用住宅(杭基礎構造)	都市	34.30㎡	平成14年8月12日～平成14年9月26日
④★	材木座町屋遺跡(N0,261)	材木座六丁目647番8外	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	都市	35.00㎡	平成14年10月8日～平成14年11月8日
⑤★	材木座町屋遺跡(N0,261)	材木座六丁目647番9	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	都市	34.40㎡	平成14年12月16日～平成15年1月31日
⑥★	大倉幕府跡(N0,253)	雪ノ下三丁目701番14	自己用店舗併用住宅(杭基礎構造)	官衙	45.00㎡	平成14年7月29日～平成14年9月6日
⑦★	大倉幕府跡(N0,253)	雪ノ下三丁目701番3	個人専用住宅(杭基礎構造)	官衙	81.00㎡	平成14年11月16日～平成15年2月28日
⑧◆	大倉幕府跡(N0,253)	雪ノ下三丁目701番	個人専用住宅	都市	16.00㎡	平成15年7月24日～平成15年8月8日

第2分冊

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
⑨◎	浄妙寺旧境内遺跡(N0,408)	浄明寺三丁目126番	個人専用住宅(地下室)	社寺	85.05㎡	平成14年1月15日～平成14年3月6日
⑩★	無量寺跡(N0,196)	扇ガ谷一丁目26番27外	個人専用住宅(杭基礎構造)	社寺	360.00㎡	平成14年7月15日～平成14年9月13日
⑪★	玉縄城跡(N0, 63)	植木字相模陣425番3外	個人事業の宅地造成	城館	160.00㎡	平成14年7月15日～平成14年8月14日
⑫★	天神山城(N0,384)	山崎字宮廻747番3	個人専用住宅(杭基礎構造)	城館	28.00㎡	平成14年9月11日～平成14年9月26日
⑬★	感応寺跡(N0,225)	材木座六丁目722番1	個人専用住宅(杭基礎構造)	社寺	54.00㎡	平成14年11月13日～平成14年12月25日
⑭★	北条小町邸跡(N0,282)	雪ノ下一丁目407番3の一部	個人専用住宅(表層地盤改良)	城館	54.49㎡	平成14年11月25日～平成15年1月25日
⑮★	坂ノ下遺跡(N0,217)	坂ノ下53番3の一部	個人専用住宅(杭基礎構造)	散布地	54.15㎡	平成15年1月10日～平成15年2月13日
⑯◆	円覚寺門前遺跡(N0,287)	山ノ内字松岡1344番	個人専用住宅(地盤の柱状改良)	社寺	37.80㎡	平成15年6月13日～平成15年7月18日

◎印は平成13年度実施の発掘調査。
★印は平成14年度実施の発掘調査。
◆印は平成15年度実施の発掘調査。

平成16年度発掘調査地点一覧

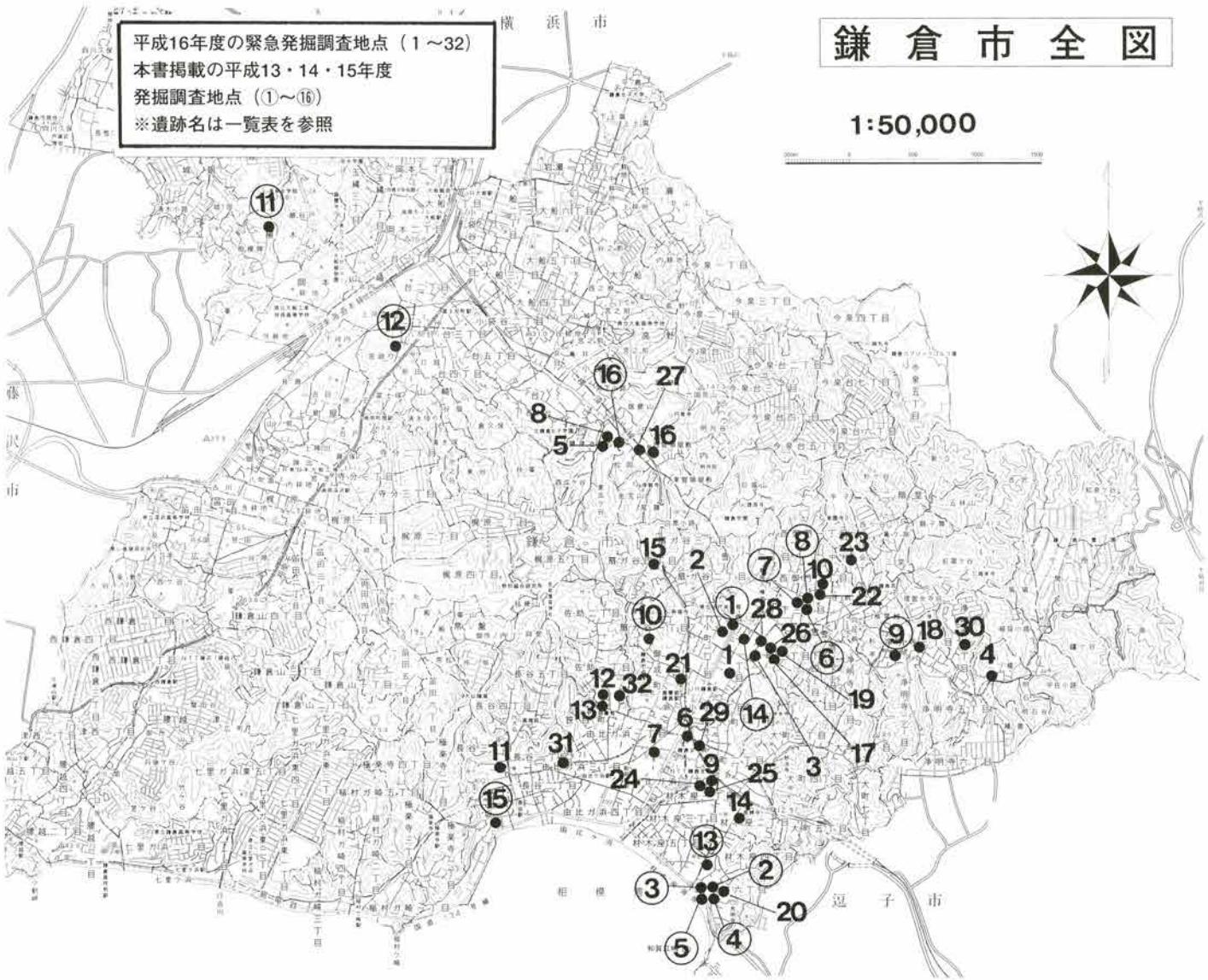
No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ★	宇津宮辻子幕府跡 (N0,239)	小町二丁目390番2外	個人専用住宅 (地下室)	官衙	62.62㎡	平成16年2月26日 ～平成16年4月9日
2 ★	北条時房・顕時邸跡 (N0,278)	雪ノ下一丁目236番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	22.50㎡	平成16年3月3日 ～平成16年4月5日
3 ★	若宮大路周辺遺跡群 (N0,242)	小町二丁目402番9外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	191.00㎡	平成16年3月10日 ～平成16年5月18日
4	積善遺跡 (N0,440)	十二所字二ツ橋4番3	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	34.00㎡	平成16年4月23日 ～平成16年5月20日
5	円覚寺門前遺跡 (N0,287)	山ノ内字松岡1377番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	33.00㎡	平成16年5月7日 ～平成16年6月14日
6	材木座町屋遺跡 (N0,261)	材木座一丁目1002番1外	賃貸住宅 (杭基礎構造)	都市	72.00㎡	平成16年5月8日 ～平成16年6月3日
7	下馬周辺遺跡 (N0,200)	由比ガ浜二丁目39番14	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	20.00㎡	平成16年5月11日 ～平成16年5月31日
8	円覚寺門前遺跡 (N0,287)	山ノ内字松岡1377番6	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	25.00㎡	平成16年5月11日 ～平成16年6月7日
9	材木座町屋遺跡 (N0,261)	材木座一丁目921番5外	個人専用住宅 (表層地盤改良)	都市	10.50㎡	平成16年6月17日 ～平成16年6月30日
10	大倉幕府北遺跡 (N0,193)	西御門二丁目756番10	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	13.50㎡	平成16年6月17日 ～平成16年7月2日
11	長谷小路周辺遺跡 (N0,236)	長谷三丁目641番	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	48.00㎡	平成16年6月25日 ～平成16年7月27日
12	佐助ヶ谷遺跡 (N0,203)	佐助一丁目450番5外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	52.00㎡	平成16年6月29日 ～平成16年7月30日
13	佐助ヶ谷遺跡 (N0,203)	佐助一丁目450番29外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	47.30㎡	平成16年7月9日 ～平成16年8月6日
14	能蔵寺跡 (N0,314)	材木座二丁目294番3外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	48.00㎡	平成16年7月20日 ～平成16年9月22日
15	法泉寺跡 (N0,182)	扇ガ谷四丁目518番12	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	40.00㎡	平成16年7月22日 ～平成16年9月7日
16	円覚寺旧境内遺跡 (N0,434)	山ノ内字西管領屋敷377番1	個人専用住宅 (地下室)	社寺	67.84㎡	平成16年7月22日 ～平成16年9月13日

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
17	東勝寺跡 (N0,246)	小町三丁目538番8	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	42.84㎡	平成16年7月30日 ～平成16年9月3日
18	浄妙寺旧境内遺跡 (N0,408)	浄明寺三丁目122番1外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	49.49㎡	平成16年8月18日 ～平成16年10月22日
19	東勝寺跡 (N0,246)	小町三丁目538番3	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	64.50㎡	平成16年8月26日 ～平成16年10月25日
20	弁ヶ谷遺跡 (N0,249)	材木座六丁目643番3	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	44.50㎡	平成16年9月25日 ～平成16年11月11日
21	若宮大路周辺遺跡群 (N0,242)	御成町123番3	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	12.00㎡	平成16年9月28日 ～平成16年10月27日
22	大倉幕府北遺跡 (N0,193)	西御門二丁目756番6	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	35.00㎡	平成16年10月7日 ～平成16年11月17日
23	覚園寺旧境内遺跡 (N0,453)	二階堂字会下351番3外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	30.00㎡	平成16年10月27日 ～平成16年12月10日
24	材木座町屋遺跡 (N0,261)	材木座一丁目889番4	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	15.00㎡	平成16年11月24日 ～平成16年12月14日
25	材木座町屋遺跡 (N0,261)	材木座一丁目889番5	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	22.50㎡	平成16年12月3日 ～平成16年12月27日
26	若宮大路周辺遺跡群 (N0,242)	小町三丁目425番3	診療所併用住宅 (杭基礎構造)	都市	66.00㎡	平成16年12月10日 ～平成17年2月21日
27	円覚寺旧境内遺跡 (N0,434)	山ノ内字瑞鹿山393番	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	45.00㎡	平成17年1月11日 ～平成17年2月28日
28	若宮大路周辺遺跡群 (N0,242)	小町三丁目425番1の一部外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	28.00㎡	平成17年1月25日 ～平成17年2月9日
29	下馬周辺遺跡 (N0,200)	大町二丁目1001番4	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	46.50㎡	平成17年2月3日 ～平成17年2月28日
30 ◎	大楽寺跡 (N0,262)	浄明寺四丁目246番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	41.50㎡	平成17年2月22日 ～平成17年4月21日
31 ◎	長谷小路周辺遺跡 (N0,236)	長谷一丁目265番19	自己用店舗併用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	56.00㎡	平成17年2月25日 ～平成17年4月11日
32 ◎	佐助ヶ谷遺跡 (N0,203)	佐助一丁目496番5	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	56.00㎡	平成17年3月7日 ～平成17年5月28日

調査面積の合計　1442.09㎡

★印は平成15年度からの継続調査を示す。

◎印は平成17年度への継続調査を示す。


鎌倉市全図
1:50,000
平成16年度の緊急発掘調査地点（1～32）
本書掲載の平成13・14・15年度
発掘調査地点（①～⑯）
※遺跡名は一覧表を参照
横浜市
逗子市

北条時房（ほうじょうときふさ）・顕時邸跡（あきときていあと）（No.278）

雪ノ下一丁目264番４地点

例　　言

1．本報は鎌倉市雪ノ下一丁目264番４地点に所在する自己用店舗併用住宅の新築に先だち行われた「北条時房・顕時邸跡」（県遺跡台帳№278）の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は平成14年２月４日から同年４月30日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3．本報使用の遺構図及び遺物実測図・遺物観察表は調査員・調査補助員が分担し、第１章を菊川　泉が、第２章、第３章、第４章を福田　誠が原稿執筆をした。附編の呪符木簡類似文献史料は、鶴見大学大学院生、古田土俊一の協力を得たものである。遺物図版・遺物観察表の細部にわたる校正は石元道子が、編集は福田が行った。
4．本報に使用した遺構全景写真・個別遺構写真の撮影は福田、菊川、古田土が、出土遺物写真撮影と図版作成は鈴木絵美が行った。
5．発掘調査・整理の体制は以下の通りである。

発掘調査

主任調査員　福田　誠（鎌倉市教育委員会嘱託）原　廣志（鎌倉市教育委員会嘱託）
調　査　員　太田美知子　神山晶子　菊川　泉　石元道子　久保田裕美　須佐直子　須佐仁和
　　早坂伸市　本城 裕
調査補助員　猿田功一　古田土俊一　阿部　潤　鈴木絵美　長友純子（鶴見大学文化財学科）
　　中川建二　栂岡渓音
作　業　員　(社)鎌倉市シルバー人材センター

整理作業

主任調査員　福田　誠（鎌倉市教育委員会嘱託）
調　査　員　菊川　泉　神山晶子　石元道子　鈴木絵美
調査補助員　古田土俊一　長友純子　立川明子（鶴見大学大学院）
　　川村篤史　松澤弘三　野崎美帆　山口正紀（鶴見大学文化財学科）

6．発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　　次

本文目次

第１章　調査地点の歴史的環境…… 5
第２章　調査の経過と層序…… 8
第３章　検出した遺構と遺物……10
第４章　まとめ……83
附　編　呪符木簡類似文献史料……87

挿図目次

図１　遺跡位置図…… 6
図２　調査地点位置と周辺の調査地点…… 9
図３　遺構面と大路側溝模式図……10
図４　第２面・第３面・第４面全測図……11
図５　第２面遺構大路側溝Ⅰと２面まで出土遺物……15
図６　第２面遺構出土遺物（土壙１・大路側溝Ⅱ）…16
図７　第２面出土遺物……17
図８　かわらけ溜まり平面図……19
図９　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）……20
図10　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）……21
図11　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）……22
図12　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）……23
図13　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）……24
図14　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）……25
図15　第３面遺構出土遺物（大路側溝Ⅲ）……26
図16　第３面遺構出土遺物
（大路側溝Ⅲ・柱穴・土壙）……27
図17　第３面遺構出土遺物（大路側溝Ⅲ控え梁）……28
図18　第３面まで出土遺物……29
図19　第３面まで出土遺物……30
図20　第３面出土遺物……31
図21　第４面土壙13平面図……33
図22　第４面遺構出土遺物（溝状遺構１）……34
図23　第４面遺構出土遺物（溝状遺構１・２）……35
図24　第４面遺構出土遺物（板溝状遺構）……36
図25　第４面遺構出土遺物（板溝状遺構）……37
図26　第４面遺構出土遺物（柱穴列）……38
図27　第４面遺構出土遺物（柱穴列）……39
図28　第４面遺構出土遺物（柱穴）……40
図29　第４面遺構出土遺物（土壙１）……41
図30　第４面遺構出土遺物（土壙２）……42
図31　第４面遺構出土遺物（土壙３・４・５）……43
図32　第４面遺構出土遺物（土壙６・10・11）……44
図33　第４面遺構出土遺物（土壙13）……45
図34　第４面遺構出土遺物（土壙13）……46
図35　第４面遺構出土遺物（土壙14）……47
図36　第４面遺構出土遺物（土壙15・16）……48
図37　第４面遺構出土遺物（土壙17）……49
図38　第４面まで出土遺物……50
図39　第４面まで出土遺物……51
図40　第４面まで出土遺物……52
図41　第４面まで出土遺物……53
図42　第４面まで出土遺物……54
図43　第４面出土遺物……55
図44　第４面出土遺物……56
図45　第４面出土遺物……57
図46　第５面・第６面全測図及び土層断面図……59
図47　第５面遺構出土遺物（柱穴列）……63
図48　第５面遺構出土遺物
（Ｐ１・２・コの字状板溝・土壙１・２）……64
図49　第５面遺構出土遺物（土壙１）……65
図50　第５面出土遺物……66
図51　第５面出土遺物……67
図52　第５面出土遺物……68
図53　第６面遺構出土遺物（柱穴･土壙1･2･6･7･8）…70
図54　第６面遺構出土遺物（土壙７・８）……71
図55　第６面遺構出土遺物（土壙７・８）……72
図56　第６面遺構出土遺物（土壙７・８）……73
図57　第６面遺構出土遺物（土壙７・８）……74
図58　第６面遺構出土遺物（土壙７・８）……75
図59　第６面まで出土遺物……76
図60　第６面まで出土遺物……77
図61　第６面出土遺物……78
図62　第６面出土遺物……79
図63　第６面出土遺物……80
図64　第６面出土遺物……81
図65　トレンチ及び表採の遺物……82

表目次

表１　時房・顕時邸跡調査データ一覧……86
表２　遺物観察表……90

図 版 目 次

図版１　第２面　全景と大路側溝Ⅱ ……107
図版２　第３面　全景とかわらけ溜り ……108
図版３　第３面　かわらけ溜まり ……109
図版４　第３面　大路側溝Ⅲ ……110
図版５　第３面　大路側溝Ⅲ ……111
図版６　第４面　全景と個別遺構 ……112
図版７　第４面　遺物出土状況 ……113
図版８　第５面　全景 ……114
図版９　第６面　全景と個別遺構 ……115
図版10　遺物出土状況他 ……116
図版11　第２面の遺物と第２面遺構の遺物、
　　第３面かわらけ溜まりの遺物 ……117
図版12　第３面かわらけ溜まりの遺物 ……118
図版13　第３面かわらけ溜まりと大路側溝の遺物 …119
図版14　第３面の遺物と第４面遺構の遺物 ……120
図版15　第４面遺構の遺物 ……121
図版16　第４面遺構の遺物 ……122
図版17　第４面までの遺物 ……123
図版18　第４面遺構の遺物と第４面までの遺物 ……124
図版19　第４面までと第４面の遺物、
　　第５面遺構の遺物 ……125
図版20　第５面遺構の遺物と第４面の遺物 ……126
図版21　第５面の遺物と第５面遺構の遺物 ……127
図版22　第５面の遺物と第６面遺構の遺物 ……128
図版23　第６面遺構の遺物 ……129
図版24　第６面遺構の遺物 ……130
図版25　第６面の遺構と第６面までの遺物 ……131
図版26　第６面までの遺物 ……132
図版27　第６面の遺物 ……133
図版28　第３面遺構、第３面まで、第３面、
　　第４面遺構の漆製品 ……134
図版29　漆製品 ……135
図版30　第４面までと第４面、
　　第５面遺構の漆製品 ……136
図版31　漆製品 ……137
図版32　漆製品 ……138
図版33　３面・４面・５面出土自然遺物 ……139

第１章　調査地点の歴史的環境

当遺跡は、雪ノ下一丁目264番４地点に位置する。鶴岡八幡宮と海岸をほぼ直線に走る鎌倉のメインストリート、主要地方道路横浜鎌倉線（若宮大路）の西側に面する。現在、一帯は商店が軒を連ね、一年を通じて鶴岡八幡宮始め各社寺を巡る観光客で賑わう場所である。

源頼義の勧請した由比郷の鶴岡若宮を、治承４（1180）年10月に鎌倉に入った頼朝が早速小林郷北山に遷座し鶴岡八幡新宮若宮と称した。これが現在の鶴岡八幡宮である。若宮大路はその参道として、養和２（1182）年に造られた。『吾妻鏡』の記載には、「自鶴岳社頭。至由比浦。直曲横而造詣往道。是日來雖為御素願。自然渉日。而依御臺所御懐孕御祈故。被始此儀也。武衛手自令沙汰之給。仍北条(時政)殿已下各被運土石云々。」（３月15日条）とある。この時期、大倉に設けられた頼朝の御所（大倉幕府）を中心として、鎌倉は急速に都市としての様相を成していったものと考えられる。頼朝が鎌倉に入る以前の様相は不明な点が多いが、治承４（1180）年12月12日条にはその状況を「所素辺鄙。而海人野叟之外。卜居之類少之。正當于此時間。閭巷直路。村里授號。加之家屋並甍。門扉軽軒云々。」と表現している。道を整備することは町作りを行ううえでの急務であったはずで、北条政子の懐妊をきっかけにまず若宮大路が着工されたことになる。なお、この「詣往の道」をさして「若宮大路」という名称が現れるのは、『吾妻鏡』では元暦２（1185）年５月16日条が初見である。

本調査地点は、鎌倉市教育委員会によって「北条時房・顕時邸跡（神奈川県遺跡台帳№278）」と名付けれた区画の一部である。北条時房（1175～1240）は時政の子で、奥州征伐（1189）や畠山重忠追討（1205）、和田の乱（1213）などに従軍。承久の変（1221）で北条泰時とともに上洛し、のちに初代の六波羅南方（六波羅探題）となる。元仁元（1224）年より没するまで泰時のもとで連署を勤めた。顕時（1248～1301）は実時の子。引付衆・評定衆など幕府の要職を歴任したが、弘安８（1285）年、霜月騒動のため下総国埴生庄へ配流された。のちに出家し、恵日と号する。実時の開いた称名寺の整備に力を注ぎ、配流に際して多くの領地を同寺に寄進した。

「北条時房・顕時邸跡」の範囲は、鶴岡八幡宮前から県道金沢鎌倉線を隔てて南へ約240m、若宮大路と小町通りに挟まれた東西約108mのほぼ長方形の区画である。顕時の屋敷が「鎌倉赤橋辺」とする『金沢文庫文書』識語編2064奥書の記述と、「赤橋南方」で若宮大路東側の泰時の小町邸との関係を根拠として付けられた名称である。時房邸に関しては『吾妻鏡』延応元（1239）年４月25日条の「（時房）匠作御亭前武州向顔。」との記載があり、泰時の邸宅の向かいであったことがわかるものの、これは若宮大路を挟んだものではなく、小町大路を挟んで東に位置する現在の宝戒寺付近にあった義時邸を相伝したものとの考証もある【註１】。このように遺跡名称の根拠は疑問な点を多くはらんでいるといえる。

嘉禄元（1225）年、北条政子の死後間もない10月、執権北条泰時はこれまで大倉にあった御所を若宮大路西方に移すことを定め、12月には完成した新しい御所に将軍頼経が移っている（宇津宮辻子幕府）。泰時はこの御所移転に際して宇津宮辻子及び若宮大路に丈尺を打っている。鎌倉に初めて丈尺制が導入され、これによって御所や館が方眼の区画に整備されるようになったものと推測できる。若宮大路周辺はこれを契機に、さらに急速な変容を遂げたと考えられる。

これまでの当遺跡周辺の発掘調査では、若宮大路をはじめとする主要道路に側溝が設けられていたことが明らかになっているが、これもこの丈尺制の導入と密接に関わるものであろう。若宮大路の側溝からは人名の書かれた木簡が出土した例が複数ある。これらは人名上部に「一丈」「一丈南」「口二丈」な

ど丈尺の表記を有する。石井進氏は『吾妻鏡』建長2（1250）年三月一日条には閑院殿造営注文の河堰の記述を例として、「丈」の表記をもつ木簡が若宮大路側溝側面を保護する護岸工事に使用された可能性を指摘している【註2】。若宮大路側溝唐出土した木簡には、ほかにも「二けん」と表記したものもある。「けん」はおそらく「間」であろう。「丈」が長さを示す単位であるのに対し、「間」は柱間の数をも示す単位としても用いられる。いずれの木簡も、側溝の作事を幕府が御家役として割り当てた際の工区を示すと考えられる。ちなみに前述の閑院殿造営の記事では、「河堰」は数丈ずつ分割して割り当てているのに対し、塀や建物には割り当ての工区を示す単位として「間」を用いている。若宮大路側溝の場合のように、同じ溝の作事に「丈」「間」二つの異なる単位が用いられているのは、溝の改修の頻度、出土層位の年代などと合わせて、今後検討しなければならない問題であろう。

近年、若宮大路の東にほぼ平行する小町大路の側溝からも、上部に「三丈」の表記をもつ同様の木簡が出土している【註3】。溝の作事に関わる御家人役が若宮大路に限らず、主要な大路に及んでいた可能性を示唆する。

当遺跡は若宮大路側溝の存する当該地点であり、それ以西は述べたように鎌倉期前半から館の一画であったと推測される。館の主は限定できないものの、北条氏を含む有力御家人であったはずである。

鎌倉幕府滅亡後、室町幕府の制作下で東国の政務を司るため、「鎌倉府」が置かれる。鎌倉府将軍の居所は鎌倉幕府時代と同様「御所」と呼ばれるが、その場所は明確ではない。わずかな手掛かりは、当遺跡北東の浄明寺に「公方屋敷」の字名が残ることある。御所がそこに営まれるようになったとすれば、当遺跡周辺はこの頃、政治的中心地としての役割を終えたと考えられる。

（菊川　泉）

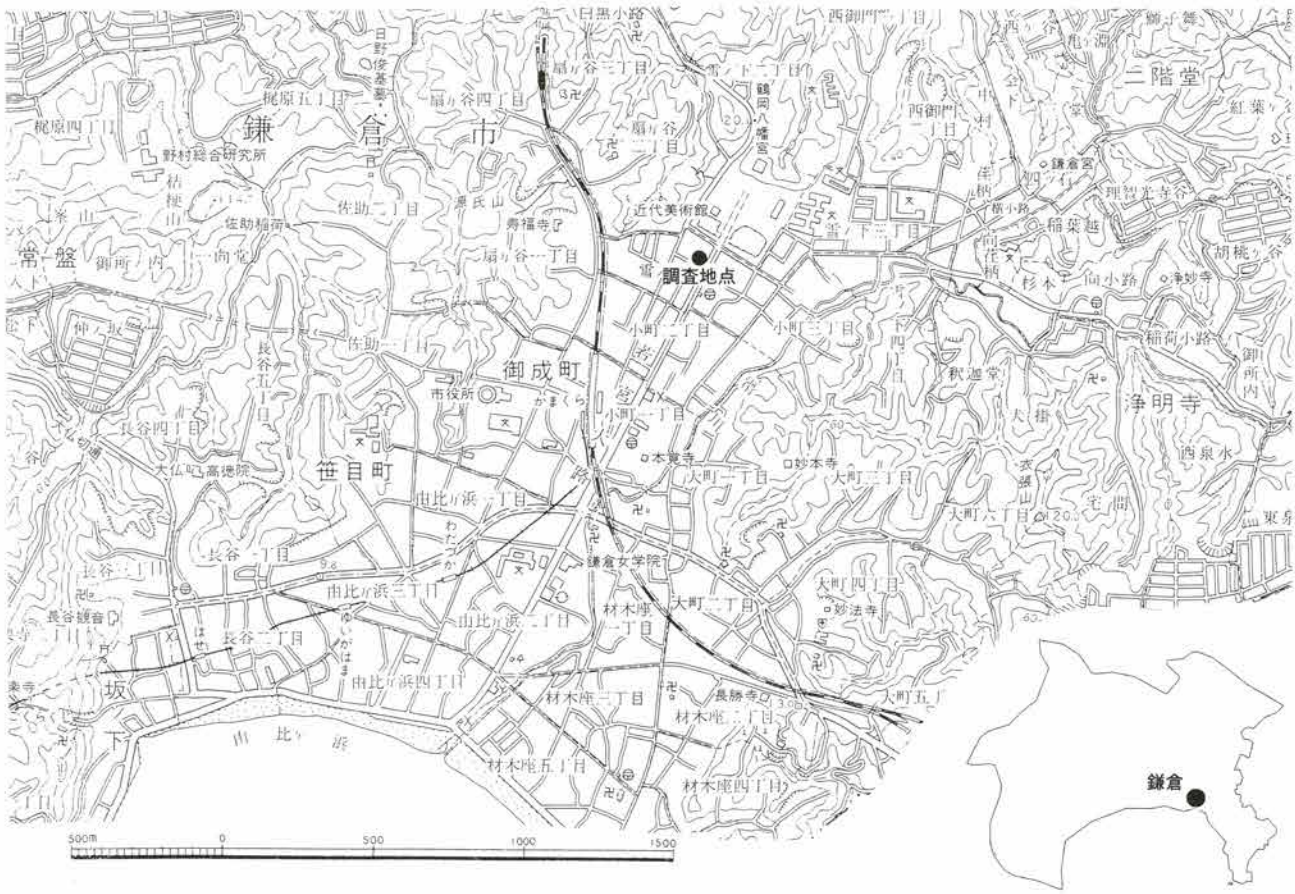


図1　遺跡位置図

【註１】秋山哲雄「御所と北条氏亭」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12』平成８年３月　鎌倉市教育委員会
【註２】石井進「鎌倉から出土した最初の木簡」『日本歴史449』1985年10月
【註３】原　廣志「宇津宮辻子幕府跡（小町二丁目374番１地点）」神奈川県遺跡調査研究発表会発表要旨　1998年11月　神奈川考古学会

参考文献

馬淵和雄「中世鎌倉若宮大路側溝出土の木簡」『日本歴史439』1984年12月
馬淵和雄「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉69』平成４年５月　鎌倉文化研究会
岡陽一郎「人名木簡について」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12』北条小町邸跡（雪ノ下一丁目377番７地点）第３章第３節
『鎌倉廃寺事典』貫達人・河副武胤編　有隣堂　1980年
『鎌倉市史』社寺編　鎌倉市教育委員会　吉川弘文館　1959年

調査地点位置と周辺の調査地点（図２）と調査報告書

１．雪ノ下一丁目264番４『本調査地点』
２．雪ノ下一丁目265番３『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告６』「雪ノ下一丁目265番３地点」1990.３
３．雪ノ下一丁目271番１『北条時房・顕時邸跡 雪ノ下一丁目271番１地点』1989.４
４．雪ノ下一丁目271番３『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告16-２』「雪ノ下一丁目271番３地点」2000.３
５．雪ノ下一丁目271番４『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告16-２』「雪ノ下一丁目271番４地点」2000.３
６．雪ノ下一丁目272番　『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告14-１』「雪ノ下一丁目272番地点」1998.３
７．雪ノ下一丁目273番ロ『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告４』「雪ノ下一丁目273番ロ地点」1988.３
８．雪ノ下一丁目273番イ『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告15-１』「雪ノ下一丁目273番イ地点」1999.３
９．雪ノ下一丁目274番２『北条時房・顕時邸跡 雪ノ下一丁目274番２地点』1988.９
10．雪ノ下一丁目233番９『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告３』「雪ノ下一丁目233番９他地点」1987.３
11．雪ノ下一丁目377番７『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12』「雪ノ下一丁目377番７地点」1996.３
12．雪ノ下一丁目374番２『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書２』「雪ノ下一丁目374番２地点」1986.３
13．雪ノ下一丁目372番７『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告１』「雪ノ下一丁目372番７地点」1985.３
14．雪ノ下一丁目371番１『北条泰時・時頼邸跡』「雪ノ下一丁目371番１地点」1985.８
15．雪ノ下一丁目370番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告14-１』「雪ノ下一丁目370番１地点」1998.３
16．雪ノ下一丁目369番　『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７』「雪ノ下一丁目369番１地点」1991.３
17．雪ノ下一丁目369番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14-２』「雪ノ下一丁目369番１地点」1998.３
18．雪ノ下一丁目419番３『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書３』「雪ノ下一丁目419番３地点」1987.３
19．雪ノ下一丁目367番１『北条小町邸跡（泰時・時頼邸）雪ノ下一丁目367番１地点』2000.12
20．小町二丁目366番１外『宇津宮辻子幕府跡』第１回鎌倉市遺跡調査・研究発表会要旨1991.10

第２章　調査の経過と層序

１．調査の経過

本遺跡の発掘調査は、平成14年２月４日から表土掘削及び機材の搬入を開始し、同年４月30日まで行われた。本遺跡は北緯35°19′12″、東経139°33′27″に位置し、グリッドは、若宮大路を意識しながら建築予定範囲の東西軸方向にあわせて設定した。若宮大路に設置されている鎌倉市４級基準点の内T025（X＝－75,486.166　Y＝－25,079.021）、T024（X＝－75,437.304　Y＝－25,054.218）と二の鳥居脇に設置されている国土地理院水準点№15673（6.1684m）を基準に、調査基準原点１（X＝－75,363.772　Y＝－25,073.900　Z＝10.079m）、原点２（X＝－75,380.036　Y＝－25,045.537　Z＝9.496m）を設定したものである。調査中に使用した水準は原点１の10.079mである。真北よりN-29°49′52″-Eが南北グリッドラインである。真北よりN-26°48′23″-Eで若宮大路の軸線となる。東西方向の調査範囲が約32m、南北方向の範囲が約５mと細長く、調査時の発生土は場内に置くという制約から分割して調査を行うこととした。敷地の北西隅を原点として、４mのグリッドを組み、西から南北軸をアルファベット、東西軸にはアラビア数字を充て、各グリッドの北西隅の交差軸点をグリッド名とした。ほぼ中央の４ラインで二分し、西側を１区、東側を２区とした。調査はまず１区の表土を周辺で行なわれた発掘調査結果を基に、重機で約50～70cm掘り下げ第１面を検出した。この時に掘削した土砂は場外へ搬出し、調査時の発生土は２区に山積みにした。１区の調査終了後、重機で２区の表土掘削を行い調査時の発生土は１区に山積にした。４月30日までに器材の搬出も含め、全ての調査を終了した。

２．層序

第１面（海抜約９m）現地表から下に約60cm、一部表面が赤黒く焼けた痕跡を持つ大型の土丹塊を厚さ40～50cm敷き詰めた地業面を検出した。この面を掘り込んだ柱穴、土壙から近現代の遺物が多数出土したことから焼けた時期は関東大震災時の火災かと考えられる。幕末の写真（元治元（1864）年十月、ベアト撮影）を見ると八幡宮三の鳥居前、若宮大路に面した辺りには大きな旅館らしき建物が軒を連ねていた様である【註４】。第１面は若宮大路側の東から西に向かい落ち込み、東西に細長い調査地の西側は震災以後の削平を受けて面が遺存していないことが明らかになった。このため報告は第２面から行うこととした。

第２面（海抜約8.4m）第１面の厚い土丹地業面直下、厚さにして約20cm程の平らな土丹地業面が広がる。２区で検出した礎石建物の床下は10cm程の高まりが土丹で築かれている。１区は遺構密度が少なく屋敷の中の空閑地と考えられる。

第３面（海抜約8.2～8.3m）第４～３面間は地面の細かな補修が頻繁に行われたのか、暗褐色粘質土と茶褐色砂と厚さ10cm程度の自然遺物を含む木器層が見られる。部分的に直径３cm前後の砂利が多く検出されている。若宮大路側溝際に建つ大規模な礎石建物と建物西側にかわらけ溜まりが形成されている。建物は２回建て替えられ、建て替えの間にかわらけが大量に廃棄され伴って面の補修が行われている。

第４面（海抜約7.8m）厚さ40cmもの明灰褐色の砂層を敷き詰めた面である。貝殻が混じり海砂を用いたと考えられる。敷地を分割するような規模の大きな塀跡と考えられる柱穴列から墨壺出土している。

第５面（海抜約7.4～7.5m）第６面上の腐植土層（藁様の腐植土と木器層）を埋めこむために敷かれた海砂と考えられる厚さ３～５cmの貝混じり砂層から構成される面である。掘立柱建物の南東角付近の面

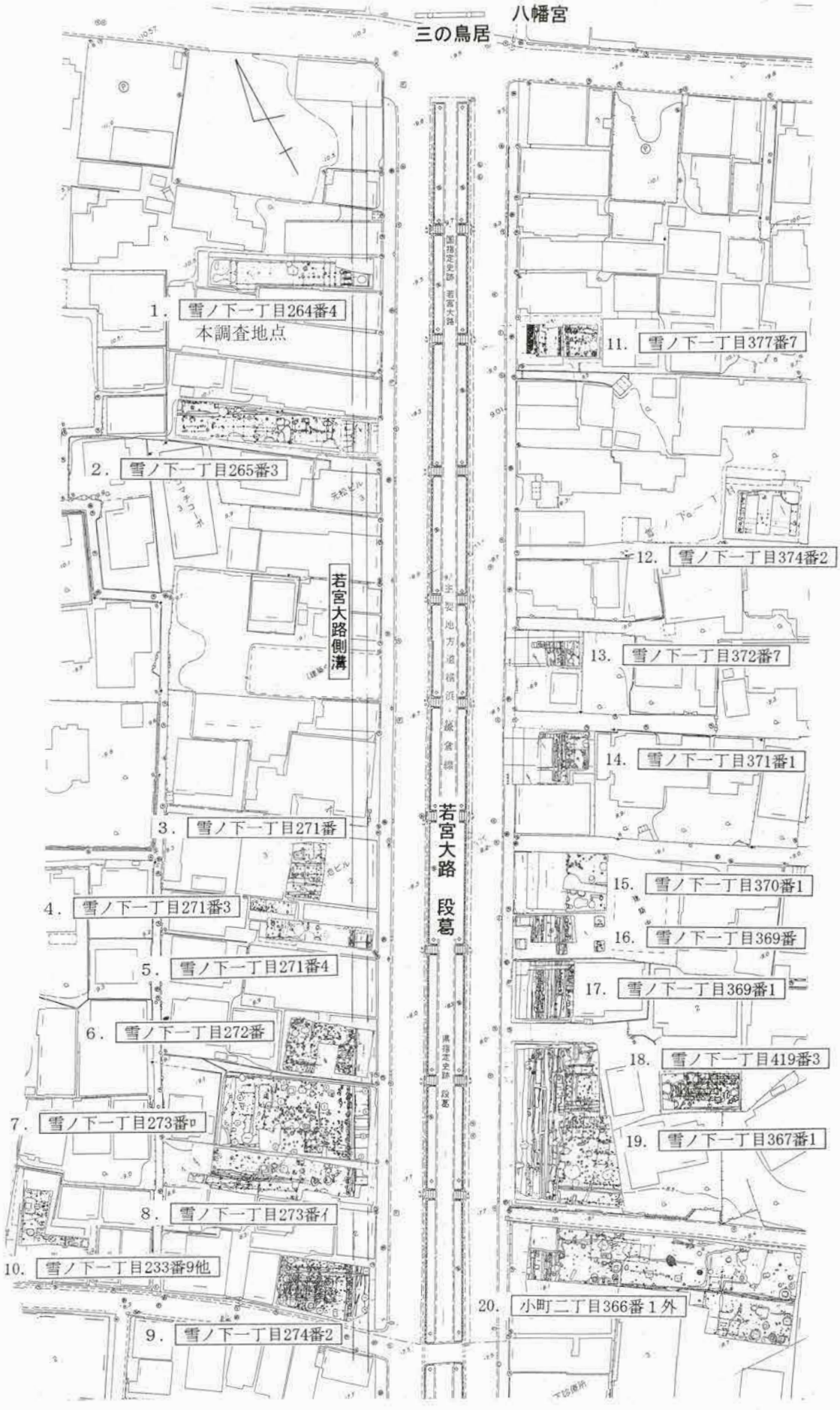


図２　調査地点と周辺の調査地点

直上から地鎮に関わると考えられる木簡が出土している。

第６面（海抜約６～7.1m）中世地山の黒褐色粘質土層を掘り込んだ大型土壙を多数検出した。調査地西奥で地山面の海抜は約６m、東の若宮大路側では約7.1m、西側は約１m程低くなる。

検出した各面の遺構・遺物の詳細は次章に譲る。

【註４】『甦る幕末』「オランダに保存されていた800枚の写真から」p12・p154　朝日新聞社　1996年

（福田　誠）

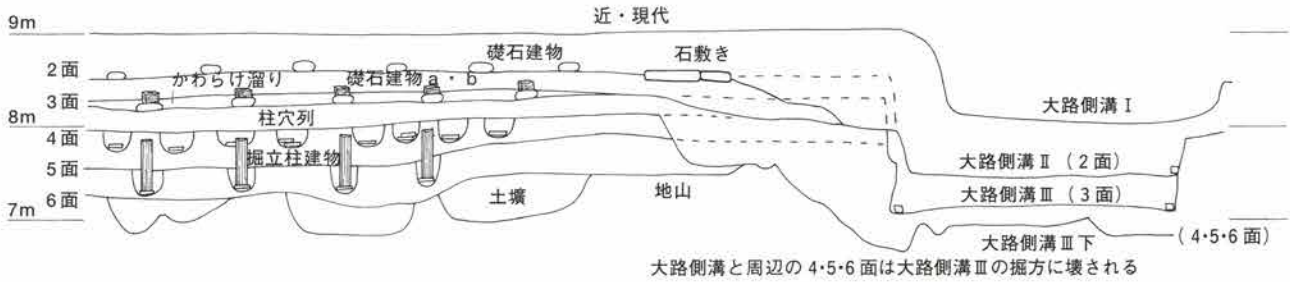


図３　遺構面と大路側溝模式図

第３章　検出した遺構と遺物

１．第２面の遺構と遺物

ａ．遺構（図４、図版１）

第２面で検出された遺構は、礎石建物1棟と石敷き、若宮大路側溝Ⅱ（中層）である。面の海抜は１区で8.4m、２区礎石建物際で8.5mとほぼ平坦である。

建物

東西に約32mと細長い調査地のほぼ中央から東よりで検出された礎石建物で、東西５間（1,050cm）、南北１間（200cm）以上の規模である。西側・南側・東側の三方に半間の縁が巡り、建物本体は更に北に延びている。建物の軸方位はおよそN-27°-E。建物の東側を北から南に延びる大路側溝の軸方位もおよそN-27°-Eで若宮大路の軸方位の26°48′23″とほぼ同じである。この建物は火災に遭っている為に、南東角の礎石の表面には柱の痕跡が印影のごとく残る。痕跡から柱の太さは約４寸角だったと推定され、柱間を測ると東西方向は210cm、南北方向は200cmであることが明らかになった。建物の東側３間分の床下は湿気防止のためか大ぶりの土丹で縁取りがなされ内側は土丹が詰め込まれ叩き締められていた。建物の西側は縁から調査地域の西端（９m程）まで遺構らしいもののない空閑地となる。

石敷き

調査地域の東側を南北に貫く大路側溝の西肩と建物の距離は５m程である。この建物と大路側溝西肩のほぼ中間地点で長さ90cm、幅45cm、厚さ20cmの鎌倉石製の切石を敷き並べた石敷きが検出された。切石は12個遺存しており石敷きの幅は約1.4m、検出した長さ3.2mで南北方向に並べられているように見える。上面は海抜8.45mでほぼ水平に据えられている。大路側溝と建物の中間で柵列などの柱穴が周囲から検出されないことから築地塀の基礎（基底部）の可能性も考えられる。

若宮大路側溝Ⅱ（中層）

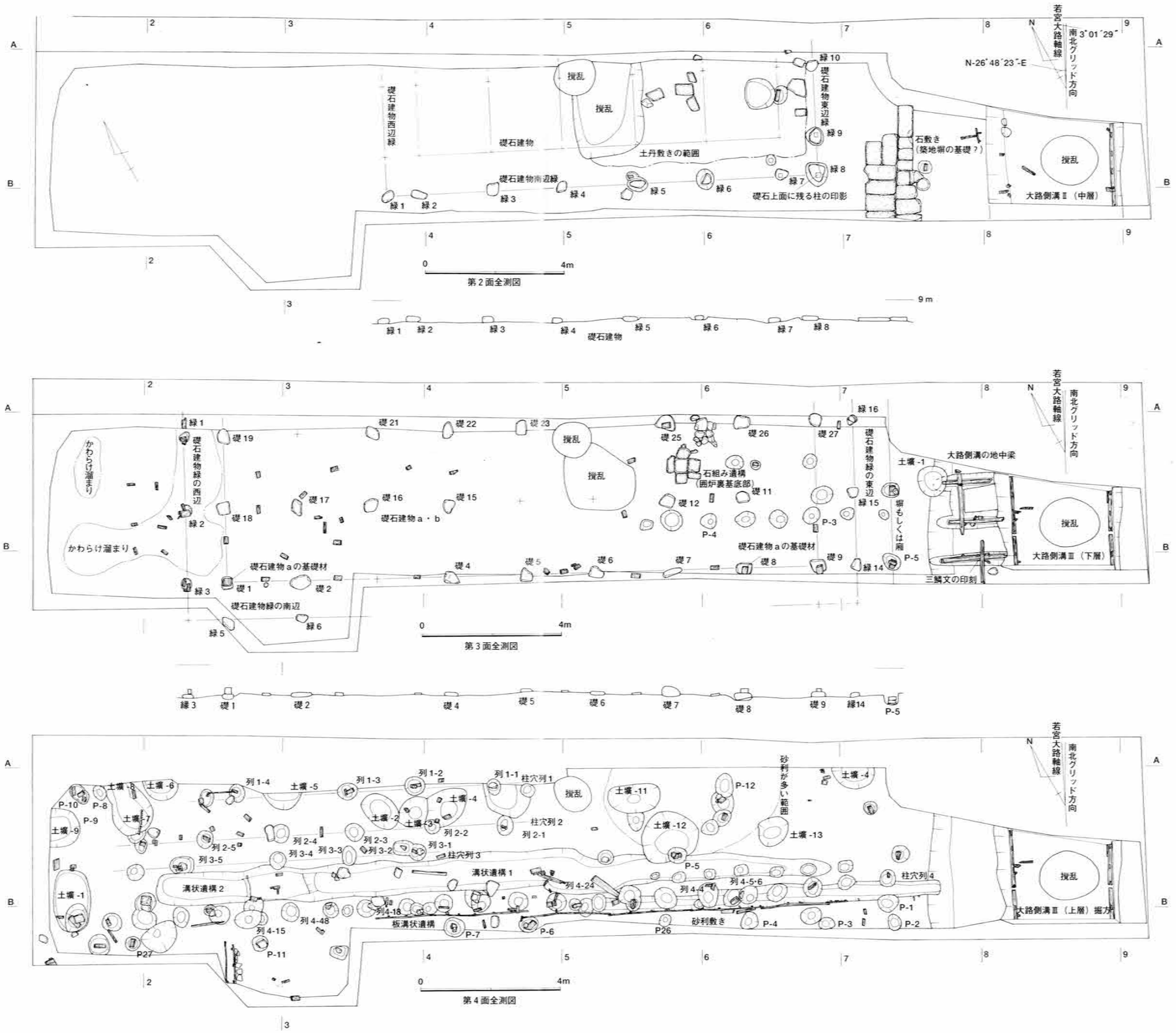


図4　第2面・第3面・第4面全測図

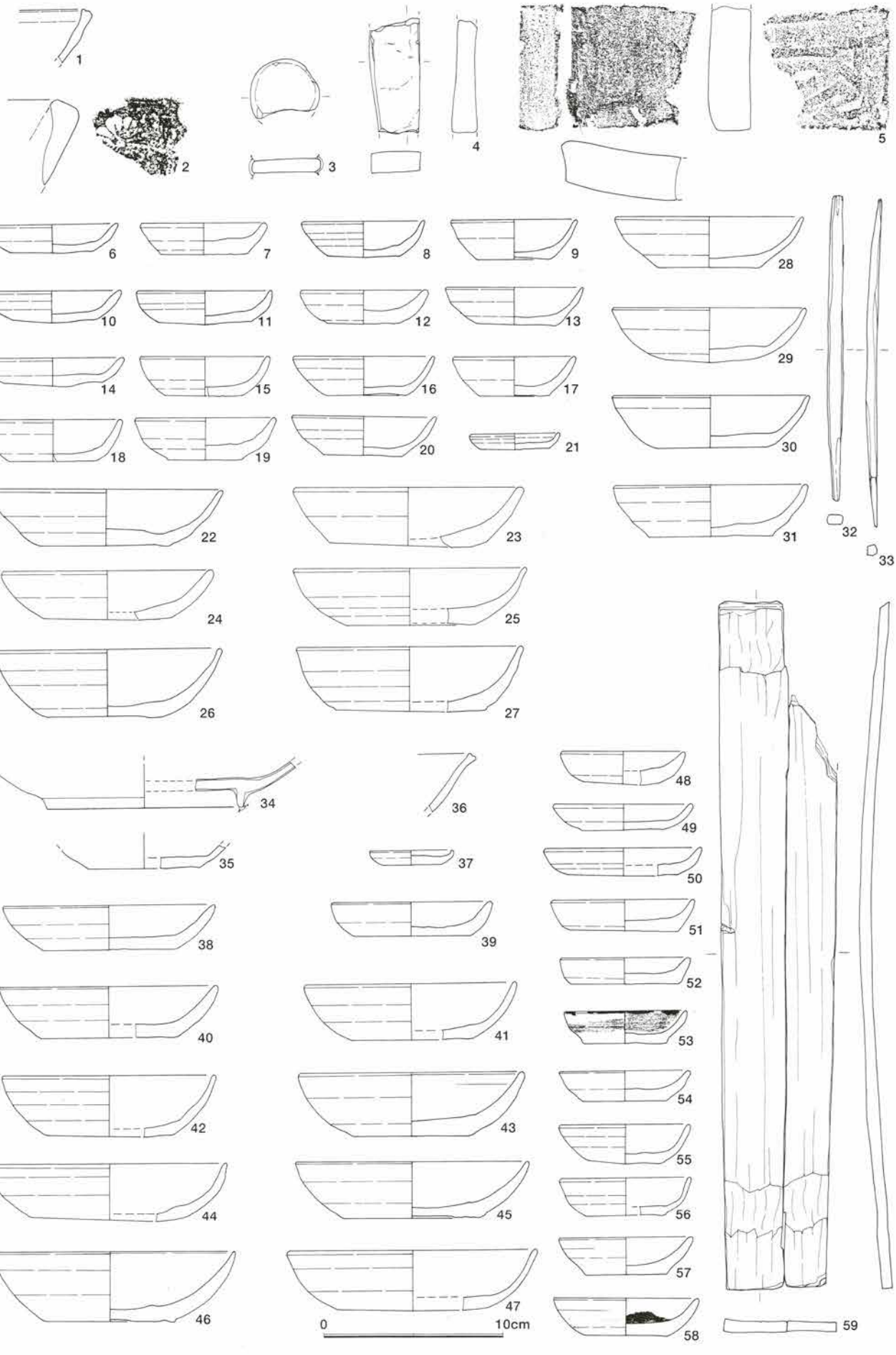


図5　第2面遺構大路側溝Ⅰと2面まで出土遺物

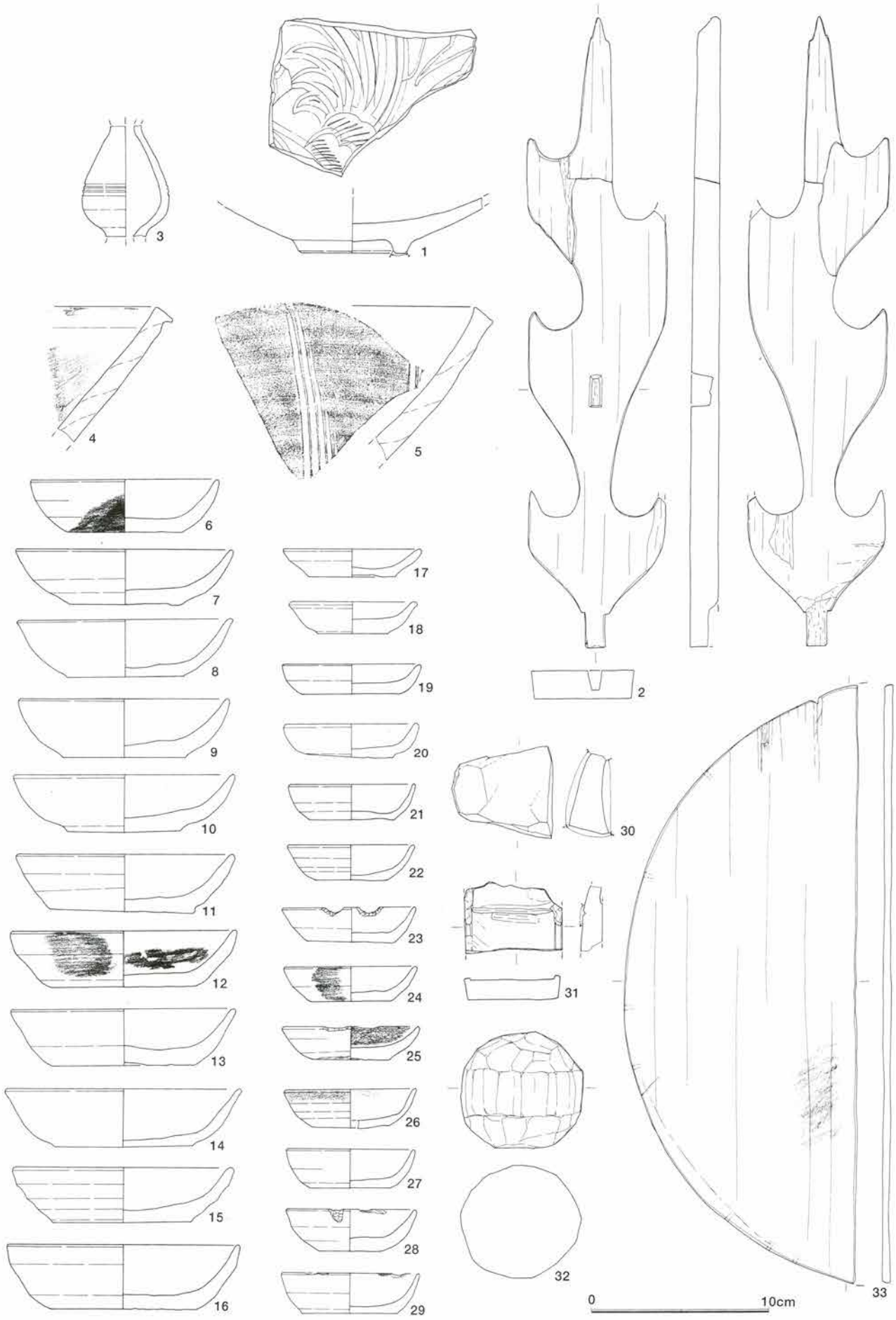


図６　第２面遺構出土遺物（土壙１・大路側溝Ⅱ）

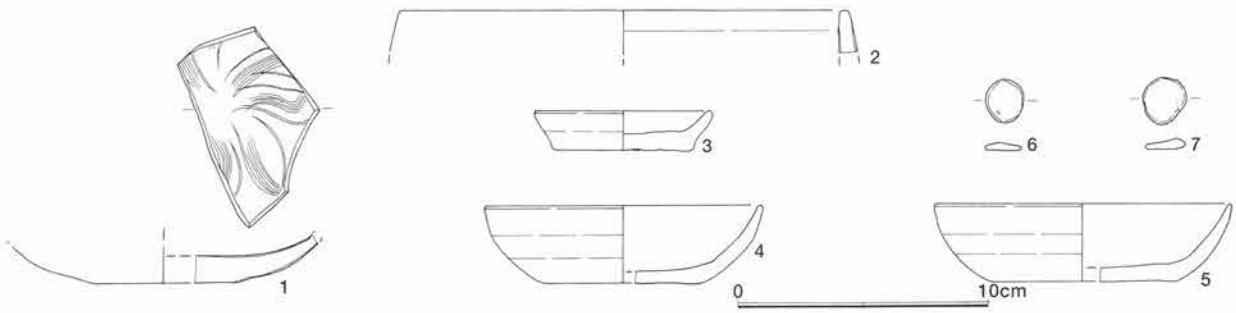


図７　第２面出土遺物

この時期の大路側溝の幅は2.8mである。溝の側板を支える束柱を立てるための枘穴が開けられた横木材が東側のみ遺存する。この横木材の置かれた底面レベルは海抜7.48mである。溝の幅に合わせて平行に据えられていた横木材の内、西側の横木材は抜き取られていたが、固定のために横木材の脇に打たれた杭と高さ調整のため下に敷かれた泥岩の塊が検出されている。大路側溝の軸方位はおよそN-27°-Eである。

ｂ．遺物（図５～７表２　図版11）

第２面出土の遺物では劃花文碗、青磁酒会壺口縁部片、かわらけ、碁石（黒）が出土している。

遺構出土遺物

土壙１　龍泉窯系劃花文青磁鉢片と刀架と思われる木製遺物が出土している。鉢片は高台径5.9cmの大型品である。釉の発色は色斑はあるが透明感のある薄緑～オリーブ色である。高台は畳付きを除き外底面の全体に施釉され釉際は赤く発色する。外面は無文、内面には片切り彫りによる花文が施されている。これだけ大型の劃花文青磁鉢は希有である。

刀架と思われる木製遺物にはU字型の抉りが左右併せて５ヶ所遺存している。

若宮大路側溝Ⅱ（中層）

瀬戸華瓶、片口鉢、備前擂鉢、かわらけ、瓦、硯、曲物底等が出土している。かわらけ、瓦など水摩され割れ口の磨り減った遺物が目立つ。

２．第３面の遺構と遺物

ａ．遺構（図４・８、図版２～５）

第３面では柱穴、礎石建物、かわらけ溜り、石組み遺構、若宮大路側溝Ⅲ（下層）が検出された。面の上には貝混じりの砂が敷かれ、海抜は8.2～8.3m前後でほぼ平らである。建物の西側では建て替え時に行われた面の貼り増しが認められる。当調査地から南に25m『雪ノ下一丁目265番３地点』（図２）の第３面と遺構面の高さ及び出土するかわらけの年代観が一致する。

建物

細長い調査地に広がる東西８間（1,680cm）、南北２間（400cm）以上（北に延びる）の規模の大きな礎石建物である。建物の西側、南側、東側に半間（105cm）の縁が廻り、建て替え（建物ａ・建物ｂ）が確認されている。

建物ａ　第３面検出時に、下層の建物ｂと同じ位置・同じ規模の東西８間、南北２間以上、西側、南側、東側に半間の縁が廻る礎石建物を検出した。建物の軸方位はおよそN-27°-Eでほぼ若宮大路軸方向と平行する。長さ約30cm程に切断した柱を横置きに一間幅もしくは半間に据えた建物の基礎（以下柱材）で、ボーリング棒で下部を調査したところ柱材の真下に遺存する礎石が確認された。また横置きに据えた柱材のないところでは直径50cm大の安山岩製の礎石が検出確認された。柱材の遺存する周辺を詳細に

観察すると礎石の上面に直接据えられた柱材の周囲は厚さ約10cm程度、土丹地業層ですぐ脇まで固められていることが観察された。柱材の上面の高さは約海抜8.32～8.37mで揃えられている。礎石が地業面に埋め込まれその礎石の上に柱材が据えられていることから、根腐れ等による建物の部分修理ではなく同じ場所での建物の建て替えであると考えられる。また、礎石間には建物の床を支える床束の礎板と考えられる半間毎に地面上に置かれた礎板が検出された。西側縁の位置より西側の地面に置かれた礎板が検出された。礎板は縁に沿って南北２間（190cm）、東西２間（150cm）置かれていた。この礎板は縁の張り出しではないかと考えられる。

石組み遺構

建物内、東から２間、南から２間の位置で一辺約40cm、深さ25cmの鎌倉石の切石に囲まれた石組みが検出された。中からは灰と褐釉壺小片と幅６cm、遺存する高さ９～10cm程度の桶と思われる部材が７点ほど出土している。建物に付属する囲炉裏の基底部の可能性が考えられる。しかしこれまで鎌倉では礎石建物では囲炉裏は確認されていない。この石組み遺構が囲炉裏ならば床の高い建物に即した工夫が（石組みで高さを稼ぐ等）なされていた可能性が考えられる。

建物ｂ　建物ａの柱材周辺を掘り下げると、真下から土丹地業面上に据えられた礎石が検出された。礎石上面の海抜は8.19～8.26mで揃えられている。建物ａと同じ規模で、東西８間、南北２間以上、西側、南側、東側に半間の縁が廻る礎石建物で軸方位はおよそN-27°-E。調査地内で確認した建物ｂの礎石の数は縁も含めて29個で５ヶ所では礎石が抜き取られていた。建物ａ同様に８間という規模は武家屋敷の中でも最大級の礎石建物である。南東角、縁の礎石の半間東側に２穴の礎板を持つ掘立柱が検出されている。建物との距離が近すぎることから目隠し塀というより建物から延びる廂かもしれない。この位置から若宮大路側溝西側肩まで3.5mである。

かわらけ溜まり

A・B-1・2グリッドの３面上に廃棄されたと考えられるものである。建物ｂの西側3.5mから縁の床下までかわらけが廃棄されていた。建物ａ周囲に張られた土丹地業面を建物ｂまで掘り下げる途中、A・B-1・2グリッドの地業面に埋め込まれた多量のかわらけが出土したもので、かわらけは建物ｂの地業面上に広がり建物の西側床下や礎石の上にも被っていた。大小二種類のかわらけの出土状況には規則性は認められず、饗応等飲食に使われた後まとめて廃棄されたように思われる。ただし使用された物（かわらけ、折敷、箸、漆器等）の内、かわらけだけがまとまって大量に出土したことは、当時ある程度分別して廃棄していたと考えられる。調査地の西端では比較的折敷と箸だけがまとまって出土していることからもこの事を裏付けていると思われる。廃棄されたかわらけが建物ａの基礎材の上には被ってこなかったことから、かわらけの大量廃棄は建物ｂの建て替えから建物ａが建てられる直前までの時期と考えられる。この間余り時間の開きは感じられず短期間に大量廃棄されたものと考えられる。出土したかわらけの年代観が13世紀末～14世紀初頭に当てはまると考えられることから、建物ａ・ｂもまた13世紀末～14世紀初頭を挟んだ時期と推察される。

大路側溝Ⅲ（下層）

調査された南北の幅が３mに満たない狭い範囲で確認した大路側溝である。南北方向に延びる溝の方位はおよそN-27°-Eで建物ａ・ｂや若宮大路の軸方位とほぼ同じである。溝は幅2.8m、底面レベルは海抜7.1mである。建物周囲の海抜が約8.15mなので溝の深さはおよそ１m程と考えられる。側溝底面には溝の幅に沿って横木材が２本2.8mの幅で平行に敷かれ、約55cm毎に側板を押さえる束柱を立てるための枘穴が穿たれている。大路側溝の西側肩から西へ2.5mの範囲では、側溝の木組み倒壊防止用に

地中に埋め込まれた地中控え梁が、横木材に穿たれたホゾ穴一つ置きの位置（約110cm間隔）に入れられていた。側溝を復元するとまさに『蒙古襲来絵詞』安達泰盛邸【註５】の前に描かれている木組み溝の状況と一致している。溝の木組みが土圧で内側に倒壊しないように工夫された地中控え梁の一本に、北条氏との関係を示すと思われる「三鱗紋」が鑿先の様なもので線刻されていた。この検出した大路側溝と同じ状況は、1988年4月に調査された『北条時房・顕時邸跡』「雪ノ下一丁目265番3地点」【註６】で検出された大路側溝の様と同じである。この調査地点は当調査地点から南に25m離れているだけである。３面の調査時に検出した若宮大路側溝の幅が2.75cm、倒壊防止の控え梁構造を持ち「三鱗紋」の線刻を控え梁表面に刻んでいた。遺構面から推察される大路側溝の深さもおよそ１mと同じところから、両遺跡は同じ区画内（屋敷内）である可能性が強いと思われる。

b．出土した遺物（図９～20　表２　図版11～14・28・33）

第３面・３面までの遺物

青白磁梅瓶・合子・水注・皿、白磁口兀碗、青磁合子・花生肩部・蓋・腰折皿・碗、瀬戸瓶子・卸皿、常滑片口鉢・甕、Ⅲ期瓦、火鉢、漆椀・皿・鏡箱等が出土。

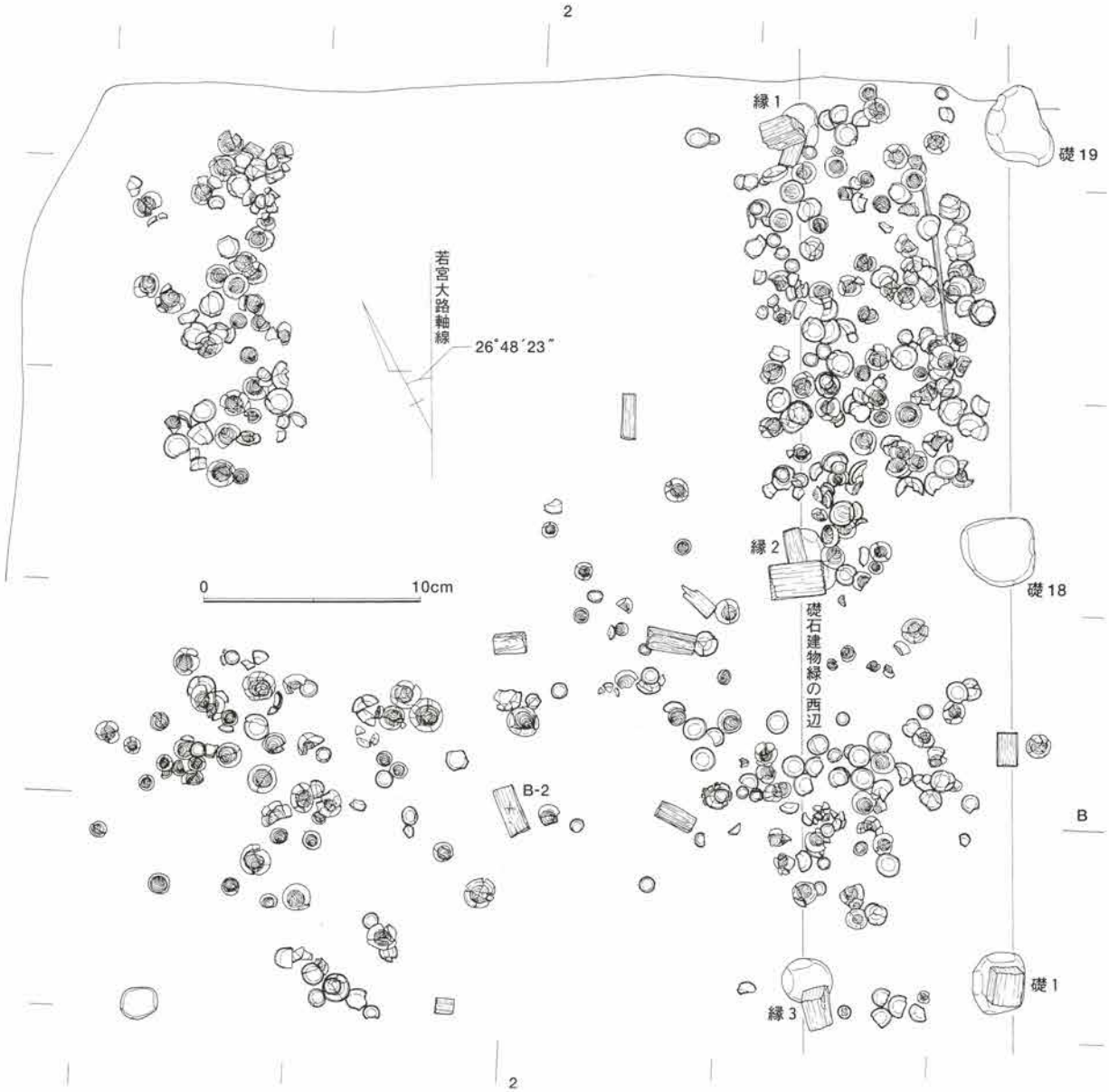


図８　かわらけ溜り平面図

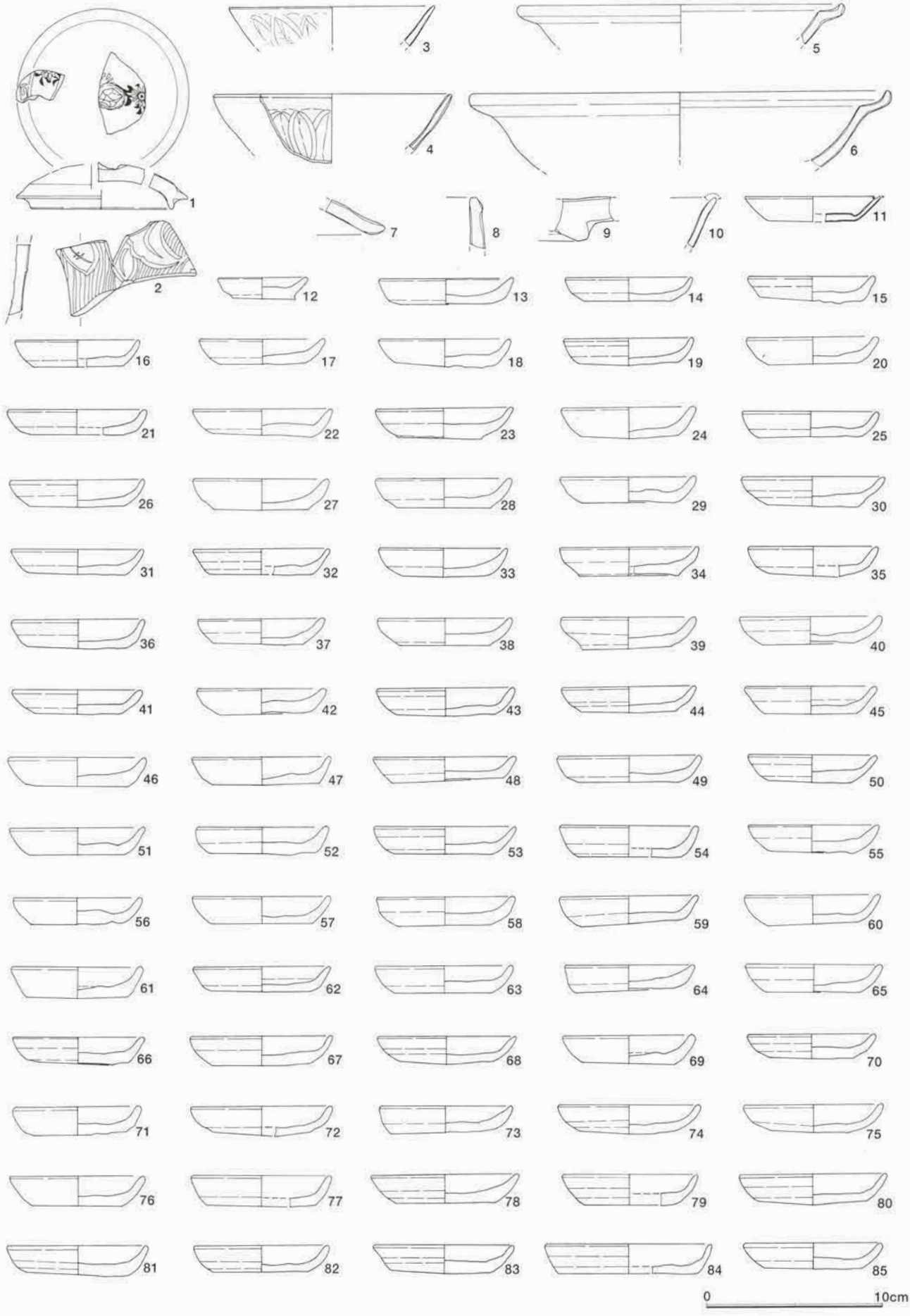


図９　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）

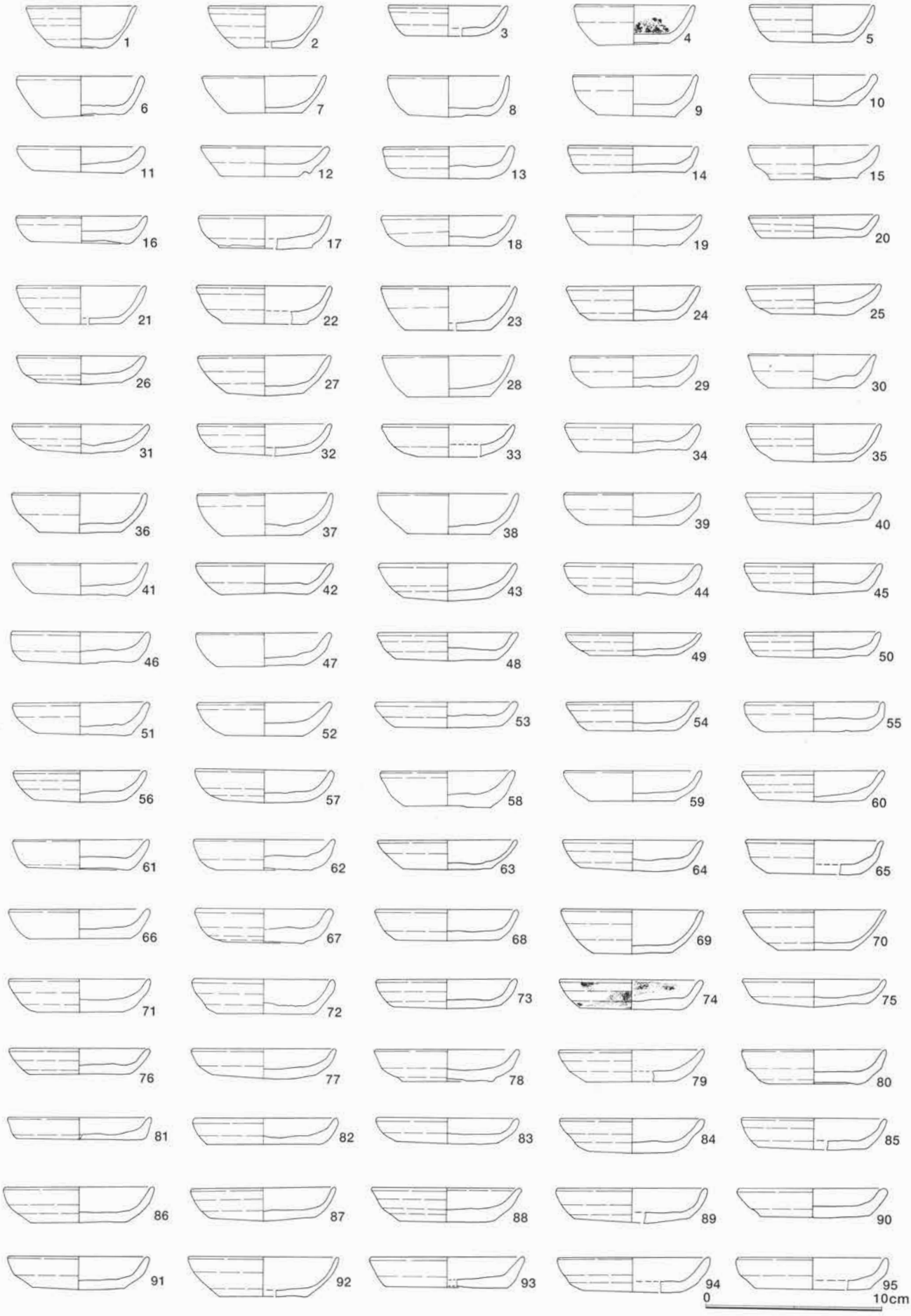


図10　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）

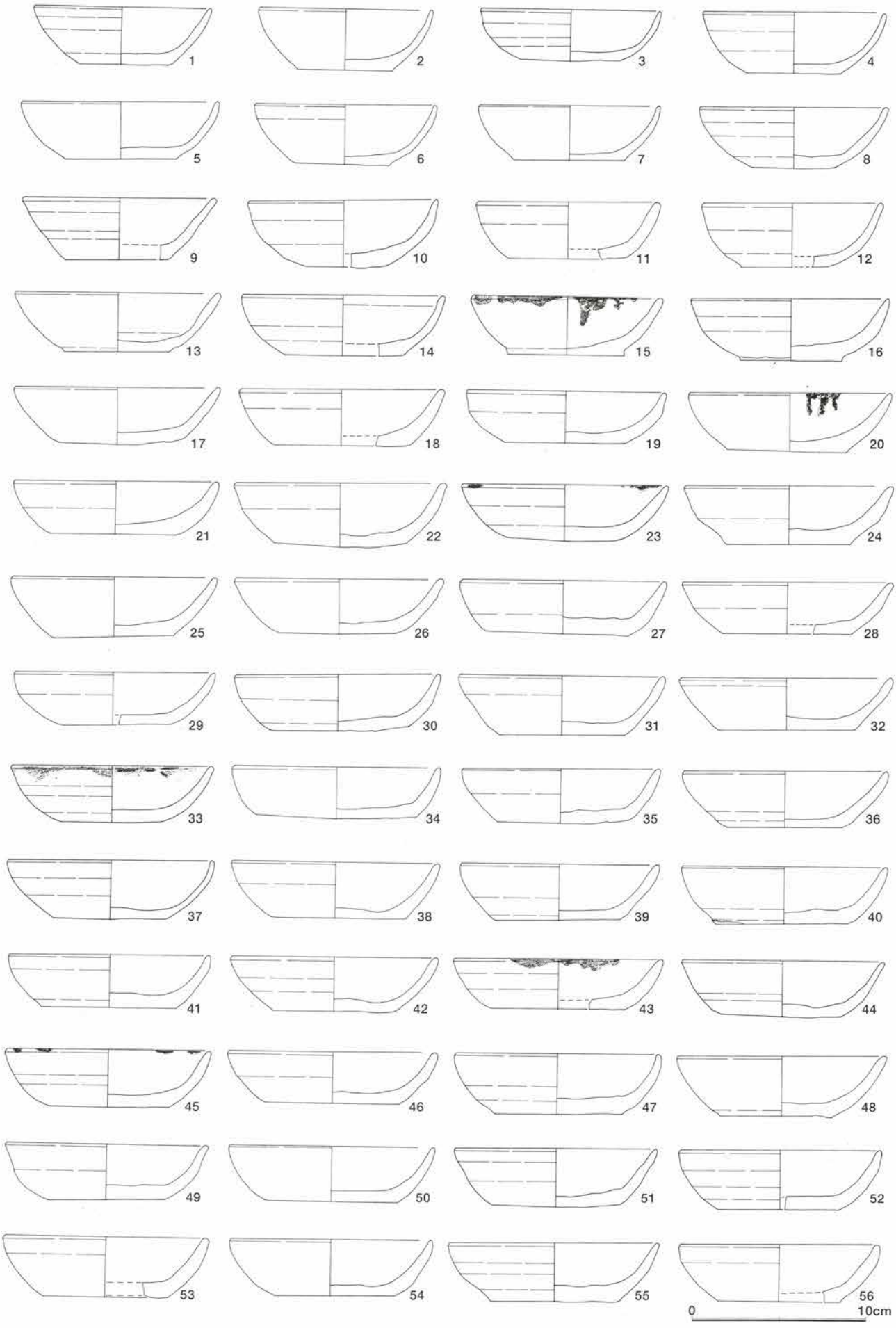


図11　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）

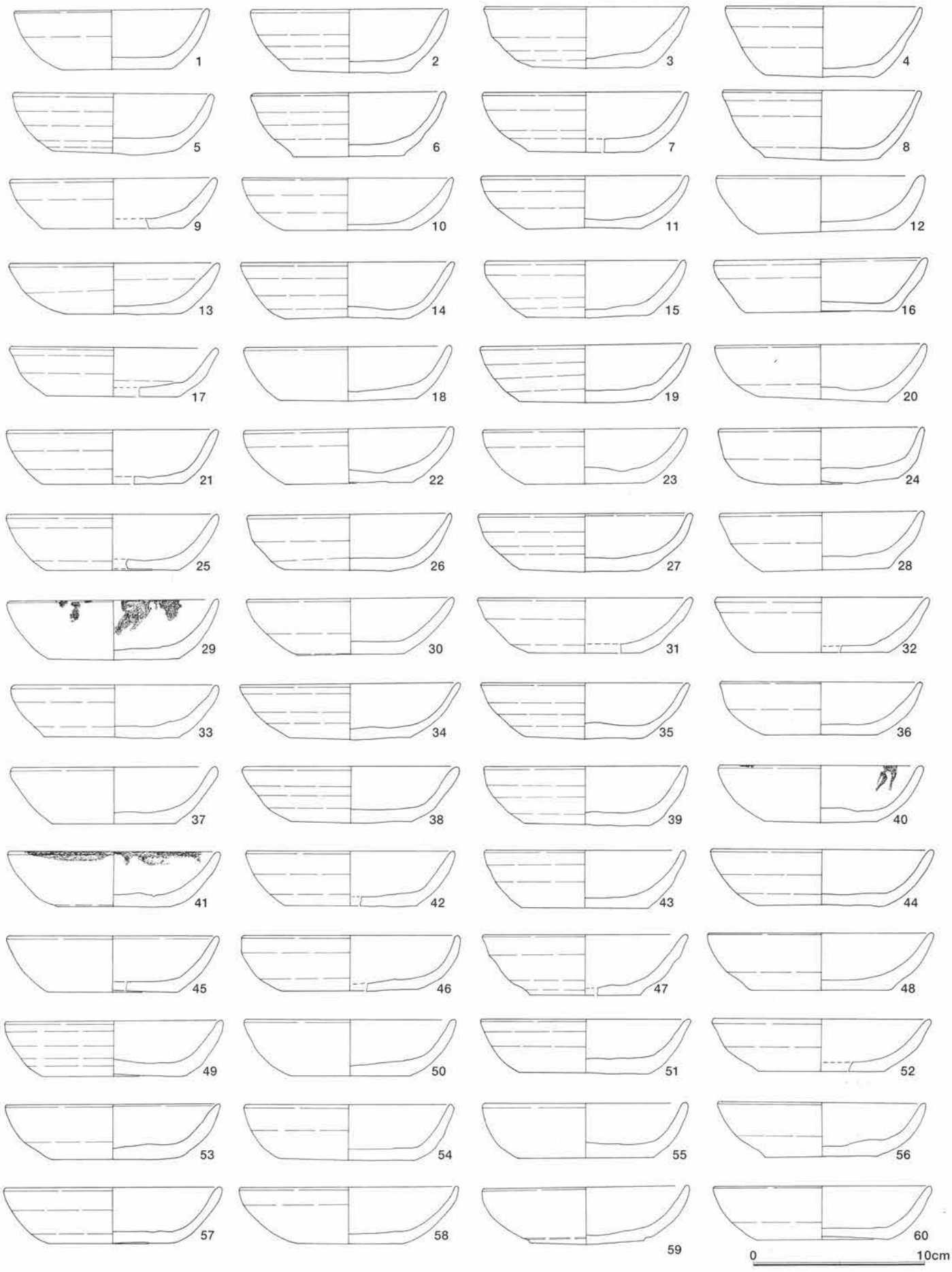


図12　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）

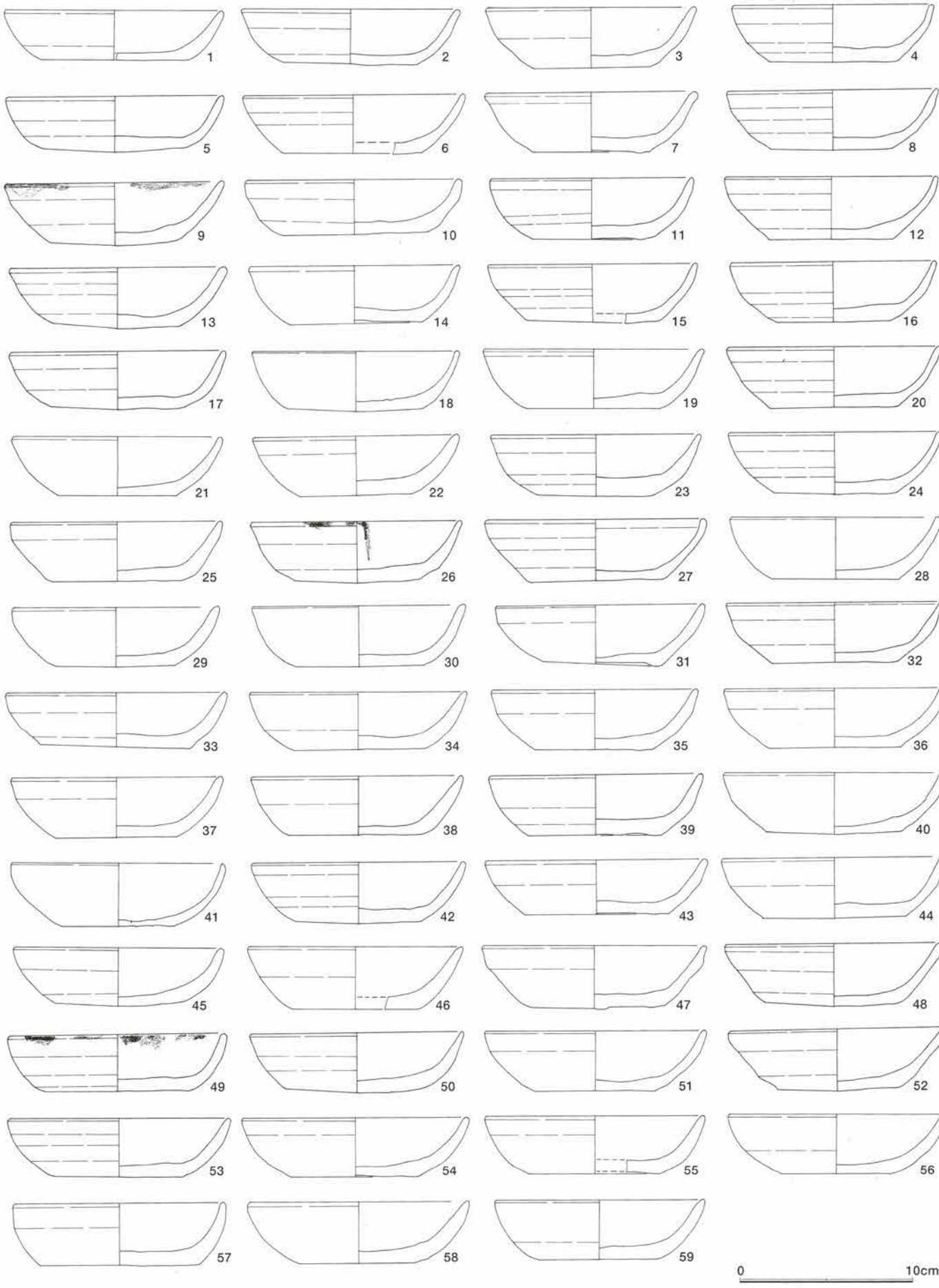


図13　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）

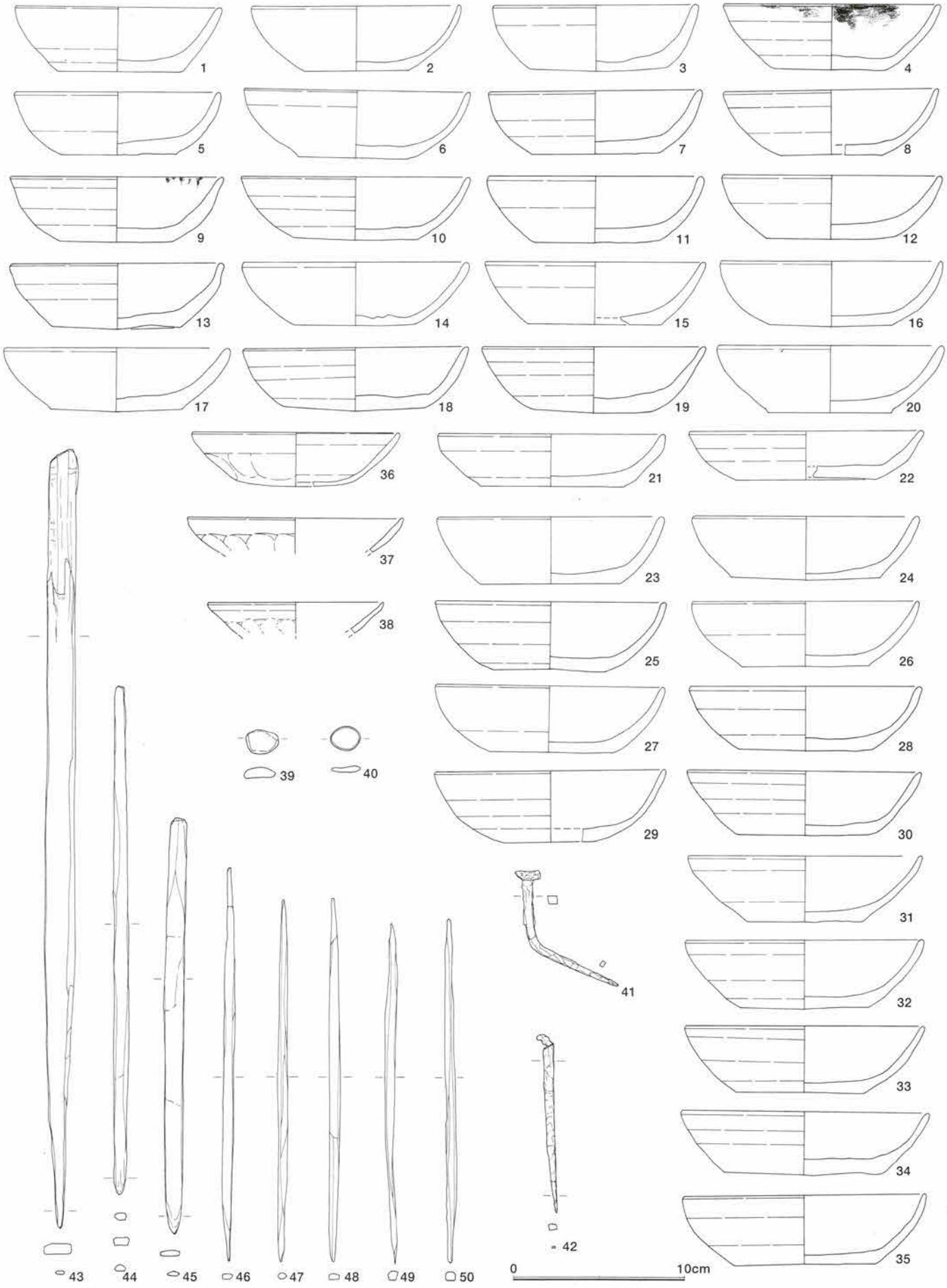


図14　第３面遺構出土遺物（かわらけ溜まり）

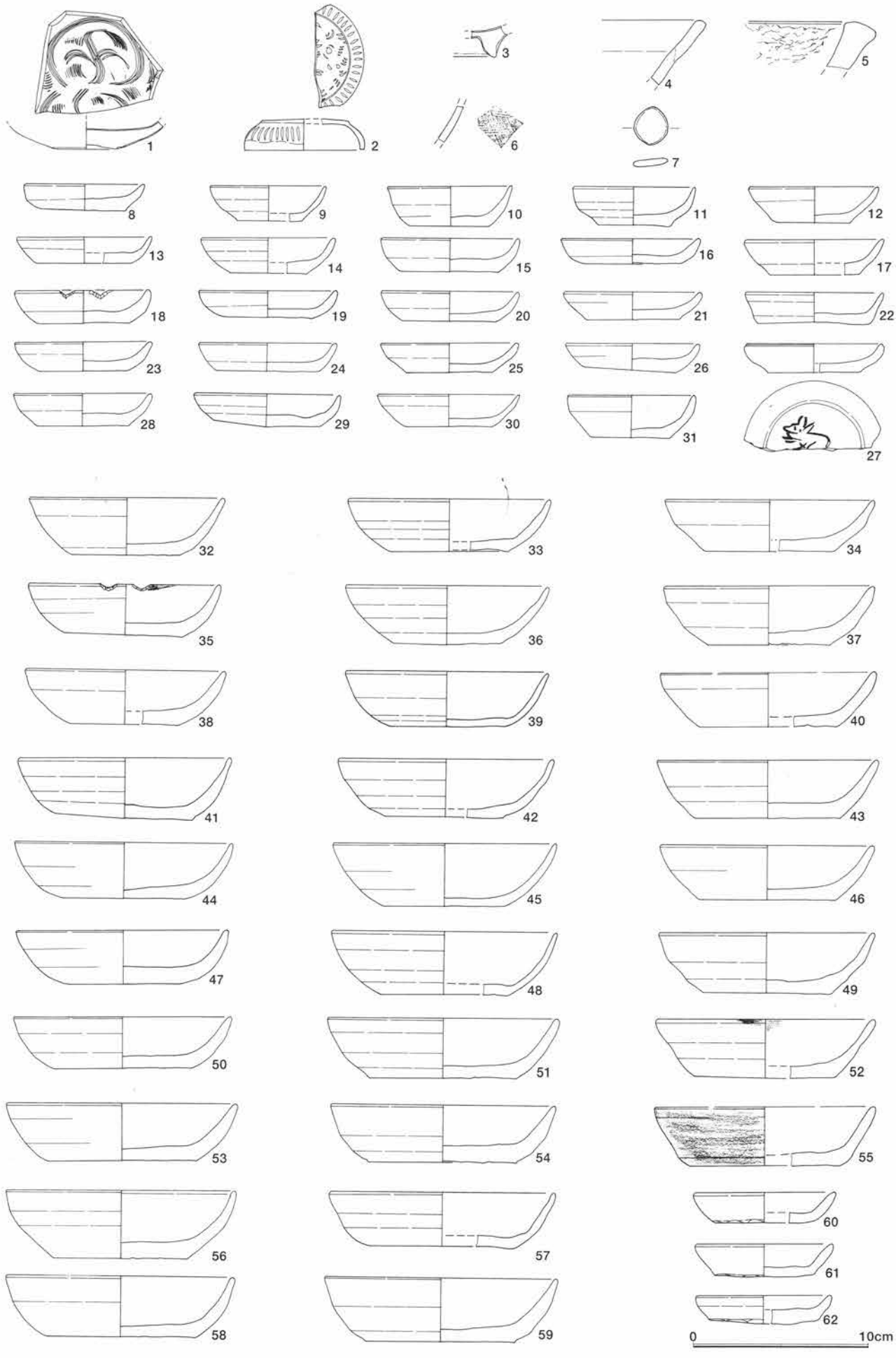


図15　第３面遺構出土遺物（大路側溝Ⅲ）

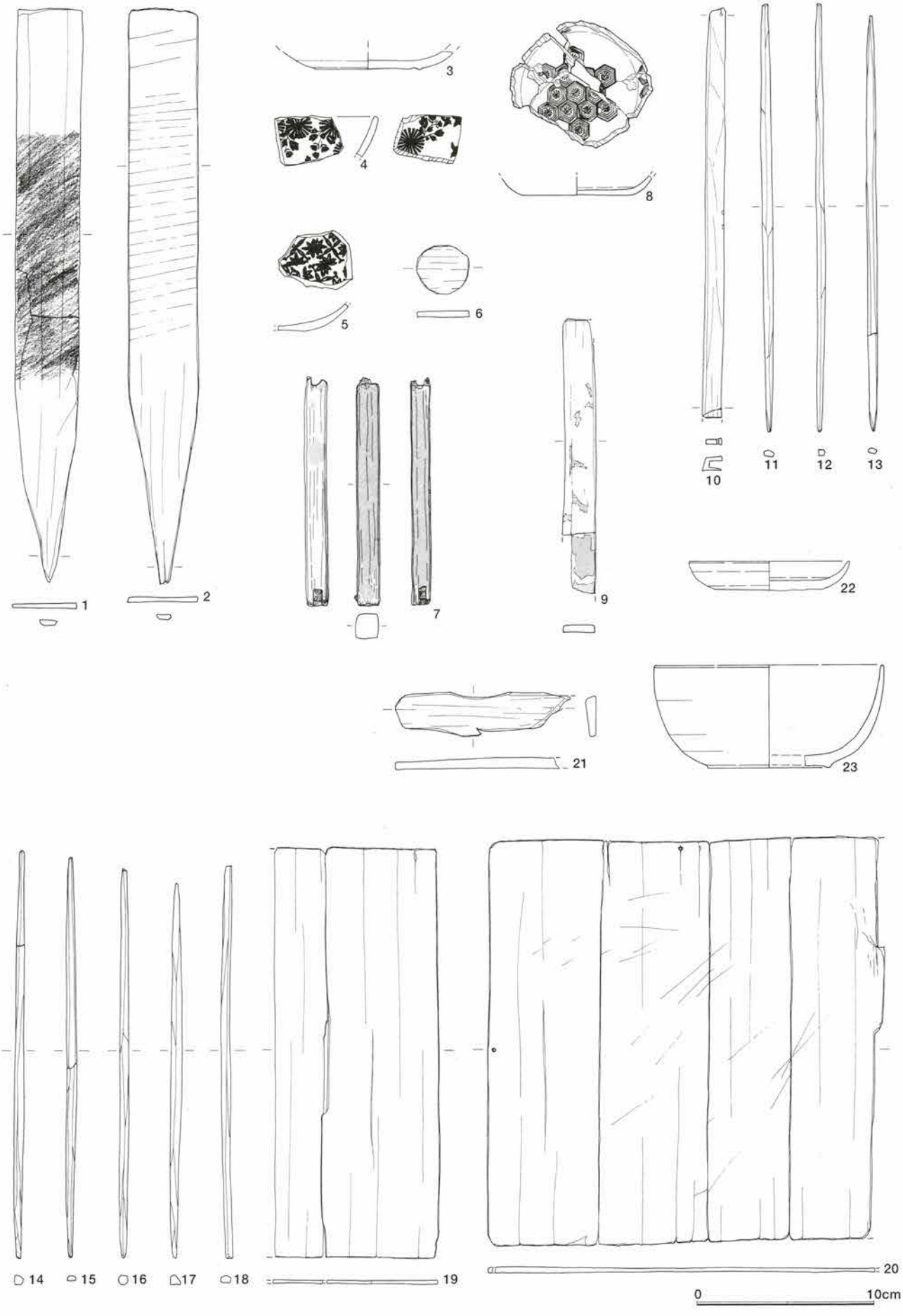


図16　第３面遺構出土遺物（大路側溝Ⅲ・柱穴・土壙）

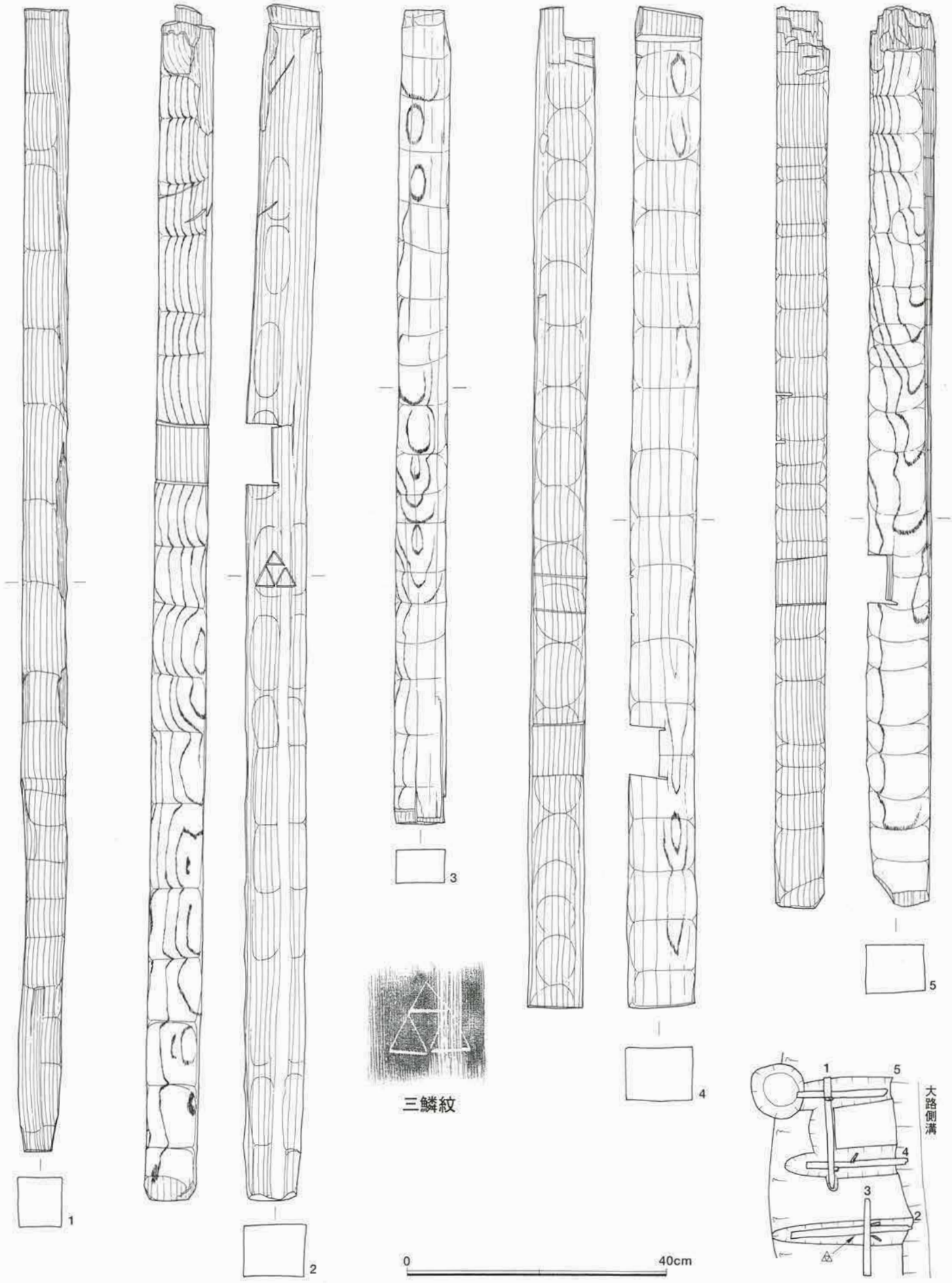


図17　第３面遺構出土遺物（大路側溝Ⅲ控え梁）

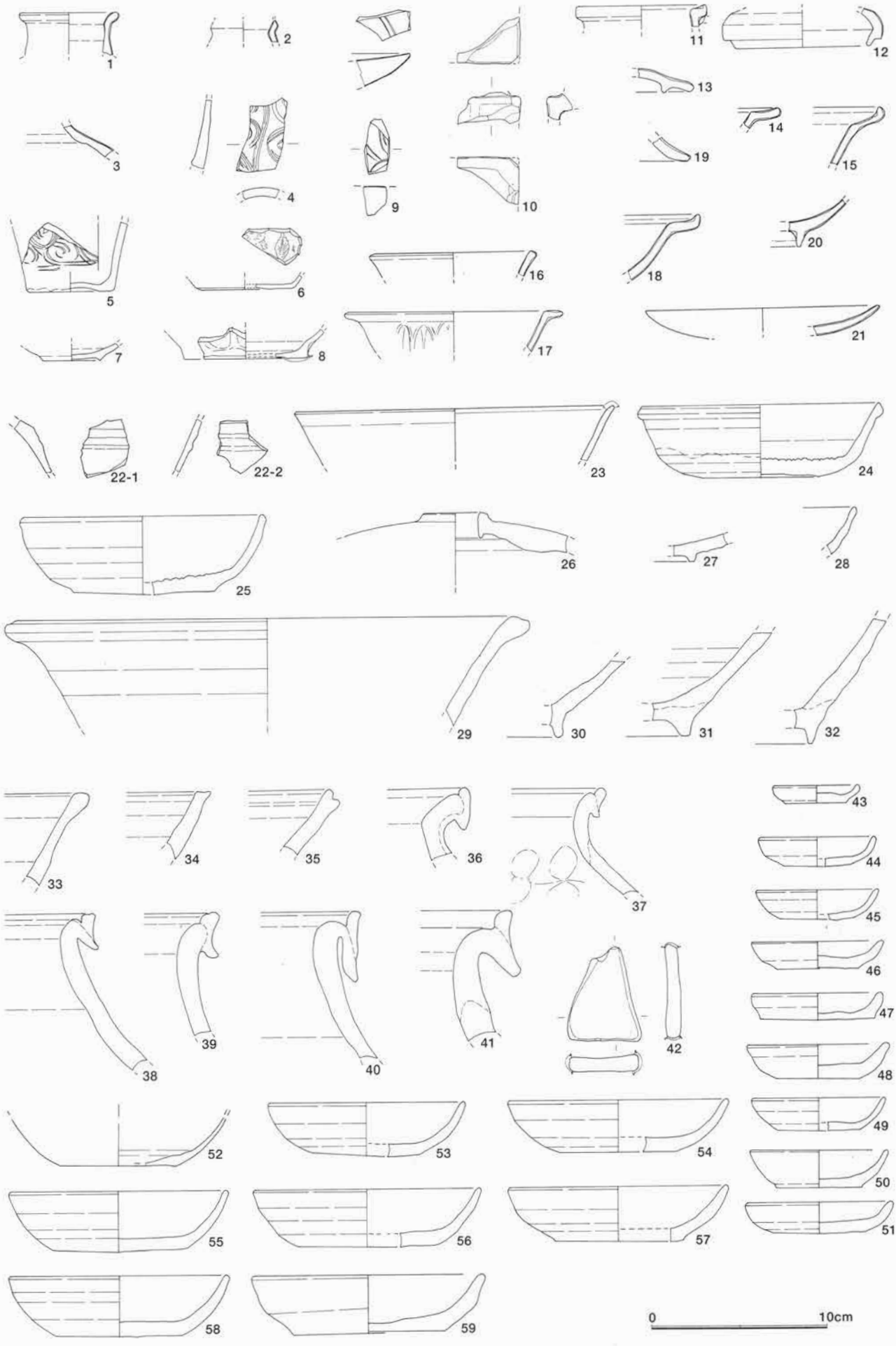


図18　第３面まで出土遺物

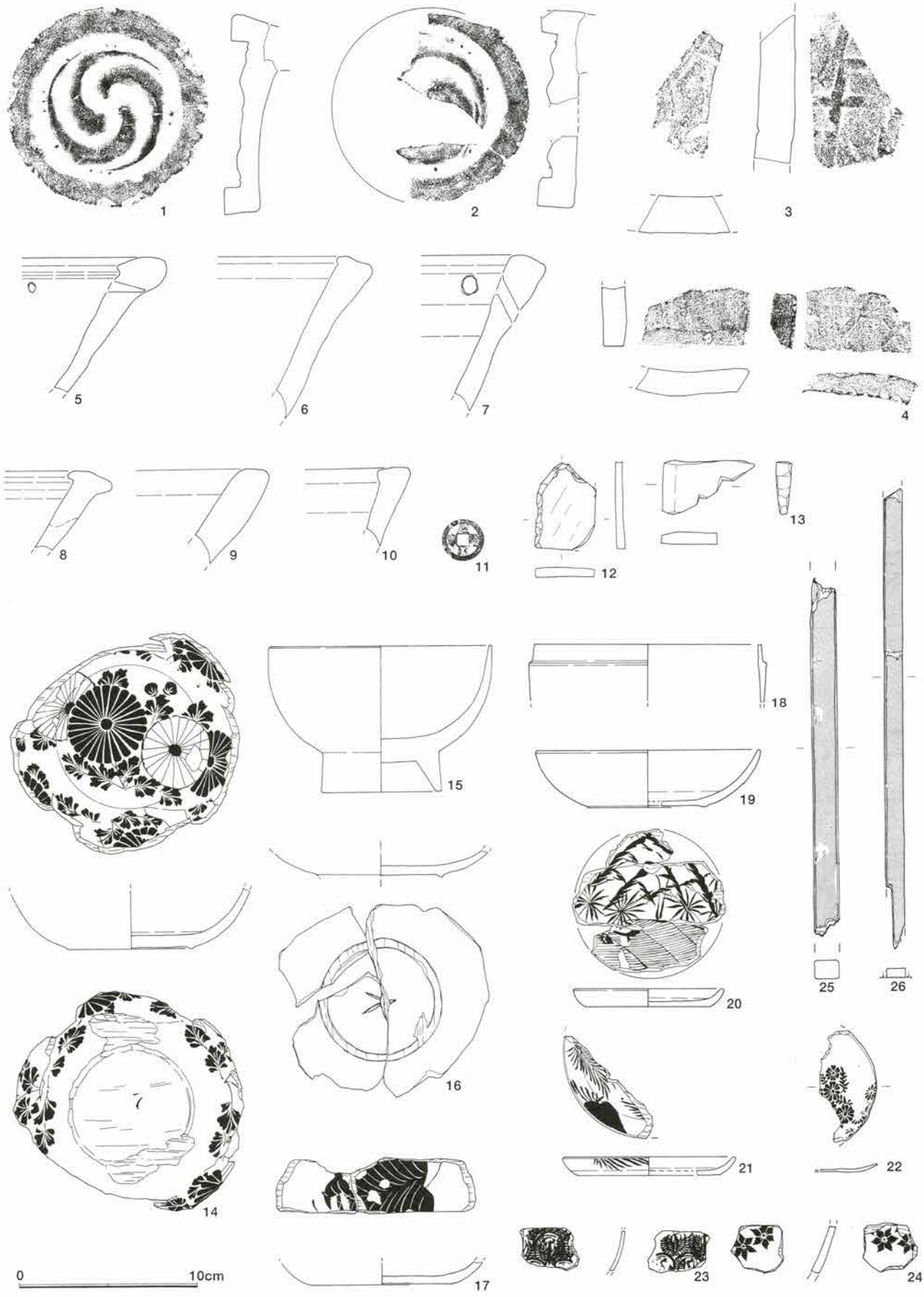


図19　第3面まで出土遺物

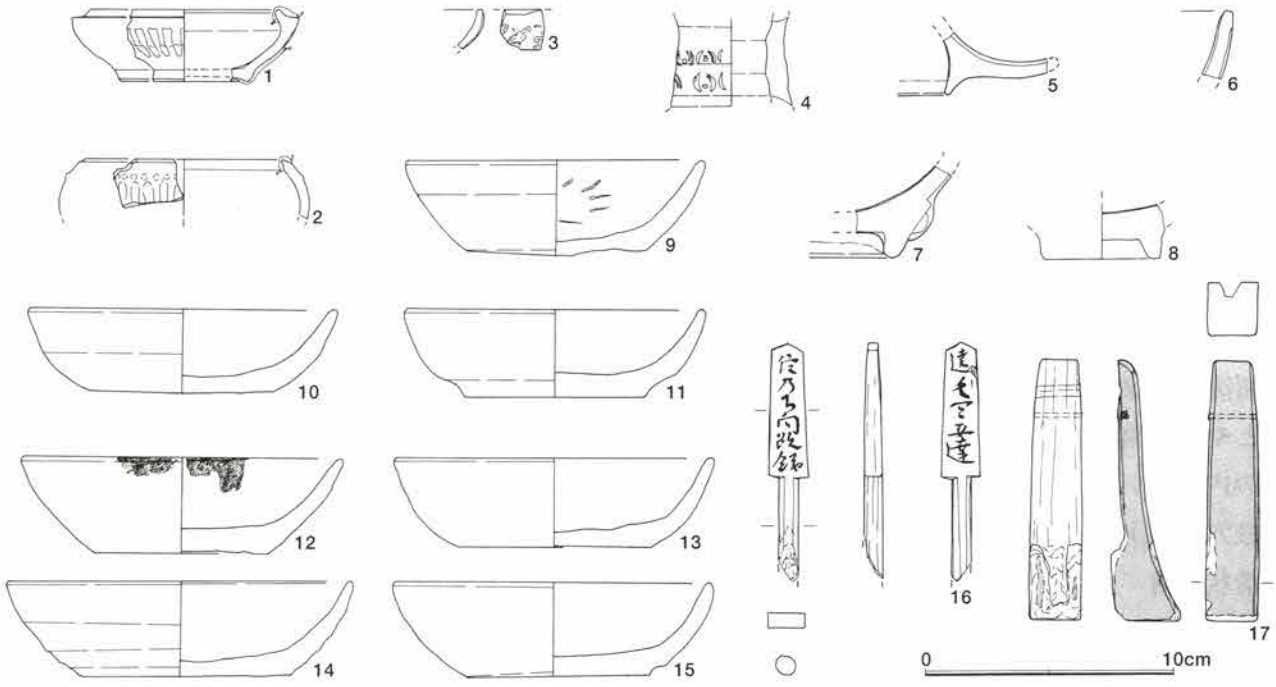


図20　第３面出土遺物

かわらけ溜まり

礎石建物の西側一帯から縁の下にかけて廃棄されていたもので、出土したかわらけの年代観は13世紀末～14世紀初頭と思われる。この他かわらけ以外の遺物では高麗青磁蓋、青白磁梅瓶、青磁鎬蓮弁文碗、青磁折縁皿、青磁蓋口縁部、青磁壺口縁部、青磁大皿高台部、白磁口兀皿といった舶載磁器が併せて出土している。高麗青磁蓋は菊花文を白色と黒色の２種類の粘土で象眼したもの、破片ながら優品である。このかわらけ溜りを掘り下げる途中に１点の木簡が出土している。軸径約８㎜、断面形は10角形、遺存する長さ約８cmのうち先端部は約５cm、将棋の駒を細長くした様で先端部圭頭状となる。この先端部には墨書があり表「信乃下向路ヵ銀ヵ」、裏「達ヵ〒ヵ一ヵ々ヵ立ヵ達ヵ」。表の文面は「信濃国に向かうための旅費」のことを記している様に読め、裏の文面は意味が不明であるが、木簡の形状からみて巻物の軸と思われることから先端の墨書は巻物の題箋か【註７】。

若宮大路側溝Ⅲ（下層）

かわらけの他に同安窯劃花文碗、青白磁合子蓋、龍泉窯青磁皿、片口鉢、伊勢土鍋、火鉢などが出土している。かわらけはかわらけ溜まりと大差ない時期と考えられる。

３．第４面の遺構と遺物

ａ．遺構（図４・21、図版６・７）

第４面では柱穴列、柱穴、土壙、東西方向細長くに延びる溝状遺構、板溝状遺構と若宮大路側溝（下層掘方）が検出され敷地を区分するような遺構が存在する。面の上には砂利が敷かれていたようで、面直上に砂利が多く見受けられ、特にA-６グリッド周辺や板状遺構の南が多い。面の構成土は厚さ40cmにも及ぶ砂層である。海抜は7.7m～7.8mでほぼ水平である。

溝状遺構

B-２グリッド交点から東西Ｂライン北側に沿って東西方向に長さ19m、幅１m、深さ約25cmの溝状遺構を検出した。軸方位はおよそN-63°-W（若宮大路に直交）である。溝状遺構の覆土は暗茶褐色の植物遺体を多く含む腐植土（マグソ土）である。南北A-６グリッド周辺では面上に砂利が多く見受けられる。

柱穴列

柱穴列１・２・３　東西に細長く延びる溝状遺構の北側で検出された遺構である。東西方向に延び大路側溝とはほぼ直交している。共に軸方位はおよそN-63°-Wである。柱穴列１・２・３のいずれも東西方向だけの検出で、溝状遺構を越えて南側には延びないことから一応柱穴列と扱うが、調査区外の北側へ建物として延びる可能性は残る。

柱穴列４　溝状遺構の南側、ほぼ東西Ｂラインに沿い大路側溝の掘方の脇から調査地域西の外れまで、25m以上にわたり検出した柱穴列である。柱間は約90cm（およそ３尺）、軸方位はおよそN-63°-Wで大路側溝とほぼ直交している。頻繁に改修されたのか重複した柱穴が多数ある。間隔はおよそ３尺と狭いことや、頻繁に造り替えられている状況から柵や塀のようなものが想定される。P-15と切り合ったP-48の内、古いP-48覆土から裏返った状態で墨壺（舟形尻割型）が出土している。ほぼ場所を同じくして柱穴列の南側でやはり東西方向に延びる板溝状遺構が検出されているが柱穴列の方が新しい。

板溝状遺構

ほぼＢラインに沿うように１区、２区に跨り検出した遺構である。約13.5mの範囲で長さ約２～４m、幅約10～12cm程の板材の内側を２～３cm角、長さ約20cm程の杭を打ち込み留めていた。軸方位はおよそN-63°-W（大路に直交）である。東西方向に延びる細長い遺構だが南側側面だけに溝の板材が残る。この板溝状遺構の南では砂利敷き面が調査地を越えて南側に広がっていると考えられる。遺構は調査地の西端まで延びると推測されるが１区B-１・２・３グリッドでは断片的に板材が残るのみである。１区B-３グリッド西側では南北方向に延びる板溝状遺構が検出されている。この付近でＴ字に交わり区画を示しているの可能性がある。この東西方向の溝状遺構の南側には直径４～５cm大の砂利が敷き詰められている。

柱穴

柱穴列以外にも多数の柱穴が検出されている。多くが柱穴内に礎板を有することから、建物ないし塀といったものが考えらるが調査範囲が狭いために規格性が見いだせない。

土壙

土壙は14基検出されている。その多くは腐食土を含みゴミ捨て穴と考えられる。

土壙１　東西106cm、南北180cm、深さ49cm。

土壙２　東西110cm、南北82cm、深さ17cm。

土壙３　東西84cm、南北84cm、深さ12cm。

土壙４　東西116cm、南北100cm、深さ15cm。

土壙５　東西110cm、南北不明、深さ24cm。

土壙６　東西94cm、南北不明、深さ26cm。

土壙７　東西118cm、深さ12cm。

土壙８　東西84cm、南北不明、深さ11cm。

土壙９　東西90cm、南北110cm、深さ25cm。

土壙10　東西124cm、南北90cm、深さ16cm。

土壙11　東西152cm、南北80cm、深さ16cm。

土壙12　東西160cm、南北150cm、深さ26cm。

土壙13　東西80cm、南北78cm、深さ28cm。かわらけ、箸、墨書痕が残る折敷片がまとまって廃棄された状態で出土。

土壙14　東西120cm、南北不明、深さ15cm。

大路側溝

南北の幅が３ｍに満たない狭い範囲で確認された大路側溝である。南北方向に延びる溝の方位はおよそN-27°-Eで検出された掘立柱建物とほぼ同じ軸方位である。溝状遺構、柱穴列はちょうど90°西に振れている。溝の幅は2.8m、底面レベルは海抜7.01ｍである。建物周囲の海抜が約7.80ｍなので溝の深さはおよそ0.8mになる。大路側溝の西側肩から西へ2.5mの範囲が側溝の掘方（裏込め）になる。側溝の形状は第３面とあまり変化ない。

ｂ．出土した遺物（図23～46　表２　図版15～19・29・30・33）

第４面・４面までの遺物

柱穴列４－Ｐ15の真上、腐植土層内から折敷が出土。中央に菊花文が墨で描かれ、法量は縦28.4cm、横27.3cm、厚さ0.1cm。

溝状遺構１・２

青磁蓮弁文碗、常滑鉢、かわらけ、木製品（箸、形代、折敷、草履芯、下駄）、漆器椀等が出土している。

板溝状遺構

青磁蓮弁文碗、白磁、白かわらけ、かわらけ、火鉢、木製品（箸、折敷、草履芯）、漆器（椀、皿、建材）が出土している。

柱穴列

柱穴列からは溝状遺構、板溝状遺構と大差ない構成（青磁、常滑、木製品、漆器）で遺物が出土している。

柱穴列４－Ｐ48から墨壺が出土した。出土した墨壺の形態は舟形尻割型と分類されるもので、明治12年東大寺南大門の梁上から発見されたものに類似している。この東大寺南大門の墨壺は正治元（1199）年の南大門再建時、もしくは新しくとも室町時代以前のものとされている。出土した墨壺は、舟形の前部に円形の墨池が穿たれる。後部は大きく刳り取られ、両側に環状金具を付けて糸車が取り付く。墨池と糸車の間には釣り下げ用の鉄環が付く（下振りとして使用）など東大寺墨壺と類似点が多く、出土状況から13世紀後半代と考えられる。現存する13世紀代の墨壺は東大寺南大門の墨壺以外類品が無く、同時代の出土遺物はこれまで皆無であり貴重である【註８】。

土壙

土壙13　13世紀後半代のかわらけ、箸、墨書痕がある折敷残片がまとまって出土した。実測できたものは、小型かわらけ20点、大型かわらけ16点、箸17点、折敷19点である。折敷の点数からみて、最低20組程度のセットかと思われる。小型、大型かわらけの中には口唇部に煤の付着するものが見られることから灯明に用いられたものも混じっている。出土状況から見て使い終わった後に一気に廃棄したものと推察される。

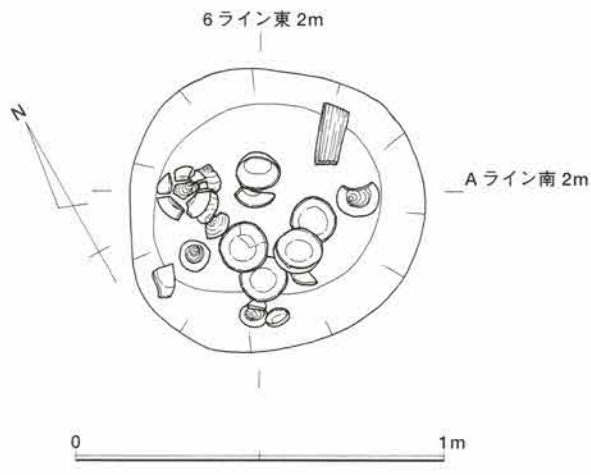


図21　第４面土壙13平面図

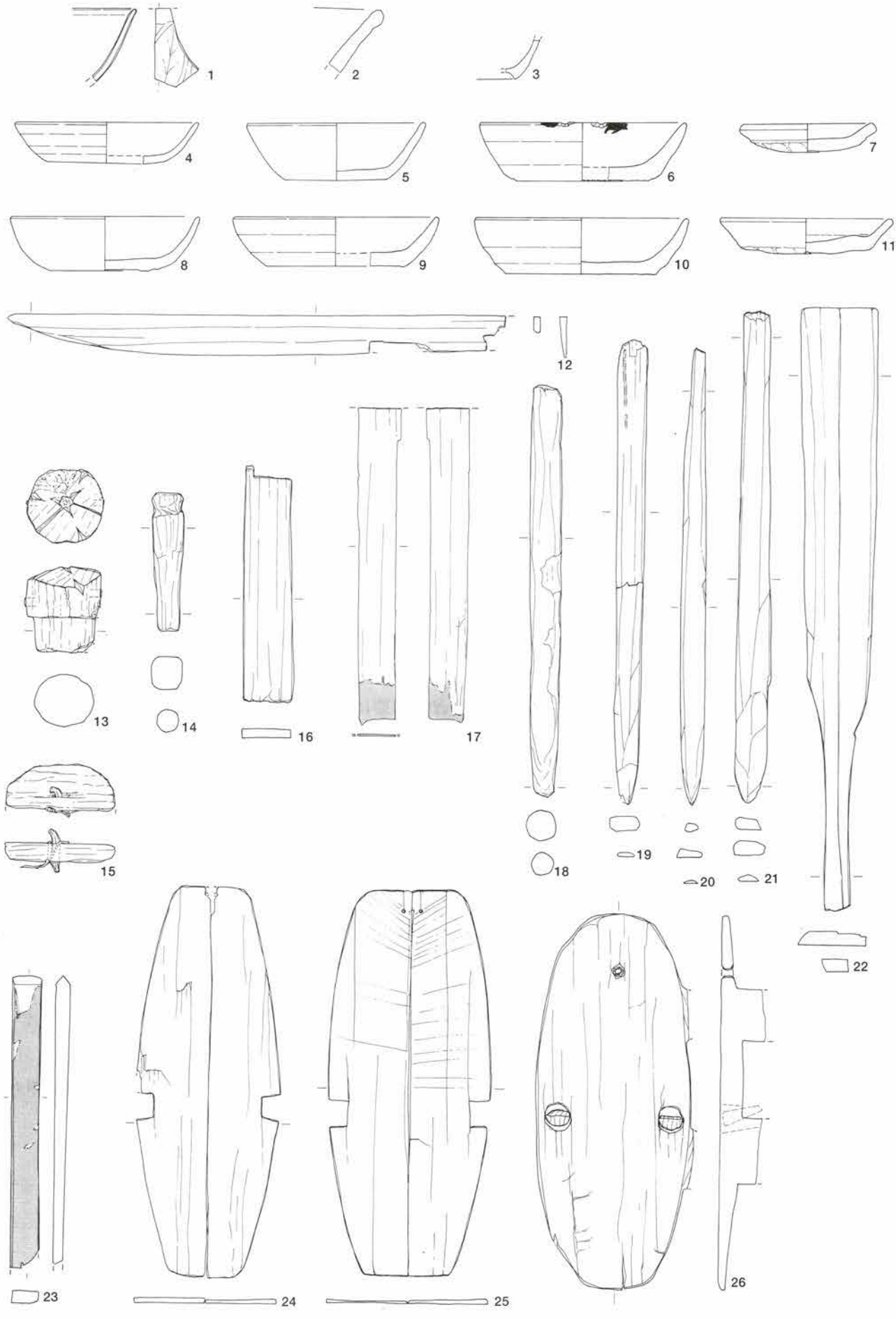


図22　第４面遺構出土遺物（溝状遺構１）

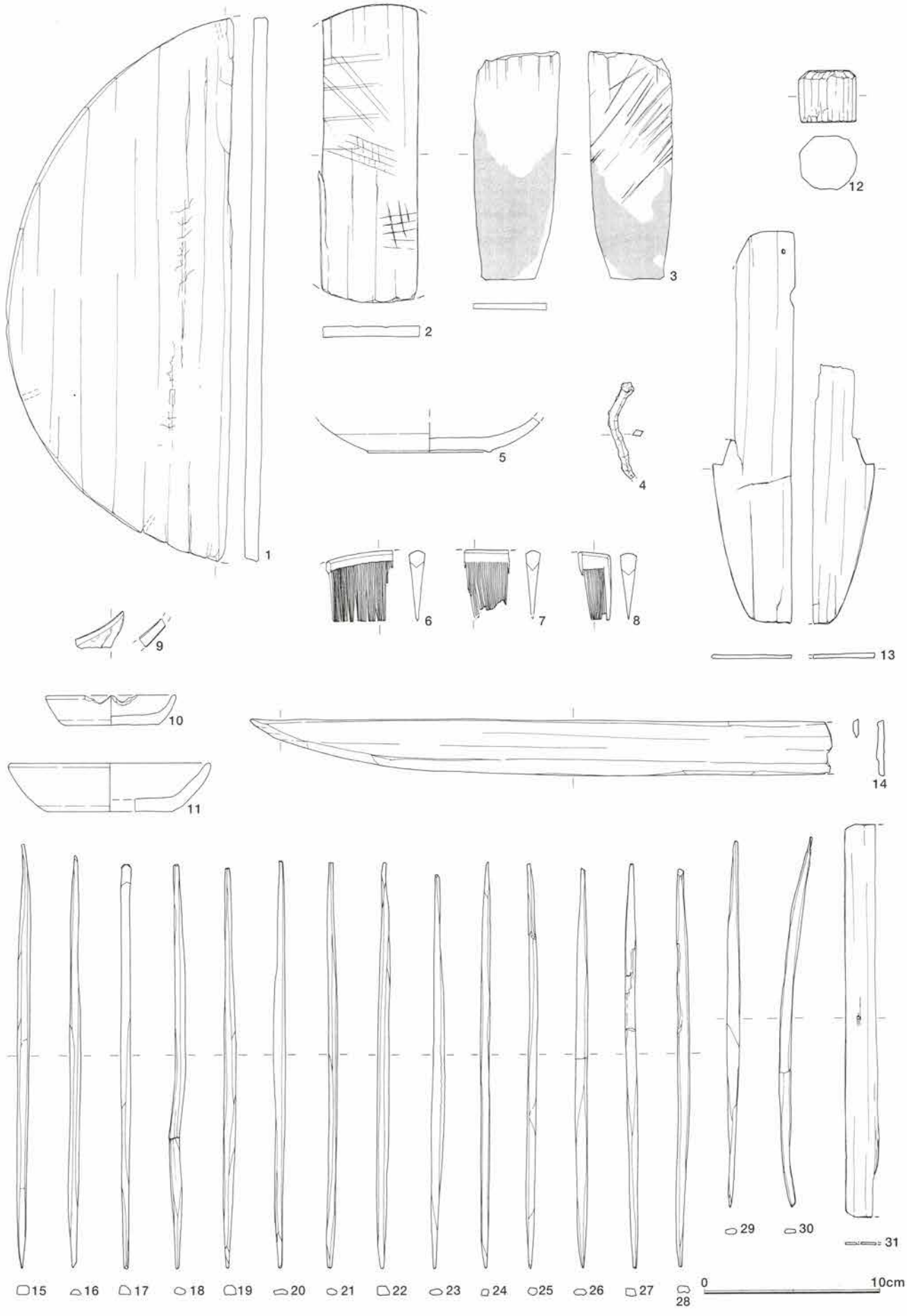


図23　第４面遺構出土遺物（溝状遺構１・２）

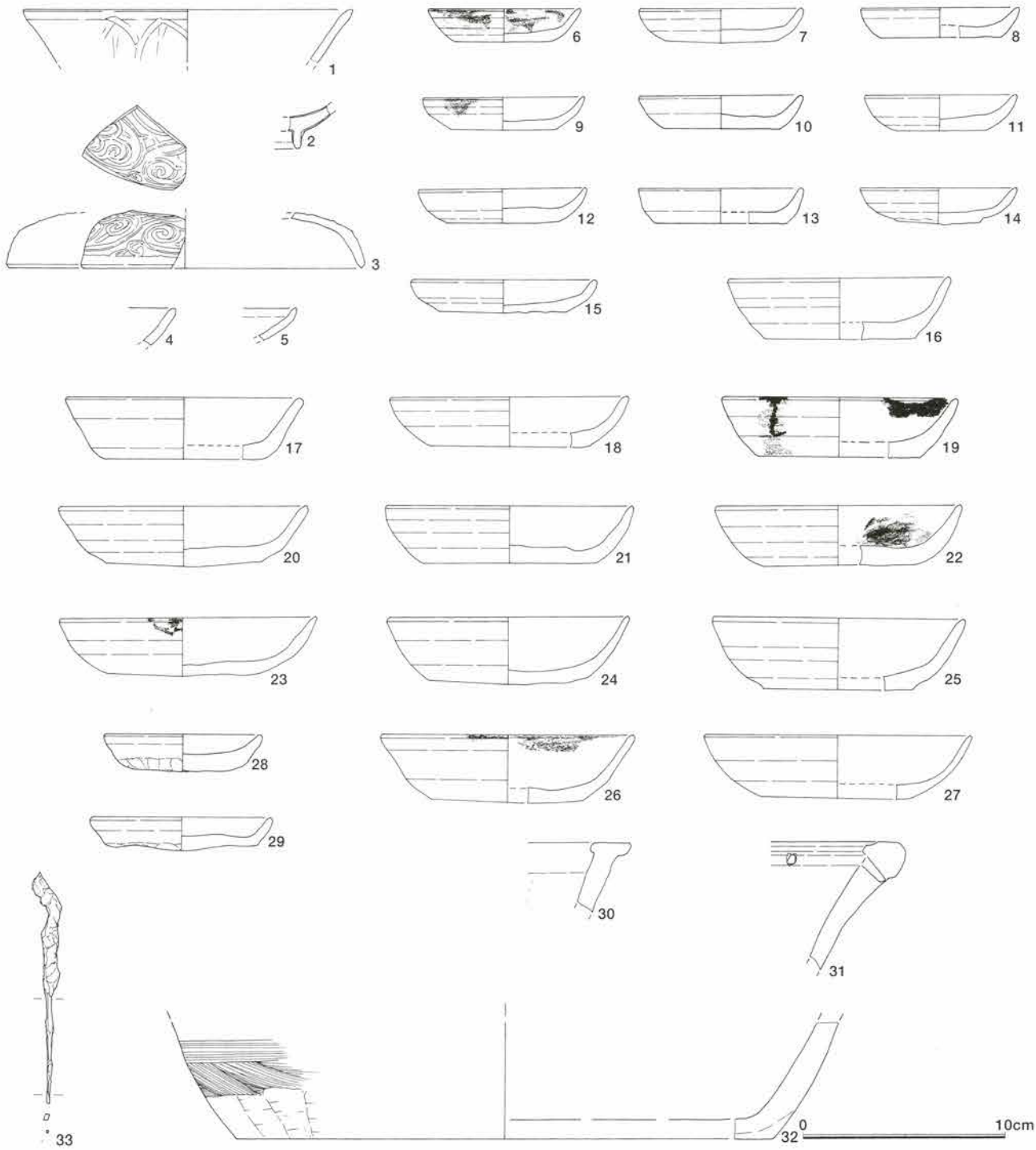


図24　第４面遺構出土遺物（板溝状遺構）

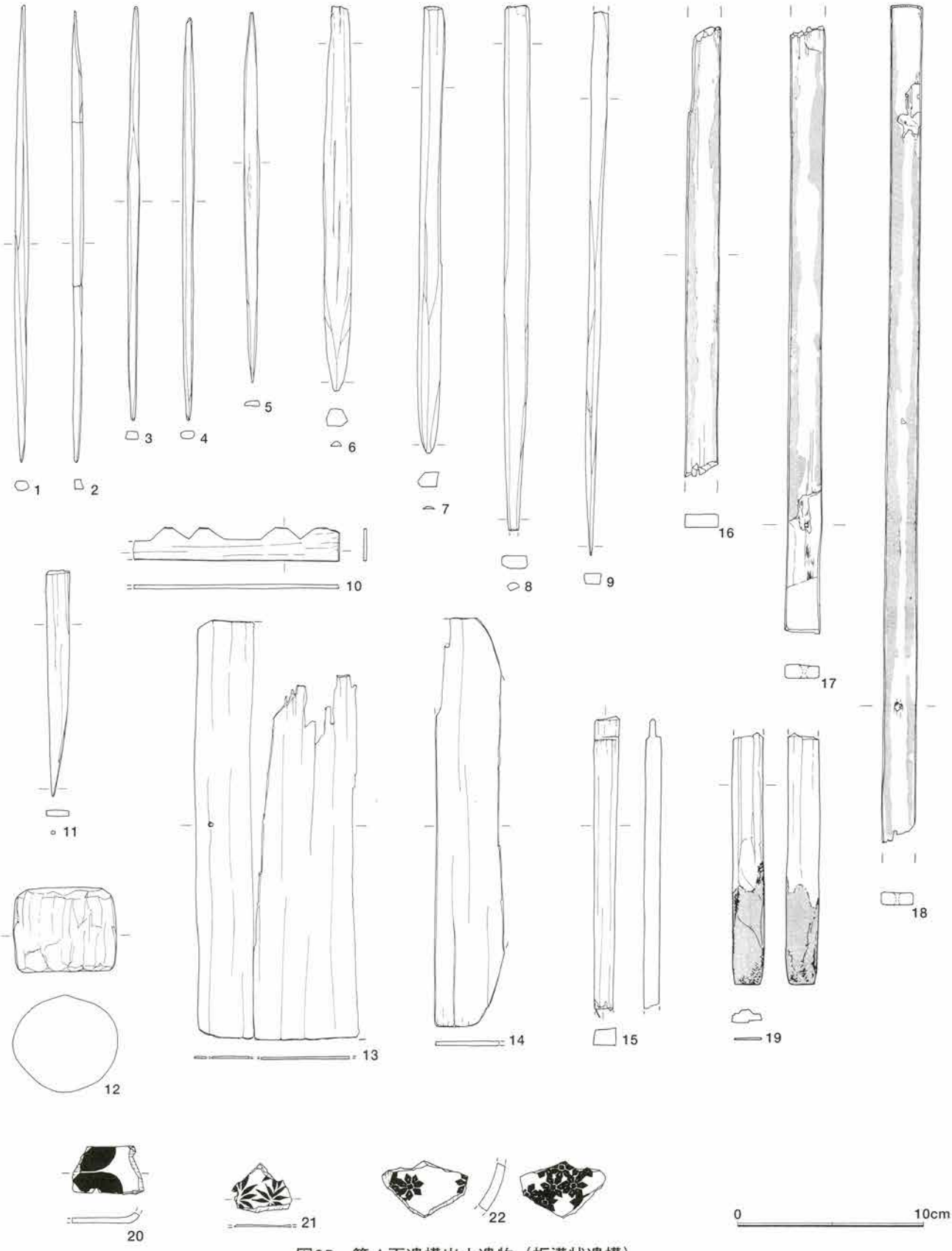


図25　第4面遺構出土遺物（板溝状遺構）

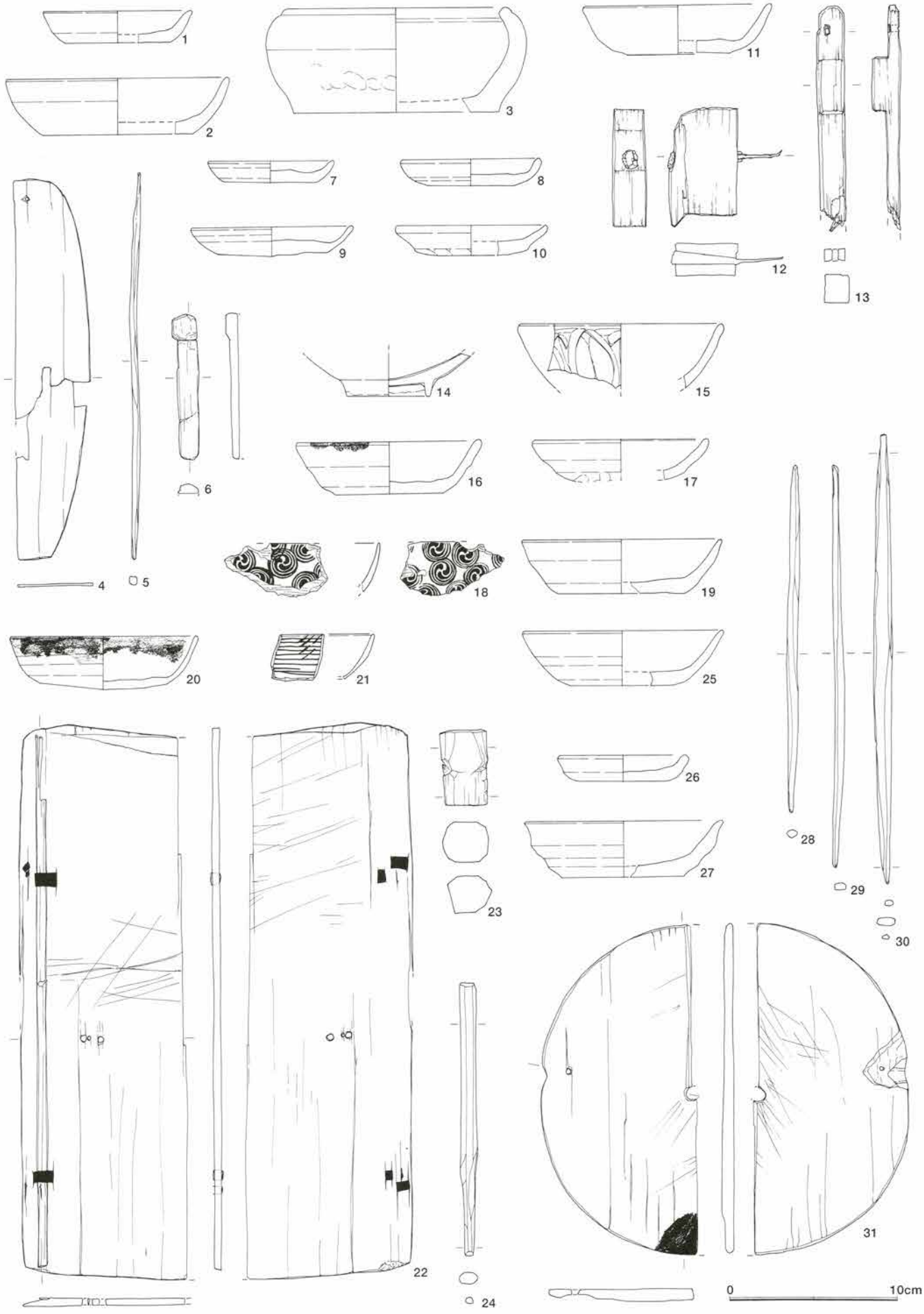


図26　第４面遺構出土遺物（柱穴列）

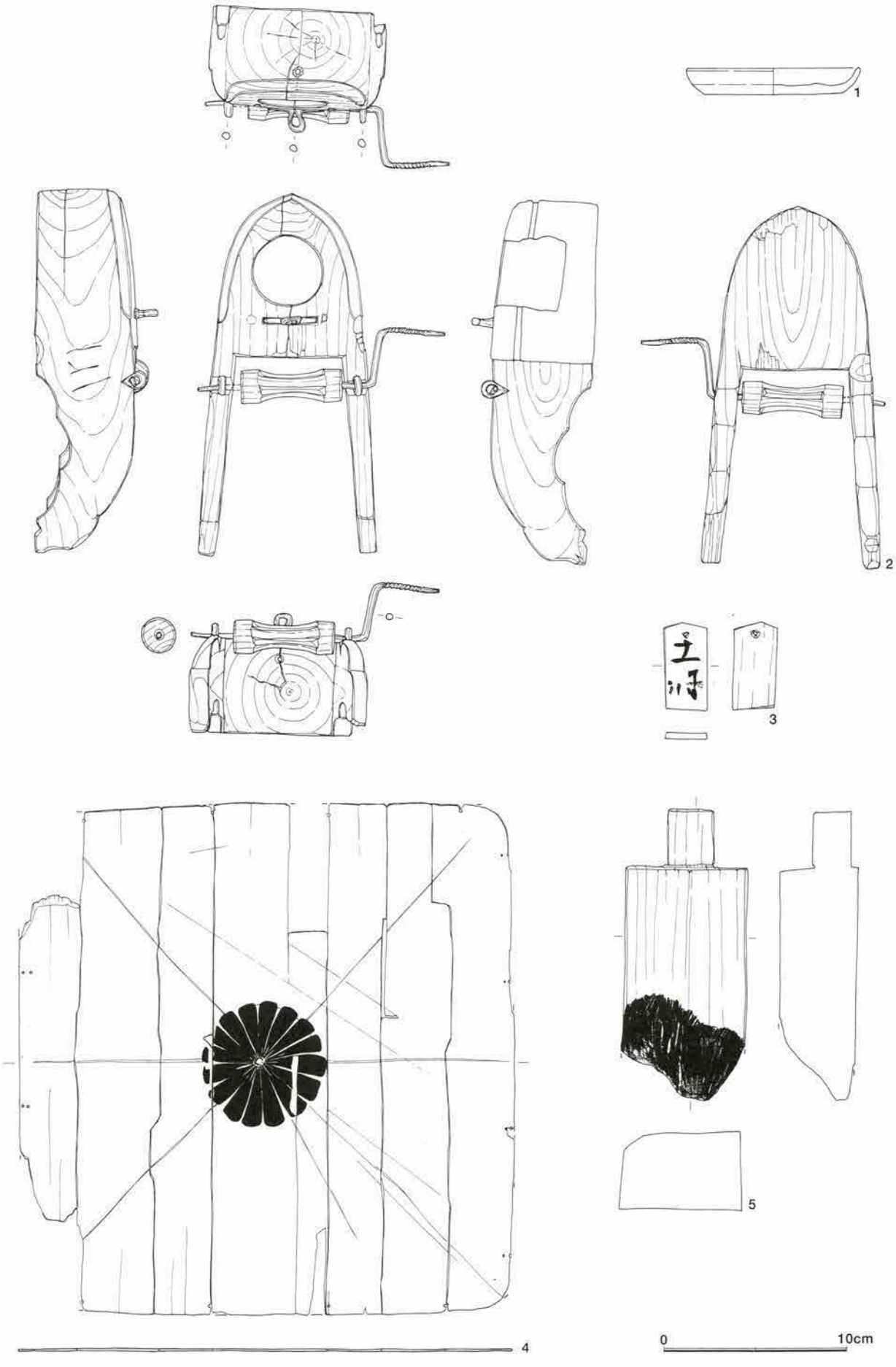


図27　第4面遺構出土遺物（柱穴列）

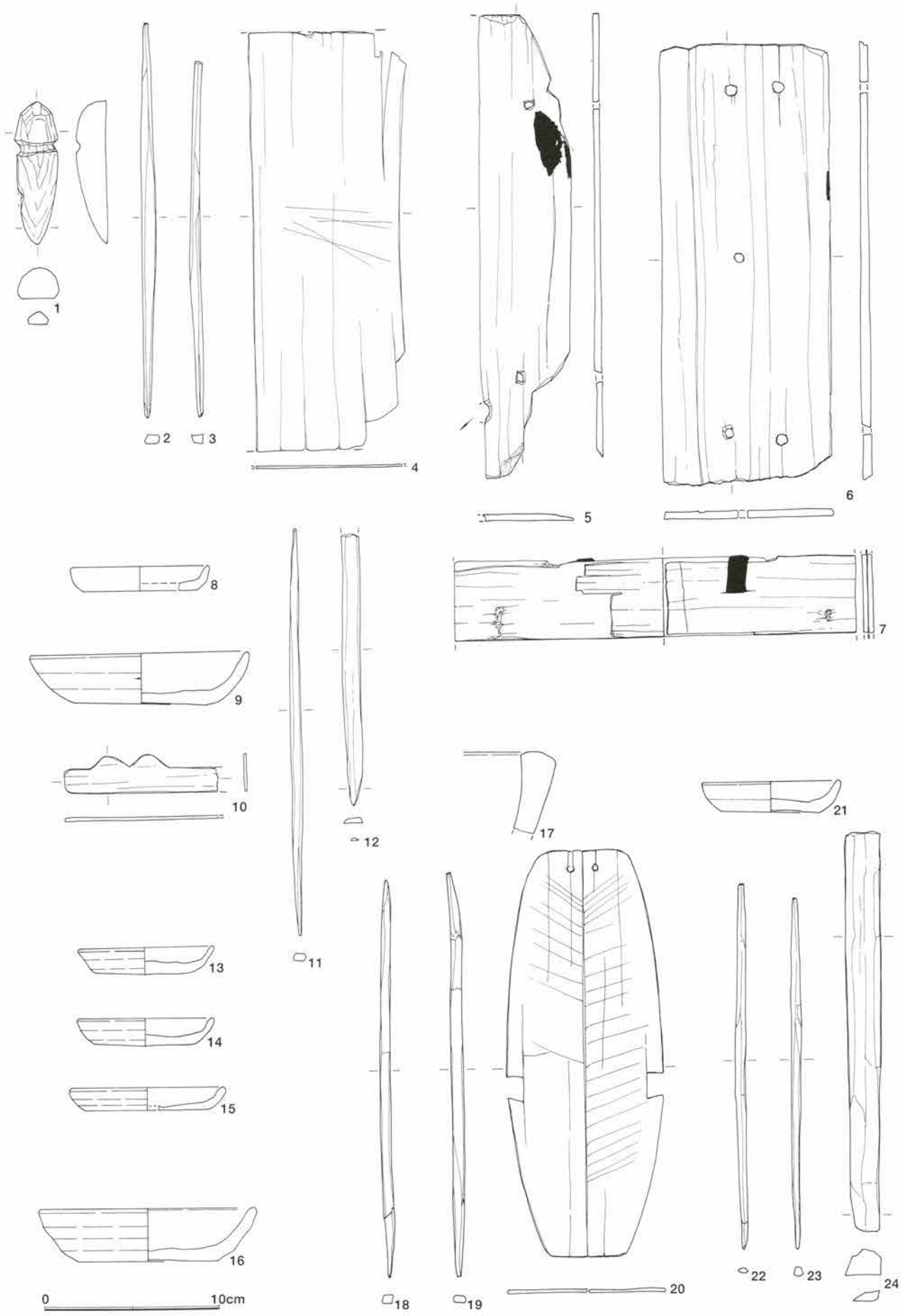


図28　第4面遺構出土遺物（柱穴）

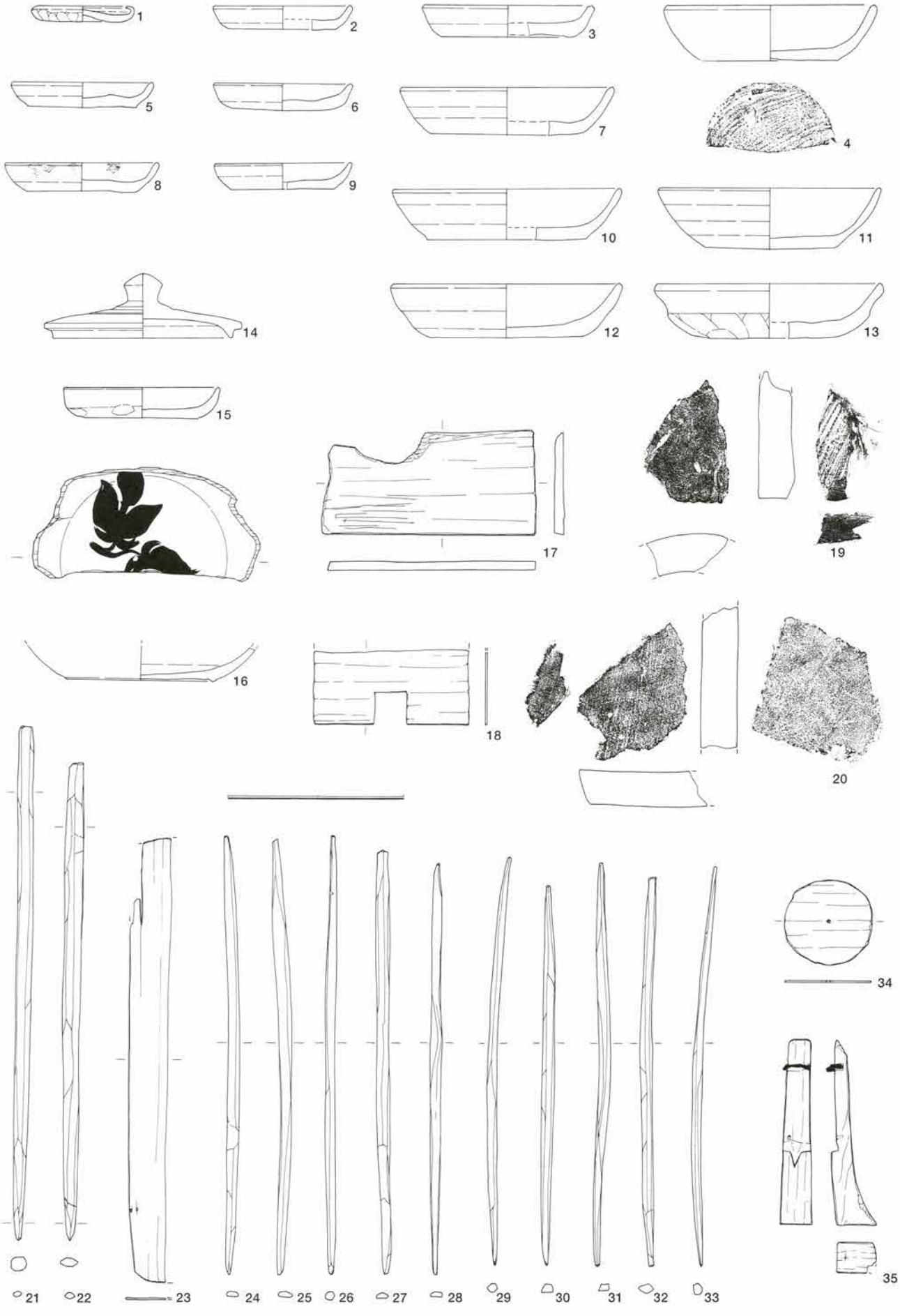


図29　第4面遺構出土遺物（土壙1）

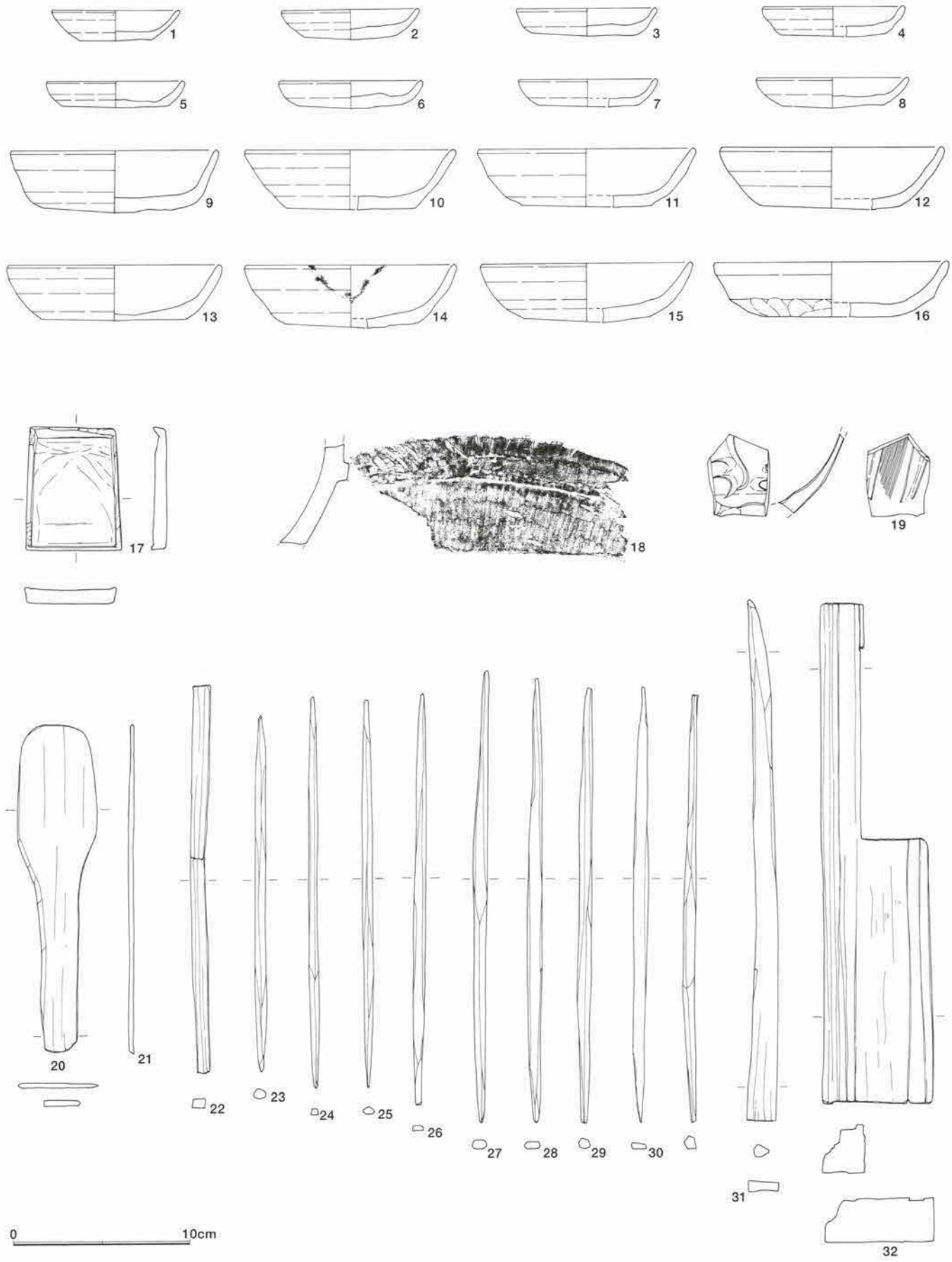


図30　第４面遺構出土遺物（土壙２）

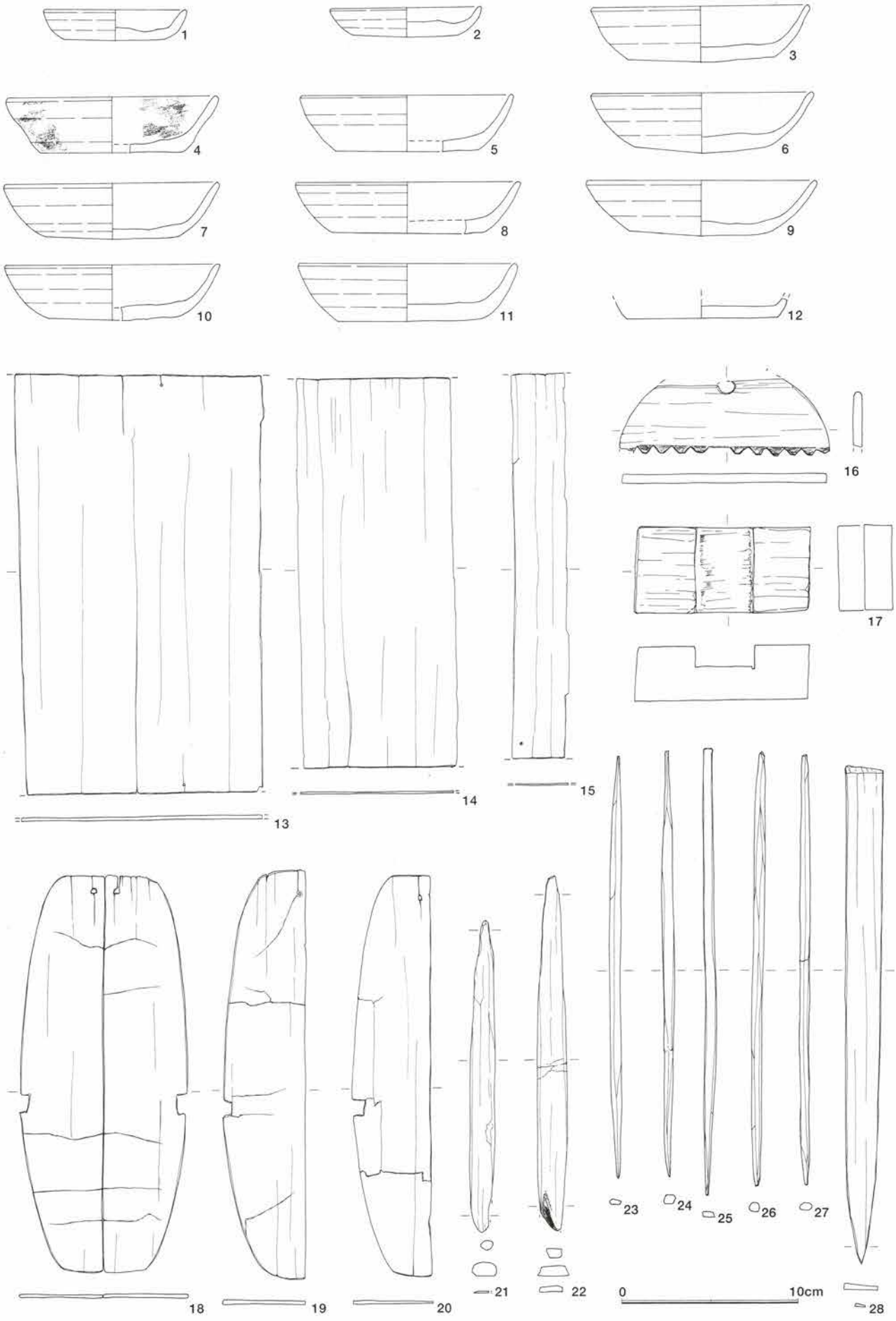


図31　第4面遺構出土遺物（土壙3・4・5）

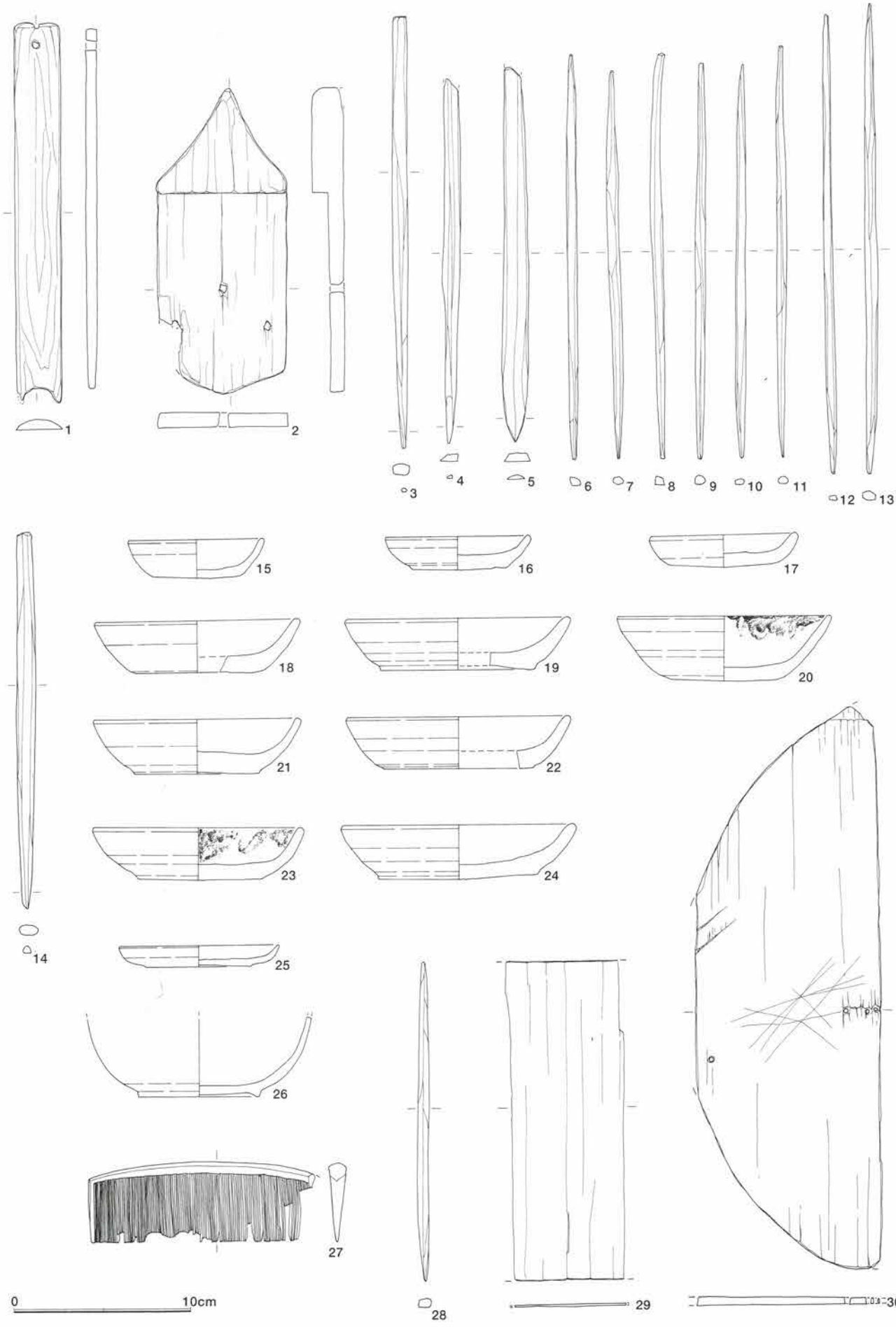


図32　第４面遺構出土遺物（土壙６・10・11）

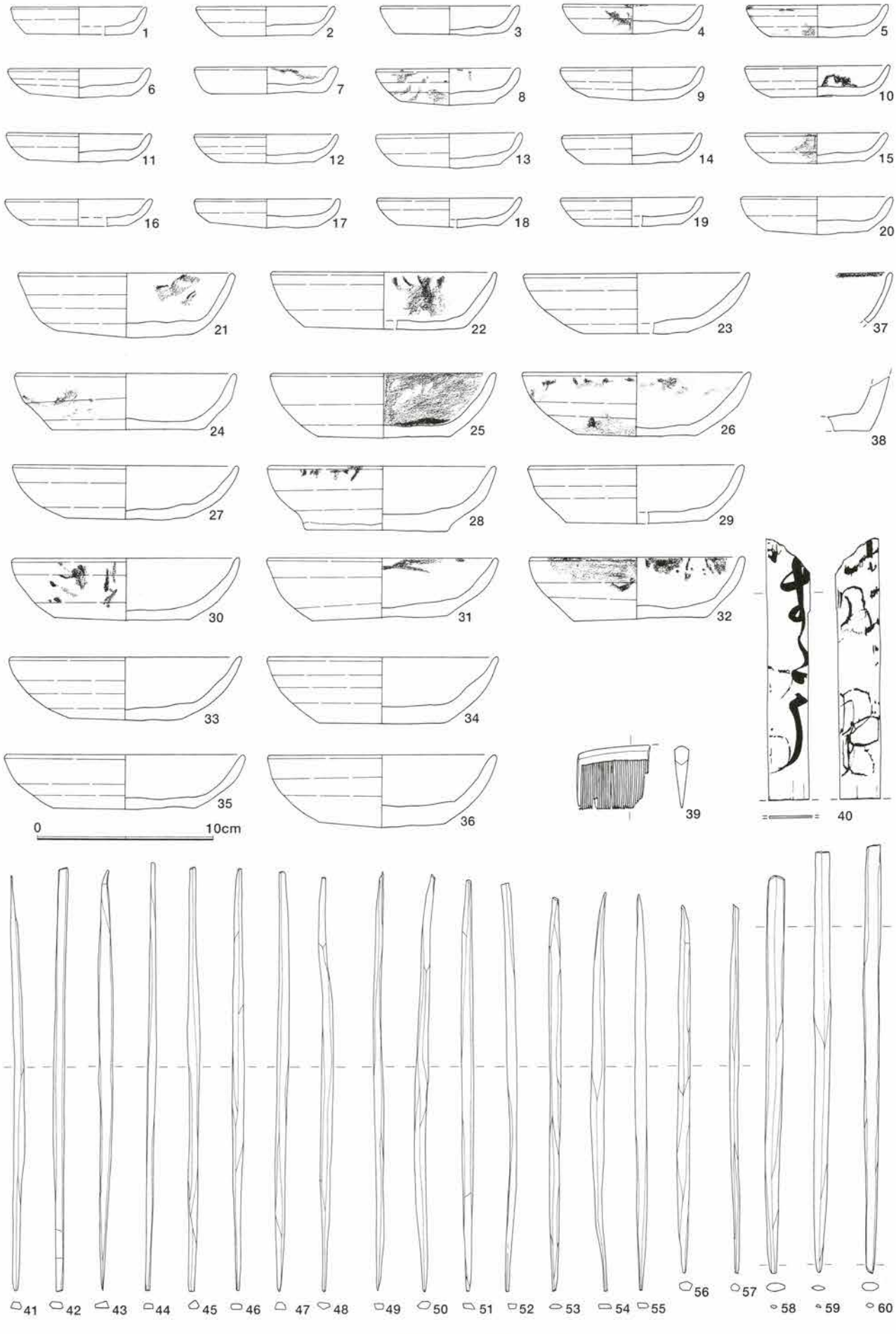


図33　第４面遺構出土遺物（土壙13）

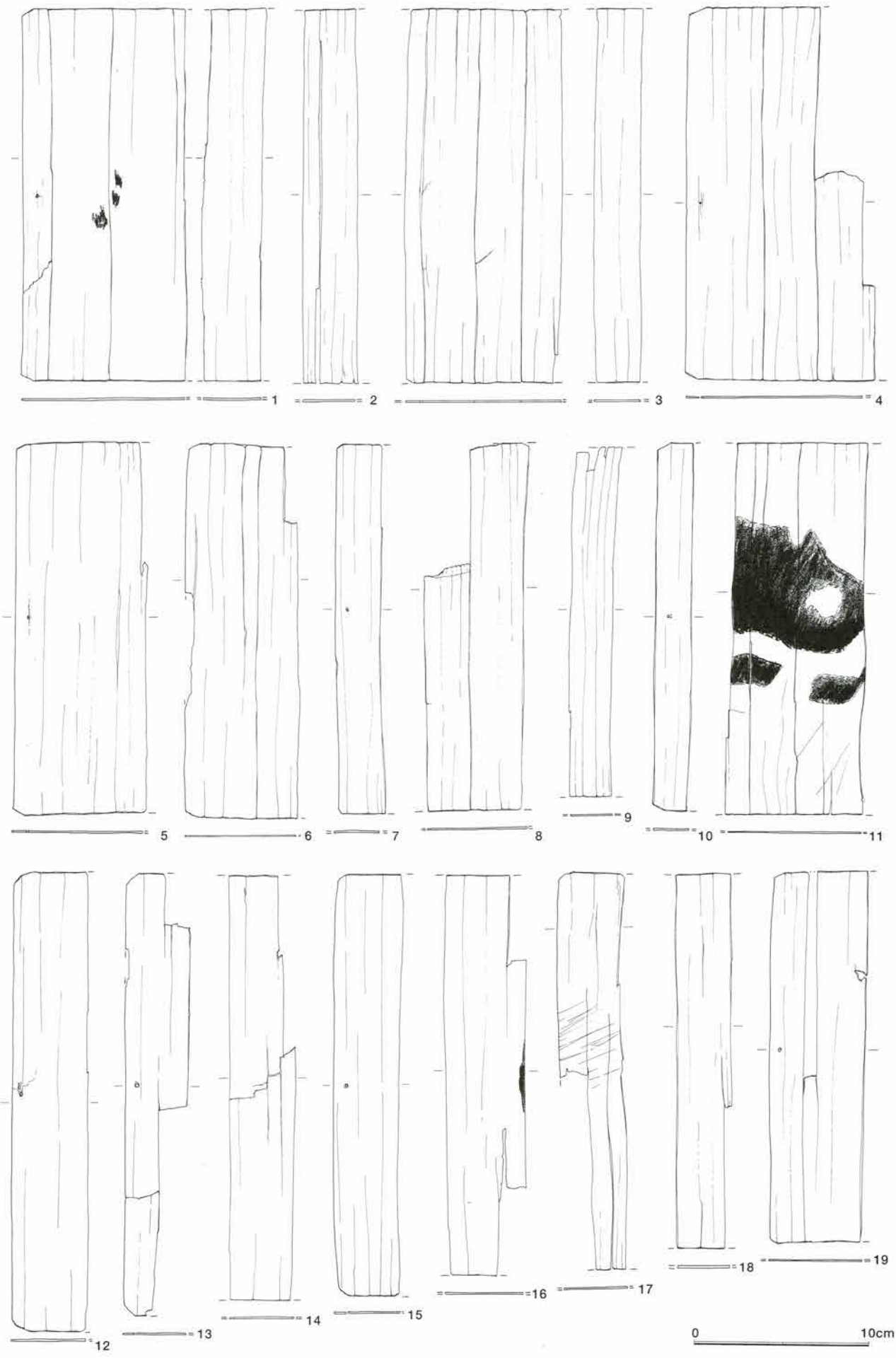


図34　第4面遺構出土遺物（土壙13）

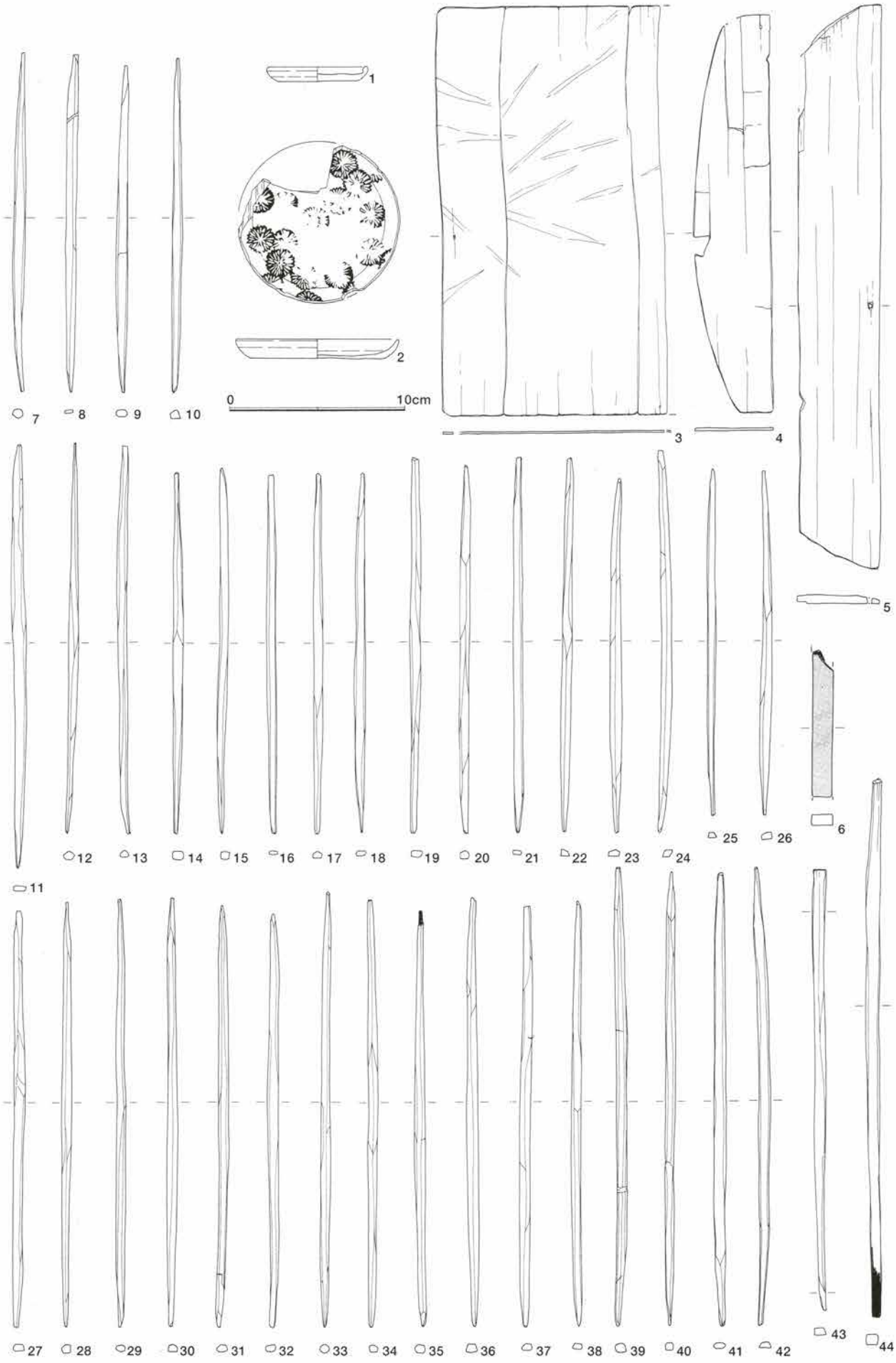


図35　第４面遺構出土遺物（土壙14）

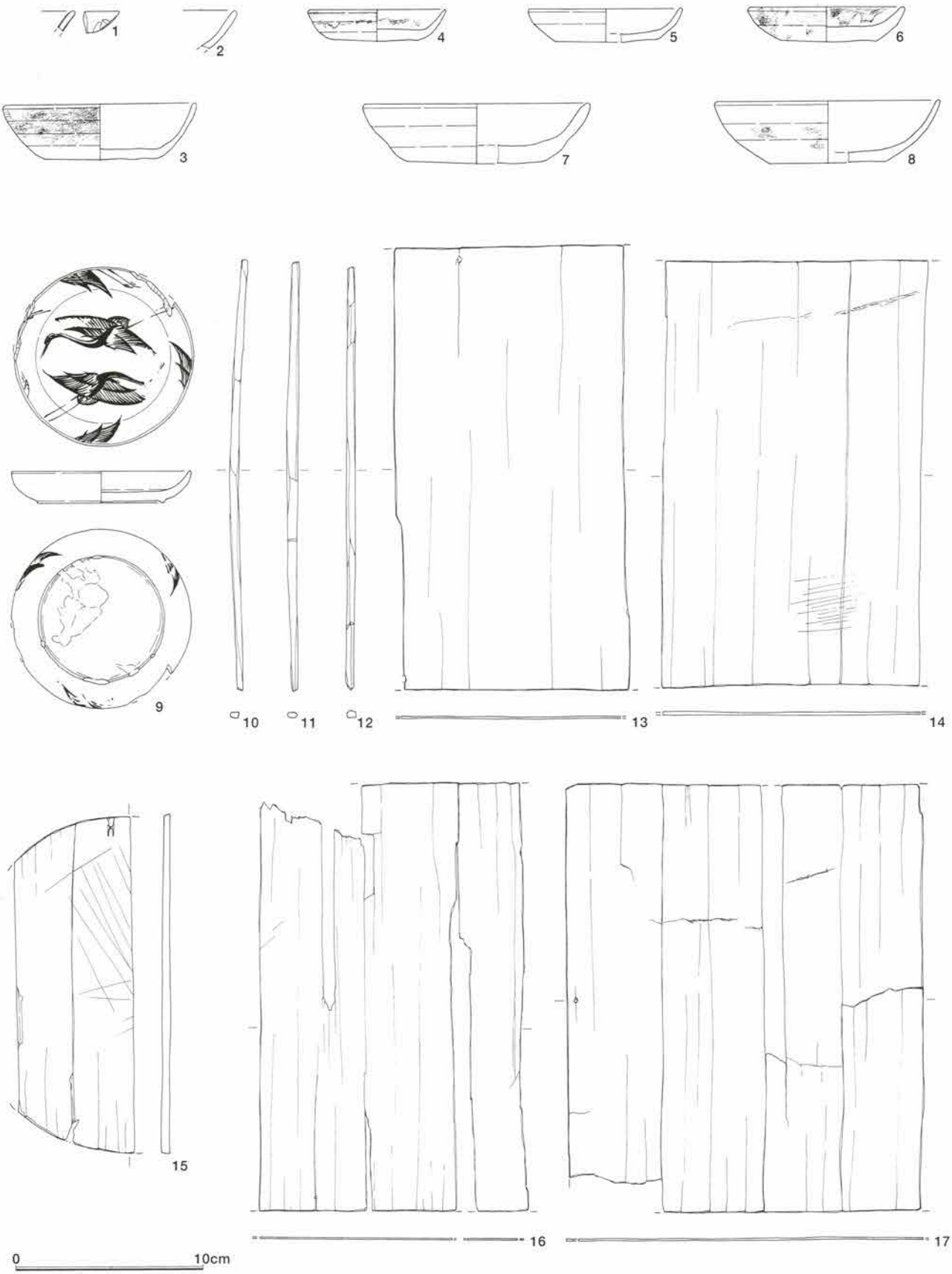


図36　第４面遺構出土遺物（土壙15・16）

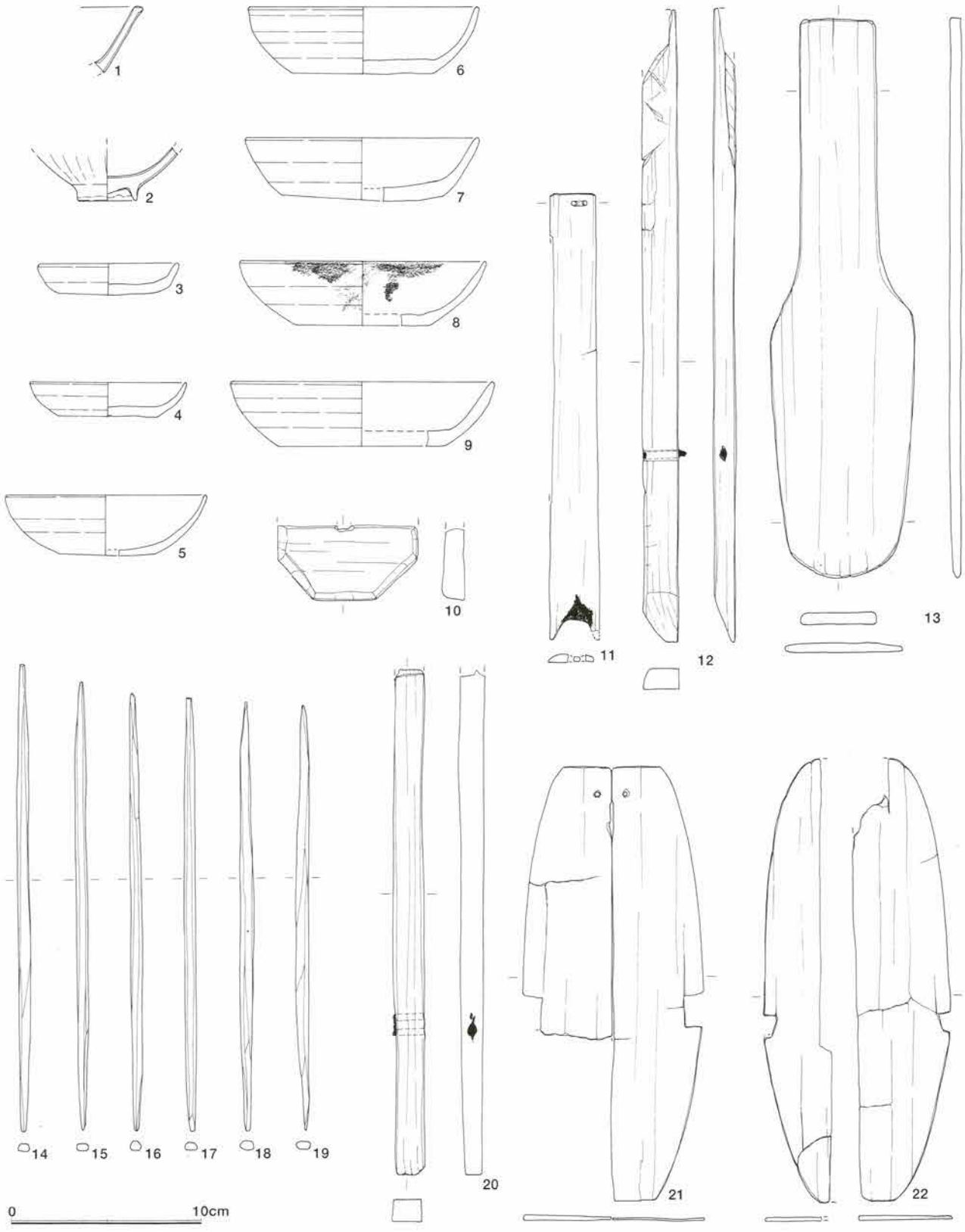


図37　第4面遺構出土遺物（土壙17）

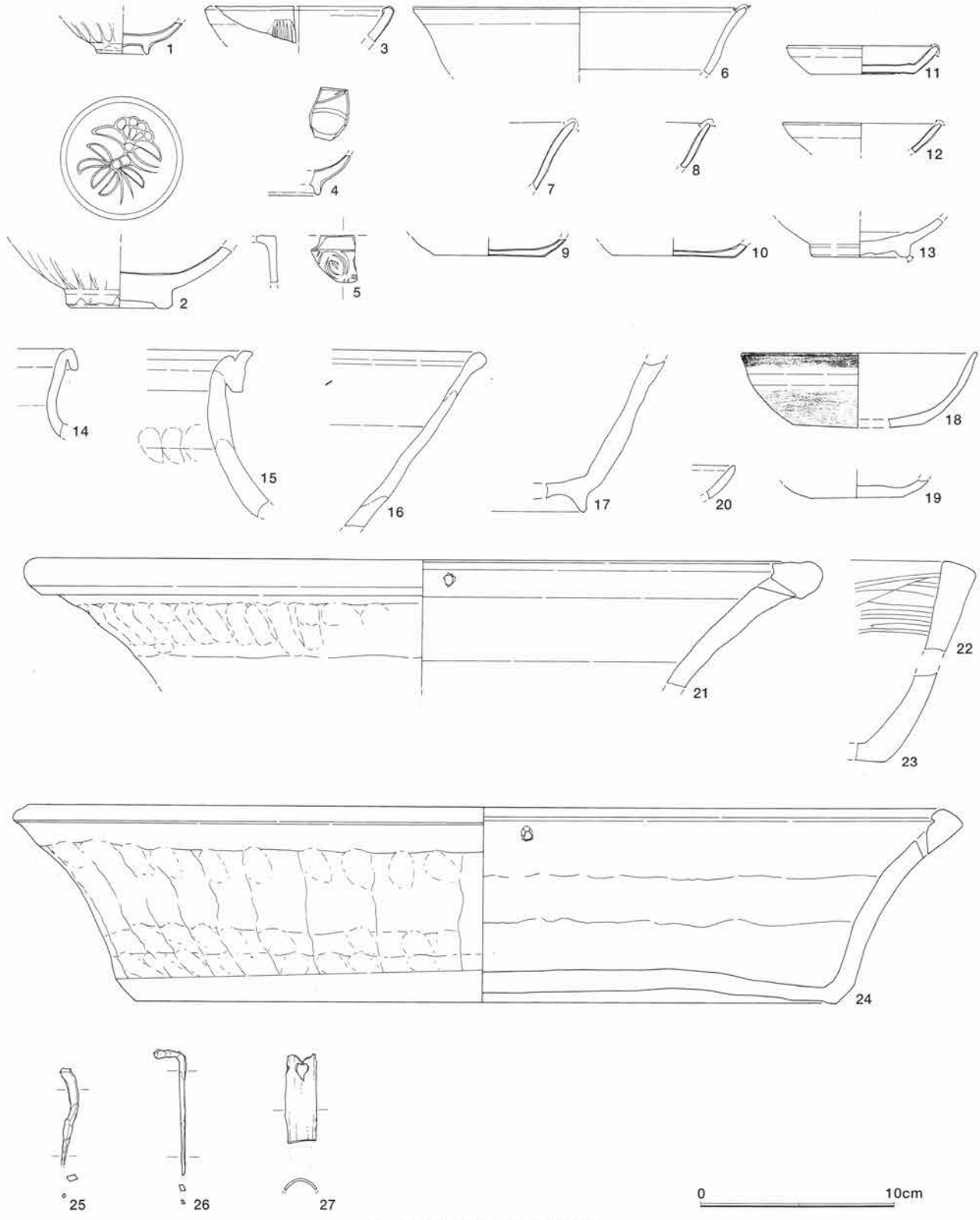


図38　第４面まで出土遺物

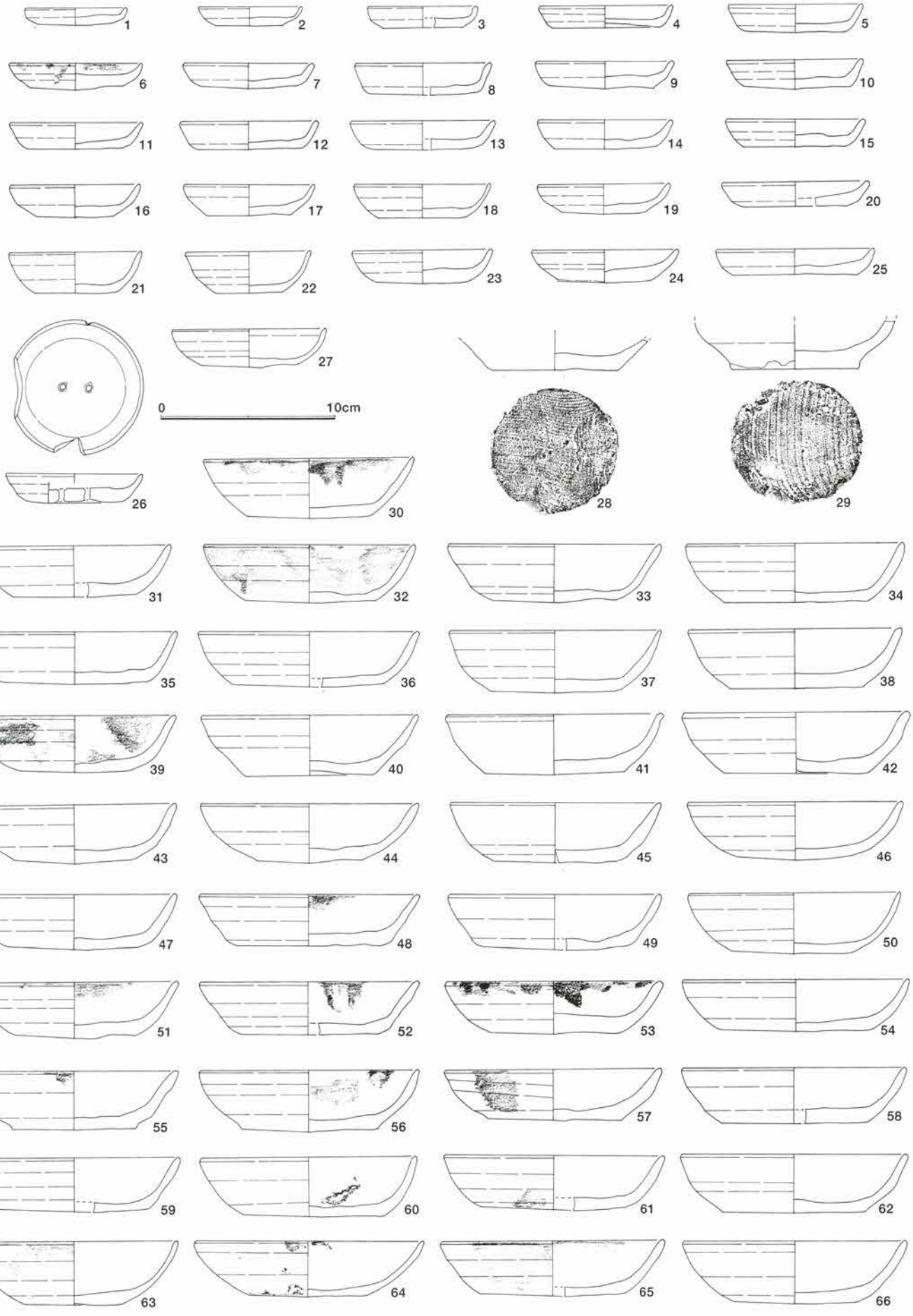


図39　第４面まで出土遺物

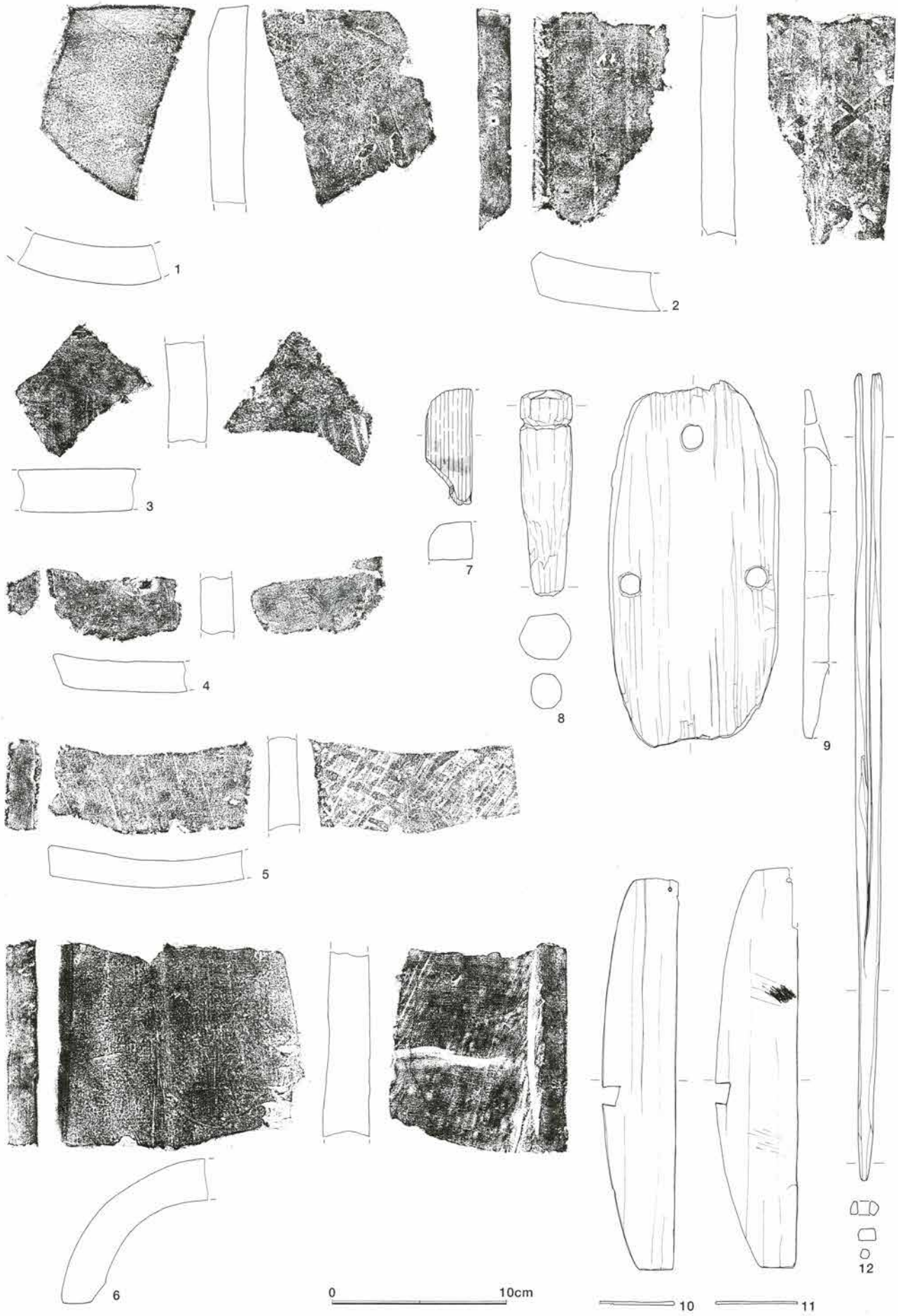


図40　第４面まで出土遺物

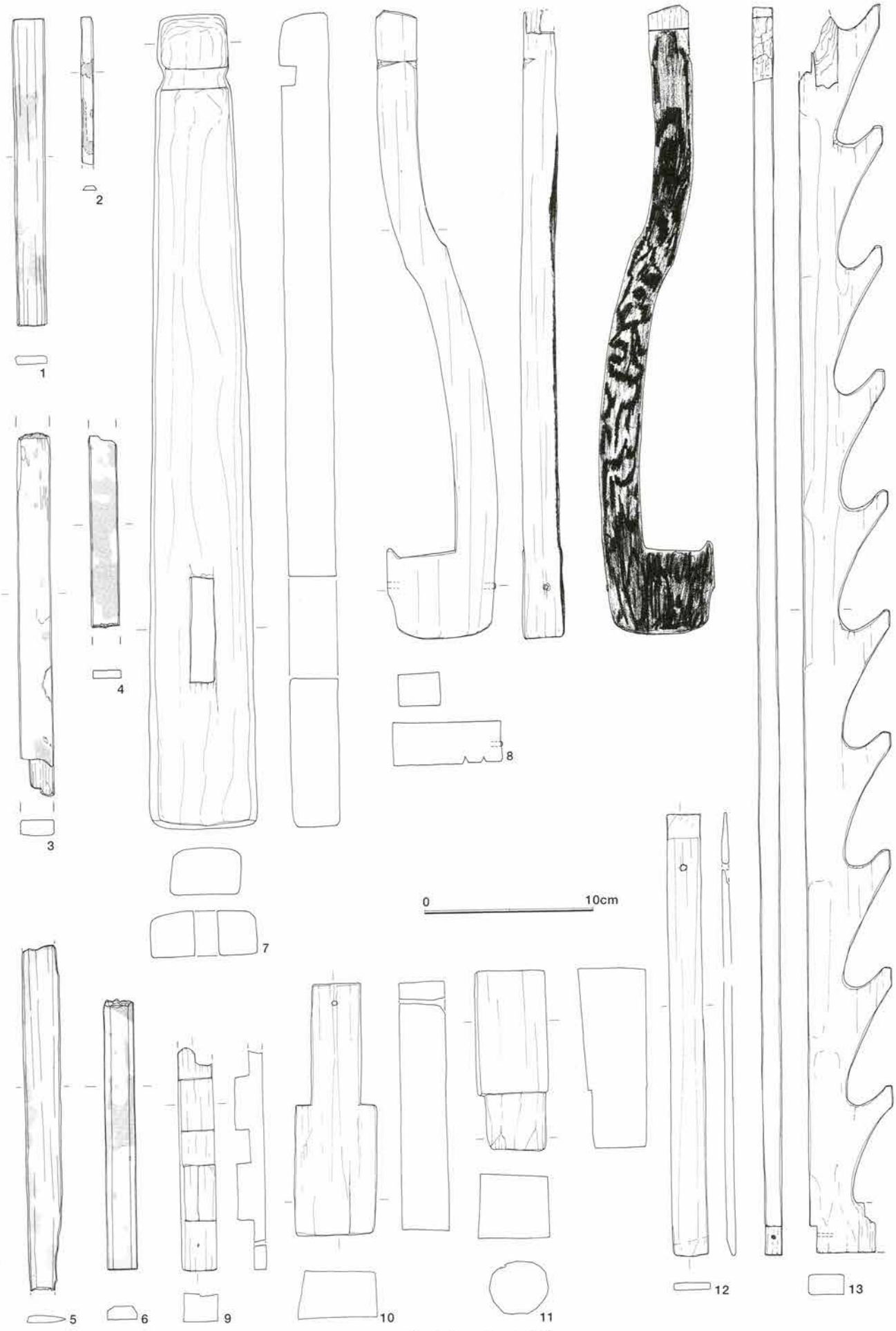


図41　第４面まで出土遺物

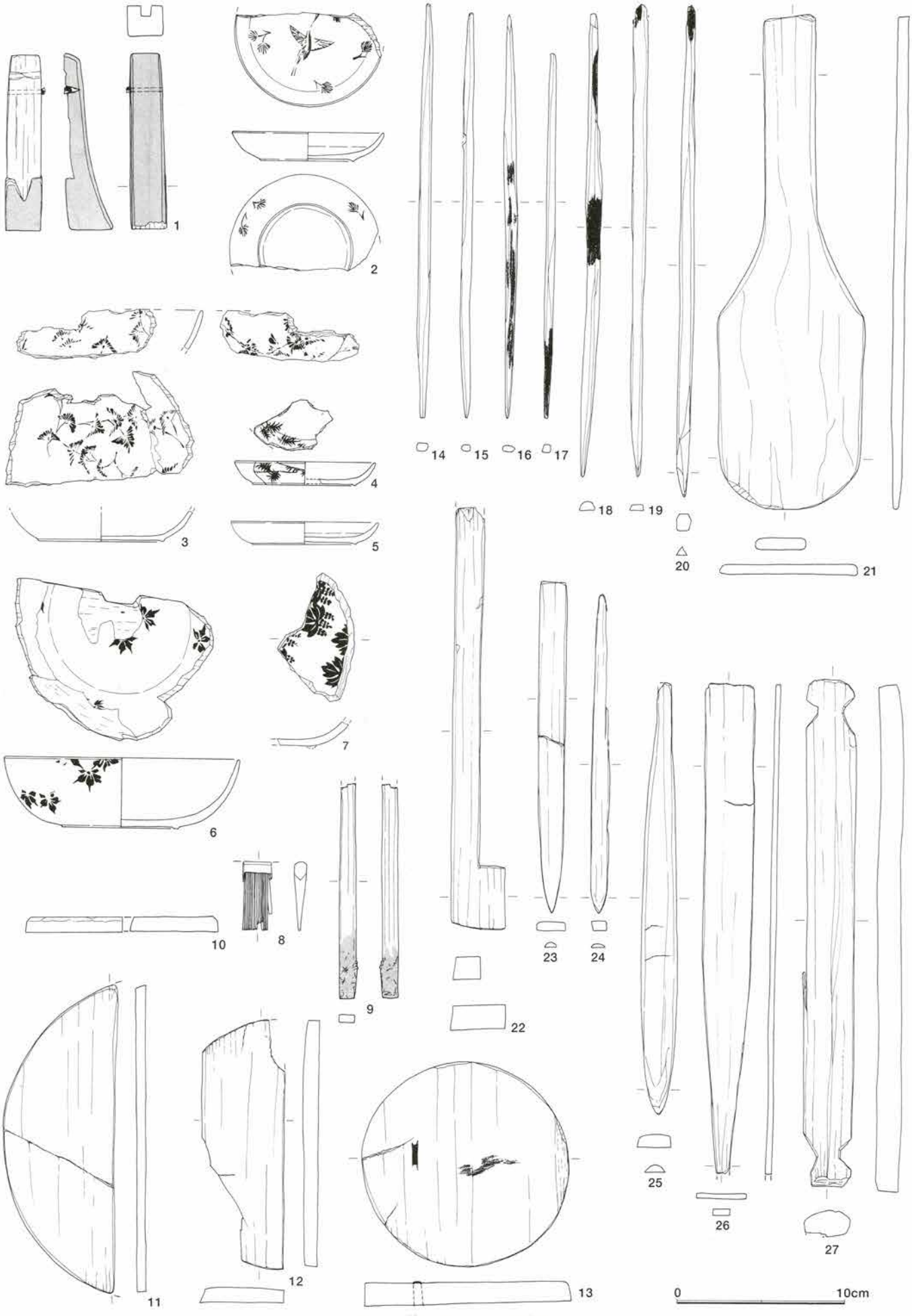


図42　第４面まで出土遺物

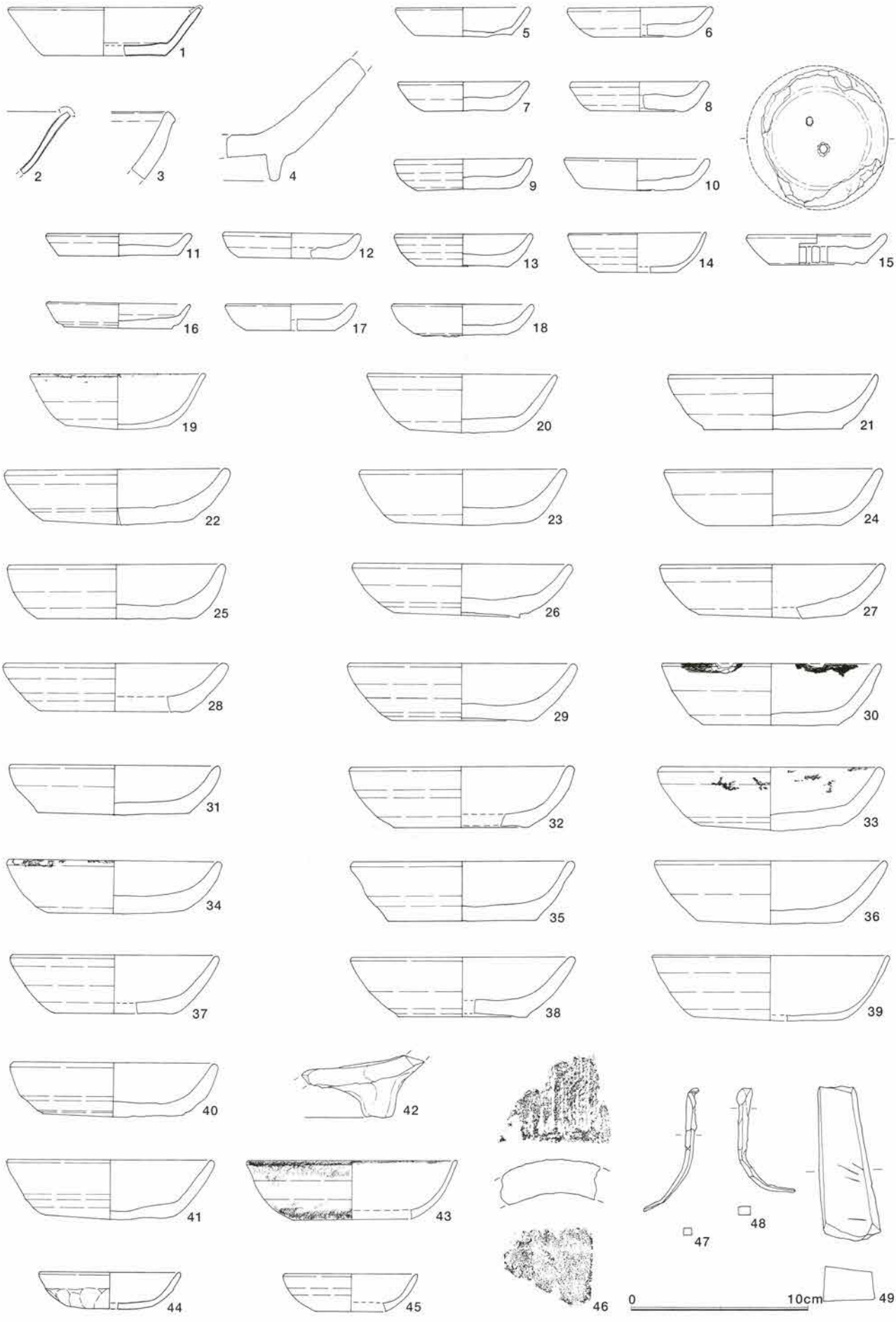

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
0
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
42
41
43
44
45
46
47
48
0
10cm
49

図43　第４面出土遺物

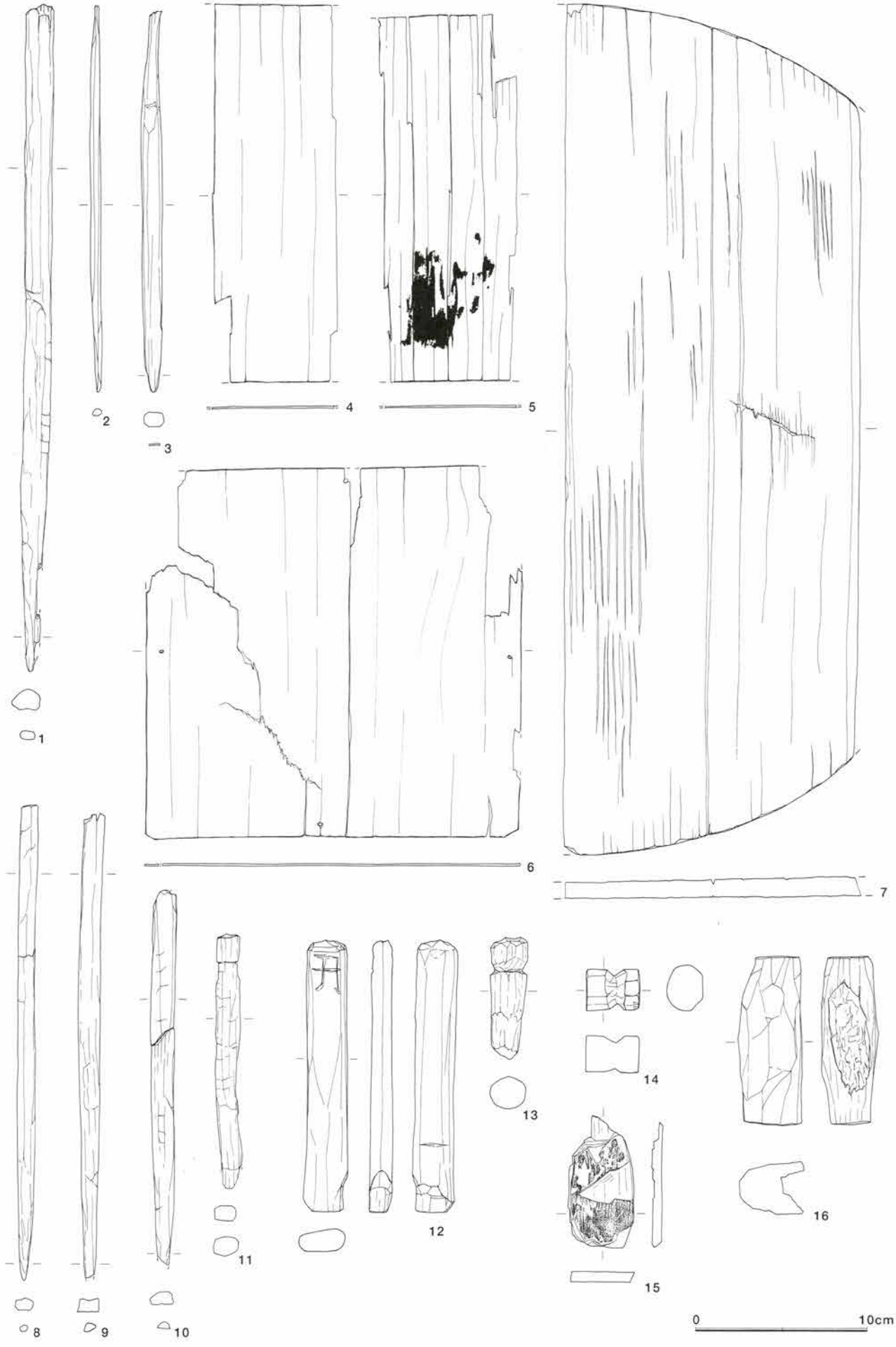


図44　第4面出土遺物

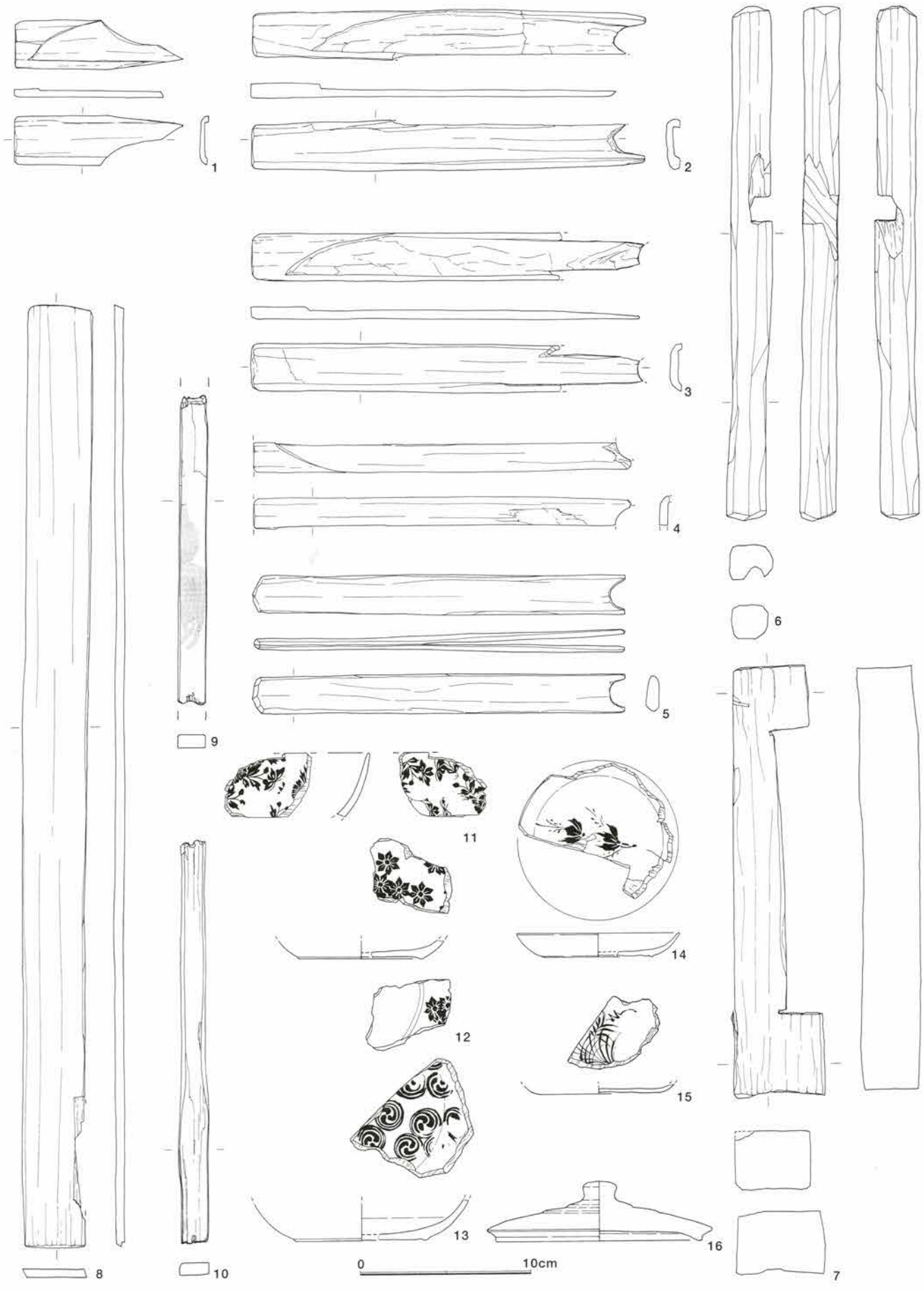


図45　第4面出土遺物

4．第５面の遺構と遺物

ａ．遺構（図22、図版８）

上層の第４面と第５面の間には約50～60cmの厚さで砂が堆積している。細かい貝殻を含むことから海砂を第５面上に敷き詰め第４面の構成土としたものと考えられる。この砂層を掘り下げて検出した第５面では、柱穴、土壙、掘立柱建物、柱穴列、コの字状の板溝が検出された。面の海抜は7.4m～7.5mでほぼ水平である。この面上に地業された砂層を境に第４面ではほとんど見られなかった手捏ね成形のかわらけが第５面から多く見られるようになる。掘立柱建物の東端近くで「謹請南方赤帝赤龍堅牢地神」と墨書された地鎮に関わる内容が書かれた木簡が出土した。

掘立柱建物

A-5・6・7グリッド、四寸角の掘立柱が根元近くで切断され礎板の上に立った状態で５本検出されたものである。柱間は210cm（７尺）掘方が確認できないことから、この掘立柱は第５面が地業され埋められた時に第４面の構成土として厚さ約50～60cmもの砂が入れられた結果、柱が埋め込まれた状態で検出されたものである。規模は東西５間、南北１間以上と考えられ軸方位はおよそN-27°-Eである。

柱穴列１・２

東西Ｂライン、掘立柱建物の南を東西方向に延びる柱穴列が二列ある。柱穴列１は建物の南約100cmの所を東西方向に延びて行く。柱穴列２はほぼ建物の南辺に沿って延びるもので22.5m確認されている。数多くの柱穴が検出されることから、同じ場所で頻繁に塀を建て替えていたものと考えられる。

コの字状の板溝

A-3・4グリッド周辺で検出したもので、薄い板材２枚を平行に幅約25cmに置き、内側に２cm角の杭状の角材を打ち込み固定されていたもので、北辺は東西約６m、東、西辺は南北方向に約２mのコの字状の溝である。東、西辺は東西方向に延びる柱穴列２に接している。柱穴列２を越えて南には延びていない。北辺で軸方位を見るとN-63°-Wである。

土壙

土壙１　１区西端で検出した遺構である。東西190cm、南北125cm、深さ26cmの隅丸方形の土壙である。

土壙２　２区で検出した遺構である。東西190cm、南北160cm、深さ30cm。腐植土を多く含んでいた。

ｂ．出土した遺物（図47～52　表２　図版19～21・31・33）

第５面・５面までの遺物

A-7グリッド付近、５面で出土した木簡があげられる。長さ28.5cm、幅３cm、厚さ0.5cmで頭は圭頭状に削られている。表面には「謹請南方赤帝赤龍堅牢地神」と丁寧な字体で墨書され、裏面には薄れて判読出来ないがひらがな風に４文字ほど墨書され、地鎮に関わる木簡と考えられる【附編呪符木簡類似文献史料】。

この他にかわらけでは、第４面ではほとんど出土していない手捏ね成形の製品が多く見られるようになり、青磁碗、青白磁蓋、常滑甕・片口鉢、瓦、瓦器、火鉢、漆器、木製品等が出土している。

柱穴列

柱穴列１　青磁碗、手捏ねかわらけ、常滑甕口縁部片（６ａ型式）、木製品が出土する。

柱穴列２　青磁碗、青白磁蓋、火鉢と轆轤かわらけの中に手捏ねかわらけが見られるようになる。

土壙

土壙１　かわらけの他、漆器皿、箸、箆、折敷、しゃもじ、金剛草履芯などの木製遺物が主に出土。

コの字状遺構　轆轤と手捏ねかわらけと常滑甕口縁部片（６ａ型式）が出土している。

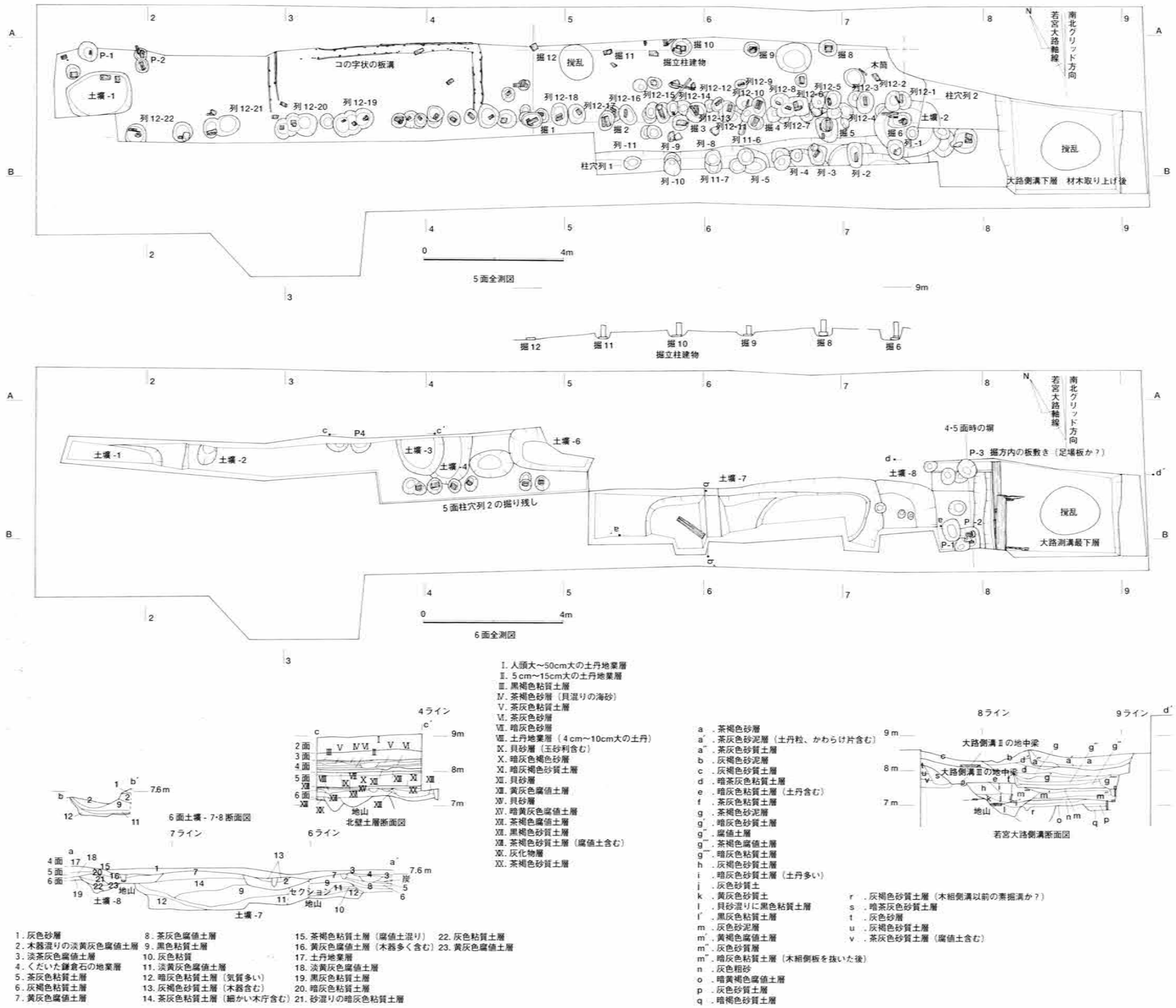


図46　第5面・第6面全測図及び土層断面図

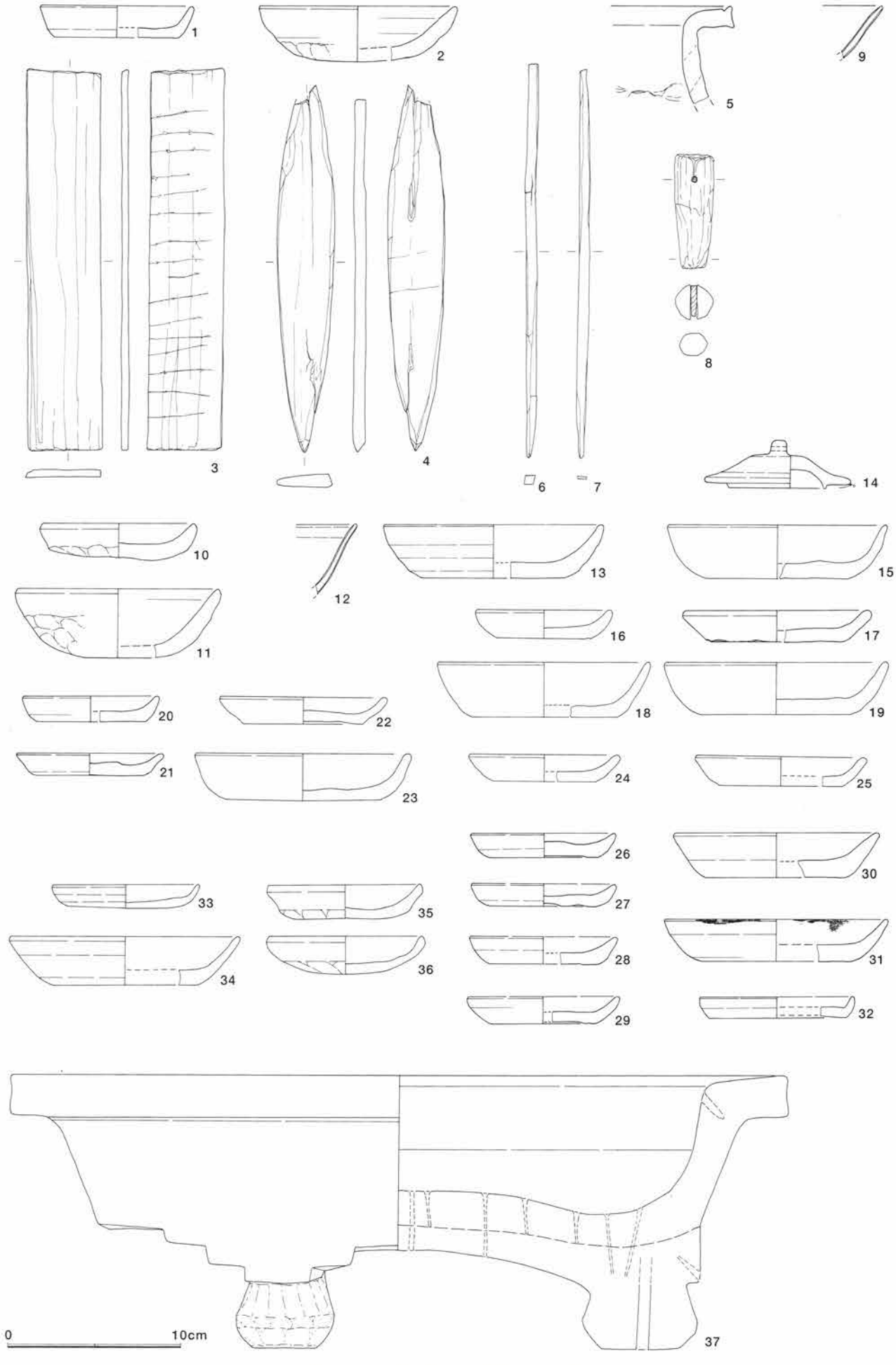


図47　第５面遺構出土遺物（柱穴列）

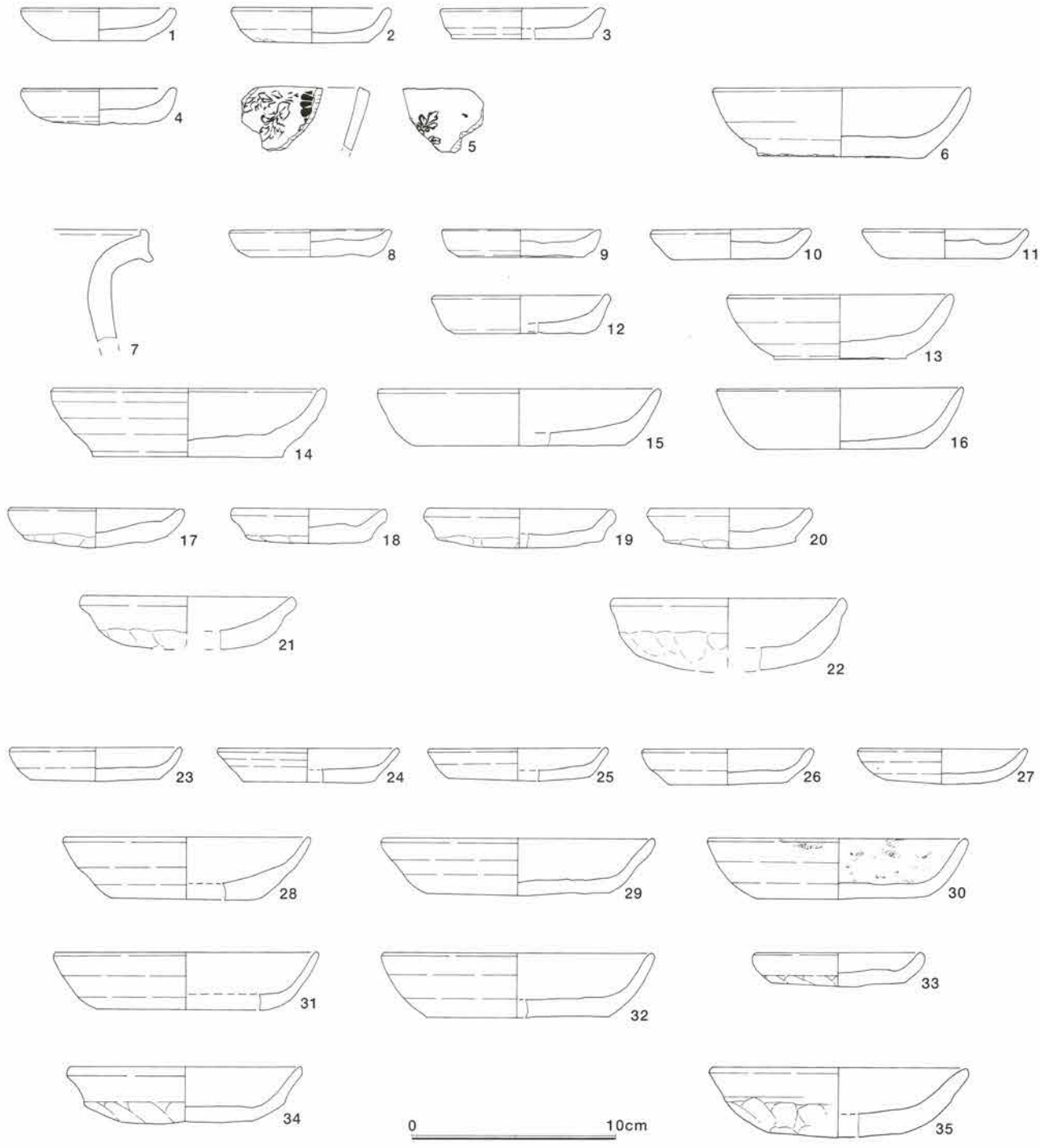


図48　第５面遺構出土遺物（Ｐ１・２・コの字状板溝・土壙１・２）

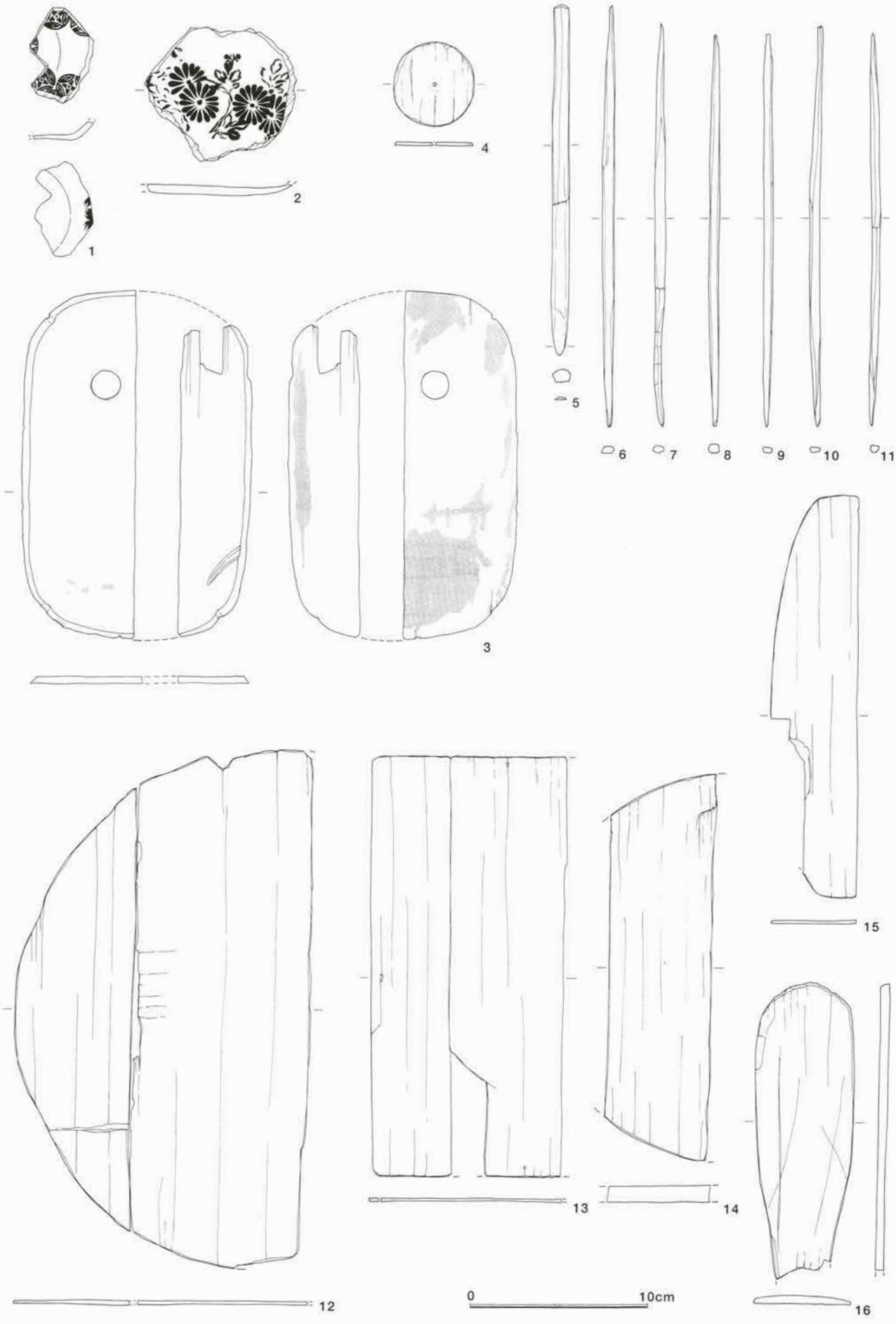


図49　第５面遺構出土遺物（土壙１）

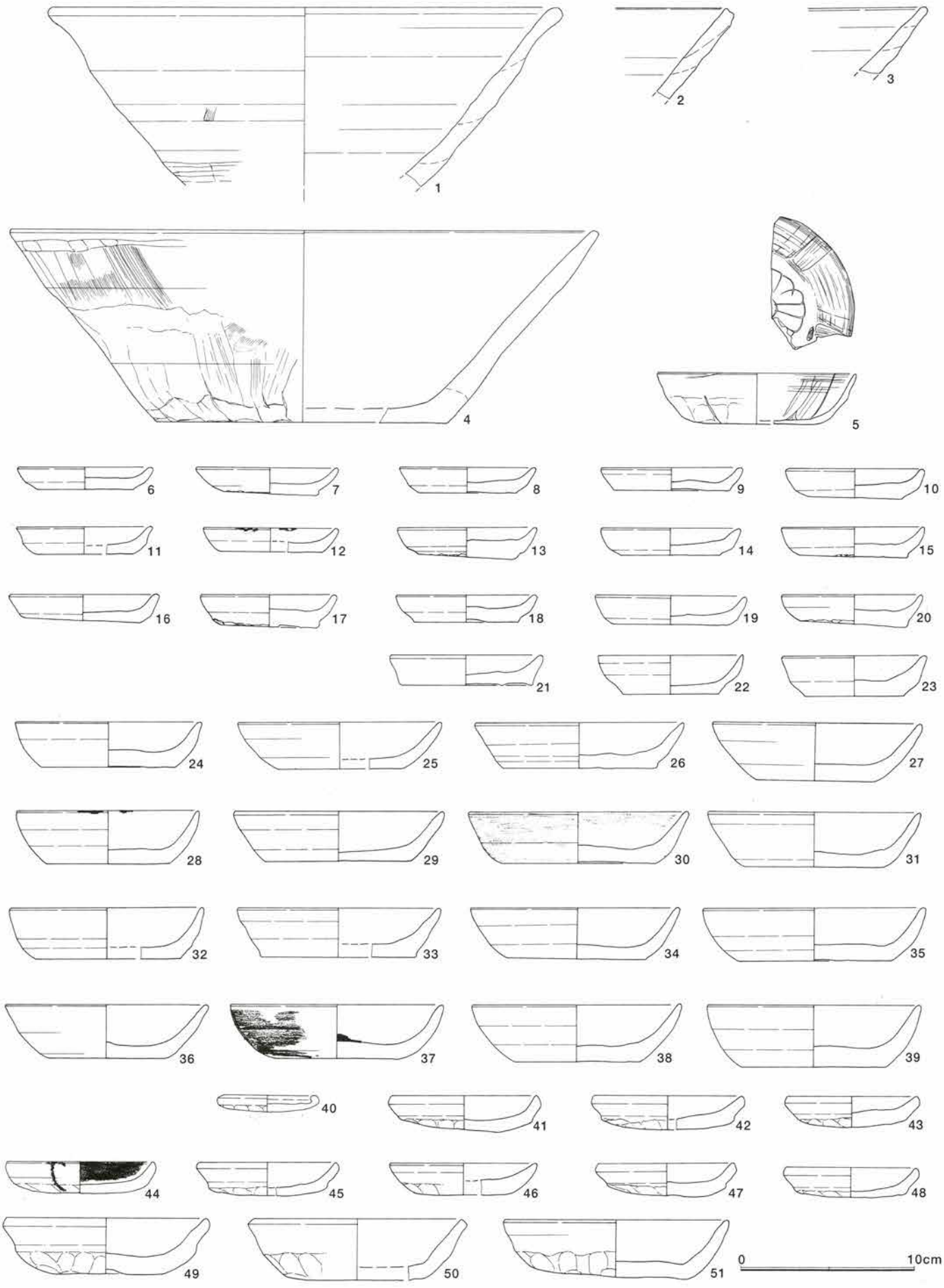

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
0
10cm

図50　第5面出土遺物

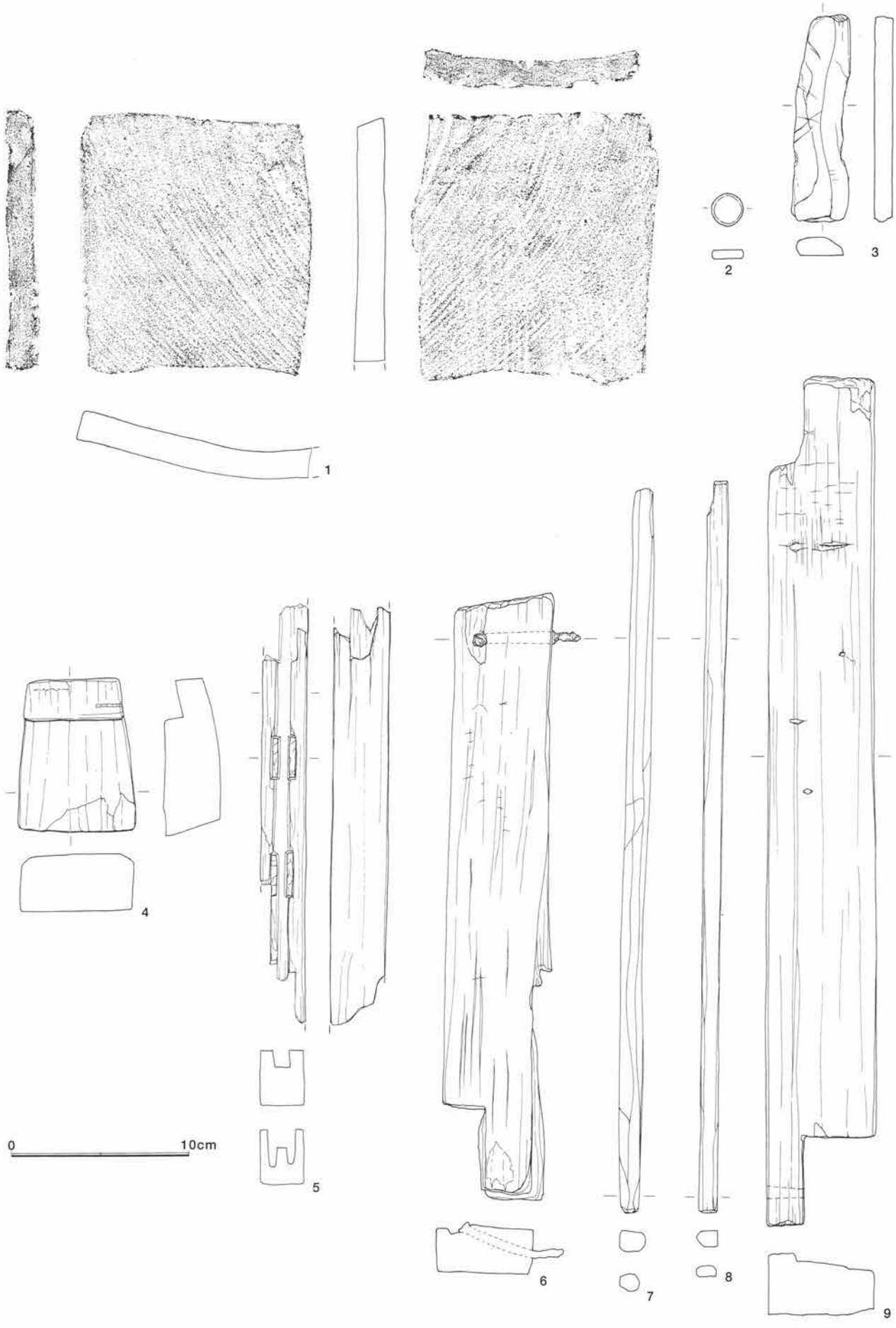


図51　第5面出土遺物

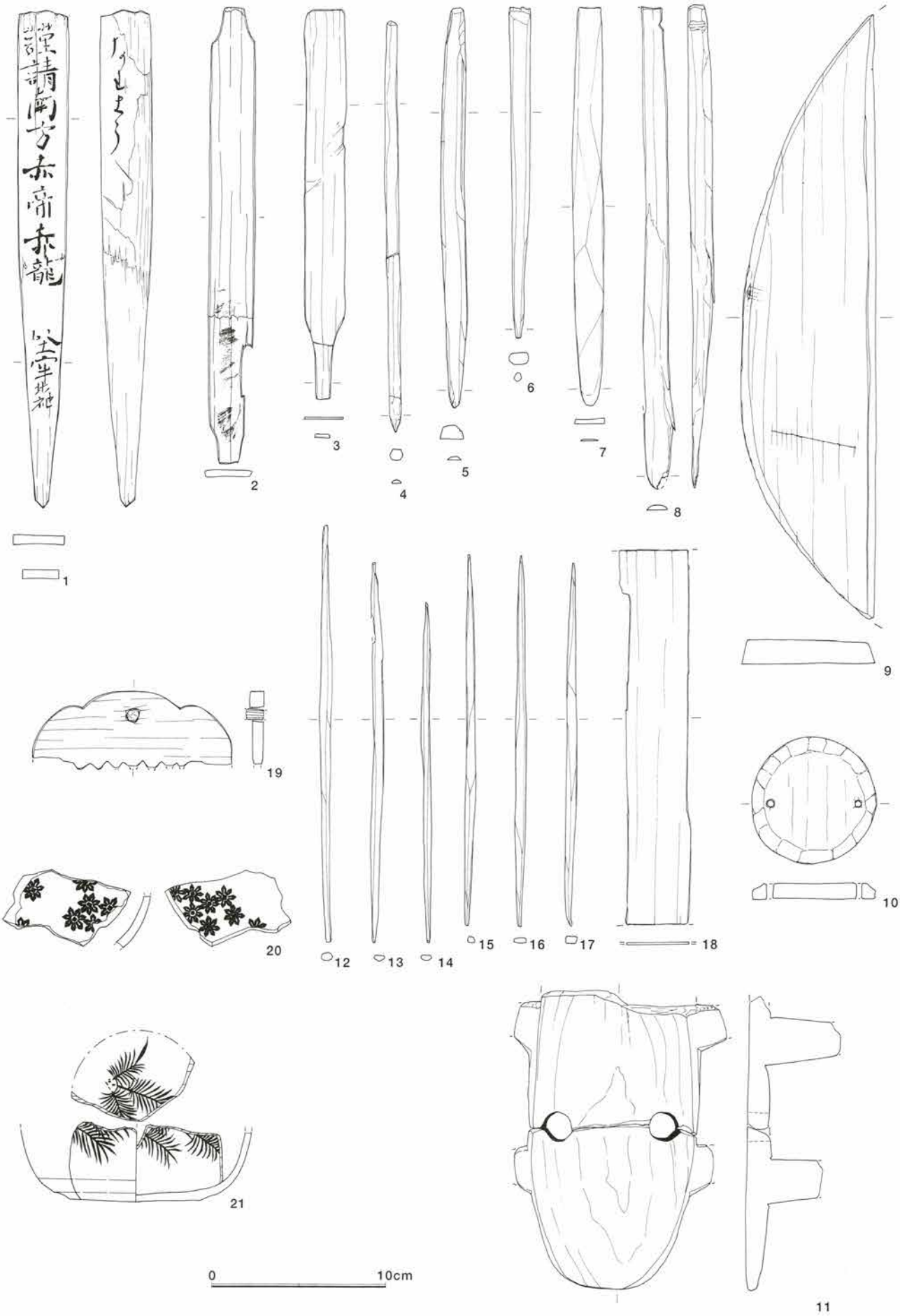


図52　第5面出土遺物

5．第6面の遺構と遺物

a．遺構（図22、図版9）

第6面では柱穴、土壙、落ち込み、若宮大路側溝（最下層）が検出されている。調査範囲が狭まったせいもあるが、柱穴は東西方向の柱穴列、第5面の柱穴列1の掘り残し以外ほとんど検出されていない。唯一、若宮大路側溝に沿った南北方向の柱穴が側溝際で検出されている。その他は大小の土壙が占めている。第2・3面で確認された大規模な礎石建物はなく、空閑地もしくは屋敷地の裏手の感がある。基本は中世地山の黒褐色粘質土層を掘り込んでいる。海抜は6m～7.2mである。

土壙

土壙1　東西250cm以上、南北不明、深さ25cm。

土壙2　東西55cm、南北50cm、深さ28cm。

土壙3　東西84cm、南北100cm以上、深さ61cm。

土壙4　東西100cm以上、南北140cm以上、深さ30cm。

土壙5　東西130cm、南北80cm、深さ36cm。

土壙6　東西248cm、南北120cm、深さ67cm。

土壙7　東西650cm、南北150cm以上、深さ115cm。

土壙8　東西150cm以上、南北150cm以上、深さ30cm。

土壙7・8は中に腐食土層を含み多くの木製遺物が出土している。

若宮大路側溝

中世地山上層の黒褐色粘質土層は粘質土でよく締まっているが、下層は軟弱な明茶褐色砂質土層で脆く湧水で泥化する。当時、大路側溝の掘削時にも溝の肩口が崩れたものと思われる。足場を確保するために板材を溝掘方脇に敷き詰めていた。最下層で地山の落ち込みと断面だけの観察だが、地山を掘り込んだ南北方向の溝が存在しそうであるが、湧水と軟弱な地山のため確認は出来ていない。

b．出土した遺物（図53～64　表2　図版22～27・31・32）

第6面・6面までの遺物

轆轤成形品と手捏ね成型品が半々位の割合で出土、また永福寺Ⅰ期瓦、渥美甕が若干入っている。常滑の捏鉢は片口Ⅱ類、甕は5型式のもの、腐食土層中から多くの木製遺物（漆器皿・椀、しゃもじ、将棋の駒、下駄や曲げ物底板の他に多くの用途不明部材）が出土している。

柱穴1・3

手捏ねかわらけ、刀子鞘、釘等が出土している。

土壙7・8

数多くの手捏ねかわらけ、木製品（箸・しゃもじ・折敷・下駄・糸巻き・笊・漆器椀・櫛）等が腐食土層中から出土している。

（福田）

【註5】『蒙古襲来絵詞』「日本の絵巻13」p51・52　中央公論社　1988年4月

【註6】『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告6』北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目265番3地点　1990年3月

【註7】『長屋王邸宅と木簡』「木簡」p26・49　国立奈良文化財研究所奈文研　H3．1．10　吉川弘文館

【註8】『失われゆく番匠の道具と儀式』国立歴史民族博物館　1996年7月

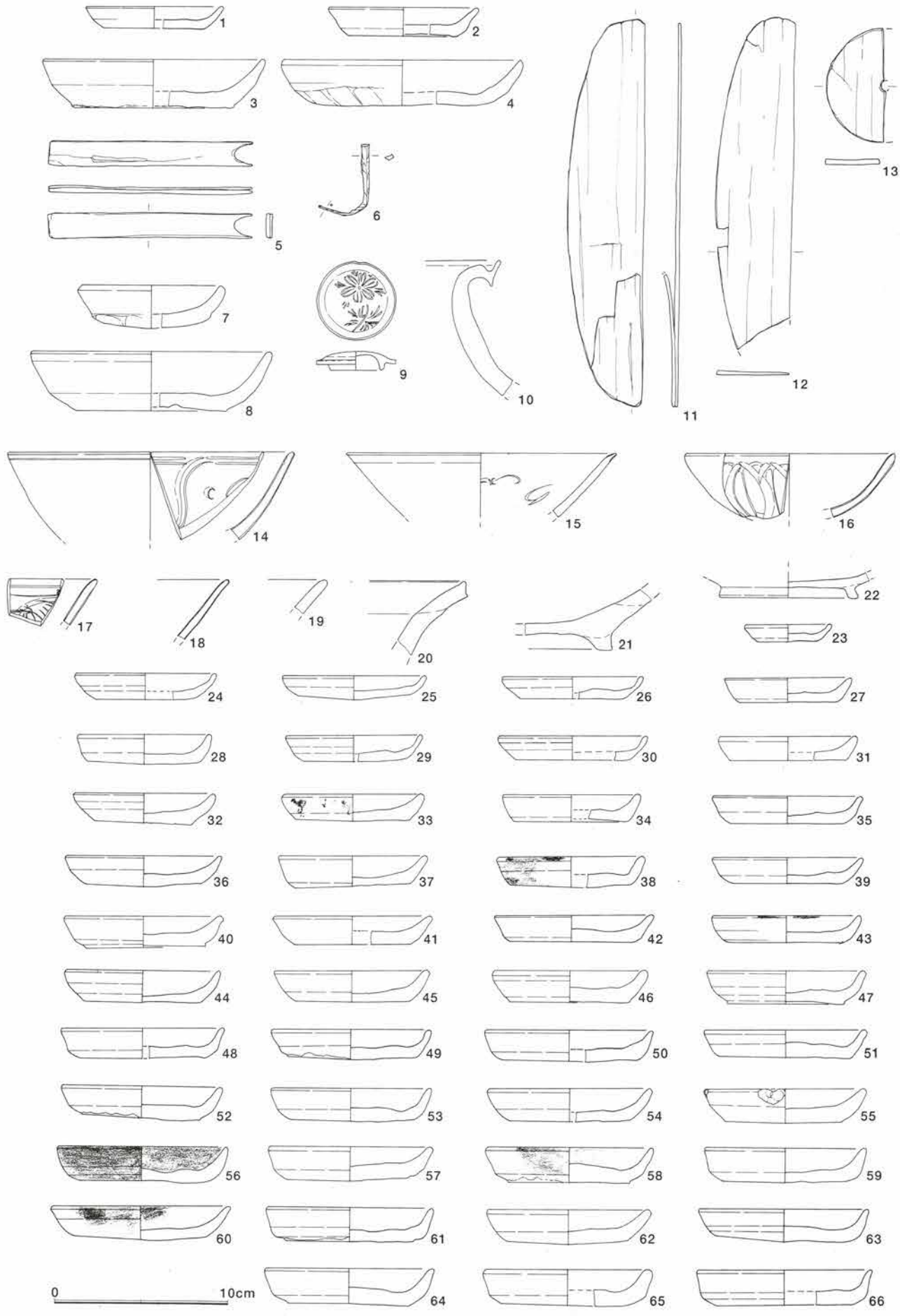


図53　第6面遺構出土遺物（柱穴・土壙1・2・6・7・8）

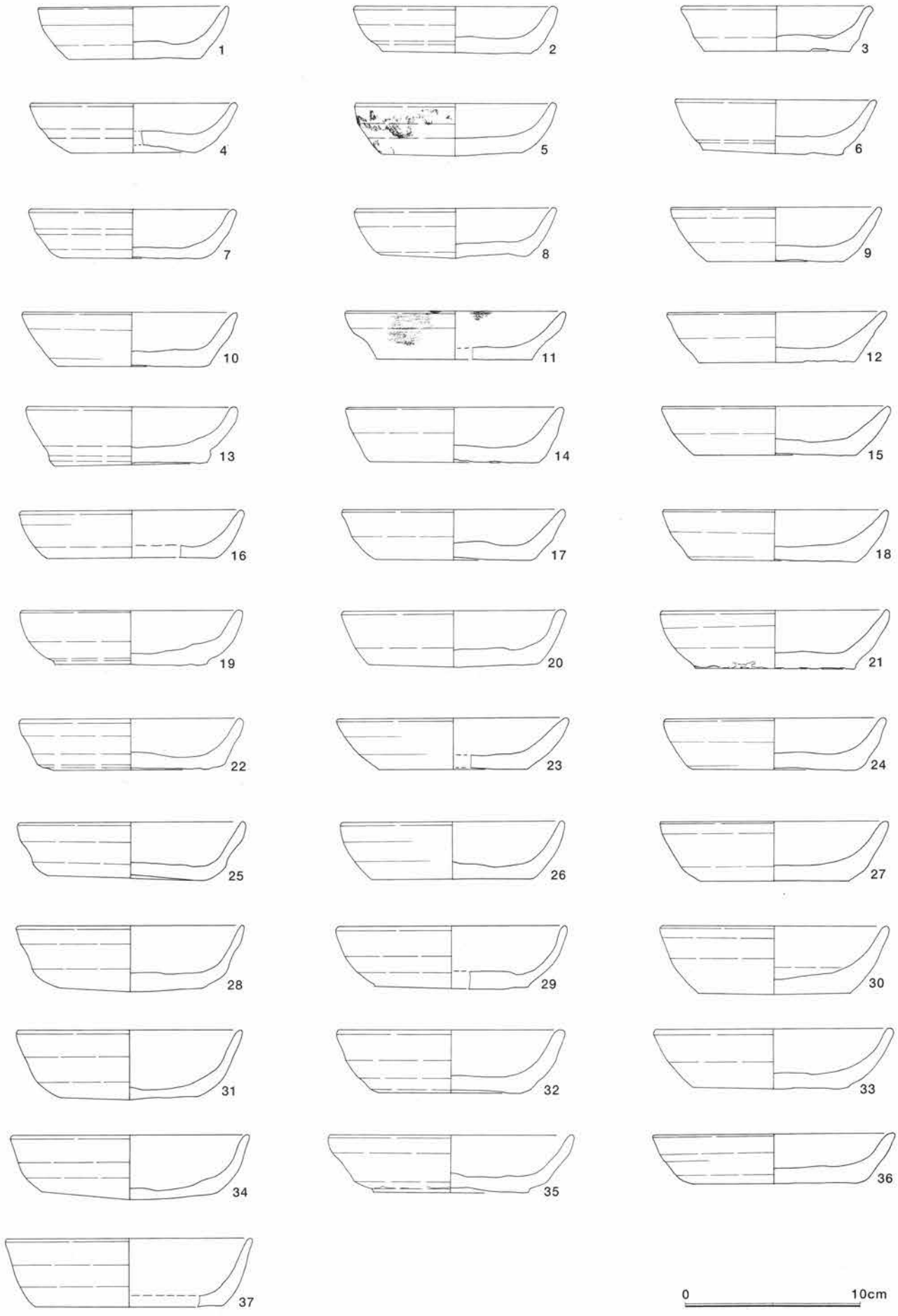


図54　第6面遺構出土遺物（土壙7・8）

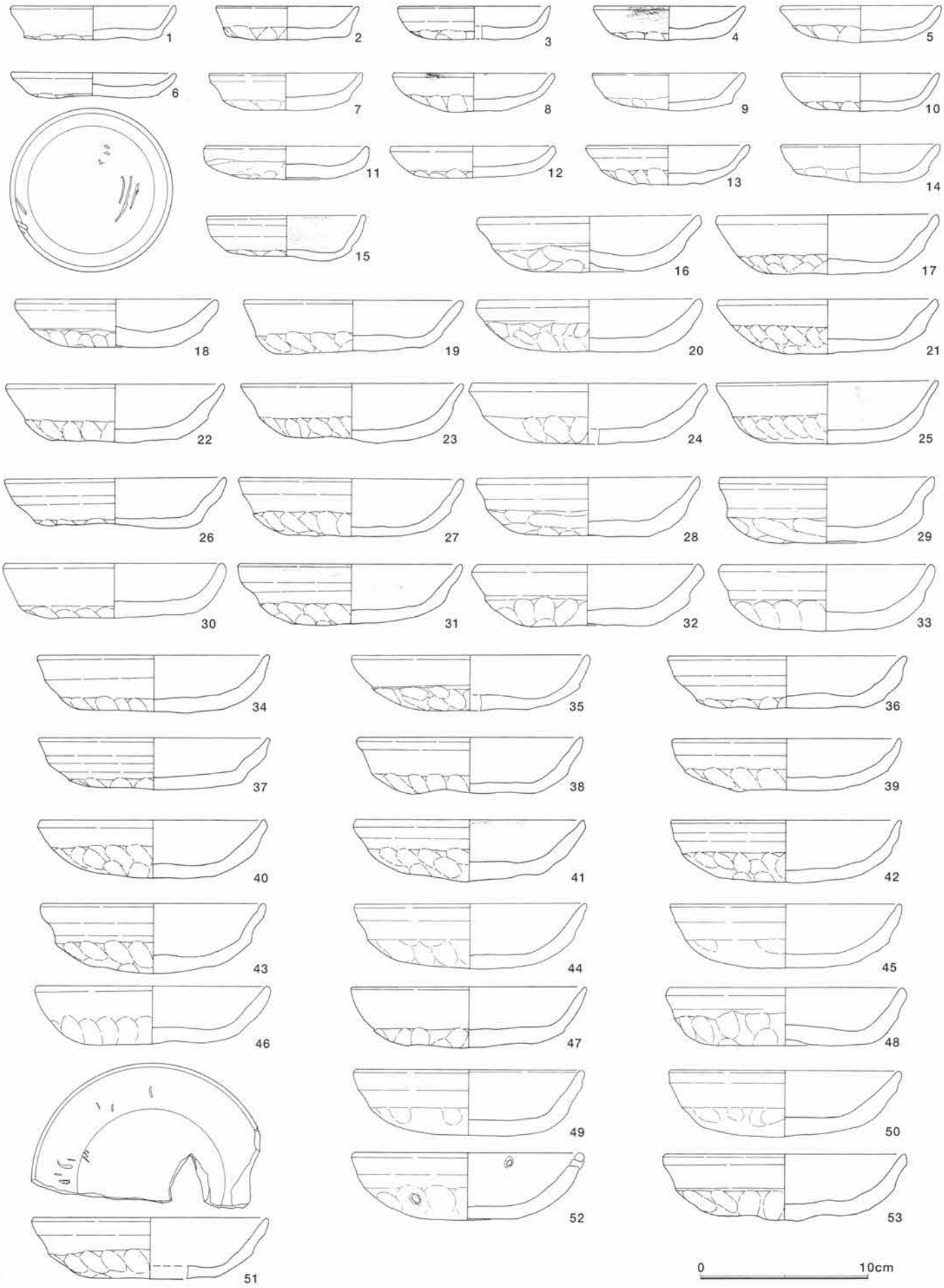


図55　第6面遺構出土遺物（土壙7・8）

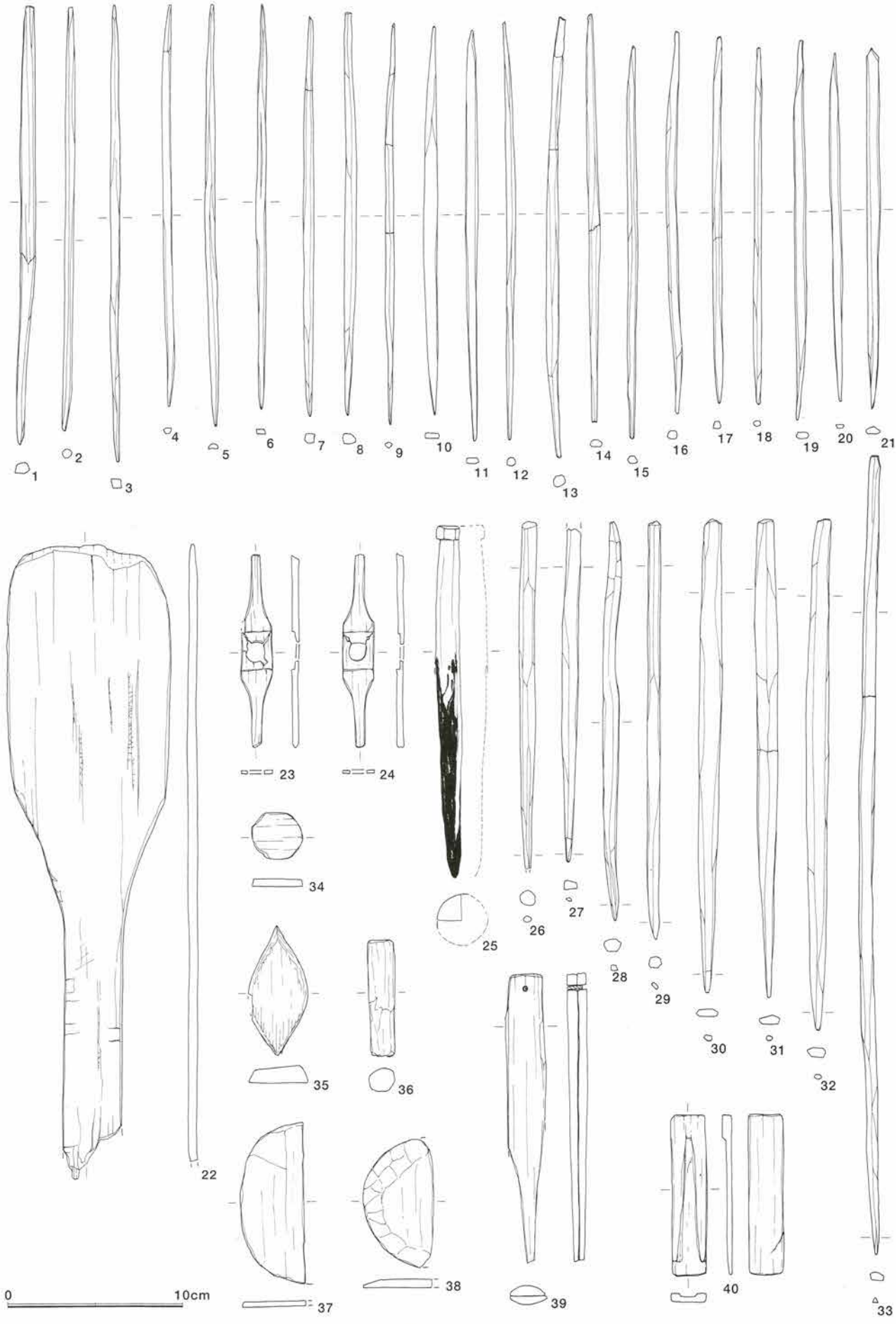


図56　第6面遺構出土遺物（土壙7・8）

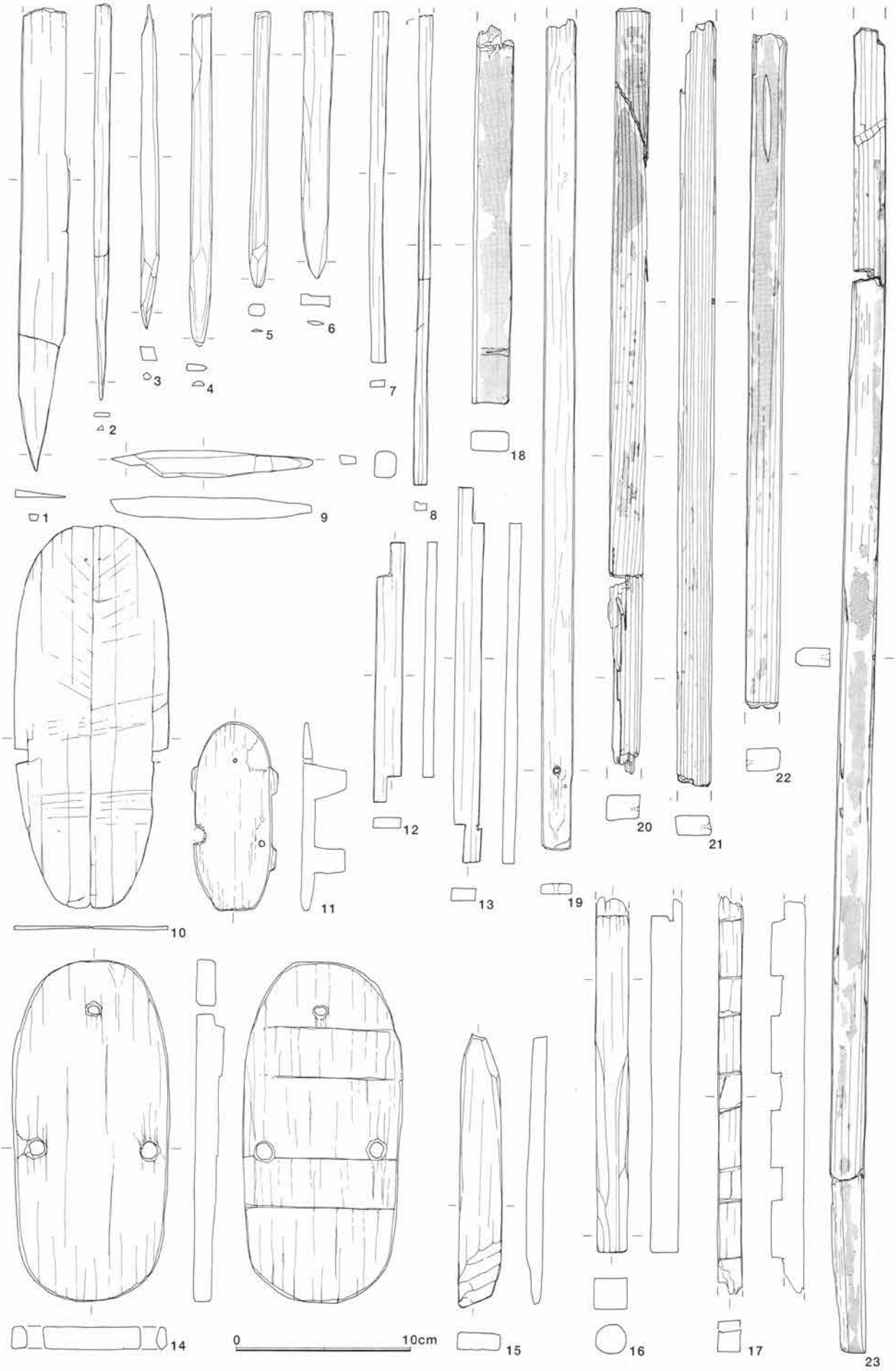


図57　第6面遺構出土遺物（土壙7・8）

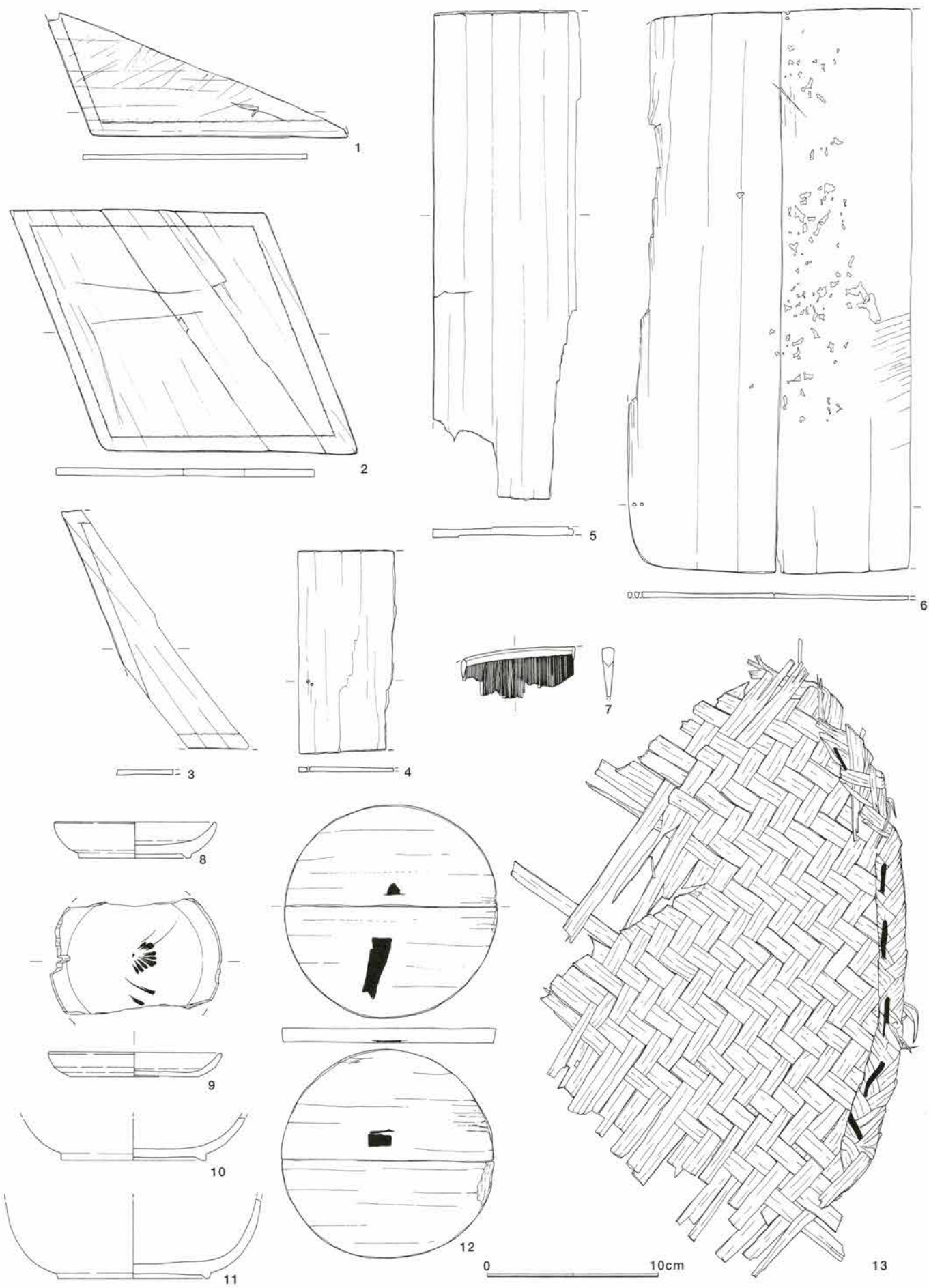


図58　第6面遺構出土遺物（土壙7・8）

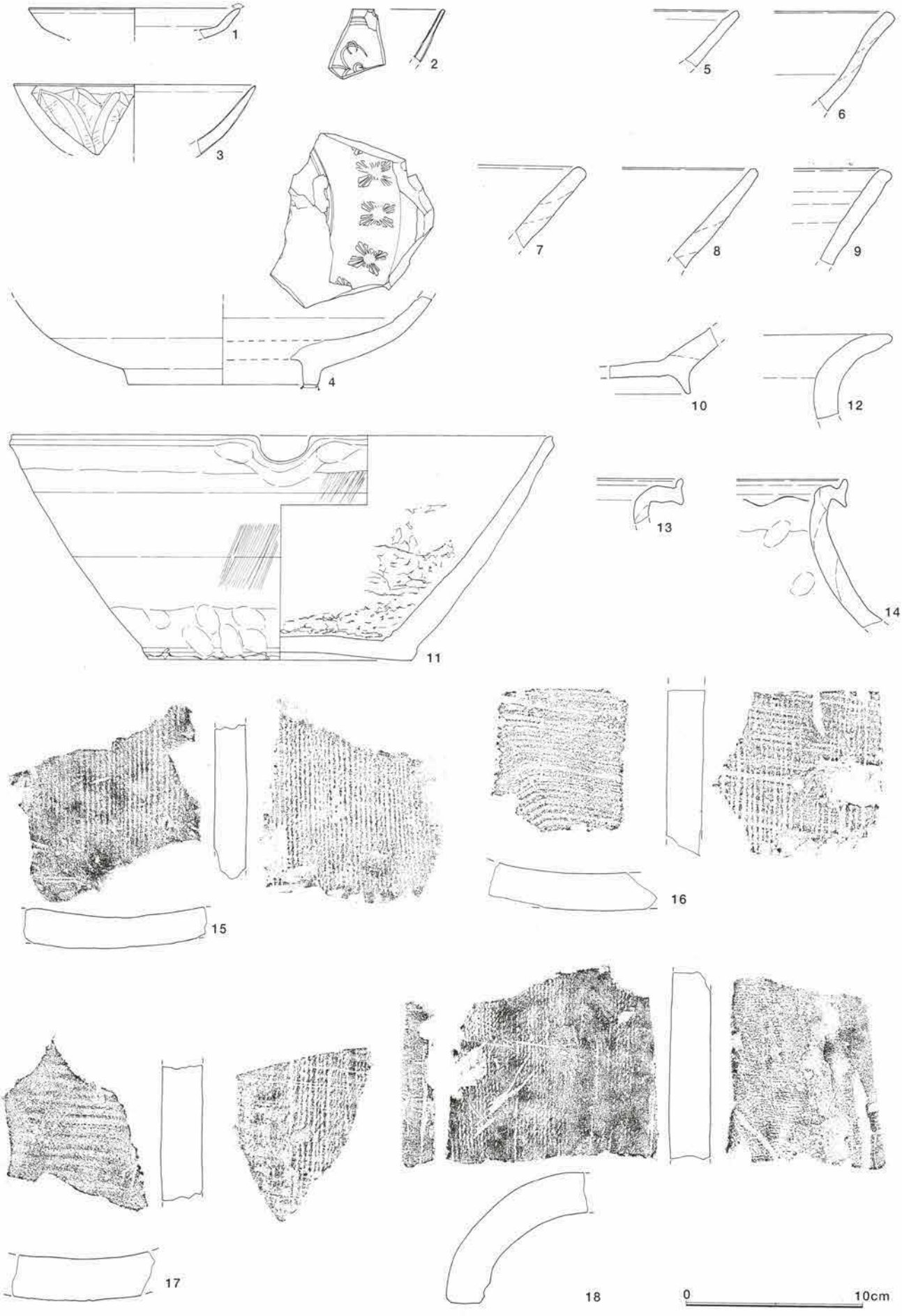


図59　第6面まで出土遺物

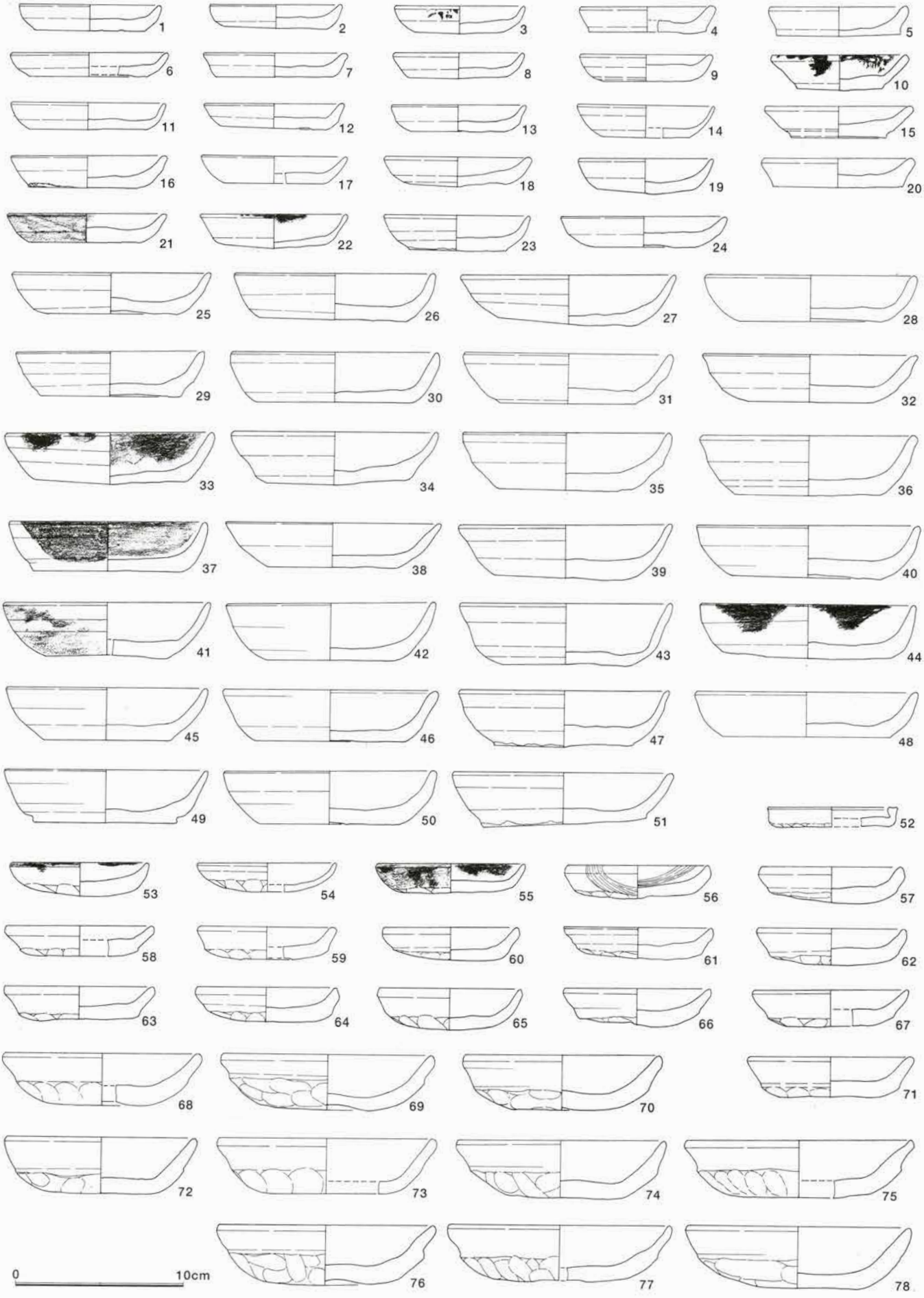


図60　第6面まで出土遺物

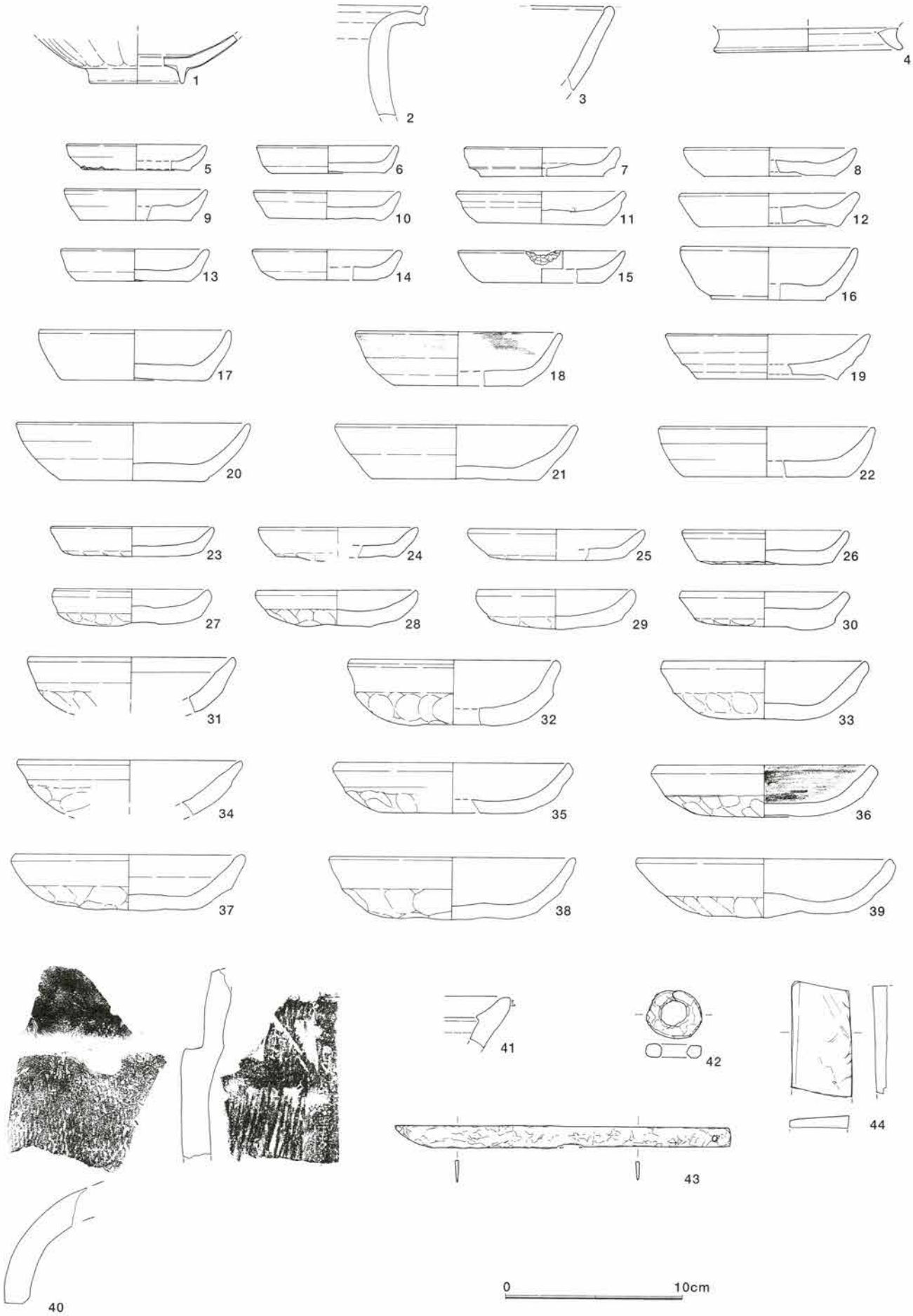

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
10cm

図61　第6面出土遺物

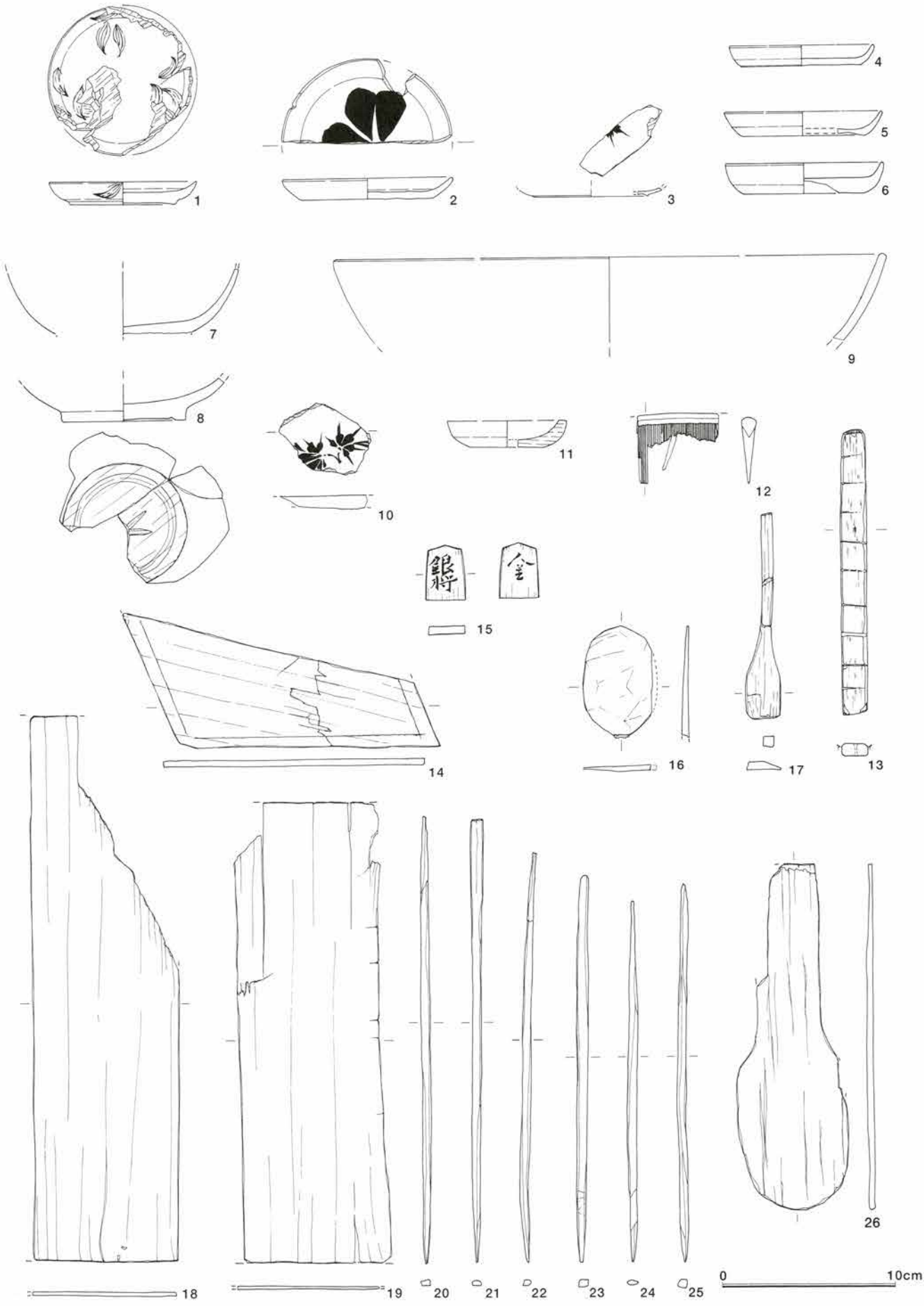

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
銀将
15
14
16
17
13
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0
10cm

図62　第6面出土遺物

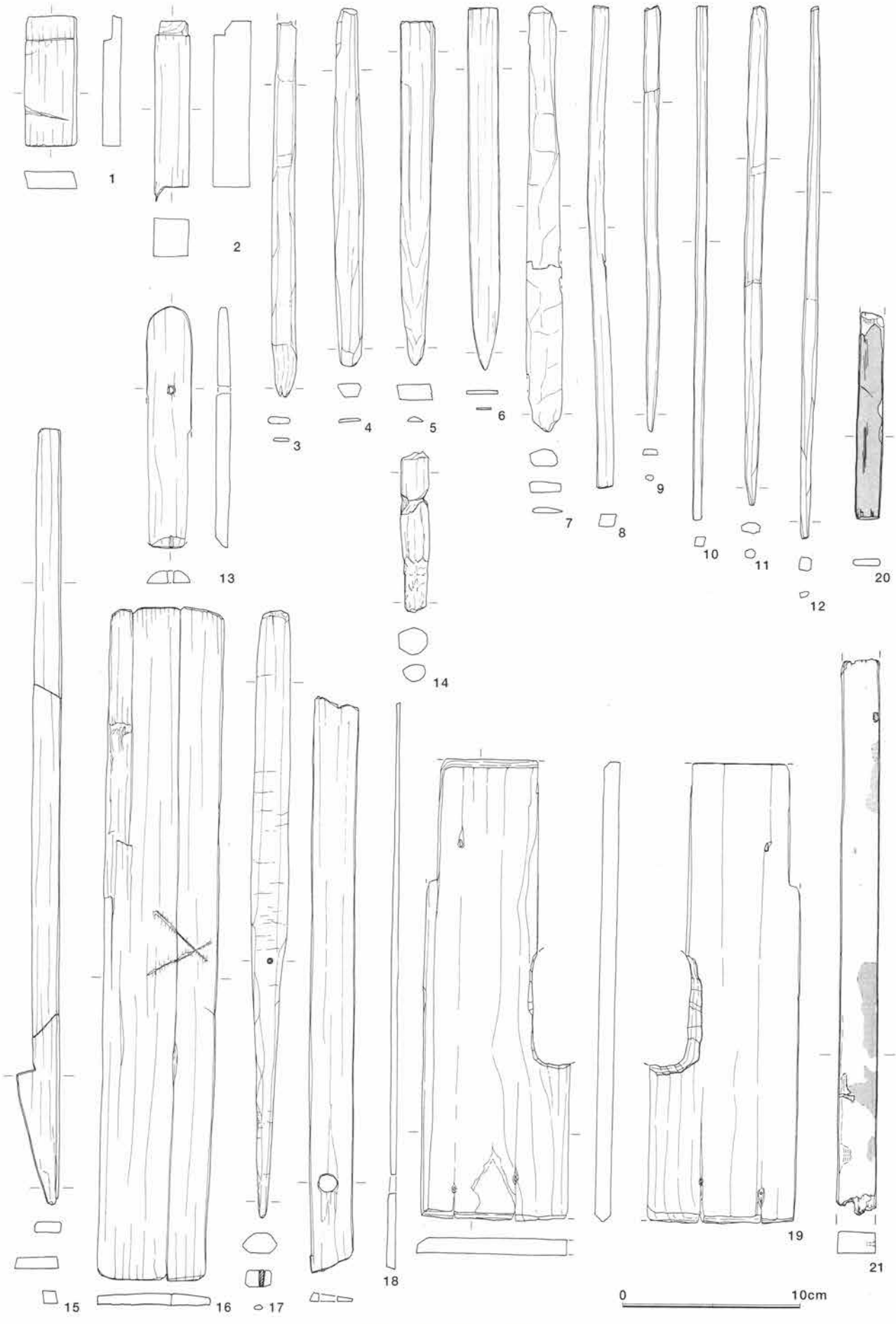


図63　第6面出土遺物

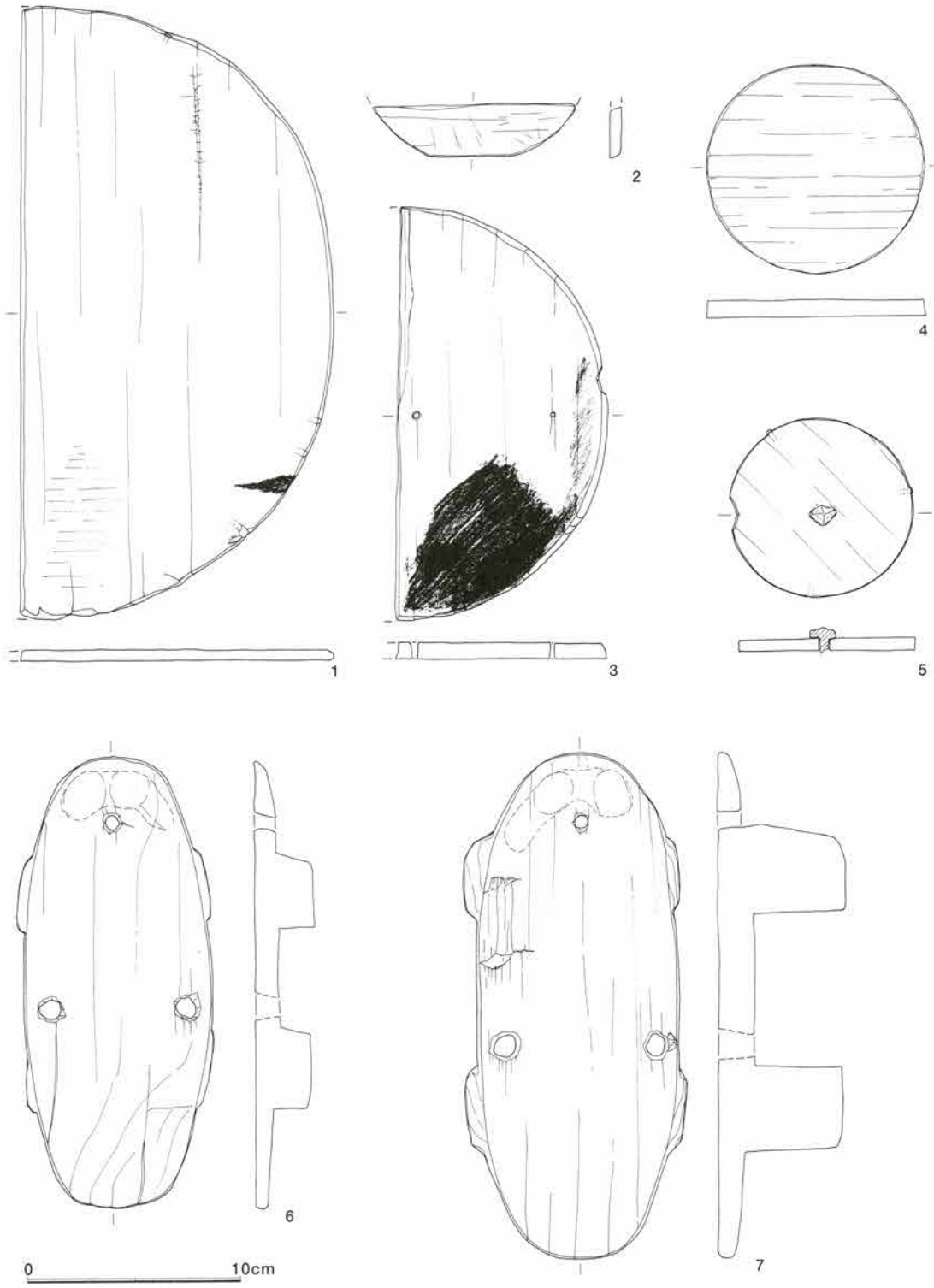


図64　第6面出土遺物

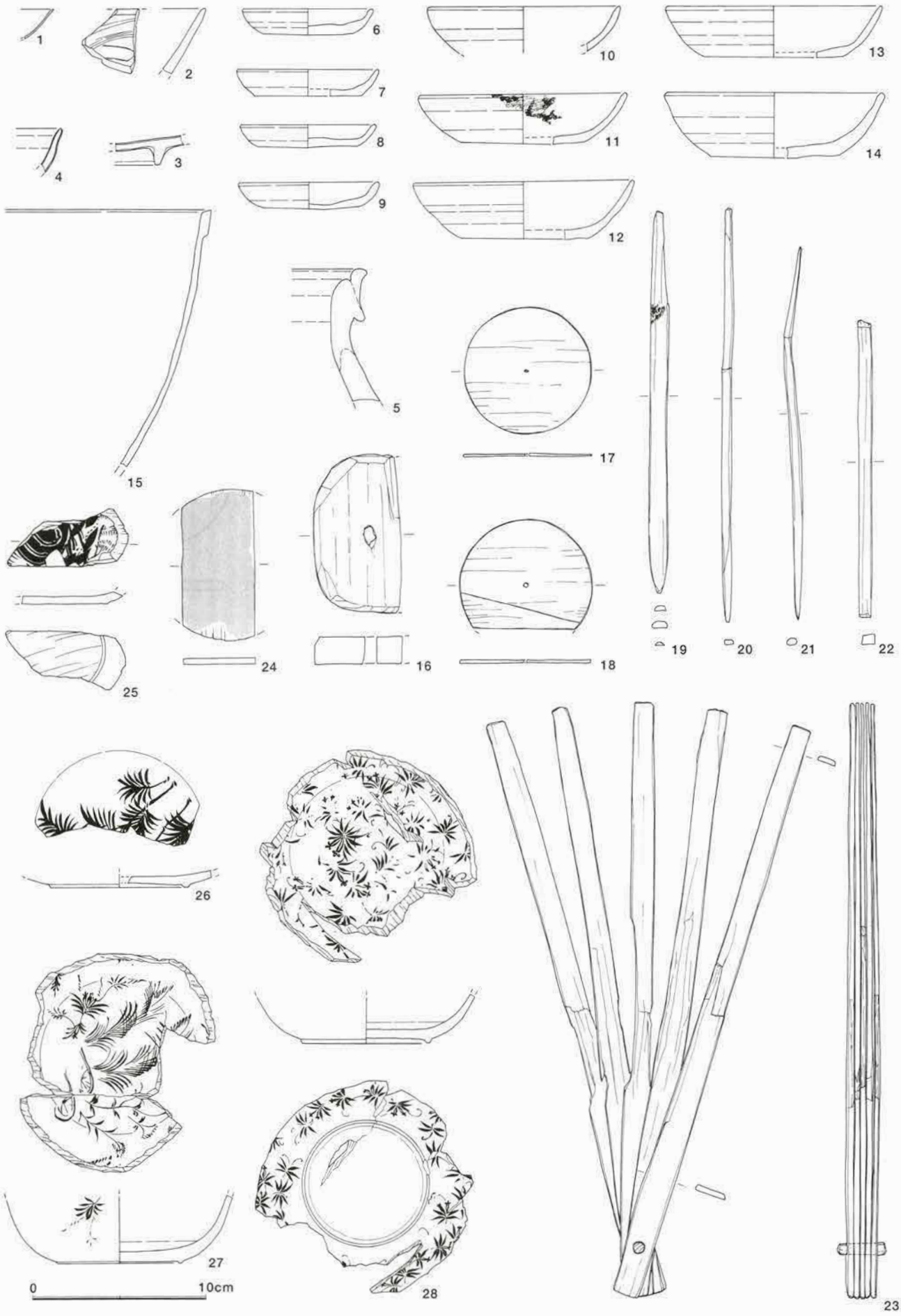


図65　トレンチ及び表採の遺物

第4章　まとめ

1．第2面

礎石建物は東西5間（1、050cm）、南北1間（200cm）以上で三方（東・南・西）に半間（105cm）の縁が巡る。真北と建物の南北の軸方位（およそN-27°-E）を見ると真北と若宮大路軸線（N-26°48′23″-E）とほぼ同じである。第3面で検出確認した礎石建物と比べると規模が小さくなっているが、礎石を使いて三方に縁が巡ることから同じ性格の建物の建て替えと見ることが出来き、同じ屋敷地内での連続性が感じられる。建物の西側は遺構が無い空閑地（庭？）となっている。この建物は火災で焼失している。石敷きは建物と大路側溝の間で確認したもので、長さ3.2m、幅1.4mの範囲に鎌倉石を若宮大路軸線に沿って敷き詰めていたものである。大路側溝と礎石建物の間という位置関係から石敷きの通路と見るよりも築地塀の基礎と考えたいところである。第2面の時期は14世紀前半代と考える。

2．第3面

礎石建物は東西8間（1、680cm）、南北2間（400cm）以上で三方（東・南・西）に半間（105cm）の縁が巡る大型の建物である。この東西8間という規模は寺社を除き市内で確認されている掘立柱建物や礎石建物の内で最大級のものである。真北と建物の南北の軸方位（およそN-27°-E）を見ると真北に対して若宮大路軸線（N-26°48′23″-E）とほぼ同じである。この建物は建て替えの痕跡が顕著で、礎石を用いた時期（3b面）の建物とこの礎石の上に4寸角の柱材を長さ30cm程に切断したものを据え礎石代わりに用いた建物の時期（3a面）が確認されている。この二時期の建物は全く同じ所で同じ規模で建て替えが行われていた。また、この建て替えの間に大量のかわらけが建物の西側から縁の下に廃棄されていた。建て替えの時の何らかの行事に用いられ廃棄されたものと考えられる。礎石を使用した大規模な建物であることから、かなりの地位にある者の屋敷である可能性が高い。

この第3面は当調査地から南に25m、同じく若宮大路に面する『雪ノ下一丁目265番3地点』の第3面と同時期と考えられる。第3面検出の大路側溝（下層）の幅及び推定される深さが同じこと、側溝の倒壊防止用に設置された控え梁やそれぞれの梁の側面に刻まれた「三鱗紋」の存在、推定される遺構面の高さと大量に出土しているかわらけの年代観からも両遺跡の第3面は同じ時期の可能性が高い。このかわらけの年代観から第3面の時期は13世紀末から14世紀初頭と考える。

3．第4面

第4面では砂利敷き面が検出されている。屋敷内に砂利を敷き詰めるのは、幕府周辺及び寺社以外では今小路西遺跡の南谷屋敷で確認されているだけである。東西グリッドBライン上を横切る形で板溝状遺構が検出されている。この板溝状遺構を境に南側に砂利が敷かれ、北側には沿う形で細長い土壙があることからこの遺構は溝というより建物基壇の土留め等の可能性も考えられる。第2・3面の様な大規模な建物は確認されていないが、砂利敷き面の存在から屋敷の庭等の一角と考えられる。検出された各遺構の軸方位はこれまでと同じく若宮大路軸線と平行関係にある。第4面の時期は13世紀後半と考えられる。

前述した『雪ノ下一丁目265番3地点』では第3面と同様に第4a面でも同じ軸方位（大路と平行）を持つが、第4b面や第5面では第4a面や第3面の遺構と異なり建物の軸方位が東（3°-E）に振れる。

13ｃ第３四半期と推察されている第４ａ・第４ｂ面を境に土地の使われ方がたとえばより大きな屋敷地に取り込まれていった等変化した可能性が考えられる。遺物では墨壺（舟形尻割型）の出土があげられる。13世紀代の出土品としては他に例のないものである。墨壺の古代から近世への変遷を考える上で中世の形態を埋める貴重な遺物である。第４面の時期は13世紀第４四半期頃と考える。

４．第５面

四寸角（12×12cm）の掘立柱が根元付近で（遺存する長さ約18cm～39cm）切断され礎板の上に立った状態で５本検出された。これは第５面が地業で厚さ約50～60cmもの砂が入れられ埋められた時期に、第５面の建物の柱が切断され埋め込まれたものが検出されたものである。建物は若宮大路軸線に平行（およそN-27°-E）しており、規模は東西５間（1､050cm）、南北１間（200cm）以上と考えられる。遺構面上から地鎮に関わると考えられる木簡が出土した。また厚く地業された砂層を掘り下げ検出した５面からは上層ではほとんど確認されていない手捏ねかわらけが出土するようになる。第５面の時期は13世紀中頃～後半と考えられる。

５．第６面

建物跡は検出されなかったが、大きな土壙（東西の軸線がおよそN-27°-E）が連続して検出された。その多くがゴミ穴と考えられる。柱穴等の建物遺構は見つからないことから屋敷の裏手？にあたると考えられる。遺物ではかわらけ、舶載陶磁、国産陶器、木製品が出土している。常滑甕（５型式）が出土し手捏ね成形のかわらけが多く見られる。そこに永福寺Ⅰ期瓦が出土することから、第６面の時期は13世紀前半～中頃と考えられる。

６．おわりに

調査地点では13世紀前半～中頃（第６面）にかけてゴミ穴等の土壙が掘られる。それ以前はこの近隣で水田等耕作が行われていたと考えられる【註９】。建物が確認されるようになるのは13世紀中頃からである。13世紀中頃（第５面）に掘立柱建物であったものが13世紀第４四半期（第４面）に埋め立てられ、一時期おいて13世紀末～14世紀初頭（第３面）に大規模な礎石建物が建てられる。14世紀前半（第２面）まで建物は連続するが最終的に火災で焼失するといった変遷が考えられる。

さらに調査した各遺構面（時期）を詳細に見ると、大きな屋敷内の区画の変遷が見えて来る。第２面・３面で確認した礎石建物の南辺の限界、第４面の東西に延びる溝状遺構と柱穴列、第５面の掘立柱建物の南辺の限界や東西方向の柱穴列を見ると明らかに仕切られた一画と見ることが出来る。当遺跡は第２面から第５面の建物（軸方位およそN-27°-E）、柱穴列や大路側溝などの遺構（軸方位およそN-27°-E）はすべて若宮大路（N-26°48′23″-E）に平行もしくは直交している。若宮大路に面した北条時房・顕時邸跡だけに限って、これまで行われた発掘調査（10地点）で検出された遺構の軸方位と若宮大路軸線の関係をみると（表１参照）、第１に一番北に位置する当遺跡１．「雪ノ下一丁目267番４地点」から３．「雪ノ下一丁目271番１地点」までのように、若宮大路軸線と検出した遺構が平行・直交関係にある一群。間に入る２．「雪ノ下一丁目265番３地点」は13世紀中頃～13世紀第４四半期まで３°東に振れていたが13世紀末～14世紀初に平行関係になるように変化する。第３面のまとめでも述べたように、第３面検出の大路側溝（下層）の幅及び推定される深さが同じこと、側溝の倒壊防止用に設置された控え梁やそれぞれの梁の側面に刻まれた「三鱗紋」の存在、推定される遺構面の高さが同じことから両遺跡は同じ敷

地内の可能性が高いと考えられる。この変化は13世紀末に土地の使われ方がたとえば複数の屋敷地がより大きな屋敷地に取り込まれた可能性を示しているのかもしれない。第２に４.「雪ノ下一丁目271番３地点」、５.「雪ノ下一丁目271番４地点」から８.「雪ノ下一丁目273番イ」までのように、若宮大路軸線より遺構の軸線が２～６°東に振れる一群。南北距離にして約60mあり大路に面する距離はおよそ20丈、今小路西遺跡の南谷屋敷のおよそ８戸主（20丈×20丈）を基準に大規模な屋敷地の地割りを想定するならばこの約60m（20丈）は屋敷を区切る単位として肯定できる数値ではある。そして第３は、９.「雪ノ下一丁目274番２」のようにまた若宮大路軸線と平行･直交関係になる一群のおよそ三つに分けられそうである。

しかし現時点では軸方位を共有するか異なるかの基準によって、屋敷地の地割りを論じるだけのデータの蓄積があるわけではないことを断っておく。将来、若宮大路に面した地点だけでなく奥まった地点での調査例の増加すればもう少し具体的な地割りが見えてくるかもしれない。更に現在は調査基準に国土座標値から真北を求め使用しているが、離れた遺跡間で方向性を論じる時、国土座標導入以前の調査で用いられた磁北並びに不正確で曖昧な真北、位置データの選び出し再検討が急務と考える。

（福田）

【註９】『北条時房・顕時邸跡７』「雪ノ下一丁目272番地点」p112　北条時房・顕時邸跡（７次調査）の花粉分析、プラント・オパール分析　鎌倉遺跡調査会調査報告第12集
プラントオパール分析結果から13世紀初めの試料１ｇあたり約60,000個のイネのプラント・オパールが検出されている。稲作の検証として１ｇあたり5,000個以上のイネのプラント・オパールが検出された場合にそこで稲作が行われていた可能性が高いと判断される。

参考文献

10.『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告３』「雪ノ下一丁目233番９他地点」鎌倉市教育委員会　1987. 3
７.『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告４』「雪ノ下一丁目273番ロ地点」鎌倉市教育委員会　1988. 3
９.『北条時房・顕時邸跡 雪ノ下一丁目274番２地点』北条時房・顕時邸跡発掘調査団　1988. 9
３.『北条時房・顕時邸跡 雪ノ下一丁目271番１地点』北条時房・顕時邸跡発掘調査団　1989. 4
２.『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告６』「雪ノ下一丁目265番３地点」鎌倉市教育委員会　1990. 3
６.『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告14-１』「雪ノ下一丁目272番地点」鎌倉市教育委員会　1998. 3
８.『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告15-１』「雪ノ下一丁目273番イ地点」鎌倉市教育委員会　1999. 3
４.『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告16-２』「雪ノ下一丁目271番３地点」鎌倉市教育委員会　2000. 3
５.『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告16-２』「雪ノ下一丁目271番４地点」鎌倉市教育委員会　2000. 3

※番号は「図２ 調査地点位置及び周辺調査地点」で使用しているものと同じである。

表1　時房・顕時邸跡調査データー覧

遺跡地番	面と年代観	大路軸線をN方向0°として振れを図上復元					大路軸線→グリッド	真北→大路軸線
		建物	溝土壙	柱穴列	大路側溝	側溝脇の塀		
1.雪ノ下一丁目267番4 本調査地点	2面 14c中～後半	平行	−	−	平行	石敷 平行	3°01′29″-E	N-26°48′23″-E
	3面 13c末～14c初	平行	−	−	平行	平行		
	4面 13c後半	平行	直交	直交	平行	平行		
	5面 13c中頃	平行	−	直交	平行	平行		
	6面 13c前半	−	直交	−	−	−		
2.雪ノ下一丁目265番3	3面 13c末～14c初	平行	平行	−	平行	平行	大路軸線から直角に東西グリッド設定	N-38°-E　磁北？ 報告書記載どおり
	4a面13c第3四半期	3°E	−	3°E	平行	2°E		
	4b面	3°E	−	−				
	5面 13c中頃	3°E	古代?異	2°E	平行	平行		
3.雪ノ下一丁目271番1	1面 14c前半	平行	直交	平行 直交	直交道路	−	大路軸線から直角に東西グリッド設定	N-32°50′-E 報告書記載どおり
	2面 13c末～14c前	平行	直交	−	−	−		
4.雪ノ下一丁目271番3	1面 13c後～14c初	−	−	−	−	−	狭すぎて遺構の方位不正確	記載なし
	2面 13c第2四半中	−	−	−	−	−		
	3面 13c前半	−	−	−	−	−		
5.雪ノ下一丁目271番4	1面 記載なし	−	−	−	1°30′W	−	記載なし 6°30′-E 遺構と大路軸線との関係は図面から測った	記載なし
	2面 記載なし	−	−	−	3°W	−		
	3面 記載なし	4°E	−	2°E	−	−		
	4面 記載なし	4°E	−	99°30′E	−	−		
	5面 記載なし	−	−	−	−	−		
6.雪ノ下一丁目272番	2面 13c代末まで	96°E	道路 93°E	96°E	平行	平行	大路軸線から直角に東西グリッド設定	N-25°40′06″-E 報告書記載どおり
	3面 13c第2四半?	4°E	道路 93°E	4°E	平行	平行		
7.雪ノ下一丁目273番ロ	1面 14c前半	板壁 4°E 掘立 2°E	2°E	−	平行	平行	大路軸線から直角に東西グリッド設定	N-およそ27°-E 報告書記載どおり
	2面 13c前半～中	2°E	2°E	−	平行	−		
	東西溝(側溝以前)	−	直交×	−	−	−		
8.雪ノ下一丁目273番イ	1面 −	−	−	−	−	−	3°13′-E 遺構と大路軸線との関係は図面から測った	N-37°-E　磁北？ 報告書記載どおり
	2面 15c前葉・中葉	−	−	−	−	−		
	3面 14c代	95°E	−	−	平行	−		
	4面 13c代	94°E	94°E	95°E	平行	平行		
	5面 13c前葉	5°E	3～7°E					
	6面 12c末～	−	平行×	−	−	−		
9.雪ノ下一丁目274番2	1面 13c～14c前半	平行	直交	−	平行	平行	大路軸線から直角に東西グリッド設定	N-32°50′-E 報告書記載どおり
10.雪ノ下一丁目233番9	1面 14c中	−	−	−	−	−	大路軸線から直角に東西グリッド設定	N-32°50′-E 報告書記載どおり
	2面 14c前半	8°E	南北溝 平行	木組み 12°E	−	−		
	3面 13c後～14c初	−	−	木組み 11°E	−	−		
	4面 13c中～後半	−	−	−	−	−		

※表中の1.「雪ノ下一丁目267番4地点(本調査地点)」以外のデータは報告書本文または図面より読み取った値を記載。
※遺跡地番に付してある通し番号は図2と同一。

附編　呪符木簡「謹請南方赤帝赤龍 堅牢地神」の類似文献史料

①『中臣祓注抄』 建保三年（1215） 神宮文庫第一門五六八号一冊。

「大中臣祓祭文」

（中略）

五帝龍王　謹請東方青帝龍王　謹請南方赤帝龍王　謹請西方白帝龍王　謹請北方黒帝龍王

謹請中央黄帝龍王

（後略）

②『五行大義』 元弘三年（1333）

陰陽五行説を集大成した本。隋の蕭吉撰。五巻。中国では亡佚。元弘本は鶴岡八幡宮の社僧であった智圓が相伝したとの奥書を有する。

（中略）

第二十一　論五帝

遂古已来　所論五帝　凡有三種　河圖云

東方青帝　霊威仰　木帝也　南方赤帝　赤？怒　火帝也　中央黄帝　含樞紐　土帝也

西方白帝　白招拒　金帝也　北方黒帝　叶光紀　水帝也

（後略）

③『祭文部類』 天正十一年（1583）

安倍泰嗣が家伝の祭文を十四種書写したもの。

「地鎮之祭文」　弘治二年（1556）

（中略）

謹請五方五龍王東南西北中央青赤白　黒黄帝土公将軍五土諸神土府官属等主人

謹請牢藍地神眷属部類諸神

（後略）

「土公之祭文」 天文九年（1540）

（中略）

謹請東方青帝土公神　謹請南方赤帝土公神　謹請西方白帝土公神　謹請北方黒帝土公神

謹請中央黄帝土公神

（後略）

「河臨祭文」 文明六年（1474）

「河臨祓」の祭文。「七瀬祓」の臨時として発展した大規模なもの。

（中略）

謹請東方青帝木厄将軍　謹請南方赤帝火厄将軍　謹請西方白帝金厄将軍　謹請北方黒帝水厄将軍

謹請中央黄帝土厄将軍

（後略）

④『足利義満三万六千神祭都状』 明徳四年（1393）

去る八日未時、太白の天変があったための祭文。陰陽道祭文として最も古い史料。

（中略）

謹請東方青龍王君各領三万六千　眷属逆治東方　謹請南方赤龍王君各領三万六千　眷属逆治南方

謹請西方白龍王君各領三万六千　眷属逆治西方　謹請北方黒龍王君各領三万六千　眷属逆治北方
謹請中央黄龍王君各領三万六千　眷属逆治中央
（後略）

⑤『御水尾上皇土公都状』　寛永七年（1630）

禁裏北殿の仮仙居より新造の桜町殿と呼ばれた下御所への移転に伴う祭文。

都状
夫謹請五方五竜王東青帝竜王南赤帝竜王中　央黄帝竜王西白帝竜王北黒帝竜王土公将軍五
土諸神土府官属牢籃地神眷属部類諸神
（後略）

⑥京都　天台宗妙法院所蔵の原題失、神像絵巻一巻　観応元年（1350）

（中略）
東方青帝竜王　南方赤帝竜王　西方白帝竜王　北方黒帝竜王　中央黄帝竜王
（後略）

⑦京都醍醐寺所蔵『土公祭文』　明応三年（1494）

（中略）
謹請再拝々々散供之散供ヲ一方ニ三度宛五度供之　謹請東方青帝土公神王　謹請南方赤帝土公神王
謹請西方白帝土公神王　謹請北方黒帝土公神王　謹請中央黄帝土公神王　供物ヲ　令納受給ヘ
再拝散位之惣ヘ一度
（後略）

⑧『簠簋（ホキ）内伝』　宝永七年（1710）

日時・方角の吉凶などを集大成した雑書。安倍晴明撰と伝えるが、仮託で撰者は不詳。鎌倉時代末以降の成立。

（中略）
四　土公出入依二居座一大土小土事
春戊寅日　至二東宮青帝青龍王宮殿一六日小吉土日　然而甲申日歸二本宮一十日大悪土日
夏甲午日　至二南宮赤帝赤龍王宮殿一六日大吉土日　然而庚子日歸二本宮一八日小悪土日
秋戊申日　至二西宮白帝白龍王宮殿一六日小吉土日　然而甲寅日歸二本宮一十日大悪土日
冬甲子日　至二北宮黒帝黒龍王宮殿一六日大吉土日　然而庚午日歸二本宮一八日小悪土日
右本宮居座間敢以不可犯土殺生
（後略）

⑨『鎮土法　大土公供』　天保七年（1836）

次祭文　五帝龍王ノ祭文取御幣再拝ス
（中略）
夫五帝龍王トハ。五智五佛ノ垂迹。五行五大ノ之精霊也。犯ル者有レハ祟リテ致シ。
慎ム者有レハ賞ヲ施ス。
（後略）

⑩『土公申弊事』　天保七年（1836）

（中略）
一、五帝竜王ノ　名ヲ　次第ノ　如クニ　南無南方赤龍王ト　板ニ　書テクニ　ヘイグシノ如クニ　上ニ　カミヲ三重

ニ折テ ハサミ其ノ 上ニ 板ノ 札ヲ ハサム也

（後略）

⑪『孔雀王呪経』 一巻

『大蔵経』第19巻密教部二』0988　pp. 481 - 484

（中略）

東方青帝大神龍王各領八萬四千鬼持於東方　南方赤帝大神龍王各領八萬四千鬼持於南方

西方白帝大神龍王各領八萬四千鬼持於西方　北方黒帝大神龍王各領八萬四千鬼持於北方

中央黄帝大神龍王各領八萬四千鬼持於中方

（後略）

（古田土俊一）

引用文献

①皇學館大學　1983『神宮古典籍影印叢刊　神宮儀式・中臣祓』八木書店

②古典研究会　1989『五行大儀　漢籍之部７』汲古書院

③④⑤村山修一編　1987『陰陽道基礎史料集成』東京美術

⑥村山修一　1991『日本陰陽道史総説』塙書房

⑦村山修一　1997「わが国における地鎮及び宅鎮の儀礼・作法について」『修験・陰陽道と社寺史料』法藏館

⑧塙　保己一　1927『続群書類従　第三十一輯　上』続群書類従完成会

⑨⑩高岡隆心編　1920『中院流星供及土公供集』高野山八葉学会

⑪高楠順次郎他　1934『大正新脩大蔵経』大正新脩大蔵経刊行会

表2　遺物観察表

図5　2面

【遺構】大路側溝Ⅰ　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	低径	器高	成形・特徴
1	瀬戸・灰釉卸皿	口縁部片			
2	土器質・火鉢	口縁部片			外縁部菊花文
3	土製・円盤	径3.9	厚0.8		かわらけ加工品
4	石製品・砥石	残長6.2	幅2.8	厚1.4	中砥　凝灰岩
5	女瓦　Ⅲ期	残6.8	残6.5	厚2.4	格子叩き
6	かわらけ	(7.4)	(4.8)	1.6	轆轤成形
7	かわらけ	7.0	4.9	1.8	轆轤成形
8	かわらけ	6.9	4.0	2.0	轆轤成形
9	かわらけ	(7.0)	(4.2)	2.2	轆轤成形
10	かわらけ	7.8	4.8	1.8	轆轤成形
11	かわらけ	(7.5)	(5.3)	1.9	轆轤成形
12	かわらけ	7.0	4.2	1.9	轆轤成形
13	かわらけ	7.8	4.4	2.1	轆轤成形
14	かわらけ	(8.0)	(5.6)	1.6	轆轤成形
15	かわらけ	(7.2)	(4.4)	2.3	轆轤成形
16	かわらけ	7.8	4.5	2.2	轆轤成形
17	かわらけ	(6.8)	4.0	2.3	轆轤成形
18	かわらけ	(7.6)	(5.0)	2.4	轆轤成形
19	かわらけ	7.8	4.2	2.4	轆轤成形
20	かわらけ	(8.0)	(4.6)	2.2	轆轤成形
21	かわらけ	(4.9)	4.0	0.9	轆轤成形
22	かわらけ	(13.0)	7.4	3.2	轆轤成形
23	かわらけ	(12.6)	(8.8)	3.3	轆轤成形
24	かわらけ	(11.7)	(7.2)	2.8	轆轤成形
25	かわらけ	(13.0)	(7.2)	3.3	轆轤成形
26	かわらけ	(12.8)	(6.2)	3.7	轆轤成形
27	かわらけ	(12.6)	(8.4)	3.6	轆轤成形
28	かわらけ	(10.6)	5.4	2.8	轆轤成形
29	かわらけ	(10.9)	5.2	3.1	轆轤成形
30	かわらけ	11.0	6.0	2.7	轆轤成形
31	かわらけ	(10.8)	7.2	2.9	轆轤成形
32	木製品・箸	長17.2	幅0.9	厚0.5	
33	木製品・箸	長18.5	幅0.5	厚0.5	
【2面まで】					
34	青磁・皿	底部片　高台径(11.0)			
35	白磁・皿	底径(6.3)底部片			
36	瀬戸・卸皿か	口縁部片			
37	かわらけ	(4.6)	3.4	0.8	轆轤成形
38	かわらけ	(11.8)	(7.4)	2.5	轆轤成形
39	かわらけ	(8.8)	(6.6)	1.9	轆轤成形
40	かわらけ	(12.2)	(7.2)	2.9	轆轤成形
41	かわらけ	(11.8)	(6.8)	3.2	轆轤成形
42	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.5	轆轤成形
43	かわらけ	(12.4)	(6.6)	3.6	轆轤成形
44	かわらけ	(13.2)	(9.0)	3.2	轆轤成形
45	かわらけ	(13.0)	(7.6)	3.2	轆轤成形
46	かわらけ	13.6	7.2	3.9	轆轤成形
47	かわらけ	(13.8)	(8.5)	3.4	轆轤成形
48	かわらけ	6.8	4.2	1.8	轆轤成形
49	かわらけ	(7.8)	4.8	1.5	轆轤成形
50	かわらけ	(8.6)	(6.2)	1.6	轆轤成形
51	かわらけ	7.9	6.2	1.7	轆轤成形
52	かわらけ	7.2	6.1	1.5	轆轤成形
53	かわらけ	(6.8)	(4.6)	1.9	轆轤成形
54	かわらけ	(7.2)	(4.6)	1.7	轆轤成形
55	かわらけ	7.3	4.3	2.2	轆轤成形
56	かわらけ	(7.4)	(4.6)	2.1	轆轤成形
57	かわらけ	(7.4)	(4.6)	2.1	轆轤成形
58	かわらけ	(8.0)	4.6	2.1	轆轤成形ス ス付着
59	木製品	長38.8	幅6.5	厚0.7	用途不明桶側板か

図6　2面

【遺構】土壙－1　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青磁・劃花文鉢	底径5.9（底部片）			釉は薄緑～オリーブ色高台は畳付きを除き外底面の全面に施釉され釉際は赤く発色する。外面無文、内面片切り彫り花文
2	木製品・刀架か	長36.1	幅7.9	厚1.6	

【遺構】大路側溝Ⅱ

3	瀬戸・仏花瓶	最大径5.0（胴部片）			体部に3条の沈線灰釉
4	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅱ類
5	備前・すり鉢	口縁部片			条線4本
6	かわらけ	10.6	(6.6)	3.0	轆轤成形
7	かわらけ	12.4	6.4	3.2	轆轤成形
8	かわらけ	(12.2)	6.6	3.3	轆轤成形
9	かわらけ	11.9	7.0	3.4	轆轤成形
10	かわらけ	(12.5)	6.5	3.3	轆轤成形
11	かわらけ	12.3	8.2	3.3	轆轤成形
12	かわらけ	(12.6)	(8.4)	3.2	轆轤成形ス ス付着
13	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.2	轆轤成形
14	かわらけ	(13.3)	7.9	3.4	轆轤成形
15	かわらけ	(12.4)	8.0	3.2	轆轤成形
16	かわらけ	(13.2)	8.2	3.7	轆轤成形
17	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.7	轆轤成形
18	かわらけ	(7.0)	4.0	1.8	轆轤成形
19	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.7	轆轤成形
20	かわらけ	7.6	5.0	1.9	轆轤成形
21	かわらけ	(7.1)	(4.9)	2.1	轆轤成形
22	かわらけ	(7.2)	4.2	2.0	轆轤成形
23	かわらけ	7.5	5.0	2.0	轆轤成形
24	かわらけ	(7.4)	(4.4)	2.0	轆轤成形ス ス付着
25	かわらけ	7.7	4.2	1.8	轆轤成形ス ス付着
26	かわらけ	(7.4)	(4.4)	2.3	轆轤成形ス ス付着
27	かわらけ	(7.2)	4.2	2.2	轆轤成形
28	かわらけ	7.3	3.6	2.4	轆轤成形
29	かわらけ	(7.8)	5.5	2.3	轆轤成形
30	すり常滑	長5.8	幅5.1	厚2.2	転用品
31	石製品・砥石	残(3.6)	幅5.5	厚1.2	砥転用
32	木製品・木球	最大径6.9			毬打の球か
33	木製品・円盤	径(35.0)	厚0.5		曲げ物の底

図7　2面

【2面出土】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青磁・劃花文皿	底径(5.6)　底部片			
2	青磁	口径(18.0)　口縁部片			
3	かわらけ	(7.0)	5.6	1.6	
4	かわらけ	(11.0)	(6.2)	3.1	
5	かわらけ	(11.8)	(7.4)	3.1	
6	石製品・碁石	幅1.6 厚0.3			黒色
7	石製品・碁石	幅1.8 厚0.4			黒色

図9　3面

【遺構】かわらけ溜まり　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	高麗青磁・蓋	(9.8)		(2.5)	体部片　菊花文は白と黒2色の象眼
2	青白磁草花梅瓶	体部片			
3	青磁・鎬蓮弁文碗	口径(11.8)　口縁部片			
4	青磁・鎬連弁文碗	口径(13.5)　口縁部片			
5	青磁・折縁皿	口径(18.3)　口縁部片			
6	青磁・折縁皿	口径(23.8)　口縁部片			
7	青磁・蓋	口縁部片			
8	青磁・酒会壺	口縁部片			
9	青磁・大皿（鉢）	高台部片			
10	白磁・口兀皿	口縁部片			
11	白磁・口兀皿	(7.7)	(5.2)	1.4	
12	かわらけ	5.0	3.7	1.2	轆轤成形
13	かわらけ	7.6	5.2	1.5	轆轤成形
14	かわらけ	(7.2)	5.0	1.4	轆轤成形
15	かわらけ	7.1	5.7	1.4	轆轤成形
16	かわらけ	(7.0)	(5.2)	1.6	轆轤成形
17	かわらけ	7.0	5.0	1.4	轆轤成形
18	かわらけ	7.4	5.7	1.6	轆轤成形
19	かわらけ	(7.2)	(5.6)	1.6	轆轤成形
20	かわらけ	7.4	5.0	1.5	轆轤成形
21	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.5	轆轤成形
22	かわらけ	7.8	5.8	1.5	轆轤成形
23	かわらけ	7.8	4.9	1.7	轆轤成形
24	かわらけ	7.4	5.6	1.8	轆轤成形
25	かわらけ	7.6	6.0	1.4	轆轤成形
26	かわらけ	7.6	5.4	1.5	轆轤成形

27	かわらけ	7.6	5.5	1.7	轆轤成形
28	かわらけ	7.6	5.4	1.7	轆轤成形
29	かわらけ	7.6	5.3	1.5	轆轤成形
30	かわらけ	8.0	5.2	1.7	轆轤成形
31	かわらけ	7.4	5.6	1.4	轆轤成形
32	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.5	轆轤成形
33	かわらけ	7.2	4.6	1.6	轆轤成形
34	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.6	轆轤成形
35	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.7	轆轤成形
36	かわらけ	7.6	5.8	1.6	轆轤成形
37	かわらけ	7.1	5.2	1.5	轆轤成形
38	かわらけ	7.5	5.2	1.6	轆轤成形
39	かわらけ	7.5	5.2	1.8	轆轤成形
40	かわらけ	8.0	5.3	1.6	轆轤成形
41	かわらけ	7.2	4.8	1.4	轆轤成形
42	かわらけ	7.2	4.9	1.5	轆轤成形
43	かわらけ	7.6	5.6	1.6	轆轤成形
44	かわらけ	7.6	5.4	1.5	轆轤成形
45	かわらけ	7.4	5.3	1.7	轆轤成形
46	かわらけ	7.7	5.8	1.7	轆轤成形
47	かわらけ	7.8	6.2	1.6	轆轤成形
48	かわらけ	8.0	6.5	1.3	轆轤成形
49	かわらけ	8.0	5.8	1.5	轆轤成形
50	かわらけ	7.2	4.7	1.6	轆轤成形
51	かわらけ	7.6	5.5	1.5	轆轤成形
52	かわらけ	7.4	5.9	1.5	轆轤成形
53	かわらけ	8.0	5.7	1.6	轆轤成形
54	かわらけ	(7.7)	(5.8)	1.7	轆轤成形
55	かわらけ	7.3	4.7	1.6	轆轤成形
56	かわらけ	7.2	5.3	1.5	轆轤成形
57	かわらけ	7.8	6.0	1.6	轆轤成形
58	かわらけ	7.7	5.3	1.7	轆轤成形
59	かわらけ	7.8	5.5	1.5	轆轤成形
60	かわらけ	7.5	5.1	1.7	轆轤成形
61	かわらけ	7.4	5.9	1.9	轆轤成形
62	かわらけ	7.8	5.8	1.4	轆轤成形
63	かわらけ	7.7	5.5	1.6	轆轤成形
64	かわらけ	7.3	5.8	1.5	轆轤成形
65	かわらけ	7.6	5.5	1.6	轆轤成形
66	かわらけ	(7.4)	5.7	1.5	轆轤成形
67	かわらけ	8.0	5.8	1.7	轆轤成形
68	かわらけ	7.8	5.4	1.6	轆轤成形
69	かわらけ	7.4	5.4	1.7	轆轤成形
70	かわらけ	(7.2)	4.8	1.4	轆轤成形
71	かわらけ	7.1	5.4	1.7	轆轤成形
72	かわらけ	(8.0)	(5.6)	1.7	轆轤成形
73	かわらけ	7.5	5.9	1.5	轆轤成形
74	かわらけ	8.0	5.5	1.6	轆轤成形
75	かわらけ	7.8	4.5	1.6	轆轤成形
76	かわらけ	7.6	5.1	1.7	轆轤成形
77	かわらけ	(7.8)	(6.4)	1.8	轆轤成形
78	かわらけ	8.4	5.6	1.6	轆轤成形
79	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.7	轆轤成形
80	かわらけ	8.2	6.4	1.8	轆轤成形
81	かわらけ	8.0	5.8	1.6	轆轤成形
82	かわらけ	7.6	5.6	1.5	轆轤成形
83	かわらけ	8.0	5.6	1.6	轆轤成形
84	かわらけ	(9.4)	(8.0)	1.7	轆轤成形
85	かわらけ	7.8	5.6	1.5	轆轤成形

図10　3面

【遺構】かわらけ溜まり　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	6.2	3.2	2.3	轆轤成形
2	かわらけ	6.4	3.2	2.4	轆轤成形
3	かわらけ	(6.8)	(4.8)	1.8	轆轤成形
4	かわらけ	6.8	4.0	2.2	轆轤成形・スス付着
5	かわらけ	7.2	4.8	2.2	轆轤成形
6	かわらけ	7.1	4.8	2.2	轆轤成形
7	かわらけ	7.0	4.3	2.1	轆轤成形
8	かわらけ	6.8	4.8	2.3	轆轤成形
9	かわらけ	7.0	4.5	2.3	轆轤成形
10	かわらけ	7.1	5.1	1.7	轆轤成形
11	かわらけ	7.2	5.2	1.5	轆轤成形
12	かわらけ	7.2	4.4	1.7	轆轤成形
13	かわらけ	7.2	5.2	1.8	轆轤成形
14	かわらけ	7.4	6.0	1.5	轆轤成形
15	かわらけ	7.4	(5.1)	1.9	轆轤成形
16	かわらけ	7.4	5.6	1.4	轆轤成形
17	かわらけ	(7.3)	(5.4)	1.9	轆轤成形
18	かわらけ	7.5	5.0	1.7	轆轤成形
19	かわらけ	7.7	5.4	1.7	轆轤成形
20	かわらけ	7.4	6.0	1.3	轆轤成形
21	かわらけ	7.4	4.6	2.2	轆轤成形
22	かわらけ	(7.6)	(4.8)	2.1	轆轤成形
23	かわらけ	(7.6)	(5.0)	2.5	轆轤成形
24	かわらけ	7.5	5.0	2.0	轆轤成形
25	かわらけ	7.6	4.8	1.6	轆轤成形
26	かわらけ	(7.2)	4.8	1.6	轆轤成形
27	かわらけ	7.4	4.4	2.3	轆轤成形
28	かわらけ	7.4	4.7	2.4	轆轤成形
29	かわらけ	7.2	5.0	1.8	轆轤成形
30	かわらけ	7.2	5.0	1.9	轆轤成形
31	かわらけ	7.8	4.8	1.6	轆轤成形
32	かわらけ	7.6	5.2	1.8	轆轤成形
33	かわらけ	(7.4)	(3.6)	1.9	轆轤成形
34	かわらけ	7.6	6.2	1.7	轆轤成形
35	かわらけ	7.6	4.6	2.2	轆轤成形
36	かわらけ	7.6	4.8	2.3	轆轤成形
37	かわらけ	7.7	4.6	2.4	轆轤成形
38	かわらけ	8.0	4.8	2.3	轆轤成形
39	かわらけ	(7.7)	(5.3)	1.8	轆轤成形
40	かわらけ	7.7	6.2	1.8	轆轤成形
41	かわらけ	7.6	5.4	1.8	轆轤成形
42	かわらけ	7.6	5.0	1.7	轆轤成形
43	かわらけ	(7.8)	5.0	2.2	轆轤成形
44	かわらけ	(7.6)	(5.1)	1.8	轆轤成形
45	かわらけ	7.8	6.4	1.8	轆轤成形
46	かわらけ	7.8	6.5	1.9	轆轤成形
47	かわらけ	7.6	5.1	1.9	轆轤成形
48	かわらけ	8.0	5.8	1.6	轆轤成形
49	かわらけ	7.6	5.0	1.3	轆轤成形
50	かわらけ	7.8	6.4	1.5	轆轤成形
51	かわらけ	7.7	5.4	1.8	轆轤成形
52	かわらけ	7.6	4.5	1.9	轆轤成形
53	かわらけ	8.1	6.2	1.5	轆轤成形
54	かわらけ	7.6	5.4	1.7	轆轤成形
55	かわらけ	7.9	5.9	1.7	轆轤成形
56	かわらけ	7.6	5.4	1.8	轆轤成形
57	かわらけ	7.8	4.8	1.9	轆轤成形
58	かわらけ	7.5	5.0	2.0	轆轤成形
59	かわらけ	7.8	5.0	1.8	轆轤成形
60	かわらけ	8.0	6.1	1.7	轆轤成形
61	かわらけ	7.6	5.9	1.7	轆轤成形
62	かわらけ	8.0	5.6	1.8	轆轤成形
63	かわらけ	(8.0)	5.0	1.7	轆轤成形
64	かわらけ	8.0	5.8	1.7	轆轤成形
65	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.9	轆轤成形
66	かわらけ	(7.9)	5.9	1.6	轆轤成形
67	かわらけ	(7.7)	(4.7)	1.9	轆轤成形
68	かわらけ	8.0	5.8	1.8	轆轤成形
69	かわらけ	(8.0)	4.6	2.5	轆轤成形
70	かわらけ	(8.2)	4.4	2.3	轆轤成形
71	かわらけ	8.0	5.0	1.9	轆轤成形
72	かわらけ	8.0	5.5	2.0	轆轤成形
73	かわらけ	8.0	6.2	1.7	轆轤成形
74	かわらけ	8.2	6.0	1.7	轆轤成形・スス付着
75	かわらけ	8.2	6.2	1.6	轆轤成形
76	かわらけ	8.0	5.8	1.5	轆轤成形
77	かわらけ	8.1	6.0	1.7	轆轤成形
78	かわらけ	8.1	5.2	1.9	轆轤成形
79	かわらけ	(8.3)	(5.2)	1.9	轆轤成形
80	かわらけ	(8.2)	(5.2)	2.0	轆轤成形
81	かわらけ	8.2	7.2	1.3	轆轤成形
82	かわらけ	8.2	6.4	1.5	轆轤成形
83	かわらけ	8.0	5.8	1.5	轆轤成形
84	かわらけ	8.0	4.8	2.0	轆轤成形
85	かわらけ	8.2	6.4	1.8	轆轤成形
86	かわらけ	8.4	5.4	2.1	轆轤成形
87	かわらけ	(8.2)	6.2	1.9	轆轤成形

88	かわらけ	8.4	5.4	1.9	轆轤成形
89	かわらけ	(8.4)	(6.6)	1.9	轆轤成形
90	かわらけ	8.4	6.0	1.7	轆轤成形
91	かわらけ	8.0	5.4	1.9	轆轤成形
92	かわらけ	8.4	(5.0)	2.3	轆轤成形
93	かわらけ	8.7	7.1	1.8	轆轤成形
94	かわらけ	(8.6)	(5.8)	2.1	轆轤成形
95	かわらけ	(8.4)	(6.6)	1.9	轆轤成形

図11　3面

【遺構】かわらけ溜まり　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	10.2	4.8	3.3	轆轤成形
2	かわらけ	9.9	5.5	3.5	轆轤成形
3	かわらけ	10.4	5.8	3.0	轆轤成形
4	かわらけ	(10.4)	5.6	3.5	轆轤成形
5	かわらけ	(11.3)	6.5	3.3	轆轤成形
6	かわらけ	10.6	5.5	3.5	轆轤成形
7	かわらけ	10.4	6.4	3.2	轆轤成形
8	かわらけ	10.8	4.8	3.5	轆轤成形
9	かわらけ	(11.1)	(6.0)	3.6	轆轤成形
10	かわらけ	(10.7)	(4.6)	3.8	轆轤成形
11	かわらけ	(10.4)	(6.9)	3.3	轆轤成形
12	かわらけ	(10.4)	(5.5)	3.7	轆轤成形
13	かわらけ	11.8	6.1	3.5	轆轤成形
14	かわらけ	11.6	6.8	3.5	轆轤成形
15	かわらけ	(10.8)	6.7	3.4	轆轤成形・ススト付着
16	かわらけ	(11.3)	(6.0)	3.6	轆轤成形
17	かわらけ	11.9	6.5	3.3	轆轤成形
18	かわらけ	(11.6)	(7.8)	3.2	轆轤成形
19	かわらけ	(11.4)	6.9	3.0	轆轤成形
20	かわらけ	11.6	6.9	3.4	轆轤成形・ススト付着
21	かわらけ	11.7	7.4	3.1	轆轤成形
22	かわらけ	(12.2)	(7.7)	3.7	轆轤成形
23	かわらけ	11.8	6.6	3.3	轆轤成形・ススト付着
24	かわらけ	11.9	7.2	3.4	轆轤成形
25	かわらけ	11.7	7.0	3.4	轆轤成形
26	かわらけ	(11.9)	(6.8)	3.2	轆轤成形
27	かわらけ	11.8	8.2	3.1	轆轤成形
28	かわらけ	(12.2)	(7.5)	3.0	轆轤成形
29	かわらけ	(11.5)	(6.3)	3.1	轆轤成形
30	かわらけ	11.7	8.1	3.3	轆轤成形
31	かわらけ	(11.8)	(7.2)	3.4	轆轤成形
32	かわらけ	(12.2)	7.9	3.1	轆轤成形
33	かわらけ	11.6	6.0	3.3	轆轤成形・ススト付着
34	かわらけ	11.9	9.3	3.1	轆轤成形
35	かわらけ	11.3	7.5	3.2	轆轤成形
36	かわらけ	(11.8)	(6.7)	3.3	轆轤成形
37	かわらけ	(12.3)	(6.6)	3.4	轆轤成形
38	かわらけ	12.0	7.8	3.2	轆轤成形
39	かわらけ	11.4	7.2	3.2	轆轤成形
40	かわらけ	11.8	7.7	3.2	轆轤成形
41	かわらけ	(11.6)	7.9	3.1	轆轤成形
42	かわらけ	(11.8)	(7.0)	3.2	轆轤成形
43	かわらけ	(12.1)	(7.8)	3.0	轆轤成形・ススト付着
44	かわらけ	11.6	7.0	3.3	轆轤成形
45	かわらけ	11.8	6.8	3.3	轆轤成形
46	かわらけ	(11.9)	(7.9)	3.0	轆轤成形
47	かわらけ	11.7	7.4	3.5	轆轤成形
48	かわらけ	(12.0)	(6.5)	3.5	轆轤成形
49	かわらけ	11.6	6.7	3.3	轆轤成形
50	かわらけ	11.7	7.6	3.3	轆轤成形
51	かわらけ	11.6	7.4	3.4	轆轤成形
52	かわらけ	(11.6)	(7.0)	3.5	轆轤成形
53	かわらけ	(11.8)	(7.3)	3.6	轆轤成形
54	かわらけ	11.6	7.0	3.3	轆轤成形
55	かわらけ	12.0	7.4	3.4	轆轤成形
56	かわらけ	(11.4)	(7.2)	3.3	轆轤成形

図12　3面

【遺構】かわらけ溜まり　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	11.4	6.4	3.5	轆轤成形
2	かわらけ	(11.6)	7.0	3.8	轆轤成形
3	かわらけ	12.0	6.6	3.6	轆轤成形
4	かわらけ	(11.5)	6.8	4.2	轆轤成形
5	かわらけ	(11.8)	7.1	3.6	轆轤成形
6	かわらけ	(11.2)	6.6	3.7	轆轤成形
7	かわらけ	12.0	7.0	3.5	轆轤成形
8	かわらけ	11.6	6.8	4.1	轆轤成形
9	かわらけ	(12.2)	(8.5)	3.0	轆轤成形
10	かわらけ	12.4	7.6	3.1	轆轤成形
11	かわらけ	12.2	6.8	3.1	轆轤成形
12	かわらけ	12.1	8.1	3.3	轆轤成形
13	かわらけ	12.4	7.6	3.0	轆轤成形
14	かわらけ	12.2	7.2	3.5	轆轤成形
15	かわらけ	11.6	7.4	3.3	轆轤成形
16	かわらけ	12.4	8.8	3.1	轆轤成形
17	かわらけ	(12.1)	(7.9)	2.9	轆轤成形
18	かわらけ	(12.1)	8.2	3.2	轆轤成形
19	かわらけ	12.4	8.0	3.5	轆轤成形
20	かわらけ	12.4	7.2	3.2	轆轤成形
21	かわらけ	(12.4)	(8.4)	3.2	轆轤成形
22	かわらけ	12.3	7.6	3.3	轆轤成形
23	かわらけ	(12.0)	7.1	3.2	轆轤成形
24	かわらけ	11.9	9.3	3.3	轆轤成形
25	かわらけ	(12.5)	(7.9)	3.3	轆轤成形
26	かわらけ	11.9	7.8	3.3	轆轤成形
27	かわらけ	(12.4)	7.8	3.5	轆轤成形
28	かわらけ	12.0	7.5	3.4	轆轤成形
29	かわらけ	12.4	7.7	3.6	轆轤成形・ススト付着
30	かわらけ	12.1	6.4	3.3	轆轤成形
31	かわらけ	(12.6)	(6.8)	3.3	轆轤成形
32	かわらけ	(12.5)	(8.0)	3.3	轆轤成形
33	かわらけ	12.0	8.0	3.1	轆轤成形
34	かわらけ	(13.0)	(7.4)	3.4	轆轤成形
35	かわらけ	12.3	7.0	3.4	轆轤成形
36	かわらけ	11.8	6.7	3.2	轆轤成形
37	かわらけ	12.0	7.4	3.4	轆轤成形
38	かわらけ	12.6	7.2	3.3	轆轤成形
39	かわらけ	11.8	7.5	3.5	轆轤成形
40	かわらけ	11.9	6.8	3.4	轆轤成形・ススト付着
41	かわらけ	12.4	6.8	3.3	轆轤成形　口縁部にススト付着
42	かわらけ	(12.2)	(7.9)	3.3	轆轤成形
43	かわらけ	11.7	7.6	3.4	轆轤成形
44	かわらけ	(13.0)	7.6	3.3	轆轤成形
45	かわらけ	(12.4)	(7.6)	3.4	轆轤成形
46	かわらけ	(12.6)	(8.0)	3.4	轆轤成形
47	かわらけ	(12.0)	6.6	3.6	轆轤成形
48	かわらけ	13.2	8.0	3.4	轆轤成形
49	かわらけ	(12.8)	(8.5)	3.3	轆轤成形
50	かわらけ	12.4	7.1	3.4	轆轤成形
51	かわらけ	12.4	.8.0	3.2	轆轤成形
52	かわらけ	(12.7)	(7.4)	3.2	轆轤成形
53	かわらけ	(12.6)	7.2	3.3	轆轤成形
54	かわらけ	12.1	8.0	3.3	轆轤成形
55	かわらけ	11.9	8.1	3.3	轆轤成形
56	かわらけ	12.2	6.6	3.2	轆轤成形
57	かわらけ	12.8	6.8	3.3	轆轤成形
58	かわらけ	12.7	6.2	3.4	轆轤成形
59	かわらけ	12.1	6.8	3.4	轆轤成形
60	かわらけ	12.8	7.7	3.2	轆轤成形

図13　3面

【遺構】かわらけ溜まり　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(12.7)	(8.6)	2.9	轆轤成形
2	かわらけ	12.6	7.9	3.2	轆轤成形
3	かわらけ	(12.1)	(6.9)	3.5	轆轤成形
4	かわらけ	11.6	7.4	3.3	轆轤成形
5	かわらけ	12.6	8.4	3.3	轆轤成形
6	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.4	轆轤成形
7	かわらけ	(12.2)	(6.9)	3.5	轆轤成形
8	かわらけ	(12.2)	7.2	3.5	轆轤成形
9	かわらけ	(12.6)	7.4	3.7	轆轤成形・ススト付着
10	かわらけ	(12.4)	(8.5)	3.2	轆轤成形
11	かわらけ	(11.7)	7.2	3.5	轆轤成形
12	かわらけ	12.4	7.4	3.7	轆轤成形
13	かわらけ	12.8	7.6	3.6	轆轤成形

14	かわらけ	12.2	7.7	3.5	轆轤成形
15	かわらけ	(12.2)	(7.8)	3.4	轆轤成形
16	かわらけ	(12.0)	(6.4)	3.5	轆轤成形
17	かわらけ	12.4	8.0	3.4	轆轤成形
18	かわらけ	12.0	7.9	3.5	轆轤成形
19	かわらけ	(12.8)	7.8	3.5	轆轤成形
20	かわらけ	12.3	7.4	3.5	轆轤成形
21	かわらけ	(12.1)	7.0	3.6	轆轤成形
22	かわらけ	12.0	6.6	3.5	轆轤成形
23	かわらけ	12.2	6.8	3.6	轆轤成形
24	かわらけ	12.4	7.2	3.6	轆轤成形
25	かわらけ	(12.3)	7.4	3.6	轆轤成形
26	かわらけ	12.2	7.4	3.6	轆轤成形・スス付着
27	かわらけ	(12.6)	7.6	3.6	轆轤成形
28	かわらけ	12.0	7.5	3.6	轆轤成形
29	かわらけ	11.9	6.9	3.5	轆轤成形
30	かわらけ	(12.3)	7.4	3.6	轆轤成形
31	かわらけ	12.1	6.5	3.4	轆轤成形
32	かわらけ	12.6	7.4	3.5	轆轤成形
33	かわらけ	12.6	8.8	3.2	轆轤成形
34	かわらけ	12.2	7.8	3.4	轆轤成形
35	かわらけ	(12.0)	(6.9)	3.6	轆轤成形
36	かわらけ	12.8	7.7	3.6	轆轤成形
37	かわらけ	(12.2)	(7.1)	3.5	轆轤成形
38	かわらけ	12.1	7.7	3.4	轆轤成形
39	かわらけ	12.2	7.8	3.5	轆轤成形
40	かわらけ	12.8	8.0	3.6	轆轤成形
41	かわらけ	12.3	6.5	3.7	轆轤成形
42	かわらけ	12.4	7.4	3.6	轆轤成形
43	かわらけ	(12.9)	(8.4)	3.3	轆轤成形
44	かわらけ	12.9	8.4	3.5	轆轤成形
45	かわらけ	12.2	7.4	3.5	轆轤成形
46	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.7	轆轤成形
47	かわらけ	12.9	8.0	3.7	轆轤成形
48	かわらけ	12.5	7.7	3.7	轆轤成形
49	かわらけ	12.6	8.4	3.3	轆轤成形・スス付着
50	かわらけ	12.4	8.2	3.4	轆轤成形
51	かわらけ	(12.8)	7.1	3.5	轆轤成形
52	かわらけ	12.6	7.2	3.5	轆轤成形
53	かわらけ	12.8	7.6	3.5	轆轤成形
54	かわらけ	(13.1)	(7.6)	3.5	轆轤成形
55	かわらけ	(12.8)	(7.7)	3.5	轆轤成形
56	かわらけ	(12.6)	(6.3)	3.6	轆轤成形
57	かわらけ	(12.3)	(9.3)	3.7	轆轤成形
58	かわらけ	12.8	7.0	3.7	轆轤成形
59	かわらけ	12.1	7.0	3.5	轆轤成形

図14　3面

【遺構】かわらけ溜まり　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	12.1	7.2	3.8	轆轤成形
2	かわらけ	(12.2)	6.1	3.8	轆轤成形
3	かわらけ	11.6	8.1	3.9	轆轤成形
4	かわらけ	(12.6)	6.6	3.9	轆轤成形・スス付着
5	かわらけ	12.1	6.6	3.7	轆轤成形
6	かわらけ	13.2	6.5	4.0	轆轤成形
7	かわらけ	12.4	7.4	3.7	轆轤成形
8	かわらけ	(12.5)	(6.2)	3.7	轆轤成形
9	かわらけ	12.5	6.6	3.8	轆轤成形・スス付着
10	かわらけ	13.2	7.4	3.7	轆轤成形
11	かわらけ	12.4	7.0	3.9	轆轤成形
12	かわらけ	12.8	7.8	3.7	轆轤成形
13	かわらけ	(12.2)	7.6	3.9	轆轤成形
14	かわらけ	13.1	7.1	3.8	轆轤成形
15	かわらけ	(12.4)	(7.9)	3.7	轆轤成形
16	かわらけ	12.9	7.2	3.9	轆轤成形
17	かわらけ	13.1	7.8	3.7	轆轤成形
18	かわらけ	13.0	8.2	3.7	轆轤成形
19	かわらけ	13.0	7.0	3.9	轆轤成形
20	かわらけ	(13.1)	7.3	3.9	轆轤成形
21	かわらけ	(13.1)	(8.6)	3.1	轆轤成形
22	かわらけ	(13.7)	(8.2)	2.9	轆轤成形
23	かわらけ	13.1	8.2	4.0	轆轤成形
24	かわらけ	13.4	8.7	3.8	轆轤成形
25	かわらけ	(13.4)	6.6	4.0	轆轤成形
26	かわらけ	13.2	7.5	3.8	轆轤成形
27	かわらけ	13.3	7.2	4.0	轆轤成形
28	かわらけ	(13.4)	7.8	3.9	轆轤成形
29	かわらけ	13.4	5.2	4.1	轆轤成形
30	かわらけ	13.6	8.2	3.7	轆轤成形
31	かわらけ	13.6	6.8	3.9	轆轤成形
32	かわらけ	(13.8)	7.5	4.1	轆轤成形
33	かわらけ	14.0	8.2	3.9	轆轤成形
34	かわらけ	(14.4)	9.4	3.8	轆轤成形
35	かわらけ	14.4	8.4	3.2	轆轤成形
36	白かわらけ	12.0		3.1	手捏ね成形乳白色のきめ細かい胎土
37	白かわらけ	口径12.6　口縁部片			手捏ね成形
38	白かわらけ	口径10.4　口縁部片			手捏ね成形
39	碁石	幅1.9　厚0.7			
40	碁石	幅1.6　厚0.4			
41	鉄製品・釘	長9.9	幅0.5	厚0.5	
42	鉄製品・釘	長10.5	幅0.5	厚0.3	
43	木製品・串状	長46.0	幅1.6	厚.06	用途不明
44	木製品・串状	長30.0	幅0.9	厚0.5	
45	木製品・箆状	長24.5	幅1.1	厚0.3	
46	木製品・箸	長23.3	幅0.5	厚0.3	
47	木製品・箸	長21.4	幅0.5	厚0.4	
48	木製品・箸	長21.5	幅0.6	厚0.3	
49	木製品・箸	長20.0	幅0.6	厚0.5	
50	木製品・箸	長20.3	幅0.6	厚0.5	

図15　3面

【遺構】大路側側溝Ⅲ　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青磁・櫛掻文碗	底径3.4　底部片			同安窯系
2	青白磁・合子蓋	7.0	6.8	1.8	景徳鎮窯系
3	青磁・皿（碗）	底部片			龍泉窯系
4	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅰ類
5	土器質火鉢	口縁部片			丸浅鉢型
6	土鍋	体部片			伊勢系
7	碁石	最大径2.2　厚0.4			
8	かわらけ	6.8	(4.8)	1.4	轆轤成形
9	かわらけ	6.6	3.8	2.0	轆轤成形
10	かわらけ	7.1	4.6	2.2	轆轤成形
11	かわらけ	7.0	4.3	2.2	轆轤成形
12	かわらけ	(7.3)	4.2	2.0	轆轤成形
13	かわらけ	7.8	5.5	1.5	轆轤成形
14	かわらけ	(7.6)	(4.4)	2.0	轆轤成形
15	かわらけ	(7.8)	5.6	1.9	轆轤成形
16	かわらけ	7.8	5.6	1.4	轆轤成形
17	かわらけ	(7.9)	(5.2)	2.0	轆轤成形
18	かわらけ	7.6	5.2	1.9	轆轤成形
19	かわらけ	7.8	5.0	1.5	轆轤成形
20	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.7	轆轤成形
21	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.6	轆轤成形
22	かわらけ	8.0	6.4	1.7	轆轤成形
23	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.7	轆轤成形
24	かわらけ	7.8	6.0	1.6	轆轤成形
25	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.7	轆轤成形
26	かわらけ	7.6	5.2	1.5	轆轤成形
27	墨書かわらけ	7.8	5.4	1.7	轆轤成形
28	かわらけ	(7.8)	5.2	1.9	轆轤成形
29	かわらけ	8.3	6.2	1.9	轆轤成形
30	かわらけ	8.1	5.0	1.8	轆轤成形
31	かわらけ	7.2	4.6	2.4	轆轤成形
32	かわらけ	(11.2)	6.2	3.3	轆轤成形
33	かわらけ	(11.6)	(6.6)	3.0	轆轤成形
34	かわらけ	(11.8)	(7.4)	2.9	轆轤成形
35	かわらけ	10.9	6.8	2.9	轆轤成形・スス付着
36	かわらけ	(11.6)	(6.4)	3.6	轆轤成形
37	かわらけ	(12.0)	7.0	3.4	轆轤成形
38	かわらけ	(11.4)	(6.2)	3.1	轆轤成形
39	かわらけ	11.6	6.6	3.2	轆轤成形
40	かわらけ	(12.2)	(8.0)	3.1	轆轤成形
41	かわらけ	12.2	8.0	3.5	轆轤成形
42	かわらけ	(12.4)	6.8	3.4	轆轤成形
43	かわらけ	(12.6)	(8.4)	3.4	轆轤成形
44	かわらけ	(12.4)	(7.0)	3.2	轆轤成形
45	かわらけ	(12.8)	(7.0)	3.6	轆轤成形

46	かわらけ	(12.2)	7.8	3.1	轆轤成形
47	かわらけ	12.0	6.4	3.1	轆轤成形
48	かわらけ	(13.0)	(7.2)	3.6	轆轤成形
49	かわらけ	(12.3)	7.4	3.5	轆轤成形
50	かわらけ	(12.4)	7.8	3.0	轆轤成形
51	かわらけ	(13.2)	(8.4)	3.5	轆轤成形
52	かわらけ	(12.5)	(8.2)	3.3	轆轤成形・スス付着
53	かわらけ	(13.2)	(8.6)	3.3	轆轤成形
54	かわらけ	(12.8)	(8.6)	3.3	轆轤成形
55	かわらけ	(12.6)	(8.6)	3.4	轆轤成形・スス付着
56	かわらけ	(13.0)	7.6	4.0	轆轤成形
57	かわらけ	(13.0)	(8.4)	3.1	轆轤成形
58	かわらけ	(13.2)	(8.6)	3.5	轆轤成形
59	かわらけ	(13.2)	(8.6)	3.7	轆轤成形
60	かわらけ	(8.1)		1.8	手捏ね成形
61	かわらけ	(7.9)		1.9	手捏ね成形
62	かわらけ	(7.6)		1.7	手捏ね成形

図16　3面

【遺構】大路側溝Ⅲ　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品（木簡？）	長32.9	幅3.7	厚0.3	
2	木製品（木簡？）	長29.0	幅4.0	厚0.3	
3	漆器・椀	底径6.0　底部片			黒地無文様
4	漆器・椀	口縁部片			黒地朱文様　菊花文　花・葉など複数のスタンプを用いた施文
5	漆器・椀	体部片			黒地朱文様　楓文か　スタンプによる施文
6	木製品・円盤	径(2.9)　厚.03			
7	漆製品	残長(13.2)	幅1.3	厚1.2	部材

【遺構】P－3

8	漆器・皿		底径(6.4)		黒地朱文様　亀甲文　スタンプによる施文

【遺構】P－4

9	漆製品	残長(15.8)	幅1.8	厚0.3	部材

【遺構】土壙－1

10	木製品	残23.5	幅0.9	厚0.4	用途不明
11	木製品・箸	長24.5	幅0.6	厚.04	
12	木製品・箸	長24.5	幅0.4	厚0.3	
13	木製品・箸	長23.8	幅0.5	厚0.3	
14	木製品・箸	長23.5	幅0.5	厚0.5	
15	木製品・箸	長23.1	幅0.5	厚0.3	
16	木製品・箸	長22.5	幅0.5	厚0.5	
17	木製品・箸	長21.6	幅0.6	厚0.5	
18	木製品・箸	長22.6	幅0.6	厚0.4	
19	木製品・折敷	長23.6	残9.5	厚0.2	
20	木製品・折敷	長23.4	残22.6	厚0.3	
21	木製品・形代か	縦10.0	横2.3	厚0.6	用途不明
22	漆器・皿	9.2	6.2	1.8	黒地無文様
23	漆器・椀	(13.0)	(7.0)	6.0	黒地無文様

図17　3面

【遺構】大路側溝Ⅲ控え梁　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	長さ	幅	厚さ	成形・特徴
1	木製品・引き材	170	7	8	
2	木製品・引き材	188	8.4	9.6	側面に三鱗紋刻印
3	木製品・引き材	128	8.2	5.2	
4	木製品・引き材	157	8.8	10.4	
5	木製品・引き材	141.5	8	9.8	

図18　3面

【3面まで】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青白磁・梅瓶	口径(5.6)　口縁部片			
2	青白磁・梅瓶	頸部片			
3	青白磁・梅瓶	肩部片			
4	青白磁・瓶	体部片			
5	青白磁・水注（瓶）	底径4.7　底部片			
6	青白磁・皿	底径(5.2)　底部片			型作りか
7	青白磁・合子か	底径(3.3)　底部片			型作り
8	青白磁・合子	底径(7.1)　底部片			
9	青磁・皿	口縁部片			
10	青磁・花生	肩部片			
11	青磁・花生（？）	口径(7.2)　口縁部片			
12	青磁・合子蓋	口径(7.5)　最大径(9.2)　口縁部片			
13	青磁・蓋	口縁部片			
14	青磁・折縁皿	口縁部片			外面に蓮弁文
15	青磁・折縁皿	口縁部片			
16	青磁・皿	口径(9.0)　口縁部片			
17	青磁・折縁皿	口径(9.8)最大径(12.6)　口縁部片			
18	青磁・折縁鉢	口縁部片			
19	青磁・有蓋壺の蓋	口縁部片			
20	青磁・碗	口縁部片			同安窯系
21	青磁・皿	口径(13.5)　口縁部片			
22	白磁・袋物か	体部片			破片２、同一個体
23	白磁・口兀碗	口径(18.3)　口縁部片			
24	瀬戸・灰釉卸皿	(13.7)	(6.6)	4.0	卸目渦巻状
25	瀬戸・灰釉卸皿	(13.8)	(8.2)	4.6	
26	瀬戸・瓶子	口径3.6　肩部片			
27	瀬戸（？）	底部片			器種不明
28	瀬戸碗	口縁部片			
29	常滑・片口鉢	口径28.0　口縁部片			Ⅰ類
30	常滑・片口鉢	底部片			Ⅰ類
31	常滑・片口鉢	底部片			Ⅰ類
32	常滑・片口鉢	底部片			Ⅰ類
33	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅰ類？
34	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅱ類
35	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅱ類
36	常滑・甕	口縁部片			６a型式
37	常滑・甕	口縁部片			６a型式
38	常滑・甕	口縁部片			６b型式
39	常滑・甕	口縁部片			６b型式
40	常滑・甕	口縁部片			８型式
41	常滑・甕	口縁部片			６a型式
42	常滑・片口鉢	長5.3	幅4.3	厚0.9	転用品すり常滑
43	かわらけ	4.8	3.5	1.0	轆轤成形
44	かわらけ	(6.5)	3.8	1.7	轆轤成形
45	かわらけ	(7.0)	4.3	1.7	轆轤成形
46	かわらけ	(7.4)	4.6	1.6	轆轤成形
47	かわらけ	(7.3)	6.6	1.6	轆轤成形
48	かわらけ	8.0	4.8	1.9	轆轤成形
49	かわらけ	(7.6)	(4.6)	1.9	轆轤成形
50	かわらけ	(7.7)	4.9	2.2	轆轤成形
51	かわらけ	(8.3)	5.2	1.8	轆轤成形
52	白かわらけ		(6.7)		轆轤成形
53	かわらけ	(11.2)	(6.2)	3.1	轆轤成形
54	かわらけ	(12.6)	(6.6)	3.1	轆轤成形
55	かわらけ	12.4	8.0	3.6	轆轤成形
56	かわらけ	(13.0)	(8.0)	3.5	轆轤成形
57	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.3	轆轤成形
58	かわらけ	12.6	7.2	3.5	轆轤成形
59	かわらけ	(13.2)	8.6	3.4	轆轤成形

図19　3面

【3面まで】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	鐙瓦　Ⅲ期	瓦當径(11.2)			巴文　No.２と同笵の可能性あり
2	鐙瓦　Ⅲ期	瓦當径(11.0)			巴文　No.１と同笵の可能性あり
3	女瓦　Ⅲ期	厚2.0			凸面斜格子叩き
4	女瓦　Ⅲ期	厚1.3			凸面斜格子叩き
5	土器類・火鉢	口縁部片			丸浅鉢型不貫通孔
6	土器類・火鉢	口縁部片			丸浅鉢型
7	土器類・火鉢	口縁部片			丸浅鉢型貫通孔
8	土器類・火鉢	口縁部片			丸浅鉢型
9	火鉢（？）	口縁部片			
10	土器類・火鉢	口縁部片			丸浅鉢型
11	銭				元豊通宝篆書初鋳1076年（北宋）
12	石製品・砥石	長4.8	幅3.3	厚0.6	２面使用
13	漆製品	縦3.0	横5.1	厚0.9	雲形（膳の部品か）

14	漆器・椀		7.0		黒地朱文様菊花文手描き
15	漆器・椀	12.4	6.5	8.5	朱地無文様
16	漆器・椀		(7.0)		黒地残存部無文底面に彫り込みあり
17	漆器・椀		(7.7)		黒地朱文様葵文手描き、描き割り内外面に施文同一個体の破片あり
18	漆製品	口径(12.7)	最大径(13.4)		黒地無文様 鏡箱か
19	漆器・皿	(12.5)	(6.6)	(3.2)	黒地無文様
20	漆器・皿	(8.3)	(7.1)	1.1	黒地朱文様 情景文　手描き
21	漆器・皿	(9.6)	(8.0)	1.1	黒地朱文様 竹文　手描き
22	漆器・皿		(5.6)		菊花文スタンプ
23	漆器・椀	体部片			松喰鶴文スタンプ
24	漆器・椀	体部片			楓文　手描き

図20　3面

【3面出土】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青白磁・合子	(7.6)	(5.1)	2.9	成形・特徴
2	青白磁・合子	口径(8.0)　口縁部片			最大径(9.2)
3	青白磁・合子	口縁部片			最大径(10.1)
4	青白磁・瓶	頸部片			
5	青磁・蓋	口縁部片			
6	青磁・深鉢	口縁部片			
7	青磁・広口壺か	底部片			貼付珠文
8	青磁・碗	底部片			
9	かわらけ	11.8	7.2	3.8	轆轤成形
10	かわらけ	12.3	7.4	3.4	轆轤成形
11	かわらけ	11.8	7.2	3.5	轆轤成形
12	かわらけ	12.7	7.0	3.9	轆轤成形　口縁部ススけ付着
13	かわらけ	(12.7)	7.8	3.6	轆轤成形
14	かわらけ	13.7	8.5	3.8	轆轤成形
15	かわらけ	12.6	7.4	3.8	轆轤成形
16	木製品・木簡	残9.7	幅1.6	厚0.8	題箋か 表：信乃下向路銀 裏：不明
17	漆製品・脚	長10.5	幅2.1	厚2.6	黒漆

図22　4面

【遺構】溝状遺構1　　（　）は復元寸法、単位：cm

No	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青磁・鎬連弁文碗	口縁部片			
2	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅱ類
3	瀬戸・小壺？	底部片			
4	瓦器質・黒縁皿	(10.4)	(6.8)	2.4	
5	かわらけ	10.1	5.9	3.4	轆轤成形
6	かわらけ	(11.8)	(8.0)	3.3	轆轤成形・ススけ付着
7	かわらけ	10.8	6.3	3.1	轆轤成形
8	かわらけ	(11.8)	(8.0)	2.8	轆轤成形
9	かわらけ	(12.0)	(8.8)	3.2	轆轤成形
10	かわらけ	(7.2)		1.7	手捏ね成形
11	かわらけ	(9.8)		2.0	手捏ね成形
12	木製品・形代	残28.7	幅2.3	厚0.4	刀形
13	木製品・栓	長5.0	幅4.3	厚3.0	
14	木製品・栓	長8.0	幅1.8	厚1.9	
15	木製品	長13.0	幅2.8	厚0.5	用途不明
16	木製品	径(6.2)　厚1.0			用途不明
17	木製品・折敷	残18.0	残2.5	厚0.1	漆付着
18	木製品・棒状	長23.8	幅1.2	厚1.8	
19	木製品・箆状	長25.9	幅1.8	厚0.8	
20	木製品・箆状	長26.5	幅0.8	厚0.5	
21	木製品・箆状	長28.5	幅1.8	厚0.8	
22	木製品・羽子板状	長35.0	幅4.4	厚0.8	
23	漆製品	残17.0	幅1.5	厚0.7	用途不明部材　黒漆塗り
24	木製品・草履芯	長22.8	幅8.2	厚0.3	
25	木製品・草履芯	長22.4	幅9.4	厚0.3	
26	木製品・下駄	長21.8	幅9.0	厚1.3	

図23　4面

【遺構】溝状遺構1　　（　）は復元寸法、単位：cm

No	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品・円盤状	径(32.0)　厚0.8			
2	木製品・円盤状	径(17.0)　厚0.6			
3	漆製品・箆？	長13.0	幅4.9	厚0.3	黒漆が部分的に残存する
4	鉄製品・釘	長6.2	幅0.4	厚0.3	
5	漆器・椀		7.2		黒地無文様
6	漆製品・櫛	縦4.1	横(3.8)	厚0.8	黒漆梳き櫛
7	漆製品・櫛	残3.9	残幅2.1	厚0.8	黒漆梳き櫛
8	漆製品・櫛	縦4.0	残幅1.9	厚0.8	黒漆梳き櫛

【遺構】溝状遺構2

9	青磁・鎬蓮弁文碗	体部片			
10	かわらけ	7.4	5.4	1.7	轆轤成形
11	かわらけ	(11.5)	(7.2)	2.9	轆轤成形
12	木製品・栓	径3.2　高3.0			
13	木製品・草履芯	長22.8	幅4.5	厚0.3	
14	木製品・刀形	残33.8	幅3.3	厚0.4	
15	木製品・箸	長24.8	幅0.7	厚0.5	
16	木製品・箸	長24.2	幅0.6	厚0.3	
17	木製品・箸	長23.6	幅0.6	厚0.5	
18	木製品・箸	長23.6	幅0.7	厚0.4	
19	木製品・箸	長23.4	幅0.7	厚0.5	
20	木製品・箸	長23.8	幅0.7	厚0.3	
21	木製品・箸	長23.7	幅0.5	厚0.3	
22	木製品・箸	長23.7	幅0.7	厚0.5	
23	木製品・箸	長23.0	幅0.7	厚0.4	
24	木製品・箸	長23.7	幅0.5	厚0.3	
25	木製品・箸	長23.6	幅0.5	厚0.4	
26	木製品・箸	長23.4	幅0.6	厚0.3	
27	木製品・箸	長23.6	幅0.6	厚0.4	
28	木製品・箸	長23.3	幅0.7	厚0.4	
29	木製品・箸	長21.4	幅0.7	厚0.3	
30	木製品・箸	長21.5	幅0.7	厚0.2	
31	木製品・折敷	長22.8	残1.8	厚0.1	

図24　4面

【遺構】溝状遺構1　　（　）は復元寸法、単位：cm

No	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青磁・鎬連弁文碗	(16.0)口縁部片			
2	青磁・碗	底部片			
3	白磁・蓋	口縁部片			型づくり
4	白かわらけ	口縁部片			手捏ね成形
5	白かわらけ	口縁部片			手捏ね成形
6	かわらけ	7.6	4.8	1.7	轆轤成形・ススけ付着
7	かわらけ	8.2	5.6	1.7	轆轤成形
8	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.5	轆轤成形
9	かわらけ	(8.4)	(5.4)	1.6	轆轤成形・ススけ付着
10	かわらけ	8.1	5.8	1.7	轆轤成形
11	かわらけ	(7.6)	(4.4)	1.8	轆轤成形
12	かわらけ	(8.4)	(5.6)	1.6	轆轤成形
13	かわらけ	(8.2)	(6.6)	1.7	轆轤成形
14	かわらけ	(7.8)	(4.3)	1.8	轆轤成形
15	かわらけ	(9.2)	(6.6)	1.7	轆轤成形
16	かわらけ	(11.2)	(7.4)	3.1	轆轤成形
17	かわらけ	(11.8)	(8.0)	3.1	轆轤成形
18	かわらけ	(11.8)	(8.0)	2.5	轆轤成形
19	かわらけ	(11.8)	(8.1)	3.0	轆轤成形・ススけ付着
20	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.1	轆轤成形
21	かわらけ	(12.4)	8.6	2.9	轆轤成形
22	かわらけ	(12.2)	(7.4)	3.0	轆轤成形・ススけ付着
23	かわらけ	(12.9)	(7.6)	3.0	轆轤成形・ススけ付着
24	かわらけ	(12.0)	(8.1)	3.4	轆轤成形
25	かわらけ	(12.6)	(7.6)	3.6	轆轤成形
26	かわらけ	(12.7)	7.6	3.5	轆轤成形・ススけ付着
27	かわらけ	(13.2)	(7.6)	3.2	轆轤成形
28	かわらけ	(7.8)		1.9	手捏ね成形
29	かわらけ	(9.0)		1.7	手捏ね成形
30	土器質・火鉢	口縁部片			丸浅鉢型
31	土器質・火鉢	口縁部片			丸浅鉢型不貫通孔
32	土器質・火鉢	底径(27.2)　底部片			
33	鉄製品・釘	長11.5	幅0.2	厚0.3	

図25　4面

【遺構】板溝状遺構　　（　）は復元寸法、単位：cm

No	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品・箸	長25.0	幅0.7	厚0.5	
2	木製品・箸	長24.7	幅0.5	厚0.5	
3	木製品・箸	長22.6	幅0.7	厚0.4	
4	木製品・箸	長29.5	幅0.9	厚1.0	
5	木製品・箸	長20.3	幅0.9	厚0.3	
6	木製品・篦状	長21.0	幅1.5	厚0.9	
7	木製品・篦状	長24.4	幅1.1	厚0.8	
8	木製品・串状	残28.8	幅1.4	厚0.7	
9	木製品・串状	残29.7	幅0.9	厚0.6	
10	木製品	縦1.8	残11.3	厚0.2	用途不明
11	木製品	長12.5	幅1.3	厚0.3	用途不明
12	木製品・栓（？）	径5.6　厚4.6			
13	木製品・折敷	長23.0	残8.5	厚0.1	
14	木製品・草履芯	長22.4	残3.4	厚0.3	
15	木製品	残16.0	幅1.2	厚0.9	用途不明
16	漆製品	長24.6	幅1.8	厚0.8	部材　漆塗膜残存、釘穴あり
17	漆製品	長33.3	幅1.8	厚0.8	部材　漆塗膜残存、釘穴あり
18	漆製品	長46.5	幅1.8	厚0.8	部材　漆塗膜残存、釘穴あり
19	漆製品・篦	残13.3	幅1.7	厚0.7	一部に漆が残る
20	漆器・Ⅲ	底部片			黒地朱文様　花文か？　手描き
21	漆器	底部片			黒地朱文様　笹文　手描き
22	漆器	体部片			黒地朱文様　花文　スタンプ

図26　4面

【遺構】柱穴列１－１　　（　）は復元寸法、単位：cm

No	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(8.8)	(6.4)	1.9	轆轤成形
2	かわらけ	(13.3)	(9.0)	3.3	轆轤成形
【遺構】柱穴列１－４					
3	常滑無頸壺	(13.1)	(12.4)	6.2	
【遺構】柱穴列２－１					
4	木製品・草履芯	長22.9	幅4.6	厚0.2	
5	木製品・箸	長23.3	幅0.5	厚0.5	
6	木製品・形代（？）	長8.8	幅1.2	厚0.5	
【遺構】柱穴列２－２					
7	かわらけ	(7.5)	(5.6)	1.3	轆轤成形
8	かわらけ	(8.2)	(5.2)	1.6	轆轤成形
9	かわらけ	(9.6)	(6.4)	1.7	轆轤成形
10	かわらけ	(8.8)		1.8	手捏ね成形
【遺構】柱穴列２－３					
11	かわらけ	(11.2)	(6.1)	3.0	轆轤成形
12	木製品	最大長 7.0	最大幅 4.1	厚2.0	用途不明　釘の長さ6.8
13	木製品・建具	残13.5	幅1.7	厚1.7	
【遺構】柱穴列２－４					
14	青磁・碗	底径5.0　底部片			
15	青磁・鎬蓮弁文碗	口径12.4　口縁部片			
【遺構】柱穴列３－１					
16	かわらけ	(11.0)	(6.4)	3.1	轆轤成形・ススト付着
17	白かわらけ	(10.3)		2.5	手捏ね成形
18	漆器・椀	口縁部片			黒地朱文様　三つ巴スタンプ
【遺構】柱穴列４－４					
19	かわらけ	(11.8)	(7.6)	3.2	轆轤成形
【遺構】柱穴列４－５、６					
20	瓦器質・黒縁Ⅲ	11.2	7.6	3.2	ススト付着
21	瓦器・碗	口縁部片			内面体部にかけて横位と縦位の暗文が入る
22	木製品・折敷	長33.0	残9.8	厚0.4	
23	木製品・栓	長4.6	幅2.8	厚2.4	
24	木製品	長16.5	幅1.1	厚0.7	用途不明
【遺構】柱穴列４－18					
25	かわらけ	(11.8)	(6.2)	3.4	轆轤成形
【遺構】柱穴列４－24					
26	かわらけ	(7.5)	(5.3)	1.6	轆轤成形
27	かわらけ	(11.8)	(7.4)	3.5	轆轤成形
28	木製品・箸	長21.0	幅0.5	厚0.5	
29	木製品・箸	長24.3	幅0.5	厚0.3	
30	木製品・串状	長27.1	幅1.0	厚0.5	
31	木製品・蓋	径(20.0)　厚0.7			

図27　4面

【遺構】柱柱列４－48　　（　）は復元寸法、単位：cm

No	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(9.4)	7.6	1.4	成形・特徴
2	木製品・墨壺	縦19.9	横9.9	高5.6	轆轤成形　形態は舟形尻割型、明治12年東大寺南大門の梁上から発見されたものに類似。舟形の前部に円形の墨池が穿たれ、後部は大きく刳り取られる。両側に環状金具を付けて糸車が取り付く。墨池と糸車の間には下振り用の鉄環が付く。東大寺墨壺と類似点が多く、13世紀後半代と推察される
3	木製品・荷札（？）	縦4.8	横2.3	厚0.3	表面に墨書有り「土□」
4	木製品・墨書折敷	縦28.4	横27.3	厚0.1	ブンマワシの跡残存　16弁菊花文
5	木製品	残16.0	幅6.8	厚4.3	部材火を受ける

図28　4面

【遺構】Ｐ－26　　（　）は復元寸法、単位：cm

No	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品	長8.2	幅2.5	厚1.7	用途不明
2	木製品・箸	長22.6	幅0.8	厚0.5	
3	木製品・箸	長20.3	幅0.6	厚0.5	
4	木製品・折敷	長24.0	残8.4	厚0.1	
【遺構】Ｐ－27					
5	木製品	長26.5	残幅5.2	厚0.4	用途不明　火を受けている
6	木製品	長25.0	幅9.7	厚0.5	用途不明
7	木製品・曲物	径(24)	高(4.5)	厚0.3	
【遺構】Ｐ－２					
8	かわらけ	(7.8)	(6.4)	1.4	轆轤成形
9	かわらけ	12.4	7.6	2.9	轆轤成形
10	木製品	残8.9	幅2.2	厚0.1	用途不明
11	木製品・箸	長23.4	幅0.7	厚0.4	
12	木製品・篦状	残15.6	幅1.0	厚0.3	
【遺構】Ｐ－７					
13	かわらけ	7.6	5.6	1.5	轆轤成形
14	かわらけ	(7.8)	5.8	1.6	轆轤成形
15	かわらけ	(8.6)	(7.2)	1.3	轆轤成形
【遺構】Ｐ－10					
16	かわらけ	12.3	8.0	3.0	轆轤成形
【遺構】Ｐ－11					
17	瓦質・火鉢	口縁部片			口縁部にヘラによるみがき
18	木製品・箸	長22.9	幅0.6	厚0.5	
19	木製品・箸	長23.5	幅9.0	厚0.4	
20	木製品・草履芯	長23.5	幅9.0	厚0.2	
【遺構】Ｐ－12					
21	かわらけ	7.8	5.6	1.7	轆轤成形
22	木製品・箸	長21.1	幅0.6	厚0.3	
23	木製品・箸	長20.3	幅0.7	厚0.4	
24	木製品・篦状	長23.1	幅2.0	厚1.5	

図29　4面

【遺構】土壙－１　　（　）は復元寸法、単位：cm

No	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	白かわらけ	(5.0)		0.9	手捏ね成形
2	かわらけ	7.8	6.2	1.3	轆轤成形

3	かわらけ	(9.6)	(7.6)	1.8	轆轤成形
4	かわらけ	(11.9)	(7.8)	3.2	轆轤成形
5	かわらけ	(8.0)	(6.4)	1.4	轆轤成形静止糸切
6	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.5	轆轤成形
7	かわらけ	12.2	8.8	2.7	轆轤成形
8	かわらけ	(8.8)	6.2	1.6	轆轤成形・ススト付着
9	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.5	轆轤成形
10	かわらけ	(13.2)	(9.3)	2.9	轆轤成形
11	かわらけ	(12.6)	7.4	3.5	轆轤成形
12	かわらけ	13.0	8.8	3.1	轆轤成形
13	かわらけ	13.0		3.1	手捏ね成形
14	漆器・蓋	最大径(11.4)		器高3.7	合わせ口 外径(10.4) 黒地無文様
15	漆器・皿	9.1	6.6	1.8	黒地無文様
16	漆器・椀	底径(8.6)	底部片		黒地朱文様 文様菊葉　手描き
17	木製品	縦6.0	横12.4	厚0.5	用途不明
18	木製品	縦9.0	残4.2	厚0.1	用途不明
19	男瓦　Ⅲ期	残長7.4	残幅4.7	厚2.1	
20	女瓦　Ⅲ期	残長8.2	残幅6.8	厚2.1	
21	木製品・串状	長29.9	幅0.9	厚0.8	
22	木製品・串状	長27.7	幅1.0	厚0.5	
23	木製品・折敷	長25.8	残2.3	厚0.1	
24	木製品・箸	長25.5	幅0.7	厚0.3	
25	木製品・箸	長25.3	幅0.8	厚0.3	
26	木製品・箸	長25.4	幅0.5	厚0.5	
27	木製品・箸	長24.6	幅0.7	厚0.4	
28	木製品・箸	長23.8	幅0.7	厚0.3	
29	木製品・箸	長23.1	幅0.6	厚0.5	
30	木製品・箸	長22.1	幅0.7	厚0.5	
31	木製品・箸	長23.4	幅0.6	厚0.4	
32	木製品・箸	長22.6	幅0.8	厚0.5	
33	木製品・箸	長23.2	幅0.5	厚0.6	
34	木製品・円盤状	径5.0	厚0.1		
35	木製品・脚	縦1.8	横2.3	高10.8	

図30　4面

【遺構】土壙－2　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(7.2)	4.0	1.7	轆轤成形
2	かわらけ	(7.8)	5.4	1.7	轆轤成形
3	かわらけ	8.0	6.2	1.6	轆轤成形
4	かわらけ	(7.9)	(6.0)	1.7	轆轤成形
5	かわらけ	7.8	6.2	1.4	轆轤成形
6	かわらけ	8.2	6.0	1.6	轆轤成形
7	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.6	轆轤成形
8	かわらけ	(8.6)	(5.8)	1.7	轆轤成形
9	かわらけ	11.8	8.0	3.5	轆轤成形
10	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.4	轆轤成形
11	かわらけ	(12.3)	(7.6)	3.3	轆轤成形
12	かわらけ	(12.6)	(7.8)	3.6	轆轤成形
13	かわらけ	(12.2)	8.4	3.2	轆轤成形
14	かわらけ	(12.0)	(7.6)	3.6	轆轤成形・ススト付着
15	かわらけ	(12.0)	(7.2)	3.3	轆轤成形
16	かわらけ	(13.3)		3.2	手捏ね成形
17	石製品・硯	縦7.0	横5.3	厚0.8	外底面ソリはナシ
18	滑石製品・鍋	胴部鍔部片			ノミで削り落としている　加工途中か
19	青磁・劃花文碗	胴部片			薄い濃緑色
20	木製品・杓子	長18.9	幅4.5	厚0.3	
21	木製品・籌木状	長22.2	幅0.7	厚0.5	
22	木製品・箸	長20.5	幅0.7	厚0.5	
23	木製品・箸	長22.5	幅0.4	厚0.4	
24	木製品・箸	長22.3	幅0.6	厚0.6	
25	木製品・箸	長23.6	幅0.7	厚0.3	
26	木製品・箸	長26.0	幅0.8	厚0.5	
27	木製品・箸	長25.5	幅0.8	厚0.4	
28	木製品・箸	長25.0	幅0.6	厚0.6	
29	木製品・箸	長25.0	幅0.9	厚0.3	
30	木製品・箸	長24.6	幅0.7	厚0.7	
31	木製品・刀形	長30.0	幅1.7	厚0.9	削り調整
32	木製品	長28.8	幅6.3	厚2.5	部材建築部材か

図31　4面

【遺構】土壙－4　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	8.2	5.8	1.8	轆轤成形
2	かわらけ	8.6	6.2	1.7	轆轤成形
3	かわらけ	(12.4)	8.4	3.2	轆轤成形
4	かわらけ	12.0	8.2	3.2	轆轤成形・ススト付着
5	かわらけ	(12.2)	(8.3)	3.2	轆轤成形
6	かわらけ	(12.6)	7.6	3.5	轆轤成形
7	かわらけ	12.4	7.8	3.2	轆轤成形
8	かわらけ	(12.8)	(8.8)	3.0	轆轤成形
9	かわらけ	(13.0)	(8.4)	3.2	轆轤成形
10	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.2	轆轤成形
11	かわらけ	12.4	8.0	3.4	轆轤成形
12	漆器・皿		8.6		黒地無文様
【遺構】土壙－3					
13	木製品折敷	長24.3	残14.0	厚0.2	
【遺構】土壙－5					
14	木製品・折敷	長22.5	残9.0	厚0.1	
15	木製品・折敷	長22.3	残3.0	厚0.1	
16	木製品・灰掻き	残縦4.3	横10.1	厚0.5	
17	木製品	縦5.0	横10.0	厚3.1	用途不明
18	木製品・草履芯	長23.0	幅9.6	厚0.2	
19	木製品・草履芯	長23.7	幅4.7	厚0.3	
20	木製品・草履芯	長23.3	幅4.5	厚0.2	
21	木製品・箆	長18.1	幅1.4	厚0.8	
22	木製品・箆	残20.6	幅1.7	厚0.5	
23	木製品・箸	長24.4	幅0.7	厚0.3	
24	木製品・箸	長24.7	幅0.6	厚0.5	
25	木製品・箸	長25.9	幅0.5	厚0.3	
26	木製品・箸	長25.2	幅0.6	厚0.5	
27	木製品・箸	長25.0	幅0.7	厚0.4	
28	木製品・荷札（？）	長28.8	幅20.1	厚0.4	用途不明

図32　4面

【遺構】土壙－6　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品・鞘	長21.9	幅2.6	厚0.6	
2	木製品	長17.5	幅7.5	厚1.8	用途不明
3	木製品・串状	長24.9	幅0.9	厚0.6	
4	木製品・串状	残21.0	幅1.0	厚0.4	
5	木製品・箆状	残21.6	幅1.4	厚0.5	
6	木製品・箸	長23.4	幅0.6	厚0.5	
7	木製品・箸	長22.4	幅0.6	厚0.5	
8	木製品・箸	長23.4	幅0.5	厚0.5	
9	木製品・箸	長22.8	幅0.5	厚0.5	
10	木製品・箸	長22.7	幅0.5	厚0.3	
11	木製品・箸	長23.7	幅0.6	厚0.4	
12	木製品・箸	長26.4	幅0.5	厚0.3	
13	木製品・箸	長27.1	幅0.7	厚0.5	
【遺構】土壙－10					
14	木製品箆状	長21.8	幅1.1	厚0.6	
【遺構】土壙－11					
15	かわらけ	7.7	5.2	2.2	轆轤成形
16	かわらけ	8.2	5.4	1.9	轆轤成形
17	かわらけ	(8.3)	(6.3)	1.9	轆轤成形
18	かわらけ	(11.6)	(7.0)	3.0	轆轤成形
19	かわらけ	(12.7)	(9.0)	3.0	轆轤成形
20	かわらけ	12.3	6.2	3.8	轆轤成形　炭化物がタール状に付着
21	かわらけ	(11.8)	7.2	3.2	轆轤成形
22	かわらけ	(12.8)	(8.7)	3.0	轆轤成形
23	かわらけ	11.9	7.1	3.1	轆轤成形・ススト付着
24	かわらけ	13.5	9.2	3.2	轆轤成形
25	漆器・皿	9.1	6.0	1.2	黒地無紋様
26	漆器・椀		(7.0)		黒地無文様
27	漆製品・櫛	縦4.7	残13.0	厚1.0	黒漆梳き櫛
28	木製品・箸	長18.5	幅0.6	厚0.5	
29	木製品・折敷	長18.5	残6.5	厚0.1	
30	木製品・円盤状	長31.5	残10.5	厚0.5	底板か

図33　4面
【遺構】土壙－13　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(7.7)	(6.2)	1.6	轆轤成形
2	かわらけ	(8.1)	(5.4)	1.7	轆轤成形
3	かわらけ	8.0	6.3	1.6	轆轤成形
4	かわらけ	8.0	6.1	1.7	轆轤成形・ススト付着
5	かわらけ	(8.0)	5.4	1.8	轆轤成形・ススト付着
6	かわらけ	8.1	5.8	1.6	轆轤成形
7	かわらけ	8.0	6.3	1.5	轆轤成形・ススト付着
8	かわらけ	8.3	5.6	2.1	轆轤成形・ススト付着
9	かわらけ	8.2	5.0	1.9	轆轤成形
10	かわらけ	8.2	5.4	1.8	轆轤成形・ススト付着
11	かわらけ	(8.1)	(5.8)	1.7	轆轤成形
12	かわらけ	8.1	5.6	1.7	轆轤成形
13	かわらけ	(8.2)	(5.8)	2.0	轆轤成形
14	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.7	轆轤成形
15	かわらけ	8.0	5.6	1.8	轆轤成形・ススト付着
16	かわらけ	(8.3)	(5.6)	1.5	轆轤成形
17	かわらけ	(8.2)	(6.2)	1.7	轆轤成形
18	かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.7	轆轤成形
19	かわらけ	(8.1)	(5.6)	1.6	轆轤成形
20	かわらけ	(8.6)	(5.8)	2.2	轆轤成形
21	かわらけ	12.4	7.8	3.7	轆轤成形・ススト付着
22	かわらけ	(12.7)	9.2	3.3	轆轤成形・ススト付着
23	かわらけ	(13.0)	(6.0)	3.3	轆轤成形
24	かわらけ	12.4	8.4	3.2	轆轤成形・ススト付着
25	かわらけ	12.8	7.6	3.7	轆轤成形・ススト付着
26	かわらけ	13.0	7.0	3.7	轆轤成形・ススト付着
27	かわらけ	(12.8)	(7.0)	3.1	轆轤成形
28	かわらけ	13.0	8.1	3.7	轆轤成形・ススト付着
29	かわらけ	(12.2)	8.2	3.3	轆轤成形
30	かわらけ	12.9	7.9	3.6	轆轤成形・ススト付着
31	かわらけ	13.1	7.8	3.5	轆轤成形・ススト付着
32	かわらけ	12.2	7.5	3.6	轆轤成形・ススト付着
33	かわらけ	(13.2)	(6.6)	3.6	轆轤成形
34	かわらけ	13.0	7.2	3.8	轆轤成形
35	かわらけ	(13.6)	(8.3)	3.2	轆轤成形
36	かわらけ	13.0	7.3	4.2	轆轤成形
37	瓦器質・黒縁皿	口縁部片			
38	常滑・鳶口壺	底部片			
39	漆製品・櫛	縦3.7	残横4.2	厚0.8	黒漆梳き櫛
40	木製品	残15.1	残幅2.4	厚0.1	墨跡　用途不明
41	木製品・箸	長24.0	幅0.6	厚0.4	
42	木製品・箸	長24.4	幅0.7	厚0.4	
43	木製品・箸	長24.3	幅0.8	厚0.4	
44	木製品・箸	長24.7	幅0.5	厚0.3	
45	木製品・箸	長24.5	幅0.6	厚0.5	
46	木製品・箸	長24.4	幅0.6	厚0.3	
47	木製品・箸	長24.2	幅0.6	厚0.4	
48	木製品・箸	長23.9	幅0.7	厚0.4	
49	木製品・箸	長24.2	幅0.6	厚0.3	
50	木製品・箸	長24.0	幅0.8	厚0.4	
51	木製品・箸	長23.7	幅0.7	厚0.3	
52	木製品・箸	長23.5	幅0.5	厚0.3	
53	木製品・箸	長22.7	幅0.7	厚0.5	
54	木製品・箸	長23.0	幅0.7	厚0.3	
55	木製品・箸	長22.9	幅0.7	厚.03	
56	木製品・箸	長21.2	幅0.7	厚0.5	
57	木製品・箸	長21.3	幅0.5	厚0.4	
58	木製品・串状	長23.9	幅0.4	厚0.5	
59	木製品・串状	長24.3	幅0.8	厚0.3	
60	木製品・串状	長24.7	幅0.9	厚0.5	

図34　4面
【遺構】土壙－13　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	長	幅	厚さ	成形・特徴
1	木製品・折敷	21.6	残12.8	0.1	炭化物若干付着
2	木製品・折敷	21.7	残3.0	0.1	
3	木製品・折敷	21.7	残11.8	0.1	
4	木製品・折敷	21.6	10.3	0.1	
5	木製品・折敷	21.7	残7.6	0.1	
6	木製品・折敷	21.8	残6.6	0.1	
7	木製品・折敷	21.6	残2.6	0.1	
8	木製品・折敷	21.4	残5.8	0.1	
9	木製品・折敷	20.4	残2.4	0.1	
10	木製品・折敷	21.5	残2.1	0.1	
11	木製品・折敷	21.7	残7.7	0.1	炭化物付着
12	木製品・折敷	26.9	残4.4	0.1	
13	木製品・折敷	25.9	残3.7	0.1	
14	木製品・折敷	24.8	残3.9	0.1	
15	木製品・折敷	24.6	残3.8	0.1	
16	木製品・折敷	23.4	残4.6	0.1	
17	木製品・折敷	23.3	残3.7	0.1	
18	木製品・折敷	21.9	残3.1	0.1	
19	木製品・折敷	21.7	残5.5	0.1	

図35　4面
【遺構】土壙－14　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	5.6	4.4	0.8	轆轤成形
2	漆器・皿	9.3	7.7	1.1	黒地朱文様　菊花文スタンプ
3	木製品・折敷	長23.5	残12.8	厚0.2	
4	木製品・草履芯	長22.9	幅4.5	厚0.2	
5	木製品	長32.5	幅4.7	厚0.5	用途不明
6	漆製品	残長8.4	幅1.2	厚0.6	用途不明
7	木製品・箸	長19.5	幅0.6	厚0.5	
8	木製品・箸	長19.4	幅0.4	厚0.2	
9	木製品・箸	長18.8	幅.6	厚0.4	
10	木製品・箸	長19.2	幅0.6	厚0.5	
11	木製品・箸	長24.4	幅0.7	厚0.3	
12	木製品・箸	長22.5	幅0.6	厚0.5	
13	木製品・箸	長22.3	幅0.5	厚0.4	
14	木製品・箸	長20.8	幅0.6	厚0.5	
15	木製品・箸	長21.1	幅0.5	厚0.4	
16	木製品・箸	長20.7	幅0.5	厚0.2	
17	木製品・箸	長20.7	幅0.5	厚0.4	
18	木製品・箸	長20.7	幅0.6	厚0.3	
19	木製品・箸	長21.6	幅0.6	厚0.4	
20	木製品・箸	長21.2	幅0.5	厚0.5	
21	木製品・箸	長21.6	幅0.5	厚0.3	
22	木製品・箸	長21.5	幅0.5	厚0.4	
23	木製品・箸	長20.3	幅0.6	厚0.4	
24	木製品・箸	長22.3	幅0.5	厚0.4	
25	木製品・箸	長20.0	幅0.4	厚0.3	
26	木製品・箸	長19.8	幅0.6	厚0.4	
27	木製品・箸	長24.0	幅0.6	厚0.4	
28	木製品・箸	長24.5	幅0.5	厚0.5	
29	木製品・箸	長24.7	幅0.5	厚0.4	
30	木製品・箸	長24.8	幅0.5	厚0.4	
31	木製品・箸	長24.3	幅0.6	厚0.4	
32	木製品・箸	長23.8	幅0.5	厚0.4	
33	木製品・箸	長25.1	幅0.6	厚0.5	
34	木製品・箸	長24.7	幅0.5	厚0.4	
35	木製品・箸	長24.0	幅0.6	厚0.6	
36	木製品・箸	長24.7	幅0.6	厚0.5	
37	木製品・箸	長24.2	幅0.6	厚0.5	
38	木製品・箸	長24.5	幅0.5	厚0.3	
39	木製品・箸	長26.4	幅0.6	厚0.5	
40	木製品・箸	長26.2	幅0.5	厚0.4	
41	木製品・箸	長26.1	幅0.7	厚0.4	
42	木製品・箸	長26.4	幅0.6	厚0.3	
43	木製品・串代	長25.4	幅0.7	厚0.4	
44	木製品・火付棒	長31.1	幅0.6	厚0.6	

図36　4面
【遺構】土壙－15　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青磁・鎬蓮弁文碗		口縁部片		龍泉窯系
2	瓦器質・黒縁皿		口縁部片		
3	瓦器質・黒縁皿	(10.4)	6.2	3.1	
4	かわらけ	7.4	4.6	1.7	轆轤成形・ススト付着
5	かわらけ	(8.4)	5.6	1.7	轆轤成形
6	かわらけ	8.4	5.0	1.9	轆轤成形・ススト付着
7	かわらけ	(12.1)	(7.6)	3.3	轆轤成形
8	かわらけ	(12.1)	(6.4)	3.4	轆轤成形・ススト付着
9	漆器・椀	9.7	6.8	1.7	黒地朱文様　鶴文手描き
10	木製品・箸	長23.4	幅0.4	厚0.3	

11	木製品・箸	長23.3	幅0.5	厚0.3	
12	木製品・箸	長23.0	幅0.5	厚0.4	
13	木製品・折敷	長24.3	残12.4	厚0.1	
14	木製品・折敷	長23.2	残13.9	厚0.1	
【遺構】土壙－16					
15	木製品・円盤状	径18.4		厚0.5	
【遺構】土壙－15					
16	木製品・折敷	長23.3	残14.2	厚0.1	
17	木製品・折敷	長23.3	残19.3	厚0.1	

図37　4面

【遺構】土壙－17　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青磁・碗				口縁部片
2	青磁・鎬蓮弁文碗		(3.0)		底部片
3	かわらけ	(7.4)	5.2	1.7	
4	かわらけ	(8.3)	5.2	1.8	
5	かわらけ	(10.8)	(5.0)	3.2	
6	かわらけ	(12.2)	7.4	3.5	
7	かわらけ	(12.2)	(8.6)	3.3	
8	かわらけ	(13.0)	(7.0)	3.6	轆轤成形・ススト付着
9	かわらけ	(13.8)	(8.8)	3.5	
10	木製品・蓋	一辺2.9cm 八角形		厚さ1.2	
11	木製品・鞘	長23.8	幅2.6	厚0.4	
12	木製品	長33.8	幅1.9	厚1.1	用途不明鉄釘遺存
13	木製品・杓子	長29.8	幅7.6	厚0.6	
14	木製品・箸	長25.0	幅0.6	厚0.4	
15	木製品・箸	長24.0	幅0.6	厚0.4	
16	木製品・箸	長23.4	幅0.6	厚0.5	
17	木製品・箸	長23.1	幅0.6	厚0.4	
18	木製品・箸	長22.9	幅0.7	厚0.5	
19	木製品・箸	長22.7	幅0.7	厚0.4	
20	木製品	残27.0	幅1.6	厚1.3	用途不明鉄釘遺存
21	木製品・草履芯	長23.2	幅9.6	厚0.3	
22	木製品・草履芯	長23.7	残8.0	厚0.2	

図38　4面

【4面まで】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青磁・鎬蓮弁文碗	底径2.8　底部片			
2	青磁・鎬蓮弁文碗	底径5.1　底部片			内底面劃花文
3	青磁・櫛掻文碗	口径(9.4)　口縁部片			
4	青磁・劃花文碗	底部片			
5	青白磁・花生か	口縁部片			
6	白磁・口兀碗	口径(17.4)　口縁部片			
7	白磁・口兀碗	口縁部片			
8	白磁・口兀皿	口縁部片			
9	白磁・口兀皿	底径5.8　底部片			
10	白磁・口兀皿	底径6.4　底部片			
11	白磁・口兀皿	(7.8)	(5.4)	1.5	
12	白磁・口兀皿	口径(8.2)　口縁部片			
13	白磁・碗	底径(4.9)　底部片			
14	常滑	口縁部片			
15	常滑・甕	口縁部片			6a型式か
16	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅰ類
17	常滑・片口鉢	底部～体部片			Ⅰ類
18	瓦器質・黒縁皿	12.2	6.8	4.0	
19	瓦器質・黒縁皿	底径(4.8)　底部片			
20	白かわらけ	口縁部片			手捏ね成形
21	土器質・火鉢	口径(36.8)　口縁部片			丸浅鉢型不貫通孔
22	土器質・火鉢	口縁部片			22、23同一個体か
23	土器質・火鉢	底部片			丸浅鉢型
24	土器質・火鉢	(48.0)	(37.0)	10.2	丸浅鉢型貫通孔
25	鉄製品・釘	残存長5.3			
26	鉄製品・釘	残存長6.6			
27	骨製品	長4.6	幅1.6	厚0.1	半円筒形 猪ノ目穿孔

図39　4面

【4面まで】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(5.8)	(4.4)	1.0	轆轤成形
2	かわらけ	(5.9)	3.7	1.2	轆轤成形
3	かわらけ	6.2	4.6	1.3	轆轤成形
4	かわらけ	7.6	6.2	1.3	轆轤成形
5	かわらけ	(7.7)	5.6	1.6	轆轤成形
6	かわらけ	7.6	5.2	1.6	轆轤成形・ススト付着
7	かわらけ	7.4	5.4	1.5	轆轤成形
8	かわらけ	7.7	6.2	1.8	轆轤成形
9	かわらけ	7.8	6.0	1.6	轆轤成形
10	かわらけ	7.8	6.1	1.7	轆轤成形
11	かわらけ	(7.6)	5.4	1.5	轆轤成形
12	かわらけ	(7.7)	5.9	1.6	轆轤成形
13	かわらけ	(8.2)	5.6	1.5	轆轤成形
14	かわらけ	7.6	5.9	1.6	轆轤成形
15	かわらけ	7.9	5.9	1.5	轆轤成形
16	かわらけ	7.4	4.3	1.9	轆轤成形
17	かわらけ	(7.4)	4.8	1.8	轆轤成形
18	かわらけ	(7.8)	5.0	2.0	轆轤成形
19	かわらけ	(7.6)	4.8	1.7	轆轤成形
20	かわらけ	(8.3)	5.8	1.5	轆轤成形
21	かわらけ	7.5	4.7	2.4	轆轤成形
22	かわらけ	7.2	3.8	2.4	轆轤成形
23	かわらけ	8.0	5.2	1.9	轆轤成形
24	かわらけ	8.4	5.3	1.9	轆轤成形
25	かわらけ	(8.9)	(7.1)	1.5	轆轤成形
26	かわらけ	7.7	5.4	1.7	轆轤成形 二箇所穿孔あり
27	かわらけ	(8.8)	5.5	2.2	轆轤成形
28	かわらけ		7.2		轆轤成形静止糸切
29	かわらけ		7.2		轆轤成形静止糸切
30	かわらけ	(11.9)	7.0	3.5	轆轤成形・ススト付着
31	かわらけ	(11.1)	(7.1)	3.0	轆轤成形
32	かわらけ	12.1	7.4	3.4	轆轤成形・ススト付着
33	かわらけ	(12.1)	(7.0)	3.4	轆轤成形
34	かわらけ	12.3	8.1	3.4	轆轤成形
35	かわらけ	(11.6)	(8.3)	3.0	轆轤成形
36	かわらけ	(12.5)	8.8	3.2	轆轤成形
37	かわらけ	(12.1)	(7.4)	3.6	轆轤成形
38	かわらけ	12.4	7.6	3.5	轆轤成形
39	かわらけ	(11.4)	6.3	3.3	轆轤成形・ススト付着
40	かわらけ	(12.3)	(7.3)	3.5	轆轤成形
41	かわらけ	(12.2)	8.0	3.5	轆轤成形
42	かわらけ	(12.8)	8.2	3.6	轆轤成形
43	かわらけ	(11.6)	(6.8)	3.4	轆轤成形
44	かわらけ	12.5	6.2	3.4	轆轤成形
45	かわらけ	12.0	7.0	3.5	轆轤成形
46	かわらけ	(12.3)	6.5	3.4	轆轤成形
47	かわらけ	(11.6)	(7.5)	3.2	轆轤成形
48	かわらけ	(12.5)	8.4	3.0	轆轤成形・ススト付着
49	かわらけ	(12.2)	(8.1)	3.2	轆轤成形
50	かわらけ	12.0	7.0	3.5	轆轤成形
51	かわらけ	11.7	6.8	3.3	轆轤成形・ススト付着
52	かわらけ	(12.5)	7.7	3.0	轆轤成形・ススト付着
53	かわらけ	12.2	7.4	3.0	轆轤成形・ススト付着
54	かわらけ	(12.9)	(8.8)	3.0	轆轤成形
55	かわらけ	(11.8)	7.1	3.5	轆轤成形・ススト付着
56	かわらけ	(12.5)	7.8	3.6	轆轤成形・ススト付着
57	かわらけ	12.4	7.7	3.0	轆轤成形・ススト付着
58	かわらけ	(12.8)	8.4	3.3	轆轤成形
59	かわらけ	(12.0)	8.6	3.2	轆轤成形
60	かわらけ	12.3	8.1	3.5	轆轤成形・ススト付着
61	かわらけ	(12.6)	(8.2)	3.2	轆轤成形
62	かわらけ	12.9	8.2	3.5	轆轤成形
63	かわらけ	(11.8)	(5.6)	3.7	轆轤成形・ススト付着
64	かわらけ	(13.1)	(6.7)	3.3	轆轤成形・ススト付着
65	かわらけ	(12.8)	(8.3)	3.3	轆轤成形・ススト付着
66	かわらけ	(12.8)	(7.1)	3.7	轆轤成形

図40　4面

【4面まで】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	女瓦　Ⅱ期	残長11.8	残幅8.0	厚2.1	凸面に斜格子
2	女瓦　Ⅱ期	残長12.8 残幅7.2 厚2.3 残長5.6 残幅6.7 厚2.3			凸面に斜格子　凹面に布目痕
3	女瓦　Ⅱ期	残長3.3 残幅7.5 厚1.8			凸面に斜格子
4	女瓦　Ⅲ期	残長5.1 残幅11.4 厚1.6			
5	女瓦　Ⅲ期	残長11.0 残幅13.1 厚2.7			凸面に斜格子
6	男瓦　Ⅰ期	四分の一の形状			凹面に布目痕
7	漆製品				栓か？

8	木製品・栓	長11.9	幅3.0	厚2.5	
9	木製品・下駄	残20.2	残幅9.7	厚1.4	
10	木製品・草履芯	長22.6	4.3	厚0.2	
11	木製品・草履芯	長23.2	4.7	厚0.2	
12	木製品・串状	長46.7	幅1.2	厚0.7	先が二股にわかれる（加工によるものかは不明）

図41　4面

【4面まで】　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	漆製品	長18.3	幅1.9	厚0.5	用途不明
2	漆製品	残長8.8	幅0.8	厚0.3	用途不明
3	漆製品	残21.7	幅2.0	厚0.9	用途不明
4	漆製品	残10.5	幅1.7	厚0.5	用途不明
5	漆製品	残20.5	幅2.2	厚0.4	用途不明
6	漆製品	残16.2	幅1.8	厚0.8	用途不明
7	木製品	長48.7	幅6.3	厚2.8	用途不明
8	木製品	長37.5	幅6.5	厚2.6	用途不明部材
9	木製品	残13.4	幅2.1	厚1.7	用途不明部材
10	木製品	長15.0	幅4.8	厚2.8	用途不明部材
11	木製品・栓か	長10.7	幅4.0	厚3.6	用途不明
12	木製品	長26.5	幅2.1	厚0.5	
13	木製品・自在鉤	残74.5	幅5.1	厚1.2	用途不明

図42　4面

【4面まで】　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	漆製品・脚	長10.5	幅2.1	厚2.6	黒漆塗り
2	漆器・皿	(9.0)	5.7	1.7	黒地朱文様 松と鶴文　手描き
3	漆器・椀	口縁部片・底部片 底径7.5			黒地朱文様 花文　手描き
4	漆器・皿	(8.3)	(6.1)	1.4	黒地朱文様 笹文　手描き
5	漆器・皿	8.8	6.2	1.3	黒地無文様
6	漆器・椀	底径1.0 体部歪み大			黒地朱文様 楓文　手描き
7	漆器・椀	底部片			黒地朱文様 桐文　スタンプ
8	木製品・櫛	縦4.2	残(1.8)	厚0.8	
9	木製品・漆箆？	残13.0	幅1.0	厚0.5	
10	漆製品・円盤状	径(11.0)　厚0.9			黒漆塗り
11	木製品・円盤状	径(20.0)　厚0.6			
12	木製品	長15.0	幅5.0	厚0.9	用途不明
13	木製品・円盤状	径12.4　厚1.4			
14	木製品・箸	長24.8	幅0.7	厚0.5	
15	木製品・箸	長24.2	幅0.5	厚0.4	
16	木製品・箸	長24.2	幅0.7	厚0.4	
17	木製品・箸	長21.8	幅0.4	厚0.4	
18	木製品・箸	長27.7	幅0.8	厚0.5	
19	木製品・箸	残28.3	幅0.8	厚0.4	
20	木製品・箸	長29.5	幅0.8	厚1.0	
21	木製品・杓子	長29.5	最大幅 8.5	厚0.7	
22	木製品	残長 25.4	幅3.2	厚1.4	用途不明
23	木製品・篦状	長20.0	幅1.6	厚0.5	
24	木製品・篦状	長19.3	幅1.0	厚0.6	
25	木製品・篦状	長26.0	幅2.3	厚0.8	
26	木製品・木簡（？）	長29.5	幅3.0	厚0.4	用途不明
27	木製品	長30.5	幅2.9	厚1.5	

図43　4面

【4面出土】　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	白磁・口兀皿	(10.8)	(7.0)	2.8	
2	白磁・口兀皿	口縁部片	口縁部片	口縁部片	
3	常滑・片口鉢	口縁部片	口縁部片	口縁部片	Ⅱ類
4	常滑・片口鉢	底部片	底部片	底部片	Ⅱ類
5	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.7	轆轤成形
6	かわらけ	(8.2)	(5.4)	1.7	轆轤成形
7	かわらけ	7.4	4.8	1.7	轆轤成形
8	かわらけ	(7.7)	(5.8)	1.7	轆轤成形
9	かわらけ	7.8	5.7	1.7	轆轤成形
10	かわらけ	8.2	5.8	1.9	轆轤成形
11	かわらけ	(8.1)	(7.0)	1.3	轆轤成形
12	かわらけ	(7.8)	(6.2)	1.5	轆轤成形
13	かわらけ	(7.8)	(5.5)	1.8	轆轤成形
14	白かわらけ	(7.8)	(4.4)	2.2	轆轤成形
15	かわらけ	(7.9)	5.5	1.7	轆轤成形 穿孔有
16	かわらけ	(8.2)	(6.3)	1.4	轆轤成形
17	かわらけ	7.3	5.2	1.5	轆轤成形
18	かわらけ	(8.0)	4.9	1.8	轆轤成形
19	瓦器質・黒縁皿	(10.0)	(6.0)	3.2	轆轤成形
20	かわらけ	(10.8)	(6.0)	3.5	轆轤成形
21	かわらけ	11.9	8.0	3.2	轆轤成形
22	かわらけ	(12.8)	(8.6)	3.2	轆轤成形
23	かわらけ	(11.8)	(7.8)	3.2	轆轤成形
24	かわらけ	12.3	7.7	3.3	轆轤成形
25	かわらけ	(12.3)	(9.2)	3.1	轆轤成形
26	かわらけ	(12.5)	7.4	3.0	轆轤成形
27	かわらけ	(12.7)	(8.4)	3.1	轆轤成形
28	かわらけ	(12.6)	(8.6)	2.8	轆轤成形
29	かわらけ	13.0	8.2	3.3	轆轤成形
30	かわらけ	12.5	7.8	3.6	轆轤成形・スス付着
31	かわらけ	11.9	8.7	2.9	轆轤成形
32	かわらけ	(12.7)	(7.8)	3.5	轆轤成形
33	かわらけ	12.6	7.9	3.7	轆轤成形・スス付着
34	かわらけ	12.2	7.8	3.1	轆轤成形・スス付着
35	かわらけ	12.6	8.6	3.5	轆轤成形
36	かわらけ	(13.2)	(8.4)	3.7	轆轤成形
37	かわらけ	(11.8)	(6.8)	3.4	轆轤成形
38	かわらけ	(12.8)	(7.4)	3.5	轆轤成形
39	瓦器質・黒縁皿	(13.6)	(8.8)	3.8	轆轤成形
40	かわらけ	(11.6)	(8.2)	3.1	轆轤成形
41	かわらけ	11.8	7.3	3.5	轆轤成形
42	土器質・火鉢	脚部片			
43	瓦器質・黒縁皿	(12.0)	(6.8)	3.5	轆轤成形
44	白かわらけ	(8.1)		2.1	手捏ね成形
45	白かわらけ	(7.7)	(4.2)	2.2	轆轤成形
46	男瓦　Ⅲ期	残長5.5	残幅5.8	厚2.0	筒部片
47	鉄製品・釘	残8.0	幅0.5	厚0.4	
48	鉄製品・釘	残7.4	幅0.5	厚0.7	
49	石製品・砥石	残9.0	幅2.9	厚2.0	4面使用　中砥 流紋岩細粒凝灰岩 上野産か

図44　4面

【4面出土】　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品・串状	長39.0	幅1.7	厚0.9	
2	木製品・箸	長22.6	幅0.6	厚0.4	
3	木製品・篦	長22.3	幅1.2	厚0.8	
4	木製品・折敷	長22.0	残7.3	厚0.1	
5	木製品・折敷	長21.5	残7.8	厚0.1	
6	木製品・折敷	長21.8	幅22.0	厚0.1	
7	木製品・円盤	径(50.0)　厚1.1			曲物の底か
8	木製品・串状	長28.0	幅1.1	厚0.7	
9	木製品・串状	残27.5	幅1.2	厚0.8	
10	木製品・篦状	残22.2	幅1.4	厚0.9	
11	木製品・形代（？）	残15.0	幅1.3	厚0.9	
12	木製品	長16.0	幅2.3	厚1.3	用途不明 彫刻有
13	木製品・栓	長7.1	径2.0		
14	木製品・木錘	長2.4	幅3.0	厚2.1	
15	木製品・版木（？）	残長7.5	残幅3.9	厚0.6	
16	木製品	長9.8	幅3.3	厚3.7	用途不明

図45　4面

【4面出土】　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品・鞘	長10.0	幅2.9	厚0.5	
2	木製品・鞘	長23.1	幅3.0	厚0.8	
3	木製品・鞘	残22.9	幅2.9	厚0.7	
4	木製品・鞘	残22.3	幅1.6	厚0.6	
5	木製品・鞘	長22.0	幅2.2	厚0.7	
6	木製品・矯木	長32.4	幅2.5	厚2.0	
7	木製品	長25.3	幅5.5	厚3.6	用途不明
8	木製品	長55.8	幅3.6	厚0.5	部材
9	漆製品	長18.4	幅1.7	厚0.8	部材　4面黒漆塗

10	漆製品	長23.9	幅1.8	厚0.8	部材　3面黒漆塗 釘穴あり
11	漆器・椀	口縁部片			黒地朱文様菊花・ 葉・蝶3種のスタ ンプ用いる
12	漆器・椀	底径(7.3)　底部片			黒地朱文様 楓文　スタンプ
13	漆器・椀	底径(7.8)　底部片			黒地朱文様 三ツ巴文　スタン プ
14	漆器・皿	(9.5)	6.5	1.4	黒地朱文様 葛文　手描き
15	漆器・皿	底径(6.9)　底部片			黒地朱文様 情景文　手描き
16	漆器・蓋	12.1	径13.3	3.6	全面黒漆

図47　5面

【遺構】柱穴列1－1　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(8.8)	(7.2)	1.8	轆轤成形
2	かわらけ	(11.4)		3.2	手捏ね成形
3	木製品・板状	長22.0	幅4.3	厚0.4	
4	木製品	長21.2	幅3.2	厚0.7	用途不明
【遺構】柱穴列1－5					
5	常滑甕	口縁部片			6a型式
6	木製品・箸	長22.8	幅0.6	厚0.5	
7	木製品・箸	長22.5	幅0.6	厚0.2	
8	木製品・栓	長6.5	径2.2	厚1.6	木釘遺存
【遺構】柱穴列1－6					
9	青磁碗	口縁部片			
【遺構】柱穴列2－5					
10	かわらけ	8.8		2.0	手捏ね成形
11	かわらけ	(11.6)		4.0	手捏ね成形
【遺構】柱穴列2－11					
12	青磁・碗		口縁部片		
13	かわらけ	(12.6)	(8.2)	3.1	轆轤成形
【遺構】柱穴列2－12					
14	青白磁・蓋	最大径 (5.6)	高台径 (8.5)	2.8	
15	かわらけ	12.6	8.2	3.2	轆轤成形
【遺構】柱穴列2－14					
16	かわらけ	7.8	5.5	1.7	轆轤成形
17	かわらけ	(10.4)	(7.2)	1.8	轆轤成形
18	かわらけ	(12.2)	(8.4)	3.2	轆轤成形
19	かわらけ	(12.8)	(8.8)	3.0	轆轤成形
【遺構】柱穴列2－15					
20	かわらけ	(7.8)	(6.2)	1.5	轆轤成形
【遺構】柱穴列1－6					
21	かわらけ	(8.4)	(6.2)	1.5	轆轤成形
【遺構】柱穴列2－18					
22	かわらけ	(9.6)	(7.0)	1.6	轆轤成形
23	かわらけ	(12.3)	(9.1)	2.8	轆轤成形
【遺構】柱穴列2－19					
24	かわらけ	(8.6)	(6.1)	1.6	轆轤成形
25	かわらけ	(9.7)	(7.1)	1.8	轆轤成形
【遺構】柱穴列2－20					
26	かわらけ	8.3	6.2	1.4	轆轤成形
27	かわらけ	(8.4)	(6.2)	1.3	轆轤成形
28	かわらけ	(8.4)	(6.2)	1.6	轆轤成形
29	かわらけ	(8.6)	(6.0)	1.6	轆轤成形
30	かわらけ	(11.8)	(8.0)	2.6	轆轤成形
31	かわらけ	(12.8)	(8.6)	2.5	轆轤成形・スス付着
32	漆器　皿	(8.8)	(8.0)	1.2	黒地無文様
【遺構】柱穴列2－22					
33	かわらけ	(8.5)	6.8	1.4	轆轤成形
34	かわらけ	(13.3)	8.3	2.8	轆轤成形
35	かわらけ	8.8		2.0	手捏ね成形
36	かわらけ	(8.8)		2.2	手捏ね成形
37	かわらけ質・火鉢	(25.0)	(35.0)	16.0	かわらけ質　内底 から胴下半に細い 棘状の刺突孔　口 縁下に不貫通の穴 円柱状の脚三つ、 脚中心に貫通孔 脚に肘木風飾り

図48　5面

【遺構】P－1　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(7.6)	(4.8)	1.7	轆轤成形
2	かわらけ	7.7	5.8	1.8	轆轤成形
3	かわらけ	(8.0)	(7.1)	1.6	轆轤成形
4	かわらけ	7.6	5.3	1.8	轆轤成形
5	漆器・鉢		口縁部片		黒地朱文様　菊文 手描き
【遺構】P－2					
6	かわらけ	12.6	8.2	3.4	轆轤成形
【遺構】柱穴列1－1					
7	常滑・甕		口縁部片		6a型式
8	かわらけ	7.8	6.0	1.4	轆轤成形
9	かわらけ	(7.7)	6.4	1.4	轆轤成形
10	かわらけ	(7.6)	5.8	1.5	轆轤成形
11	かわらけ	8.0	5.4	1.5	轆轤成形
12	かわらけ	(8.6)	(6.6)	1.9	轆轤成形
13	かわらけ	11.0	6.6	3.2	轆轤成形
14	かわらけ	(13.4)	9.4	3.4	轆轤成形
15	かわらけ	(13.9)	(10.6)	2.8	轆轤成形
16	かわらけ	12.2	8.4	3.0	轆轤成形
17	かわらけ	8.6		2.0	手捏ね成形
18	かわらけ	(7.6)		1.7	手捏ね成形
19	かわらけ	(9.1)		2.0	手捏ね成形
20	かわらけ	(8.0)		2.0	手捏ね成形
21	かわらけ	(10.4)			手捏ね成形
22	かわらけ	(11.4)			手捏ね成形
【遺構】土壙－1					
23	かわらけ	(8.4)	6.4	1.7	轆轤成形
24	かわらけ	(9.2)	(6.6)	1.7	轆轤成形
25	かわらけ	(8.8)	(7.0)	1.6	轆轤成形
26	かわらけ	(8.3)	(6.0)	1.8	轆轤成形
27	かわらけ	(8.2)	(5.6)	1.8	轆轤成形
28	かわらけ	(12.2)	(7.6)	3.1	轆轤成形
29	かわらけ	(13.4)	(9.0)	2.8	轆轤成形
30	かわらけ	12.8	8.2	3.0	轆轤成形・スス付着
31	かわらけ	(13.0)	(8.8)	2.9	轆轤成形
32	かわらけ	(13.4)	(9.2)	3.3	轆轤成形
33	かわらけ	8.2		1.7	手捏ね成形
34	かわらけ	(11.6)		2.8	手捏ね成形
【遺構】柱穴列P－2					
35	かわらけ	(12.8)		3.5	手捏ね成形

図49　5面

【遺構】土壙－1　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	漆器・皿	底部片			黒地に朱文様　鞠 状文のスタンプ有 り
2	漆器・皿	底部片			黒地に朱文様　菊 文　手描き
3	漆製品	長20.0		厚0.4	用途不明 黒漆塗
4	木製品・円盤状	径4.6　厚0.2			
5	木製品・箆状	長20.0	幅1.0	厚0.7	
6	木製品・箸	長24.1	幅0.7	厚0.1	
7	木製品・箸	長23.1	幅0.6	厚0.4	
8	木製品・箸	長22.4	幅0.6	厚0.5	
9	木製品・箸	長22.5	幅0.5	厚0.3	
10	木製品・箸	長22.9	幅0.5	厚0.3	
11	木製品・箸	長22.6	幅22.6	厚0.4	
12	木製品・円盤	径(30.0)　厚0.2			
13	木製品・折敷	長24.1	残11.0	厚0.2	
14	木製品・円盤	径22.4　厚1.0			
15	木製品・草履芯	長23.1	幅5.0	厚0.2	
16	木製品・杓子	残16.5	幅5.6	厚0.5	

図50　5面

【5面出土】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	常滑・片口鉢	口径(29.6)　口縁部片			Ⅰ類
2	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅱ類
3	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅱ類
4	常滑・片口鉢	(34.6)	(17.0)	11.3	Ⅱ類

5	瓦器・碗	(11.6)	(6.2)	3.0	平面輪花　内底面に菊花の暗文
6	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.3	轆轤成形
7	かわらけ	8.1	5.6	1.5	轆轤成形
8	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.5	轆轤成形
9	かわらけ	8.1	6.8	1.4	轆轤成形
10	かわらけ	7.9	5.6	1.7	轆轤成形
11	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.6	轆轤成形
12	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.4	轆轤成形・スス付着
13	かわらけ	8.0	5.6	1.7	轆轤成形
14	かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.4	轆轤成形
15	かわらけ	8.3	6.4	1.8	轆轤成形
16	かわらけ	8.1	6.8	1.5	轆轤成形
17	かわらけ	7.9	5.6	1.9	轆轤成形
18	かわらけ	(8.4)	(6.2)	1.6	轆轤成形
19	かわらけ	(8.8)	6.6	1.7	轆轤成形
20	かわらけ	8.1	6.2	1.7	轆轤成形
21	かわらけ	(8.8)	(7.8)	1.8	轆轤成形
22	かわらけ	(8.6)	4.6	2.3	轆轤成形
23	かわらけ	(8.4)	(5.8)	2.4	轆轤成形
24	かわらけ	(10.8)	(7.8)	2.7	轆轤成形
25	かわらけ	(11.8)	(7.2)	2.8	轆轤成形
26	かわらけ	12.2	9.0	2.8	轆轤成形
27	かわらけ	7.2	7.0	3.5	轆轤成形
28	かわらけ	(10.6)	7.2	3.1	轆轤成形・スス付着
29	かわらけ	(12.2)	8.6	2.9	轆轤成形
30	かわらけ	(12.8)	(9.0)	3.0	轆轤成形・スス付着
31	かわらけ	(12.4)	8.2	3.2	轆轤成形
32	かわらけ	(11.4)	(8.6)	3.0	轆轤成形
33	かわらけ	(11.8)	(9.0)	2.9	轆轤成形
34	かわらけ	12.2	8.2	3.0	轆轤成形
35	かわらけ	(12.8)	(9.0)	3.1	轆轤成形
36	かわらけ	(11.8)	6.8	3.1	轆轤成形
37	かわらけ	(12.4)	(7.2)	3.1	轆轤成形・スス付着
38	かわらけ	(12.2)	7.2	3.3	轆轤成形
39	かわらけ	(12.4)	(8.6)	3.6	轆轤成形
40	かわらけ	5.2		1.0	手捏ね成形コースター型
41	かわらけ	8.4		2.0	手捏ね成形
42	かわらけ	(8.6)		2.0	手捏ね成形
43	かわらけ	(7.6)		1.8	手捏ね成形
44	かわらけ	(8.6)		1.9	手捏ね成形・スス付着
45	かわらけ	(8.2)		2.0	手捏ね成形
46	かわらけ	(8.4)		1.9	手捏ね成形
47	かわらけ	7.9		2.0	手捏ね成形
48	かわらけ	(7.6)		1.8	手捏ね成形
49	かわらけ	(11.8)		3.3	手捏ね成形
50	かわらけ	(12.2)		3.6	手捏ね成形
51	かわらけ	13.0		3.4	手捏ね成形

図51　4面

【5面出土】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	男瓦　Ⅲ期	残長15	残幅13	厚1.7	糸切痕　離れ砂
2	碁石	長径1.8	短径1.7	厚0.5	
3	石製品・砥石	残長11.7	最大幅3.2	最大厚1.1	
4	木製品	長8.8	幅6.4	厚3.3	用途不明
5	木製品・建具	残存長24.0	幅2.5	厚3.1	
6	木製品	長34.4	幅5.5	厚2.7	用途不明鉄釘遺存
7	木製品・棒状	長41.6	幅1.5	厚1.2	
8	木製品・棒状	長42.0	幅1.2	厚0.9	
9	木製品	長48.6	幅6.0	厚3.5	用途不明

図52　4面

【5面出土】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品・木簡	長28.6	幅3.0	厚0.5	墨書表：謹請南方赤帝赤龍堅牢地神　裏：不明
2	木製品	長26.3	幅2.6	厚0.4	用途不明
3	木製品	長22.4	幅2.3	厚0.2	用途不明
4	木製品・串状	長23.6	幅0.7	厚0.7	
5	木製品・篦状	長23.0	幅1.3	厚0.8	
6	木製品・串状	長19.0	幅1.2	厚0.7	
7	木製品・篦状	長22.9	幅1.7	厚0.3	
8	木製品・篦	長27.8	幅1.7	厚1.4	
9	木製品・円盤	径(40.0)　厚1.4			
10	木製品・蓋	径7.2　厚0.9			
11	木製品・下駄	残存長17.4	幅9.2	厚1.4	
12	木製品・箸	長24.2	幅0.6	厚0.5	
13	木製品・箸	長22.0	幅0.6	厚0.3	
14	木製品・箸	長19.7	幅0.6	厚0.3	
15	木製品・箸	長21.5	幅0.4	厚0.4	
16	木製品・箸	長21.4	幅0.6	厚0.4	
17	木製品・箸	長21.0	幅0.6	厚0.4	
18	木製品・折敷	長21.7	残3.6	厚0.1	
19	木製品・灰掻き	縦4.5	横11.5	厚0.8	
20	漆器・椀	体部片			黒地朱文菊花文
21	漆器・椀	底部片			黒地朱文様　笹文手描き

図53　6面

【遺構】P－1　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.2	轆轤成形
2	かわらけ	(8.4)	(6.2)	1.7	轆轤成形
3	かわらけ	(12.8)	(9.0)	2.8	轆轤成形
4	かわらけ	(13.6)		2.6	手捏ね成形
5	木製品・鞘	長11.8	幅1.4	厚0.4	
6	鉄製品・釘	長6.6	幅0.3	厚0.1	
【遺構】P－3					
7	かわらけ	(8.0)		2.5	手捏ね成形
8	かわらけ	(13.6)	(8.6)	3.4	轆轤成形
【遺構】土壙－1					
9	青白磁・蓋	口径2.8	最大径4.6	1.1	文様は凸線で6花弁
10	常滑・甕		口縁部片		6a型式
【遺構】土壙－2					
11	木製品・草履芯	長22.3	幅4.5	厚0.2	
【遺構】土壙－6					
12	木製品・草履芯	残存長18.0	幅4.3	厚0.2	
13	木製品・円盤状	径6.6　厚0.3			
【遺構】土壙－7．8					
14	青磁・劃花文碗	口径16.4　口縁部片			緑釉
15	青白磁・碗	口径15.6　口縁部片			
16	青磁・鎬連弁文碗	口径12.0　口縁部片			
17	青磁・劃花文碗	口縁部片			
18	白磁・碗	口縁部片			
19	瀬戸・碗	口縁部片			灰釉
20	渥美・甕	口縁部片			
21	渥美・片口鉢	底部片			貼付高台
22	須恵器・碗	底径(7.8)　底部片			貼付高台　糸切り
23	かわらけ	(4.8)	(3.5)	1.0	轆轤成形
24	かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.5	轆轤成形
25	かわらけ	(8.1)	(6.4)	1.5	轆轤成形
26	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.3	轆轤成形
27	かわらけ	(7.2)	(5.6)	1.4	轆轤成形
28	かわらけ	7.6	6.6	1.8	轆轤成形
29	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.6	轆轤成形
30	かわらけ	(8.4)	(6.6)	1.5	轆轤成形
31	かわらけ	(7.7)	(6.7)	1.5	轆轤成形
32	かわらけ	8.0	5.6	1.8	轆轤成形
33	かわらけ	(7.8)	(6.7)	1.6	轆轤成形・スス付着
34	かわらけ	(7.8)	(6.6)	1.6	轆轤成形
35	かわらけ	(8.4)	(6.6)	1.6	轆轤成形
36	かわらけ	(8.9)	6.6	1.7	轆轤成形
37	かわらけ	8.4	6.6	1.7	轆轤成形
38	かわらけ	(8.4)	(7.0)	1.8	轆轤成形・スス付着
39	かわらけ	(8.6)	6.2	1.5	轆轤成形
40	かわらけ	9.0	6.9	1.8	轆轤成形
41	かわらけ	(8.9)	(6.8)	1.7	轆轤成形
42	かわらけ	9.1	7.2	1.5	轆轤成形・スス付着
43	かわらけ	(8.4)	(6.6)	1.6	轆轤成形
44	かわらけ	(8.9)	(6.9)	1.9	轆轤成形
45	かわらけ	8.7	6.6	1.9	轆轤成形
46	かわらけ	(8.6)	(7.0)	1.9	轆轤成形

47	かわらけ	(9.0)	(6.8)	2.0	轆轤成形
48	かわらけ	(9.3)	7.2	1.7	轆轤成形
49	かわらけ	(9.0)	(7.3)	1.7	轆轤成形
50	かわらけ	(9.6)	(7.6)	1.7	轆轤成形
51	かわらけ	9.2	7.6	1.5	轆轤成形
52	かわらけ	9.2	6.8	1.9	轆轤成形
53	かわらけ	9.1	7.0	1.9	轆轤成形
54	かわらけ	(9.2)	(6.8)	1.9	轆轤成形
55	かわらけ	9.1	6.7	2.0	轆轤成形
56	かわらけ	9.7	7.7	2.0	轆轤成形・ススト付着
57	かわらけ	9.2	7.5	2.0	轆轤成形
58	かわらけ	9.5	7.0	2.0	轆轤成形・ススト付着
59	かわらけ	(9.0)	(7.2)	2.0	轆轤成形
60	かわらけ	(10.1)	(7.8)	2.0	轆轤成形・ススト付着
61	かわらけ	9.4	7.4	2.0	轆轤成形
62	かわらけ	9.2	6.9	2.0	轆轤成形
63	かわらけ	9.6	7.8	1.9	轆轤成形
64	かわらけ	9.6	7.0	2.0	轆轤成形
65	かわらけ	(9.4)	(7.7)	2.1	轆轤成形
66	かわらけ	(10.0)	(7.6)	2.0	轆轤成形

図54　6面

【遺構】土壙－7．8　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(10.8)	(7.6)	3.0	轆轤成形
2	かわらけ	(11.4)	(8.4)	2.7	轆轤成形
3	かわらけ	(10.6)	(8.4)	2.6	轆轤成形
4	かわらけ	(11.8)	(7.2)	2.8	轆轤成形
5	かわらけ	(11.4)	8.0	3.0	轆轤成形・ススト付着
6	かわらけ	11.4	8.1	3.1	轆轤成形
7	かわらけ	(11.8)	(8.4)	2.8	轆轤成形
8	かわらけ	11.4	8.3	2.9	轆轤成形
9	かわらけ	(11.8)	(7.6)	3.1	轆轤成形
10	かわらけ	12.2	8.4	3.1	轆轤成形
11	かわらけ	(12.6)	(9.0)	2.8	轆轤成形・ススト付着
12	かわらけ	12.4	9.0	2.9	轆轤成形
13	かわらけ	11.9	8.8	3.3	轆轤成形
14	かわらけ	12.2	9.6	3.2	轆轤成形
15	かわらけ	(13.0)	(9.4)	2.8	轆轤成形
16	かわらけ	(12.6)	(9.8)	2.7	轆轤成形
17	かわらけ	12.7	9.0	2.9	轆轤成形
18	かわらけ	12.8	9.4	2.9	轆轤成形
19	かわらけ	(12.4)	(8.8)	3.0	轆轤成形
20	かわらけ	(12.6)	(9.8)	3.3	轆轤成形
21	かわらけ	(13.0)	9.0	3.3	轆轤成形
22	かわらけ	(12.6)	(8.9)	3.0	轆轤成形
23	かわらけ	(13.2)	(8.6)	3.0	轆轤成形
24	かわらけ	12.5	9.4	3.0	轆轤成形
25	かわらけ	13.0	9.3	3.0	轆轤成形
26	かわらけ	(12.6)	9.4	3.3	轆轤成形
27	かわらけ	(13.0)	(8.6)	3.4	轆轤成形
28	かわらけ	(13.0)	8.2	3.8	轆轤成形
29	かわらけ	(13.0)	8.9	3.6	轆轤成形
30	かわらけ	12.9	8.7	4.0	轆轤成形
31	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.9	轆轤成形
32	かわらけ	12.9	8.4	3.6	轆轤成形
33	かわらけ	13.5	8.9	3.4	轆轤成形
34	かわらけ	(13.6)	10.2	3.8	轆轤成形
35	かわらけ	(14.0)	9.0	3.4	轆轤成形
36	かわらけ	13.8	9.7	2.9	轆轤成形
37	かわらけ	(14.0)	(10.8)	3.9	轆轤成形

図55　6面

【遺構】土壙－7．8　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(9.8)		2.0	手捏ね成形
2	かわらけ	(8.4)		2.0	手捏ね成形
3	かわらけ	(9.1)		2.0	手捏ね成形
4	かわらけ	9.1		2.0	手捏ね成形・ススト付着
5	かわらけ	9.5		2.2	手捏ね成形
6	かわらけ	9.8		1.4	手捏ね成形
7	かわらけ	(9.1)		2.2	手捏ね成形
8	かわらけ	(9.5)		2.3	手捏ね成形・ススト付着
9	かわらけ	8.9		2.3	手捏ね成形
10	かわらけ	9.4		2.3	手捏ね成形
11	かわらけ	(9.8)		2.0	手捏ね成形
12	かわらけ	9.7		1.9	手捏ね成形
13	かわらけ	9.8		2.4	手捏ね成形
14	かわらけ	(9.3)		2.3	手捏ね成形
15	かわらけ	9.5		2.4	手捏ね成形・ススト付着
16	かわらけ	13.2		3.3	手捏ね成形
17	かわらけ	13.2		3.3	手捏ね成形
18	かわらけ	(12.0)		2.9	手捏ね成形
19	かわらけ	13.0		3.1	手捏ね成形
20	かわらけ	13.2		3.2	手捏ね成形
21	かわらけ	13.0		3.3	手捏ね成形
22	かわらけ	(13.0)		3.5	手捏ね成形
23	かわらけ	(13.3)		3.3	手捏ね成形
24	かわらけ	(14.0)		3.7	手捏ね成形
25	かわらけ	(13.2)		4.7	手捏ね成形
26	かわらけ	13.2		2.8	手捏ね成形
27	かわらけ	13.4		3.5	手捏ね成形
28	かわらけ	13.2		3.6	手捏ね成形
29	かわらけ	12.8		3.9	手捏ね成形
30	かわらけ	13.1		3.3	手捏ね成形
31	かわらけ	13.4		3.6	手捏ね成形・ススト付着
32	かわらけ	(13.2)		3.7	手捏ね成形
33	かわらけ	(12.6)		4.0	手捏ね成形
34	かわらけ	13.8		3.4	手捏ね成形
35	かわらけ	(14.2)		3.3	手捏ね成形
36	かわらけ	14.2		3.2	手捏ね成形
37	かわらけ	13.8		3.2	手捏ね成形
38	かわらけ	(13.4)		3.4	手捏ね成形
39	かわらけ	(13.5)		3.1	手捏ね成形
40	かわらけ	13.6		3.5	手捏ね成形
41	かわらけ	13.8		3.7	手捏ね成形・ススト付着
42	かわらけ	(13.6)		3.7	手捏ね成形
43	かわらけ	(13.4)		4.2	手捏ね成形
44	かわらけ	13.8		3.9	手捏ね成形
45	かわらけ	13.7		3.9	手捏ね成形
46	かわらけ	13.9		3.5	手捏ね成形
47	かわらけ	(14.0)		3.7	手捏ね成形
48	かわらけ	(14.0)		3.5	手捏ね成形
49	かわらけ	13.6		4.0	手捏ね成形
50	かわらけ	13.6		4.0	手捏ね成形
51	かわらけ	(14.0)		3.7	手捏ね成形
52	かわらけ	13.6		4.0	手捏ね成形穿孔有
53	かわらけ	(14.3)		4.0	手捏ね成形

図56　6面

【遺構】土壙－7．8　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品・箸	長25.3	幅0.8	厚0.6	
2	木製品・箸	長24.6	幅0.6	厚0.5	
3	木製品・箸	長26.2	幅0.6	厚0.5	
4	木製品・箸	長23.3	幅0.6	厚0.3	
5	木製品・箸	長24.2	幅0.6	厚0.3	
6	木製品・箸	長23.3	幅0.5	厚0.3	
7	木製品・箸	長22.9	幅0.6	厚0.5	
8	木製品・箸	長23.1	幅0.7	厚0.6	
9	木製品・箸	長23.0	幅0.4	厚0.3	
10	木製品・箸	長23.3	幅0.7	厚0.3	
11	木製品・箸	長23.5	幅0.7	厚0.3	
12	木製品・箸	長23.8	幅0.5	厚0.5	
13	木製品・箸	長25.3	幅0.7	厚0.7	
14	木製品・箸	長23.4	幅0.7	厚0.4	
15	木製品・箸	長22.5	幅0.5	厚0.4	
16	木製品・箸	長21.8	幅0.6	厚0.5	
17	木製品・箸	長21.1	幅0.6	厚0.4	
18	木製品・箸	長20.4	幅0.3	厚0.3	
19	木製品・箸	長21.8	幅0.7	厚0.4	
20	木製品・箸	長20.1	幅0.6	厚0.2	
21	木製品・箸	長20.7	幅0.7	厚0.4	
22	木製品・杓子状	残36.5	幅9.4	厚0.6	
23	木製品・糸巻き	長11.3	幅1.9	厚0.4	
24	木製品・糸巻き	長11.1	幅1.8	厚0.4	
25	木製品	径(3.0)	残存長20.0		用途不明
26	木製品・串状	残20.0	幅0.8	厚0.9	
27	木製品・串状	残19.2	幅0.8	厚0.5	
28	木製品・串状	長23.0	幅0.9	厚0.7	

29	木製品・串状	長24.0	幅0.4	厚0.6	
30	木製品・串状	長27.2	幅1.2	厚0.4	
31	木製品・串状	長27.5	幅1.2	厚0.5	
32	木製品・串状	長29.4	幅1.1	厚0.5	
33	木製品・串状	長46.0	幅0.8	厚0.5	
34	木製品・円盤状	径(2.8) 厚0.4			
35	木製品・蓮の蕾	長7.4	幅3.4	厚0.9	
36	木製品・栓	径1.4 長6.6			
37	木製品・円盤	径(9.4) 厚0.3			
38	木製品・蓋	径(7.4) 厚0.5			
39	木製品・鞘	長16.8	幅2.2	厚1.1	用途不明木釘遺存
40	木製品・鞘（？）	長9.3	幅2.0	厚0.5	工具用

図57　6面

【遺構】土壙－7．8　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品・木簡（？）	残27.0	幅2.9	厚0.4	
2	木製品・串	長23.0	幅0.9	厚0.2	
3	木製品・串状	長18.9	幅0.8	厚0.8	
4	木製品・箆	残19.2	幅1.1	厚0.4	
5	木製品・串	長16.0	幅1.9	厚0.7	
6	木製品・箆状	長15.5	幅1.7	厚0.6	
7	木製品・棒状	長20.4	幅0.8	厚0.4	
8	木製品・棒状	残27.3	幅0.6	厚0.5	
9	木製品・鳥形	長11.7	幅1.5	厚1.2	
10	木製品・草履芯	長22.3	幅9.0	厚0.2	
11	木製品・下駄	長11.0	幅4.5	厚0.7	高さ2.5
12	木製品	長15.2	幅1.6	厚0.6	用途不明
13	木製品	長22.0	幅1.5	厚0.7	用途不明
14	木製品・下駄	長19.9	幅9.0	厚1.3	
15	木製品	残16.0	幅2.5	厚1.0	用途不明
16	木製品	残20.7	幅1.9	厚1.8	用途不明
17	木製品・部材	残23.3	幅1.3	厚1.9	
18	漆製品	残22.1	幅2.2	厚1.2	用途不明
19	漆製品	残48.6	幅1.8	厚0.6	用途不明
20	漆製品	残44.6	幅2.0	厚1.5	用途不明
21	漆製品	残44.8	幅2.0	厚1.2	用途不明
22	漆製品	残39.4	幅2.0	厚1.3	用途不明
23	漆製品	残77.4	幅2.1	厚1.1	用途不明

図58　6面

【遺構】土壙－7．8　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品	残縦15.2	横15.2	厚0.4	用途不明菱形状折敷の一種か
2	木製品	縦15.2	横15.0	厚0.4	用途不明菱形状折敷の一種か
3	木製品	残縦15.2	残横3.5	厚0.3	用途不明菱形状折敷の一種か
4	木製品・折敷	長12.0	残5.7	厚0.3	
5	木製品・折敷	長28.8	残8.7	厚0.5	
6	木製品・折敷	長33.3	残16.6	厚0.3	
7	木製品・櫛	縦2.4	残存幅6.7	厚0.7	密度1cm中に15本
8	漆器・皿	9.4	6.5	2.1	黒地無文様
9	漆器・皿	(10.1)	7.5	1.5	黒地朱文様 菊花文　手描き
10	漆器・椀	底径8.6　底部片			黒地無文様
11	漆器・椀	底径9.0　底部片			黒地無文様
12	木製品・蓋か	径12.5　厚0.8			中央に本皮貫通
13	木製品・笊状製品	残存長36.8	残存幅21.4	厚0.2	厚さ0.2、幅1.1の材を綾織りに編み、縁を木皮で縫いとめる

図59　6面

【遺構】土壙－7．8　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	白磁・口兀皿	口径(12.1)　口縁部片			
2	青磁・劃花文碗	口縁部片			
3	青磁・鎬連弁文碗	口径(13.8)　口縁部片			
4	舶載陶器・皿	高台径(11.0)			内面に印花文、2条の沈線褐釉
5	山茶碗	口縁部片			
6	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅰ類
7	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅱ類
8	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅱ類
9	常滑・片口鉢	口縁部片			Ⅱ類
10	常滑・片口鉢	底部片			Ⅰ類
11	常滑・片口鉢	(31.2)	(15.2)	13.0	Ⅱ類6b型式か
12	渥美・甕	口縁部片			
13	常滑・甕	口縁部片			5型式
14	常滑・甕	口縁部片			5型式
15	女瓦　Ⅰ期	残長8.9残幅10.4厚1.9			凸面縄目叩き
16	女瓦　Ⅰ期	残長9.8残幅9.2厚2.0			凸面縄目叩き
17	女瓦　Ⅰ期	残長8.1残幅7.8厚2.4			凸面縄目叩き
18	男瓦　Ⅰ期	残長10.6残幅7.5厚2.4			

図60　6面

【6面まで】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	かわらけ	(8.4)	(6.6)	1.5	轆轤成形
2	かわらけ	7.8	6.0	1.4	轆轤成形
3	かわらけ	7.6	5.4	1.6	轆轤成形・ススト付着
4	かわらけ	(7.9)	(7.0)	1.5	轆轤成形
5	かわらけ	8.1	7.5	1.8	轆轤成形
6	かわらけ	(9.4)	(7.2)	1.4	轆轤成形
7	かわらけ	8.4	7.0	1.4	轆轤成形
8	かわらけ	7.8	6.0	1.6	轆轤成形
9	かわらけ	7.8	5.2	1.6	轆轤成形
10	山皿	8.0	5.1	2.1	轆轤成形・ススト付着
11	かわらけ	9.2	7.0	1.6	轆轤成形
12	かわらけ	8.2	6.4	1.5	轆轤成形
13	かわらけ	(8.0)	5.6	1.6	轆轤成形
14	かわらけ	(8.2)	(5.4)	1.9	轆轤成形
15	かわらけ	(8.6)	(5.6)	1.9	轆轤成形
16	かわらけ	9.1	6.5	1.9	轆轤成形
17	かわらけ	(8.6)	(5.8)	1.7	轆轤成形
18	かわらけ	(8.6)	(5.6)	1.8	轆轤成形
19	かわらけ	(8.0)	(6.0)	2.3	轆轤成形
20	かわらけ	8.8	7.8	1.8	轆轤成形
21	かわらけ	(9.4)	(6.8)	1.7	轆轤成形・ススト付着
22	かわらけ	(8.6)	(6.2)	2.0	轆轤成形・ススト付着
23	かわらけ	8.7	5.9	2.1	轆轤成形
24	かわらけ	(9.8)	(6.0)	1.8	轆轤成形
25	かわらけ	11.8	8.0	2.5	轆轤成形
26	かわらけ	11.8	8.8	2.8	轆轤成形
27	かわらけ	12.8	8.6	3.0	轆轤成形
28	かわらけ	(12.4)	8.5	2.8	轆轤成形
29	かわらけ	(11.1)	8.4	2.7	轆轤成形
30	かわらけ	(12.2)	(9.4)	3.0	轆轤成形
31	かわらけ	12.3	8.2	3.1	轆轤成形
32	かわらけ	(12.7)	8.0	2.9	轆轤成形
33	かわらけ	12.3	9.0	3.1	轆轤成形・ススト付着
34	かわらけ	(12.2)	(8.3)	3.2	轆轤成形
35	かわらけ	12.3	8.0	3.4	轆轤成形
36	かわらけ	(12.6)	8.8	3.6	轆轤成形
37	かわらけ	11.8	9.0	3.0	轆轤成形　内面全体にススト痕
38	かわらけ	(12.8)	7.6	2.7	轆轤成形
39	かわらけ	12.7	8.4	3.2	轆轤成形
40	かわらけ	13.2	8.8	3.2	轆轤成形
41	かわらけ	(12.2)	(7.4)	3.2	轆轤成形・ススト付着
42	かわらけ	12.3	7.6	3.4	轆轤成形
43	かわらけ	(12.8)	7.6	3.6	轆轤成形
44	かわらけ	12.7	10.2	3.2	轆轤成形・ススト付着
45	かわらけ	(12.0)	7.4	3.2	轆轤成形
46	かわらけ	(12.6)	(9.0)	3.1	轆轤成形
47	かわらけ	12.4	8.4	3.5	轆轤成形
48	かわらけ	13.1	10.0	2.7	轆轤成形
49	かわらけ	(12.0)	(8.4)	3.2	轆轤成形
50	かわらけ	12.6	8.4	3.2	轆轤成形
51	かわらけ	(13.1)	9.8	3.1	轆轤成形
52	かわらけ	7.6		1.2	手捏ね成形
53	かわらけ	8.2		2.0	手捏ね成形・ススト付着
54	白かわらけ	8.3		1.7	手捏ね成形
55	かわらけ	8.8		1.7	手捏ね成形・ススト付着
56	かわらけ	8.4		2.0	手捏ね成形
57	かわらけ	8.4		2.1	手捏ね成形
58	かわらけ	(8.8)		1.8	手捏ね成形

59	かわらけ	(8.0)		2.0	手捏ね成形
60	かわらけ	8.0		2.0	手捏ね成形
61	かわらけ	(8.8)		1.9	手捏ね成形
62	かわらけ	8.8		2.2	手捏ね成形
63	かわらけ	8.9		1.9	手捏ね成形
64	かわらけ	8.4		2.1	手捏ね成形
65	かわらけ	8.5		2.5	手捏ね成形
66	かわらけ	8.6		2.2	手捏ね成形
67	かわらけ	9.2		2.2	手捏ね成形
68	かわらけ	(9.6)		2.4	手捏ね成形
69	かわらけ	(11.6)		3.1	手捏ね成形
70	かわらけ	12.4		3.3	手捏ね成形
71	かわらけ	(11.6)		3.3	手捏ね成形ススト付
72	かわらけ	11.2		3.3	手捏ね成形
73	かわらけ	12.8		3.4	手捏ね成形
74	かわらけ	12.4		3.5	手捏ね成形
75	かわらけ	13.4		3.5	手捏ね成形
76	かわらけ	12.8		3.6	手捏ね成形
77	かわらけ	13.2		3.4	手捏ね成形
78	かわらけ	13.4		3.7	手捏ね成形

図61　6面

【6面出土】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青磁・鎬連弁文碗	高台径(5.4)　底部片			
2	常滑・甕	口縁部片			5型式
3	常滑・片口鉢	口縁部片			
4	常滑・片口鉢	底径(10.5)　底部片			Ⅰ類
5	かわらけ	(8.0)	(6.2)	1.4	轆轤成形
6	かわらけ	(8.0)	(6.4)	1.6	轆轤成形
7	かわらけ	(8.8)	(7.0)	1.7	轆轤成形
8	かわらけ	(9.7)	7.5	1.7	轆轤成形
9	かわらけ	(8.2)	(6.4)	1.8	轆轤成形
10	かわらけ	8.2	6.2	1.6	轆轤成形
11	かわらけ	9.5	7.3	1.9	轆轤成形
12	かわらけ	(10.0)	(8.0)	2.0	轆轤成形
13	かわらけ	(8.2)	(6.6)	1.8	轆轤成形
14	かわらけ	(8.4)	(5.8)	1.7	轆轤成形
15	かわらけ	(9.6)	(6.8)	1.8	轆轤成形
16	かわらけ	(10.0)	(6.6)	3.0	轆轤成形
17	かわらけ	10.8	8.4	2.9	轆轤成形
18	かわらけ	(11.6)	(7.4)	3.1	轆轤成形・ススト付着
19	かわらけ	(11.6)	8.1	2.6	轆轤成形
20	かわらけ	(13.4)	(8.4)	3.3	轆轤成形
21	かわらけ	13.8	9.8	3.1	轆轤成形
22	かわらけ	(12.2)	(9.6)	2.9	轆轤成形
23	かわらけ	9.2		1.7	手捏ね成形
24	かわらけ	9.0			手捏ね成形
25	かわらけ	(10.0)		1.8	手捏ね成形
26	かわらけ	(9.4)		2.0	手捏ね成形
27	かわらけ	8.8		2.2	手捏ね成形
28	かわらけ	9.2		2.1	手捏ね成形
29	かわらけ	(8.8)		2.3	手捏ね成形
30	かわらけ	9.4		2.2	手捏ね成形
31	かわらけ	(11.8)			手捏ね成形
32	かわらけ	(11.8)		3.7	手捏ね成形
33	かわらけ	11.8		3.3	手捏ね成形
34	かわらけ	(12.8)			手捏ね成形
35	かわらけ	(13.2)		2.9	手捏ね成形
36	かわらけ	12.4		3.0	手捏ね成形
37	かわらけ	13.2		3.3	手捏ね成形
38	かわらけ	(13.9)		3.6	手捏ね成形
39	かわらけ	14.5		3.5	手捏ね成形
40	男瓦　Ⅰ期	筒部復元径17.0　厚1.6			外面縄目叩き
41	土器質・火鉢	口縁部片			浅鉢型　口縁部から内面に黒漆遺存
42	鉄製品・環状	径3.0　厚0.7			
43	鉄製品・刀子	長19.3	幅0.3	厚0.3	
44	石製品・砥石	残長6.2	幅3.4	厚0.8	2面使用

図62　6面

【遺構】土壙－7．8　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	漆器・皿	(8.4)	(6.0)	1.3	黒地朱文様 花びら？手描き
2	漆器・皿	(9.8)	7.6	1.2	黒地朱文様 酢漿草文手描き
3	漆器・皿	底径(6.6)　底部片			黒地朱文様楓文手描き
4	漆器・皿	(8.3)	7.0	1.2	黒地無文様
5	漆器・皿	(9.0)	(7.0)	1.4	黒地無文様
6	漆器・皿	9.0	7.2	1.8	黒地無文様
7	漆器・椀	底径(7.8)　底部片			黒地無文様
8	漆器・椀	底径7.2　底部片			黒地無文様
9	漆器・鉢	口径(31.6)　口縁部片			黒地無文様
10	漆器・鉢（？）	体部片			黒地朱文様 楓文手描き
11	漆器・皿	(7.0)	(4.2)	1.5	漆皿の生地
12	漆製品・櫛	縦3.9	残横4.7	厚0.9	黒漆
13	漆製品・物差し（？）	長16.6	幅1.5	厚0.8	釘穴が1つ　物差しの面を除く3面に、黒漆塗膜が残存
14	木製品	残縦9.0	横15.2	厚0.4	用途不明菱形の木製折敷か？
15	木製品・将棋の駒	縦3.2	横2.3	厚6.0	表に銀将、裏に金の墨書
16	木製品・形代（？）	縦6.5	残横3.9	厚0.4	
17	木製品・形代	長12.0	幅2.0	厚0.6	
18	木製品・折敷	長31.8	残8.5	厚0.2	
19	木製品・折敷	長26.8	残8.2	厚0.2	
20	木製品・箸	長25.9	幅0.5	厚0.3	
21	木製品・箸	長25.8	幅0.5	厚0.3	
22	木製品・箸	長23.9	幅0.5	厚0.3	
23	木製品・箸	長22.5	幅0.6	厚0.4	
24	木製品・箸	長31.0	幅0.5	厚0.3	
25	木製品・箸	長22.0	幅0.5	厚0.5	
26	木製品・杓子	長20.2	幅6.4	厚0.4	

図63　6面

【6面出土】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品	長7.4	幅2.8	厚1.0	用途不明
2	木製品・部材	長9.5	幅2.0	厚2.2	
3	木製品・箆	残21.6	幅1.2	厚0.4	
4	木製品・箆	長20.5	幅1.8	厚0.8	
5	木製品・箆	長19.7	幅1.8	厚0.9	
6	木製品・木簡（？）	長20.8	幅1.7	厚0.2	
7	木製品・箆	長24.4	幅1.8	厚0.6	
8	木製品	長27.7	幅0.9	厚0.7	用途不明
9	木製品・串状	残24.4	幅0.8	厚0.8	
10	木製品・箸木	長29.5	幅0.5	厚0.5	
11	木製品・串状	長28.6	幅1.1	厚0.6	
12	木製品・箸状	長30.6	幅0.7	厚0.8	
13	木製品・刀子の柄	長13.9	幅2.6	厚0.7	
14	木製品・栓	長9.3	幅1.6	厚1.5	
15	木製品	長44.9	幅2.5	厚0.7	用途不明
16	木製品・板状	長38.8	幅6.5	厚0.7	
17	木製品・串状	長35.0	幅1.9	厚1.2	木釘遺存
18	木製品・板状	残33.3	幅2.5	厚0.5	下部に円形の穴
19	木製品・板状	長26.5	幅8.5	厚0.9	
20	漆製品・棒状	長12.0	幅1.6	厚0.4	背面以外に漆膜が残存
21	漆製品・部材	長32.2	幅2.2	厚1.3	全面漆膜残存 虫喰い痕有り 鉄釘遺存

図64　6面

【6面出土】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	木製品・円盤状	径(29.0)　厚0.5			
2	木製品・円盤状	径(11.2)　厚0.5			
3	木製品・円盤状	径(19.4)　厚0.8			焼跡あり
4	木製品・円盤状	径10.2　厚0.8			
5	木製品・木蓋	径8.5　厚0.6			摘まみあり
6	木製品・下駄	長21.4	幅8.9	厚1.0	
7	木製品・下駄	長24.0	幅9.5	厚1.7	

図65

【トレンチ及び表採の遺物】　　（　）は復元寸法、単位：cm

No.	種別・器種	口径	底径	器高	成形・特徴
1	青白磁・皿	口縁部片			
2	青磁・劃花文碗	口縁部片			
3	青磁・皿	底部片			
4	天目碗	口縁部片			
5	常滑・甕	口縁部片			6 b型式
6	かわらけ	7.5	5.2	1.6	轆轤成形
7	かわらけ	(8.2)	(6.2)	1.5	轆轤成形
8	かわらけ	(7.8)	5.6	1.3	轆轤成形
9	かわらけ	(8.1)	5.4	1.6	轆轤成形
10	かわらけ	11.0			轆轤成形
11	かわらけ	(12.0)	(7.4)	2.9	轆轤成形・スス付着
12	かわらけ	(12.6)	(7.2)	3.3	轆轤成形
13	かわらけ	(12.4)	(8.0)	2.9	轆轤成形
14	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.7	轆轤成形
15	鉄製品・鉄鍋	口縁部片			
16	木製品	縦9.2	残横5.1	厚1.6	用途不明 中央に穿孔あり
17	木製品・円盤	径7.4　厚0.2			中央に穿孔あり
18	木製品・円盤	径7.6　厚0.2			中央に穿孔あり
19	木製品・箆	長22.2	幅1.2	厚0.4	
20	木製品・箸	長24.0	幅0.5	厚0.3	
21	木製品・箸	長21.7	幅0.5	厚0.4	
22	木製品・箒木	長17.3	幅0.7	厚0.6	
23	木製品・扇骨	長34.6	幅1.8		一本の厚さ0.3～0.4cmの骨５本 先端にいくほど細い　木製の要（径0.7長2.7）も残存
24	木製品・円盤状	径8.8　厚0.3			片面のみに黒漆を塗る
25	漆器・椀	体部片			黒地朱文様 意匠不明手描き
26	漆器・椀	底径(8.0)　底部片			黒地朱文様 竹文手描き
27	漆器・椀	底径(7.1)			黒地朱文様 情景文（范・竜胆・片輪車等の組み合わせ）手描き
28	漆器・椀	底径(7.4)			黒地朱文様 竜胆文手描き

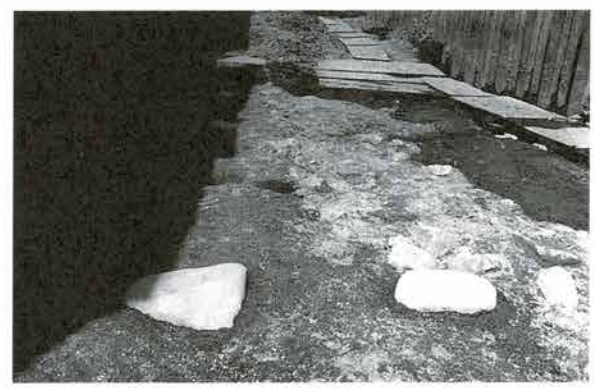
▲　Ⅱ区２面全景　東から

▲　Ⅱ区２面全景　西から

▲　石敷き

▲　Ⅰ区２面全景　東から

▲　Ⅱ区２面建物と土丹範囲　北から



▲　Ⅱ区２面建物と土丹範囲　東から

▲　大路側溝Ⅱ　西から

▲　大路側溝Ⅱ北から

図版 2

▲　Ⅰ区３面礎石建物a・b　東から

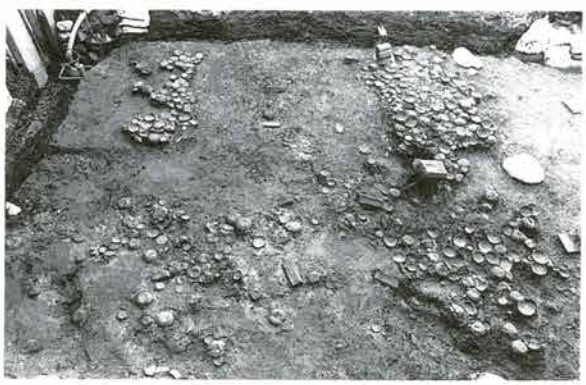
▲　Ⅱ区３面礎石建物a・b　西から

▲　３面礎石建物囲炉裏

▲　Ⅰ区３面礎石建物a・b　西から

▲　Ⅱ区３面礎石建物　東から

▲　Ⅰ区３面礎石建物a・b床束礎板



▲　Ⅰ区３面かわらけ溜まり　南から

▲　Ⅰ区３面かわらけ溜まり　西から

▲　Ⅰ区３面かわらけ溜まりと礎石建物a・b　南から

▲　Ⅰ区３面かわらけ溜まりと礎石建物a・b　南から

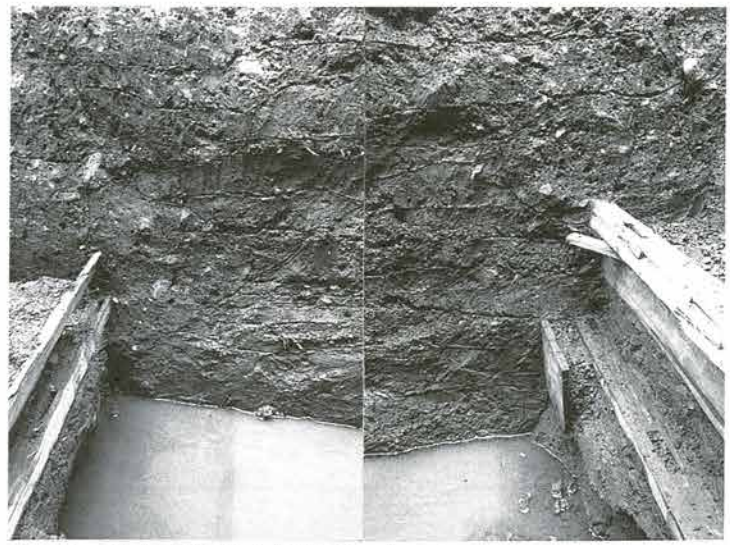
▲　Ⅰ区３面かわらけ溜まり　南から

▲　Ⅰ区３面礎石建物a・b床束礎板南から

▲　Ⅰ区３面建物aの礎石と建物bの礎板南　西から

▲　Ⅰ区３面建物aの礎石と建物bの礎板　北から

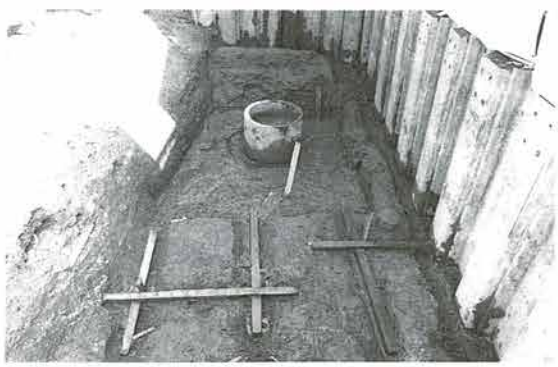
図版 4



▲　3面大路側溝Ⅲ土層断面　北から

▲　3面大路側溝Ⅲ　南から

▲　3面大路側溝Ⅲ　北から



▲　3面大路側溝Ⅲと地中梁　西から

▲　3面大路側溝Ⅲと地中梁　東から

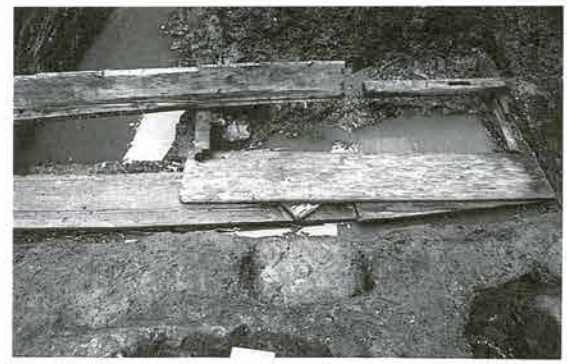
▲　3面大路側溝Ⅲと地中梁　西から

▲　3面大路側溝木組み状態

▲　3面大路側溝Ⅲ　南から

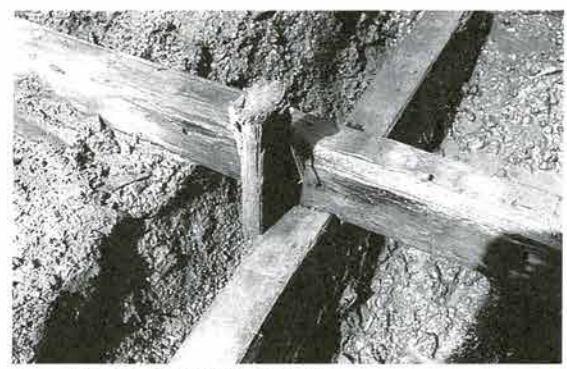
▲　3面大路側溝Ⅱ・Ⅲ木組み

◀　3面大路側溝Ⅲ南掘方と柱穴列

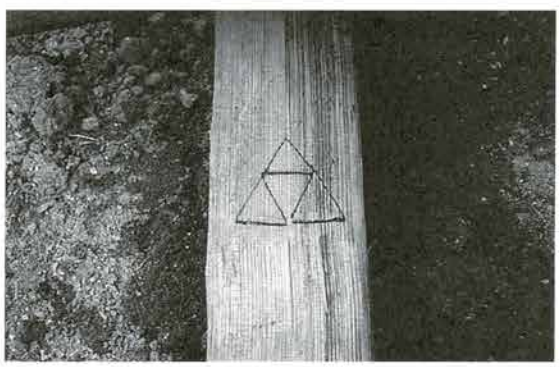


▲　3面大路側溝Ⅲ掘方と柱穴列

▲　3面大路側溝Ⅲ地中梁



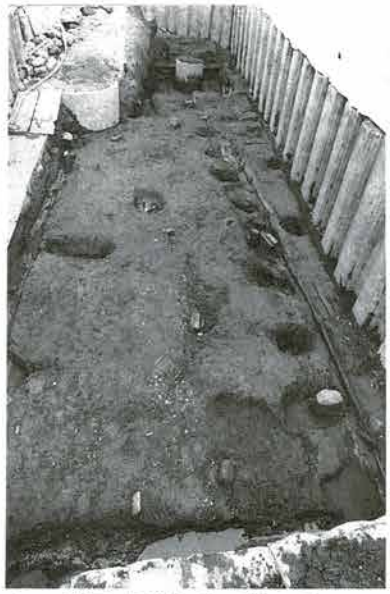
▲　3面大路側溝Ⅲ地中梁



▲　3面大路側溝Ⅲ地中梁に刻印された三鱗紋

▲　3面大路側溝Ⅲ地中梁に刻印された三鱗紋

図版 6

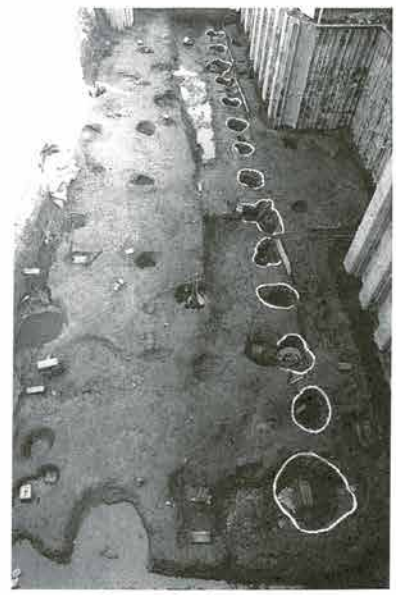


▲　Ⅱ区 4 面全景　西から

▲　Ⅰ区 4 面全景　東から

▲　Ⅱ区 4 面作業風景

▲　Ⅱ区 4 面柱穴列　東から



▲　Ⅰ区 4 面柱穴列　西から

▲　Ⅱ区 4 面柱穴列　東から

▲　Ⅰ区 4 面溝状遺構

▲　Ⅰ区 4 面溝状遺構

▲　4 面P-48　墨壺出土状況

▲　4 面P-48　墨壺出土状況

▲　墨壺（保存処理済）図28- 2

▲　墨壺（保存処理済）

▲　墨壺（保存処理済）

▲　墨壺（保存処理済）

▲　4 面土壙 1 かわらけ出土状況

▲　墨壺（保存処理済）

図版 8

▲　Ⅱ区５面全景　西から

▲　Ⅱ区５面全景　東から

▲　Ⅱ区５面柱穴列２

▲　Ⅰ区５面全景　西から

▲　Ⅱ区５面掘立柱建物　東から

▲　掘立柱建物東南隅付近出土木簡表「謹請南方赤帝赤龍　竪牢地神」

▲　Ⅰ区５面全景柱穴列２東から

▲　Ⅱ区５面掘立柱建物

▲　Ⅰ区 6 面全景　西から

▲　Ⅰ区 6 面全景　東から

▲　Ⅱ区 6 面全景　東から

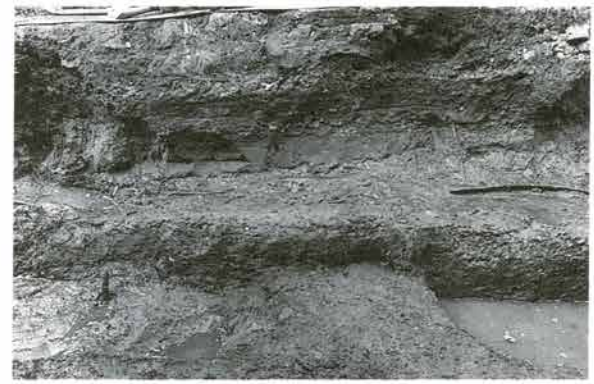
▲　Ⅱ区 6 面全景　西から

▲　6 面土壙 7 土層断面

▲　6 面土壙 7 内遺物出土状況

図版10

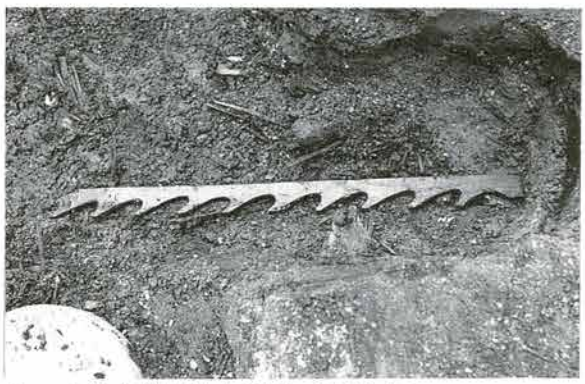
▲　遺跡地から八幡宮三の鳥居をのぞむ



▲　北壁土層断面

▲　3面刀架出土状況　図9-2

▲　3面鐙瓦出土状況　図21-13



▲　4面木製品出土状況　図42-13

▲　4面木製品出土状況　図42-7

▲　4面曲物出土状況　図29-7

▲　4面折敷・かわらけ・あわび出土状況

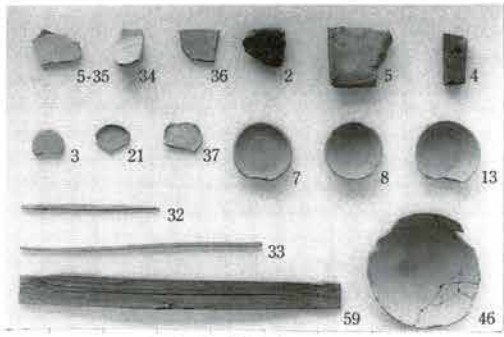


図5　2面大路側溝出土

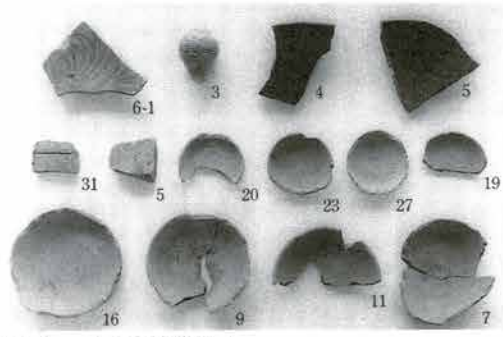


図6　2面遺構出土

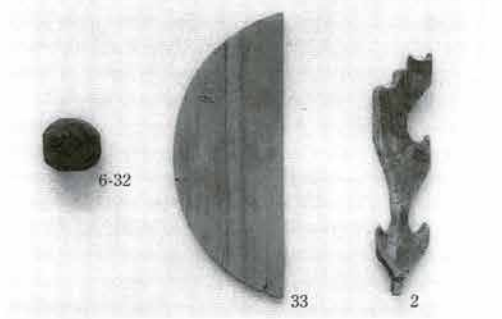


図6　2面遺構出土

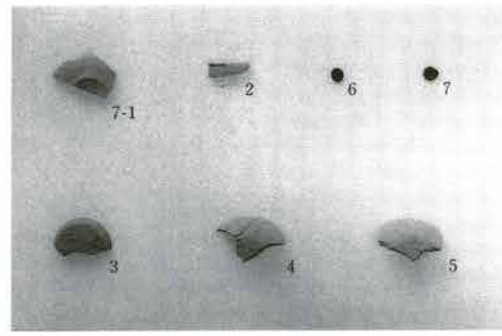


図7　2面出土

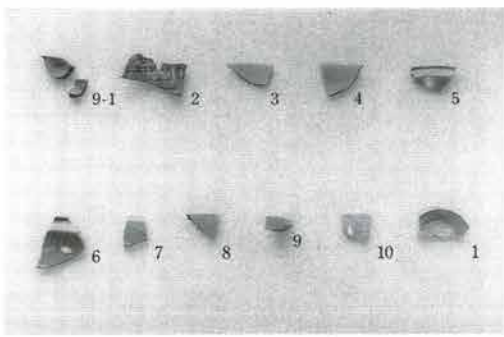
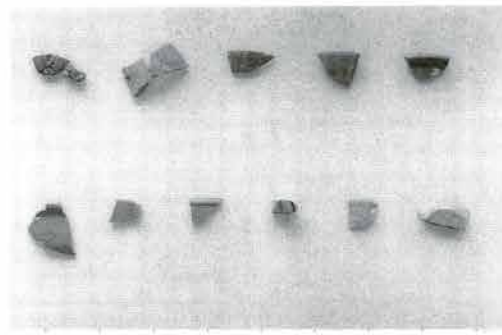


図9　3面かわらけ溜まり出土



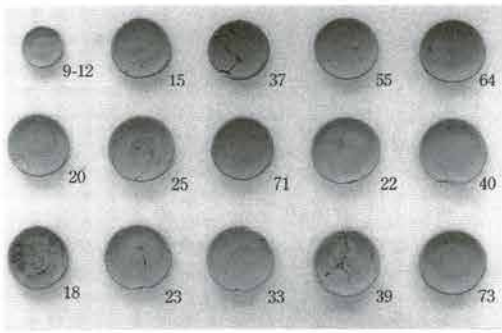
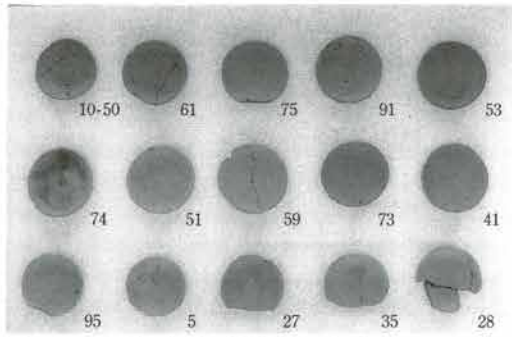


図9　3面かわらけま溜まり出土

図版12



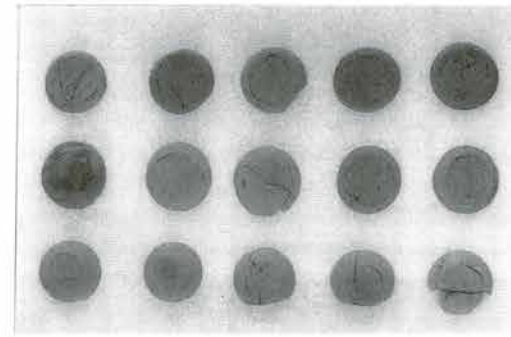
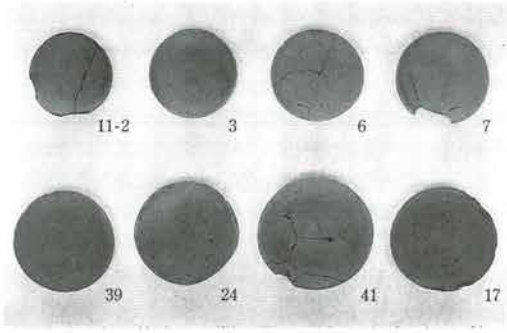


図10　3面かわらけ溜まり出土



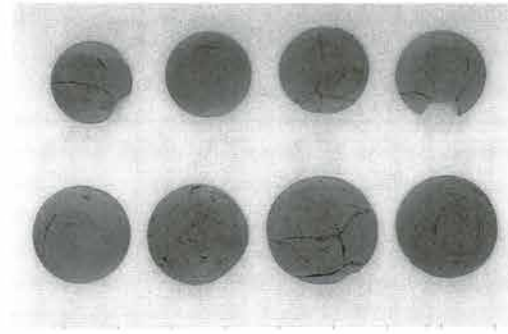
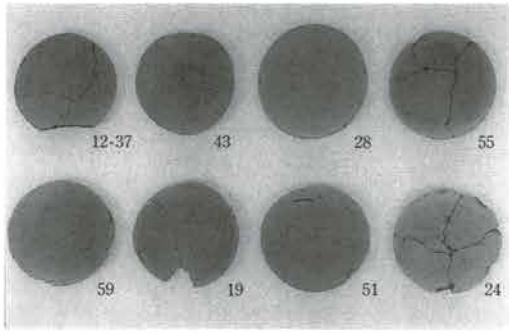


図11　3面かわらけ溜まり出土



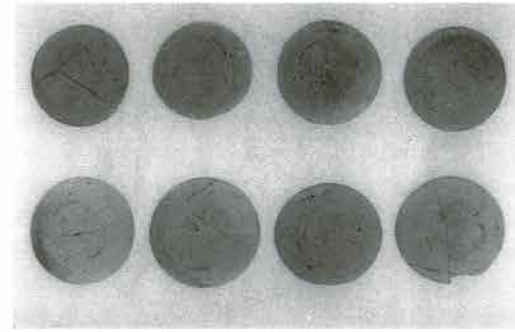
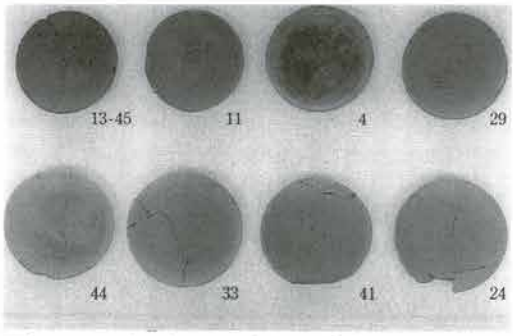


図12　3面かわらけ溜まり出土



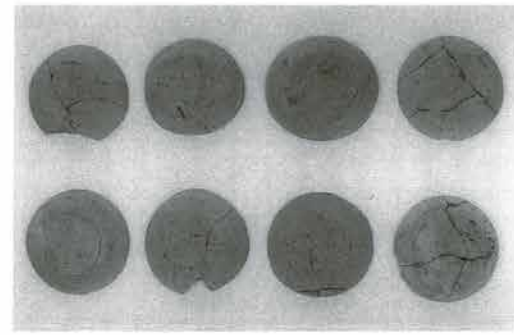
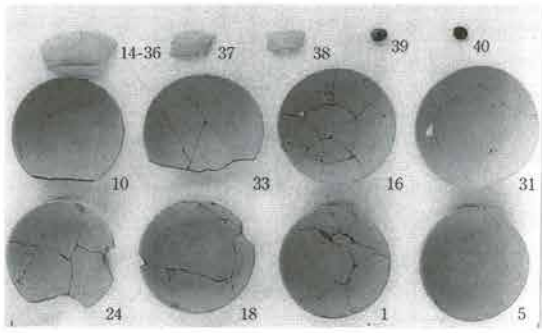


図13　3面かわらけ溜まり出土



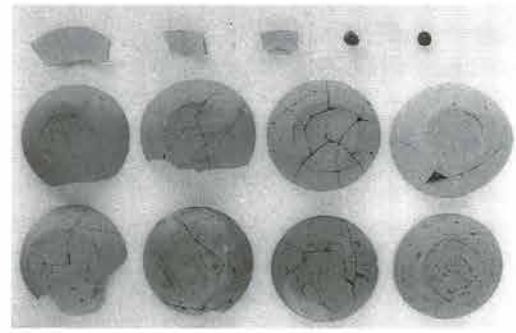


図14　3面かわらけ溜まり出土

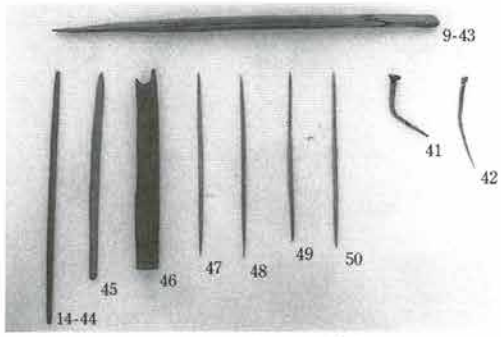


図14　3面かわらけ溜まり出土

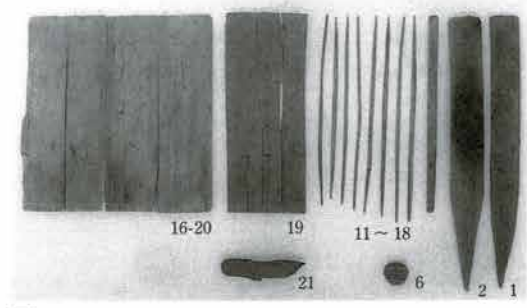


図16

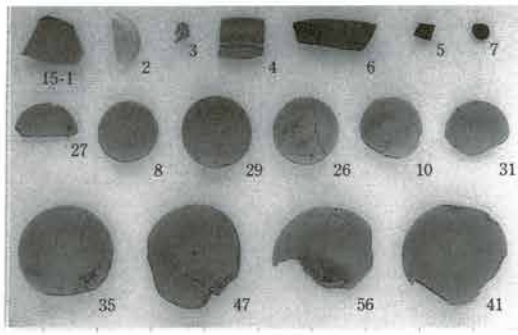
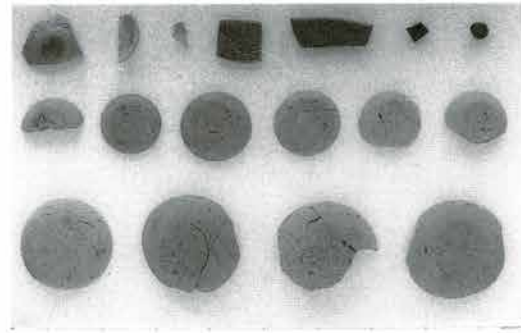


図15　3面大路側溝Ⅲ出土



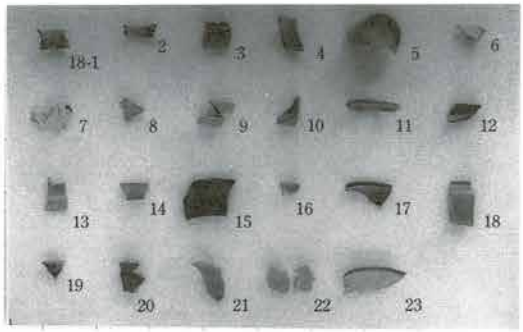


図18　3面まで出土

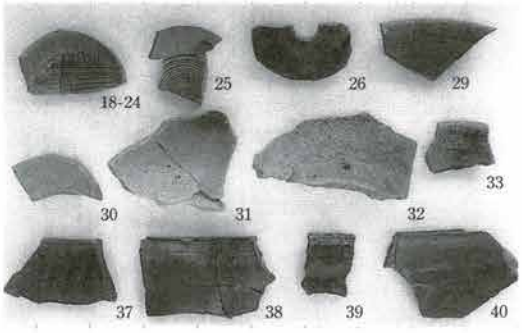
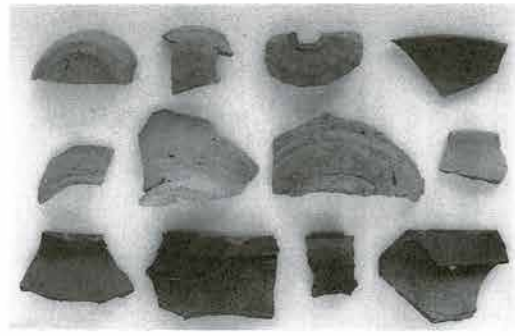


図18　3面まで出土



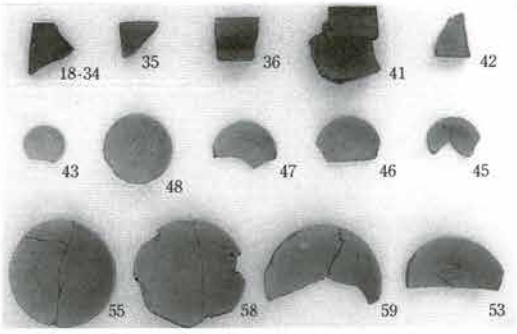
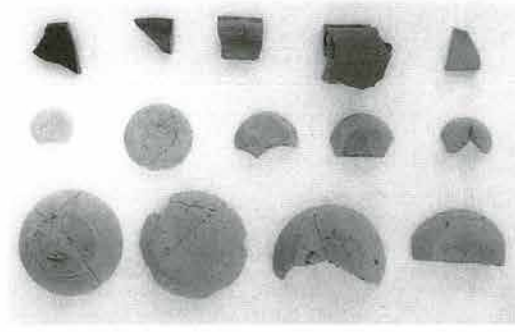


図18　3面まで出土



図版14

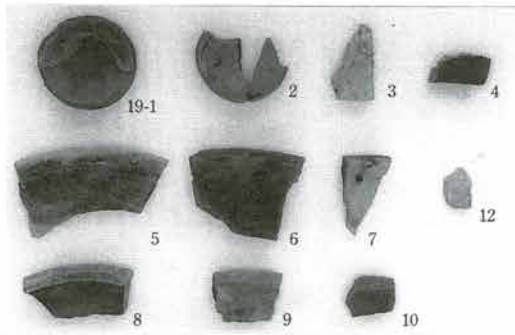
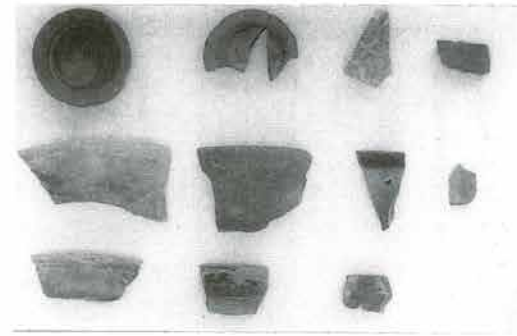


図19　3面まで出土



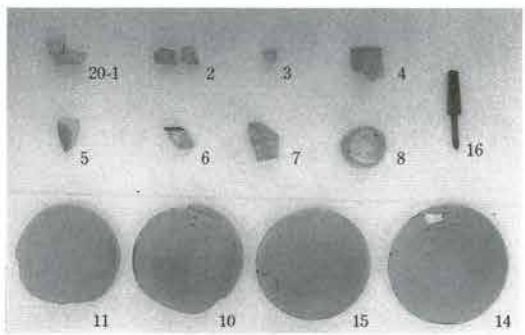
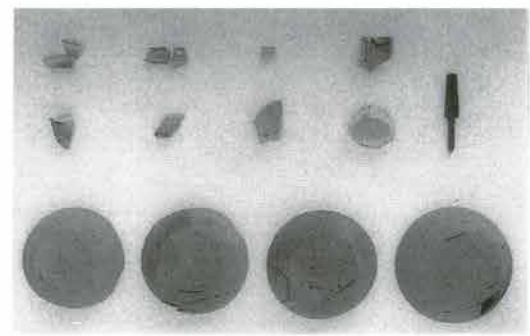


図20　3面まで出土

図20-16



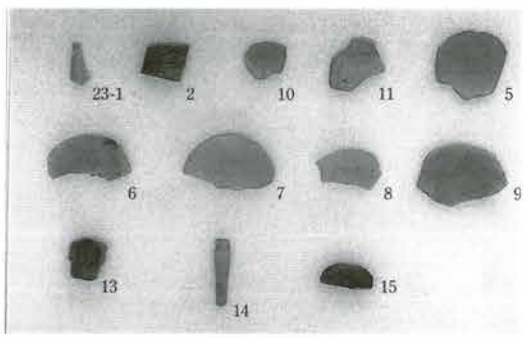
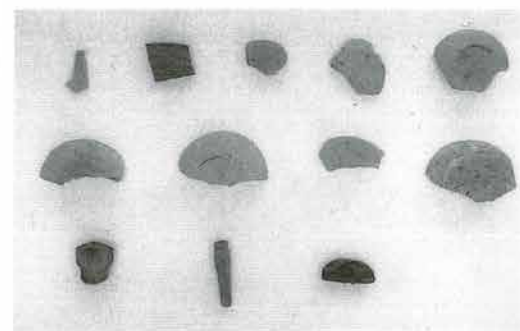


図23　4面溝状遺構出土



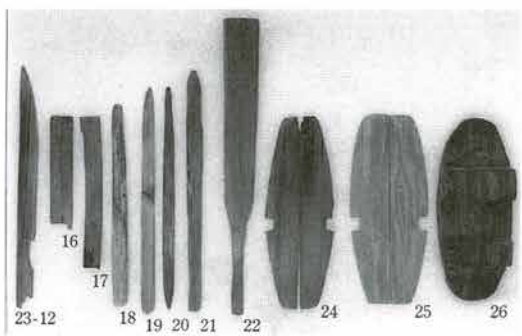


図23　4面溝状遺構出土

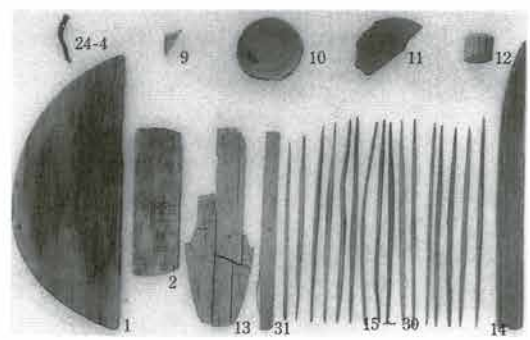


図24

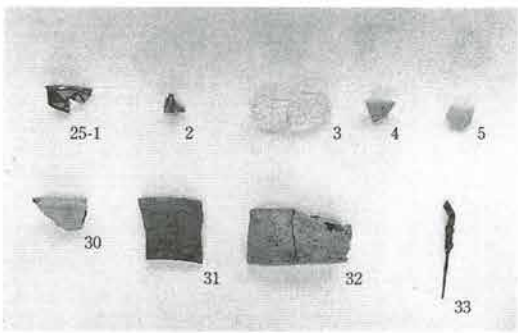
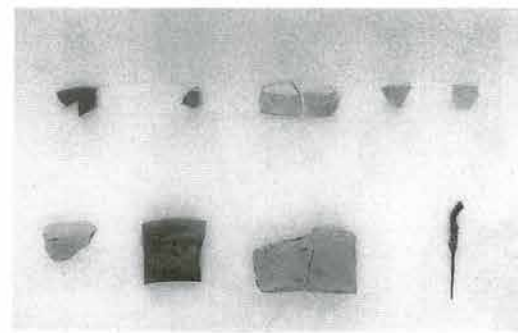


図25　4面板溝状遺構出土



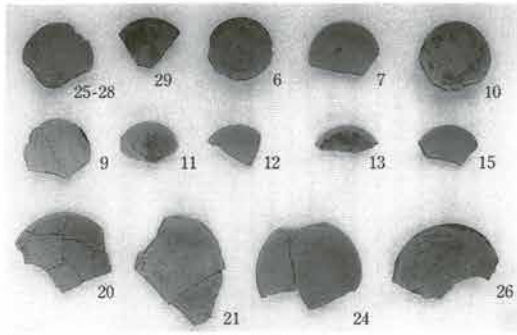
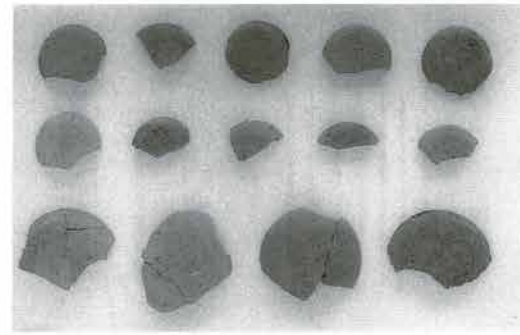


図25　4 面板溝状遺構出土



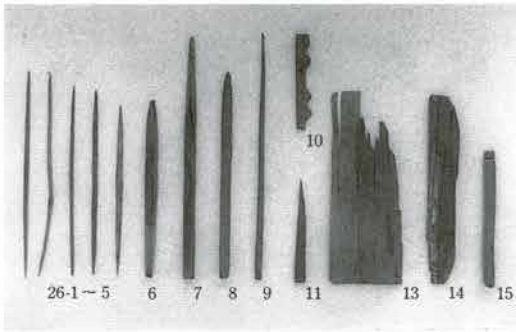


図26　4 面板溝状遺構出土

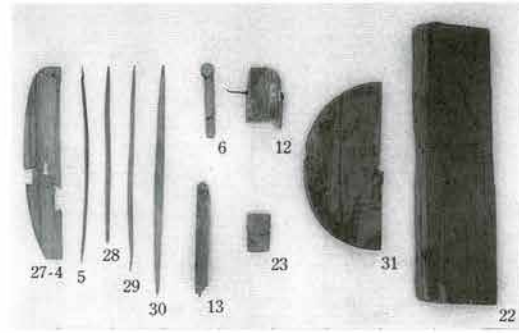


図27　4 面柱穴列 1 出土

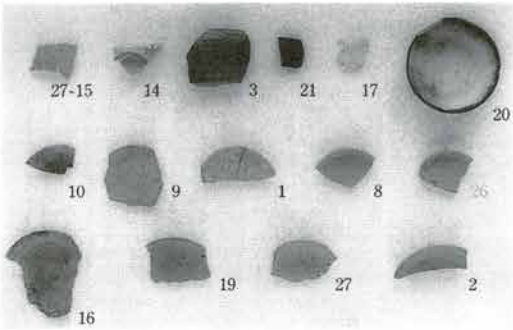
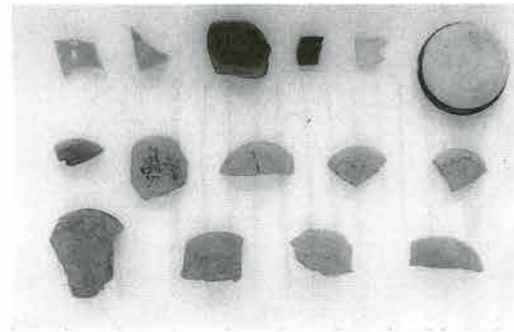


図27　4 面柱穴列 1 出土



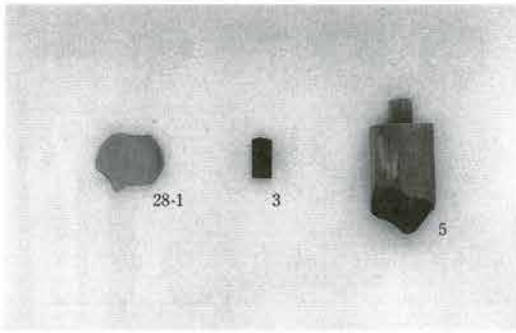


図28　4 面柱穴列 4 出土

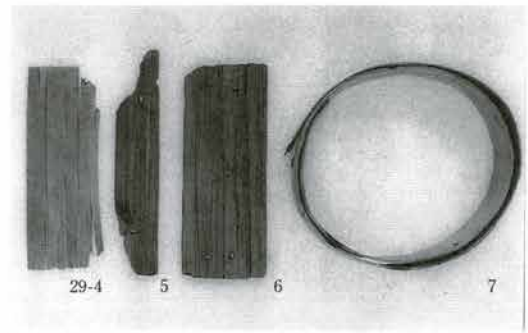


図29　4 面柱穴出土

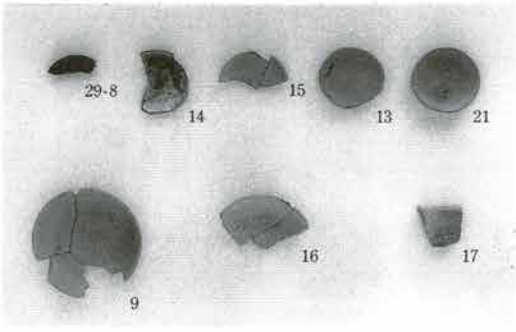
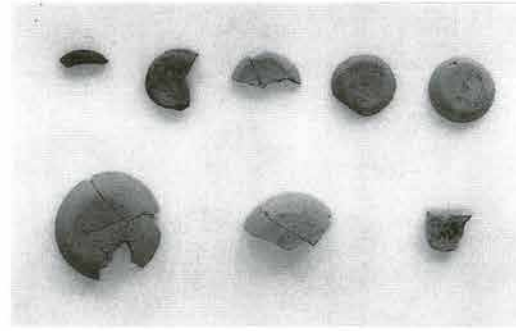


図29　4 面柱穴出土



図版16

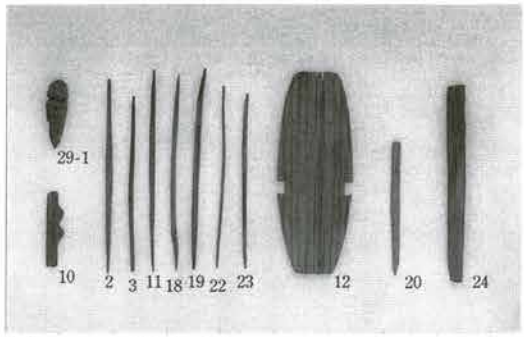


図29　4面柱穴出土

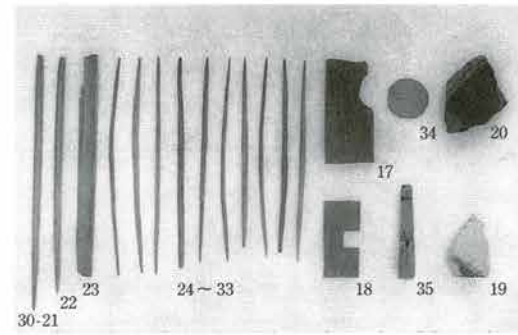


図30　4面土壙—1出土

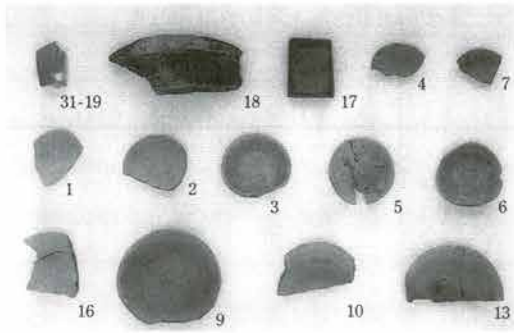


図31　4面土壙2出土

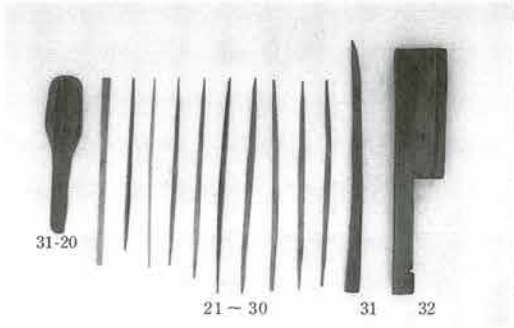


図31　4面土壙—2出土

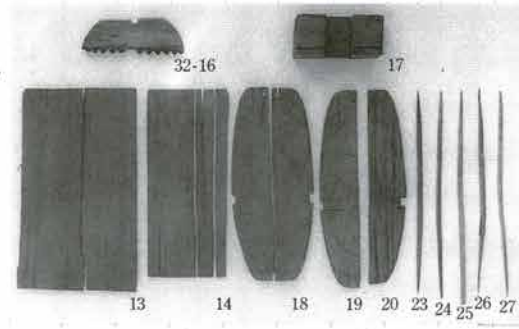


図32　4面土壙—3・4・5出土

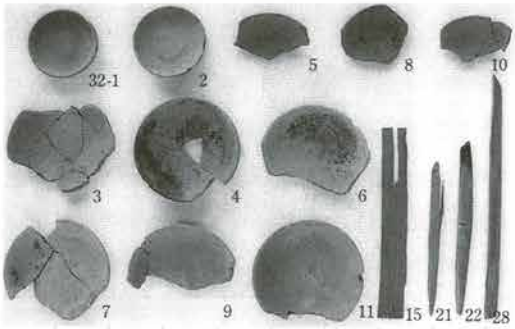


図32　4面土壙—3・4・5出土

図29　4面柱穴出土

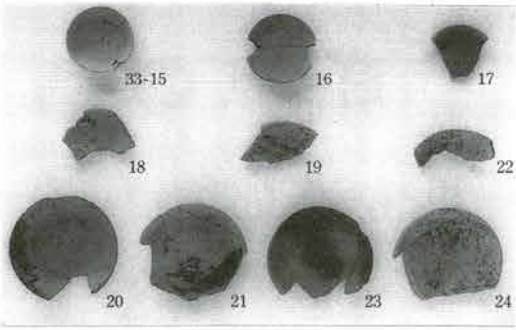
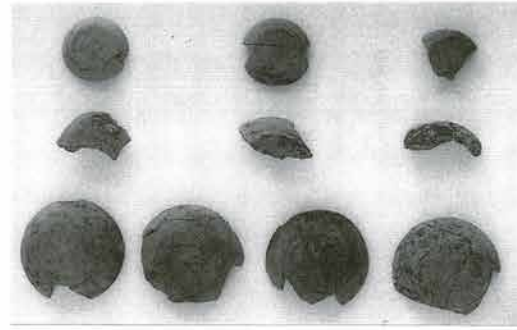


図33　4面土壙—6・10・11出土



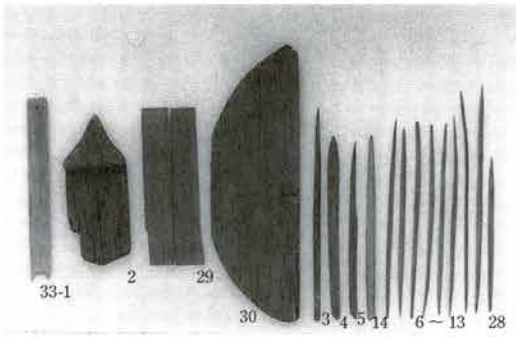


図23　4面土壙―6・10・11

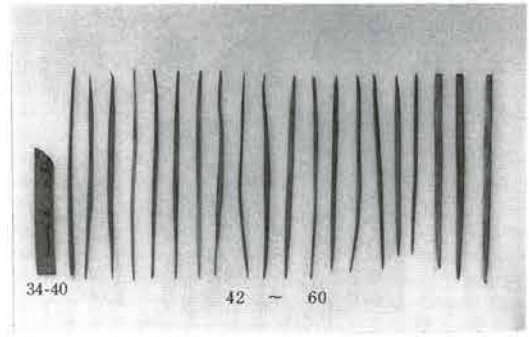


図34　4面土壙―13出土

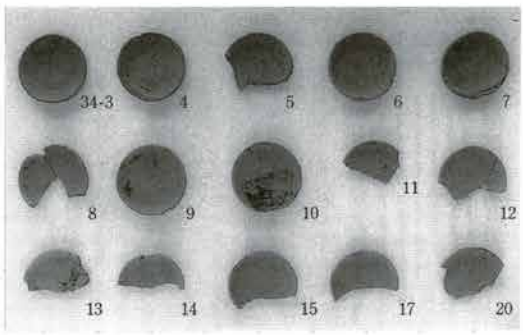
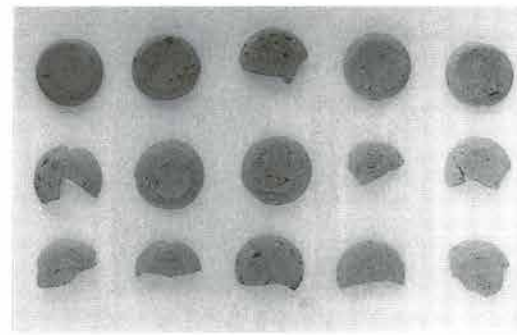


図34　4面土壙―13出土



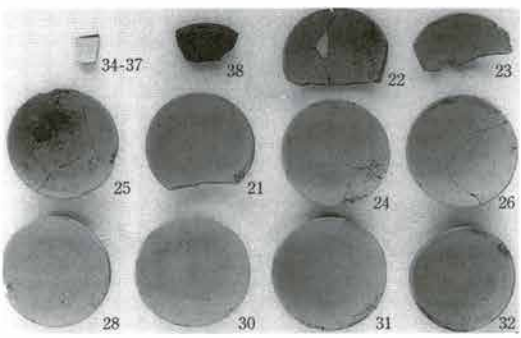


図34　4面土壙―13出土

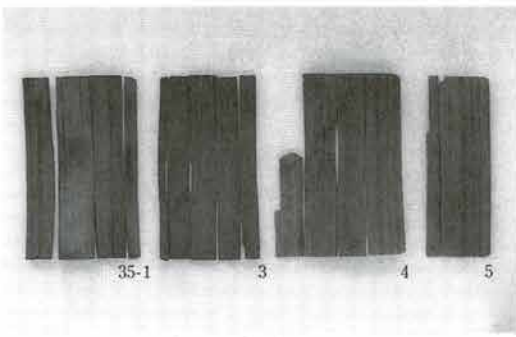
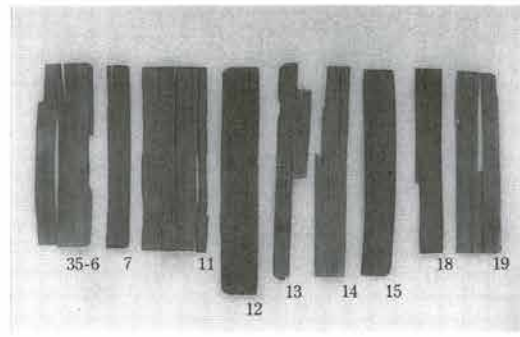


図35　4面土壙―13出土



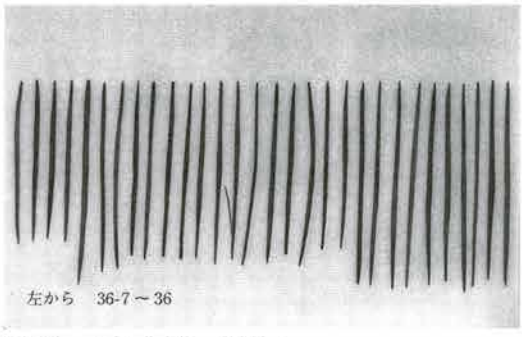
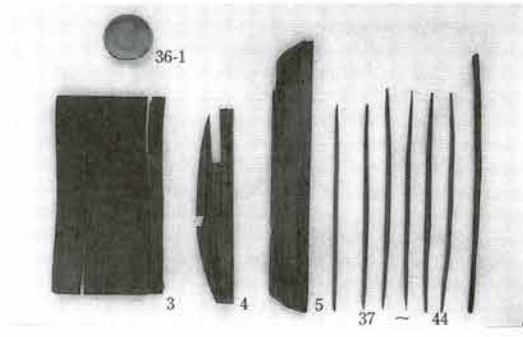


図36　4面土壙―13出土



図版18

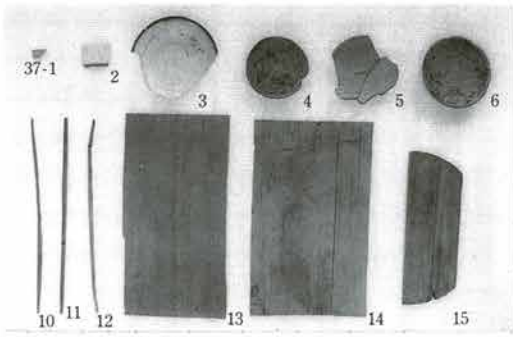
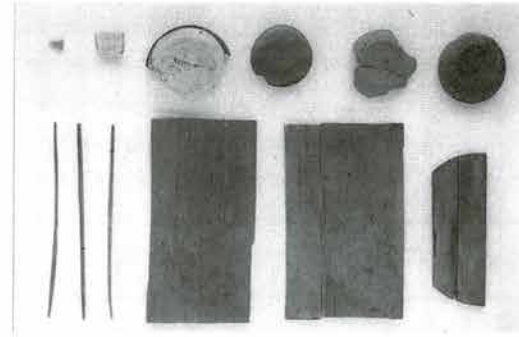


図37　4面土壙—15出土



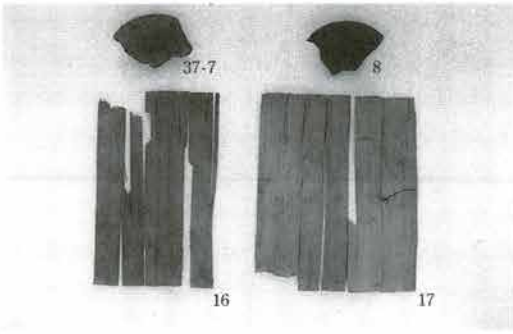


図37　4面土壙—15出土

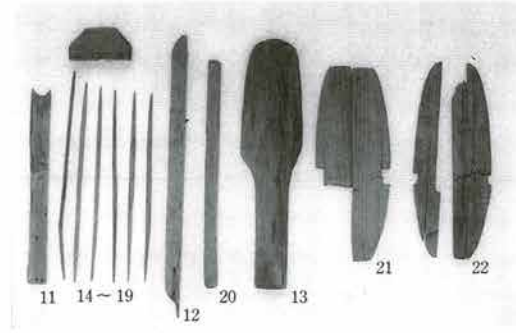


図37　4面土壙—17出土

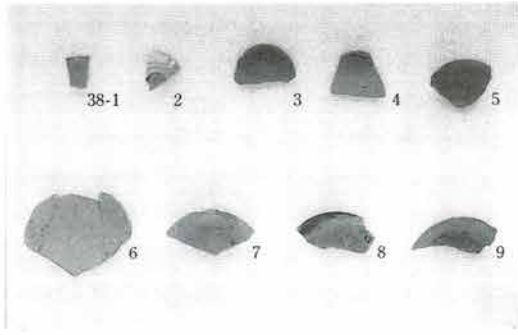
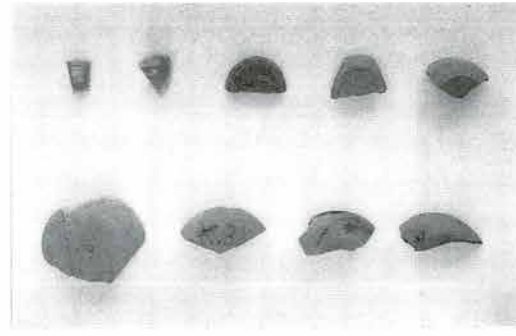


図38　4面土壙—17出土



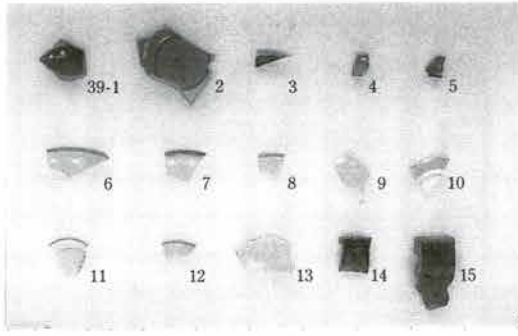
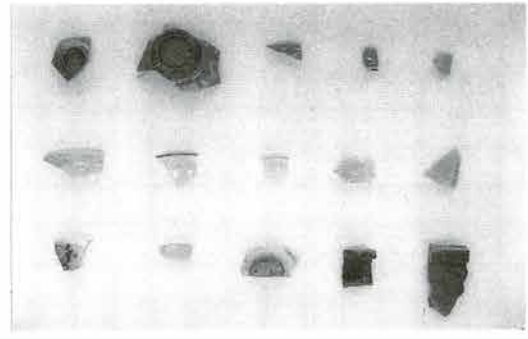


図39　4面まで出土



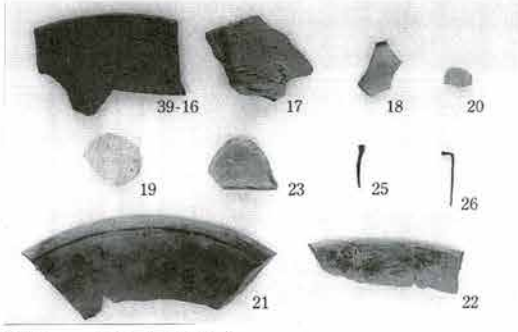
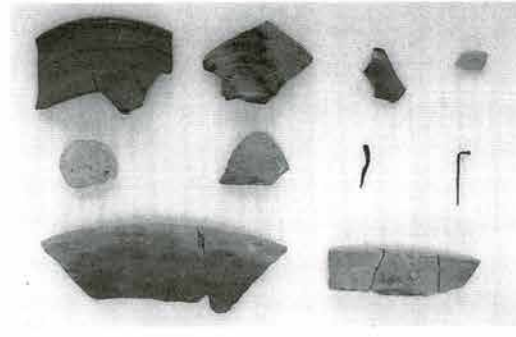
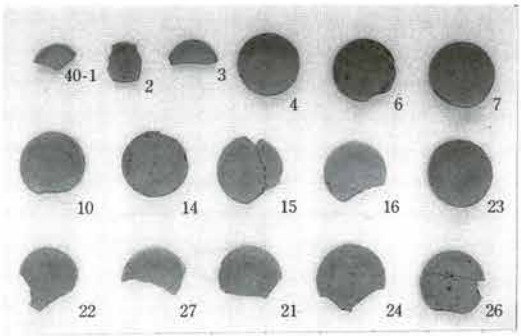


図39　4面まで出土





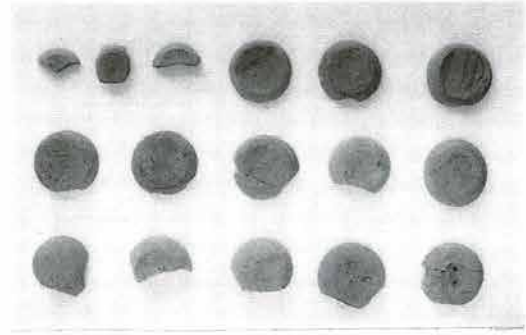


図40　4面まで出土

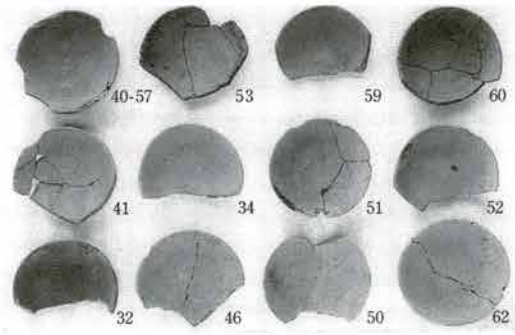
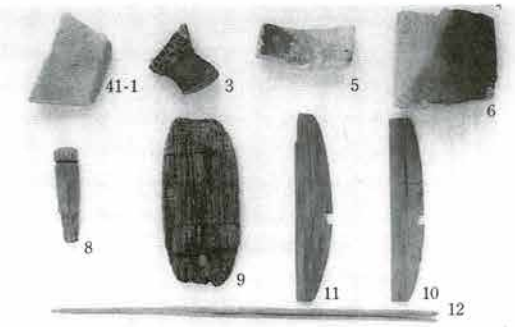


図40　4面まで出土



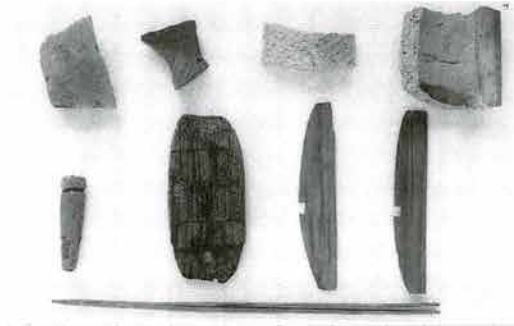


図41　4面まで出土

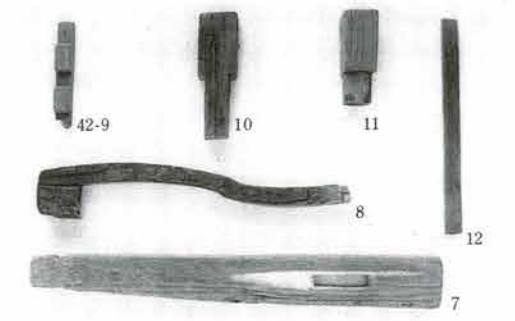


図42　4面まで出土

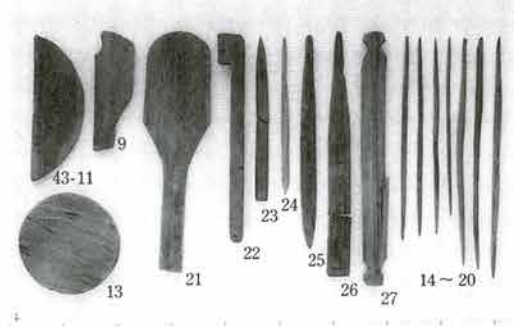


図43　4面まで出土

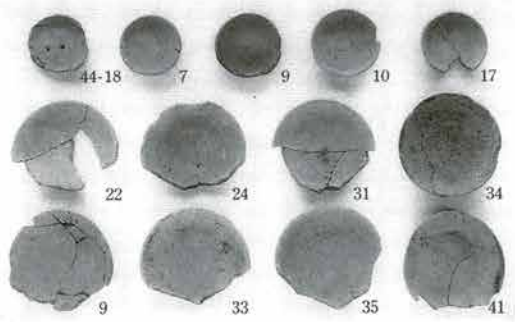


図44　4面出土

図版20

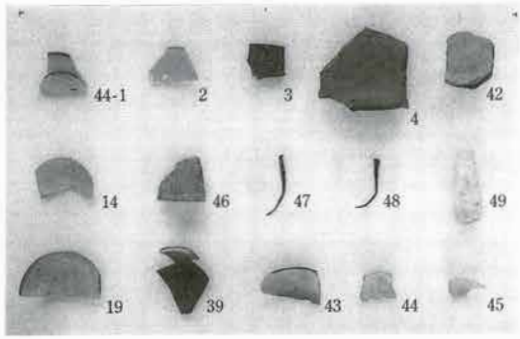
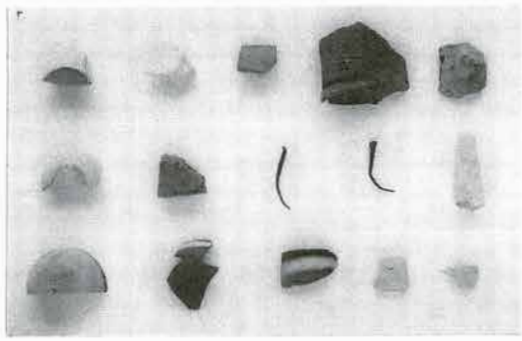


図44　4面出土



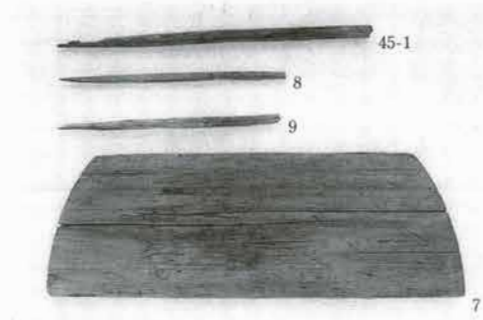
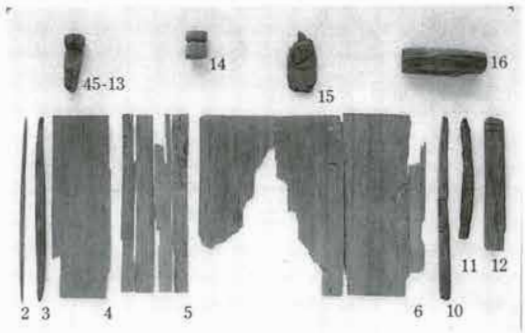


図45　4面出土



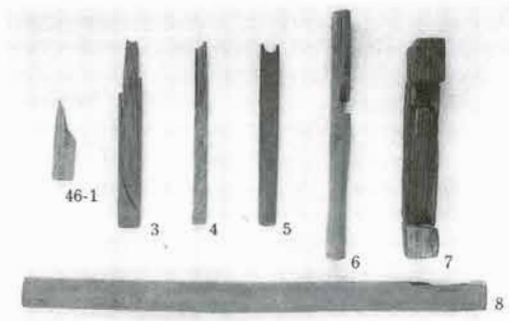


図46　4面出土

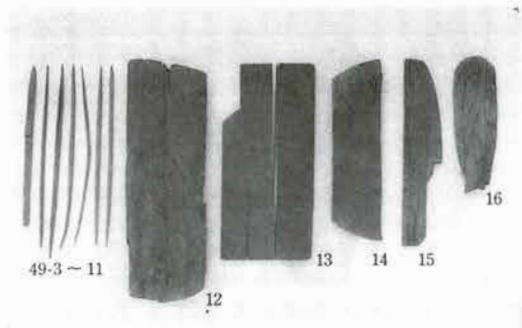


図49

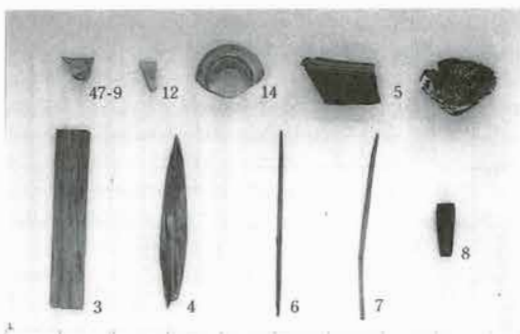
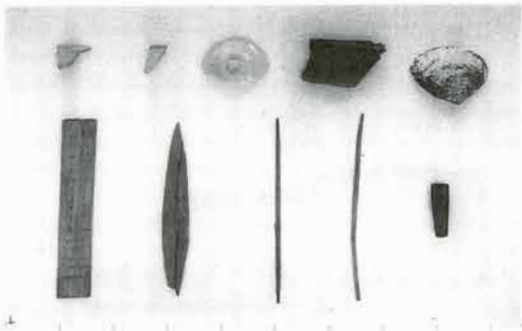


図47　5面柱穴列出土



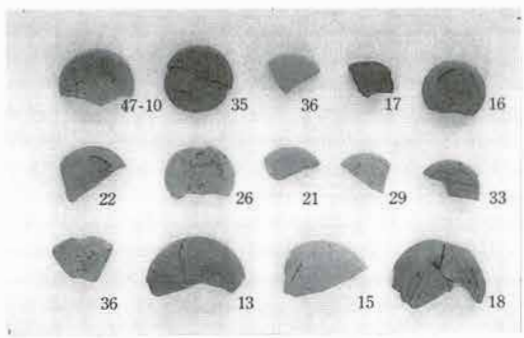
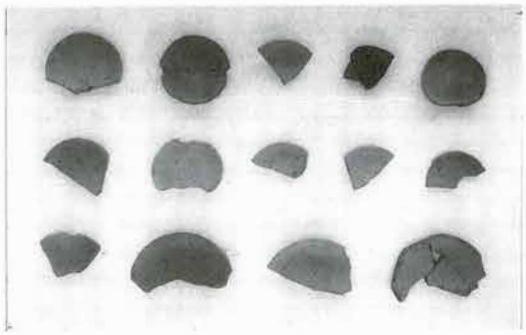


図47　5面柱穴列出土



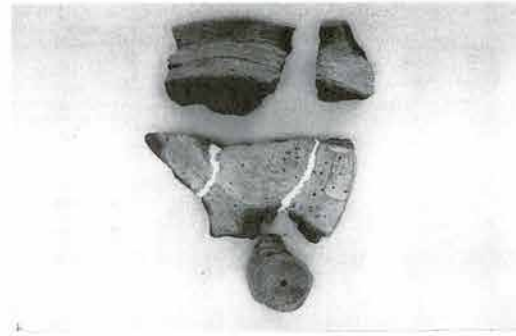
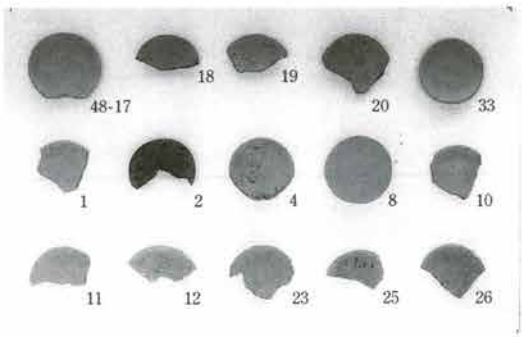


図47　5面柱穴列出土



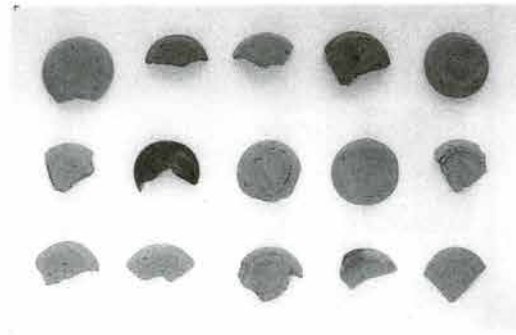
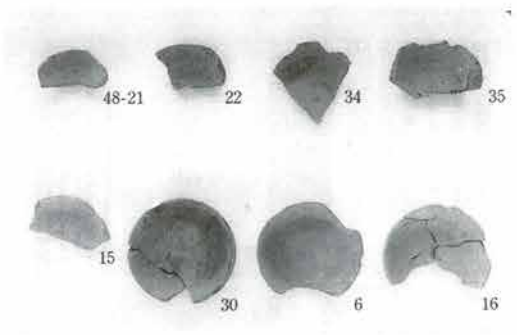


図48　5面遺構出土



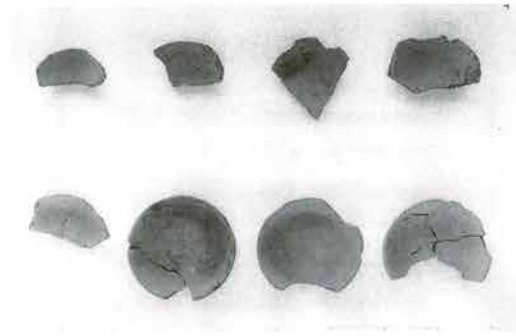


図48　5面遺構出土

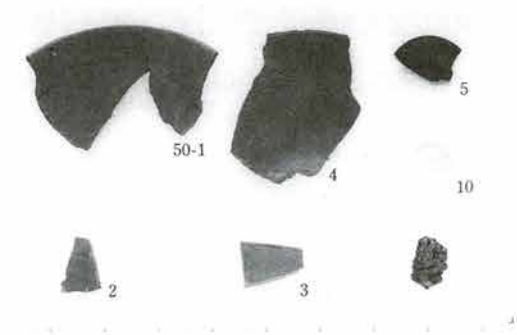
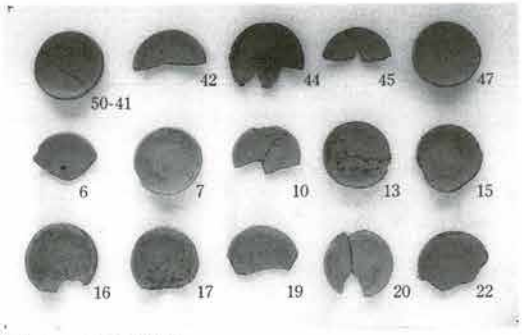


図50　5面出土



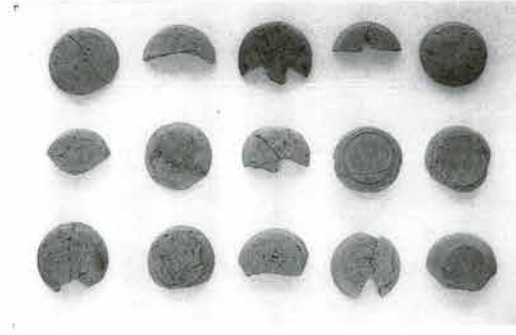


図50　5面出土

図版22

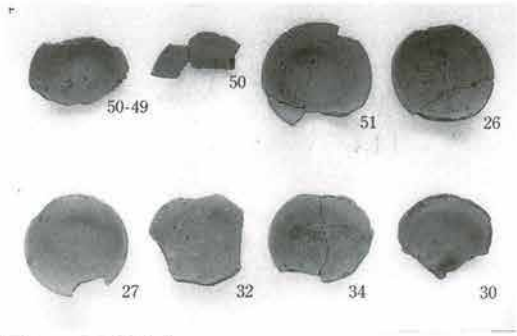
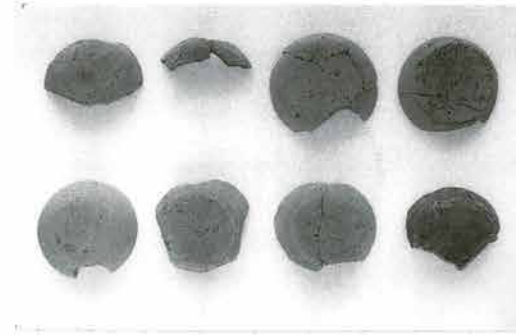


図50　5面出土



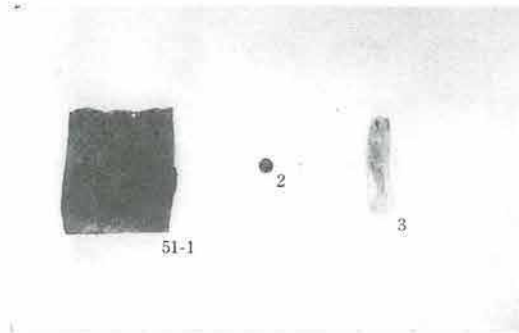
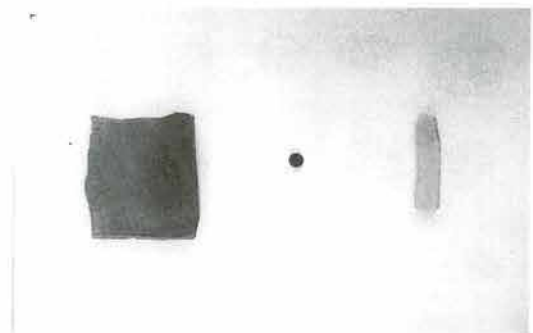


図51　5面出土



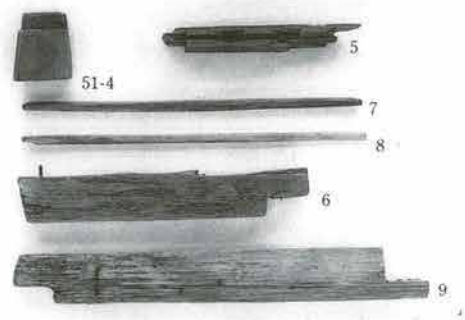


図51　5面出土

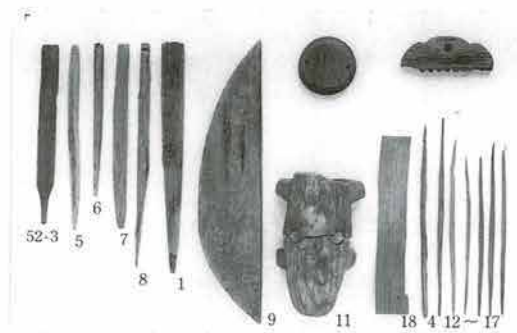


図52　5面出土

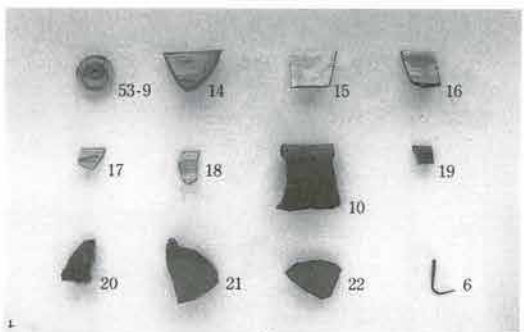


図53　6面遺構出土

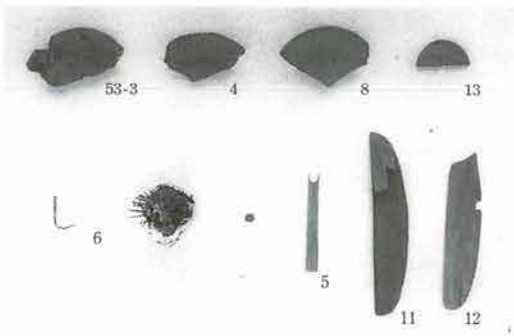
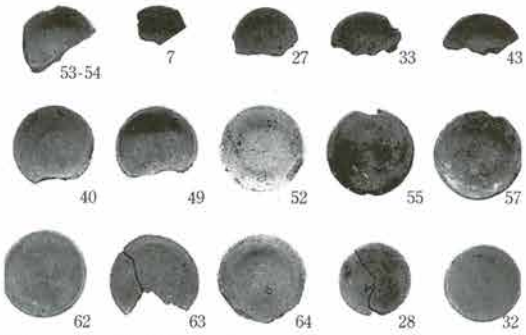


図53　6面遺構出土



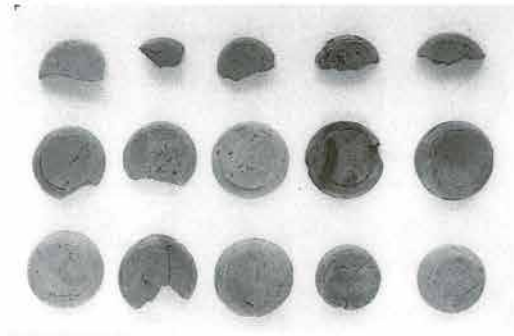
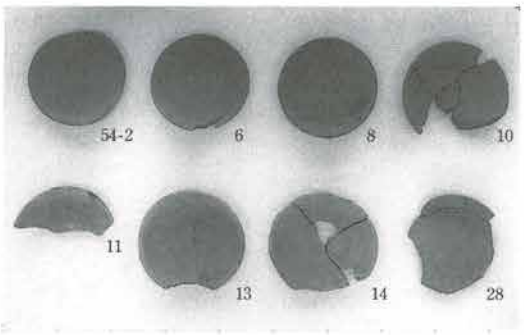


図53　6面遺構出土



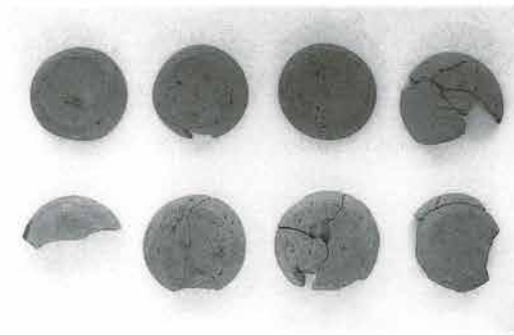
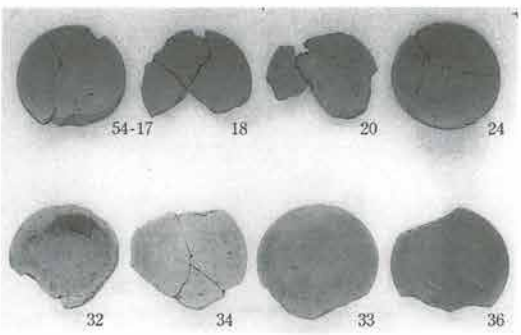


図54　6面土壙—7・8出土



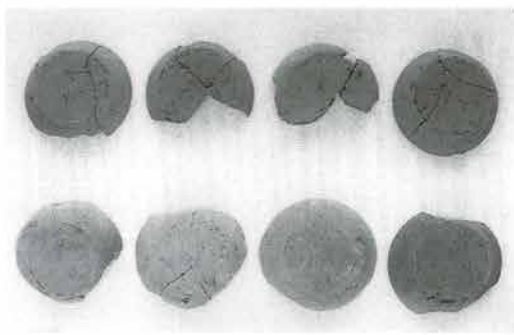
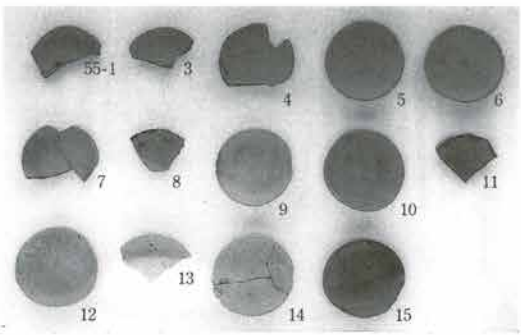


図54　6面土壙—7・8出土



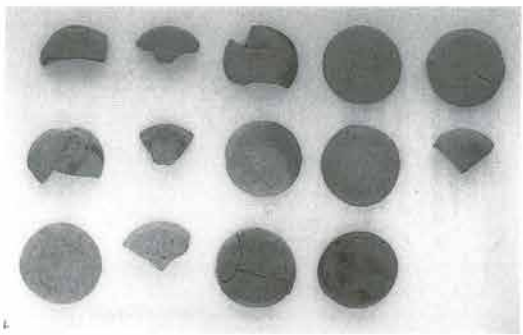
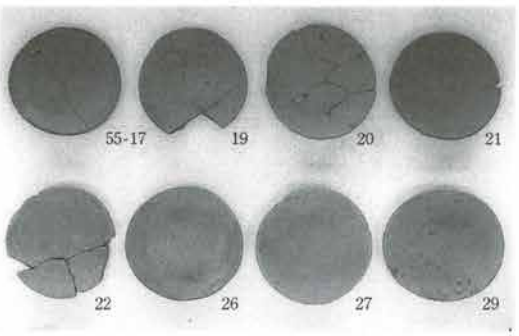


図55　6面土壙—7・8出土



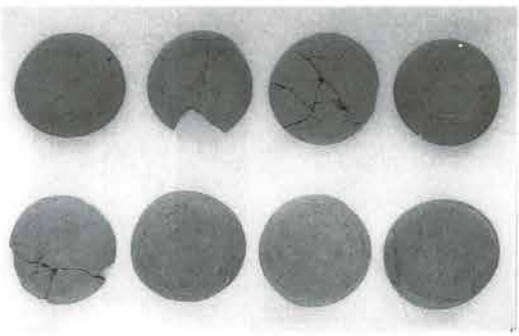


図55　6面土壙—7・8出土

図版24

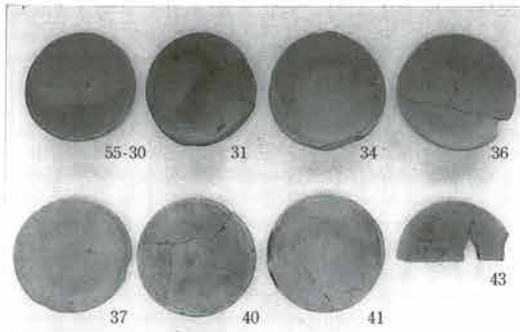
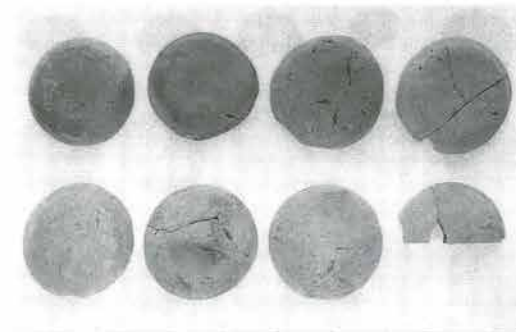


図55　6面土壙—7・8出土



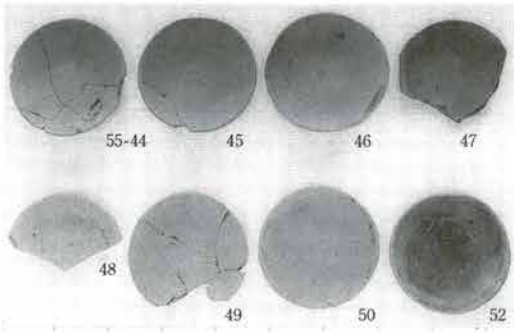
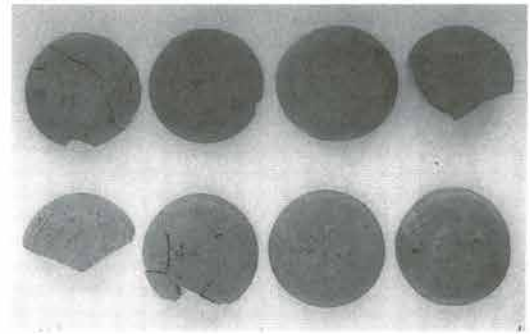


図55　6面土壙—7・8出土



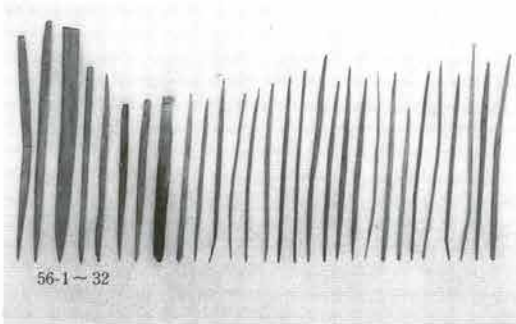


図56　6面土壙—7・8出土

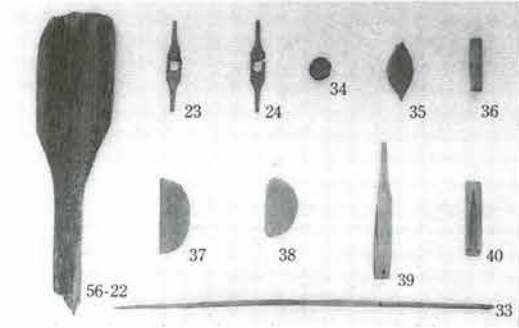


図56　6面土壙—7・8出土

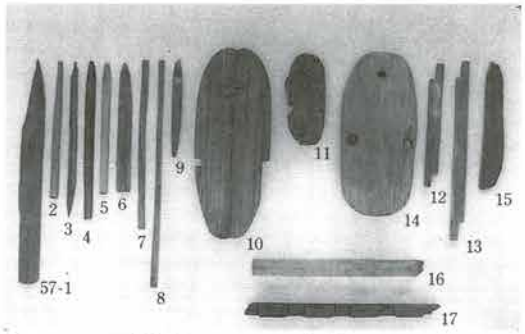
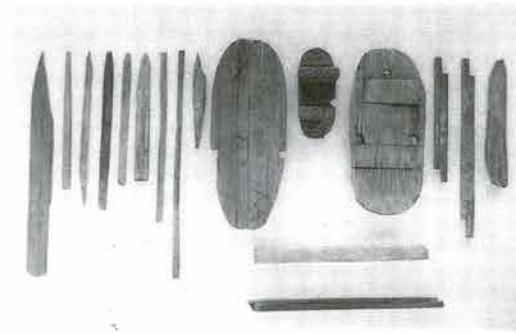


図57　6面土壙—7・8出土



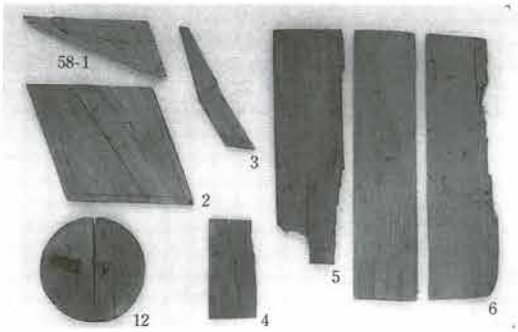


図58　6面土壙—7・8出土

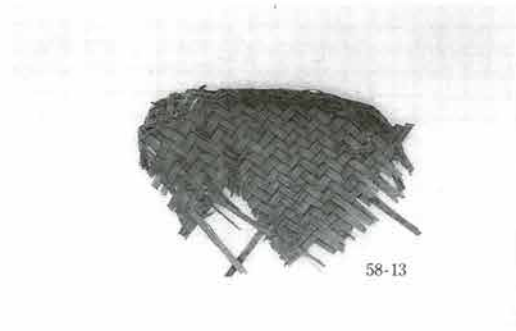


図58　6面土壙—7・8出土

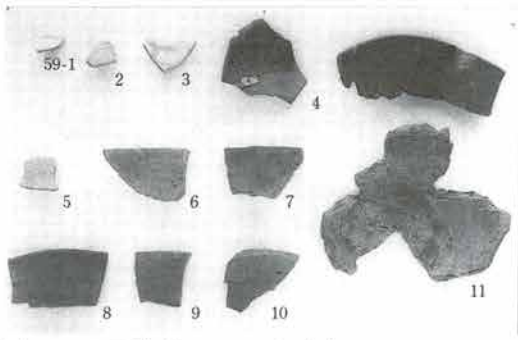


図59　6面土壙―7・8出土

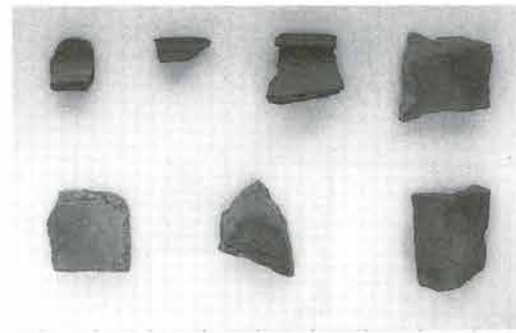
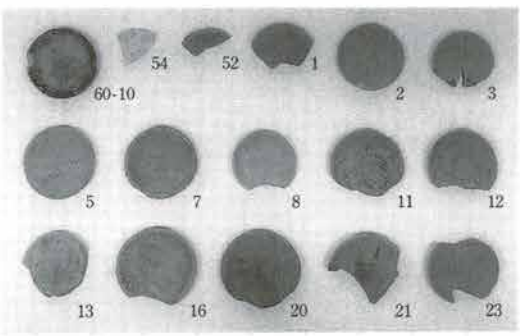


図59　6面まで出土



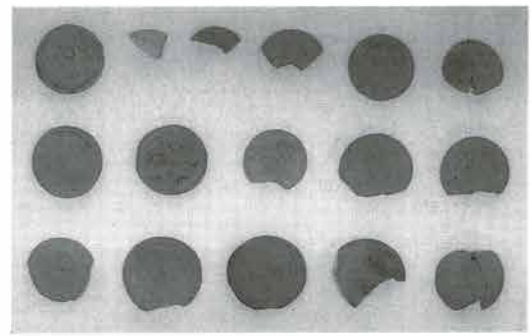
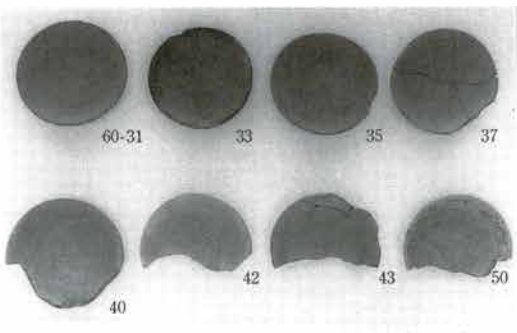


図60　6面まで出土



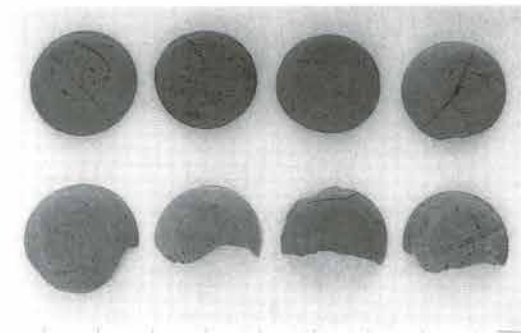
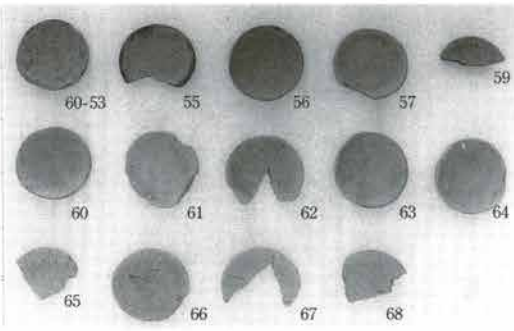


図60　6面まで出土



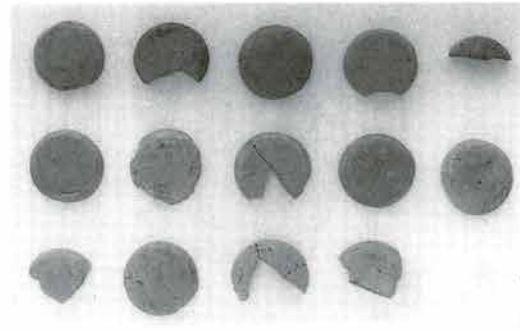
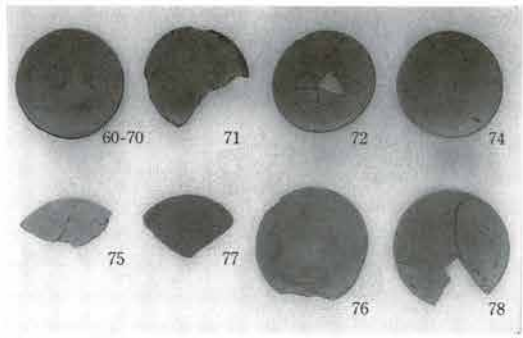


図60　6面まで出土

図版26



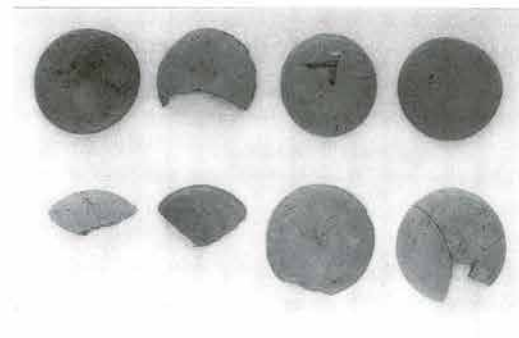


図60　6面まで出土

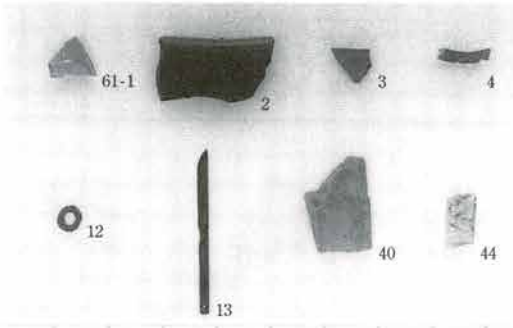
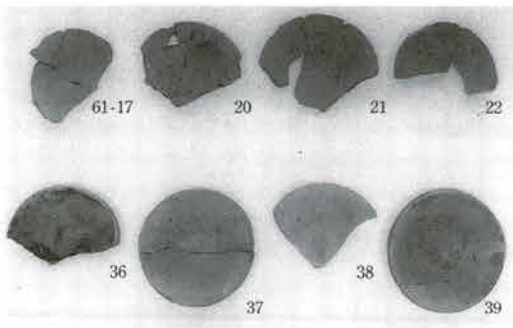


図61　6面まで出土

図61　6面まで出土



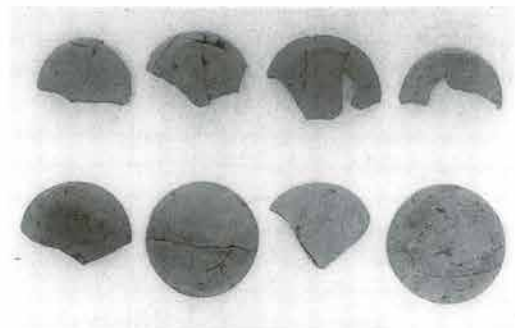
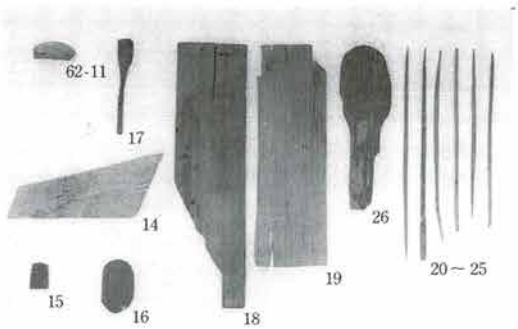


図61　6面まで出土



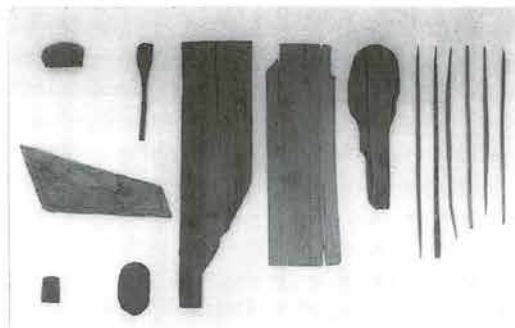


図62　6面出土

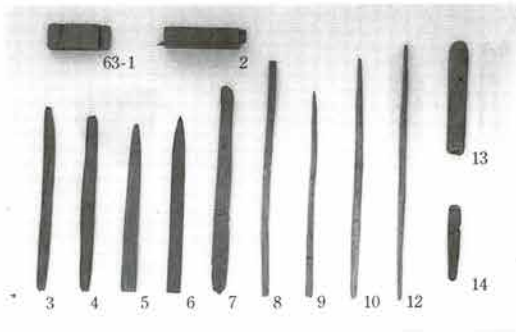


図63　6面出土

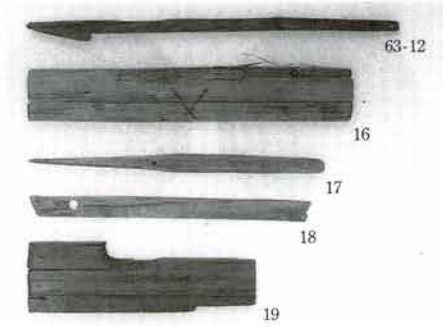


図63

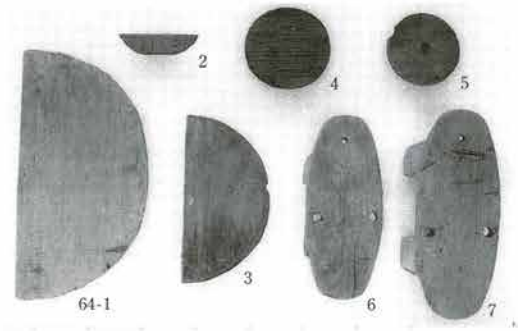
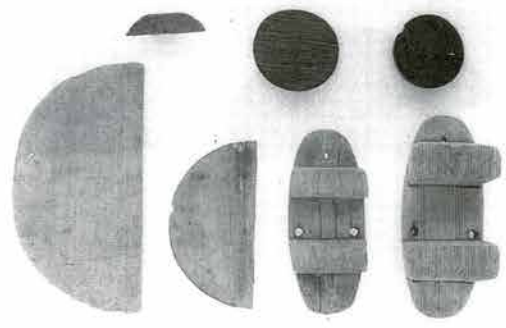


図64　6面出土



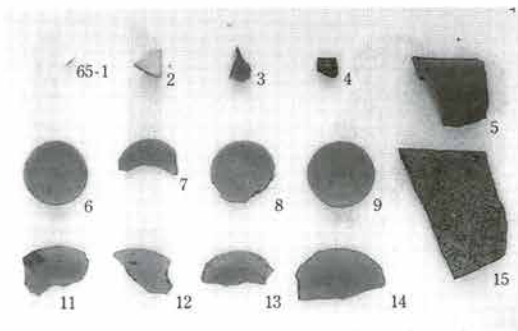


図65　トレンチ及び表採遺物

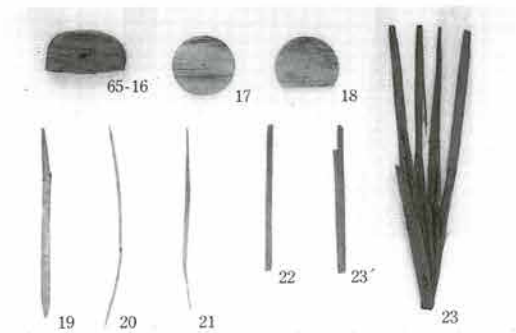


図65　トレンチ及び表採遺物

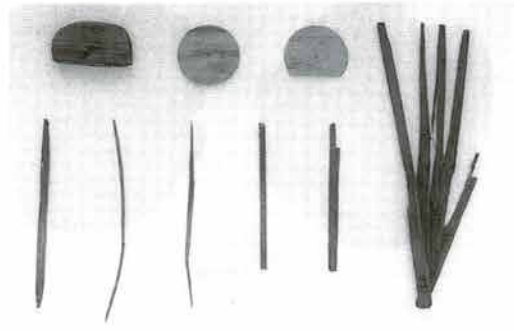


図39　4面出土

図版28

16-22

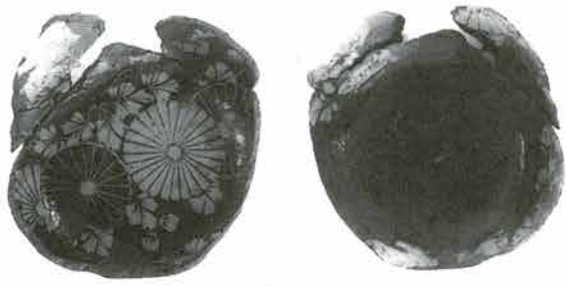
16-7

19-18

16-23

19-21

19-23



19-14

19-20

19-25

19-16

20-17

23-5

19-15

22-23

3面・4面出土漆製品

23-6

23-7

23-8

25-20

25-21

25-22

26-18

29-15

25-19

29-14

32-27

29-16

33-39

35-6

35-2

36-9

32-26

4 面出土漆製品

図版30

38-27

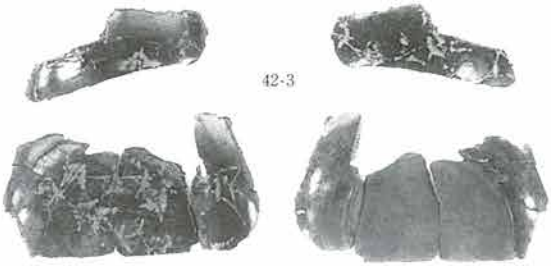
41-1

41-5

41-6

41-4

42-2



42-3

42-5

42-6

42-8

42-4

45-11

45-13

45-12

45-16

45-14

45-15

4 面出土漆製品

47-32

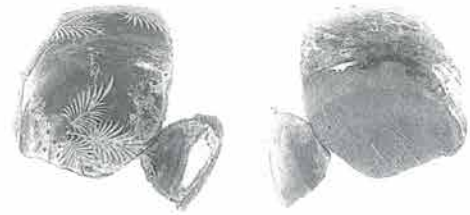
48-5

49-1

49-2

49-3

52-20



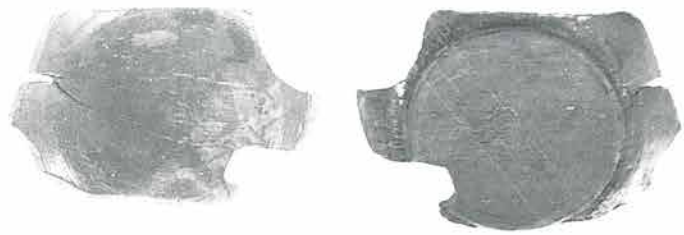
52-21

58-8

58-9

57-18

58-7



58-10

61-41

58-11

5面・6面出土漆製品

図版32

62-1

62-4

62-5　62-6

62-2

62-7

62-6

62-9

62-8

62-10　62-12

62-13

65-24

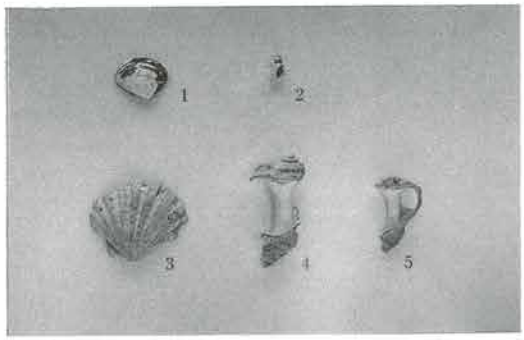
65-25

65-27

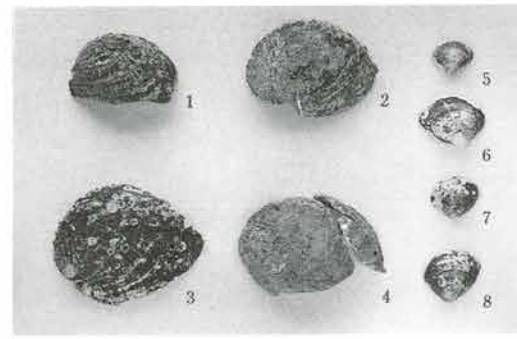
65-26

65-28

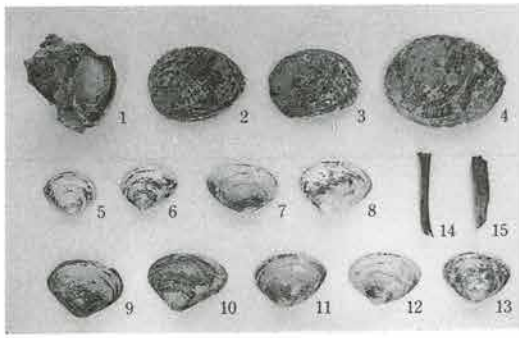
6面出土漆器・トレンチ出土漆製品



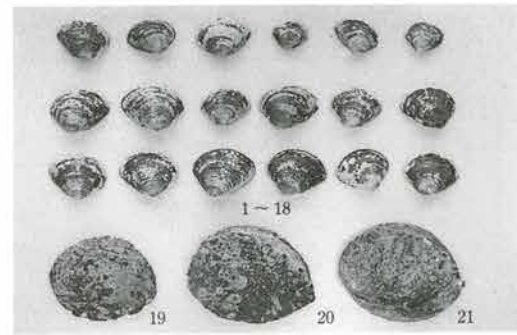
1．3面



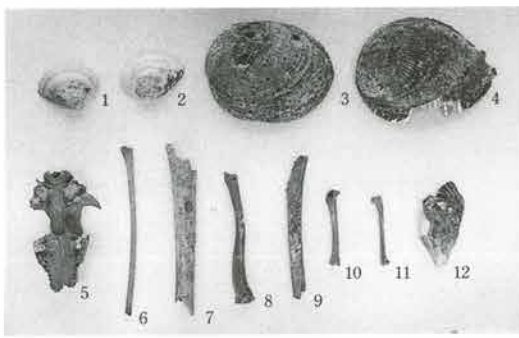
2．4面



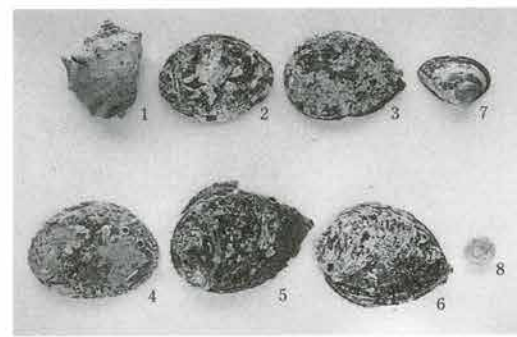
3．4面



4．4面



5．4面



6．5面

1．（1・2チョウセンハマグリ、3．イタヤガイ、4・5．アカニシ）
2．（1～4．アワビ、5～8．チョウセンハマグリ）
3．（1～13．チョウセンハマグリ　14・15．獣骨）
4．（1～18．チョウセンハマグリ、19～21．アワビ）
5．（1・2．チョウセンハマグリ、3・4．アワビ、5．犬頭骨、6～11．獣骨、12．イガイ）
6．（1．アカニシ．2～6．アワビ、8．サザエのふた）

3面・4面・5面出土自然遺物

材木座町屋遺跡（No.261）

材木座六丁目674番10
材木座六丁目674番15
材木座六丁目674番８外
材木座六丁目674番９

例　　言

1．本報告は材木座町屋遺跡（鎌倉市№261）のうち材木座六丁目674番10地点、材木座六丁目674番15地点、材木座六丁目674番８外地点、材木座六丁目674番９地点における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。各地点は便宜上Ａ地点、Ｂ地点、Ｃ地点、Ｄ地点と呼称した。

2．各地点の発掘調査期間は以下の通りである。

材木座六丁目674番10地点（Ａ地点）　平成14年８月12日～平成14年９月26日
材木座六丁目674番15地点（Ｂ地点）　平成14年８月12日～平成14年９月10日
材木座六丁目674番８外地点（Ｃ地点）　平成14年10月８日～平成14年11月８日
材木座六丁目674番９地点（Ｄ地点）　平成14年12月16日～平成15年１月31日

3．調査体制は次の通りである。

担　当　者　　齋木秀雄、降矢順子（資料整理）
調　査　員　　根本睦子、押木弘己、熊谷満
調査補助員　　長沢保崇、秋山隆史、大沢智博、佐藤繁昌、青木美枝子
調査参加者　　天野隆男、安斉三男、石井清司、牛嶋道夫、川崎由紀夫、河原龍雄、柴崎英輔、清水光一、照井三善、町田義一、沼上三代治、箕田孝善、宮崎明、渡辺輝彦（鎌倉市シルバー人材センター）

4．本報告の執筆は第１章を降矢が、第２章・第３章を根本が、第４章を齋木が分担して執筆した。なお、根本が執筆した文章には齋木が加・除筆を加えた。

5．本報告に関わる資料整理は以下の通りに分担した。

遺物実測・トレース　降矢順子、根本睦子、八木沼ひとみ
挿図・図版作成　降矢順子、根本睦子、八木沼ひとみ、森山知加
遺物写真撮影　瀬田哲夫

6．本書に使用した遺構、遺物図版の縮尺は以下の通りである。

遺構全体図　1/300　個別遺構　1/60
遺構図の水糸高は、海抜を示す。
遺物実測は1/3、銭は1/1

7．出土品、図面などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

本文目次

第1章　第1章 遺跡の位置と歴史的環境第……145
第2章　調査の概要……148
　第1節　調査の経緯と方法……148
　第2節　堆積土層……149
第3章　検出遺構と出土遺物……152
　第1節　A地点の遺構と遺物……152
　　1　1面の遺構と遺物……152
　　2　2面の遺構と遺物……153
　　3　3面の遺構と遺物……154
　　4　4面の遺構と遺物……157
　　5　若干のまとめ……158
　第2節　B地点の遺構と出土遺物……159
　　1　1面の遺構と遺物……159
　　2　2面の遺構と遺物……161
　　3　若干のまとめ……163
　第3節　C地点の遺構と出土遺物……164
　　1　1面の遺構と遺物……164
　　2　2面の遺構と遺物……165
　　3　3面の遺構と遺物……171
　　4　若干のまとめ……171
　第4節　D地点の遺構と出土遺物……173
　　1　1面の遺構と遺物……173
　　2　2面の遺構と遺物……173
　　3　3面の遺構と遺物……176
　　4　4面の遺構と遺物……178
　　5　5面の遺構と遺物……179
　　6　若干のまとめ……180
第4章　まとめ……184
　第1節　いわゆる中世地山について……184
　第2節　調査地点の開発痕跡……184
　第3節　各地点検出遺構の関係……185
　第4節　各遺構群の年代……186

挿　図　目　次

図1　調査地点周辺図……146
図2　調査軸設定図……148
図3　堆積土層模式図……151
図4　A地点1面検出遺構……152
図5　A地点1面出土遺物……153
図6　A地点2面検出遺構……154
図7　A地点2面出土遺物……155
図8　A地点3面検出遺構……156
図9　A地点3面井戸……156
図10　A地点3面出土遺物……157
図11　A地点4面検出遺構……158
図12　A地点4面出土遺物……158
図13　B地点1面検出遺構……159
図14　B地点1面井戸1……160
図15　B地点1面土坑……160
図16　B地点1面出土遺物……161

図17　B地点2面検出遺構 ……162
図18　B地点2面出土遺物 ……162
図19　C地点1面検出遺構 ……164
図20　C地点1面出土遺物 ……165
図21　C地点2面検出遺構 ……166
図22　C地点2面井戸1 ……167
図23　C地点2面井戸2 ……168
図24　C地点2面遺構出土遺物 ……168
図25　C地点2面出土遺物(1) ……169
図26　C地点2面出土遺物(2) ……170
図27　C地点3面検出遺構 ……171
図28　C地点3面出土遺物 ……171
図29　D地点1面検出遺構 ……173
図30　D地点1面出土遺物 ……174
図31　D地点2面検出遺構 ……174
図32　D地点2面出土遺物 ……175
図33　D地点3面検出遺構 ……176
図34　D地点3面出土遺物 ……177
図35　D地点4面検出遺構 ……178
図36　D地点4面出土遺物 ……179
図37　D地点5面検出遺構 ……180
図38　D地点5面出土遺物 ……180

写真図版目次

PL 1　1.材木座四丁目道標　2.補陀落寺道標　3.A地点付近旧地形(北東から)
PL 2　1.A・B地点近景(北から)　2.A地点Ⅰ区1面全景(南西から)　3.A地点Ⅱ区1面全景(北東から)　4.A地点Ⅱ区2面全景(北東から)　5.A地点Ⅰ区2面かわらけ出土状況(南から)　6.A地点Ⅱ区2面土坑4かわらけ出土状況(北西～)
PL 3　1.A地点Ⅱ区3面全景(西から)　2.A地点Ⅱ区3面土丹範囲検出状況(東から)　3.A地点Ⅱ区3面土坑10(東から)　4.A地点Ⅰ区西壁かわらけ出土状況(東から)　5.A地点Ⅰ区北壁セクション(南西から)　6.A地点Ⅱ区東壁セクション(北西から)
PL 4　1.A地点Ⅰ区3面井戸2木組み検出状況(南西から)　2.A地点Ⅰ区3面井戸2(南西から)　3.A地点Ⅰ区3面井戸2木組み検出状況(東から)　4.A地点Ⅰ区3面井戸2木組み検出状況(南西から)　5.B地点1面全景(北東から)　6.B地点1面南東コーナー鎌倉石検出状況(北から)　7.B地点1面土坑1(北から)　8.B地点1面土坑2(東から)
PL 5　1.B地点2面全景(北東から)　2.B地点西壁セクション(東から)　3.B地点2面直上かわらけ出土状況(東から)　4.B地点2面土坑3・9(北東から)　5.B地点2面ピット10(北から)　6.B地点1面井戸1(南西から)　7.B地点1面井戸1(北から)　8.B地点1面井戸1隅柱検出状況(北から)
PL 6　1.C地点Ⅰ区1面全景(北東から)　2.C地点Ⅱ区1面全景(北から)　3.C地点Ⅰ区2面全景(南東から)　4.C地点Ⅰ区2面井戸1(南東から)　5.C地点Ⅰ区2面井戸1(北東から)　6.C地点Ⅰ区2面井戸1木組み検出状況(南から)　7.C地点Ⅰ区2面井戸1木組み検出状況(東から)　8.C地点Ⅰ区東壁セクション(北西から)
PL 7　1.C地点Ⅰ区2面ピット18・19(南西から)　2.C地点Ⅰ区2面ピット18(南から)　3.C地点Ⅰ区2面ピット19(南東から)　4.C地点Ⅱ区2面全景(南西から)　5.C地点Ⅱ区2面井戸2(北西から)　6.C地点Ⅱ区2面井戸2土丹検出状況(南西から)　7.C地点Ⅱ区2面井戸2馬の頭蓋骨出土状況(東から)　8.C地点Ⅱ区土坑11仏華瓶出土状況(南西から)
PL 8　1.C地点Ⅱ区3面ピット27・28(北東から)　2.C地点Ⅱ区3面ピット27(東から)　3.D地点Ⅰ区1面全景(北東から)　4.D地点Ⅰ区2面全景(北東から)　5.D地点Ⅰ区2面ピット24・25(南西から)　6.D地点Ⅱ区2面全景(北東から)　7.D地点Ⅱ区2面銭出土状況(南から)　8.D地点Ⅰ区3面全景(北西から)
PL 9　1.D地点Ⅱ区3面全景(北東から)　2.D地点Ⅱ区3面土丹範囲検出状況(南西から)　3.D地点Ⅱ区3面ピット63かわらけ出土状況(北から)　4.D地点Ⅱ区3面ピット76(東から)　5.D地点Ⅰ区4面全景(北西から)　6.D地点Ⅱ区4面全景(南東から)　7.D地点Ⅰ区4面ピット77(南東から)　8.D地点Ⅱ区4面ロクロ土師器出土状況(東から)
PL10　1.D地点Ⅱ区5面全景(南東から)　2.D地点Ⅱ区5面漆器出土状況(北から)　3.D地点Ⅰ区5面ピット117(南から)　4.D地点Ⅱ区西壁山茶碗窯系捏ね鉢出土状況　5.D地点Ⅱ区東壁セクション(西から)　6.D地点Ⅱ区南壁セクション(北から)　7.D地点Ⅰ区西壁セクション(東から)　8.D地点Ⅰ区南壁セクション(北から)
PL11　出土遺物（1）
PL12　出土遺物（2）
PL13　出土遺物（3）
PL14　出土遺物（4）

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本地点を含む遺跡地は、丘陵で囲まれた鎌倉平野の南東部に位置する。調査地点は材木座海岸より北東約220m、ちょうど南西に向かって開口する弁ヶ谷の開口部東側に位置する。現況での地表面海抜レベルは6,50m前後である。調査地点北西約120m所には補陀洛寺、132mの所には九品寺が所在し、周辺には「材木座」、「飯島」、「高御倉」、「蔵屋敷」の地名も知られる。北東側には弁ヶ谷の谷戸が広がり、弁ヶ谷から流れる現在の豆腐川が調査地点の東側に流れている。又、南東側の丘陵裾には、浄土宗光明寺があり、南方約700m沖には中世鎌倉の貿易港である和賀江島がある。

本地点を含む鎌倉の海浜地域は、由比ガ浜が「前浜」あるいは「由比ヶ浜」、材木座が「西浜」などと呼ばれ、商人や職人達が多く住んでいたと考えられる。鎌倉唯一の港湾である和賀江島に隣接した地域で鎌倉街中への物資輸送の幹線となっていた小坪路から小町大路の延長上に続く道路東側に位置する地域でもあり、商人の行き交った繁華街的な土地であったと思われる。材木座の地名は、中世に材木を扱う組合である「座」が置かれたところから江戸時代より地名となって残っているが、それ以前は名越の一部であったかが明らかではない。「材木座町屋遺跡」範囲は滑川東側の沖積低地を含む広い範囲を示し、現在調査地点周辺は過密な住宅地となっている。『海道記』（1223年）は「東南角の一道は丹揖の津、商人のあきびとは百族満ちにぎはひ」と記す。

和賀江島は貞永元年（1232年）、勧進聖人の往阿陀仏の発意により造られた築港で、北条泰時の尽力があった。鎌倉時代中～後期以降は、極楽寺が管理していたことが知られる。飯島は和賀江島の陸地側の地域で、和賀江島と一体で機能する商業地区を形成し、関所が設けられていた。建長３年（1235年）には小町屋免許の地の一つに「和賀江島」が挙げられている。

光明寺は浄土宗の大本山で開創の年代は不詳だが、もと佐助ヶ谷にあった蓮華寺が移転、改明したものと伝えられる。開基は北条経時、開山は然阿良忠である。境内（地点３）、裏側谷戸（地点４）で発掘調査が行われている。地点３では13世紀中頃から15世紀前半頃の礎石建物、地鎮遺構（多量の一括廃棄遺物が共伴して出土）、土丹積遺構が検出されている。地点４では13世紀中頃から15世紀頃の掘立柱建物址、溝、土壙などが検出されている。

弁ヶ谷はいくつかの支谷で形成されている谷戸で、近世に鎌倉七谷の一つに挙げられている。中世では新善光寺、崇寿寺、最宝寺、最福寺などの寺院や武家屋敷のほか「高御倉」があった。新善光寺は鎌倉時代に盛んであった善光寺信仰に係わるものと考えられるが、創建、廃寺年代や宗旨ははっきりとしない。本願は北条泰時である。当寺に関係すると思われるやぐらの発掘調査が実施されている。（地点12）。コ字区画遺構からは火葬墓（蔵骨器。写経石を伴う）や宝篋印塔などが発見されている。宗寿寺は元享元年（1321年）北条高時の開創。臨済宗である。開山は南山士雲である。応永31（1424）までは存続していたことが知られる。高御倉は谷内の東側で最初に造られる枝谷内にあったらしい。名称からして、幕府あるいは北条氏に係わる高床式の倉庫と考えられるが、『吾妻鏡』に記される「浜の高御倉」の浜とは位置が異なっている。

補陀落寺は開基源頼朝、開山文覚上人と伝える。浄土宗である。蔵屋敷に所在する。現在までに材木座町屋地域で調査が実施された遺跡について述べる。材木座町屋遺跡（地点２）では、方形竪穴建物址、溝、土壙などが検出され、14世紀後半以降から16世紀代である。能蔵寺跡（五所神社境内所在地点５）は溝、土坑、ピット等が検出され、12世紀末～14世紀前半代の年代観とされている。材木座町屋遺跡（地

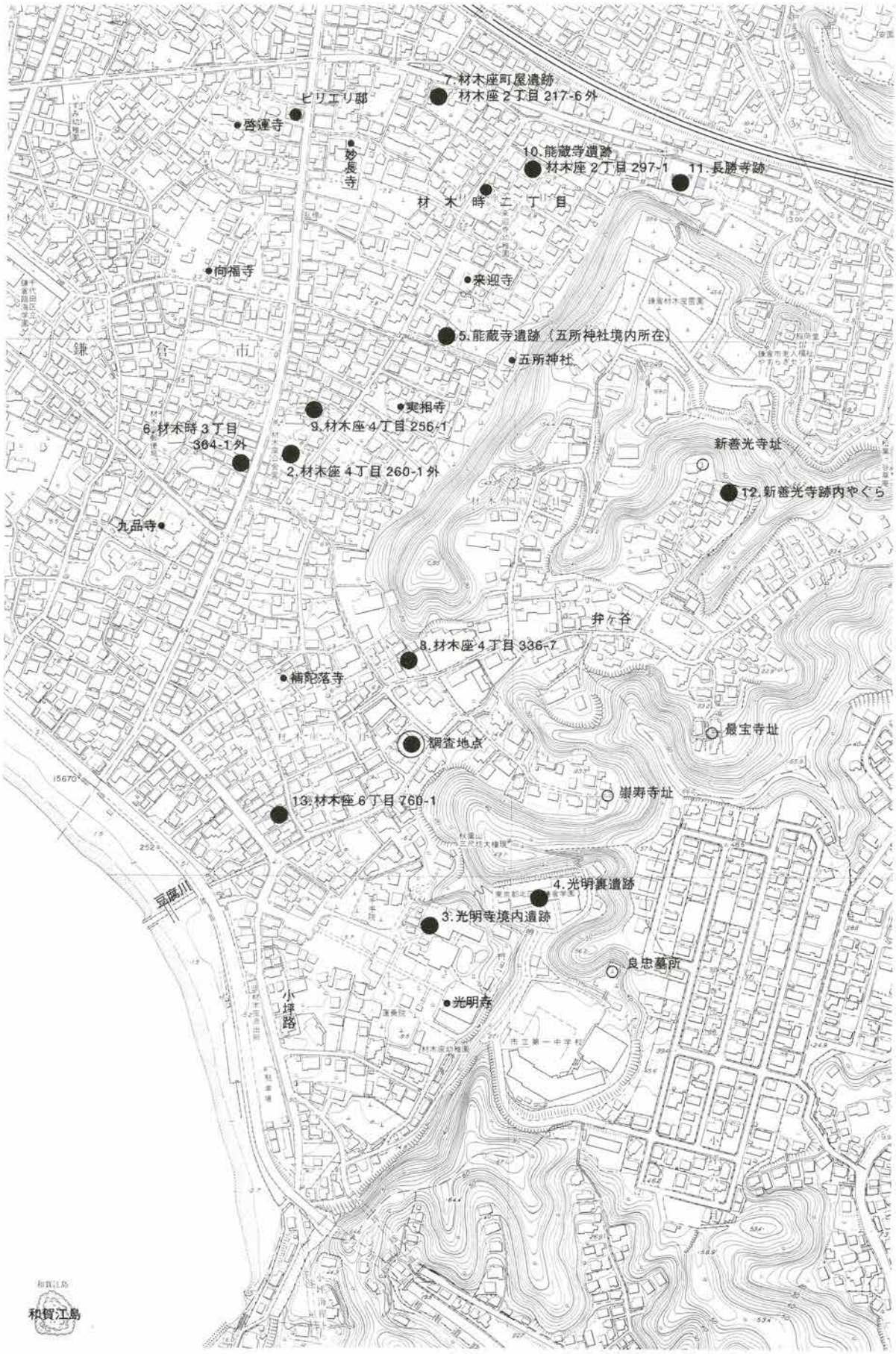

7.材木座町屋遺跡
材木座２丁目 217-6外
ビワエリ邸
●啓運寺
妙長寺
10.能蔵寺遺跡
材木座２丁目 297-1
11.長勝寺跡
材木時二丁目
●向福寺
●来迎寺
5.能蔵寺遺跡（五所神社境内所在）
●五所神社
鎌倉市
●実相寺
9.材木座４丁目 256-1
6.材木時３丁目
304-1外
2.材木座４丁目 260-1外
新善光寺址
12.新善光寺跡内やぐら
九品寺●
井々谷
8.材木座４丁目 336-7
●補陀落寺
最宝寺址
調査地点
崇寿寺址
13.材木座６丁目 760-1
4.光明裏遺跡
3.光明寺境内遺跡
良忠墓所
小坪路
●光明寺
豆腐川
和賀江島

図１　調査地点周辺図

点６）では方形竪穴建物址、方形土坑、土坑、ピット等が検出され、鎌倉後期から南北朝時代が中心である。材木座町屋遺跡（地点７）では、方形竪穴建物址、土坑、柱穴などが検出され、13世紀前半から14世紀代とされている。弁ヶ谷遺跡（地点８）では、井戸址、石組遺構、土坑、ピットなどを検出し、13世紀末から15世紀代とされている。遺跡の性格としては、町屋的な要素は希薄で、寺院址跡的な色合いが強いと指摘している。材木座町屋遺跡（地点９）では、方形竪穴建物址、土坑、ピットなどが検出され、13世紀代に開発が始まり、15世紀前半代には建物群は埋没していたと調査されている。能蔵寺跡（地点10）では5枚の生活面が検出され、土丹地業面、溝、土坑、ピットなどが検出され、13世紀初頭から14世紀初頭に至る土丹地業面をもつ小規模な建物址を確認している。長勝寺遺跡（地点11）では、掘立柱建物址、土間、土壙、溝、柱穴、鎌倉石などが多数検出されている。検出された土壙40基のうち、人骨を埋葬したものが20基ある。埋葬法としては土葬19基、火葬１基で、土葬はすべて側臥屈葬である。それらについては土壙墓として取り扱ってある。

新善光寺跡内やぐら（地点12）では、マウンド状遺構、土間状遺構、石垣、やぐら２基、コの字区画遺構、火葬墓２基が検出され、14世紀後半～15世紀前半代を与えられる。材木座町屋遺跡（地点13）は、豆腐川の西側に位置し、木組遺構、溝、土坑、ピットなどが検出され、14世紀～15世紀前半代と考えられている。

参考文献

赤星直忠、貫達人他 『鎌倉市史』1959年　吉川弘文館
白井永二編 『鎌倉事典』1976年　東京堂出版
白井永二編 『鎌倉廃寺事典』1980年　有隣堂
田代郁夫他 「材木座町屋遺跡-材木座四丁目260番１外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』1990年　鎌倉市教育委員会
馬淵和雄 『能蔵寺跡-五所神社境内所在遺跡の発掘調査』1995年　鎌倉市教育委員会
馬淵和雄他 「材木座町屋遺跡―材木座五丁目364番１外―」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13』1996年　鎌倉市教育委員会
瀬田哲夫 「材木座町屋遺跡―材木座二丁目217番6他―」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』2001年　鎌倉市教育委員会
大河内勉他 「材木座町屋遺跡―材木座六丁目760番１―」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17』2000年　鎌倉市教育委員会
汐見一夫他 「材木座町屋遺跡―材木座四丁目256番―」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18』2002年　鎌倉市教育委員会
伊丹まどか他 「能蔵寺跡―材木座二丁目297番１―」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』2003年　鎌倉市教育委員会

第２章　調査の概要

第１節　調査の経緯と方法

調査はそれぞれ個人住宅の建築に伴う事前調査として、Ａ－Ｄ地点順に、34.3㎡、21.0㎡、35.0㎡、34.4㎡の調査区を設定し、調査を行った。調査では現地表から、Ａ－Ｄ地点それぞれ１ｍ、60cm、80cm、50cmを重機によって掘削し、以下を人力で掘り下げて遺構確認を行っていった。

調査にあたっては、調査深度の深い、浅いによって調査発生土の量に差があって、各地点の対象面積を１回で掘削する事が困難であった。そのため、Ｂ地点を除く３地点では対象面積を２分割して調査を行わざるを得なかった。また、調査深度が２ｍにも及ぶため１回目の調査区を埋めた発生土が崩落する危険性も考えられたので２分割した調査区間にはベルト状の未調査区を残した。そのため土層図には若干整合しない部分が生じてしまった。各地点の調査順は２分割して最初に調査した部分をⅠ区、次いで調査した部分をⅡ区としている。

また、調査図面の作成にあたっては鎌倉市4級基準点CO20（Ｘ＝－77408.876、Ｙ＝－25094.395）を支

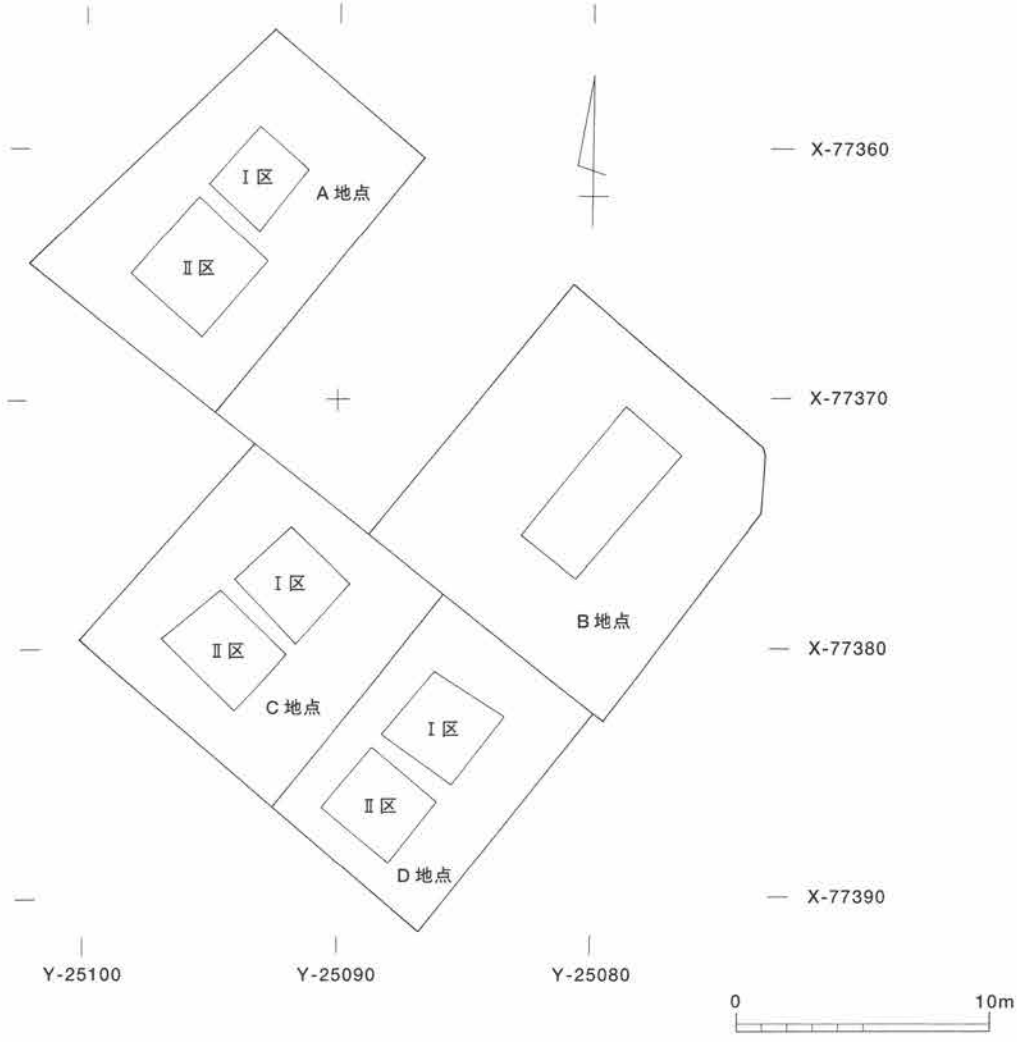


図２　調査軸設定図

点とし、４級基準点CO19（X=－77428.560、Y=－25107.664）を見返り、Ａ地点（X=－77358.000、Y=－25094.000）、Ｂ地点（X=－77379.000、Y=－25080.000）、Ｃ地点（X=－77390.000、Y=－25088.000）、Ｄ地点（X=－77381.000、Y=－25091.000）設置し、各座標の真北にＹ値の同じ見返り点を設定した。これを基準とし、南北方向をＸ径、東西方向をＹ径としてグリットを組み、機械測量と併用して調査を進めた。したがって、本地点の調査で使用しているＹライン（南北方向）は真北方向を指している。最も早いＡ地点の調査は平成14年８月12日から発掘調査を開始し、Ｄ地点の調査が終了したのは平成16年１月31日である。

第２節　堆積土層

本節では調査を行ったＡからＤの４地点で確認された堆積土層について述べる。前節でも述べたが、離れた４地点の調査区をさらに２分割したために、７箇所のトレンチを調査したのと同じ様な状況になってしまった。そのためもあって各地点・調査区間の堆積土層や生活面の関係を正確に把握する事が困難であったが、大まかにはＢ地点を斜面頂部として各地点に向かって下がる斜面地形として把握した。

以下に各地点で確認した堆積土について説明を加えるが、中世生活面は各地点を越えて同一面・同一土層を把握する事が困難であったため、一括して中世生活面群とし、各地点の様相を加えた。各調査地点を越えて版築等の生活面が検出されない事には、今回検出された版築が土間のような狭い範囲に限定される遺構であった事等も原因の一つと考えている。

基本堆積土層は以下の通りである。

１層　表土
２層　近世・近代耕作土
３層　遺構面群
４層　暗褐色粘質土
５層　暗灰褐色粘質土
６層　灰褐色砂質土
７層　黒灰褐色弱粘質土

１　Ａ地点

調査区内で確認した堆積土層は６層に区分した。

Ⅰ層は造成土及び現代の撹乱となる。基本土層1層。

Ⅱ層は近世耕作土で、締まりがなく、ざらざらした茶褐色土である。上面レベルは海抜5.6mを測る。

基本土層２層。

Ⅲ層は、主に直径１㎝以下の細かい土丹粒を多量に含んだ暗褐色弱粘質土である。この層の上面を便宜上１面としたが、正確には確認面である。上面レベル海抜5.3m。

Ⅳ層は締まりがあり、多量の直径１㎝以下の細かい土丹粒や少量の炭化物粒子を含む黒褐色粘質土である。この上面を２面とした。海抜は5.0～5.2mである。やや北から南へ向かい、若干高くなる。層上面に版築面は確認できなかった。

Ⅴ層は締まりがあり、直径５㎜以下の細かい土丹粒や炭化物粒子を含んだ暗褐色粘質土で、この上面を３面とした。海抜は北で5.0m前後、南で4.7m前後と、南へ向かって低くなる。全体的な版築面はな

いものの、第Ⅱ区の西側で長軸105cm、短軸50cm、厚さ５～10cmの範囲に土丹をつき固めた版築が見られた。

Ⅵ層は直径２㎜以下の非常に細かい土丹粒を微量に含む暗褐色粘質土で、この層の上面が４面である。海抜は4.6mを測る。中世基盤層であり基本土層4層に相当。

2　B地点

確認された堆積土層は６層に区分した。

Ⅰ層は造成土及び近・現代の撹乱層。基本土層１層。

Ⅱ層は近世耕作土（旧表土）である。上面レベルは海抜5.4m。基本土層２層。

Ⅲ層は暗褐色粘質土で、締まりが有り、直径１cm前後の土丹粒、炭化物粒子を非常に多く含む。この層の上面を便宜上１面（確認面）とした。上面海抜レベル5.3m。

Ⅳ層は締まりが有り、直径２～５㎜の細かい土丹粒を多く、拳大の土丹を少し含む暗褐色粘質土で、薄い版築面とも考えられる。上面を２面とした。海抜レベル4.7～5.1m。

Ⅴ層は中世基盤層の斜面に堆積している土層を含めた。５層に分ける事が可能であるがいずれも小土丹を含む暗褐色土で薄い版築状の堆積土も確認できる。

Ⅵ層は中世基盤層の暗褐色粘質土である。基本土層４層相当で海抜レベル4,6m～4,8m。

3　C地点

調査区内の堆積土層は８層に大別した。

Ⅰ層は造成土及び現代の撹乱である。基本土層１層。

Ⅱ層は近世耕作土（旧表土）で締まりや粘性はなく、ざらざらした茶褐色土である。上面レベルは海抜5.5m。基本土層２層。

Ⅲ層は締まりがあり、直径２～３cmの土丹粒を多量に含む暗褐色粘質土である。Ⅰ区では炭化物粒子が若干みられた。中世包含層。

Ⅳ層は締まりが有り、直径５㎜以下の細かい土丹粒を含む暗褐色粘質土である。この上面を１面とした。海抜は。区北側では4.9mで、Ⅱ区南側は5.0～5.1mで、全体的に北から南へ高くなるようである。

Ⅴ層は締まりが有り、直径２～３㎜の非常に細かい土丹粒を多量に含む暗褐色土である。Ⅱ区セクションをみると、南へ行くほど土丹粒の量が多い。また、Ⅰ区では炭化物粒子を含む。中世包含層。

Ⅵ層は締まりが有り、直径１cm以下の土丹粒を含む暗褐色粘質土である。粘性は他の土層に比べて強い。Ⅰ区では拳大の土丹粒少が量混入する。この上面を２面とする。海抜は4.7m前後。

Ⅶ層はやや締まりが有り、直径５㎜以下の細かい土丹粒を含む暗褐色土である。上面を３面とした。海抜は4,5m前後。中世地山に似る基本土層４層に相当する。

Ⅷ層は暗灰褐色粘質土である。締まりが非常にあり、直径５㎜以下の青土丹粒を含む。基本土層5層に相当する。海抜4.2～4.3m。

4　D地点

本地点では確認された堆積土層を10層に区分した。

Ⅰ層は造成土および現代の撹乱である。基本土層の１層。

Ⅱ層は近世耕作土（旧表土）である。基本土層の２層。

Ⅲ層は締まりが有り、直径２～３㎝の土丹粒を含む暗褐色粘質土である。細かい炭化物粒子が若干混入する。中世遺物包含層。

Ⅳ層は締まりが非常に有り、直径５㎜以下の土丹粒と炭化物粒子を含む暗褐色粘質土である。この上面を１面とする。海抜はⅠ区が5.1～5.2m、Ⅱ区が4.9～5.1mで、北から南にわずかに傾斜する。

Ⅴ層は締まりが有り、直径２～３㎝の土丹粒を含む暗褐色粘質土である。この上面を２面とする。海抜レベルは4.8～4.9mで。Ⅰ区部分的に薄い版築面を確認している。

Ⅵ層は土丹版築面である。Ⅰ区では直径３㎝以下の土丹粒を突き固めた版築層で、Ⅱ区では拳大～頭大の土丹塊や直径２㎝以下の細かい土丹粒を突き固めた版築層になる。細かく見ると幾つかの版築に分ける事も可能である。上面海抜レベル4,6m。

Ⅶ層は締まりがやや有り、直径２㎜以下の土丹粒を含む暗褐色粘質土である。中世地山に似ているが、異なる点が多い。海抜レベル4.5m。基本土層の４層に相当。

Ⅷ層は締まりが有り、粘土粒と直径２㎜以下の青土丹粒を微量に含む暗灰褐色粘質土である。上面を４面とした。海抜レベル4,4m。基本土層の５層に相当。

Ⅸ層は締まりが有り、直径２㎜以下の青土丹粒と砂を含む灰褐色砂質土である。この上面を５面としたが、明確な版築などはみられなかった。海抜レベルは4.1～4.2m。基本土層の６層に相当。

Ⅹ層は締まりが強く、直径２㎜以下の青色土丹粒がわずかに混入する黒灰褐色弱粘質土である。基本土層の７層に相当。

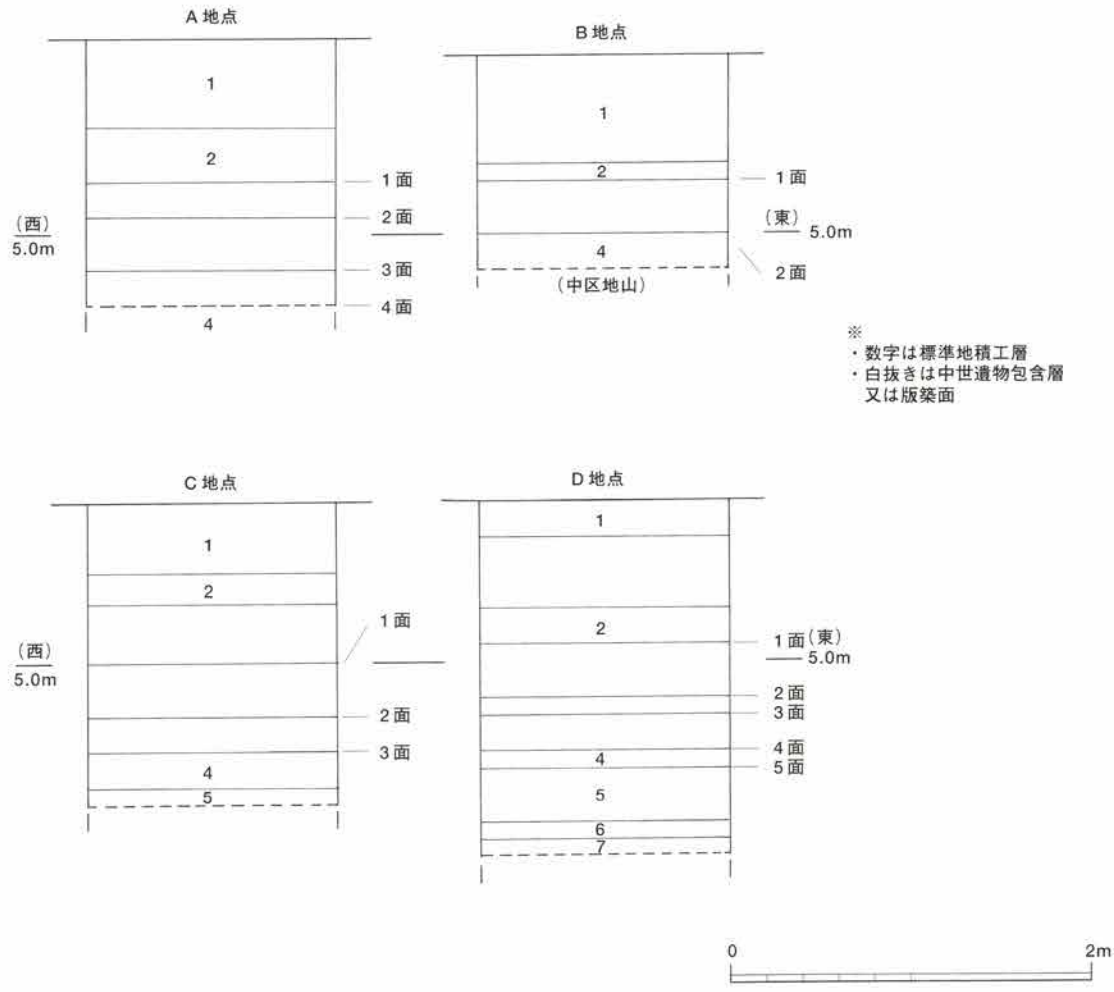


図３　堆積土層模式図

第３章　検出遺構と出土遺物

本章では各地点で検出された遺構と遺物について触れるが、検出された遺構の多くは柱穴であり図示できる出土遺物もほとんどない。従って以下の記述は図示可能な遺物を出土した遺構や柱穴以外の遺構を中心に行った。

第１節　Ａ地点の遺構と遺物

４面の生活面を確認したが、良好な版築面は確認できなかった。１面としたのは近世以降に削平を受けた面で、正確には遺構確認面であり、近世以降の遺構も確認されている。

１　１面の遺構と遺物

１面はⅠ区では近代井戸１基、撹乱２、近世柱穴２口、土坑１基、Ⅱ区では撹乱３、柱穴13口（近世柱穴９口を含む）と土丹２石を検出した。Ⅰ区は調査区中央に近代井戸、北側および東側に撹乱があり、遺構の大部分が失われているため、Ⅱ区との関連性が不明瞭である。近世柱穴は主にⅡ区の南側で検出されたが、規模や配列などに規則性は見出せない。

土坑

Ⅰ区の現代井戸に壊されて検出された。確認規模は東西60cm、南北76cm、深さ14cmで楕円形を呈していたと思われる。出土した遺物のうち小形かわらけを図5-1図示した。口径7,5cm、器高1,6cmを測る。

井戸１

井戸１は井戸枠をレンガ積みした近現の井戸である。規模は東西2.4m、南北2.0m。掘り方を深さ約1.4m（海抜4.06m）掘り込んだところで、底面付近の砂が崩れ始めたために掘るのを断念した。幅約50cm、奥行き約15cm、高さ約30cmのレンガを積み、６段まで確認できた。レンガの上面レベルは海抜5.5m前後を測る。現代井戸であり出土遺物は図示しなかった。

柱穴他

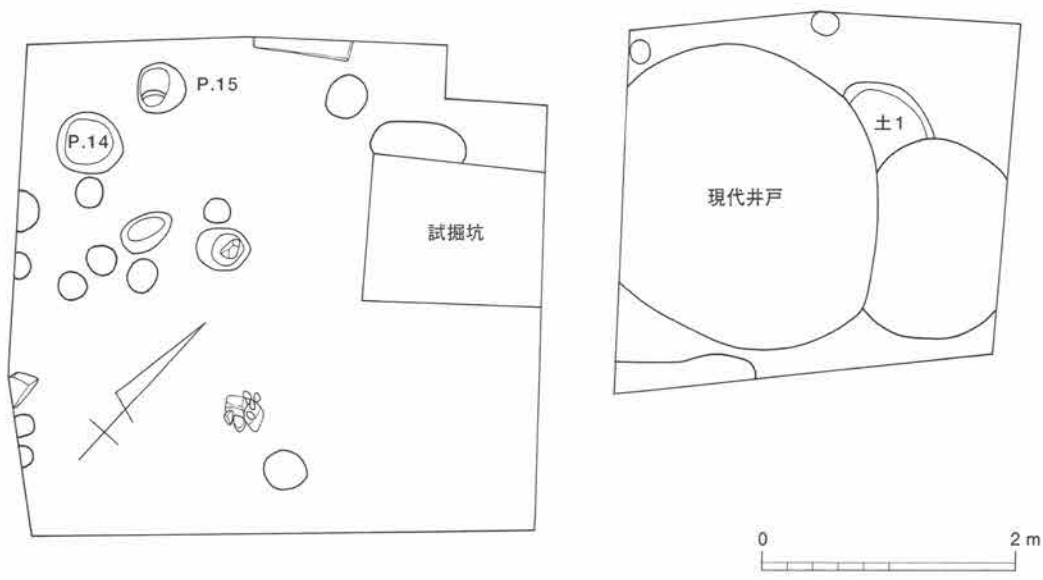


図４　Ａ地点１面検出遺構

Ⅱ区中央から南壁付近に近世柱穴９口が確認された。形状は略円形や楕円形で、規模は東西17～30cm、南北20～26cm、深さ10.5～34cmとまばらである。中世柱穴はピット12～15の４口。形状は略円形、規模は東西約30～50cm、南北40～50cm、深さ10～34cm。覆土は直径５cm以下の土丹粒を含む暗褐色粘質土である。ピット13では底面に礎石と思われる土丹塊が確認できた。４口のピットからの出土遺物は少なく、ピット14では図5-2のかわらけ、ピット15では図5-3の鉄釘が図示できた。

また、Ⅱ区西壁中央の土丹範囲（東西最大50cm、南北２m）上面に78×16cm大の鎌倉石が置かれていた。上面レベルは海抜5.6m。また、Ⅱ区の東側でやや平らな土丹塊が120cm間隔で２石検出されている。ともに上面レベルは約5.6mであるが、2ケ所以外に見当たらない。いずれも建物礎石と思われるが建物を復元するには至らなかった。

１面調査中の出土遺物は図5-4～８に図示した。小片が多いため４点の図示にとどまった。４は瀬戸灰釉碗の底部片、５は瀬戸天目碗、６は常滑甕の口縁折り返し部、７と８は瓦質手焙り片で7は底部近くに沈線で区画された文様帯が巡り菊花スタンプが捺され、８は口縁直下に沈線で区画された文様帯が巡り不明花文スタンプが捺されている。

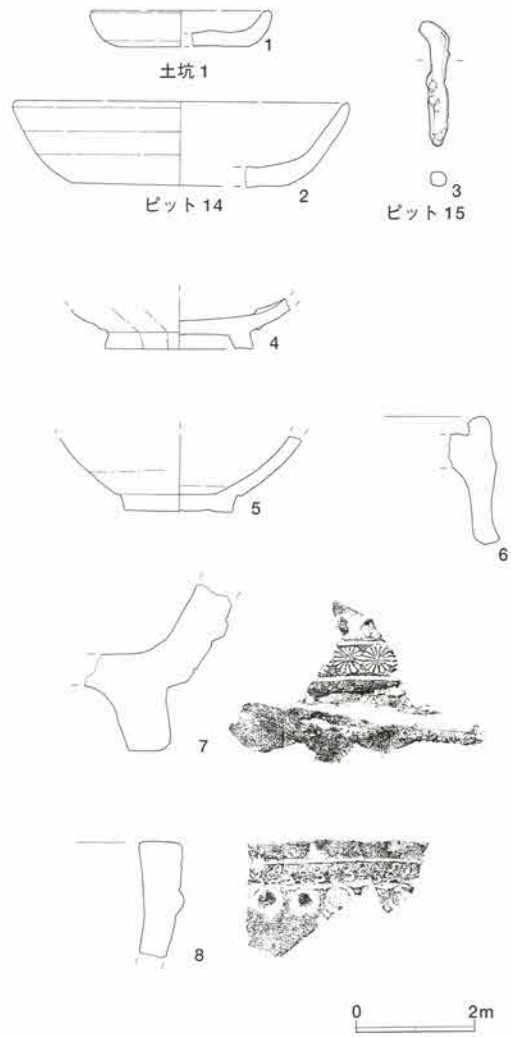


図５　A地点１面出土遺物

２　2面の遺構と遺物

２面はＩ区では土坑３基、柱穴１口、Ⅱ区では土坑４基、柱穴４口検出した。Ｉ区は北東コーナー付近、Ⅱ区は中央から南壁付近に遺構の集中が認められるが、１面同様建物は復元できなかった。また、土坑などは確認できなかったがＩ区の西壁近くと西壁の壁面で数個体のかわらけがまとまって出土している。

かわらけ集中

かわらけが数個体まとまって出土したものを「かわらけ集中」とした。Ｉ区の西壁近くから調査区外に延びている廃棄遺構と思われるが、便宜上調査区内のものを集中１、壁面に延びるものを集中２とした。集中１では小形皿３枚と大形皿２枚が図12～16に、集中２では小形皿９枚、中型皿２枚、大形皿６枚が図7-17～31に図示できた。両者に大きな器形変化は認められず、薄手作りのものが多く含まれている。

土坑

土坑４は東壁北側際で検出され調査区外に延びる。確認規模は東西34cm、南北58cm、深さ11cmで覆土は締まりが有り、直径２～３㎜の土丹粒を含む暗褐色粘質土。ここから、かわらけが３枚重なって出土した。いずれも大皿で図7-9～11に図示した。いずれも側壁が直線的に外反する器形で比較的器肉が薄く

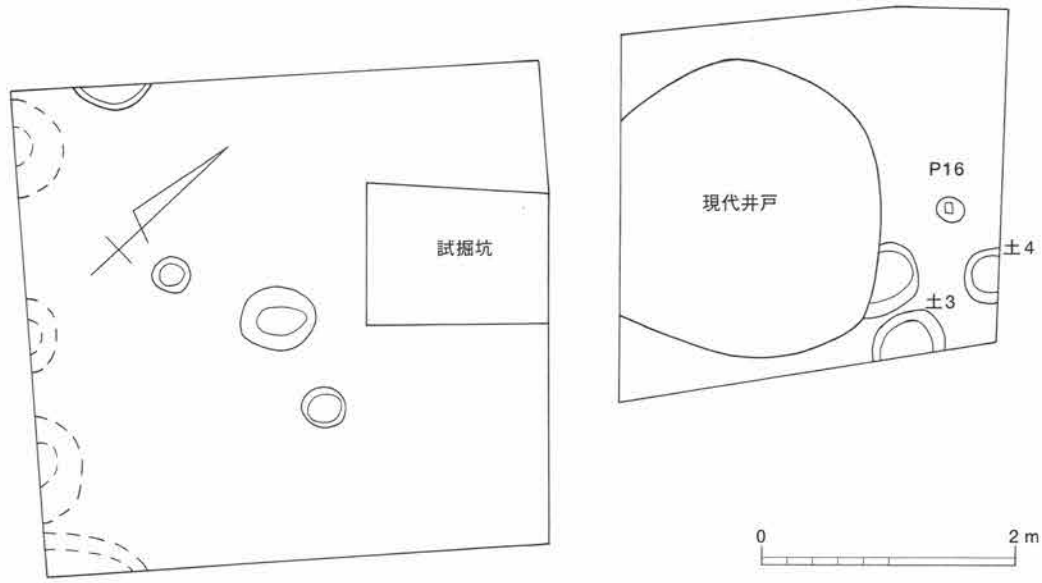


図6　A地点2面検出遺構

造られている。なお、Ⅱ区で確認された土坑4基は平面では確認できず、壁面で確認した為に平面図の想定線を破線で表している。

柱穴

柱穴は確認数が僅かで建物を復元できなかった。ピット16は、径22cm、深さ約23cmで円形を呈する。底面には礎板痕と思われる縦10cm、横6cm、厚さ2cmの長方形の窪みを確認した。

2面調査中に出土した遺物は図7-32～58に図示した。32は亀山窯甕の破片、33は瓦質手焙り、34は常滑甕の口縁部。35～56はかわらけで49までの15点が小形皿、52までの3点が中型皿、56までの4点が大形皿。複数の器形が混在する様相を呈している。35と50は14世紀後半から15世紀前半に比定できる為すでに失われている生活面の遺物と考えられる。中型皿と大形皿を中心に薄手作りのものが多くみられる事から、この年代が本層の年代を示していると考えられる。57は鉄製品で断面が丸く折れている落とし鍵の一部と思われる。58は骨製品で刀装品の笄。

3　3面の遺構と遺物

3面はⅠ区では井戸1基、柱穴1口、Ⅱ区では溝状土坑1条、土坑2基、柱穴2口、土丹範囲1ヵ所が確認できた。Ⅱ区で確認された北東コーナーの落ち込みはⅠ区ではみられなかった。

土丹範囲

西壁中央付近から土坑9の西にかけて頭大から拳大の土丹の突き固めた範囲が確認された長さ140cm、幅40～60cm、高さは6cmほどである。上面は凸凹があり、敷き並べた感じは全く無い。版築面なのか、道路状遺構の残存であるか、その性格は明確ではない。ここから図10-59に示した山茶碗窯系捏ね鉢の口縁～胴部破片が出土している。上面レベルは西壁近くが4,76m、東端で4,56mを測りやや東が低くなっている。

溝状土坑

溝状遺構はⅡ区の試掘坑東側で検出された。確認規模は幅80cm、長さ180cm、深さ19cm弱で東側調査区外に延びる。試掘坑の西側では確認できず、他の調査地点で同様の溝は見付かっていないので、途中で切れてしまう可能性が高い。従って溝状土坑とした。遺物は図10-60～62の3点が図示できた。60は常滑

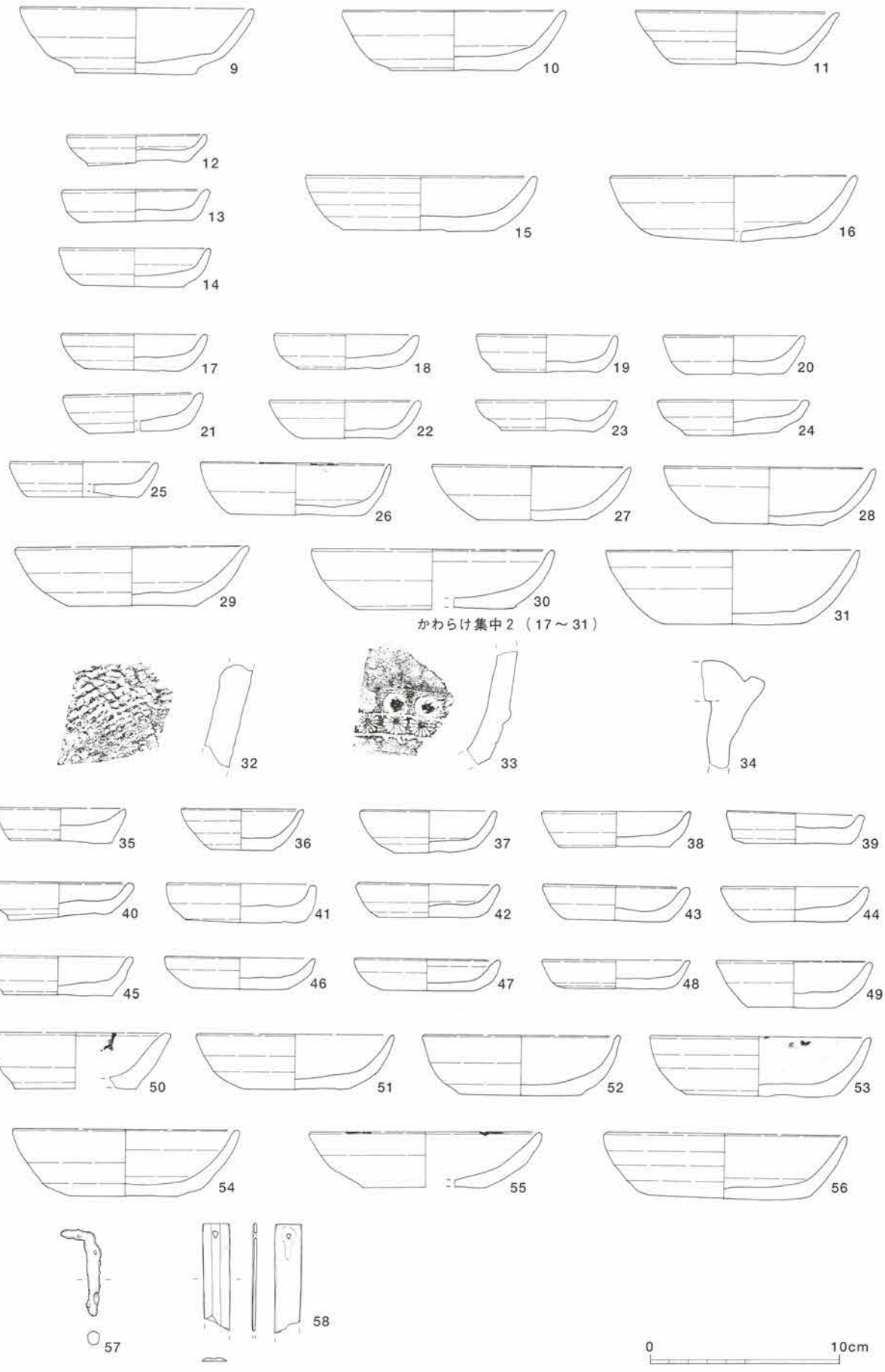


図７　A地点２面出土遺物

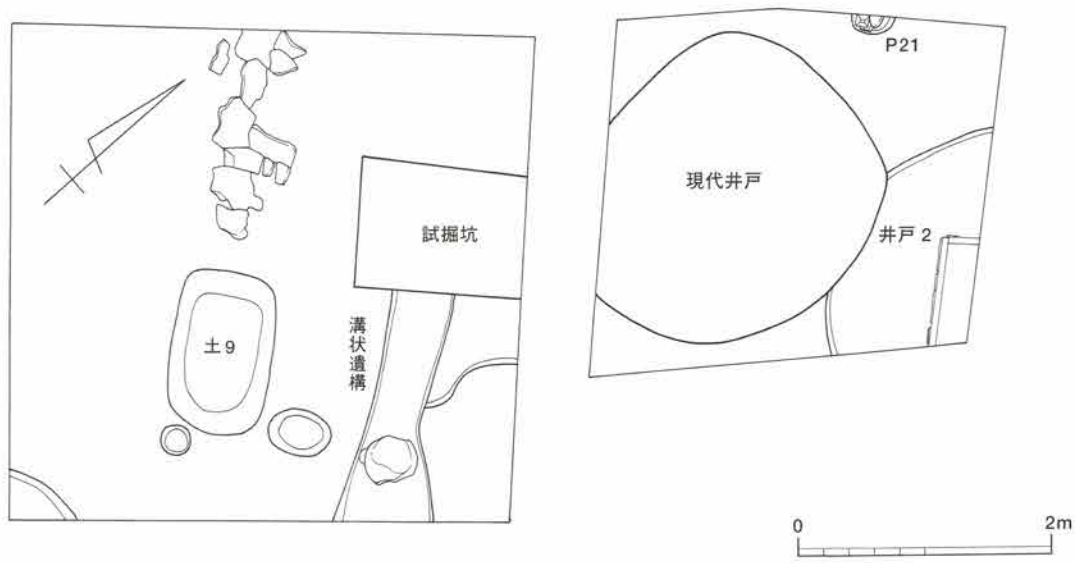


図8　A地点3面検出遺構

甕の口縁部、61は亀山窯甕の胴部片、62はかわらけで東壁近くの安山岩礎石下で伏せた状態で出土している。礎石は本址より新しいのでかわらけも新しくなる可能性がある。

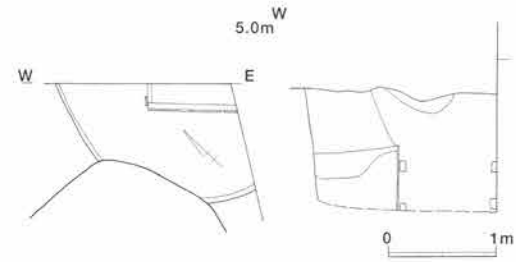


図9　A地点3面井戸

井戸2

井戸2は、Ⅰ区北東コーナーに位置する。近世井戸に南西コーナーを少し壊される。掘り方は1/4弱、井戸枠は全体の1/3程度が調査区内で検出された。掘り方の平面形は円形に近いと思われる。井戸は海抜約3.6m（検出面から110cm）付近まで下げたところ、湧き水がひどく調査区の北壁が崩れ始めた為、掘り下げを断念した。

井戸枠は方形横桟支柱型で、確認できた南辺から一辺90cm前後と考えられる。縦板は南辺で4枚・西辺で1枚が確認できた。南辺は幅10.5～29cm、厚さ1.5～2.0cmの縦板を4枚並べ、さらに外側に幅9～12cm、厚み0.3～0.5cmの薄い板で隙間を埋めている。支柱は南西コーナーに1本（南北8cm、東西7cm、長さ35cm）のみ確認した。横桟は35cm間隔で2段検出され、縦10cm、横5.5cm、長さ(87)cmと縦9cm、横7cm、長さ(87)cmの長方形角材を使用する。1段目は東西方向の桟木の中央に貫通する枘穴（縦5cm、横5.5cm、奥行き4cm）をあけ、南北方向の桟木端部を凸型に切って差し込んでいる。これに対し、2段目は東西方向の桟木に貫通しない枘穴をあけて組んでいた。東西軸はN-41°-Wを示す。出土遺物は小片のかわらけが多く図示できるものはなかった。

土坑他

土坑や柱穴をまとめた。数が少なく建物としては把握できなかった。建物関係としては溝状土坑より新しい安山岩礎石とⅠ区西壁際で検出されたピット21しかない。ピット21は一辺11cm、残存高約18cmの角柱を伴う。角柱の下に長さ16cm、幅13.5cm、厚さ3.5cmの礎板が1枚確認できた。礎板上面のレベルは3,53mをはかる。

土坑9は長軸129cm、短軸82cm、深さ17cmを測り、形状はやや角張った楕円形を呈する。覆土は締まりがあまりなく、直径2～3cmの土丹粒と炭化物粒子を含む暗灰褐色粘質土である。底面全体には炭化物

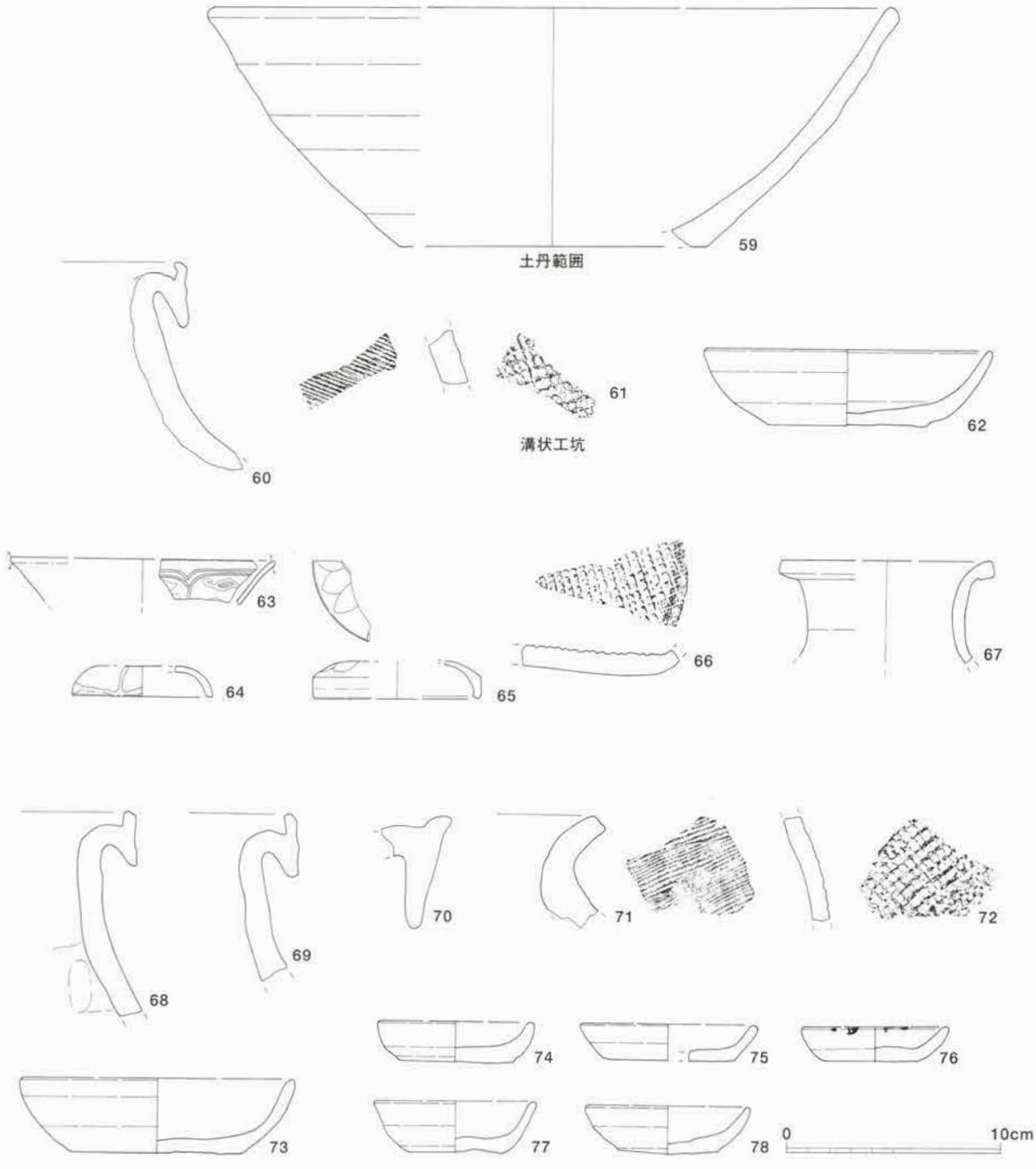


図10　A地点3面出土遺物

薄く広がっていた。図示できる遺物はない。

3面調査中に出土した遺物で図示できるものは図10-63～78に示した。63は白磁印花文碗、64は青白磁合子の蓋、65は白磁合子の蓋、66は瀬戸灰釉卸皿、67は瀬戸灰釉壺の口縁部、68～70は常滑甕の口縁部、71と72は亀山窯甕の口縁部と胴部片。73～78はかわらけで73の大形皿を除きすべて小形皿。2面出土のものに比べるとあたらしい要素を持つ群はみられず、薄く器高の高い群とやや厚く器高の低い群とが混在している。

4　4面の遺構と遺物

Ⅰ区では柱穴1口、Ⅱ区では土坑2基、柱穴1口が検出された。中世地山上であるが他の面に比べて

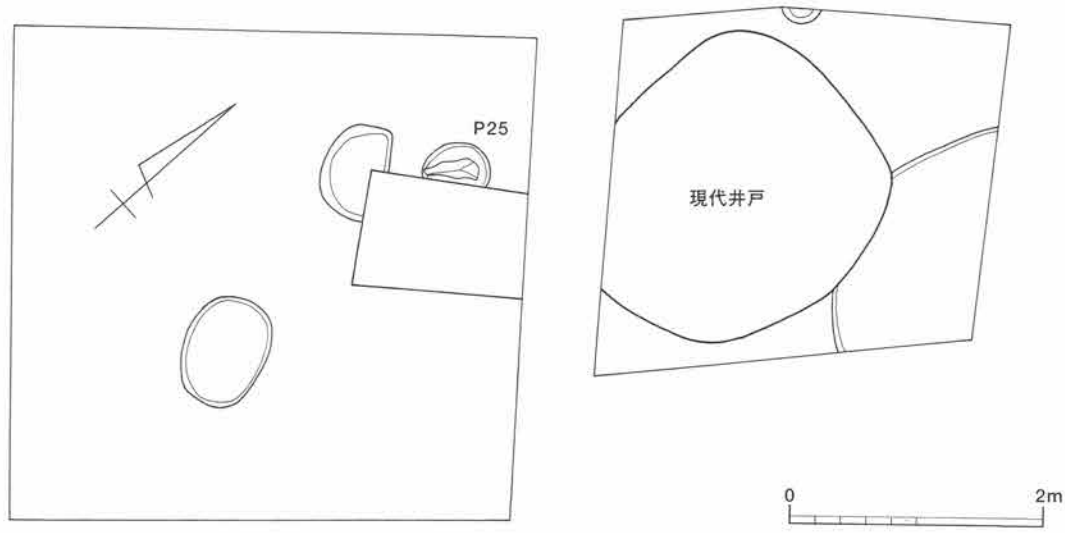


図11　A地点4面検出遺構

遺構が少ない。Ⅱ区のピット25の底面に礎石とも考えられる土丹塊が見付かったが、平坦ではなくこれに連続する柱穴は検出できなかった。

出土した遺物は3点が図12-79～81に図示できた。79と80はかわらけ小形皿でいずれも器高は低いが器肉は薄くつくれている。81は亀山窯甕の口縁部。

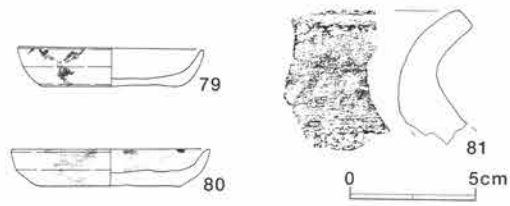


図12　A地点4面出土遺物

5　若干のまとめ

本地点の調査では、1から4面の生活面あるいは遺構確認面を検出した。標準2層で削平されている。レベルは5,30mで、生活面と認定できるのは正確には2面であり、1面は確認面に過ぎない。2面の遺物には14世紀後半から15前半かわらけが少量混じっているので、本来1面の上に該当期の遺構面が在ったのが耕作土堆積以前に削平されたものと考えたい。本地点北西にやや離れた地点では該当期の生活面が海抜　mで確認されている。

4面は中世地山上の生活面として捉えたが、やや土質が異なり疑問が残る。遺物は手捏ねかわらけの細片が僅かに含まれるものの、中心をなすのは薄手のかわらけ群である。常滑甕等の遺物も13世紀前半まで遡るものはほとんど無い。本地点の開発は13世紀後半と考えた方が妥当であろう。

遺構からみた性格は、断定的に言えないが安山岩礎石はあるが礎石の大きさは小形であり、御家人階級が居住していた可能性は低い。また、寺院等と結び付けられるような遺物は、ごく少量の瓦片を除きみられない。しいて遺物の特徴を探せば、亀山窯の甕片と瓦質手焙り片が比較的多いことであろうがこれと生活様相や地点の性格までは言及できない。

鎌倉に運び込まれ、運び出される商品の運搬や流通に関わる町屋的な空間が広がっていたのだろう。

第２節　Ｂ地点

確認できた生活面は２面であるが、２面下には北から南に向かって下がる斜面を確認した。中世地山の斜面上に堆積した土層と思われるが調査区内での確認が僅かであった為に明確にできなかった。以下各面で検出された遺構・遺物について説明を加えるが１面は遺構確認面であり、すでに削平されてしまった面の遺構も混在している。

１　１面の遺構と遺物

１面は井戸１基、土坑５基、撹乱１、柱穴８口、安山岩の礎石１石が確認できた。調査区の南東隅付近で長さ40cm×幅20cm×厚さ10～20cmの鎌倉石（被熱痕を持つもの有り）がいくつか検出され、炭化物が東壁の中央付近まで炭化物が広がっていた。広がりから井戸覆土に関わるものと考えられる。南東隅では、常滑甕の胴下半～底部の一部が出土した土坑１を確認した。土坑１は井戸１の一部を壊している。井戸１から２m北東には馬の頭蓋骨が置かれた土坑２がある。また、中央付近に略円形の柱穴などがみられた。ピット３では礎板痕が検出されたが、他のピットには見当たらなかった。確認できたピットの規模は東西23～43cm、南北20～40cm、深さ20～45cmである。また、南壁付近に割れて中央が窪んだ礎石状の安山岩が１石みつかっているが、調査区内にこれに並ぶ石はない。井戸１の掘り方の上に位置するので、井戸１より新しいと思われる。石の上面レベルは海抜約5.1m。

井戸１

井戸１は１面の南東コーナーで検出された。４地点で検出できた中世井戸の中で一番新しい遺構と思われる。掘り方は三分の二以上検出され、直径３m程の円形、もしくは略円形を呈する。覆土は１層が締まのある直径５㎜前後の土丹粒を含む暗褐色粘質土、２層が締まりのある直径１cm以下の土丹粒多量に、少量の炭化物粒子を含む暗褐色粘質土、３層は締まりのある拳大の土丹粒を多量に含む暗褐色粘質土、４層が直径１cm以下の土丹粒と炭化物粒子を少量含む黒褐色粘質土、５層が直径１cm以下の青土丹粒を多量に含む青灰色砂質土である。６層は掘り方覆土で、締まりが有り、直径１～３cmの土丹粒を多く含む暗褐色粘質土である。また、壁面や底面をボーリング棒で探査したところ、井戸枠の東辺が調査区壁から東へ約20cmに、底面が掘削部分からさらに20cm下に存在することが確認できた。この井戸は湧

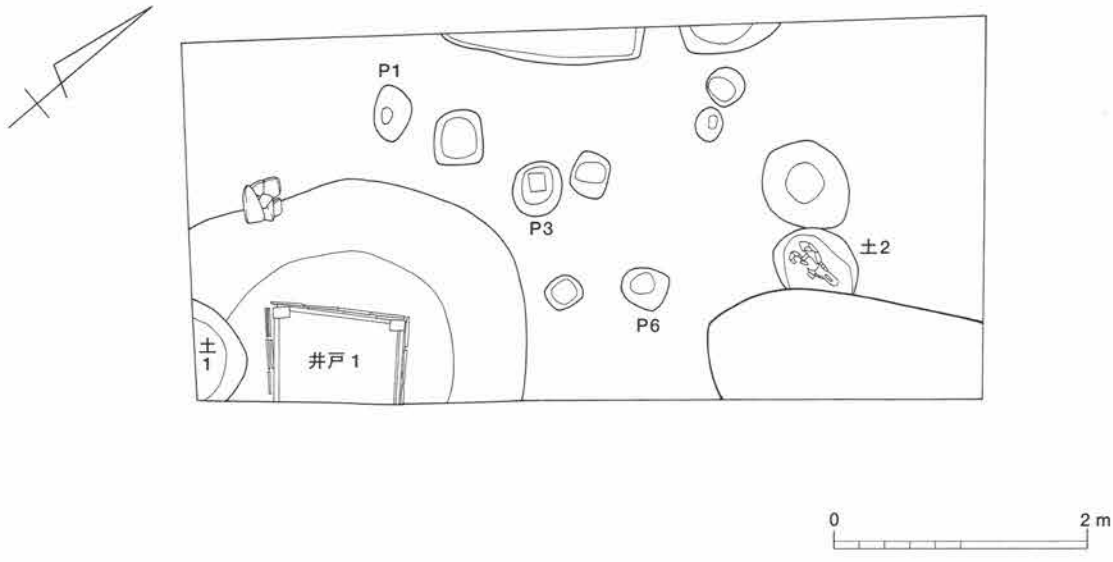


図13　Ｂ地点１面検出遺構

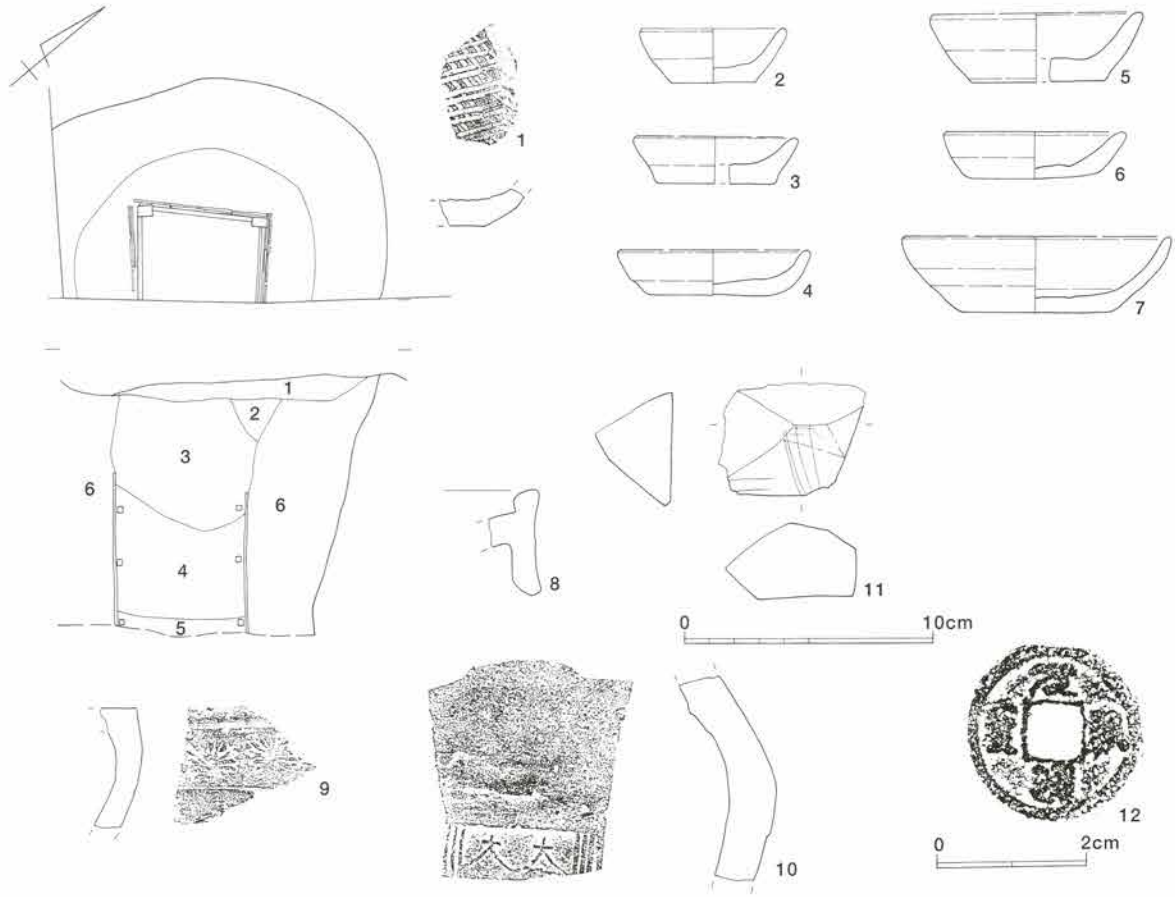


図14　B地点1面井戸1

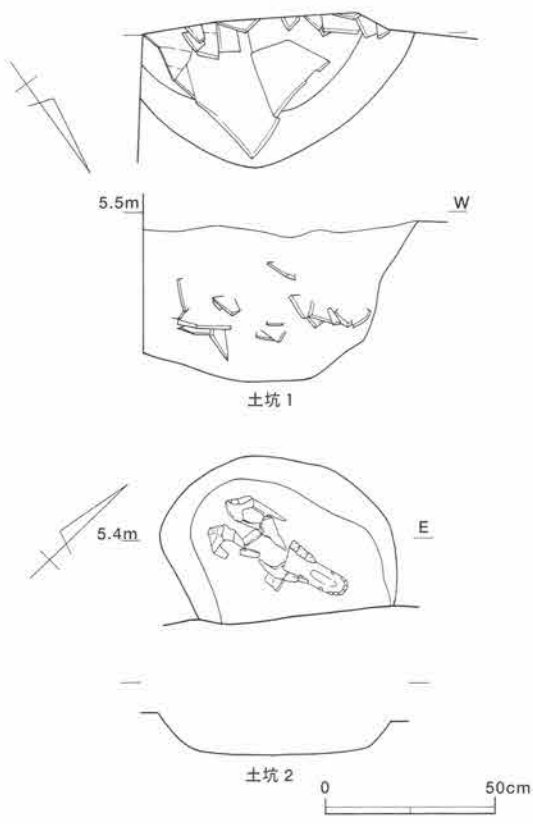


図15　B地点1面土坑

き水がひどく、調査中に東壁が崩落し始めたので、海抜3.1m付近で掘り下げを中断した。井戸底面レベルは海抜約2.9m前後と思われる。

井戸枠は、四隅に1本柱を立てて横桟で支える方形隅柱横桟型で、一辺は110cm前後を測る。縦板は各辺4枚ずつ遺存し、幅18～31cm、厚さ0.9～1.7cmの縦板を並べ、その外側に幅・厚みが同程度の板をややずらして重ねている。表面は丁斧で整えられていたが漆喰は認められない。縦板には下方中央付近を釘で一箇所打ち付けてあるものもあった。隅柱は南北10cm、東西7.5cm、確認長130～140cmの角材を使用する。横桟は4段確認でき、1、2段間が22cm、以下の段が42cmの間隔をもち、隅柱には2段目以下の枘穴が確認できた。桟木は一辺4cm、長さ80cmの角材で、隅柱にあけられた枘穴（縦4cm、横2.5cm、奥行き4cm）に差し込まれる。ただし、3段目だけは縦6cm、横4.5cmの角材を使って、端部が凸型に切り込んだ東西方向の桟木が隅柱を突き抜けている。井戸内には30×40cm程の大型土丹が上層からいくつ

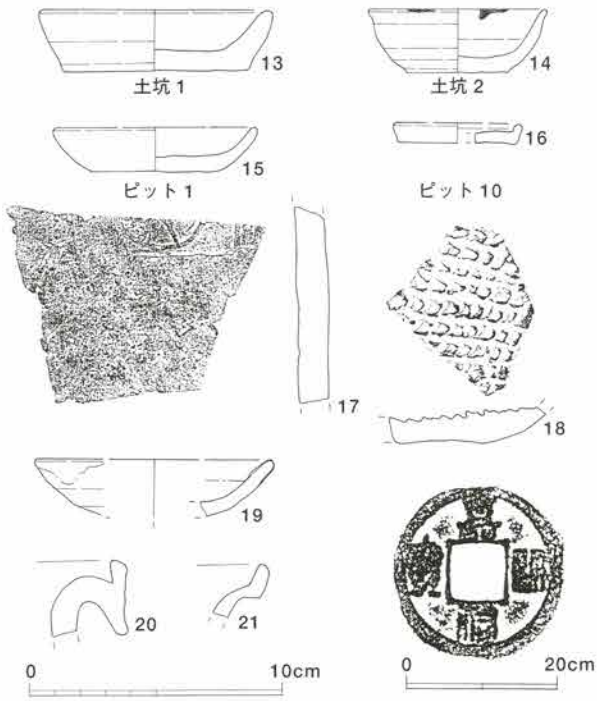


図16　B地点1面出土遺物

も投げ込まれ、底面近くは粗い砂層がみられた。東西軸方向はN-48°-Wを示す。

遺物は図14-1～12の12点が図示できた。図14-1は瀬戸灰釉卸皿、2～7はかわらけで3と4は明らかに14世紀後葉から15世紀中頃の特徴を持っている。8は常滑甕口縁部、11は砥石であるが不整形を呈している。9は瓦質手焙りで口縁直下に沈線で区画された文様帯が巡り不明花文スタンプが捺されている。10は常滑甕胴部片で叩き文様に「大」の文字がある。12は銅銭で元祐通寶。

土坑1

土坑1は調査区南東コーナーで全体の約1/3が検出された。南壁セクションをみると、井戸1よりも新しい。確認規模は東西160cm、南北88cm、深さ92cm。覆土は、締まりが有り、直径3cm以下の土丹粒と炭化物粒子を含む暗褐色粘質土である。底面には、割れているが常滑甕の底部が据えられていた。その上に胴下半部の破片が散らばっていた。遺物は常滑甕片が接合できなかったためかわらけ1点を図16-13に図示した。このかわらけは戦国時代から近世初頭頃の特徴を持っている。

土坑2

土坑2は撹乱に東側の一部を壊されている。形状は楕円形で、確認規模は東西140cm、南北100cm、深さは28cm。覆土は締まりが有り、直径5cm以下の土丹粒を多く含む暗褐色粘質土である。ほぼ東西方向（N-78°-E）に、馬の頭蓋骨が逆位に置かれていた。これを退けると、底面中心には径10cm程、厚さ約1cmの炭化物が確認された。ちょうど頭蓋骨は東を向いており、意図的に据えられた可能性が高い。地鎮などの目的で埋められたのかもしれない。図16-14に示した薄手で器高の高いかわらけが1点出土している。

柱穴1

柱穴1は円形を呈し、東西42cm、南北40cm、深さ22.5cmを測る。覆土は土坑2と同じ暗褐色粘質土である。底面に礎板痕と思われる、11.5×12×2cmのほぼ正方形の窪みがあった。底面の海抜レベルは4.7m。図16-15のかわらけ小形皿が出土している。

1面調査中に出土した遺物は図16-16～22に図示した。16は外底面に糸切り痕を残すコースター皿、17は常滑甕胴部片、18は瀬戸灰釉卸皿、19は瀬戸灰釉縁釉皿、20は常滑甕の口縁部、21は瀬戸柄付片口鉢口縁部、22は銅銭で嘉祐通寶。

2　2面の遺構と遺物

2面では土坑4基、柱穴4口が確認できた。全体的に土坑や柱穴などが調査区内北東寄りの地域に集まって検出されている。

土坑

土坑6は南壁の西側に位置し、確認規模は東西96cm、南北18cm、深さ26cmを測る。覆土は締まりが有り、多量の炭化物粒子や炭化材、焼土、少量の直径5mm以下の土丹粒を含む暗褐色粘質土。南壁のセク

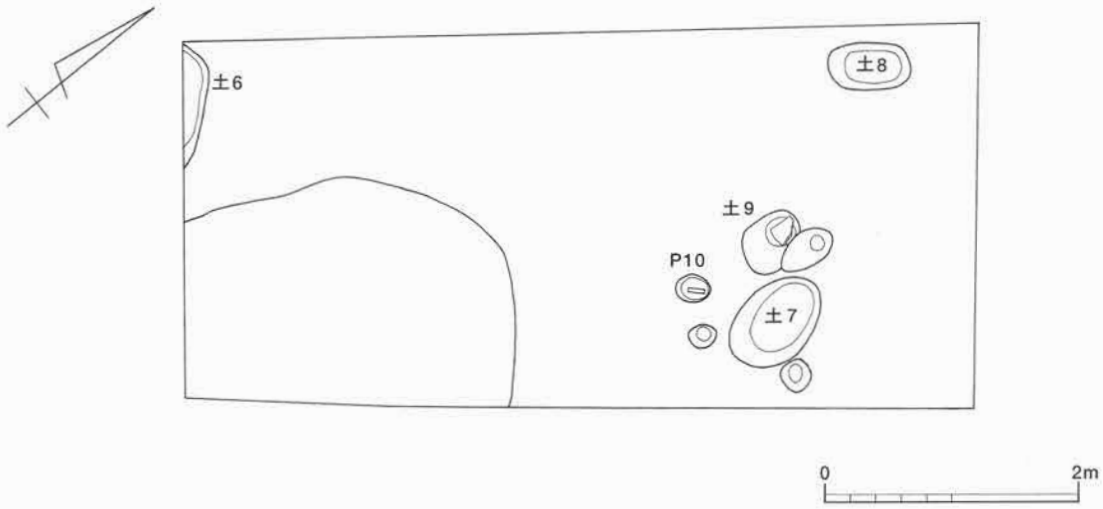


図17　B地点2面検出遺構

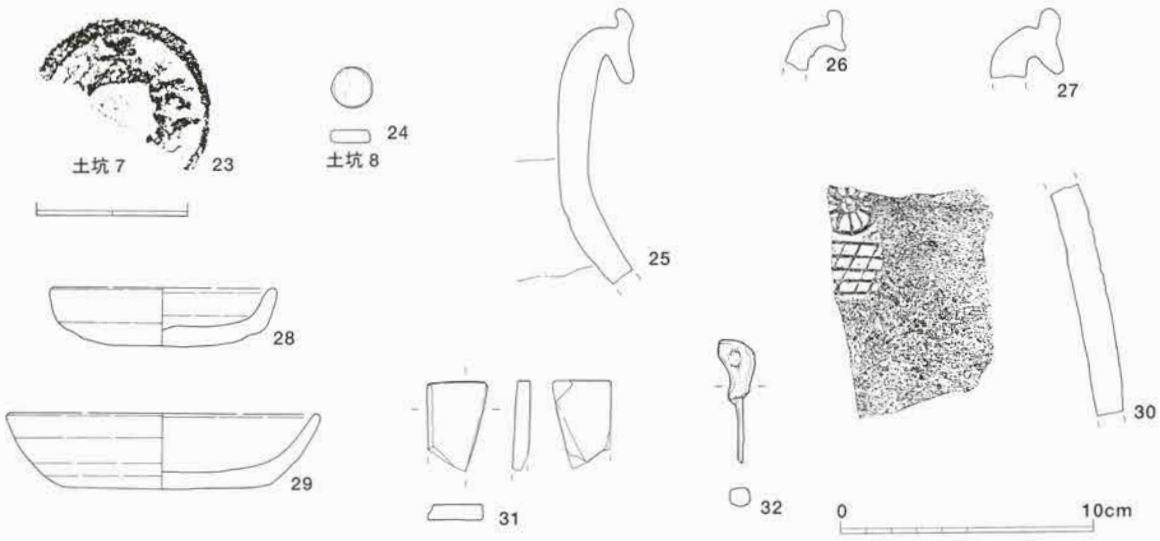


図18　B地点2面出土遺物

ション図をみると、炭化材は崩れてしまっていたが、一辺8㎝の角材が15㎝間隔で2箇所確認できた。焼土は遺構の西側に幅10㎝、厚さ5㎝で検出している。図示できる遺物はない。

土坑7は土坑9の東側で検出された。確認規模東西84㎝、南北58㎝、深さ19㎝弱で覆土から図18-23に示した銅銭の破片が出土した。判読不能。

土坑8は調査区北西近くで確認された。確認規模は東西36㎝、南北63㎝、深さ16㎝で図18-24に図示した骨製双六の駒が出土している。

土坑9は形状が楕円形で、規模は東西42㎝、南北50㎝、深さ約30㎝を測る。覆土は締まりがあり、直径1㎝以下の土丹粒を多く含む暗灰褐色粘質土。底面には常滑胴部の破片が、2㎝程南側が高いくらいでほぼ水平に据えられていた。切り合い関係をみると、土坑3、ピット10よりも本土坑が古い。

柱穴10は形状が楕円形、東西22cm、南北28cm、深さ18cmを測る。底面に長さ16cm、幅７cm、厚み５cmの礎板が縦方向に置かれる。礎板の上面レベルは海抜4.6m。

２面調査中の遺物は図18-25～32に図示した。25～27は常滑甕口縁部、28と29はかわらけ、30は常滑甕胴部片、31は短冊形の砥石、32は鉄釘。

3　若干のまとめ

本地点では中世地山の暗褐色粘質土が高いレベルで検出された為に生活面は１面（調査１面は遺構確認面で本来は包含層中）しか確認できなかった。これは東側にある山裾が本地点近くまで延びていた事に影響を受けているようだ。

井戸は隅柱横桟型で他地点ではみられない構造である。鎌倉市内の調査でもこの構造を持つ井戸は鎌倉時代後半以降に出現している。出土したかわらけも14世紀後半から15世紀前半の特徴を持っており、該当期に所属すると思われる。しかし、残念ながらその生活面は既に失われている。鎌倉幕府滅亡後も周辺で生活が営まれたのだろう。耕作土の下が海抜5,3m前後であるからそれ以上の高さに生活面が在ったと推定できる。

中世地山の海抜レベルは4,8mから5,1mで調査区では北東側に高くなっている。地山上で検出された遺物には13世紀前半に遡るものはごく少量しか含まれていない。本地点も開発は13世紀中頃以降と思われる。また、井戸よりあたらしい土坑１からは室町時代後半頃に比定できるかわらけが出土しているので、この頃まで生活が営まれたと言える。

狭い面積の調査であり、本地点の性格は言及できないが、礎石（建物）や井戸の存在から比較的裕福な町屋あるいはそれほど裕福でない武士階級等が想定できる。おそらくＡ地点と同じ様相で出あったのだろう。

第３節　Ｃ地点

確認した生活面は３面であるが、いずれも明確な版築は確認できなかった。Ⅰ区東壁の中央付近において、１面の上層に長さ約120cm、高さ20～30cm範囲で頭大の土丹を突き固めた層が検出された。Ａ地点の調査結果に基づいて重機で表土を掘削中に部分的に掘り下げてしまったために、その範囲は不明であるが、土丹を用いた石垣あるいは土留めなどの遺構が有った可能性がある。また、Ａ地点では近世以降の覆土を持つピットが検出されたが、本地点では同じ覆土のピットは確認できなかった。

１　１面の遺構と遺物

１面ではⅠ区で土坑４基、柱穴５口、礎板痕と思われる長方形の窪みが２箇所、北東コーナー付近で拳大～頭大の土丹が突き固められた範囲（東西140cm、南北130cm）、南東コーナーで厚さが２～３cmほどの炭化物の広がり（50×50cm）が確認されている。Ⅱ区では撹乱１、土坑３基、柱穴12口、土丹の礎石４石、安山岩の礎石１石を確認した。Ⅰ区が土坑など比較的大きな遺構がみられるのに対し、Ⅱ区では主に直径が18～24cm、深さ15～20cmの円形を呈する柱穴が多く検出されている。Ⅱ区にⅠ区の柱穴と連続するようなものは見当たらない。

礎板

礎板痕と思われる長方形の窪みが2箇所、礎板を持つ柱穴（ピット５）が検出された。規模は西側の礎板が長さ22cm、幅11cm、厚み３cm、東側の礎板が長さ22cm、幅11cm、厚み4.5cm。埋土は直径２～３㎜の土丹粒と炭化物粒子を含む黒褐色土である。底面の海抜レベルはそれぞれ4.95m、4.94mとほぼ同じ値を示す。芯芯距離は160cmを測る。配置や底面レベルなどから、同じ建物の礎板であったと考えられる。これに対し、礎板を持つピット５は配置などが若干ずれるので、別遺構の可能性がある。

礎石

土丹の礎石がⅡ区の東、北中央、南中央、西に４石、調査区中央付近に安山岩の礎石が１石検出された。土丹の礎石の確認できた大きさは長さ・幅ともに30～40cmである。その配置をみると、東と北中央間が150cm、北中央と南中央間が140cmでほぼ等間隔に直角に並ぶ。この３石は上面レベルも海抜約5.3mと同レベルを示すので、同建物の礎石と考えられる。西の礎石はこの配置からはずれ、上面レベルは5.1

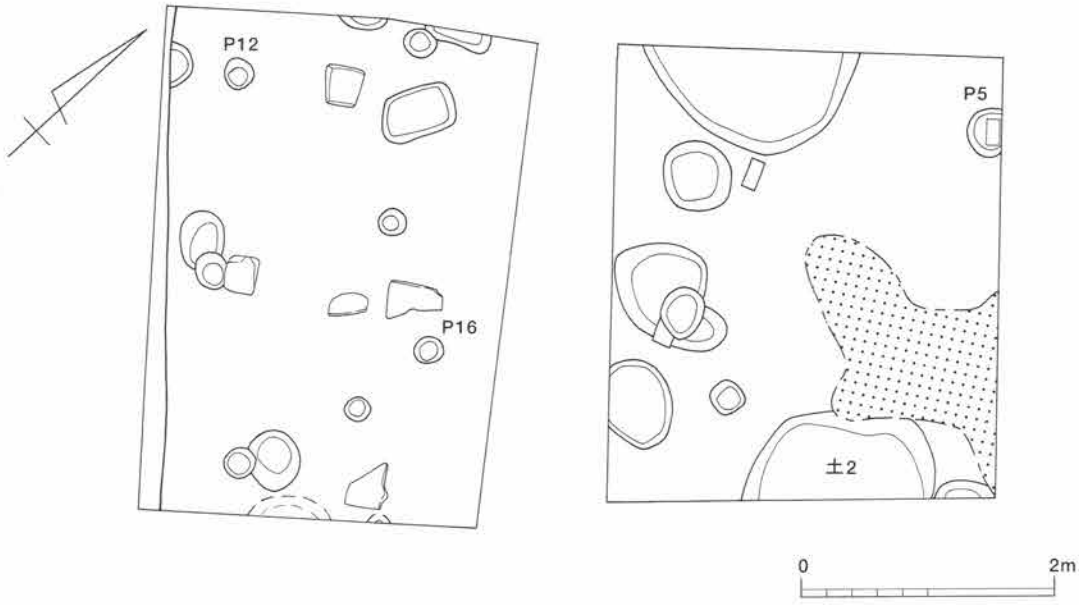


図19　Ｃ地点１面検出遺構

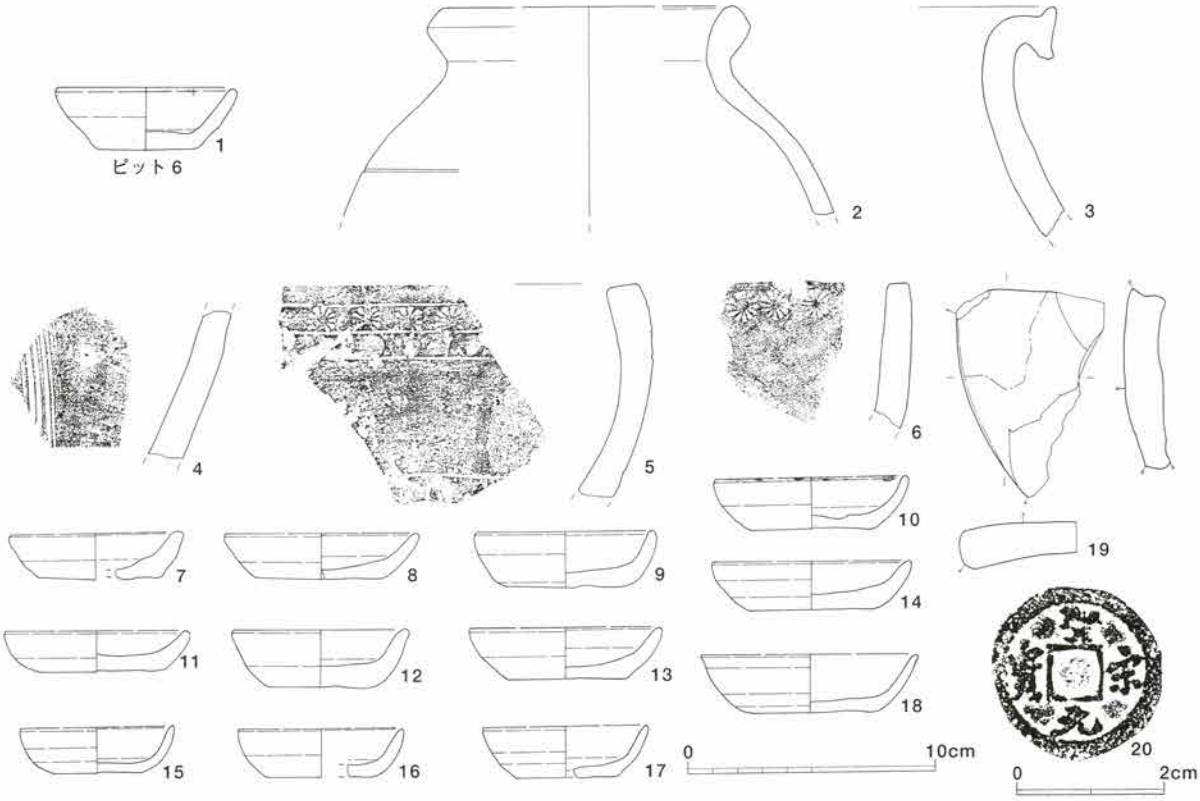


図20　C地点1面出土遺物

mとやや低い。安山岩礎石は大きさが30×(18)cmで上面レベルは海抜5.3mを測る。これに対応する礎石は見当たらなかった。

土坑2

土坑2はⅠ区東壁付近で検出された、東側調査区外に延びる。確認できた規模は東西70cm、南北150cm、深さ18cmである。覆土の上層は直径1cm以下の細かい土丹粒を多く含む暗褐色粘質土、下層は締まりが非常に有り、上層同様に細かい土丹粒をかなり多く含む暗褐色粘質土である。また、下層には炭化物粒子が少量みられた。この土坑のすぐ南側では40×20cmの大きな土丹塊が東西60cm、南北100cmの範囲で散らばっていた。図示できる出土遺物はない。

柱穴

Ⅰ・Ⅱ区合わせて17口の柱穴が確認されたが建物としては把握できなかった。ピット16はⅡ区の土丹礎石の近くに位置する。東西cm、南北cm、深さcmを測る。底面のレベルは海抜5,15mである。図20-1に図示した灯明皿に使用したかわらけが出土している。

1面確認中に出土した遺物は小片が多いが、その内19点を図20-2～20に示した。2は中国製褐釉の壺口縁部、3は常滑甕の口縁部、4は備前窯擂り鉢、5と6は瓦質の手焙りで6には沈線で区画された文様帯が無い。7から18は小形かわらけ。口径は6,5cmから9cmで、2cmから2,5cm前後の法量を持ち、比較的薄い器肉で口径と底径の差がおおきい形が多く含まれている。10は灯明皿である。19は常滑甕片の外周を磨ったいわゆる磨り常滑。20は銅銭で聖宋元寶。

2　2面の遺構と遺物

2面ではⅠ区で井戸1基、土坑1基、柱穴5口、Ⅱ区で井戸1基、土坑4基、柱穴4口が確認された。Ⅰ・Ⅱ区で井戸を1基ずつ確認している。この生活面は海抜レベルがA地点の3面に相当しており、井戸1はA地点の井戸2と同じ横桟支柱型である。対して、井戸2は素掘りの井戸である。ピットは礎板

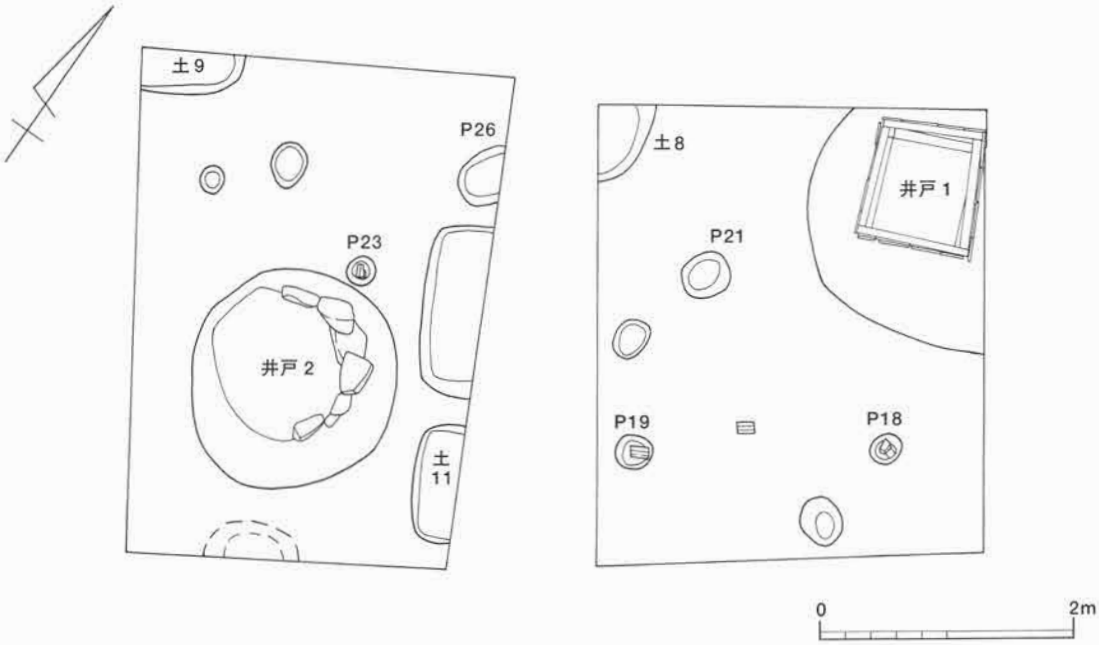


図21　C地点2面検出遺構

の上面レベルがほぼ同じ値を示すものもあるが、全体的に建物を構築できるような配置は不明である。また、南西隅から2m近く20～30cm大の土丹塊が帯状に散らばっていたが、これらに規則性などは見られなかった。上面レベルは東が4.7m、西が4.6mで若干西に下がる。

井戸1

井戸1は北調査区の北東隅に位置する。掘り方は全体の約1/3強確認され、その形状は円形に近いと思われるが、全体が確認された井戸枠の位置をみると、やや南寄りに偏った印象を受けた。井戸枠は一辺が約1.0mの方形横桟支柱型で、確認面からの深さは約1.4m、底面海抜は2.68mを測る。縦板は幅17～34cm、厚さ0.8～1.8cmのそれぞれ規格が異なる板を、南・北・西辺4枚、東辺5枚並べている。ただし、北辺の縦板だけは他辺が不揃いな幅であるのに対して30cm前後と揃っていた。さらにその外側を内側の縦板より薄い板で隙間を埋めている。支柱は1、2段間が南北6cm、東西8cm、長さ50～54cmの長方形角材を用い、2、3段間も一辺が南北×東西方向で、6×5、6×4、4×6cm、長さ46～50cmの長方形角材を使用、1、2段間は2本消失していた。横桟は3段残存し、1・3段目は東西方向、2段目は南北方向に貫通していない枘穴（縦5cm、横2cm）があけられ、前者は南北・後者は東西方向に横木が差し込まれていた。寸法は1段目が6～9×4～7cm、2段目が4～7×6～10cm、3段目が6.5×6～11cm、各々長さが80～90cmの長方形角材を使用する。枠内は、上層は拳大の土丹などを含んだ暗褐色土で、底面付近になると砂層となる。東西軸方向はN-42°-Wを示す。

遺物は図22-21～34に14点図示した。かわらけや常滑甕片などは図示できない細片も出土しており、かわらけでは覆土上層では糸切り痕をもつ破片が多く、下層にいくに従い手づくねかわらけ細片の混じりが多くなっている。21から30はかわらけで大小5点づつが図示できた。小形皿は口径7cm～8cm、器高1,5cm～2,0cmで器肉の薄いものは少なく、口径と底径の差が少ない。大型皿は口径12cm～13cm、器高3cm～3,5cmで器肉の薄い一群はほとんど含まれない。31は山茶碗窯系捏ね鉢、32は常滑甕口縁部、33は泥岩を加工した製品。横6,3cm、縦9cm、厚さ4cmの泥岩の一面に径4,5cmで深さ1,5cmの円形窪みが彫られている。窪みはちょうど茶碗を置いたような断面形を呈しており、中心部には径1,5cm、深さ1mmの円形窪みがある。中央の円形窪み外周からは16条の溝が放射状に彫られている。放射状の溝は幅2mm～3

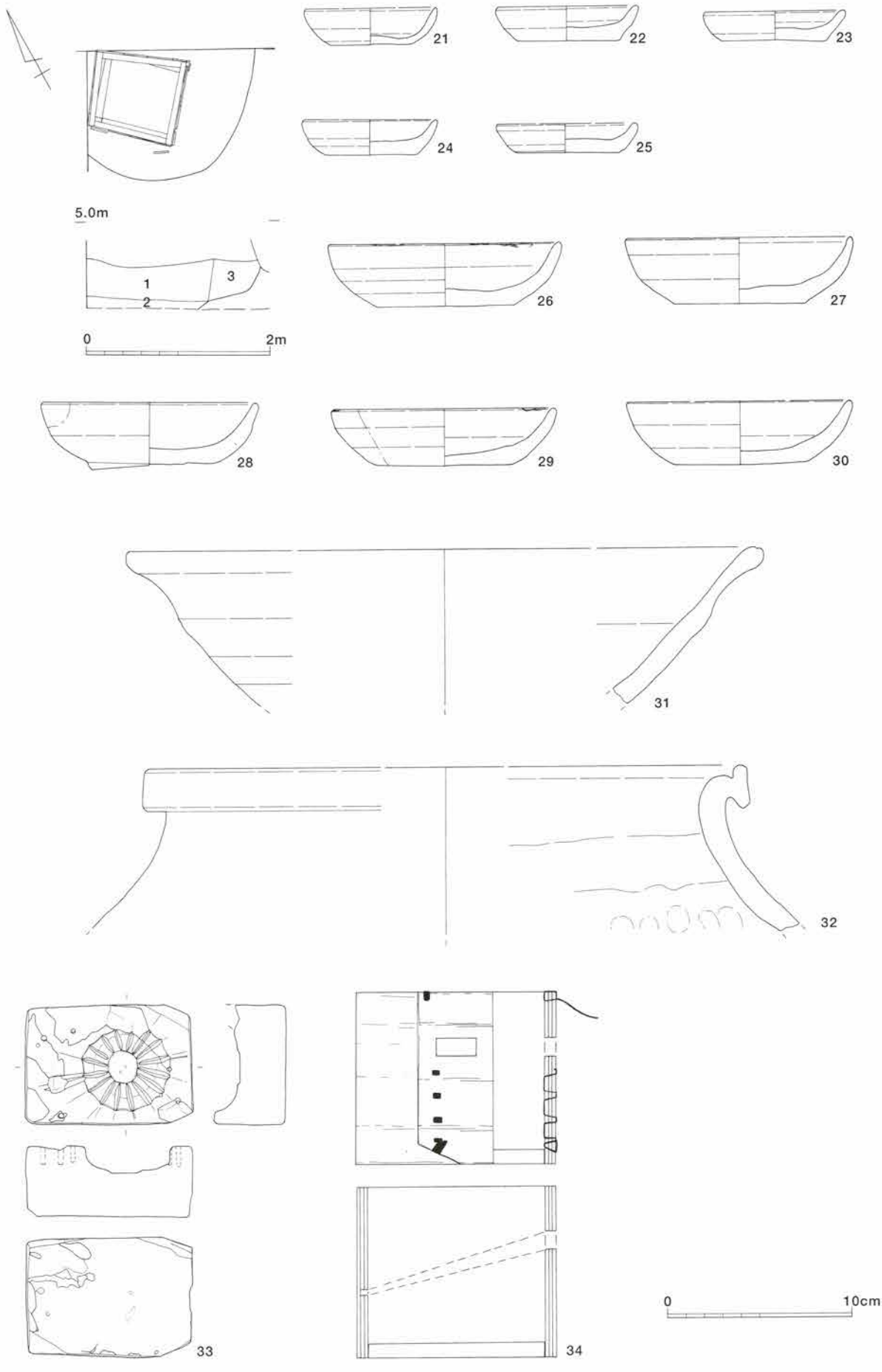


図22　C地点２面井戸１

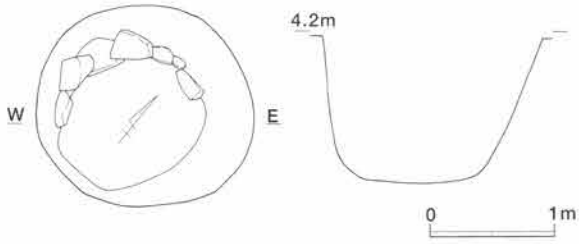


図23　C地点２面井戸２

mmで断面はU字形で両端はすぼまっている。用途は不明であるが形状から本製品にきめの細かい砂などを入れ鋳型を制作する可能性を指摘したい。34は口径（外径）11cm、高さ11,2cmの曲げ物で柄を装着する孔がつけられている。柄杓であろうが柄は無い。

井戸２

井戸２は南調査区の東側に位置する。土坑などを確認したレベルでははっきりしなかったが、20cmほど掘り下げたところ、頭大の土丹塊が大量に集中するのが確認された。この土丹塊を除去すると井戸２の掘り方が検出された。井戸１より確認レベルが20cmほど低い。ここでは２面に含めたが、３面との間に薄く暗褐色粘質土の堆積が調査壁の観察で確認されており、本遺構の掘り込み面は中世地山でありもう１枚生活面があった可能性も残る。

掘り方は175×162cmの楕円形を呈し、深さが検出面から120cm、底面海抜3.0m前後を測る。井枠などの検出はなかったため、素掘りの井戸と思われる。ただし北西側に、大きいもので60×40cm、全体では30×20cm程度の土丹が部分的に並んでいた。覆土は、上層が頭大の土丹を非常に多く含む暗褐色土から、砂や土丹粒が混入する灰褐色砂質土となり、底面になると青砂層へと移行する。底面の東側からは馬の頭蓋骨が南北方向に検出された。井戸の東西長軸方向はN-37°-Wを示す。遺物はほとんど検出できなかった。

土坑

土坑は平面形円形１基、平面形方形３基、不明１基が確認されている。ほとんどがⅡ区に集中している。土坑９はⅡ区南西隅部分的に確認された。確認規模は東西35cm、南北80cm、深さ９cmで覆土は暗褐色土である。部分的な検出にしては遺物が多く図24-35～38のかわらけが図示できた。35は小形皿で他は大形皿。37は薄手作りである。土坑11はⅡ区北東隅近くで検出された。調査区外に約半分が延びる。確認規模は東西94cm南北36cm深さ18cmを測る。遺物は図24-41に図示した瀬戸灰釉仏花瓶とかわらけ細片が出土している。

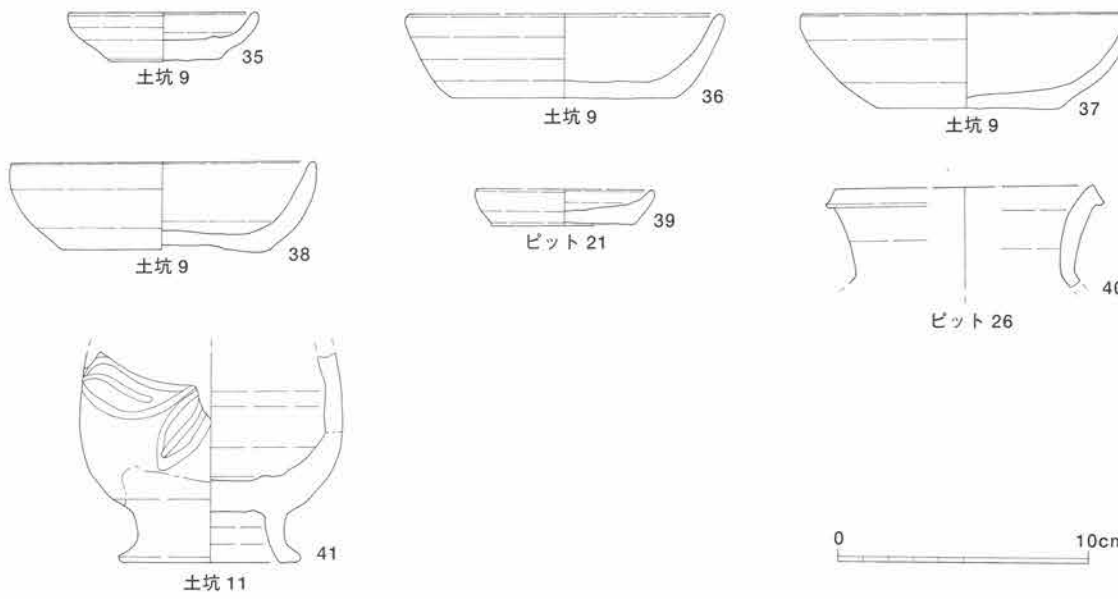


図24　C地点２面遺構出土遺物

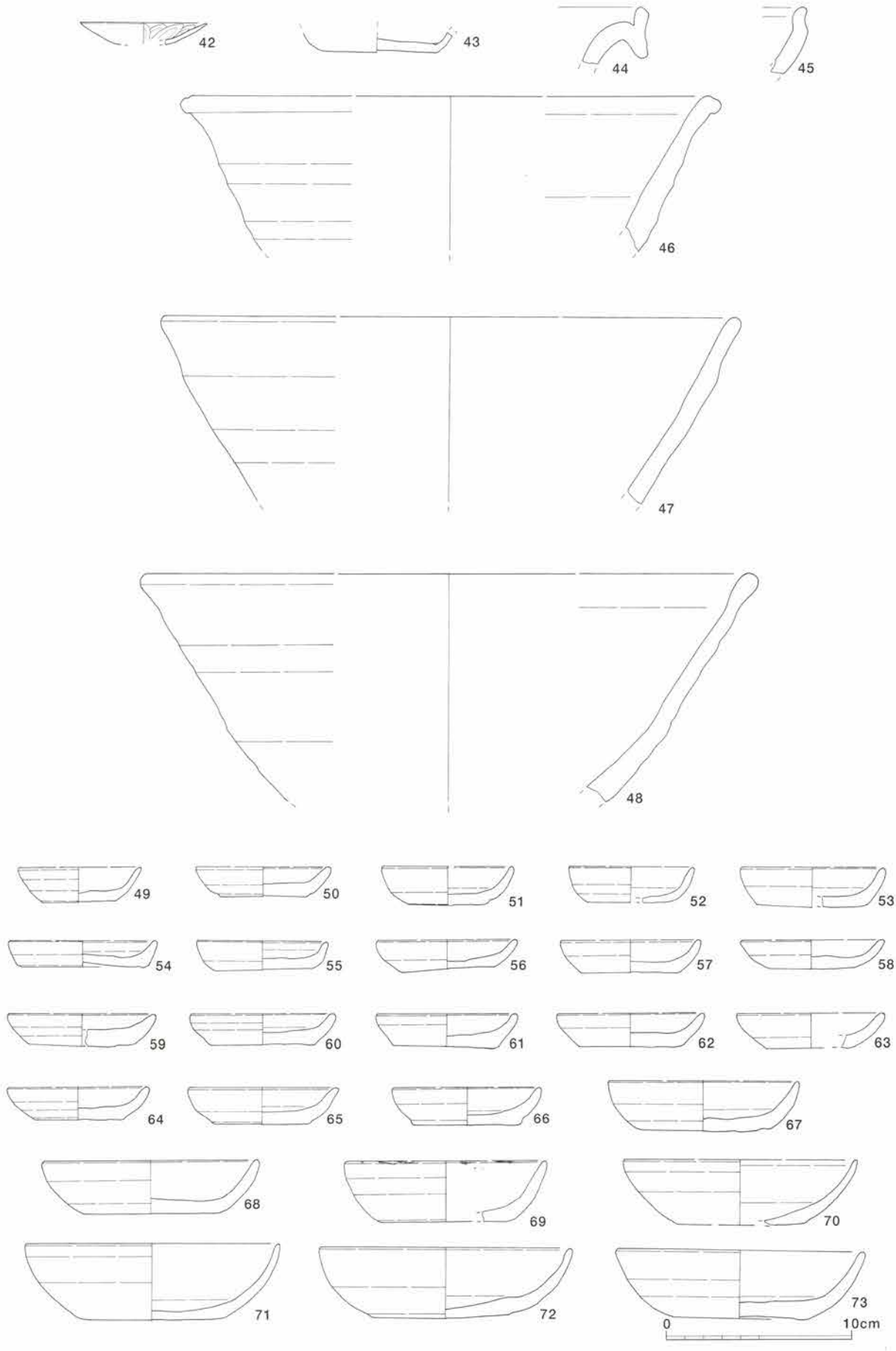


図25　C地点2面出土遺物(1)

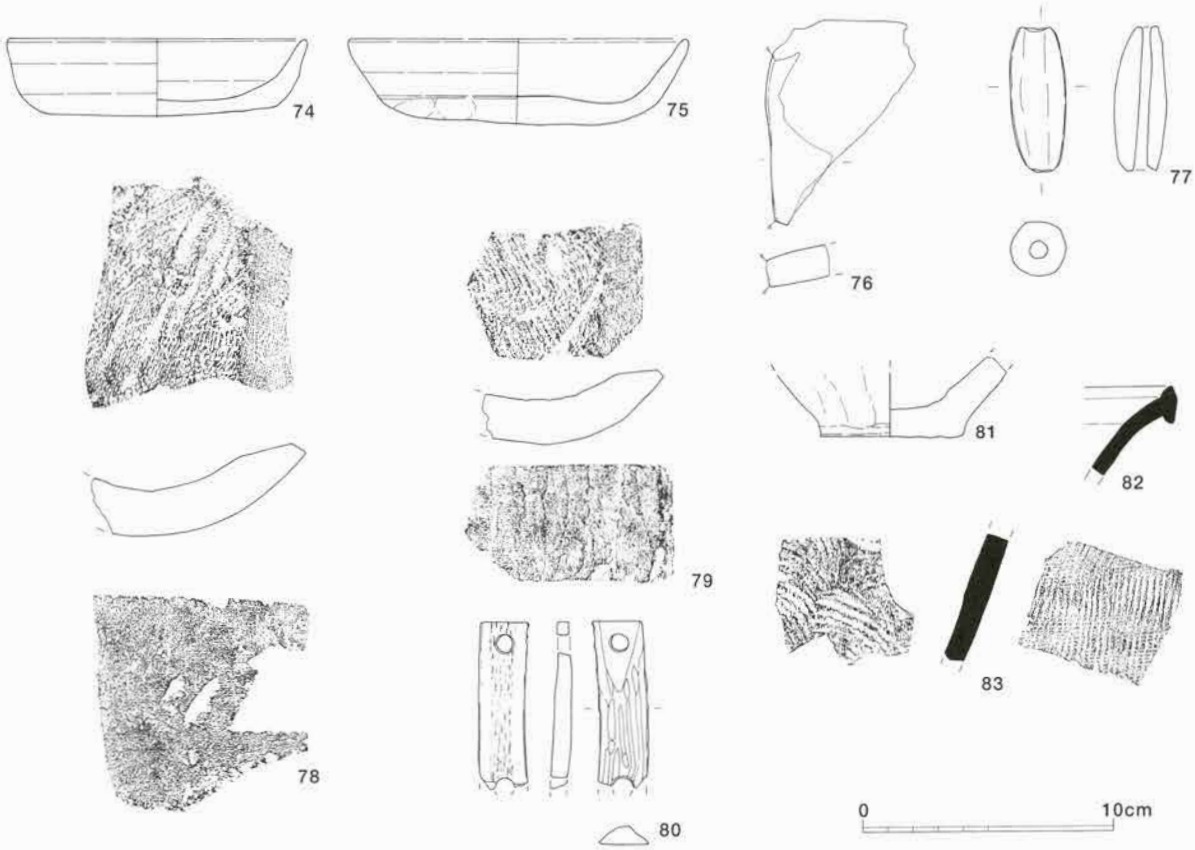


図26　C地点２面出土遺物(2)

柱穴

ピット18は直径24cm、深さ55cm、円形を呈する。覆土は締まりがやや弱く、直径１cm以下の土丹粒を含む暗褐色粘質土である。南北９cm、東西５cm、確認長31cmの角材が残存し、その底面には長さ８cm、幅６cm、厚さ4.5cmの礎板痕があった。底面の海抜レベルは4.16m。

ピット19は直径30cm、深さ50cm、円形を呈し、覆土はピット18と同じ暗褐色粘質土である。底面に長さ15cm、幅９cm、厚さ2.5cmの礎板が残存する。礎板の上面レベルは4.25m。この他に。区では長さ15cm、幅９cm、厚さ２cmの礎板が検出された。この上面レベルは4.26mで、ピット19とほぼ同レベルである。これらの距離は芯芯約90cmを測る。同建物の礎板とも考えられるが、他に等間隔のピットなどは見付かっていない。

ピット23は直径22cm、深さ42cm、円形を呈する。覆土は炭化物粒子を多く含む暗褐色粘質土である。長さ11cm、幅７cm、厚さ約１cmの礎板が残っていた。礎板の上面レベルは4.17m。

２面調査中に出土した遺物のうち図示可能なものは図25-42～80に示した。42と43は中国製磁器。42は青白磁杯で内面には蓮弁文が陽刻されている。43は白磁口兀皿。44は常滑甕口縁部片、45は常滑無頸壺。46～48は山茶碗窯系捏ね鉢。49～75はかわらけで、49～66は小形皿、67～69は中型皿、70～75は大形皿。小形皿は口径6,5cm～8,7cm、器高1,5cm～2,3cmの法量を持つ。薄手作りの皿も少量混じるが多くは比較的厚みのある皿である。中型皿は口径10,5cm～12cm、器高2,8cm～3,3cmの法量を持ち比較的薄手作りである。大形皿は75の手捏ねを除き他は糸切り底面を持つ。口径12cm～14cm、器高3,7cm～４cmの法量を持ち薄手作りがやや多く見られる。灯明皿は69の１点である。

76は常滑甕片の外周を磨いた磨り常滑、77は土錘、78と79は丸瓦、82と83は須恵器壺片、80は骨製品でやや両端の反る形で両端近くには孔があけられている。

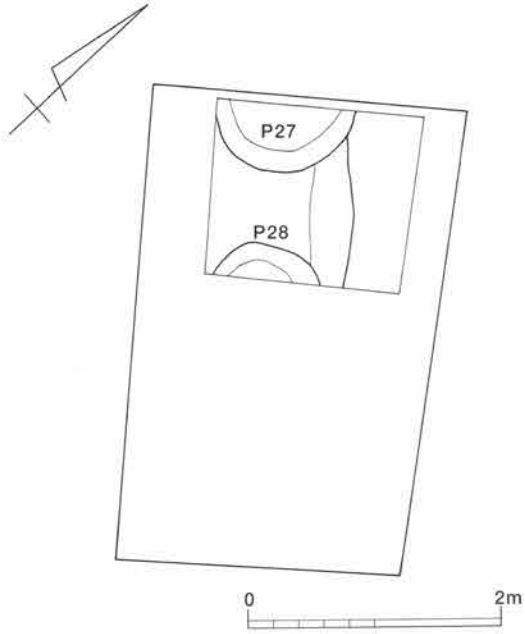


図27　C地点３面検出遺構

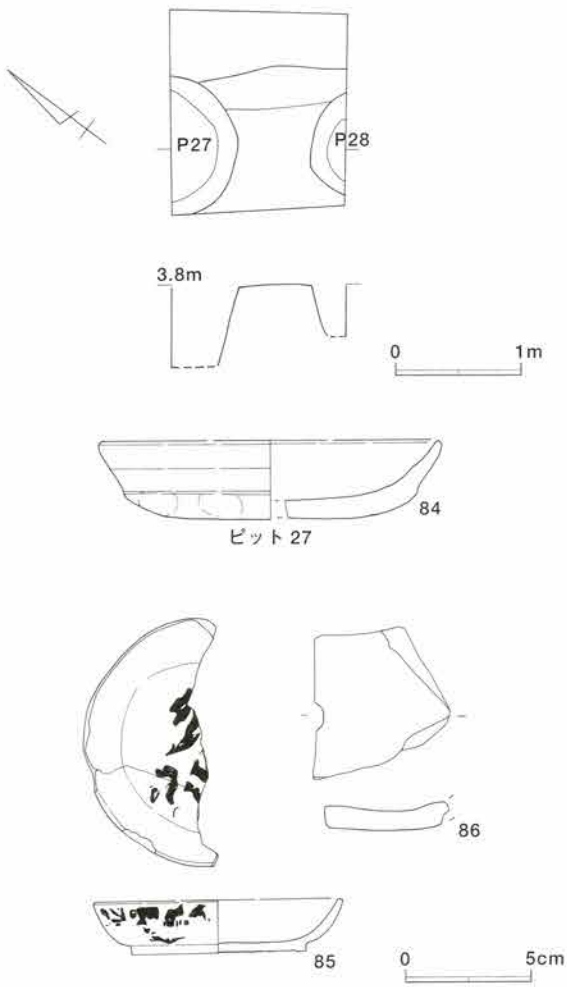


図28　C地点３面出土遺物

3　３面の遺構と遺物

３面は、Ａ・Ｂ両地点で検出された中世基盤層である暗褐色粘質土の土質が異なり、特にＡ地点の地山が鎌倉市街地で検出されるそれとかなり変化している為に、本来の暗褐色粘質土を確認する目的で下層を掘り下げた時に検出した遺構面あるいは確認面であり、標準堆積土の６層上面に相当する。

掘り下げ調査はⅡ区井戸２の西側を東西140cm、南北160cmの面積で行った。Ⅰ区では掘り下げ調査は行わなかった。その結果大形の円形柱穴２口が検出された。しかし、調査中に水が湧き、底部の砂層が崩落を始めた為にともに完掘はできなかった。柱穴の東側は北西から南西に向かって、緩やかに落ち込んでいる。

ピット27は確認規模で東西54cm、南北110cmで確認面から約70cmまで掘り込んでいる。底面海抜レベルは3.15m。ピット28は確認規模で東西28cm、南北80cm、確認面から約30cm掘り込んだ。底面の海抜レベル3.6mまで確認している。覆土は、いずれも締まりの有る暗灰褐色粘質土で、かわらけ細片に混じって中世以前の土器細片が僅かに出土している。ピット27からは図28-84に図示した手捏ねかわらけが出土している。器肉はそれほど厚くなく口縁直下の外周ナデは２段である。

柱穴は東西方向に並んでいるが、東側には井戸２があるので検出できなかった。また、本調査区の東側に当たるＤ地点では類似するような柱穴は検出されていない。調査区以外の西側、あるいは南北方向へ展開していたのかもしれない。

３面調査中に出土した遺物は手捏ねかわらけ細片や中世以前の土器細片が僅かに出土している。図28-85と86の２点が図示できたにとどまる。85は漆器皿で全体に黒色系漆を塗った後に赤色系漆で不鮮明な文様を内外に描いている。高台は漆器出現初期の板高台から輪高台に変化する途中の様相を示している。86は手捏ねかわらけ片で底部中央に穿孔されている。

4　若干のまとめ

本地点では海抜5,0m前後まで標準２層の耕作土で削平されている。最下層の３面は、調査中には湧き

水等の影響で明確にできなかったが、壁面の堆積土観察で2面最下部に疑似中世地山としている暗褐色粘質土が薄く堆積している事が確認できた。そのため本地点で3面としているのは本来標準4層以下の標準5層あるいは6層に相当する事になる。その結果、2面で検出された井戸2は標準4層（疑似中世地山）堆積前後の遺構であった可能性が高い。出土遺物が少なく断定できないが、以下のように所属面が変わる可能性を指摘しておく。

2面　　井戸1他

3面　　井戸2（疑似中世地山堆積前後）

4面　　ピット27、ピット28

4面に帰属するピット2口は、D地点の5面遺構群とほぼ同じ年代と推定できる。

出土した遺物には旧3面から手捏ねかわらけなど13世紀前半の遺物が出土している。明確な遺構はないが井戸2等がその頃の年代と考えたい。

最下層遺構である大形柱穴2口は、部分的な調査であったため性格までは明確にできなかった。しかし、状況からは総柱建物の可能性がある。

第4節　D地点

本地点では5面の生活面を確認できた。良好な版築面をⅠ・Ⅱ区ともに3面で検出しているが、その様相は他地点と異なっており、薄い版築面が幾つか重なった状況であった。建物の整地版築とは性格が異なる可能性がある。

1　1面の遺構と遺物

Ⅰ区で撹乱2、土坑1基、ピット8口、鎌倉石5石と土丹版築面、Ⅱ区で撹乱4、土坑3基、ピット3口、鎌倉石1石を検出した。Ⅰ区の土丹範囲は北東から南西に帯状に、幅80cm～2mの範囲で確認された。直径が5～10cmの土丹が平らに敷きつめられる。また、この範囲の北側に3石、南東に2石の鎌倉石が検出された。残存する大きさは長さ40～50cm、幅20～26cmを測る。南北方向と東西方向の鎌倉石の並びは90度の角度を持っている。版築面と鎌倉石の並びは北側では同一時期の可能性があるが南北方向では鎌倉石が新しいようにも見える。Ⅱ区では調査区やや南寄りに東西に横断する撹乱（下水管埋設溝）があり、その北側に幾つかの柱穴などが確認されている。柱穴はⅠ区北東部に5口が集中しているが建物としては把握できなかった。

1面で調査した遺構からの出土遺物は細片が多く図示できるものは無かった。また、撹乱からの出土遺物は1面の調査中に出土した遺物に含め、それらは図30の1～11に図示した。1は青白磁合子の蓋で鳳凰文が陽刻されている。2は瀬戸灰釉卸皿底部片、3は常滑甕片の外周を磨いた磨り常滑、4は厚さ1,8cm～2cmの泥岩を円形に磨いた製品であり所謂焼き物ではない。5と6は鉄釘。7は火打ち金具でサビのために原形は明確ではないが、三角形の両端が上に向かって湾曲するような形状である。8～10は砥石でいずれも短冊形を呈していたと思われる。11は銅銭で大禧通寶。

2　2面の遺構と遺物

Ⅰ区では1面の土丹版築と同じ方向に延びる2箇所の細長い版築面、土坑1基、15口の柱穴、Ⅱ区では2基の土坑、30口の柱穴を検出した。柱穴から建物を復元するには至らなかった。Ⅰ区の版築面は1面のそれに軸線も類似しており、何らかの関係を推定する事ができる。

版築面

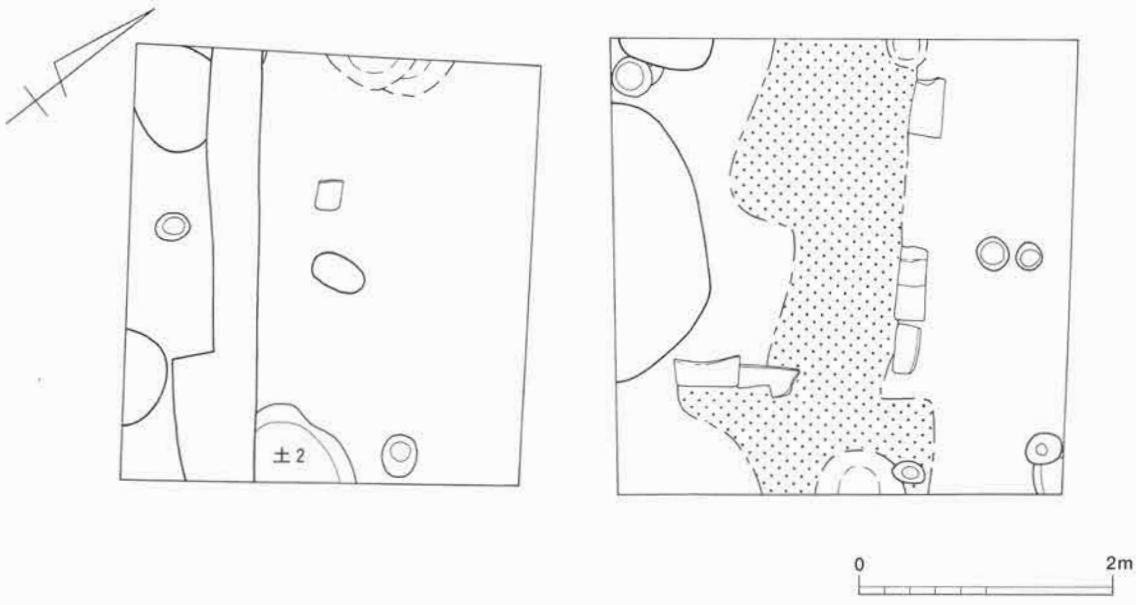


図29　D地点1面検出遺構

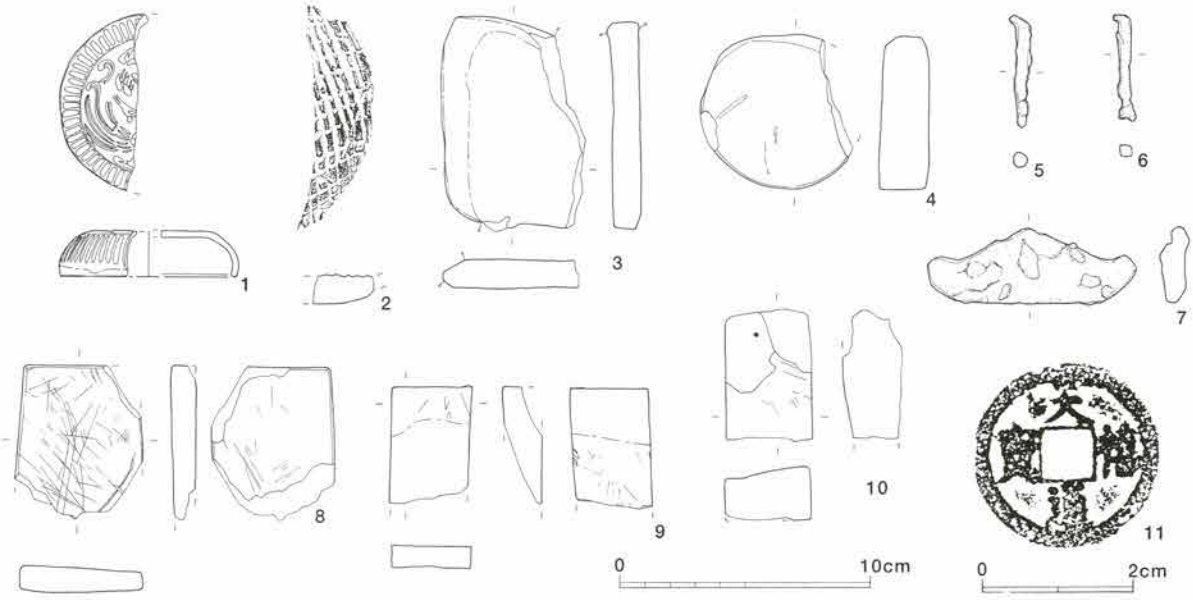


図30　D地点1面出土遺物

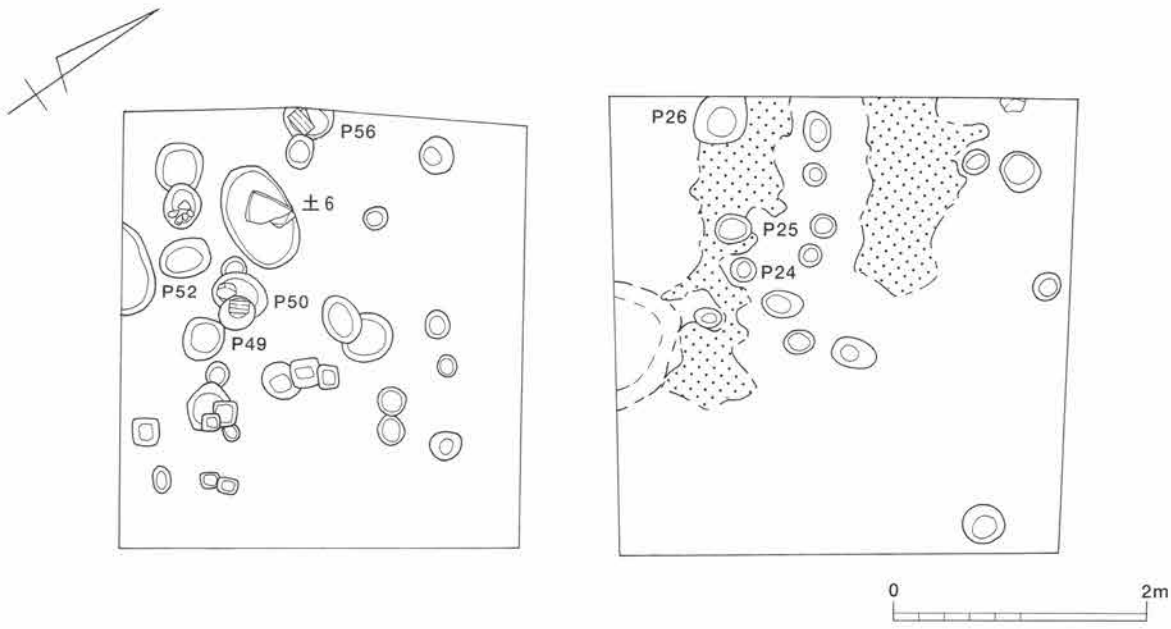
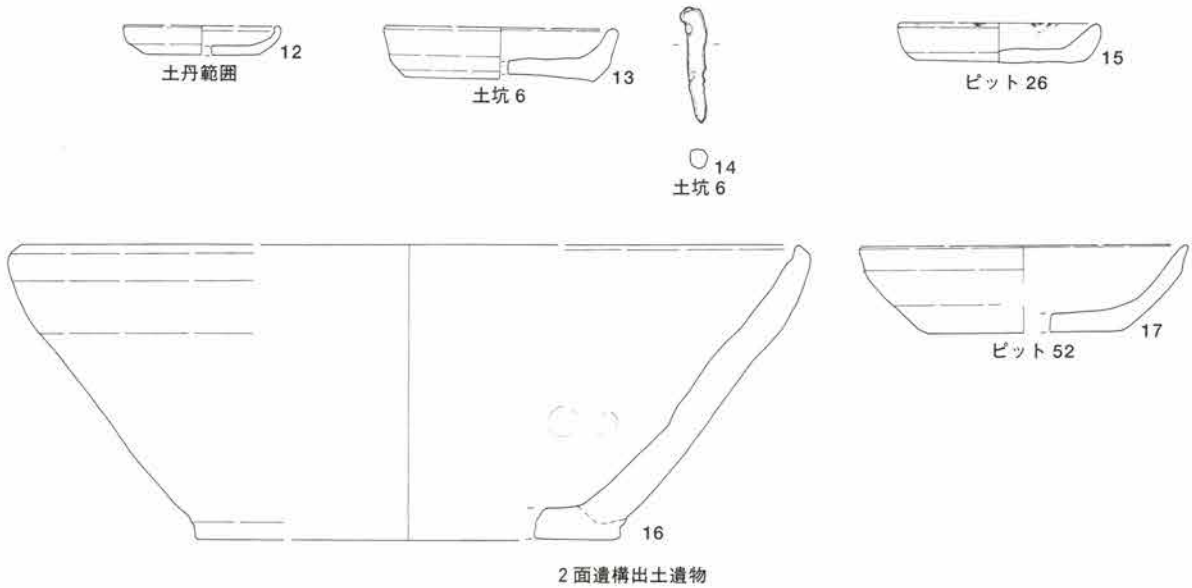


図31　D地点2面検出遺構

頭大～拳大の土丹が東西方向に平行して、2列が平らに突き固められていた。両者の間は60～80cm離れている。上面レベルは西壁際で5,0m、東端で5,10mを測りほとんど平らであるが、東に行くほど土丹が少なく散らばる感じである。東壁近くでは不鮮明になるが、おそらく東壁を越えて続いていたものと考えられる。性格は不明。周辺で少量の遺物は出土しているが、いずれも細片で図示できない。図31の12に図示したかわらけは版築面中から出土している。口径6,2cm、器高1,2cmで口唇部はやや内湾するコースター皿である。

土坑

3基の土坑を確認したが図示できる遺物は土坑6のみ出土している。土坑6は長径86cm、短径52cm、深さ10,5cmの楕円形で、覆土中にやや大形の土丹が検出されている。礎石に使用したものとも考えたが確証はない。遺物は図31-13のかわらけと14の鉄釘が出土している。



2 面遺構出土遺物

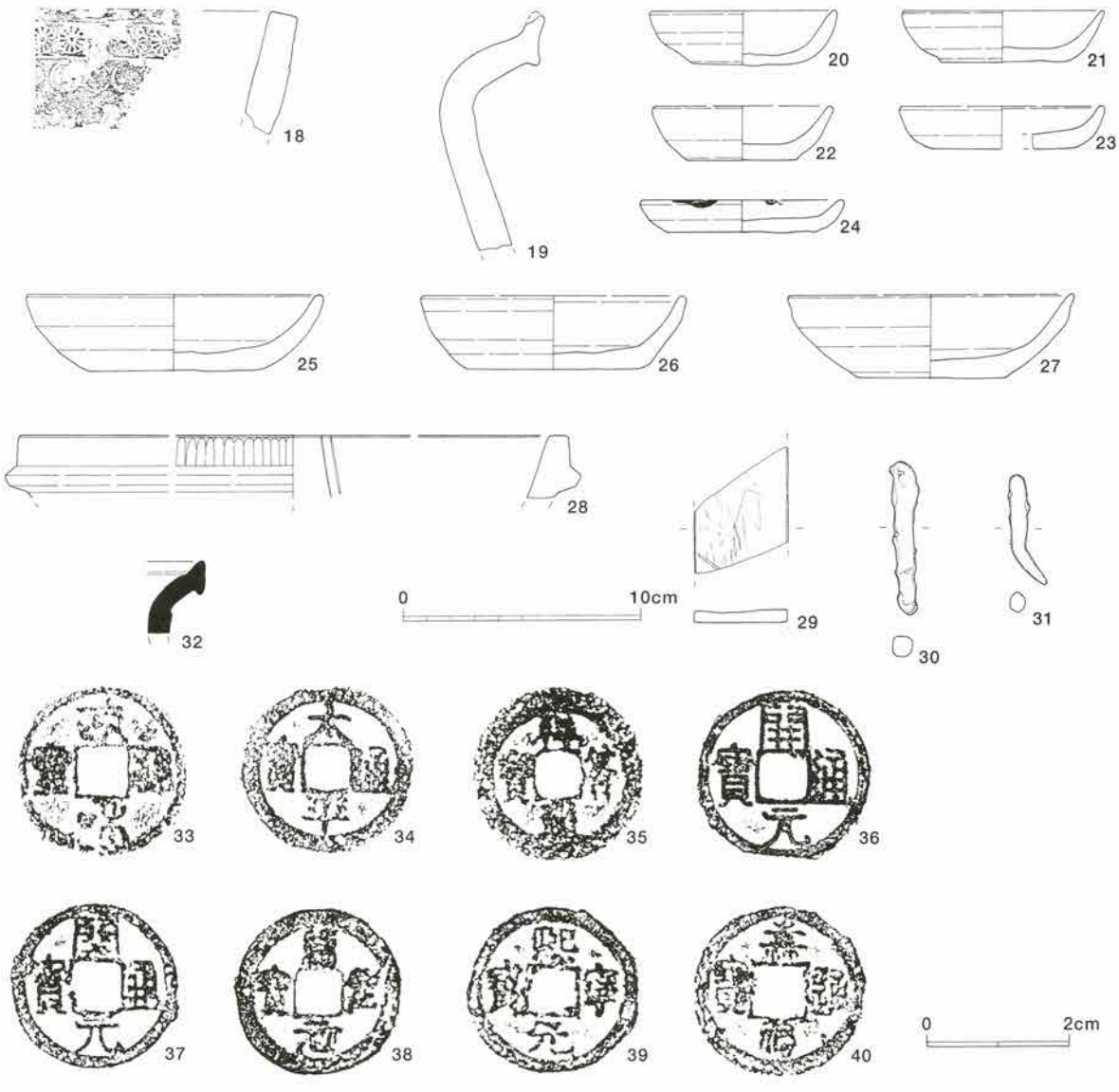


図32　D 地点 2 面出土遺物

柱穴

柱穴はⅠ・Ⅱ区合わせて45口が検出されたが、他の遺跡と比較すると規模が小さくて数がやや少ないようである。検出された柱穴には礎板を伴うものや礎石と考えられる安山岩や土丹を伴うものもみられたが、基礎規制が認められずに、建物としては把握できなかった。本来規格性の強い建物では無かったように思える。

ピット26はⅠ区西壁際の版築面下で検出された。版築面より古い。確認規模は東西38cm、南北40cm、深さ57cmの円形で検出された柱穴では深い。遺物は図31-15に図示したかわらけが１点出土している。

ピット50はⅡ区ほぼ中央で検出された。柱穴49に一部を壊される。確認規模は東西40cm、南北46cm、深さ約５cmの円形で、柱穴内南寄りに14×16cm程の安山岩が見つかっている。礎石とも思われるが他に検出が無く建物は復元できない。遺物は図31-16に図示した山茶碗窯系捏ね鉢が出土している。ピット52はピット50のやや南で検出された。確認規模は東西32cm、南北40cm、深さ17cmの楕円形である。遺物は図31-17に図示したかわらけが１点出土している。

２面の調査中に出土した遺物のうち図示できるものは図31-18～40に載せた。18は瓦質手焙りで口縁直下の文様帯に菊花スタンプが巡る。19は常滑甕の口縁部。20～27はかわらけで24までが小形皿、他は大形皿。薄手で器高の高い器形のものは少ない。28は滑石鍋、29は短冊形の砥石、30と31は鉄釘。33～40は銅銭で順に政和通寶、太平通寶、祥符通寶、開元通寶、開元通寶、祥聖元寶、熙寧元寶、嘉祐通寶と判読できる。

３　３面の遺構と遺物

３面ではⅠ区で柱穴４口、東西方向に長い土丹版築状の広がり、Ⅱ区では柱穴15口と南北に長い土丹版築状の広がりが検出できた。両区の版築状の広がりはどのように関連し繋がっていたのか明確にはできなかった。また柱穴はⅡ区の西半分に集中しており礎板を伴うものもみられ、版築面に沿っているようにも見えるが、調査面積が小さく、建物としては把握できなかった。

土丹版築

Ⅰ区の版築面は、上面は細かな土丹が突き固められて良好であるが、この下は頭大以上の土丹が乱雑

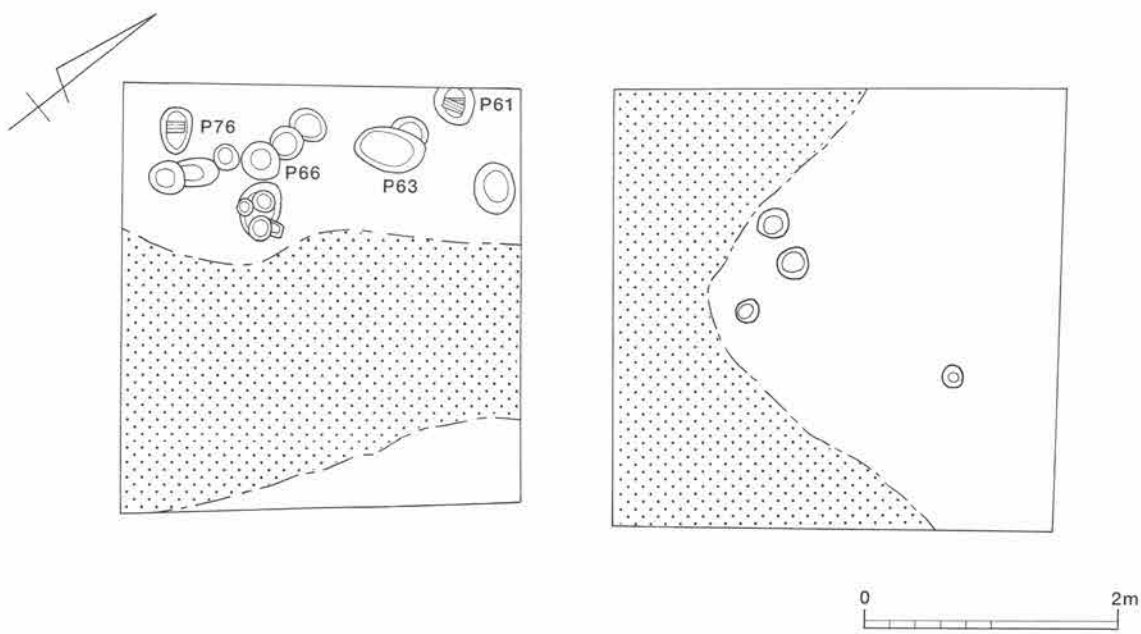


図33　D地点３面検出遺構

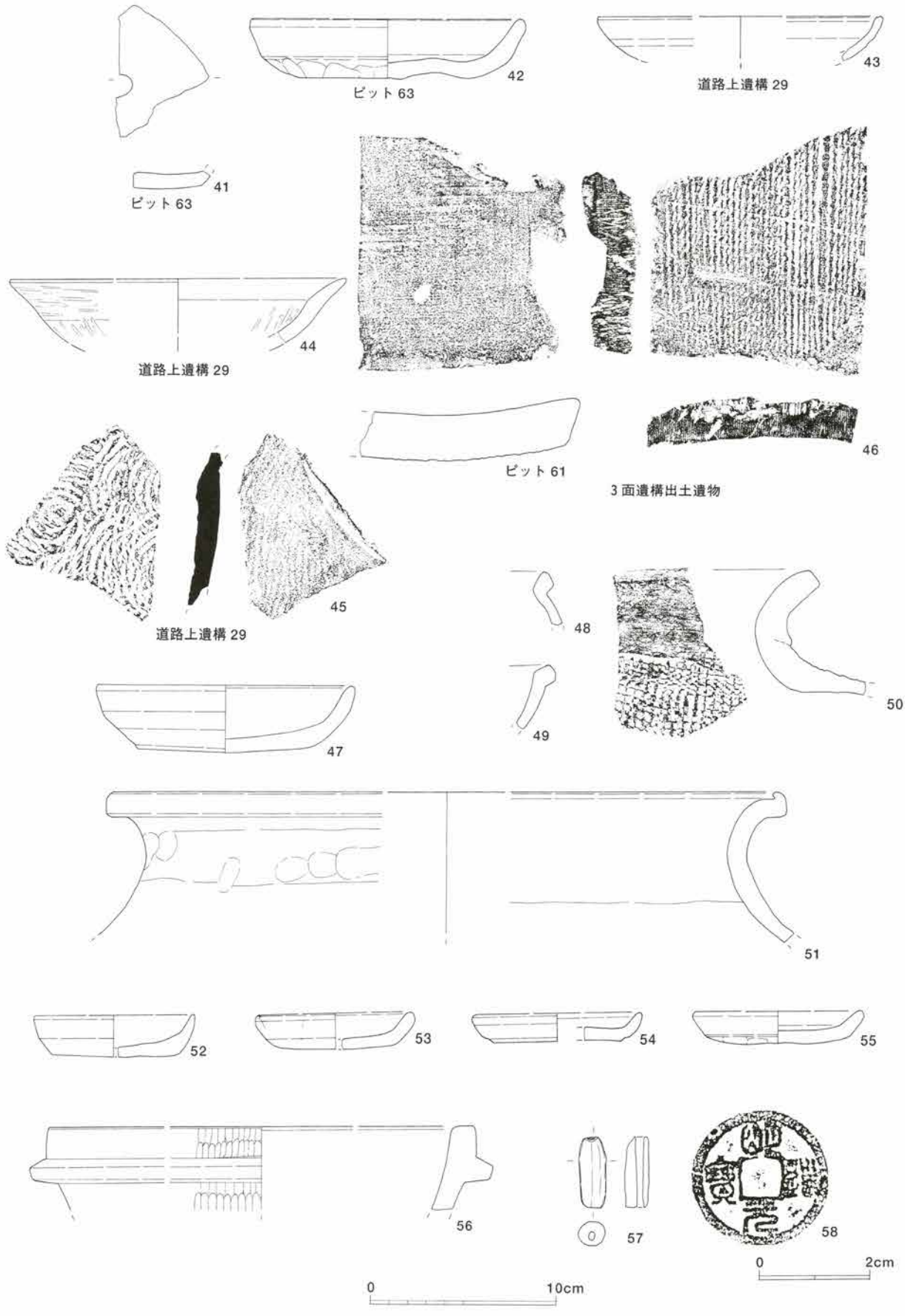


図34　D 地点 3 面出土遺物

に敷かれている。Ⅱ区で検出された版築も同様な様相を呈しているが。版築の裾に止め石状に大形土丹が並んでいる状況は確認できなかった。上面レベル4,5m～4,6mを測り、やや南に向かって下がる。遺物は少ないがⅡ区の土丹中あるいは土丹除去作業中に出土した3点が図33-43～45に図示できた。43は砂を含んだ明褐色胎土を持つ深い皿（坏？）で復元口径15,4cm、口縁部はやや内湾する。焼成は非常に良好で部分的に赤褐色の焼きムラがみえる。類似遺物の出土は鎌倉ではほとんど無いように思われる。確証はないが平安時代末期の「ロクロ土師器」に同類を求めたい。44は土師器坏で復元口径18,4cm、45は須恵器壺の胴部片。

柱穴

19口の柱穴は建物として復元できなかったが、ほぼ同レベルの礎板を持つピット61と76が建物の可能性を待っている。両ピット間の距離は220cmを測る。遺物は2口の柱穴から出土している。ピット61は礎板を持ち確認規模は東西34cm、南北30cm深さ30cmの楕円形を呈する。覆土内からは図33-46に図示した平瓦が出土している。ピット63はピット61の南で確認された東西37cm、南北56cm、深さ21cmの楕円形で図33-41と42のかわらけが出土している。41は底部中央に穿孔のあるかわらけで形状から手捏ね大皿と思われる。42は手捏ねかわらけの大皿でやや器肉が厚い。口径14,6cm、器高3,2cm。

3面調査中に出土し、図示できた遺物は図33の47～58に示した12点である。47はかわらけ大皿、48は中国製褐釉壺の口縁部、49は中国製緑釉盤口縁部、50は亀山窯甕の口縁部、51は常滑窯甕の口縁部、52～55はかわらけ小皿で55のみ手捏ね。口径は8,5cm～9cm。56は滑石製石鍋、57は土錘、58は銅銭で熙寧元寶。

4　4面の遺構と遺物

4面には暗褐色粘土層上面で検出した遺構を含めた。所謂中世地山に類似する層であるが、鎌倉市街地のそれとはやや土質が異なる。遺構はⅠ区で土坑3、柱穴14口をⅡ区で土坑4、柱穴21口を検出したが他の遺構はない。通常本面から掘り込まれた柱穴覆土には土丹がほとんど含まれないがピット77は覆土に小土丹を多く含んでいる。上層からの遺構である可能性が強い。

柱穴

検出された遺構のうち図示できる遺物が出土したのは僅かである。ピット95はⅡ区の北西隅近くで検

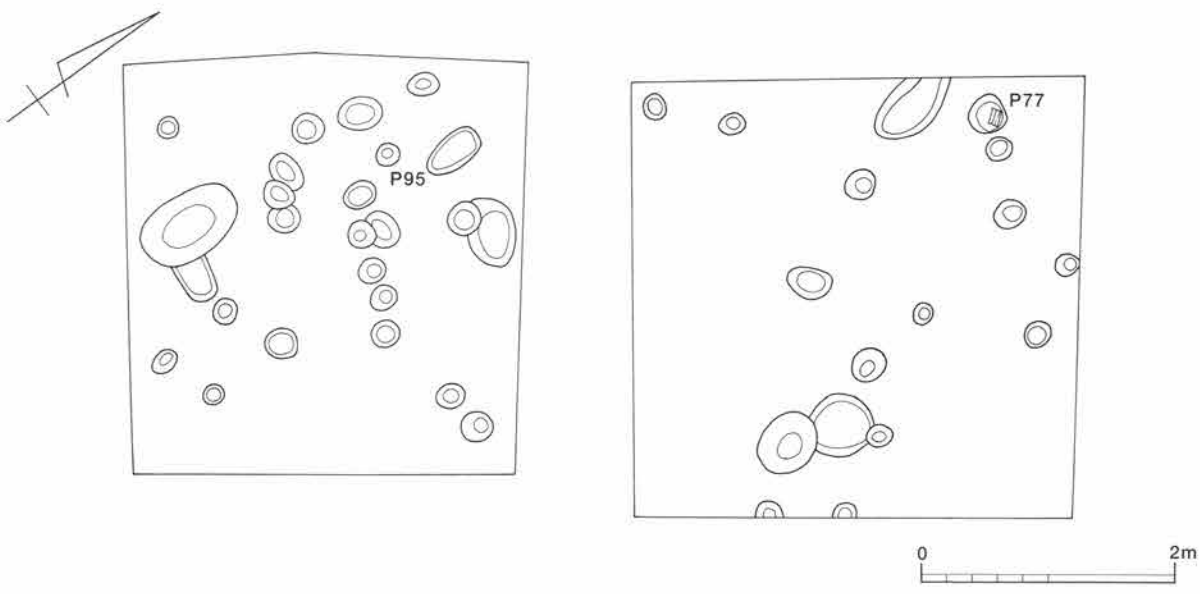


図35　D地点4面検出遺構

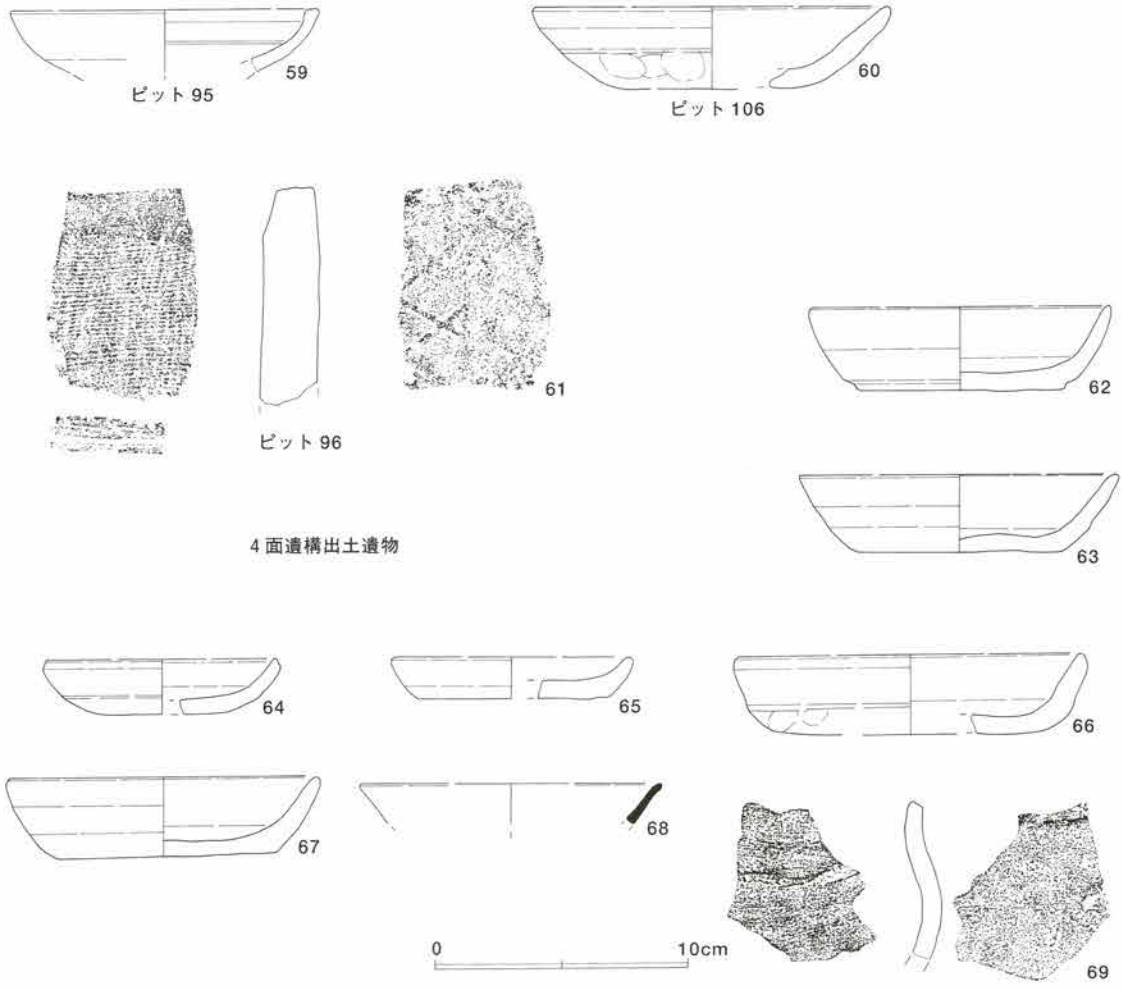


図36　D地点4面出土遺物

出された。東西28cm、南北26cm、深さ9,5cmの円形で覆土から図35-58に図示した土器が出土している。これは3面版築遺構の除去中に出土したロクロ土師器（図33-43）と同質・類似焼成の遺物であるが、僅かに口唇部がやや角張って肥厚し底部に向かって締まる点が異なる。復元口径12,4cm。

ピット96はⅡ区北壁際中央近くで検出された。確認規模は東西52cm、南北36cm、深さ16,5cmの楕円形で図35-63に図示した平瓦が出土している。ピット106はⅡ区西壁近くで検出された。確認規模は東西18cm、南北34cm、深さ9,5cmの楕円形で図35-60に図示した手捏ねかわらけ大皿が出土している。

4面調査中に出土した遺物のうち図示可能な8点は図35-61～68に示した。61～66はかわらけで64の小皿と66の大皿のみ手捏ね。小皿の口径は9cm～9,5cm、器高は1,7cm～2,2cm、大皿の口径は12,2cm～12,8cmで復元口径の66は14cm弱。67は須恵器坏、68は土師器。

5　5面の遺構と遺物

5面にはやや砂を含む暗灰色粘質土上面で確認された遺構を含めた。Ⅰ区で柱穴1口、Ⅱ区で柱穴6口を確認した。C区3面の柱穴とほぼ同じ検出面であるが、検出状況や覆土の状況等から4面から掘り込まれた遺構が混じっている可能性も十分に考えられるが、それを区別することができなかった。

検出された柱穴はほとんどが円形平面を呈し、直径は20cm～25cmで深さ6cm～22cmと規模が小さい。明確な建物としては把握できなかったが、しいて復元を試みればピット122とピット121の間が92cm、ピット121とピット123の間が100cmであり両ラインはほぼ直角に交わる。これだけで建物を復元する事は軽

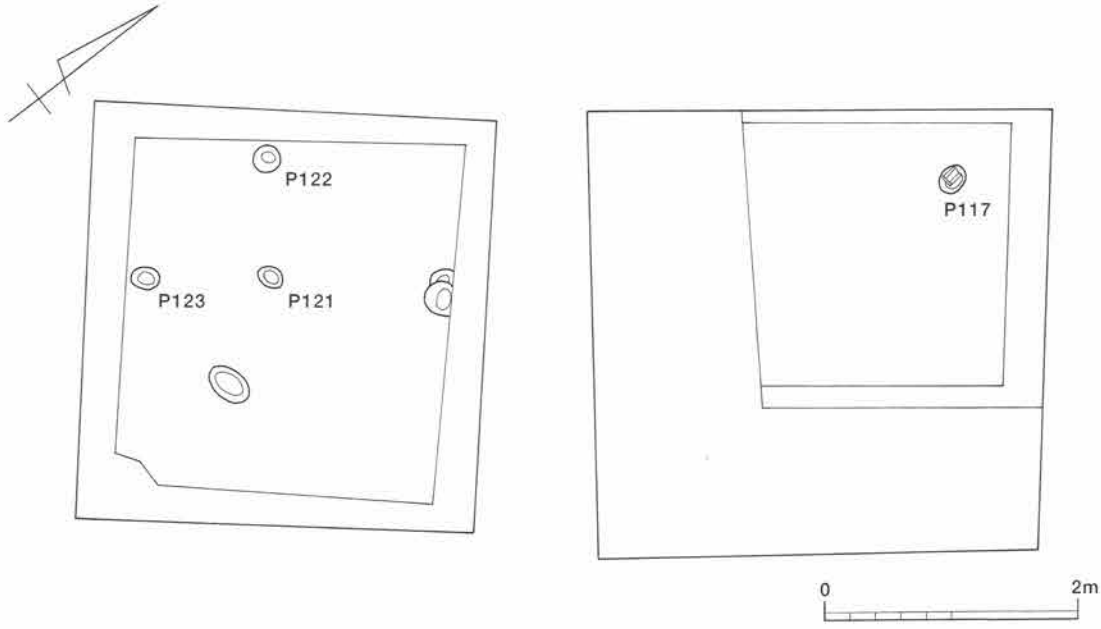


図37　D地点5面検出遺構

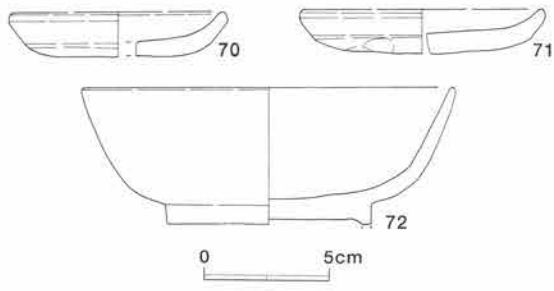


図38　D地点5面出土遺物

率であろうから可能性を指摘するに留める。いずれにしても小規模な板壁掘立柱建物程度しか復元できないであろう。

5面調査中に出土した遺物は3点が図示できた。この他には中世以前の土器細片や手捏ねかわらけであろう細片が出土している。図37-71と72は手捏ね小皿で共に破片での出土である。共に器肉が厚く鎌倉時代初期にみられるものとはやや異なる。73は黒色系漆を全面に塗った椀で高台部高1㎝前後で、3～4㎜の輪高台が削り出されている。13世紀前半に出土する椀に類似点が多い。黒色系漆の塗りはやや悪く木地が透けて見える部分もある。

6　若干のまとめ

本地点の調査では疑似中世地山とも言える4面粘土層の下から5面を検出した。遺構はごく小規模な板壁掘立柱建物が強引に復元できる程度であるが、13世紀前半に比定できる手捏ねかわらけや漆器椀が中世以前の土器細片に混じって出土している。また、4面では手捏ねかわらけやロクロ土師器と思われるような土器も出土している。これらの遺物から本地点の開発が13世紀前半には行われていたと言う事も出来るが、この点は後章のまとめに委ねる。

1面、2面では僅かに14世紀後半から15世紀前半のかわらけが混じるが、これらのかわらけを伴う明確な遺構は確認されていない。おそらく他地点同様に既に削平されているのだろう。1面から3面にかけて検出された土丹版築状の広がりは道路や土間と考えたいがいずれも確証はない。これに伴う鎌倉石も用途が特定できなかった。継続しているであろうC地点で明確な遺構として土丹版築面が捉えられなかった点は道路としては否定的な要因となる。

各面で検出された柱穴や礎石は建物として把握できなかったが、小規模でかつ良好な版築を伴わない。従って大形建物や寺院などは考えがたい。本地点も庶民層あるいはやや裕福な町人の空間であったと思われる。

遺物法量法

材木座町屋遺跡A区

図版No.	種　別	法　量(cm)			備考	図版No.	種　別	法　量(cm)			備考
1面											
図5-1	かわらけ	(7.4)	(6.0)	(1.6)		図5-2	かわらけ	(14.0)	(9.2)	(3.6)	
図5-3	釘	5.3	0.9	0.6		図5-4	瀬戸　碗	—	(6.3)	(2.2)	
図5-5	瀬戸　天目碗	—	4.5	(3.3)		図5-6	常滑　甕	—	—	—	
図5-7	手焙り	—	—	—		図5-8	手焙り	—	—	—	
2面											
図7-9	かわらけ	(12.3)	(6.5)	(3.5)		図7-10	かわらけ	11.8	6.8	3.2	
図7-11	かわらけ	10.8	6.6	2.9		図7-12	かわらけ	0.0	5.3	1.4	
図7-13	かわらけ	7.8	6.2	1.7		図7-14	かわらけ	8.0	5.4	2.1	
図7-15	かわらけ	12.4	7.0	2.9		図7-16	かわらけ	(13.4)	(8.2)	(3.5)	
図7-17	かわらけ	7.7	5.2	1.9		図7-18	かわらけ	7.8	5.3	1.9	
図7-19	かわらけ	7.4	5.3	2.0		図7-20	かわらけ	7.4	5.2	2.1	
図7-21	かわらけ	(7.4)	(4.8)	(2.1)		図7-22	かわらけ	8.0	4.9	2.1	
図7-23	かわらけ	7.4	5.0	1.2		図7-24	かわらけ	7.8	5.0	2.0	
図7-25	かわらけ	(7.6)	(4.8)	(2.1)		図7-26	かわらけ	(10.0)	7.0	2.8	スス付着
図7-27	かわらけ	10.6	5.9	2.9		図7-28	かわらけ	11.3	5.9	3.1	
図7-29	かわらけ	(12.4)	(6.9)	(3.2)		図7-30	かわらけ	(12.8)	(8.2)	(3.2)	スス付着
図7-31	かわらけ	(13.5)	(7.3)	(4.0)		図7-32	亀山　甕	—	—	—	
図7-33	手焙り	—	—	—		図7-34	常滑　甕	—	—	—	
図7-35	かわらけ	(6.8)	(5.4)	(1.8)		図7-36	かわらけ	6.5	3.2	2.2	
図7-37	かわらけ	7.2	3.8	2.3		図7-38	かわらけ	7.9	5.9	1.9	
図7-39	かわらけ	7.3	5.6	1.7		図7-40	かわらけ	7.9	5.4	1.9	
図7-41	かわらけ	8.0	6.2	2.1		図7-42	かわらけ	7.4	5.4	1.9	
図7-43	かわらけ	7.7	5.4	1.9		図7-44	かわらけ	7.8	5.2	1.9	
図7-45	かわらけ	7.8	5.8	2.1		図7-46	かわらけ	7.9	5.0	1.7	
図7-47	かわらけ	7.7	4.9	1.7		図7-48	かわらけ	(7.9)	5.6	1.5	
図7-49	かわらけ	(8.2)	4.6	1.9		図7-50	かわらけ	(10.0)	(6.5)	(3.0)	スス付着
図7-51	かわらけ	(10.5)	(5.3)	(3.0)		図7-52	かわらけ	(10.5)	(6.5)	(3.2)	
図7-53	かわらけ	11.7	7.8	3.2	スス付着	図7-54	かわらけ	(12.0)	(5.7)	(3.1)	
図7-55	かわらけ	(12.3)	(6.4)	(3.0)		図7-56	かわらけ	(12.8)	(8.4)	(3.5)	
図7-57	釘	—	—	—		図7-58	笄	—	—	—	
3面											
図10-59	山茶　捏鉢	(31.8)	(14.6)	—		図10-60	常滑　甕	—	—	—	
図10-61	亀山　甕	—	—	—		図10-62	かわらけ	13.5	7.5	3.6	
図10-63	白磁　皿	(12.6)	—	(2.05)		図10-64	青磁　合子蓋	(6.6)	(4.1)	(1.45)	
図10-65	青白磁　合子蓋	(7.7)	(4.6)	(1.8)		図10-66	瀬戸　卸皿	—	—	—	
図10-67	常滑　壺	(9.8)	—	(4.85)		図10-68	常滑　甕	—	—	—	
図10-69	常滑　甕	—	—	—		図10-70	常滑　甕	—	—	—	
図10-71	常滑　甕	—	—	—		図10-72	亀山　甕	—	—	—	
図10-73	かわらけ	(12.8)	(8.4)	(3.5)		図10-74	かわらけ	(7.2)	(5.4)	(1.9)	
図10-75	かわらけ	(8.2)	(5.8)	(1.8)		図10-76	かわらけ	(6.8)	(4.4)	(1.7)	スス付着
図10-77	かわらけ	(7.6)	(4.4)	(2.4)		図10-78	かわらけ	(7.6)	(4.8)	(2.3)	
4面											
図12-79	かわらけ	7.5	5.6	1.6	スス付着	図12-80	かわらけ	7.8	5.6	1.5	スス付着
図12-81	亀山　甕	—	—	—							

材木座町屋遺跡B区

図版No.	種　別	法　量(cm)			備考		種　別	法　量(cm)			備考
1面井戸1						図版No.					
図14-1	瀬戸　卸皿	—	—	—		図14-2	かわらけ	5.8	3.4	2.2	
図14-3	かわらけ	(8.5)	(5.4)	(2.9)		図14-4	かわらけ	6.5	4.7	1.9	
図14-5	かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.9		図14-6	かわらけ	(7.7)	(4.3)	(1.8)	
図14-7	かわらけ	(10.2)	(6.0)	(3.1)		図14-8	常滑　甕	—	—	—	
図14-9	手焙り	—	—	—		図14-10	常滑　甕	—	—	—	
図14-11	砥石	5.6	4.5	3.1		図14-12	銅銭	—	—	—	嘉祐通寶
1面											
図16-13	かわらけ	9.2	7.4	2.5		図16-14	かわらけ	(8.0)	(4.8)	(1.8)	スス付着
図16-15	かわらけ	(7.1)	—	—		図16-16	かわらけ	—	—	—	コースター
図16-17	常滑　甕	—	—	—		図16-18	瀬戸　卸皿	—	—	—	
図16-19	瀬戸　灰釉皿	(9.3)	—	(2.25)		図16-20	常滑　甕	—	—	—	
図16-21	瀬戸擂鉢	—	—	—		図16-22	銅銭	—	—	—	嘉祐通寶

材木座町屋遺跡B区

図版No.	種　別	法　量(cm)			備考	図版No.	種　別	法　量(cm)			備考
2面											
図18-23	銅銭	−	−	−	天聖□□	図18-24	骨角碁石	1.6	−	0.5	
図18-25	常滑　甕	−	−	−		図18-26	常滑　甕	−	−	−	
図18-27	常滑　甕	−	−	−		図18-28	かわらけ	(9.0)	(4.3)	(2.3)	
図18-29	かわらけ	(12.4)	(8.3)	(3.1)		図18-30	常滑　甕	−	−	−	
図18-31	砥石	(3.7)	2.4	0.6		図18-32	釘	5.0	0.75	0.7	

材木座町屋遺跡C区

図版No.	種　別	法　量(cm)			備考	図版No.	種　別	法　量(cm)			備考
1面											
図20-1	かわらけ				スス付着	図20-2	褐釉　壺				
図20-3	常滑　甕	7.3	4.1	3.0		図20-4	備前　擂鉢	(11.7)	−	(8.45)	
図20-5	手焙り	−	−	−		図20-6	手焙り	−	−	−	
図20-7	かわらけ	−	−	−		図20-8	かわらけ	−	−	−	
図20-9	かわらけ	(7.0)	(4.8)	(1.9)		図20-10	かわらけ	(7.8)	(5.1)	(1.9)	
図20-11	かわらけ	7.2	4.8	2.3		図20-12	かわらけ	(7.8)	4.9	2.1	スス付着
図20-13	かわらけ	(7.5)	(5.1)	(1.7)		図20-14	かわらけ	7.1	4.2	2.4	
図20-15	かわらけ	(7.8)	(4.8)	(2.1)		図20-16	かわらけ	(8.0)	(5.0)	(1.9)	
図20-17	かわらけ	(0.3)	(3.6)	(1.9)		図20-18	かわらけ	(6.8)	(4.4)	(2.0)	
図20-19	磨常滑	(6.8)	(4.1)	(2.1)		図20-20	銅銭	(8.8)	(5.2)	(2.4)	聖宋元宝
2面井戸1		(7.9)	(5.9)	1.35				−	−	−	
図22-21	かわらけ					図22-22	かわらけ				
図22-23	かわらけ	(7.1)	(4.4)	(2.1)		図22-24	かわらけ	7.2	5.5	1.9	
図22-25	かわらけ	7.7	5.6	1.6		図22-26	かわらけ	(7.2)	(5.0)	(1.9)	スス付着
図22-27	かわらけ	(7.5)	(5.6)	(1.6)	スス付着	図22-28	かわらけ	(12.5)	(7.5)	(3.4)	
図22-29	かわらけ	(12.2)	(7.2)	(3.6)	スス付着	図22-30	かわらけ	11.8	6.9	3.4	
図22-31	山茶　捏鉢	12.2	7.4	3.1		図22-32	常滑　甕	(12.2)	(7.2)	(3.5)	
図22-33	土製品　鋳型	(33.8)	−	(8.5)		図22-34	木製品　柄杓	(32.4)	−	(9.15)	
2面遺構		9.1	6.5	3.9				(10.9)	9.7	(9.4)	
図24-35	かわらけ					図24-36	かわらけ				
図24-37	かわらけ	7.5	9.4	1.9		図24-38	かわらけ	(12.6)	(9.0)	(3.4)	
図24-39	かわらけ	(13.3)	(7.3)	(3.8)		図24-40	常滑　壺	12.2	8.2	3.5	
図24-41	瀬戸　仏華瓶	7.0	5.8	1.4				(10.2)	−	(4.05)	
2面		−	7.3	(8.5)							
図25-42	白磁　小皿					図25-43	白磁　口兀皿				
図25-44	常滑　甕	(6.9)	−	(1.2)		図25-45	常滑　無頸壺	−	6.2	(1.1)	
図25-46	山茶　捏ね鉢	−	−	−		図25-47	山茶　捏ね鉢	−	−	−	
図25-48	常滑　捏ね鉢	(28.0)	−	(8.4)		図25-49	かわらけ	(35.0)	−	(10.1)	
図25-50	かわらけ	(32.9)	−	(12.5)		図25-51	かわらけ	(6.8)	(4.0)	(1.9)	
図25-52	かわらけ	(7.3)	(5.4)	(1.6)		図25-53	かわらけ	7.1	4.4	2.1	
図25-54	かわらけ	(7.4)	(4.6)	(2.0)		図25-55	かわらけ	(7.8)	(6.0)	(2.2)	
図25-56	かわらけ	(8.0)	(6.9)	(1.4)		図25-57	かわらけ	7.1	5.5	5.6	
図25-58	かわらけ	(7.7)	(5.0)	(1.6)		図25-59	かわらけ	(7.6)	(5.4)	(1.8)	
図25-60	かわらけ	(7.8)	(4.6)	(1.6)		図25-61	かわらけ	(8.0)	(5.8)	(1.8)	
図25-62	かわらけ	(7.8)	(5.7)	(1.8)		図25-63	かわらけ	7.5	5.6	1.8	
図25-64	かわらけ	(8.0)	(5.6)	(1.8)		図25-65	かわらけ	(8.0)	(4.8)	(1.9)	
図25-66	かわらけ	(7.8)	(5.4)	(1.8)		図25-67	かわらけ	8.2	5.3	2.0	
図25-68	かわらけ	(8.0)	(6.0)	(2.1)		図25-69	かわらけ	(10.4)	(7.0)	(2.8)	
図25-70	かわらけ	11.8	7.5	3.0		図25-71	かわらけ	(10.9)	(7.2)	(3.4)	スス付着
図25-72	かわらけ	(12.2)	(6.9)	(3.7)		図25-73	かわらけ	13.9	7.4	4.2	
図26-74	かわらけ	13.7	7.4	3.9		図26-75	かわらけ	13.5	7.4	3.8	手捏ね
図26-76	磨り常滑	12.0	9.4	3.2		図26-77	土錘	(13.6)	(8.2)	3.5	
図26-78	瓦	(7.9)	(5.9)	1.35		図26-79	瓦	5.8	2.25	2.15	
図26-80	骨製品	−	−	−		図26-81	土師器　甕	−	−	−	
図26-82	須恵器　壺	(6.75)	2.0	0.7		図26-83	須恵器　甕	−	(5.6)	(3.1)	
3面遺構		−	−	−				−	−	−	
図28-84	かわらけ				手捏ね	図28-85	漆器　皿				
図28-86	かわらけ	(13.6)	(8.6)	(3.2)	穿孔			(9.8)	(7.0)	(2.15)	

材木座町屋遺跡D区

図版No.	種　別	法　量(cm)			備考	図版No.	種　別	法　量(cm)			備考
1面											
図30-1	青白磁　合子	(7.0)	(5.0)	1.85		図30-2	瀬戸　卸皿	−	−	−	
図30-3	磨常滑	8.5	(5.7)	1.2		図30-4	土製品	6.3	(5.5)	2.0	
図30-5	釘	4.3	0.5	0.45		図30-6	釘	4.55	0.55	0.6	

材木座町屋遺跡D区

図版No	種　別	法　量(cm)			備考	図版No	種　別	法　量(cm)			備考
1面											
図30-7	火打金	8.4	3.0	1.0		図30-8	温石	(6.3)	5.0	1.0	
図30-9	砥石	(4.8)	3.2	1.35		図30-10	砥石	(5.2)	3.5	2.2	
図30-11	銅銭	—	—	—	天禧通寶						
2面遺構											
図32-12	かわらけ	(6.2)	(1.3)	(4.6)		図32-13	かわらけ	(9.3)	(7.6)	(2.1)	
図32-14	釘	4.65	0.8	0.75		図32-15	かわらけ	(8.0)	(6.8)	(1.5)	スス付着
図32-16	常滑　捏ね鉢	(31.4)	(17.2)	(11.9)		図32-17	かわらけ	(13.2)	(7.9)	(3.5)	
2面											
図32-18	手焙り	—	—	—		図32-19	常滑　甕	—	—	—	
図32-20	かわらけ	7.9	4.4	2.3		図32-21	かわらけ	8.5	5.2	2.2	
図32-22	かわらけ	(7.6)	(4.6)	(2.3)		図32-23	かわらけ	(8.6)	(1.8)	(6.0)	
図32-24	かわらけ	(8.6)	(6.3)	1.4	スス付着	図32-25	かわらけ	11.1	7.5	3.2	
図32-26	かわらけ	(12.6)	(7.2)	3.3		図32-27	かわらけ	(12.2)	(6.2)	(3.6)	
図32-28	滑石　鍋	(23.2)	—	(4.65)		図32-29	砥石	(4.1)	4.0	0.6	
図32-30	釘	6.55	1.2	0.9		図32-31	釘	4.8	0.8	0.9	
図32-32	須恵器　甕	—	—	—		図32-33	銅銭	—	—	—	政和通宝
図32-34	銅銭	—	—	—	太平通宝	図32-35	銅銭	—	—	—	祥符通宝
図32-36	銅銭	—	—	—	開元通宝	図32-37	銅銭	—	—	—	開元通宝
図32-38	銅銭	—	—	—	熙寧通宝	図32-39	銅銭	—	—	—	熙寧通宝
図32-40	銅銭	—	—	—	嘉祐通宝						
3面遺構											
図34-41	かわらけ	7.1	5.0	0.9	穿孔	図34-42	かわらけ	(14.8)	(9.5)	(3.3)	手捏ね
図34-43	ロクロ土師碗	(15.5)	—	—		図34-44	土師器　碗	(18.3)	—	—	内外面赤彩
図34-45	須恵器　甕	—	—	—		図34-46	瓦	(14.3)	(8.0)	—	
3面											
図34-47	かわらけ	13.8	9.4	3.7		図34-48	褐釉　壺	—	—	—	
図34-49	緑釉　盤		—	—		図34-50	亀山　甕	—	—	—	
図34-51	常滑　甕	(36.4)	—	(8.2)		図34-52	かわらけ	(8.6)	(6.3)	(2.3)	
図34-53	かわらけ	(8.3)	(5.8)	(1.9)	スス付着	図34-54	かわらけ	(9.1)	(6.9)	(1.5)	
図34-55	かわらけ	(9.1)	(7.6)	(1.8)	手捏ね	図34-56	滑石　鍋	(23.2)	—	(4.65)	
図34-57	土錘	3.9	1.5	1.35		図34-58	銅銭	—	—	—	熙寧通宝
4面遺構											
図36-59	ロクロ土師坏	(12.4)	—	—		図36-60	かわらけ	(14.8)	(9.5)	(3.3)	手捏ね
図36-61	瓦	—	—	—		図36-62	かわらけ	(12.9)	(7.2)	(2.9)	
図36-63	かわらけ	(12.5)	—	(3.2)		図36-64	かわらけ	(9.3)	(5.2)	(2.3)	
図36-65	かわらけ	(9.5)	8.7	(1.7)		図36-66	かわらけ	(14.0)	(9.5)	(1.7)	手捏ね
図36-67	かわらけ	(12.9)	(7.7)	(3.2)		図36-68	須恵器　坏	(12.2)	—	(1.6)	
図36-69	土師　無頸壺	—	—	(8.2)							
5面											
図38-70	かわらけ	(8.5)	(5.6)	(1.8)		図38-71	かわらけ	(9.7)	(6.2)	(1.8)	手捏ね
図38-72	漆椀	15.0	8.2	5.4							

＊（　）内は現存、もしくは復元実測

第4章　まとめ

調査を行った4地点は、非常に近い位置関係にありながらその検出遺構の様相には異なる点が多い。全章でも述べたが、これは逆に4地点にわたって広がる、明確で規模の大きな版築面や遺構が無い事を示しているように思っている。とすれば、検出された遺構群は寺院や大形の屋敷である可能性は低い事になる。

本章では4地点の調査結果を整理して、開発と年代、遺構の性格などについて、周辺の調査結果も合わせて若干のまとめを行う。

第1節　いわゆる中世地山について

4地点の調査では暗褐色粘質土（中世地山）あるいはそれに類似する堆積土が確認された。しかし、検出された4地点の暗褐色粘質土で所謂中世地山と認定出来るのはB地点で検出された層で(註1)、他の地点で確認された地山は「似て非なる」土層であった。この堆積には本地点が弁ヶ谷開口部の東山裾に位置する事から、東から西へまた北から南へと下がる旧地形が関係していると思われる。

いずれにしても、中世の地山である暗褐色粘質土はB区でしか確認できなかった。調査初期のA区では類似する土層を中世地山（標準堆積4層）と認定したが、結果的には間違いであった事が判明した。実際にはこの層以上とそれ以下の堆積が大きく変化している。変化は、細部を省けば、以下の2点に集約できる。

1　茶褐色の土丹をほとんど含まず、青灰色の土丹細粒を含むようになる。(標準5層)

2　土色が灰色をおび、砂質になる。(標準6層)

この変化は、PL10に掲載したD区のセクション写真を見ると明瞭になる。この堆積は平成16年秋に調査した、A地点の北側の市道を挟んだ北の地点でも確認されている。(註2)そのため下部の掘り下げを行わなかったA区も同様の堆積であったと推測できる。

とすると、鎌倉市街地で一般的な中世基盤層である暗褐色粘質土は、最も山裾に近いB区にのみあって、それが急激にA区からD区に向かって下がり、その後確認した標準5層から7層が堆積したものと考えたい。遺物は標準5層の暗灰褐色粘質土には中世以前から中世初頭の土器細片が混じるが、標準6層の灰褐色砂質土ではごく僅かの土器細片しか混じらない。標準7層の黒灰褐色弱粘質土からは遺物が確認できなかった。

本地点周辺の中世地山は、今回の調査結果から標準6層の「灰褐色砂質土」と考えておきたい。灰褐色の色調については、見る人の主観に因る部分が多くこれが適切な表現とは思わないが、一応の目安として「中世遺物を含まない砂質土」である。上面の海抜は4,30m前後である。

第2節　調査地点の開発痕跡

調査した4地点の堆積土をみると、各地点で共通して変化するのは標準堆積の2層と3層の間（2回目)、標準土層4層と5層の間（1回目）の2回である。おそらくこの変化が、周辺が広く開発（あるいは使用）された痕跡であろう。

1回目の開発は海抜4,50m前後の標準堆積4層の堆積前に行われている。堆積土を観察すると4層は各地点ともほぼ同一レベルで、この後に堆積する土層中からは鎌倉では一般的な茶褐色の土丹塊が混じるようになるが、5層以下の土層には青灰色の土丹細粒しか含まれない。4層堆積前後から周辺での山裾開発などが同時に行われ、土丹が使用され始めた可能性が高い。

2回目の変化は中世遺物の遺構・包含層を削平するように、標準堆積2層の堆積前に行われている。一般的にこの土層は「近世耕作土」と言われているが、実際には近世から近代にかけての耕作土であり、神奈川県内や鎌倉市内の遺跡調査でも必ずと言ってよいほどに確認されている。この変化は、2層堆積以前に大規模な耕地造成が行われた事を裏付けている。4地点のうちより谷内に近いA区とB区では標準2層は海抜5,30m前後以上に、より海に近いC区とD区では4,90mから5,10m以上に堆積し、やや南側の2つの調査区が30cm程低くなっている。これは耕作されていた区画の違いなどに因るものであろうからさほど問題ではない。むしろこの土層が確認できない地点は、現代の土地利用者がより深くまで削平工事を行った事の証でもある。B地点で検出された井戸の出土遺物を包含する土層はA地点、B地点の道路を挟んだ弁ヶ谷遺跡の調査（註2）では海抜5.30m～6,30mの間から4乃至5枚の生活面とともに確認されている。これらの堆積土は、標準2層の堆積に先行する削平等ですでに失われていると考えられる。

第3節　各地点検出遺構の関係

調査した4地点を合わせてみると、最も古い1期遺構面と言えるのはD区5面で検出された小規模な柱穴群で、C区3面の大形柱穴2口がほぼ同一年代の遺構と考えられる。両者は標準6層の灰褐色砂質土上面で確認されている。海抜は4,10m～4,20m程を測る。小面積の確認であり意向の配置まで言えないが、大形柱穴は総柱建物になる可能性がある事を指摘しておきたい。

次に営まれる2期遺構面は標準堆積4層上面で検出されたA地点4面の柱穴と土坑、C地点2面の井戸2、D地点4面柱穴と土坑が同一年代に近い遺構群と考えられる。標準堆積4層上面で検出された遺構群が相当するのだが、B地点の2面検出遺構群は同一年代とは言い切れないので、一応省いておく。海抜レベルはB地点がやや高く海抜5m前後、A地点では海抜4,6m、C地点では海抜4,5m、D地点では4,5mで確認されている。井戸はあるものの建物や区画などは全く復元できない。遺構は疎らである。3期遺構群には、各地点の検出面の様相に異なる部分が多く、各地点検出面の関係を十分に把握できなかったので、本来遺構確認面であるがA地点、B地点1面検出以降の一部を除くすべての面・遺構を含めた。海抜レベルはおよそ4,60m～5,10m前後である。複数時期にわたるであろう様相を見ると、A区とC区に木組み井戸があり、C区とD区には関係が明確ではないものの土丹や鎌倉石を使った道路あるいは区画などの痕跡が残っている。建物は礎石であったり礎盤を使っていたり様々であるが、大きな建物を推定する事は難しい。しかし生活痕跡は豊富で、賑やかな生活が営まれていた事が推定できる。

4期遺構群はB区の井戸とそれを壊す土坑が含まれる。他の地点では本期に含まれる遺構は確認されていない。確認したレベルは5,30m前後であるが、このレベル以上に存在していたであろう本来の生活面は失われている。そのため本期の遺構を概観してもB区に井戸が1基あるだけである。

第４節　各遺構群の年代

出土遺物をみると、１期遺構群では器肉が比較的厚い手捏ねかわらけや（図示できない小片の）渥美甕片や中世以前の土器・須恵器片等と黒色系漆塗りの椀、ロクロ土師器と思われる土器などが出土している。年代は、まず13世紀前半の遺物は出土しているが数が少なく小片である事、同時代の遺構が明確でない事等を考慮すると、（中世以前は別にして）13世紀前半あるいはさらに遡って12世紀末頃を考えたい。

２期遺構群ではかわらけは比較的薄手の皿が多く、手捏ねかわらけは出土するものの数量は極めて少ない。図示できないが画花文青磁碗片や渥美甕片なども出土している。検出面は「疑似中世地山」であるが、年代は13世紀中頃（註３）を考えたい。

３期遺構群は鎌倉が都市として賑わった頃の遺構群であり、年代は13世紀後半から14世紀前半頃を考えたい。出土遺物は種類が豊富になっている。

４期遺構群はおおかたの遺構群は削平で失われて井戸１基しかないが、北側の調査地点他では本期と同じかわらけを伴う遺構群が広く展開している事が確認されている。かわらけは直線的な側壁を持ち、比較的厚い器肉が口縁部に向かってやや薄くなり端部は外反する器形で、胎土は戦国期のものほど粉質ではない。最近の調査成果では瀬戸後期様式に伴って出土する事が確認されている。（註４）これらの事から、本期の年代は14世紀後半から15世紀前半頃を考えたい。

以上、調査した4地点の成果を簡単にまとめたが、細かな中世の情景を復元するまでには至らなかった。本地点を含む材木座地域の中世様相は、由比ガ浜地域に比較するとまだまだ曖昧である。しかし、浜地（西浜）があり滑川河口部分には潟湖が推定され、貿易港の和賀江島もある等複雑な生活様相を呈していたであろう事は推測できる。今後は調査資料の蓄積を進めて、立地する中世地山の様相などから解明を進めていく必要がある。

註

註１　鎌倉では市街地平坦部で確認される暗褐色粘質土（中世地山）であるが、これに極似する谷内の堆積土は少量の拳大土丹や土丹細粒を含み、かわらけ焼成用に採掘されるものの、いわゆる中世の地山ではない。本地点の堆積土もその可能性を残している。

註２　平成16年９月末から11月初めまで調査。鎌倉市弁ヶ谷遺跡（材木座六丁目643番地点）の調査を担当したため堆積土を実見している。

註３　個人的には京都系手捏ねかわらけの終末を13世紀第二四半期の後半頃までと考えているので、変化もその頃と考えている。

註４　従来のかわらけ編年で14世紀から15世紀に比定されている器形と異なる点が多いが、少なくと15世紀前半の形式とした認識されるべき器形として考えている。

1．材木座４丁目道標

2．補陀洛寺道標

3．A地点付近旧地形
（北東から）

PL 2

1．A・B地点近景（北から）

3．A地点Ⅱ区1面南全景（北東から）

2．A地点Ⅰ区1面全景（南西から）

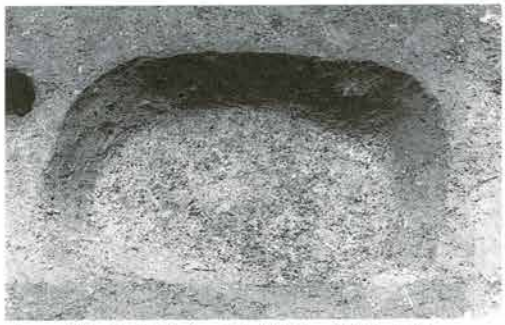
4．A地点Ⅱ区2面全景（北東から）

5．A地点Ⅰ区2面かわらけ出土状況
（南から）

6．A地点Ⅱ区2面土坑4かわうけ出土状況
（北西から）

1．A地点Ⅱ区３面全景（西から）

2．A地点Ⅱ区３面
土丹範囲検出状況
（東から）



3．A地点Ⅱ区３面土坑10（東から）

4．A地点Ⅰ区西壁かわらけ出土状況
（東から）

5．A地点Ⅰ区北壁セクション（南西から）

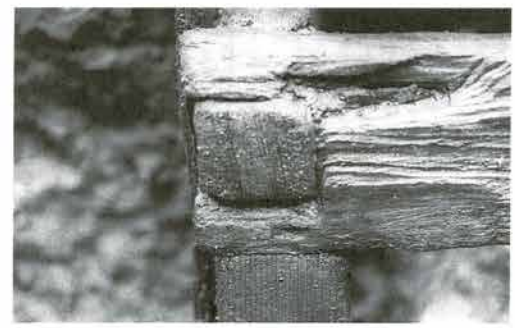
6．A地点Ⅱ区東壁セクション（北西から）

PL 4

1．A地点Ⅰ区３面井戸２木組み検出状況（南西から）

2．A地点Ⅰ区３面井戸２（南西から）

3．A地点Ⅰ区３面井戸２木組み検出状況（東から）



4．A地点Ⅰ区３面井戸２木組み検出状況（南西から）

5．.B地点１面全景（北東から）

6．B地点１面南東コーナー鎌倉石検出状況（北から）

7．B地点１面土坑１（北から）

8．B地点１面土坑２（東から）

1．B地点２面全景（北東から）

2．B地点西壁セクション（東から）

3．B地点２面直上かわらけ出土状況（東から）

4．B地点２面土坑３・９（北東から）

5．B地点２面ピット10（北から）

6．B地点１面井戸１（南西から）

7．B地点１面井戸１（北から）

8．B地点１面井戸１隅柱検出状況（北から）

PL 6

1．C地点Ⅰ区1面全景（北東から）

2．C地点Ⅱ区1面全景（北から）

3．C地点Ⅰ区2面全景（南東から）

4．C地点Ⅰ区2面井戸1（南東から）

5．C地点Ⅰ区2面井戸1（北東から）

6．C地点Ⅰ区2面井戸1木組み検出状況（南から）

7．C地点Ⅰ区2面井戸1木組み検出状況（東から）

8．C地点Ⅰ区東壁セクション（北西から）

1．C地点Ⅰ区２面ピット18・19
（南西から）

2．C地点Ⅰ区２面ピット18（南から）

3．C地点Ⅰ区２面ピット19（南東から）

4．C地点Ⅱ区２面全景（南西から）

5．C地点Ⅱ区２面井戸２（北西から）

6．C地点Ⅱ区２面井戸２土丹検出状況
（南西から）

7．C地点Ⅱ区２面井戸２馬の頭蓋骨出土状況
（東から）

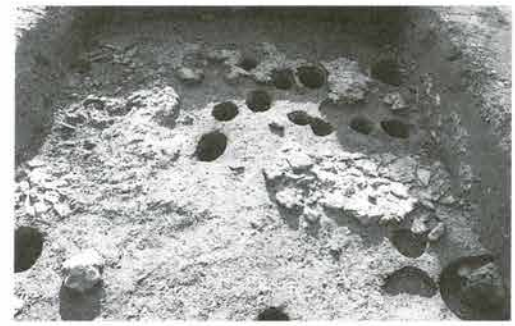
8．C地点Ⅱ区の２面土坑11佛仏華出土状況
（南西から）

PL 8

1．C地点Ⅱ区３面ピット27・28
（北東から）

2．C地点Ⅱ区３面ピット27（東から）

3．D地点Ⅰ区１面全景（北東から）



4．D地点Ⅰ区２面全景（北東から）

5．D地点Ⅰ区２面ピット24・25
（南西から）

6．D地点Ⅱ区２面全景（北東から）

7．D地点Ⅱ区２面銭出土状況（南から）

8．D地点Ⅰ区３面全景（北西から）

1．D地点Ⅱ区３面全景（北東から）

2．D地点Ⅱ区３面土丹範囲検出状況（南西から）

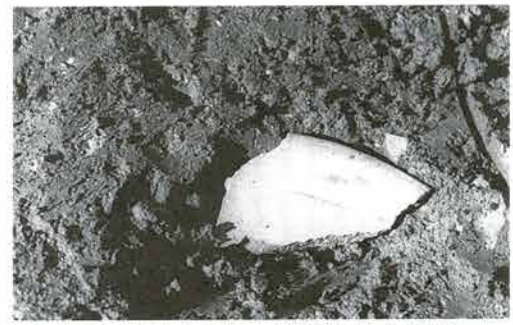
3．D地点Ⅱ区３面ピット63かわらけ出土状況（北から）

4．D地点Ⅱ区３面ピット76（南東から）

5．D地点Ⅰ区４面全景（北西から）

6．D地点Ⅱ区４面全景（南東から）

7．D地点Ⅰ区４面ピット77（南東から）



8．D地点Ⅱ区４面古代遺物出土状況（東から）

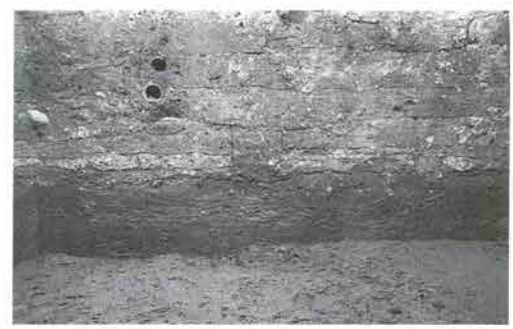
1．D地点Ⅱ区５面全景（南東から）

2．D地点Ⅱ区５面漆器出土状況（北から）

3．D地点Ⅰ区５面ピット117（南から）

4．D地点Ⅱ区西壁山茶碗窯糸捏ね鉢
出土状況（東～）

5．D地点Ⅱ区東壁セクション（西から）



6．D地点Ⅱ区南壁セクション（北から）

7．D地点Ⅰ区西壁セクション（東から）

8．D地点Ⅰ区南壁セクション（北から）

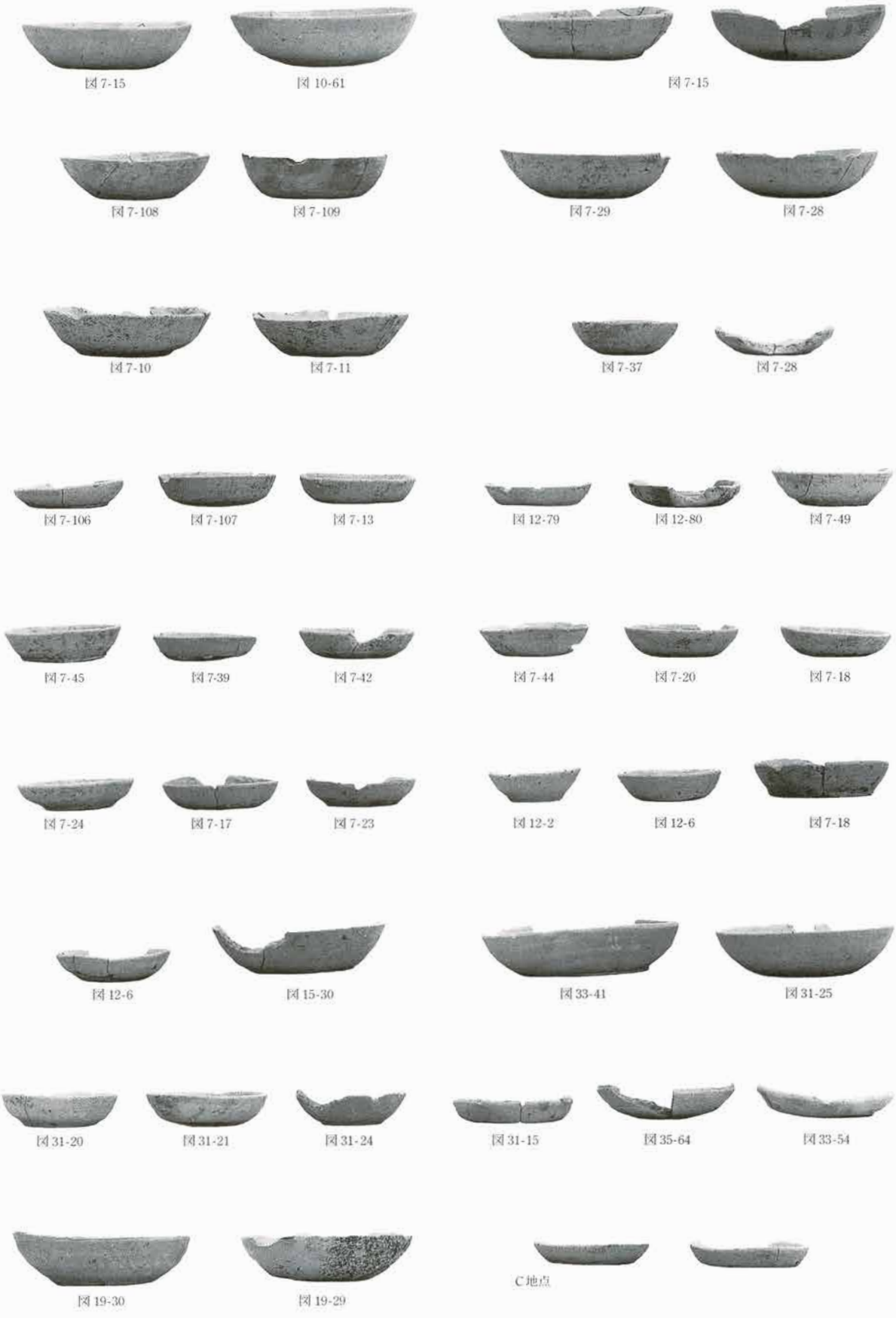


図7-15
図10-61
図7-15
図7-108
図7-109
図7-29
図7-28
図7-10
図7-11
図7-37
図7-28
図7-106
図7-107
図7-13
図12-79
図12-80
図7-49
図7-45
図7-39
図7-42
図7-44
図7-20
図7-18
図7-24
図7-17
図7-23
図12-2
図12-6
図7-18
図12-6
図15-30
図33-41
図31-25
図31-20
図31-21
図31-24
図31-15
図35-64
図33-54
図19-30
図19-29
C地点

出土遺物(1)

図 22-73

図 22-71

図 19-8

図 19-11

図 19-7

図 21-37

図 22-72

図 22-65

図 19-23

図 19-24

図 23-74

図 21-38

図 23-75

図 35-59

図 21-35

図 17-1

図 22-51

図 22-60

図 22-56

図 22-61

図 17-12

図 15-25

図 15-26

図 15-28

常滑

図 15-27

常滑

図 15-32

図 12-11

B地点

図 10-63

図 10-64

図 10-62

A地点

図 5-4

図 10-65

図 5-5

出土遺物(2)

図5-4

図10-65

図5-21

図5-8

図7-33

図10-59

図5-68

図5-69

図10-67

A地点

図10-71

図7-34

図10-70

図23-82

図21-40

常鉢

図21-41

図17-2

図22-42

図22-43

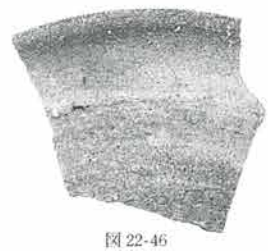


図22-46

図22-48

図17-5

図17-6

図21-40

出土遺物(3)

図 34-46

図 30-4

図 32-16

C地点

図 34-51

図 34-50

図 34-56

図 30-3

図 30-1

黄釉

図 32-32

図 34-57

図 34-48

図 34-49

図 36-68

図 32-29

図 30-9

図 30-7

図 32-30

図 32-14

出土遺物(4)

大倉幕府跡（No.253）

雪ノ下三丁目701番14地点
雪ノ下三丁目701番３地点
雪ノ下三丁目701番１地点

例　　言

1．本報は、鎌倉市雪ノ下三丁目701番14・同701番３・同701番１の３地点における、個人専用住宅建設に係る埋蔵文化財緊急発掘調査の報告である。

2．調査した３地点の本文中における呼称と整理上の略称はつぎのとおり。

調査地点	略称	本報中の呼称
雪ノ下三丁目701番14	OIS	「第１地点」
雪ノ下三丁目701番３	OY3701	「第２地点」
雪ノ下三丁目701番１	OY3701ｂ	「第３地点」

3．調査期間

雪ノ下三丁目701番14地点：平成14年７月29日～同年９月６日

雪ノ下三丁目701番３地点：平成14年11月16日～平成15年２月28日

雪ノ下三丁目701番１地点：平成15年７月24日～同年８月８日

4．調査対象面積

雪ノ下三丁目701番14地点：45㎡

雪ノ下三丁目701番３地点：81㎡

雪ノ下三丁目701番１地点：16㎡

5．調査体制

雪ノ下三丁目701番14地点

担　当　者　滝澤晶子
調査補助員　安達澄代・高橋拓也
調査協力者　河原龍雄・杉浦永章（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

雪ノ下三丁目701番３地点

担　当　者　馬淵和雄
調　査　員　鍛治屋勝二・伊丹まどか
調査補助員　松原康子・石元道子・鈴木弘太
調査協力者　柴崎英輔・河原龍雄・大戸迫猛・沼上三代治・吉本脩三・杉浦永章・小口照男・天野隆男（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

雪ノ下三丁目701番１地点

担　当　者　馬淵和雄
調　査　員　鍛治屋勝二
調査補助員　松原康子・沖元道・吉田智哉

6．本報作成分担

雪ノ下三丁目701番14地点整理

遺構図版作成　滝澤
遺物図版作成　河内令子・坂倉美恵子
写真撮影　滝澤

雪ノ下三丁目701番３地点・雪ノ下三丁目701番１地点整理

遺構図版作成　鍛治屋
遺物図版作成　鍛治屋・伊丹・松原・鈴木・沖元・吉田・川又里枝・河内・坂倉・宇賀神雅子
同観察表作成　松原
写真撮影　松原・鈴木
原稿執筆
第１章　馬淵
第２章第１節　滝澤
第２節　馬淵
第３章　滝澤
第４章第１節　馬淵・鍛治屋
第２節　馬淵・鍛治屋
第３節　鍛治屋・松原・鈴木茂（㈱パレオ・ラボ）
第５章　鍛治屋
第６章第１節　滝澤
第２節　馬淵
編集・総括　馬淵

凡　　例

1．図中の方位はすべて座標北を示す。

2．引用・参考文献は第６章末尾に一括した。

3．元号年および史料中の条文を示す日付は漢数字を、地の文中での日付は算用数字を用いた。

4．第３章挿図縮尺は次のとおり。

遺　構　図　１／40（水糸高は海抜高を示す）
遺物実測図　１／３・１／６

目　　次

第１章　遺跡と調査地点の概観 ……205
第２章　調査の概要 ……212
　第１節　第１地点の調査概要 ……212
　第２節　第２・第３地点の調査概要 ……213
第３章　第１地点の調査 ……215
　第１節　概　要 ……215
　第２節　各　説 ……216
第４章　第２地点の調査 ……251
　第１節　概　要 ……251
　第２節　各　説 ……257
　第３節　自然遺体 ……333
　第４節　花粉化石分析 ……337
第５章　第３地点の調査 ……343
第６章　まとめと総括 ……369
　第１節　第１地点調査のまとめ ……369
　第２節　第２・第３地点調査のまとめ ……370

挿 図 目 次

図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡 ……206
図２　調査地点位置図 ……207
図３　明治15年ごろの大倉幕府跡一帯 ……208
図４　太田1992による第二期大倉御所復元図 ……209
図５　調査区座標図・第２地点調査範囲変遷図 ……210
図６　土層断面図 ……215
図７　１面 ……216
図８　２面 ……217
図９　３面 ……217
図10　４面 ……218
図11　５面 ……219
図12　６面 ……219
図13　７面 ……220
図14　８面 ……220
図15　９面 ……221
図16　10面 ……222
図17　11面 ……222
図18　表土層・１面出土遺物 ……224
図19　２面出土遺物(1) ……225
図20　２面出土遺物(2) ……226
図21　３面出土遺物(1) ……229
図22　３面出土遺物(2) ……330
図23　３面出土遺物(3) ……231
図24　４面出土遺物(1) ……232
図25　４面出土遺物(2) ……234
図26　４面出土遺物(3) ……236
図27　４面出土遺物(4) ……237
図28　４面出土遺物(5) ……238
図29　４面出土遺物(6) ……239
図30　４面建物1出土遺物……240
図31　５面出土遺物(1) ……241
図32　５面出土遺物(2) ……243
図33　５面出土遺物(3) ……244
図34　５面出土遺物(4) ……245
図35　５面出土遺物(5) ……246
図36　６面・６面溝１・７面・９面出土遺物 ……247
図37　10面出土遺物(1) ……249
図38　10面(2)・11面出土遺物 ……250
図39　調査区東壁土層図 ……252
図40　調査区南壁土層図 ……253
図41　調査区西壁土層図 ……254
図42　調査区壁出土遺物 ……257
図43　１ａ・１ｂ面遺構全図 ……258
図44　土坑１・溝１、同出土遺物(1) ……259
図45　溝1出土遺物(2)……260
図46　焼成遺構1・2・p.21・p.190、同出土遺物 …261
図47　１面焼成遺構１・２・３出土遺物 ……262
図48　焼成遺構３・４・５ ……263
図49　焼成遺構４・５出土遺物 ……264
図50　１面焼成遺構６～９、p.10・11、同出土遺物 …266
図51　焼成遺構７・８出土遺物 ……267
図52　１ａ面・土師器地行面・焼土・１ｂ面出土遺物…268
図53　１ｂ面遺構出土遺物 ……269
図54　２ａ面遺構全図 ……269
図55　２ａ面基壇状遺構１・溝２、同出土遺物 ……270
図56　２ａ面溝２裏込め出土遺物 ……271
図57　２ａ面出土遺物(1) ……272
図58　２ａ面出土遺物(2) ……273
図59　２ｂ面遺構全図 ……274
図60　２ｂ面建物１・２ ……275
図61　建物１・２ほか２ｂ面遺構出土遺物 ……276
図62　２ｂ面溝３・４、p.79、同出土遺物 ……277
図63　３面遺構全図（上段）、建物３・柱穴列１、同出土遺物 ……278
図64　３面溝状遺構 ……279
図65　３面出土遺物 ……279
図66　４面遺構全図 ……280
図67　建物４、溝５、落込み１・３、同出土遺物 …281
図68　落込み２、同出土遺物(1) ……282
図69　落込み２出土遺物(2) ……283
図70　落込み４・５、落込み４出土遺物 ……284
図71　落込み４・５出土遺物(2) ……285
図72　４面出土遺物 ……286
図73　５ａ面遺構全図、建物５・柱穴列２ ……287
図74　溝６、土坑13・14、同出土遺物、溝７・落込み６・同８・土坑12 ……288
図75　溝７・土坑12・落込み６・同８出土遺物 ……289
図76　落込み７、同出土遺物(1) ……290
図77　落込み７出土遺物(2) ……291
図78　落込み７出土遺物(3) ……292
図79　５ａ面出土遺物(1) ……293
図80　５ａ面出土遺物(2)、５ａ～５ｃ面出土遺物 …294
図81　５ｂ面遺構全図、建物６・柱列１・溝状遺構２、同出土遺物 ……295
図82　築地状遺構２・５ｂ面出土遺物 ……296
図83　５ｃ面遺構全図 ……297
図84　５ｃ面上層木器・貝だまり、落込み９、土坑28 ……298
図85　５ｃ面上層木器・貝だまり出土遺物(1) ……299
図86　５ｃ面上層木器・貝だまり出土遺物(2) ……300
図87　５ｃ面上層木器・貝だまり出土遺物(3) ……301
図88　５ｃ面上層木器・貝だまり出土遺物(4) ……302
図89　建物７・８、同出土遺物、柱穴列３ ……303
図90　５ｃ面上層遺物だまり、落込み９・土坑28出土遺物、土坑32 ……304
図91　５ｃ面出土遺物 ……305
図92　６面遺構全図，泥岩列・柱穴列４～６、同出土遺物 ……307
図93　溝状遺構３～５、土坑29～31・33～37、６面遺構出土遺物 ……309
図94　６面出土遺物(1) ……311
図95　６面出土遺物(2) ……312
図96　７ａ面遺構全図、７ａ面出土遺物、p.296出土遺物 ……313
図97　建物９・柱穴列７～10 ……314
図98　溝８・溝状遺構６・土坑19・20・38～41、同出土遺物 ……316
図99　７ｂ面遺構全図、同出土遺物、建物10、落込み９・10 ……317
図100　８面遺構全図、貝・遺物だまり、同出土遺物、落込み11・12(1) ……319
図101　落込み11・同12・８面出土遺物 ……320
図102　９面遺構全図、溝9、落込み13・14、土坑43・同出土遺物 ……321
図103　溝９・落込み13・同14出土遺物 ……322
図104　９面出土遺物(1) ……323
図105　９面出土遺物(2)、９～10ａ面出土遺物 ……324
図106　10ａ面遺構全図、柱穴列11・同出土遺物、溝10、落込み15 ……325
図107　10ａ面遺構・10a面出土遺物……326
図108　10ｂ面遺構全図・柱穴列12・溝12、同出土遺物 ……328
図109　溝11・落込み16・土坑45・p.326、同出土遺物、10ｂ面出土遺物 ……330
図110　10ｃ面遺構全図・土坑46～48、同出土遺物 …331
図111　最終深掘り調査全体図 ……332

図112 中世以前の遺物 ……332
図113 採集遺物 ……333
図114 調査区土層断面図（北壁と西壁部分）と
資料採取層準 ……337
図115 大倉幕府跡の主要花粉化石分布図 ……339
図116 第３地点遺構全図（右下）・第２地点との
位置関係図 ……343
図117 １面 ……344
図118 １面出土遺物 ……345
図119 遺構変遷図(1) ……371
図120 遺構変遷図(2) ……374

図 版 目 次

図版1-1 調査地点鳥瞰 ……380
1-2 調査地点遠景 南から……380
1-3 調査地点近景 ……380
図版2-1 第1地点 1面 北から……381
2-2 第1地点 2面 北から……381
2-3 第1地点 3面 西から……381
2-4 第1地点 4面覆土 土丹加工品 ……381
2-5 第1地点 4面 西から……381
2-6 第1地点 4面建物1 西から ……381
2-7 第1地点 4面建物1 南から ……381
2-8 第1地点 4面遺物出土状況 南から……381
図版3-1 第1地点 4面出土漆器 ……382
3-2 第1地点 同上内容物……382
3-3 第1地点 5面 西から ……382
3-4 第1地点 6面（溝1）西から……382
3-5 第1地点 7面（P4・5）西から ……382
3-6 第1地点 8面（P6～12）西から ……382
3-7 第1地点 9面 西から ……382
3-8 第1地点 10面 西から……382
3-9 第1地点 11面（中世地山）南から……382
図版４ 第1地点出土遺物（１）……383
図版５ 第1地点出土遺物（２）……384
図版６ 第1地点出土遺物（３）……385
図版７ 第1地点出土遺物（４）……386
図版８ 第1地点出土遺物（５）……387
図版9-1 第2地点 Ⅱ区1面溝1 西から ……388
9-2 第2地点 Ⅱ区1a面全景 東から ……388
9-3 第2地点 Ⅰ区1a面焼成遺構1･2 東から…388
9-4 第2地点 Ⅱ区1a面焼成遺構1･2 南から…388
図版10-1 第2地点 Ⅰ区1a面焼成遺構4･5 西から…389
10-2 第2地点 焼成遺構4･5中の焼石 西から…389
10-3 第2地点 Ⅰ区1b面全景 西から ……389
10-4 第2地点 Ⅰ区1b面焼成遺構3 南から …389
10-5 第2地点 Ⅰ区1b面焼成遺構4･5 西から…389
10-6 第2地点 Ⅰ区1b面ｐ.10･11 北から ……389
10-7 第2地点 Ⅰ区2a面全景 西から ……389
10-8 第2地点 Ⅱ区2a面全景 東から ……389
図版11-1 第2地点 Ⅱ区2a面溝2内土師器集中部 …390
11-2 第2地点 Ⅱ区2面全景 東から……390
11-3 第2地点 Ⅰ区2b面全景 西から ……390
11-4 第2地点 Ⅰ区3面ｐ.79東側遺物溜り ……390
11-5 第2地点 Ⅱ区3面全景 東から……390
11-6 第2地点 Ⅰ区4面全景 西から……390
11-7 第2地点 Ⅰ区4面落込み2 西から ……390
11-8 第2地点 Ⅰ区4面溝5完掘状況……390
図版12-1 第2地点 Ⅰ区5a面全景 北から ……391
12-2 第2地点 Ⅱ区5a面全景 東から ……391
12-3 第2地点 Ⅰ区5a面土坑12 東から ……391
12-4 第2地点 Ⅱ区5a面落込み7 北から……391
12-5 第2地点 Ⅰ区5a面野沓出土状況……391
12-6 第2地点 Ⅱ区5a面板締染型板出土状況…391
12-7 第2地点 Ⅰ区5b面築地状遺構 西から …391
12-8 第2地点 Ⅱ区5b･5c面全景 南から ……391
図版13-1 第2地点 Ⅱ区5b面柱列1・側板 南西から
……392
図版13-2 第2地点 Ⅱ区5b面不明木製品出土状況…392
13-3 第2地点 Ⅱ区5c面上層全景 東から ……392
13-4 第2地点 Ⅱ区5c面上層木器貝溜り 北から
……392
13-5 第2地点 木器貝溜り（部分）……392
13-6 第2地点 Ⅱ区5c面上層木器貝溜り 東から
……392
13-7 第2地点 Ⅱ区5c面 物差出土状況……392
13-8 第2地点 Ⅱ区5c面 折敷等出土状況……392
図版14-1 第2地点Ⅱ区5c面上層板草履芯出土状況…393
14-2 左板草履芯取上げ後（植物質部分）……393
14-3 第2地点 Ⅱ区5c面上層遺物溜り……393
14-4 第2地点 Ⅰ区5c面調査区南部分 南から…393
14-5 第2地点 Ⅱ区5c面土坑28 東から ……393
14-6 第2地点 Ⅰ区6面全景 北から……393
14-7 第2地点 Ⅱ区6面全景 北から……393
14-8 第2地点 Ⅱ区6面北西部 北から……393
図版15-1 第2地点 Ⅰ区7a面全景 南から ……394
15-2 第2地点 Ⅱ区7a面全景 西から ……394
15-3 第2地点 Ⅱ区7a面土坑41 東から ……394
15-4 第2地点 Ⅰ区6面 木偶状木製品出土状況
……394
15-5 第2地点 Ⅰ区7a面全景 南から ……394
15-6 第2地点 Ⅱ区7b面全景 南から ……394
15-7 第2地点 Ⅰ区8面全景 西から……394
15-8 第2地点 Ⅱ区8面全景 北から……394
図版16-1 第2地点 Ⅱ区8面貝・遺物溜り 東から…395
16-2 第2地点 8面青白磁小壺出土状況 ……395
16-3 第2地点 Ⅱ区9面全景 北から……395
16-4 第2地点 Ⅱ区10a面全景 南から……395
16-5 第2地点 Ⅰ区10b面全景 南から ……395
16-6 第2地点 Ⅱ区10b面溝11 北から ……395
16-7 第2地点 Ⅱ区10b面Ⅱ区1面全景 南から
……395
16-8 第2地点 10b面 子供用下駄出土状況 …395
図版17-1 第2地点 Ⅱ区10c面全景 北から……396
17-2 第2地点 Ⅱ区10c面土坑46 西から……396
17-3 第2地点 Ⅱ区10c面柱穴列13ｐ.1 西南から
……396
17-4 第2地点 Ⅰ区最終深掘り 南から ……396
17-5 第2地点 Ⅱ区最終深掘り 南から ……396
17-6 第2地点 Ⅱ区東側最終深掘り 西から …396
17-7 第2地点 Ⅰ区東壁上層土層断面……396
17-8 第2地点 Ⅱ区南側南壁土層断面……396
図版18 第2地点出土遺物（１）……397
図版19 第2地点出土遺物（２）……398
図版20 第2地点出土遺物（３）……399
図版21 第2地点出土遺物（４）……400
図版22-1 第3地点 1面全景 南から……401
22-2 第3地点 1面全景東から ……401
22-3 第3地点 1面土師器集中出土 東から……401
22-4 第3地点 同上 南から ……401
22-5 第3地点 遺物出土状況……401
22-6 第3地点 北壁土層断面……401
第3地点出土遺物……401

第１章　遺跡と調査地点の概観

１．位置と地勢

位　置　鶴岡八幡宮東側の雪ノ下三丁目から四丁目一帯にかけては、古来「大倉(大蔵)」と呼びならわされてきた。治承四年（1180）この地に置かれた鎌倉幕府最初の執務機関も、地名を冠されて「大倉御所」、あるいは「大倉幕府」と呼ばれた。鶴岡八幡宮から東に向かう「六浦道」（県道金沢鎌倉線）は、八幡宮東側の筋違橋交差点から関取橋までの約400mのあいだ子午線と直交方向で直線をなすが、大倉幕府は、その北側の広大な長方形（平行四辺形）区画であったとされる。長方形区画は南北220m、周囲には、東御門・南御門・西御門の旧地名が残り、幕府四辺の門の存在を示唆する。ただ、後論するように、この区画はのちの二ヶ所の幕府推定域に比較して広すぎることから、検討の余地があろう。

調査地点は六浦道から北に約150m、関取橋より北に延びる道（幕府比定地東辺）から西に約200mの位置にあって、方形区画のほぼ中央にあたる。また、頼朝持仏堂（法華堂）跡とされる場所に立つ彼の墓からは、南に120～130mほどである。今回近接した三地点を調査した。地番は鎌倉市雪ノ下三丁目701番14、同３、および同１で、調査日時の早いほうから、701番14を第１地点、同３・１をそれぞれ第２・第３地点と呼称する。なお、神奈川県遺跡台帳に「大倉幕府跡」（鎌倉市№253）として登録されている範囲は、後述する理由で、西側境界が幕府推定域より東に寄っている。

地　勢　大倉一帯は、東西約800m、南北500mの広い平坦地となっている。朝比奈から続く狭い谷間は、杉本の山塊を抜けてこの付近で一気にひろがり、鎌倉市街中心部の平野を形成し始める。この平野は、縄文中期ごろの海退以後乾陸化が進むなかで北の山裾が次第に退行し、またおそらく二階堂川や東御門川の開析も作用した結果、形成されたものである。上本進二によれば、弥生時代以降、広く谷底平野ないし山麓平野となっていった（上本2000）。近年の発掘調査で、少なくとも弥生時代以後、滑川の流路が現在とほぼ変わらぬ位置にあったことが確認されている（大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目567番7地点、馬淵2004a）。

基盤層は黒褐色粘質土、ないし粗い粒子の茶褐色砂質土である。基盤層上面での標高は調査地点付近で10.6m前後であり、縄文海進絶頂期の汀線が現在の標高で15～20mにあったとすれば、海面下だったことになる。現況地表面は標高13.5m前後と、長期にわたる整地層の積上げにより、基盤層より３m近くも高くなっている。平野の南縁は滑川の崖線で、この付近の現河床の標高は約５mなので、調査地点付近とは8.5mほどの比高差がある。

２．歴史的環境

縄文時代　この平野部には早くから人の往来があった。調査地点東約300mの荏柄天神社前では、かつて赤星直忠により、縄文前期諸磯ｂ式土器71点・中期阿玉台式土器14点・敲打痕のある石２点・獣骨などが、標高９m程度の「青黒い粘土層」の下から採集されている。赤星はまた、約200m西の横浜国大付属小学校内で、後期称名寺式土器２個体分を採集している。標高６m前後、砂層上面からだという（赤星1959）。さらにここから至近の距離にある鶴岡八幡宮境内研修道場地点からも前期から中期の土器が出土しているので（斉木ほか1983）、両地点の中間にある本地点付近でも縄文時代の遺物が採集される可能性は十分ある。しかし、先述のように、海進期の汀線最高位が現在の標高で15～20mにあったとすれば、

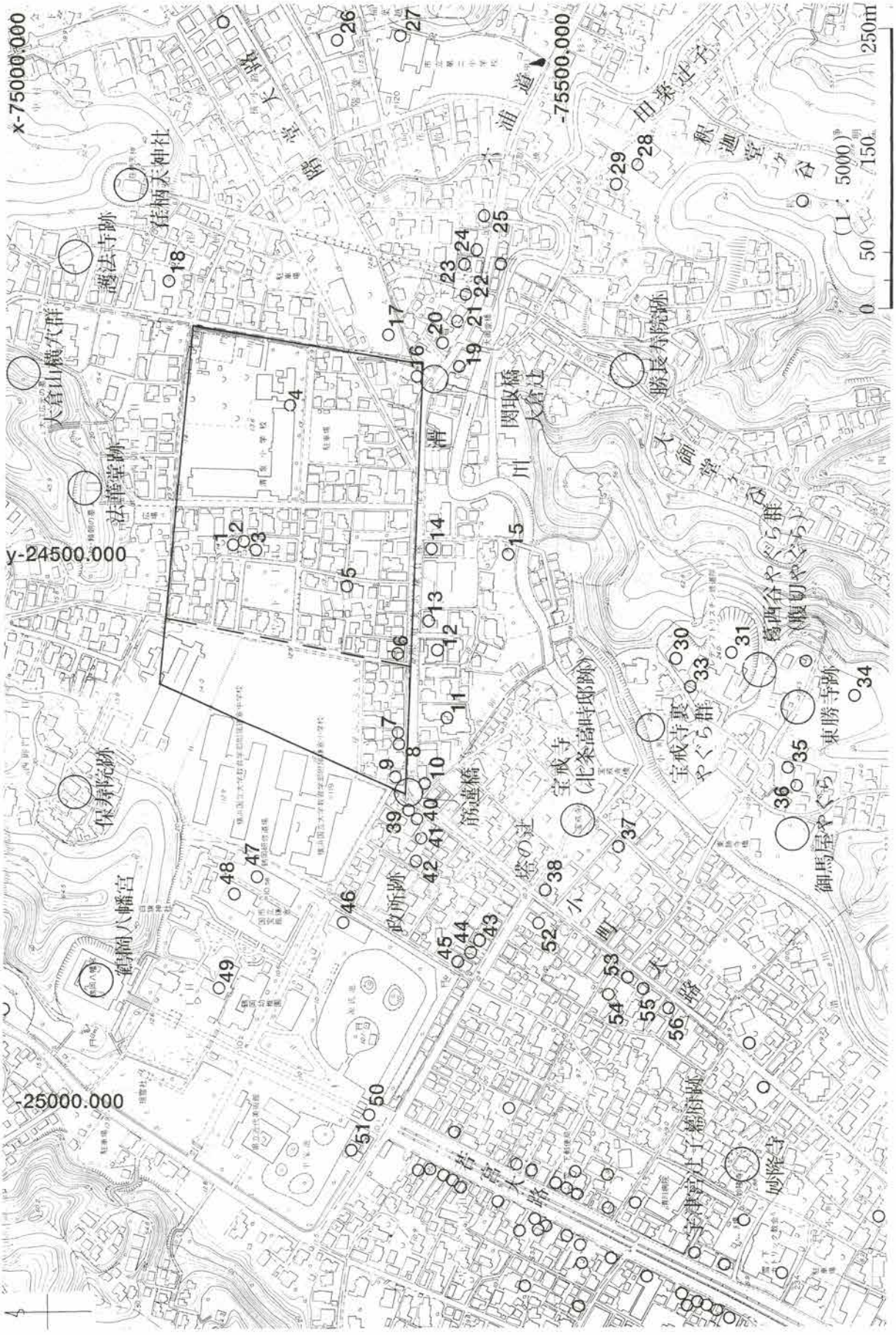


図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡（実線が大倉幕府本来の推定域、破線が遺跡指定範囲）

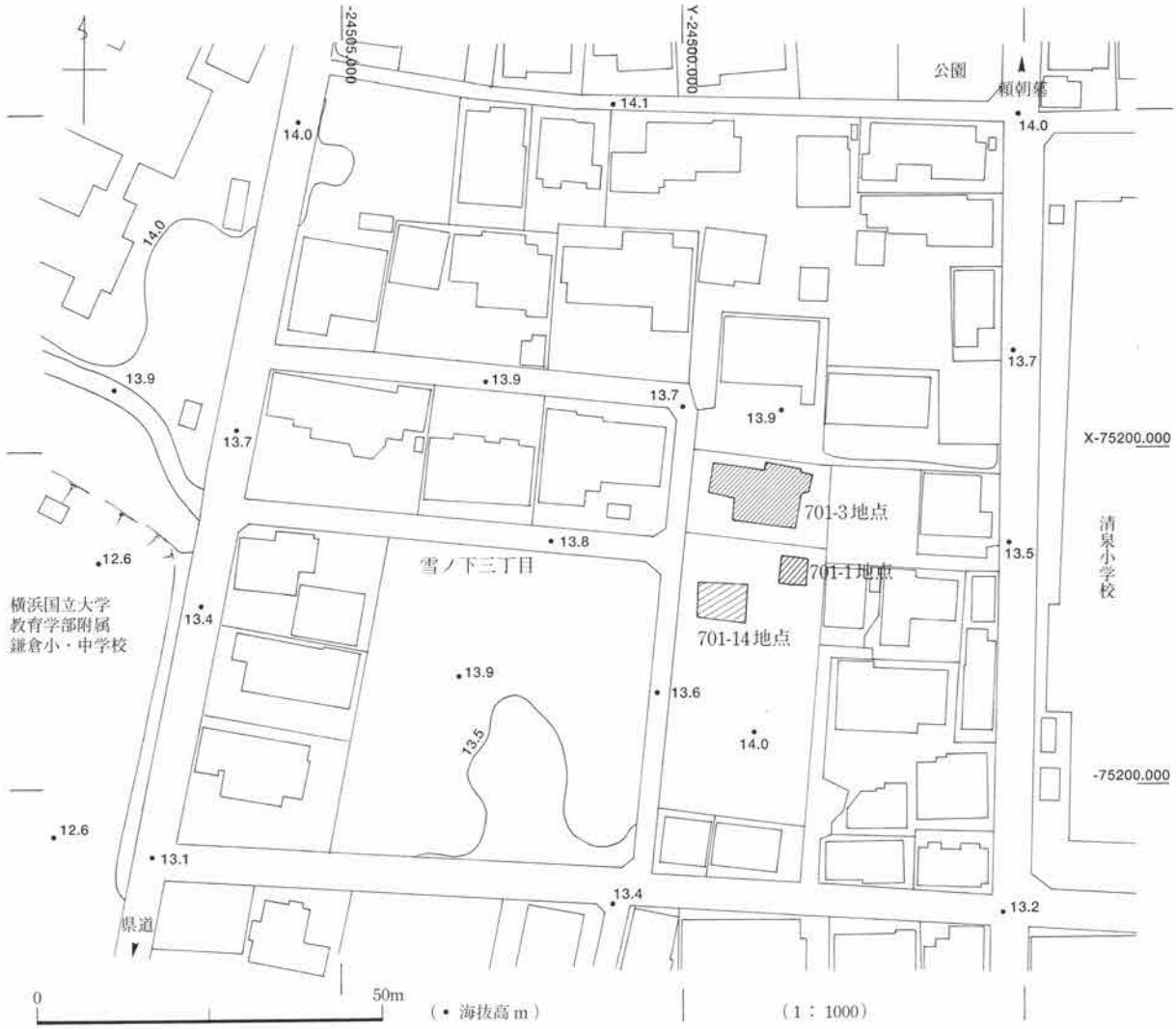


図2　調査地点位置図

図1調査地点名

大倉幕府跡　1.雪ノ下3丁目701－3番　2.雪ノ下3丁目701－1番　3.雪ノ下3丁目701－14番　4.雪ノ下4丁目701－1番（1990年調査・未報告）　5.雪ノ下3丁目651－8番(汐見1999)　6.雪ノ下3丁目618－4番(汐見2002)　**大倉幕府周辺遺跡群**　7.雪ノ下3丁目607－1番（斎木ほか2004）　8.雪ノ下3丁目607番（菊川1994）　9.雪ノ下3丁目606－1番（菊川1993）　10.雪ノ下4丁目600番（河野1980）　11.雪ノ下4丁目610－2番（1983～84年調査・未報告）　12.雪ノ下4丁目1番［トレンチ調査］(河野1980)　13.雪ノ下4丁目620－5番（馬淵1999）　14.雪ノ下4丁目581－2番(1981～82年調査・未報告)　15.雪ノ下4丁目580－10番(原2001)　16.雪ノ下字大倉耕地569－1番(馬淵1990)　17.二階堂38－1番（馬淵1993）　18.二階堂字荏柄58－4番（原ほか2002）　19.雪ノ下4丁目567番（馬淵2004）　20.雪ノ下字大倉耕地562－16番（菊川泉2001）　21.雪下字天神前562－29番（福田ほか1996）　22.雪ノ下565－4番（菊川・1991）　**横小路周辺遺跡**　23.二階堂字荏柄10－1番（原ほか2003）　24.二階堂字荏柄10－6番（福田ほか2000）　25.雪ノ下5丁目557－1番（野本1998）　**向荏柄遺跡**　26.二階堂字荏柄874番（馬淵1985二次調査）　27.二階堂字荏柄880番（馬淵1985一次調査）　**田楽辻子周辺遺跡**　28.浄明寺字釈迦堂658番（手塚1990）　29.浄明寺字1丁目661番（森2000）　**東勝寺跡**　30～32.小町3丁目497番（菊川1998三・四次調査）　33.小町3丁目523－14番（汐見ほか2001）　34.小町3丁目497番（赤星1977・1983）　35.小町3丁目488－2番外（宮田ほか2000）　36.小町3丁目468－10番(宮田2002)　**北条高時邸跡**　37.小町3丁目455－4番(1997～98年調査・未報告)　38.小町3丁目426－3番(原ほか1996)　**政所跡**　39.雪ノ下3丁目965番（瀬田1992）　40.雪ノ下3丁目966－1番（瀬田1992）　41.雪ノ下3丁目971－6番（1997年調査・未報告）　42.雪ノ下3丁目970－2番（野本1999）　43.雪ノ下3丁目987－1･2番（宮田ほか・1991）　44.雪ノ下3丁目988番（手塚ほか1993）　45.雪ノ下3丁目989－4番（宗臺ほか2001）　**鶴岡八幡宮旧境内遺跡**　46.源平池（1990年調査未報告）　47.研修道場（斎木ほか1983）　48.国宝館(松尾1985)　49.直会殿(宮田ほか1983)　50.太鼓橋［トレンチ調査］(1990年調査・未報告)　51.雪ノ下2丁目1072－1番［トレンチ調査］(宇田川1980)　**北条小町（泰時・時頼）邸跡**　52.雪ノ下1丁目395番（菊川1989）　53.雪ノ下1丁目400－1番（馬淵2002）　54.雪ノ下1丁目401－5外（馬淵2003）　55.雪ノ下1丁目432－2番（1983）　56.雪ノ下1丁目432－2番（菊川1989）

【文献は第6章末に一括】

図3　明治15年ごろの大倉幕府跡一帯（明治15年『第一軍管地方迅速測図』第一測期第十測図より）

この付近の離水時期や遺跡形成時期についてはいま一度の検討が必要だろう。

弥生時代　中期から後期にかけて、滑川の段丘上に大きな集落が営まれるようになる。「大倉幕府周辺遺跡群」と呼ばれる遺跡のうち本地点から南に150mほどの右岸には、宮ノ台期から久ヶ原期にかけての集落が発見されている（馬淵1998a・同1999など）。この集落はいまだ全容が把握できていないが、一帯の土器の分布状態は、その範囲がかなり広域に及ぶことを示唆する。最近の発掘では方形周溝墓や前野町期の住居も検出された（『朝日新聞』2003年12月25日朝刊湘南版）。

古墳時代　前期に関しては、市内山ノ内の山稜部や海岸部を中心に遺構や土器が発見されているが、調査地点付近では今のところ約200m東南の大倉幕府周辺遺跡群雪ノ下字大倉耕地569番1地点において土師器甕が採集されているのみで（馬淵ほか1990）、事例を欠く。

中期以降は資料が増える。市内中心部の宇津宮辻子幕府跡では、この時期とおぼしい層のプラントオパール分析から、水田耕作のあった可能性が指摘されている（鈴木茂1996）。後期にかけては、近在大倉幕府周辺遺跡群の二階堂字荏柄38番1地点で古墳時代前期の住居址数軒が発見された（馬淵1993）。また雪ノ下字大倉耕地569番1地点で発見された東御門川旧流路からは、大量の土器が出土している（馬淵ほか1990）。この東御門川の旧流路は、鎌倉時代に入ると大倉幕府の東側境堀となる。この時代、市内いたるところに集落が存在し、横穴墓も少なくない。盛んな人の往来があったことがわかる。当地点付近で

は、前出の集落のほか西御門北側山腹に横穴墓の存在することが知られている。

律令時代　この時代、鎌倉についての情報は一気に増加する。鎌倉は天平七年（735）に作成された『相摸国封戸租交易帳』に相摸（模）国八郡のひとつとして現れる。同交易帳や正倉院御物の古裂銘（天平勝宝元年＝749ごろ成立）から、奈良時代の鎌倉郡には、「鎌倉郷」を中心に「荏草（えかや）」「沼浜（ぬはま）」「尺度（さかど）」「方瀬（かたせ）」という少なくとも五つの郷があったことがうかがえる。また平安時代中期の承平五年（935）に源順が撰した『倭名類聚抄（鈔）』には、「沼浜」「鎌倉」「埼立」「荏草」「梶原」「尺度」「大島」の七郷が見える。郷の正確な範囲はいずれも未確定だが、このうち「鎌倉郷」がおおむね現在の鎌倉中心街から大倉辺にかけて、「荏草郷」が荏柄・二階堂・十二所辺から名越一帯にかけてであった可能性が高いので（高柳1959）、調査地点はこのどちらかに含まれていたとみてよい。

大化元年（645）から宝亀二年（771）まで、鎌倉の海岸寄りには東海道が通っていた。北の山際には、調査地点付近のほか朝比奈峠の麓でも土器が発見されていることから（鑢ヶ谷北遺跡，馬淵1983）このころには何らかの道が通じていたとみてよい。これはのちに「六浦道」と呼ばれることになる（「六浦」の読みは中世では「むつら」）。とすれば、当時の鎌倉には南の東海道と北の山際の道という少なくとも二つの東西道路があり、両者の中間にある郡衙前を通過する南北道（後世の「今小路」）が、それらを結んでいたということになる。すなわち、中世都市鎌倉の原形はこのころすでに出来上がっており、のち鶴岡八幡宮と若宮大路を加えたのが現在にいたる町構造ということができよう。

当該期の考古資料は、今小路西遺跡（御成小学校内）での郡衙発見（河野ほか1990）をはじめ枚挙に暇がない。旧市内では長谷・由比ヶ浜・材木座などで住居址や掘立柱建物の検出が相次いでいる。大倉周辺でも、市立第二小学校校地内の向荏柄遺跡（馬淵ほか1985）や大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄38番１地点、前出）で、８～９世紀の竪穴住居数軒が見つかっている。もはや市内全域といってもよい分布状況であり、後二者の隣地ともいえる当地点付近にも集落があったことは確実であろう。

王朝国家時代　11世紀中葉、前九年の役平定に功のあった陸奥守鎮守府将軍源頼義は、岳父平直方から所領の鎌倉を譲られる。そして、康平六年（1063）、石清水八幡宮を鎌倉由比に勧請した。頼義の館の場所について、南北朝時代の歴史書『保暦間記』は大倉御所の地だといっているが、根拠はわからない。ともかくも、以来鎌倉は河内源氏正統の根拠地となった。

平安時代末期、鎌倉を扼していたのは頼義から五代目に当たる義朝であった。彼の居館は「鎌倉之楯」と呼ばれ、現在の寿福寺の場所にあったという（『吾妻鏡』正治二年閏二月十二日・十三日条）。義朝の居館から武蔵国久良岐郡六浦（むつら）郷に抜ける道が、のちに「六浦道」となる。大倉幕府はこの道の北側に接する場所に位置する。

このころから六浦道は、源家累代の家人たる三浦一族が次第に掌握していったとみられる。というのも、12世紀後半には六浦荘は和田氏の支配するところとなっており（石井1986）、杉本付近は三浦（杉本太郎）義宗（三浦大介義明長子）が本拠にしていたこと、さらに亀谷の義朝旧邸に岡崎義実（義明末弟）・土屋義清父子が堂宇を建てて住んでいたからであり、このことは、六浦道の両起点と途中の要衝を掌握していたことにほかならない。調査地点付近も三浦一族の勢力下にあった可能性が高い。

鎌倉時代　治承四年（1180）10月６日、鎌倉に入った頼朝が最初におこなったのは、大倉の六浦道沿いの地に「御亭」を造ることであった。９日に造営を始め、たった二ヶ月後の12月12日には「移徙之儀」がおこなわれた。以後、頼朝・頼家・実朝の源氏三代の将軍がこの場所で政務を執り行ったので、「大倉幕府」と呼ばれるようになった。はじめ亀ヶ谷にあった父義朝の旧亭跡（寿福寺の場所）に新亭を立てようとしたが、土地が狭いことと、そこにはすでに義朝の菩提を弔う堂が建っていたため断念し、大倉

郷のこの地にしたのである。先述のように、南北朝時代の歴史書『保暦間記』によればここは先祖の源頼義の屋敷跡とされるが、真偽は不明である（慶長古活字本による。佐伯ほか1999）。六浦道沿いには、東から杉本寺・荏柄天神社・岩屋堂・そして義朝旧亭跡に建てられた亀ヶ谷堂など、開幕以前からの寺社や施設などが多い。この当時、頼朝の意識の中でも、鎌倉の集落構造は東西軸方向で認識されていたようである。

大倉幕府の範囲については、あらためて確認しておく必要がある。巷間流布している地図や史跡案内では、横浜国立大学付属小学校校庭東縁を走る南北道路が大倉幕府の西側境界線とされることが多い。また、神奈川県遺跡台帳に記載された「大倉幕府跡（№253）」と呼称される遺跡範囲もそうなっている。しかし、これは『鎌倉市史 総説編』（高柳1959）以来の明白な誤りである。この南北道路は1892年（明治25年）に神奈川師範学校（のちの横浜国立大学教育学部）が当地に移転してきたときにできたものであり、本来の境界は筋違橋から付属小学校校庭入口に向かって北に伸びる道がそうであった。この道は小学校校庭の北側に再び現れるので、現状でもよく復元できる。近年の発掘調査で、筋違橋から校庭入口に向かって伸びる道の東側に沿って大型柱穴が並んでいるのが発見された。おそらく幕府の西の縁を示す塀あるいは柵のようなものであろう（大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下三丁目606番１地点、菊川1993）。この境界線については、明治15年作成の『迅速測図』に明瞭に見え（図３）、土地の年配者の話を集めた『としよりのはなし』にも証言がある（鎌倉市教委1971）。また、近年何人かの指摘もある（鈴木千1976・山村1997・高橋2003など）。早急に是正されなければならないことのひとつだろう。

さて、これでいくと大倉幕府は、東西が南辺370m・北辺320m、南北が210mの、少し東に傾いだ左右非対称の平行四辺形を呈する（距離はいずれも地図上での概測）。面積は72,450㎡。これは積50丈（約450㎡）を１戸主とすれば、約161戸主となる。しかし、その広さには素朴な疑問を感じないわけにいかない。大倉幕府の北の境界が現状の認識どおり頼朝墓直下の東西路地だとすると、後世の「宇津宮辻子幕府」や「若宮大路幕府」に比べ、あまりに広いことになるからである。両者の位置、範囲はともに確定的ではないが、『吾妻鏡』の記事と地形的条件からみて、30,000㎡を超えるとは考えられない。すると、大倉幕府は後世のふたつの幕府の倍を大きく超える面積をもっていたことになる。この点については、さらに議論が必要だろう。

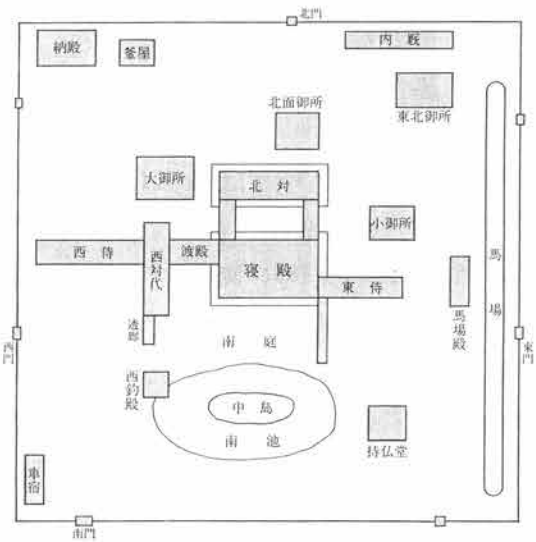


図４　太田1992による第二期大倉御所復元図

『吾妻鏡』によると、幕府の東西南北にはそれぞれ門があり、郭内には、寝殿・大御所・小御所・対屋・北向御所・常御所・御所対面所・釣殿・侍所・問注所・弓学問所・進物所・厩などがあった。太田静六は、全体として寝殿造りを中心としながら、厩など武家的要素も加えられていたとする（太田1992）。

以後、大倉御所は何度か罹災し、そのたびに建てかえられた。造営後11年経った建久二年（1191）３月４日、朝方に小町大路辺から出火した火事により焼亡（三月三日条）、６月には寝殿・対屋・厩などが再建された。太田はこのときの幕府を「第二期大倉御所」として、『吾妻鏡』の記事をもとに推定復元を試みている（図４）。建保元年（1213）の和田合戦の際には、朝夷奈義秀が火を放って一宇残らず焼

けた。このときもよく再建されたようだが、建保五年には失火でまたしても諸建物が灰燼に帰した。やはりすぐに復興されたらしく、貞応二年（1223）に鎌倉を訪れた『海道記』の筆者はその華麗さを書きとめている。結局、初期建物を含め、大倉幕府には4時期の変遷があることになる。

大倉幕府以後　嘉禄元年（1225）7月11日、北条政子が死ぬ。するとはやくも10月3日には御所移転が議論され、翌4日に執権北条泰時・連署（執権の補佐役）北条時房らが、新御所の候補地を見てまわった。あらたな場所は若宮大路東側の宇津宮辻子の辺に決定した（「宇津宮辻子幕府」）。このときもたった2ヶ月で完成、12月20日に将軍藤原頼経移徙之儀がおこなわれた。この移転は、その速度からみて、大倉御所の解体・移築に過ぎなかった可能性が指摘されている（伊藤1992）。これにより45年間続いた大倉幕府は廃絶、政治の中心は若宮大路一帯に移行した。このとき泰時は、京都などで採用されていた地割制度である「丈尺制」を導入し、町を方眼区画に再編しようとした。それは武士の宿館の集合体から急増する商人・職人を主体とした町への移行であると同時に、町構造の主軸が、東西方向から、若宮大路を中心とした南北方向に転換したことをも意味する。

幕府移転後一帯の史料は乏しくなるが、現段階で知りうる限りの事例を略述しておこう。

『吾妻鏡』嘉禎元年（1235）九月一日条に、「右大将法華堂」（頼朝墓所）前の湯屋から失火したので、駆けつけた諏訪盛重が法華堂の罹災を免れるため湯屋と法華堂との中間にある「民屋」数十軒を壊させ、延焼を食い止めた、とある。同宝治元年（1247）正月十三日条には法華堂前の人家10軒が焼け、金沢実時（「陸奥掃部助」）亭もその中に入っていたとある。また法華堂前には、金沢文庫本『新猿楽記』奥書に仁治四年（1243）正月六日付で、「法花堂之下、板屋之下筆書了」ともあり、一帯が幕府廃絶後に民家の並ぶ場所となっていたことが確実である（高橋2003）。観応元年（1350）段階には阿曾沼氏の屋敷があったという（『小山文書』、高橋2003による）。以上の記事から、幕府廃絶後もこの地の一角には御家人屋敷や町屋があったことがわかる。記事の場所は調査地点からも至近距離にあったはずである。

幕府跡周辺に目を転じると、鎌倉時代中期以後、周知のように幕府東南角にあたる「大倉辻」が建長三年（1251）と文永二年（1265）の法令で市中の指定商業地区の一つとなり、「筋違橋」も文永二年の法令で商業地区に指定されている。そのほか、幕府跡北側、現字名で西御門所在の八雲神社付近に大門寺という大寺があった（貫・川副1980）。『金沢文庫古文書』建久九年（1198）臘月四日条に「大倉之阿弥陀堂」とあるのはこれだろう（高橋2003）。その他の周辺遺跡や旧跡、住人の動態等については、過去に筆者の関係した近在地点報告書のいくつかにも書いたので（馬淵1998など）、ここでは繰り返さない。

大倉幕府廃絶300年後の天文十四年（1545）鎌倉を訪れた連歌師宗牧は、『東国紀行』のなかで、大倉幕府の場所が畠にもならず芝が繁り、馬が放牧されていると記した。江戸時代初頭の『玉舟和尚鎌倉記』には、畠のみあって礎石もなにもない、とある。東の浄妙寺近くにある室町時代の鎌倉府跡地は、鎌倉公方が下総古河に去ったあと、少なくとも近世まで空き地だった（現在は水田）。里の人々が、いつかは公方が帰ってくると言い伝えて、畠にもせずそのままにしておいたのだという（『新編鎌倉志』）。二箇所の公的機関の跡地がともに、近世に空き地となっている。

天文十七年（1548）には、幕府跡東南角にあたる「関取橋」の地に、小田原城主北条氏康が関所を設けた。荏柄社再興・造営のために商人や道者から通行税を徴収している（「荏柄社造営関所案」『鎌倉市史　史料編』1－396号）。当時の関所は、警備を主目的とした江戸時代のものと違い、交通税を徴収する機関であった。関取橋の西詰で、それらしい遺構も検出されている（馬淵1990）。

（馬淵）

【引用・参考文献は第4章末に一括】

第２章　調査の概要

第１節　第１地点の調査概要

１．調査にいたる経緯

平成14年６月に自己用店舗併用住宅の建設に係る事前相談があり、現地表下6.5mに達する杭構造の基礎工事を含む計画であったため、埋蔵文化財への影響は避けられないものと予想された。平成14年７月２日－７月５日に確認調査を実施したところ、現地表下50cm以下に中世遺構面の存在が認められた。このため埋蔵文化財の保護措置に関する協議を建築主と数回にわたっておこなったところ、工事計画の変更は不可能との意向が示されたため、文化財保護法第57条の２の手続きを行い、施工者との工程調整および発掘調査の準備が整った平成14年７月29日から９月６日まで現地での発掘調査を実施した。調査面積は、建築面積45㎡のうち、安全性などに配慮し45㎡とした。

2．調査方法

グリッドは調査区の形状に合わせ、１マス１ｍ×１ｍで任意に設定した。調査区短辺をｘ軸、長辺を

図５　調査区座標図・第２地点調査範囲変遷図

y軸とし、xは南方に、yは西方に数値が増える。報告書内では便宜上方位はx軸マイナス方向を北とする。調査は敷地の都合上、調査区を二分割して行なった。

国土座標成果

x0，y0地点	〔エリア9〕	X－24 490.250	Y－75 218.750
x7，y7地点	〔　同　〕	X－24 497.750	Y－75 225.250

3．調査経過

7月29日　Ⅰ区　重機による表土掘削
7月31日　人力による調査開始　1面検出
8月1日　Ⅰ区1面完掘・全景撮影
8月7日　Ⅰ区2面完掘・全景撮影
8月9日　Ⅰ区3面完掘・全景撮影　舟形検出
8月12日　Ⅰ区4面漆器多数検出
8月13日　Ⅰ区4面完掘・全景撮影
8月19日　台風13号接近、調査区水没
8月20日　水抜き・1区5面完掘・全景撮影
8月21日　溝1検出、Ⅰ区6面完掘・全景撮影
8月22日　Ⅰ区7・8面完掘・全景撮影
8月26日　Ⅰ区9面・10面・11面完掘・全景撮影
8月28日　Ⅱ区　重機による表土掘削　中央に大撹乱
8月29日　Ⅱ区2面完掘・全景撮影
9月2日　Ⅱ区3面完掘・全景撮影
9月4日　Ⅱ区4面完掘・全景撮影
9月5日　Ⅱ区5面・6面完掘・全景撮影
9月6日　調査終了

（滝澤）

第2節　第2・第3地点の調査概要

1．調査にいたる経緯

第2地点　平成15年8月に個人専用住宅の建設に係って、基礎工事の段階で長さ6mの鋼管杭の打ち込みを内容とする旨の事前相談があった。すでに実施されている隣接第1地点の発掘調査成果から勘案して、建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、確認調査は実施せずに本発掘調査を実施する方針で本件工事計画に対応することとした。これにより事業者との協議を経て文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、施工者との工程調整および発掘調査の準備が整った平成14年11月16日から翌平成15年2月28日まで現地での発掘調査を実施した。調査面積81㎡。

第3地点　鋼管杭打ちによる基礎工事をともなう。第2地点の南側南側隣地であり、その調査成果を参考に調査を実施した。調査期間は平成15年7月24日～同年8月8日。調査面積16㎡。

2．調査方法

第2地点　残土置き場を確保するため、81㎡の調査区を東西二区に分割した。二ヶ所の調査区には、東側に「Ⅰ区」、西側に「Ⅱ区」の名称を与えた。調査方法は、まずⅠ区を調査し、その際の残土をⅡ区に置く。次に、調査の終了したⅠ区に残土を移して埋め、Ⅱ区の調査をおこなう。この際の残土はⅠ区に上積みすることになる。掘削にあたっては、地表下60cm前後までを重機で梳き取り、以下を人力で進めた。遺構番号は最初から通しでつけたため、Ⅰ区10c面の最終番号に続いてⅡ区1面がくることになる。したがって、遺構番号の順列は層序と整合しない。

地表面から最終調査面までは約3mにおよぶ。そのため、調査区は深くなるにつれ安全性の確保のた

め当初の範囲から段階的に縮小していった。縮小状況は図5に示したとおりである。またこのような事情により、調査区壁の土層図採取は地表から最下部まで連続した断面でおこなうことができなかった。

第3地点　第1地点と同様に、地表下60cm前後まで重機で掘削し、以下を人力によった。下層については、湧水が激しいため狭い範囲内での深い掘削は崩落の危険性があること、16㎡と狭く二分割しての調査も困難で、残土置き場の確保が困難であること、などから、最下層までの調査は断念した。

方眼設定

調査区は第2地点と第3地点をあわせても、以下の20m平方のうちに収まる。X・Y両座標ともこの間を5等分して測量方眼とした。

〔エリア9〕　X－24 478.000～24 498.000　　Y－75 201.000～－75 221.000

3．調査経過

第2地点

11月16日（土）調査開始。
23日（土）1c面全景写真撮影と平面実測
29日（金）2面全景写真撮影と平面実測
12月3日（火）3面全景写真撮影と平面実測
11日（水）4面全景写真撮影と平面実測。
13日（金）5a面全景写真撮影。南半部を平面実測後掘り下げ、5b面として精査・遺構掘削。続いて全景写真撮影と平面実測
12月17日（火）調査区東・南壁土層断面分層
18日（水）6a面と直下にある6b面の全景写真撮影・平面実測
20日（金）7a面全景写真撮影。南半部を平面実測後掘り下げ、7b面として精査・遺構掘削。続いて全景写真撮影と平面実測
22日（日）8面全景写真撮影と平面実測
23日（月）9面全景写真撮影と平面実測
24日（火）10b面全景写真撮影と平面実測
25日（水）深掘り全景写真撮影。下段調査区壁土層断面実測
27日（金）Ⅰ区埋め戻しとⅡ区表土掘削
1月6日（月）天幕設営
9日（木）1面全景写真撮影と平面実測
11日（土）1c面土師器焼成遺構全景写真撮影
14日（火）2a面全景写真と平面実測
16日（木）2b面全景写真撮影と平面実測
20日（月）3面全景写真撮影と平面実測
29日（水）4面および5a面全景写真撮影と平面実測
2月3日（月）5b面全景写真撮影と平面実測
6日（木）5c面全景写真撮影と平面実測
8日（土）6面西北部写真撮影と平面実測
12日（水）6面東半部写真撮影と平面実測。調査区西・南壁土層断面写真撮影
14日（金）7a面全景写真撮影と平面実測
18日（火）8面全景写真撮影と平面実測
19日（水）9面全景写真撮影と平面実測
21日（金）10a面全景写真撮影と平面実測
22日（土）10b面全景写真撮影と平面実測
26日（火）10c面全景写真撮影と平面実測。深掘り全景写真撮影
28日（金）機材撤収

第3地点

7月24日（木）機材搬入
25日（金）精査開始
8月4日（月）全景写真撮影と平面実測
6日（木）北壁土層断面分層と写真撮影・実測
8日（金）機材撤収

（馬淵）

第３章　第１地点の調査

第１節　概　要

今回の調査区からは合計11面に及ぶ中世期の生活面が検出された。最終面は中世地山面で、それ以下に生活面はない。ただし、現地表から最終面まで約３ｍ超の深さがあり、崩落等の危険から、下層に掘下げるに従って調査区の面積を狭めざるを得なかった。また、排土等の都合上調査区を東西に２分割して調査を実施したが、西部の調査区においてはその半分以上が現代による撹乱のため６面までの調査となった。しかし、上記に挙げたような条件下においても、様々な成果が挙げられた。ここでは第１地点の各面で検出された遺構及び出土遺物について、その詳細を報告する。

１．基本土層

今回の調査では合計11面もの生活面が検出された。下層に掘下げるほど密であったが、最下面が地表から３ｍ超の深さまで達し、崩落等の危険性から、調査区は下層になるに従って縮小せざるを得なかった。ここで、調査区西壁土層断面と東壁土層断面を図示し（図６）、土層の堆積状態を報告する。

表土層　現地表下60cm前後が現代埋立層。

１層　茶褐色粘質土層　5cm前後の土丹・かわらけ細片を多く含む締りの良い層。（１面）

２層　土丹層　5～30cm前後の土丹による埋立地業層。（２面）

３層　有機物堆積層　木片・炭化物を多く含む締りの悪い層。

４層　暗褐色粘質土層　上面は薄く土丹地業される。それ以下は木片・かわらけ片、漆器等の遺物を多く含む層。（３面）

８層　土丹層　土丹による地業層。西壁はやや弱い。（４面）

11層　暗茶褐色粘質土層　やや弱い地業層。（５面）

12層　有機物堆積層　形を保った木片がとても多く残る。

13層　暗灰褐色粘質土層　3cm前後の土丹が多く、締りの良い層。（６面）

14層　暗灰褐色粘質土層　1cm前後の土丹が多く、締りは若干ゆるい層。（７面）

15層　暗灰褐色粘質土層　1cm以下の土丹が多く、締りの良い層。（８面）

16層　有機物堆積層　形を保った木片がとても多く残る。

17層　土丹層　しっかりとした土丹版築。中位に瓦を帯状に多く含む。（９面）

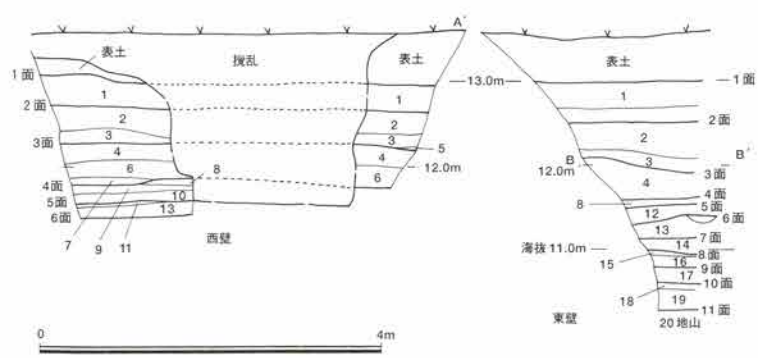


図6　土層断面図

18層　黒褐色粘質土層　1㎝以下の土丹を少量含み締りの良い層。(10面)

19層　暗褐色粘質土層　木片・かわらけ片を含む。粘性がある。

20層　黒色粘質土層　締りの良い無遺物層。中世地山。(11面)

2面以下の層は個々の層に厚さの差があるものの、土丹等による地業面の上に有機物層或は木片を多く含む粘質土層が覆うという繰り返しが行なわれている様子が見て取れる。

第2節　各　説

1．検出遺構

1面（図7）

1面は現地表下約60㎝、海抜13.0m前後に検出された平坦な面である。やや弱い地業面で、x3、y2グリッド付近にかわらけ片がまとまって検出されたが、形になるものは少量であった。

2面（図8）

2面は1面下約40㎝、海抜12.6m前後に検出された平坦な面である。調査区西部中央は大きく撹乱されていた。面上からは礎板が幾つか検出されたが、その全体像は不明である。x3、y2グリッド付近に安山岩が2個検出されたが、これもまた、礎石であるかは不明である。覆土からは鯨か？大型動物の肋骨が出土した。

3面（図9）

3面は2面下約40㎝、海抜12.2m前後に検出されたやや弱い土丹地業面である。その覆土からは木製品を中心として、多量の遺物が出土した。

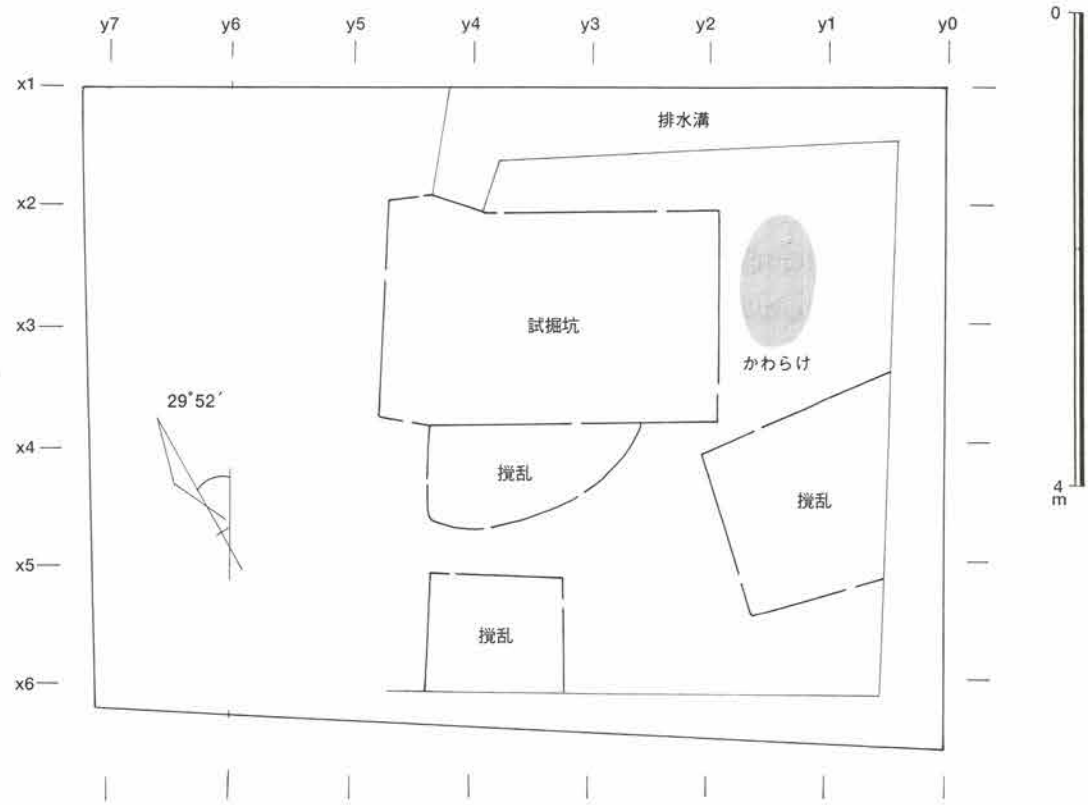


図7　1面

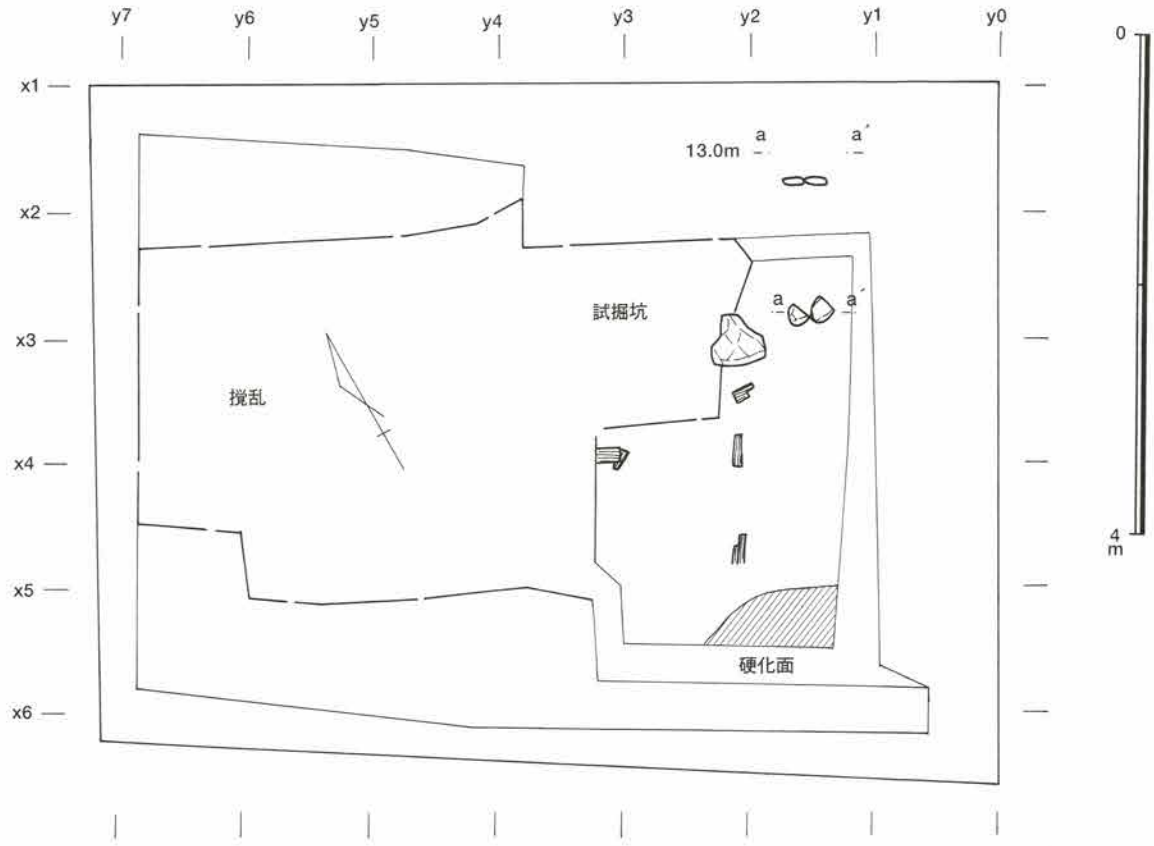

y7
y6
y5
y4
y3
y2
y1
y0
x1
x2
x3
x4
x5
x6
13.0m
a
a´
試掘坑
撹乱
硬化面
0
4
m

図8　2面

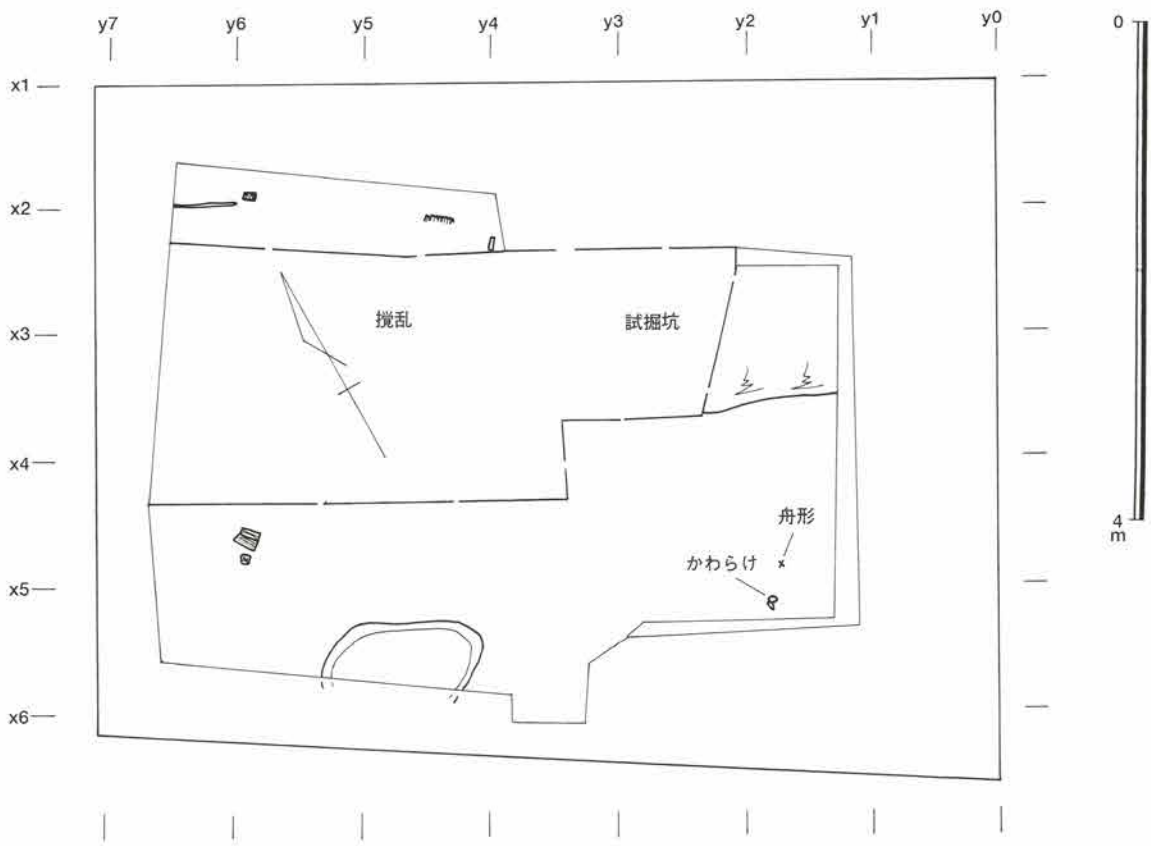

y7
y6
y5
y4
y3
y2
y1
y0
x1
x2
x3
x4
x5
x6
撹乱
試掘坑
舟形
かわらけ
0
4
m

図9　3面

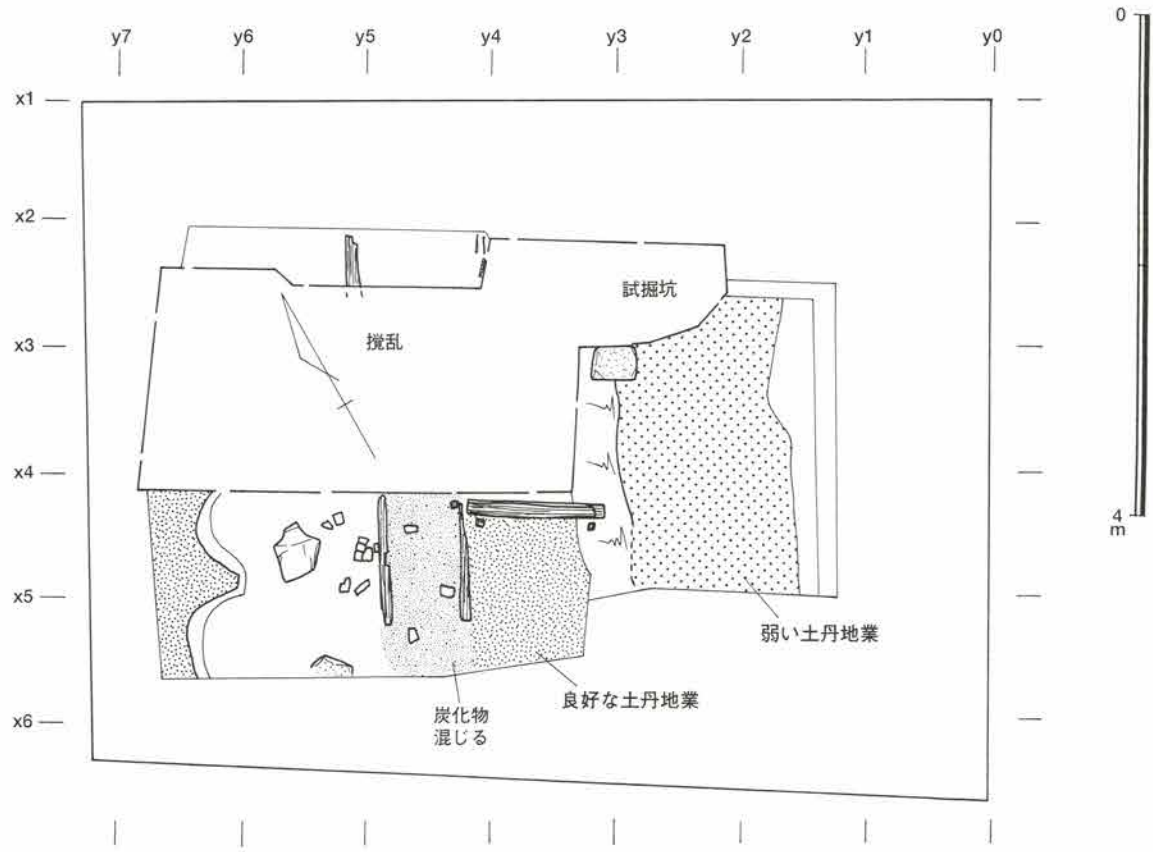


図10　4面

x５、ｙ６グリッド付近に１ヶ所礎板、ｘ２、ｙ７～４グリッド付近からは木材が検出されたがそれらの詳細は不明。ｘ６、ｙ５グリッド付近には浅い窪みが検出された。また、東部ｘ３ライン付近では地面が北側に緩やかに傾斜する。

4面（図10）

４面は３面下約50cm、海抜11.7m前後に検出された概ね良好な土丹地業面である。その覆土からは木製品・漆器を始めとする多量の遺物が検出された。ｙ３ライン以東はやや弱い土丹地業で、その他は概ね、良好な土丹地業面である。

ｘ3、ｙ3グリッド及びｘ６、ｙ５グリッド付近に鎌倉石の切石が検出された。

ｘ６～２、ｙ５～３グリッド付近には木材が検出され、建造物の痕跡が検出された。（建物１）木材は東西方向のものとそれに直行する南北方向のものが２本検出された。東西方向の木材は２本の角材が重ねられ、南側を２本の杭で留めてあった。木材の長さは下段が112cm、上段が102cmを測り、杭の芯々間の距離は90cmである。南北方向の木材の内、東側のものはその北端西側に杭が１本刺さっていた。２本の木材は平行に据えられ、その芯々間の距離は64cmを測る。西側の木材は中央部に凹があるが、オリジナルのものであるのか転用材であるのかは不明。また、撹乱を挟んで北側に南北方向の木材と縦板が３ヶ所検出されたが、これらが同一遺構であるかは不明。

ｘ６～４、ｙ６～５グリッド付近に不整形に地業されない部分があった。

5面（図11）

５面は４面下約10～20cm、海抜11.6m～11.5m前後に検出された。全体的に弱い地業面であるが西部ではその地業がさらに弱く、東部でのみ確認された。

Pitが２口（Pit1・２）と礎板が1ヶ所検出された。Pitはいずれも円形を呈し、直径は各々24cm・35cm、

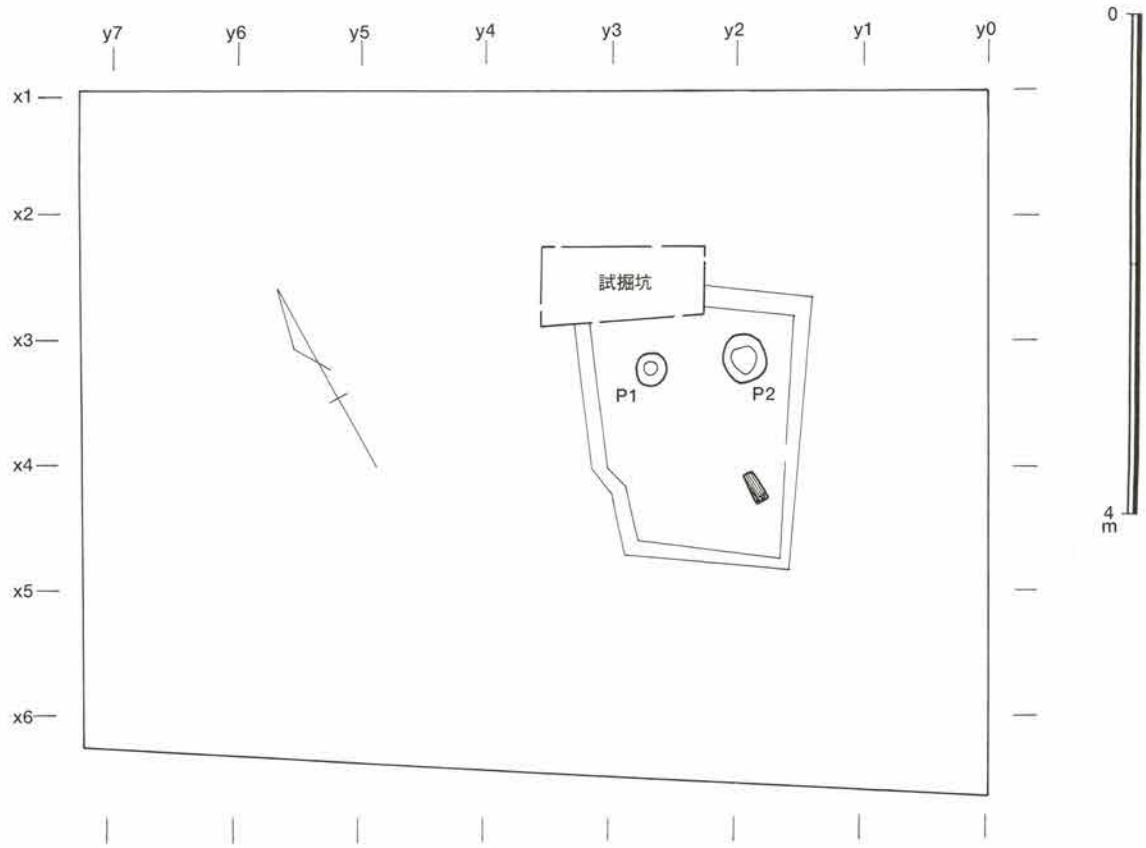

y7
y6
y5
y4
y3
y2
y1
y0
x1
x2
x3
x4
x5
x6
試掘坑
P1
P2
0
4
m

図11　5面

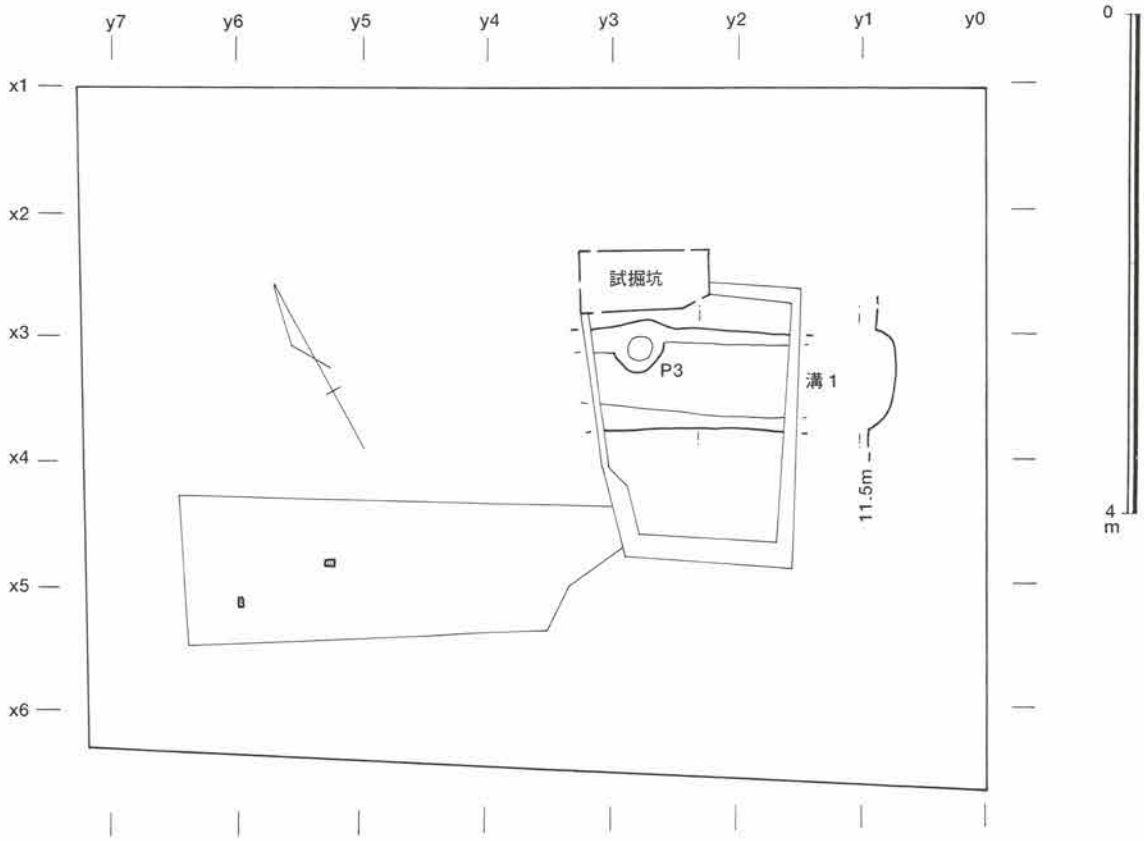

y7
y6
y5
y4
y3
y2
y1
y0
x1
x2
x3
x4
x5
x6
試掘坑
P3
溝1
11.5m
0
4
m

図12　6面

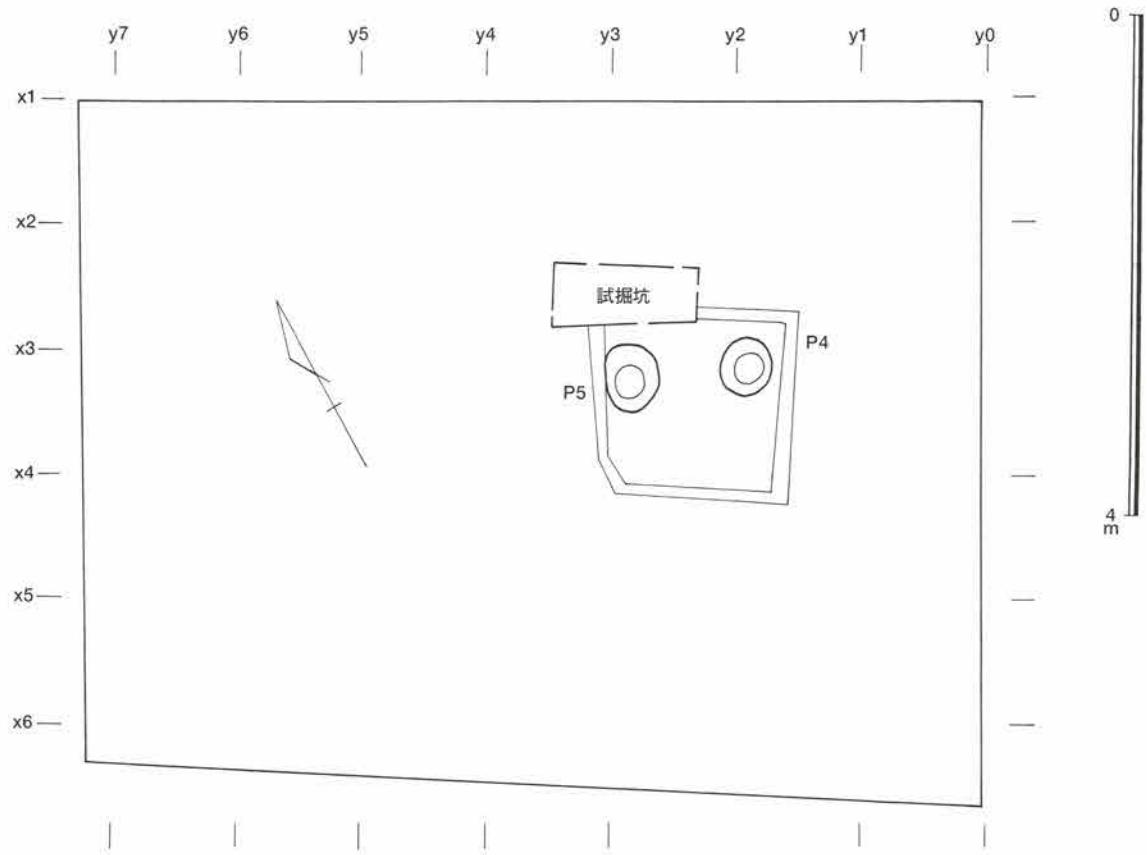

y7
y6
y5
y4
y3
y2
y1
y0
x1
x2
x3
x4
x5
x6
試掘坑
P4
P5
0
4
m

図13　7面

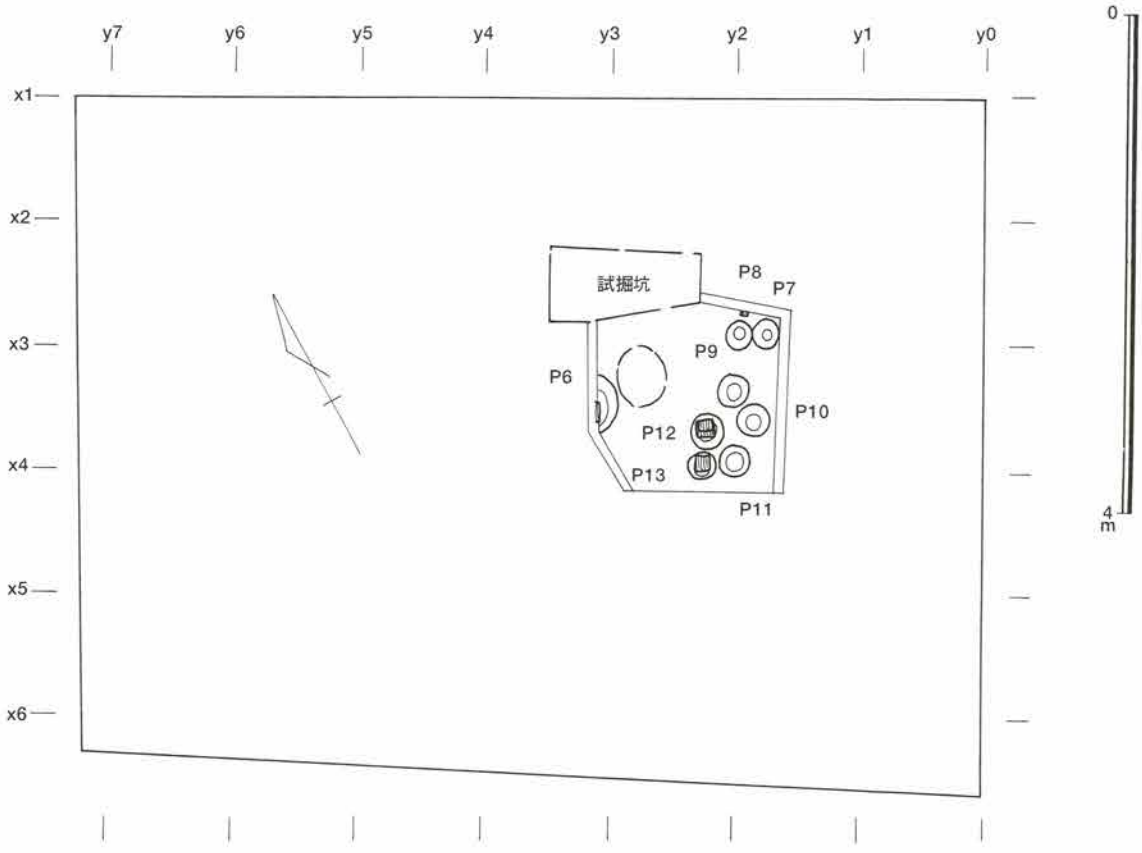

y7
y6
y5
y4
y3
y2
y1
y0
x1
x2
x3
x4
x5
x6
試掘坑
P8
P7
P9
P6
P10
P12
P13
P11
0
4
m

図14　8面

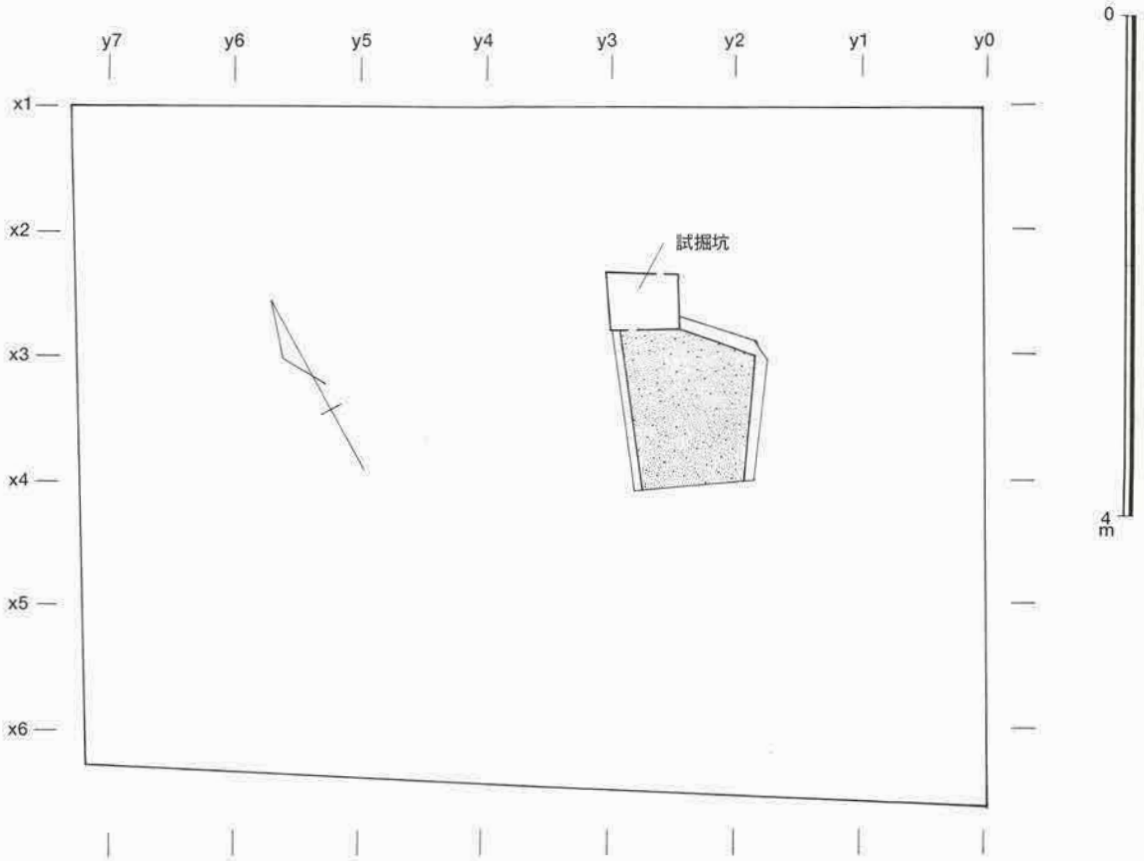


図15　9面

深さは検出面から10cm・20cmを測る。

6面（図12）

6面は5面下約15cm、海抜11.4m前後に検出された。小土丹を多く含む締りの良い面である。溝1条・Pit1口・杭2本が検出された。

溝1はx4、y3グリッド付近に検出された東西方向の溝である。東部は調査区外、西部は撹乱により消失している。上端幅は80cm、下端幅は55cm、深さは検出面から10cm前後を測り、ごく浅い。覆土は木片・有機物を多く含み、上層は5面造成時に削平され、下層のみ遺存した可能性がある。また、溝1北岸、x3、y3グリッド付近にPit3が検出された。平面形は直径40cmの円形を呈し、深さは検出面から26cmを測る。

7面（図13）

7面は6面下約30cm、海抜11.1m前後に検出された。小土丹をとても多く含む締りの良い面である。調査区が制限され、さらに縮小されたが、Pit2口が検出された。

Pit4・5はいずれも平面形は円形で、各々直径は5cm・52cm、深さは検出面から15cm・20cmを測る。

8面（図14）

8面は7面下約15cm、海抜11.0m前後に検出された。調査面積は引き続き狭いものの、Pitが密集して検出された。

Pitは合計8口検出され、並びはつかめなかったが、内、3口に礎板が遺存していた。いずれも平面形は円形を呈し、直径は20cm～28cm、深さは検出面から10cm前後を測り、浅い。

9面（図15）

9面は8面下約20cm、海抜10.8m前後に検出された。確認し得た範囲からは遺構は検出されなかった。

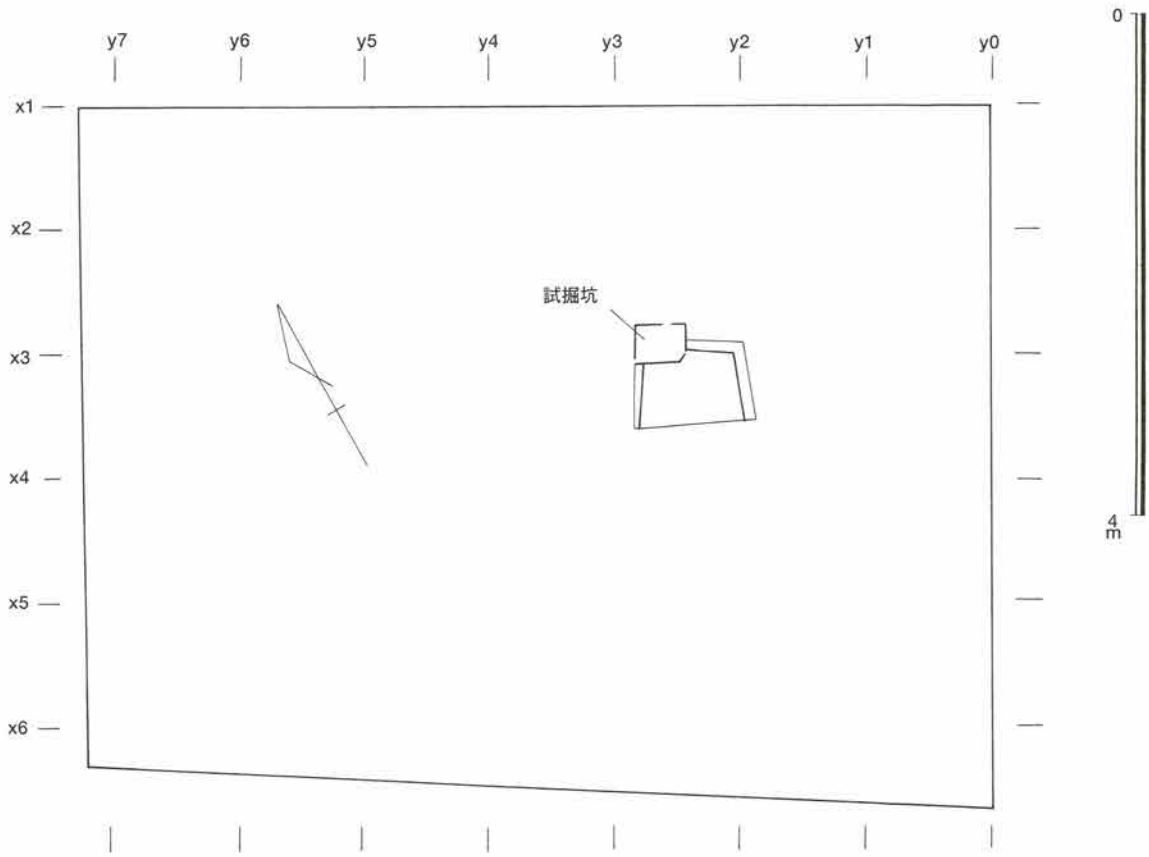


図16　10面

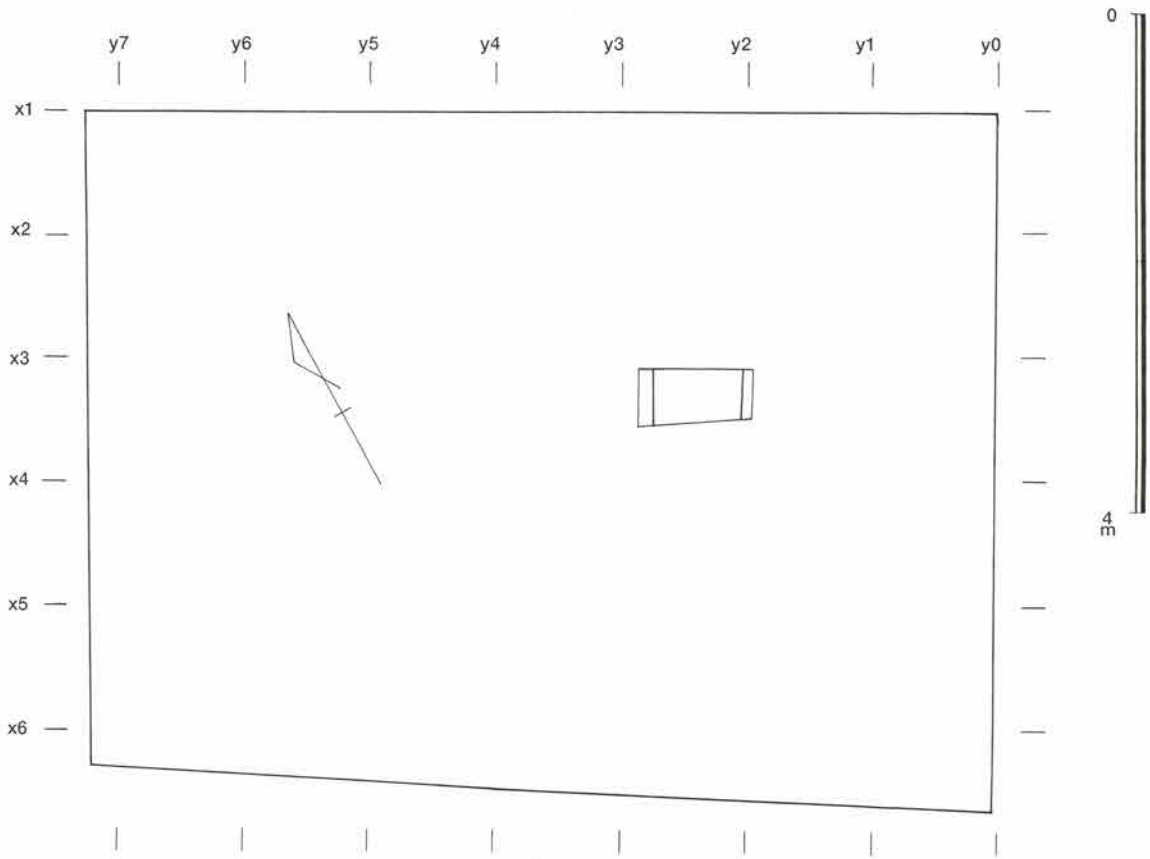


図17　11面

しかし、土丹版築され、面上には小粒の玉砂利と貝殻片が敷かれていた。

10面（図16）

10面は9面下約20cm前後、海抜10.6m前後に検出された。確認し得た範囲からは遺構は検出されなかった。10面覆土（9面構成土）中に瓦片が帯状に含まれていた。

11面（図17）

11面は10面下約30cm、海抜10.3m前後に検出された。中世地山である。締りの良い黒色粘質土。10－11面間の覆土には木片・かわらけ片が大量に含まれていた。

2．出土遺物

表土層出土遺物（図18－1～10）

図18－1～6は糸切りかわらけ。1～3は大皿、4～6は小皿。寸法は各々、口径が14.2cm・12.5cm・11.1cm・7.8cm・7.8cm・8.0cm、底径が9.0cm・7.0cm・6.5cm・5.0cm・5.0cm・5.0cm、器高が3.6cm・3.2cm・2.9cm・2.0cm・1.8cm・2.3cmを測る。胎土は橙色～肌色を呈し、微砂をやや多く含み、大皿の表面はざらつく。

図18－7は山茶碗窯系こね鉢。口径は復元で29.0cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含み、硬く焼き締まる。

図18－8は平瓦。凸面には格子叩き文。胎土は灰色を呈し、微砂・石粒を非常に多く含む。

図18－9・10は木製品。9は直径20cm・厚さ4㎜を測る円板。10は直径8.4cm・厚さ1.0cmを測る円板で、遺存部分に8ヶ所の孔が開き、中心の1ヶ所には木釘が刺さっている。

1面出土遺物（図18－11～42）

図18－11～38は糸切りかわらけ。11～25は大皿。11～15の器壁は丸味をもち、若干仕上げが雑。胎土は、13・15は橙色、その他は肌色を呈し、小礫をやや多く含む。16～25は胎部器厚が薄く、器高はやや深い。16～22の口径は13cm～14cm前後を測る。23～25の口径は11cm前後を測り、中皿。胎土は橙色～淡橙色を呈し、微砂を多く含み、器表はざらつく。

26～37は小皿。26はやや仕上げが粗く、浅い器形。胎土は淡橙色を呈し、小礫・微砂を含む。27～37は胎部器厚が薄く、器高が深い。27～29は口径が9cm前後を測り、やや大きい。全体に丁寧に仕上げる。胎土は橙色～淡橙色を呈し、微砂を多く含む。38は極小サイズの皿。胎土は淡橙色を呈す。

図18－39は青磁蓮弁文碗の口縁部片。釉調はくすんだ緑青色を呈し、微気泡多く、失透する。光沢は良い。素地は灰色を呈し、粘性がある。

図18－40は瀬戸の小壺の底部片。底部は糸切りで、底径は4.4cmを測る。外底面以外に透明度が高く、光沢のある灰釉がかかる。胎土は灰色を呈し、堅緻。外側面は一部肌荒れして釉が剥離している。

図18－41は山茶碗窯系こね鉢。上端に沈線が入る。胎土は灰白色を呈し、白色微石粒を含み、堅緻。

図18－42は鉄製の釘。

2面出土遺物（図19・20）

図19－1～40は糸切りかわらけ。1～7は大皿。8～11は中皿。16～34は小皿。3～7は口径が14cm

図18　1面　かわらけ寸法表　（　）は復元・単位はcm

番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高
11	(12.3)	6.5	3.1	25	11.2	6.5	2.9
12	(12.8)	7.8	3.6	26	7.8	5.0	1.8
13	(13.0)	(7.0)	3.3	27	8.6	(5.7)	2.2
14	(13.5)	(7.4)	3.3	28	(9.2)	5.7	2.1
15	12.4	7.0	3.7	29	(9.1)	5.8	2.6
16	12.4	6.7	3.4	30	(8.0)	(5.0)	2.2
17	(13.4)	7.5	3.7	31	7.6	4.7	2.0
18	(14.0)	(7.3)	3.5	32	(8.0)	5.3	2.1
19	(14.0)	(7.8)	3.8	33	7.8	4.5	2.1
20	(13.5)	8.4	3.6	34	7.9	5.0	2.2
21	(13.2)	(8.0)	3.5	35	(8.2)	(5.0)	2.2
22	(13.0)	7.2	3.1	36	(7.4)	(4.0)	2.2
23	(11.4)	6.5	3.1	37	(7.4)	(4.5)	2.0
24	(11.4)	6.5	2.7	38	(4.4)	(3.3)	0.7

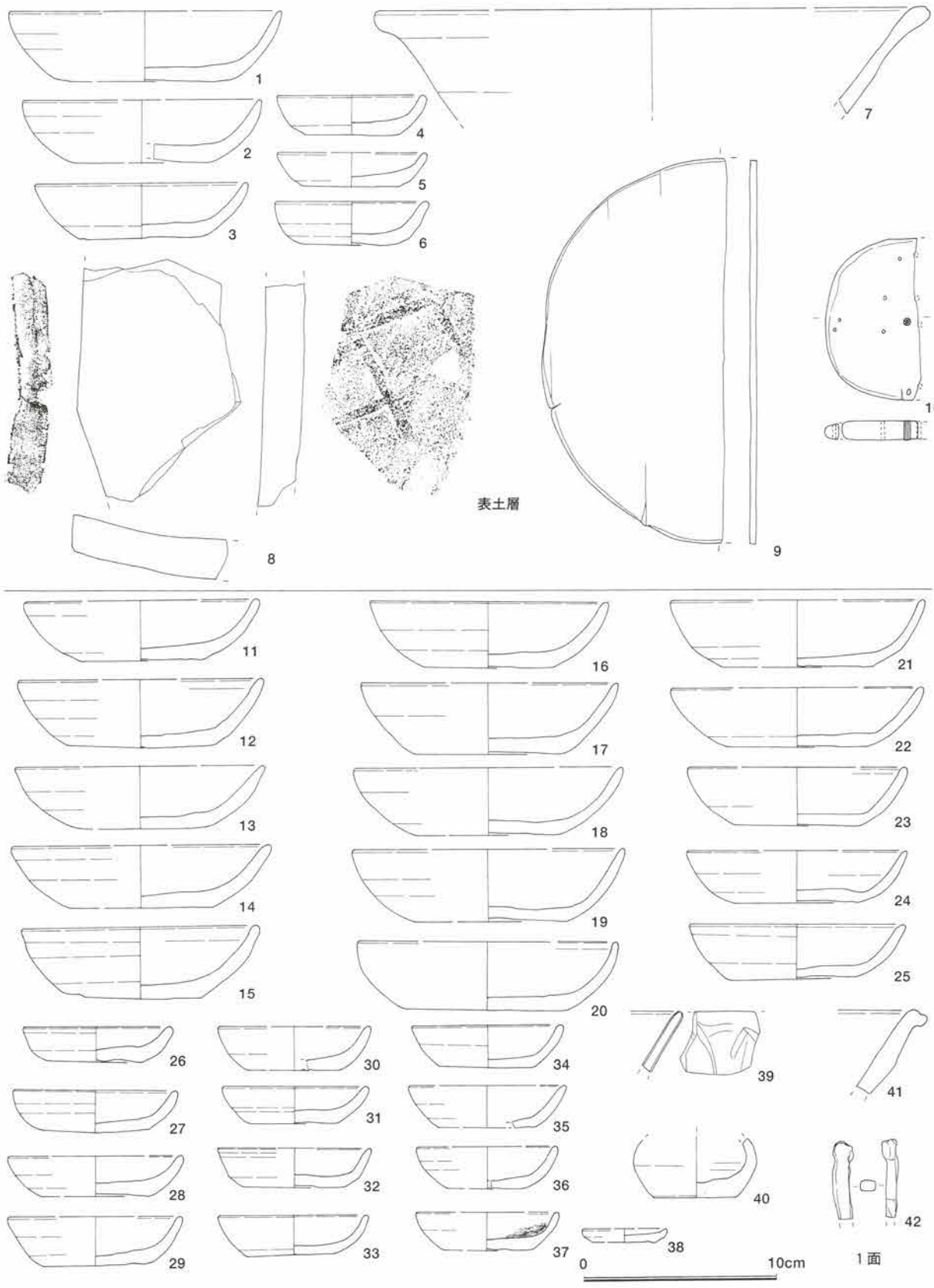


図18　表土層・1面出土遺物

前後、8～11は11cm前後を測り、薄手丸深型系。丁寧に整形され、胎土は、5～8は橙色、3・4・9～11は白褐色呈し、微砂をやや多く含む。16～34は口径が8cm前後を測る。16～18は浅い器形。19～26は口径がやや小さい。27～34は然程、深くないものもあるが薄手丸深型系。丁寧に整形される。胎土は淡橙色～橙色を呈し、微砂を多く含む。12～15・35～39は15世紀代のかわらけ。12～15の口径は10.5cm

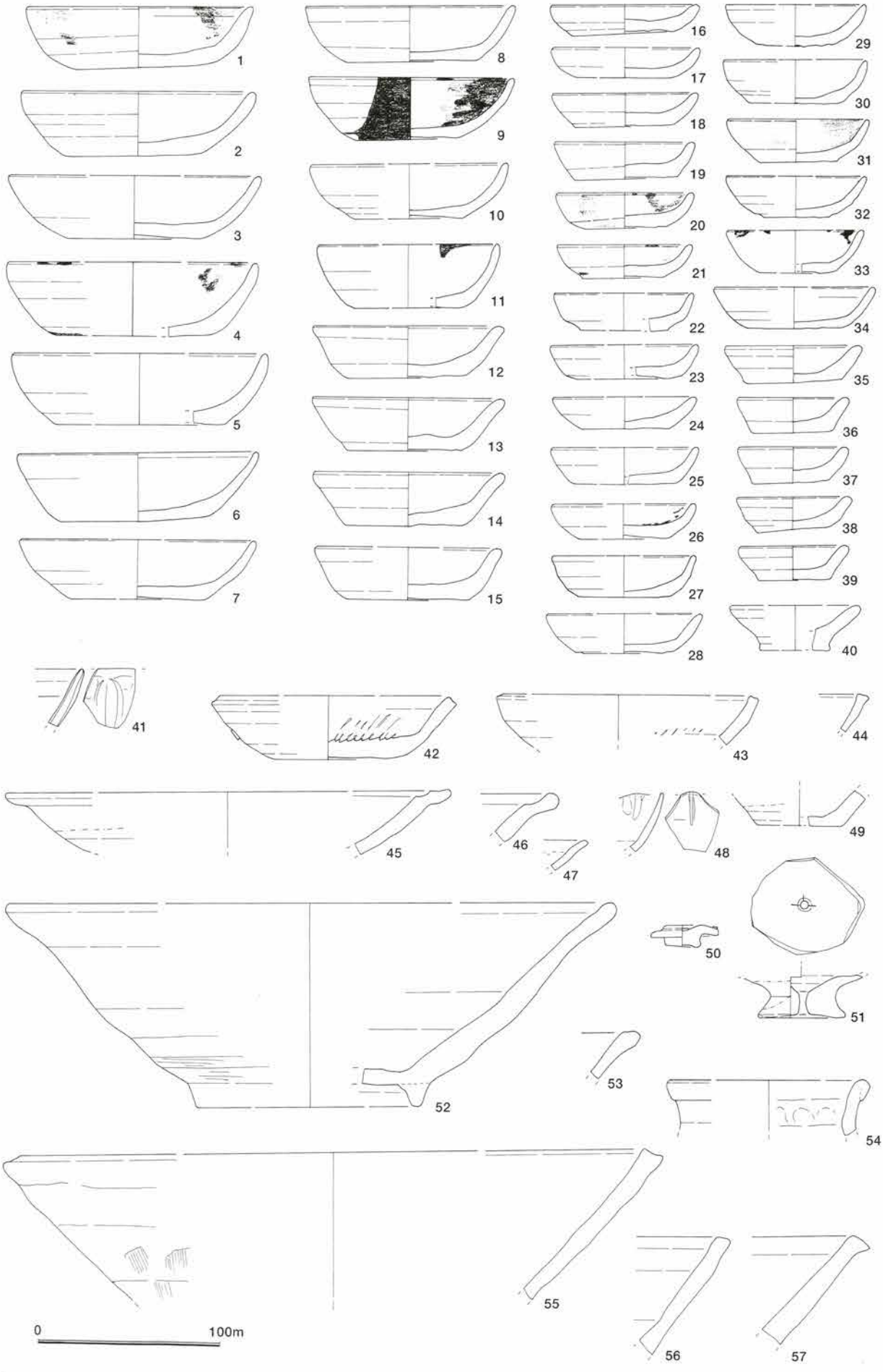

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
0
100m

図19　2面出土遺物(1)

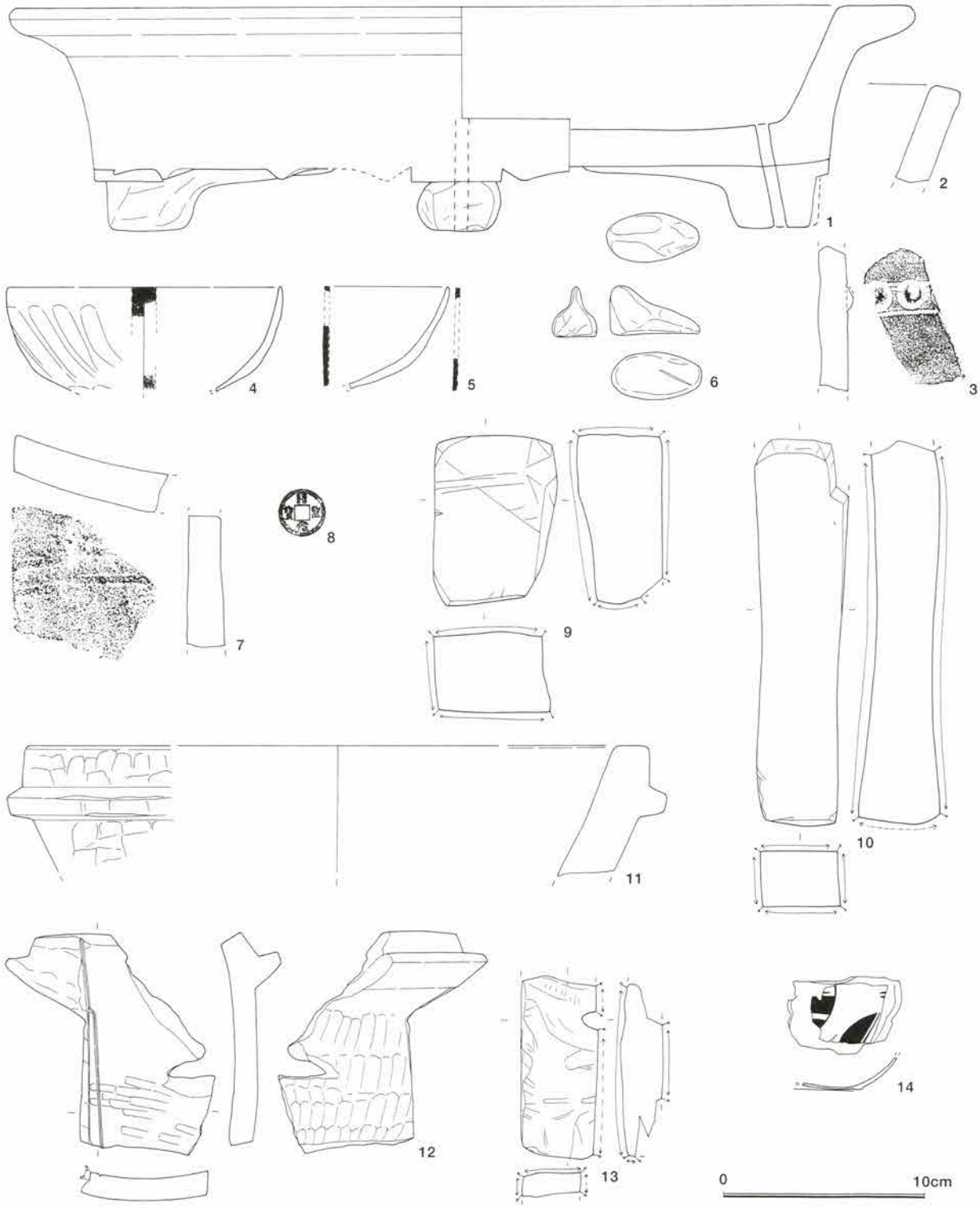


図20　2面出土遺物(2)

図19　2面　かわらけ寸法表　（　）は復元・単位はcm

番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高
1	12.7	7.5	3.4	15	(10.4)	6.7	1.7	29	(7.8)	(4.2)	2.3
2	13.0	7.5	3.5	16	8.3	5.6	1.7	30	(8.0)	(5.0)	2.4
3	(14.0)	7.4	3.5	17	(8.3)	(5.6)	1.8	31	8.0	4.3	2.4
4	(14.0)	(8.5)	4.0	18	8.2	5.5	2.0	32	(7.8)	3.6	2.3
5	(14.3)	(9.5)	4.0	19	7.8	5.7	2.0	33	(7.7)	(4.2)	2.4
6	13.5	8.0	3.8	20	7.7	4.5	1.9	34	(9.0)	5.2	2.3
7	(13.2)	(7.5)	3.3	21	7.5	4.5	2.0	35	7.7	5.4	2.1
8	11.7	7.3	3.1	22	(7.8)	(4.9)	2.0	36	6.2	4.5	2.0
9	11.5	5.7	3.4	23	(8.2)	(5.2)	1.9	37	6.2	4.2	2.0
10	(11.0)	(6.0)	3.0	24	(8.0)	4.8	1.8	38	6.4	4.0	1.8
11	(10.2)	(6.0)	3.5	25	(8.2)	(5.7)	2.0	39	6.2	4.0	1.9
12	10.6	6.5	3.0	26	(8.0)	(5.0)	2.0	40	(7.3)	(3.8)	2.5
13	10.7	6.4	3.0	27	(8.0)	5.2	2.3				
14	10.7	6.6	3.0	28	(8.6)	(5.4)	2.2				

前後、35～39の口径は6cm前後を測る。胎部器厚は厚手で、整形は雑で口縁端部は丸味を持つ。断面形は逆台形を呈し、大皿の口縁端部はやや外反する。胎土は橙色を呈し、微砂・小礫を多く含む。1・3・4・7・9・11・20・21・26・31・33は灯明皿で器表に煤が付着する。

図19－40は高台風に底部を高く作ったかわらけ質の皿である。寸法は復元で、口径は7.3cm、底径は4.0cm、器高は2.5cmを測る。胎土は橙色を呈し、微砂を含み、粉質である。

図19－41は青磁蓮弁文碗の口縁部片。釉調は緑青色を呈し、微気泡多く失透する。素地は灰味白色を呈し、緻密。

図19－42～51は瀬戸。42～44はおろし皿。42の寸法は復元で口径が13.0cm、底径が7.0cm、器高が3.5cm、43の口径は復元で14.0cmを測る。いずれも表面には灰釉がかかり、胎土は灰色を呈し、硬く焼き締まる。45・46は折縁鉢。45の口径は復元で25.0cmを測る。胎土は白褐色を呈し、器表には刷毛塗りで灰釉がかかる。47は縁釉小皿。胎土は灰色を呈し、堅緻。縁には褐釉がかかる。48は輪花型入子。胎土は灰色を呈し、非常に堅緻。器表には自然釉が極薄くかかり、光沢がある。49は小壺の底部片。胎土は白褐色を呈し、器表には灰釉がかかる。50は蓋。胎土は白褐色を呈し、上面には灰釉がかかる。51は秉燭。胎土は白褐色を呈し、外面の一部には褐釉が認められ、内面には自然釉がかかる。

図19－52・53は山茶碗窯系こね鉢。52の寸法は復元で口径が34.0cm、底径が12.6cm、器高が11.3cmを測る。胎土は52が肌色～淡橙色を呈し、白色石粒を多く含み、粗い。内面は磨滅している。53は灰色を呈し、白色石粒を含む。口縁端には沈線がめぐる。

図19－54～57は常滑。54は壺の口縁部。口径は復元で11.4cmを測る。口縁端は外側に折り返される。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含み硬質。器表は赤茶褐色を呈し、外面は自然釉が薄くかかり、光沢がある。55～57はこね鉢。55の口径は復元で36.8cmを測る。胎土は、55・56は暗灰色、57は茶褐色を呈し、白色石粒を含み硬質。56の内面には自然釉が厚くかかる。

図20－1～3は手焙り。1の寸法は復元で口径が45.6cm、底径が37.0cm、器高が11.3cmを測る。口縁は外側に折り曲げられ、張出す。円錐台形の脚が4ヶ所に付き、底部周縁には肘木風の飾りが付く。また、脚中央には貫通する孔が開けられている。胎土は瓦質で、淡橙色を呈し、胎芯は黒灰色を呈す。微砂・小礫を含むが、比較的きめの細かい土。器表は横ナデ、底部は糸切り。内底面には煤が付着する。2・3は手焙りの破片。胎土は2が桃色、3が灰味白色、器表は黒色処理され、いずれも瓦質で小礫・微砂を多く含み、粗い。

図20－４・５は瓦器碗。４の口径は復元で14.0cmを測る。いずれも手づくね。胎土は、灰味白色で、胎芯は黒灰色を呈し、水簸され緻密で、硬質。器表は図示したように部分的に黒色処理される。

図20－６はかわらけ質の土で作られた鳥形。手捻りで鳥を立体的に表現している。

図20－７は平瓦。胎土は灰色を呈し、凹面には煤が付着している。

図20－８は紹聖元寶。

図20－９～13は石製品。９は伊予の中砥。10は上野の中砥。沼田産か？11～13は滑石製品。西彼杵産。11は鍋。口径は復元で31.5cmを測る。器表には内外面共に煤が付着する。また、内面には刃傷がある。12は鍋を転用加工途中の物。13は元は温石、再加工している。

図20－14は漆器椀。内底面には黒漆に朱漆で文様が描かれる。

３面出土遺物（図21～23）

図21－１～63は糸切りかわらけ。１～25は大皿。１～９は口径が12cm～13cmを測り、底径は小さく、器壁中位で角度を変えて立ち上がる器形。胎土は肌色～淡橙色を呈し、微砂・小礫を多く含み、やや粗い。10～25は薄手丸深型系。深く、器壁は薄手。口径は13cm～14cmを測る。胎土は白褐色～淡橙色を呈し、微砂・小礫を含み、粉質。２・５は灯明皿で器表に煤が付着する。26～29は中皿。薄手丸深型系。口径は11cm～12cm前後を測る。胎土は26・28が淡橙色、27・29が白褐色を呈し、微砂をやや多く含む。30～63は小皿。30～51は底径がやや広く、浅い器形。胎土は、30～35・39・41・42・45～50は灰褐色～肌色、その他は淡橙色～橙色で、微砂・小礫を含み粉質。52～63は薄手丸深型系。胎土は60は橙色、その他は肌色を呈し、微砂を多く含む。26・34・35・40・45・57・62は灯明皿で器表に煤が付着する。

図21－64・65は青磁蓮弁文碗。釉調は緑青色を呈し、光沢は良いが、65は微気泡多く失透する。素地は64が灰色、65が灰白色を呈し、緻密。

図21－66～68は瀬戸。66はおろし皿。口径は復元で15.0cmを測る。胎は灰色を呈し、堅緻。器表には少量自然釉がかかる。67は小壺の底部片。外面には灰釉がかかる。68は輪花型入子。口縁部内外に自然釉がかかる。胎土は灰白色を呈し、堅緻。

図22－１は山茶碗窯系こね鉢。口径は復元で28.0cmを測る。胎土は淡橙色を呈し、微砂・白色石粒を多く含み、粗い。器表は再火を受け煤けている。

図22－２～５は常滑。２は甕の口縁部片。口径は復元で33.0cmを測る。

ｎ字状口縁。器表は茶褐色を呈し、肩部と口縁内側を中心に自然釉がかかる。胎土は黒灰色を呈し、白色石粒を多く含み、硬質。３は甕の胴部片。４・５はこね鉢。

４の口径は復元で36.0cmを測る。口縁端は両側に摘み出される。胎土は橙色を呈し、白色石粒を多く含み、粗い。

図21　３面　かわらけ寸法表　（　）は復元・単位はcm

番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高
1	12.0	8.0	3.1	22	(13.6)	(7.0)	3.4	43	7.7	4.8	1.7
2	12.2	7.0	3.4	23	(13.6)	(8.2)	3.3	44	8.0	5.4	1.8
3	12.8	7.8	3.7	24	12.8	7.2	3.2	45	(7.7)	5.4	1.9
4	(13.0)	8.4	3.4	25	13.2	6.8	3.8	46	(7.2)	(5.3)	2.0
5	(12.5)	(6.8)	3.6	26	(12.0)	7.2	3.1	47	8.1	(5.5)	2.0
6	(12.8)	(8.2)	3.3	27	11.0	6.0	3.2	48	(8.2)	5.5	1.8
7	13.0	8.0	3.6	28	(10.6)	6.2	3.2	49	(8.0)	5.0	1.8
8	12.6	7.4	3.2	29	11.2	6.2	3.2	50	7.7	4.8	1.8
9	12.7	6.8	3.5	30	(7.2)	(4.7)	1.7	51	(7.7)	(5.2)	1.6
10	(13.0)	7.8	3.4	31	(7.1)	(5.1)	1.7	52	(7.3)	(4.5)	1.9
11	(13.3)	7.8	3.2	32	(8.0)	(6.0)	1.7	53	7.9	5.0	2.0
12	(13.4)	7.8	3.2	33	(8.0)	(5.3)	1.5	54	7.6	4.6	2.1
13	(13.8)	(7.8)	3.4	34	(8.0)	(5.5)	1.6	55	7.4	4.4	2.0
14	(14.8)	(9.0)	3.4	35	(8.2)	(5.5)	1.6	56	(7.1)	(4.4)	2.0
15	(14.5)	(9.0)	3.7	36	(7.6)	(5.2)	1.8	57	(7.0)	(5.0)	2.2
16	14.0	8.0	3.5	37	(8.0)	(5.3)	1.6	58	(7.2)	(4.2)	1.9
17	(13.0)	6.4	3.4	38	7.5	4.7	1.8	59	8.5	4.6	2.5
18	12.8	7.0	3.5	39	7.5	5.4	1.9	60	8.0	5.2	2.2
19	13.8	7.8	3.4	40	7.5	5.4	1.6	61	(8.0)	(4.5)	2.3
20	13.8	8.0	3.7	41	7.7	5.0	1.8	62	(8.0)	(4.5)	2.3
21	13.5	7.2	3.5	42	(7.6)	4.8	1.8	63	(7.8)	(4.8)	2.5

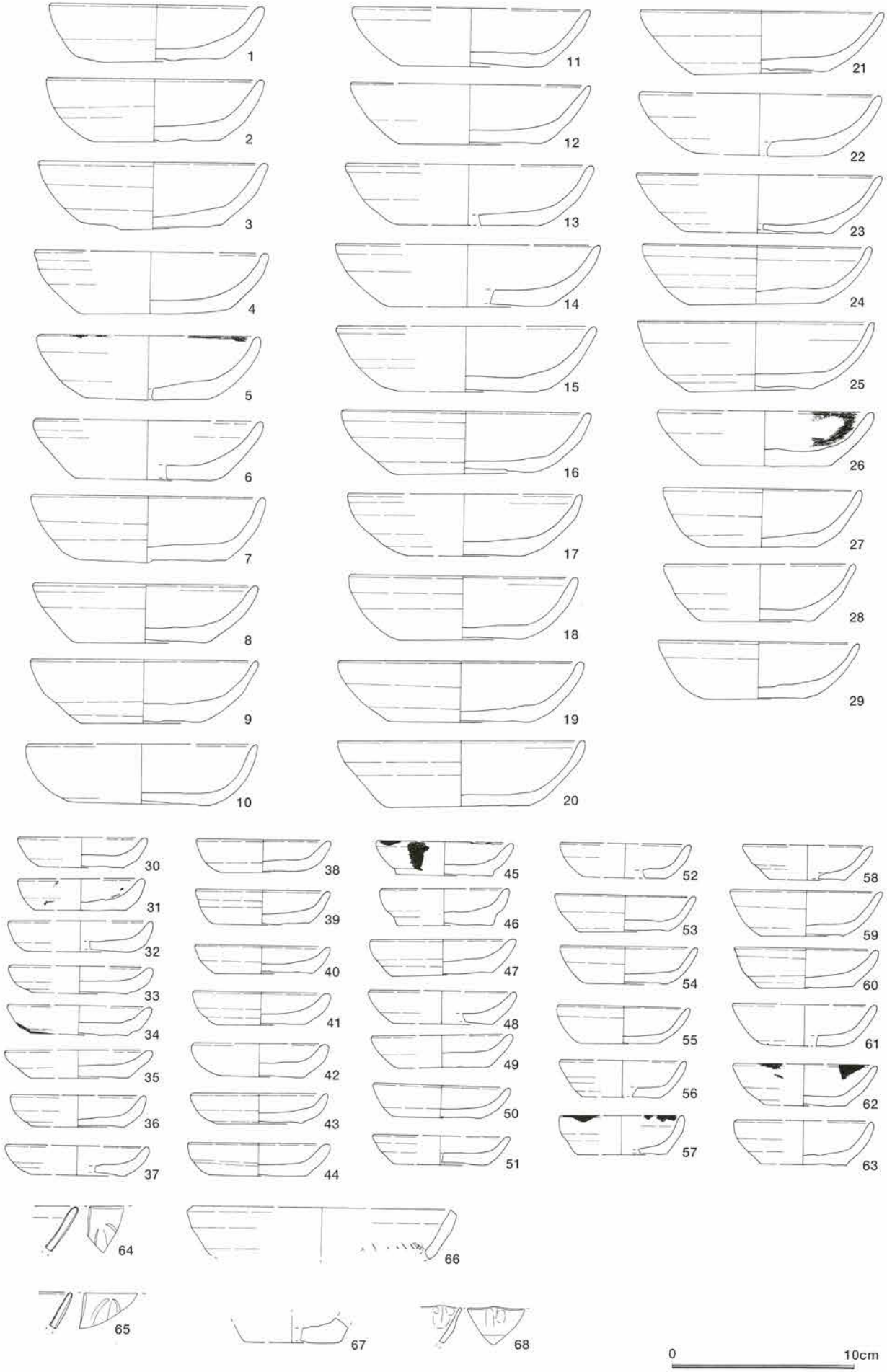

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
0
10cm

図21　3面出土遺物(1)

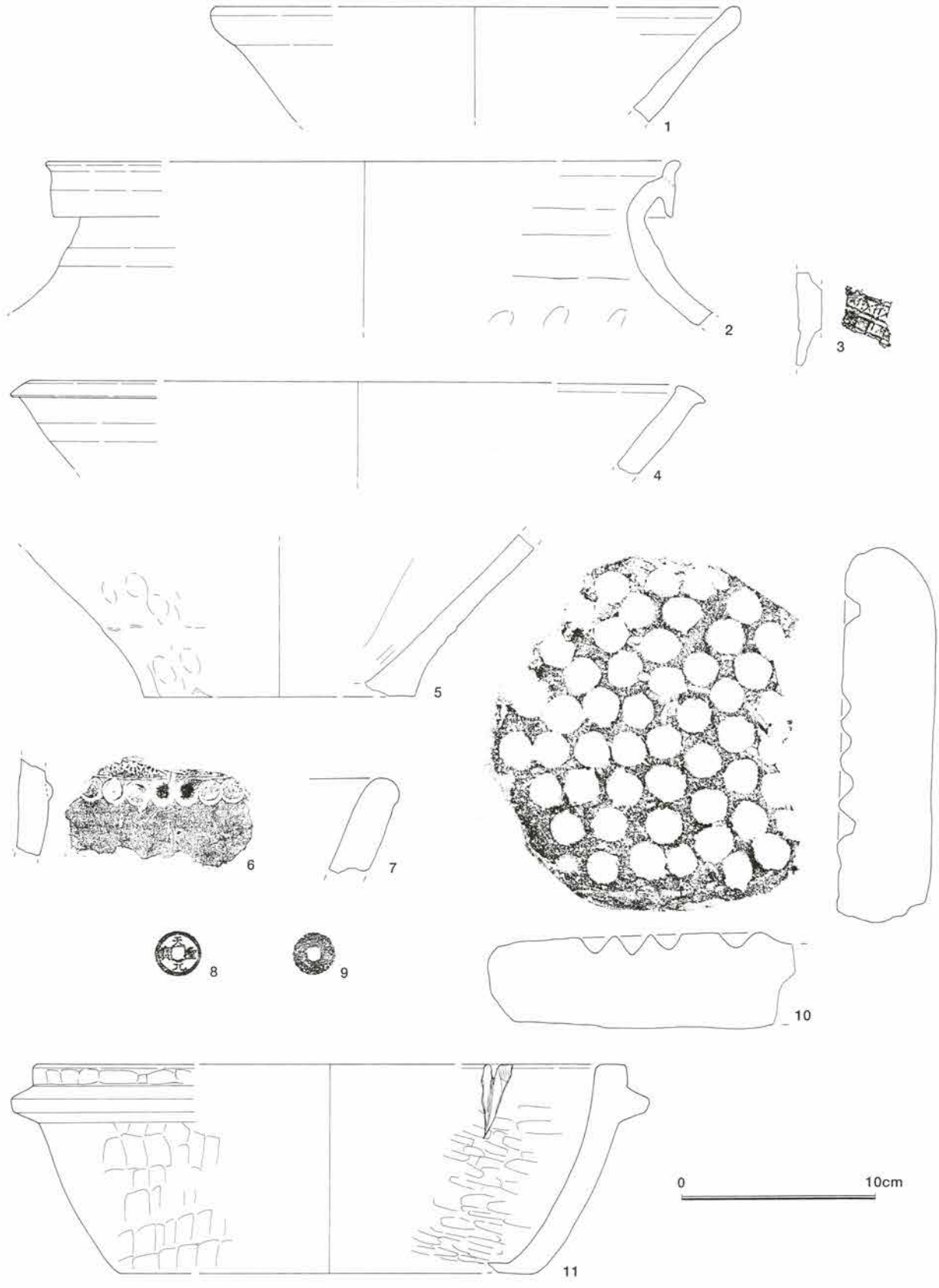


図22　3面出土遺物(2)

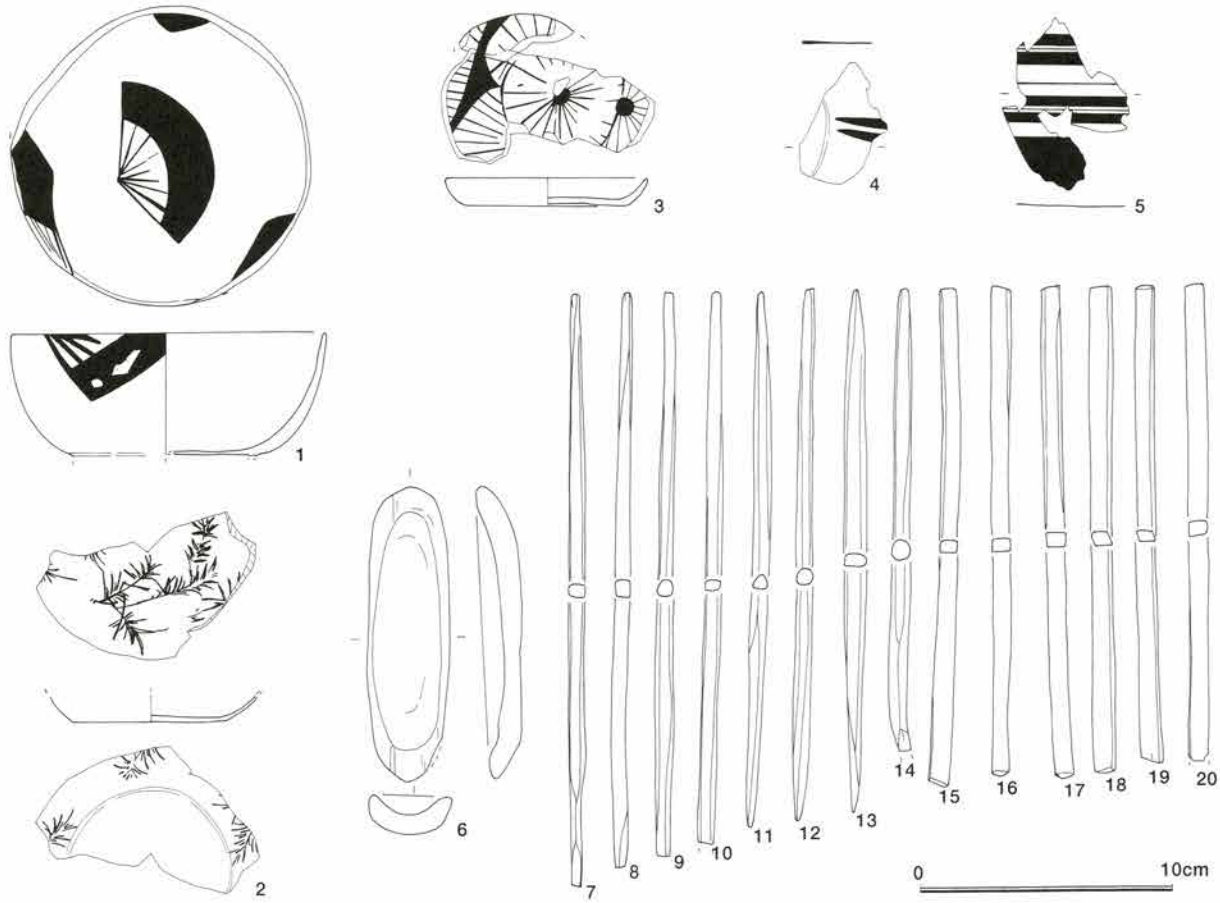


図23　3面出土遺物(3)

内面は煤けている。5の底径は復元で14.2cmを測る。内面はかなり磨滅している。器表は赤茶褐色を呈し、内側には厚く自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み、硬質。

図22－6・7は手焙り。6は瓦器質で、胴部片。外面は横位に磨きがかかり、菊花のスタンプと貼付連珠文が施される。7は瓦質で、口縁部片。微砂を多く含み、器表はざらつく。

図22－8・9は銭。8は天聖元寶。9は錆がひどく判読不能。

図22－10は土丹製品。土丹を加工したもの。厚さ5.0cm、最大直径19.5cmを測る平面不整円形を呈し、その上面全体に、直径1.5cm前後、深さ0.5cm～1.0cmの円錐形の窪みをつけている。用途は不明。以前やぐらを調査した際、やぐらの前庭部分の岩盤にこのように窪みを付け加工したものがあったが、単独の加工品ではなく、床面の装飾のようなものであった。

図22－11は滑石鍋。西彼杵産。寸法は復元で口径が30.7cm、底径が21.6cm、器高が11.0cmを測る。口縁上面から内側に煤が付着している。また、再加工しようとした痕跡が1ヶ所に残る。外底面の一部には漆が付着していた。

図23－1～5は漆器。1は椀。口径は復元で12.6cmを測る。高台は欠落している。黒漆地に、朱漆で扇文が内外面に描かれる。2は皿。底径は6.2cmを測る。黒漆地に朱漆で笹文が描かれる。3は皿。口径は8.2cm、底径は6.5cm、器高は1.2cmを測る。黒漆地に朱漆で車輪文が描かれる。4・5は椀の底部片。胎部は腐食し、漆のみ遺存している。黒漆地に朱漆で文様が描かれる。

図23－6～20は木製品。6は舟形。長さ11.9cm、幅3.3cmを測り、高さは1.6cmと浅い。板材を刳り貫いて作られている。7～20は箸。7～14は23.7cm～20.9cmを測り、両端が削りだされている。鎌倉の遺

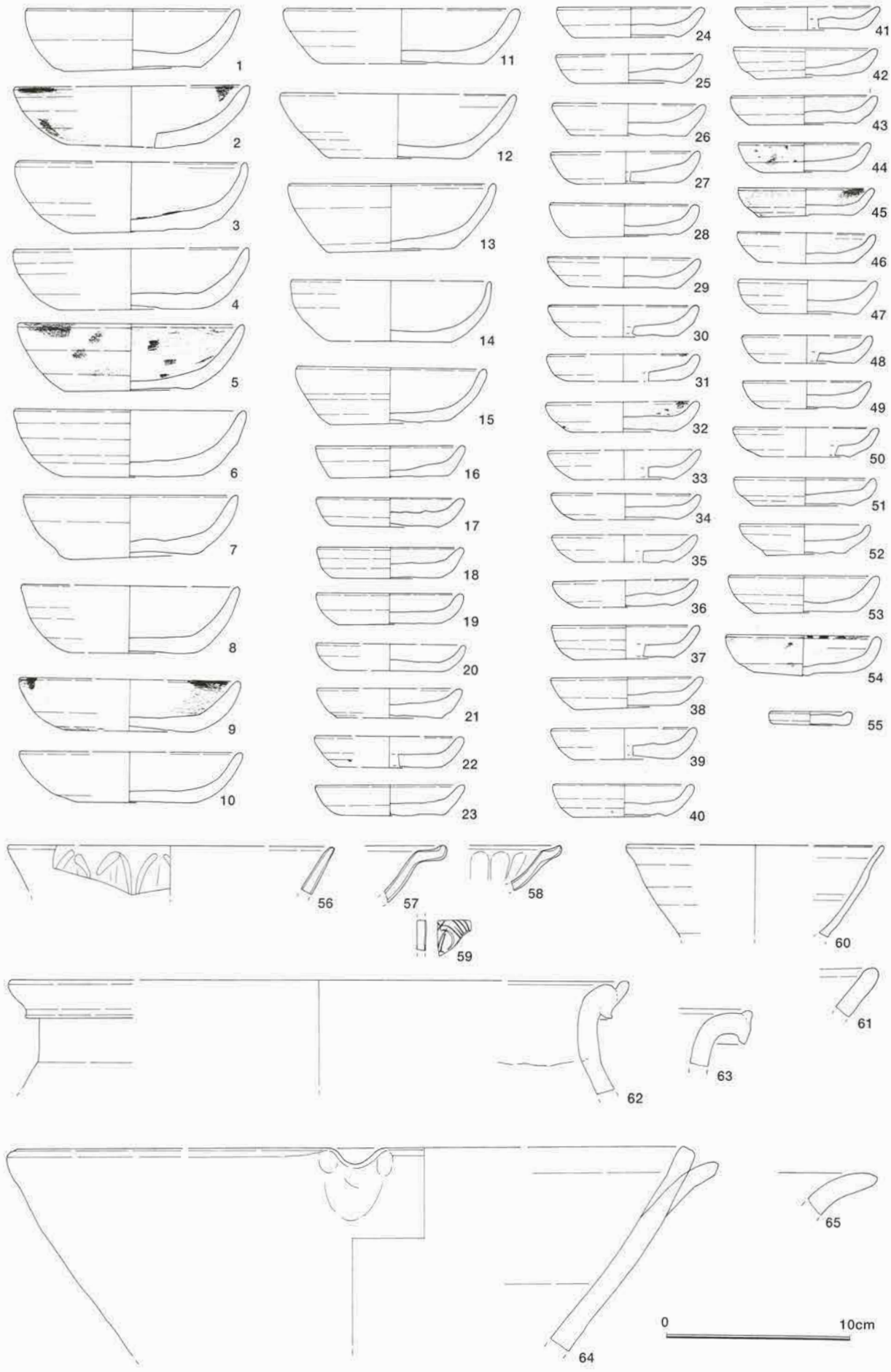

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
0
10cm

図24　4面出土遺物(1)

跡で一般的に出土するタイプ。15～20は19.0cm～20.0cmを測り、断面は四角形を呈す細い角材。箸の加工途中の物であるかもしれない。

4面出土遺物（図24～29）

図24－1～55は糸切りかわらけ。1～12は大皿、13～15は中皿。1～11は口径が12～13cmにまとまり、胎土は、1～4・10は橙色、その他は肌色～灰褐色を呈し、微砂・小礫を含み、器表はざらつく。12～15は薄手丸深型系。胎土は淡橙色～肌色を呈し、微砂を含む。丁寧に整形される。16～54は小皿。概ね、底径が広く、浅い器形。器壁は直線的に立ち上がるものが多い。50～52は底径が小さめで、器壁中位に稜を持つ。53・54は口径が8.5cm前後を測り、やや大ぶりである。胎土は橙色を呈し、小礫・微砂を含み、粗く、器表がざらつくもの・灰褐色を呈し、微砂・小礫を含み、粉質のもの・淡橙色を呈し、微砂・小礫を含み、比較的細かい粉質のものがある。2・3・5・9・18・32・44・45・50・54は灯明皿で器表に煤が付着する。55は内折かわらけ。口径は4.6cm、底径は4.3cm、器高は0.7cmを測る。胎土は灰褐色を呈し、粉質。

図24－56～59は磁器。56は青磁蓮弁文碗。口径は復元で18.0cmを測る。釉調は淡緑青色を呈し、微気泡が見られるが透明度は良い。器表は再火を受けたのかざらつく。素地は灰色を呈し、堅緻。57・58は青磁折縁鉢。58は小ぶりで、内面に陰刻で蓮弁文が施される。釉調は共に緑青色を呈し、光沢は良いが、微気泡多く失透気味。素地は灰色を呈し、緻密。59は青白磁梅瓶の胴部片。釉調はくすんだ青白色を呈し、素地は灰色を呈し、堅緻。

図24－60は山茶碗。口径は復元で14.0cmを測る。胎土は灰色を呈し、上質で堅緻。焼成は良好で硬く焼き締まる。内面には極薄く自然釉がかかる。

図24－61は山茶碗窯系こね鉢。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。

図24－62～64は常滑。62・63は甕の口縁部片。62の口径は復元で34.0cmを測る。ともにn字口縁だが、62は下端が然程引き出されない。胎土は灰色を呈し、62の器表は茶褐色で自然釉がかかり、光沢がある。64はこね鉢。口径は復元で37.4cmを測る。再火を受けたのか、内面には全体に煤が付着し、外面は細かく器表が剥離している。胎土は黒灰色を呈し、小白石粒を多く含む。器表は淡橙色を呈す。

図24－65は渥美の甕口縁部片。胎土は灰色を呈し、均一で硬質。内面を中心に厚く自然釉がかかる。

図25－1～6は瓦質の手焙り。1・2の口縁端部は内側に、3は両端が摘み出される。4～6は同一個体の可能性がある。外面の器表が剥離している。いずれも胎土は暗灰色を呈し、小石粒を多く含み、粗い。

図25－7は鉄製釘。図25－8・9は銭。8は紹聖元寶。9は皇宋通寶。

図25－10・11は砥石。10は鳴滝産仕上げ砥。11は伊予産の荒砥。

図25－12～27は漆器。12・26・27は椀。26・27は小破片。いずれも黒漆地に朱漆で文様が描かれる。12の底径は8.2cmを測り、低い削り出し高台

図24　4面　かわらけ寸法表　（　）は復元・単位はcm

番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高
1	12.0	7.5	3.3	19	8.1	5.6	1.7	37	8.2	5.4	1.8
2	(13.0)	(7.5)	3.3	20	(8.2)	(6.0)	1.5	38	8.4	5.8	1.7
3	(13.0)	7.0	3.8	21	(8.0)	(5.8)	1.6	39	(8.0)	(5.5)	1.7
4	(13.0)	(8.0)	3.3	22	(8.2)	(5.7)	1.7	40	7.8	5.1	1.8
5	12.6	7.0	3.7	23	8.0	5.8	1.7	41	(8.0)	6.0	1.3
6	13.0	7.7	3.7	24	8.1	5.7	1.7	42	8.0	5.6	1.7
7	12.0	7.6	3.5	25	(8.0)	6.0	1.6	43	8.1	5.8	1.6
8	(12.0)	7.2	3.7	26	(8.4)	(6.2)	1.7	44	7.4	4.6	1.6
9	(12.3)	(7.2)	2.9	27	(8.2)	(5.7)	1.7	45	7.5	5.1	1.5
10	(12.4)	6.7	2.8	28	8.2	6.0	1.8	46	(7.6)	(5.3)	1.7
11	(13.1)	(9.0)	3.0	29	(8.4)	(5.8)	1.7	47	7.6	5.4	1.8
12	(13.0)	(7.6)	3.5	30	(8.3)	(5.8)	1.7	48	(7.2)	(5.2)	1.5
13	11.5	7.0	3.7	31	(8.4)	(6.5)	1.5	49	(7.0)	(5.0)	1.5
14	(11.1)	(6.8)	3.3	32	(8.4)	(5.7)	1.6	50	(8.0)	(5.0)	1.6
15	10.6	6.6	3.1	33	(8.4)	(5.5)	1.6	51	7.9	5.4	1.6
16	8.2	6.5	1.7	34	(8.2)	(5.7)	1.4	52	7.2	4.4	1.7
17	8.2	6.0	1.6	35	(8.0)	(5.4)	1.5	53	8.3	5.5	2.0
18	8.1	6.0	1.7	36	(8.0)	(5.3)	1.5	54	8.5	6.0	2.2

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

図25　4面出土遺物(2)

が付く。内面は朱漆塗。菊葉文が描かれる。外底面には朱漆で「十一」と記されている。出土時には瓜科の植物の種が詰まっていた。26は内外面共に草花文が描かれ、外面には楓が見られる。27は内外面共に松喰鶴のスタンプ文。13～25は皿。16・22・23以外は低い削り出し高台が付く。いずれも黒漆地で、22・23は無文。その他は朱漆で文様が描かれる。13の口径は10.0cm、底径は6.7cm、器高は1.7cmを測る。低い高台が付く。内外面に秋草文が描かれる。14の口径は9.8cm、底径は6.6cm、器高は1.5cmを測る。内外面に千鳥が描かれる。15の寸法は復元で、口径は9.2cm、底径は7.0cm、器高は1.2cmを測る。内外面に千鳥が描かれる。16の口径は9.4cm、底径は7.0cm、器高は1.1cmを測る。内底面に撫子のスタンプ文。17の口径は9.4cm、底径は6.2cm、器高は1.3cmを測る。内外面に芒が描かれる。18は桜文が内側面3ヶ所に描かれている。19は遺存状態が悪く、寸法は計測不可。内面に草花文が描かれる。20の寸法は復元で、口径は9.1cm、底径は6.1cm、器高は1.0cmを測る。内外面に笹文が描かれる。21の寸法は復元で、口径は8.6cm、底径は6.6cm、器高は1.3cmを測る。内外面に松文が描かれる。22・23は無文で、寸法は23が復元で、各々、口径が9.5cm・8.6cm、底径が7.1cm・6.5cm、器高が1.0cm・1.3cmを測る。24の寸法は復元で、口径は8.7cm、底径は6.0cm、器高は1.2cmを測る。内外面に柳文が描かれる。25は底部の小破片。内底面に草文が描かれる。

図26～29は木製品。図26－1～87は箸。箸は図示した物で87本、他にもかなりの量が出土したが紙幅の都合上割愛した。両端が細く削りだされ、長い物で25.4cm、短いもので20.0cmを測る。概ね、断面形は楕円形を呈し、長軸0.8cm前後、短軸0.5cm前後を測る。図示したように一部が炭化しているものもある。図27－1～11は折敷。1・2はほぼ完形で、正方形を呈し、四隅が切り落とされている。1は縦18.8cm、横18.5cm、2は縦18.8cm、横19.0cmを測る。1は籤の枠が遺存している。3～11は破片。縦は8が23.6cmを測りやや大きく、3・5・7・11は18.5cm、4・6・9・10は19.0cmを測る。厚さは0.2cmを測る。いずれも、枠を留めるための孔が周辺に開けられている。また、3・7は刃物傷が認められる。

図27－12は曲物。口径は32.4cm、器高は11.8cmを測る。底板と側板は側面から木釘で留められている。側板の接合部は三重で、樹皮の紐で留められている。その他の部分は二重。図28－1～6は円板。1～5は曲物の底。1・4の直径は30.9cm・26.6cmを測る。2・4は刃物傷が表面に残り、まな板として転用された可能性がある。6は直径5.5cmを測り、中央に直径0.6cmの孔が穿たれる。7は軸。長さは72.7cmを測り、断面は直径3.0cmを測る円形を呈す。両端が端から9.0cmで一旦細く加工される。布張棒か。図29－1～8は板草履の芯。表面には藁もしくは藁の圧痕が残る。1～5の長さは23.2cm・24.7cm・24.0cm・23.2cm・23.6cmを測る。図29－9～11は下駄。9・10は連歯下駄。9は右足。11は踵の部分のみ。図29－12は用途不明の棒状製品。13は栓。上端が紐を取り付けるためくびれている。14は栓の可能性のある製品。15・16は篦。

4面物1出土遺物（図30）

図30－1～6は糸切りかわらけ。1は大皿、2～6は小皿。寸法はいずれも復元で、各々、口径が13.3cm・8.7cm・8.0cm・7.8cm・8.2cm・7.7cm、底径が8.7cm・6.7cm・5.8cm・6.0cm・5.5cm・6.2cm・5.8cm、器高が3.2cm・1.3cm・1.6cm・1.5cm・2.0cm・1.3cmを測る。胎土は橙色～灰褐色を呈し、微砂を多く含み、ややザラつく。1は灯明皿で、器表に煤が付着する。6は穿孔かわらけ。外底面は磨耗している。図30－7は漆器皿。口径は9.0cm、底径は6.3cm、器高は1.1cmを測る。低い高台が付く。黒漆地に、朱漆で内底面中央に菊花スタンプ文。図30－8は烏帽子の縁の破片。図30－9～12は木製品。9は独楽。10は脚。11・12は板草履の芯。藁の圧痕及び、藁が認められる。

5面出土遺物（図31～35）

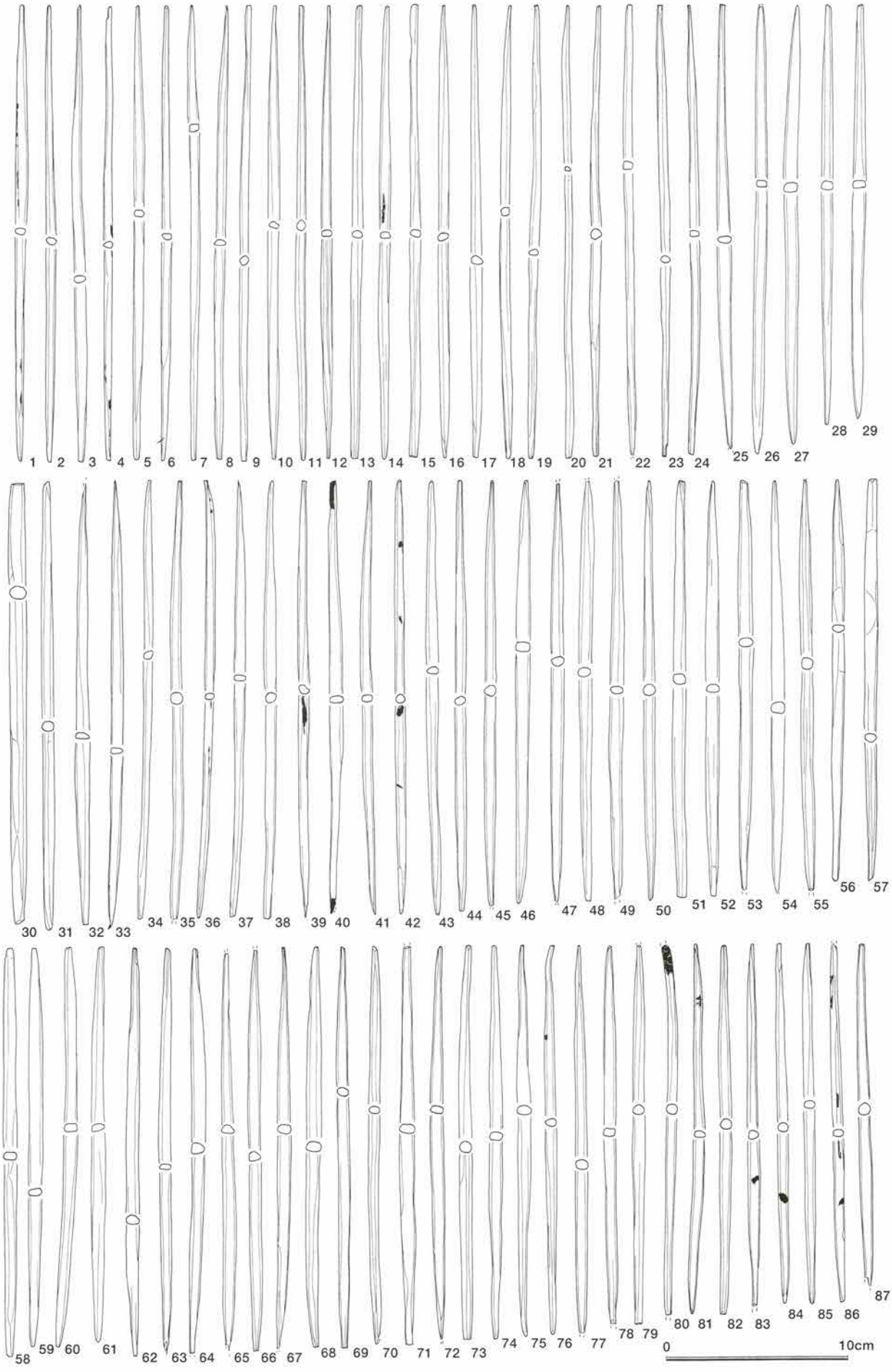

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29
30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57
58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87
0
10cm

図26　4面出土遺物(3)

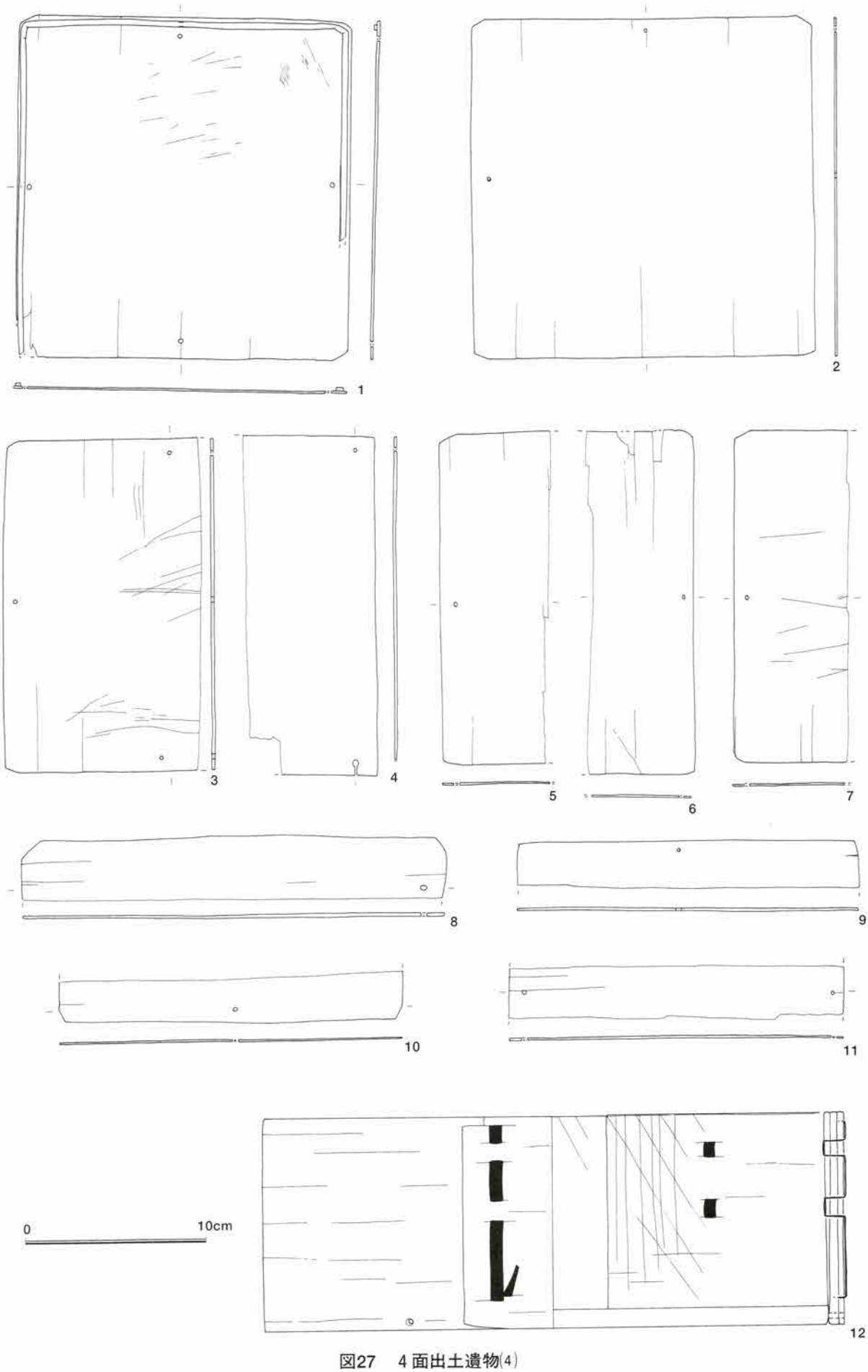


図27　4面出土遺物(4)

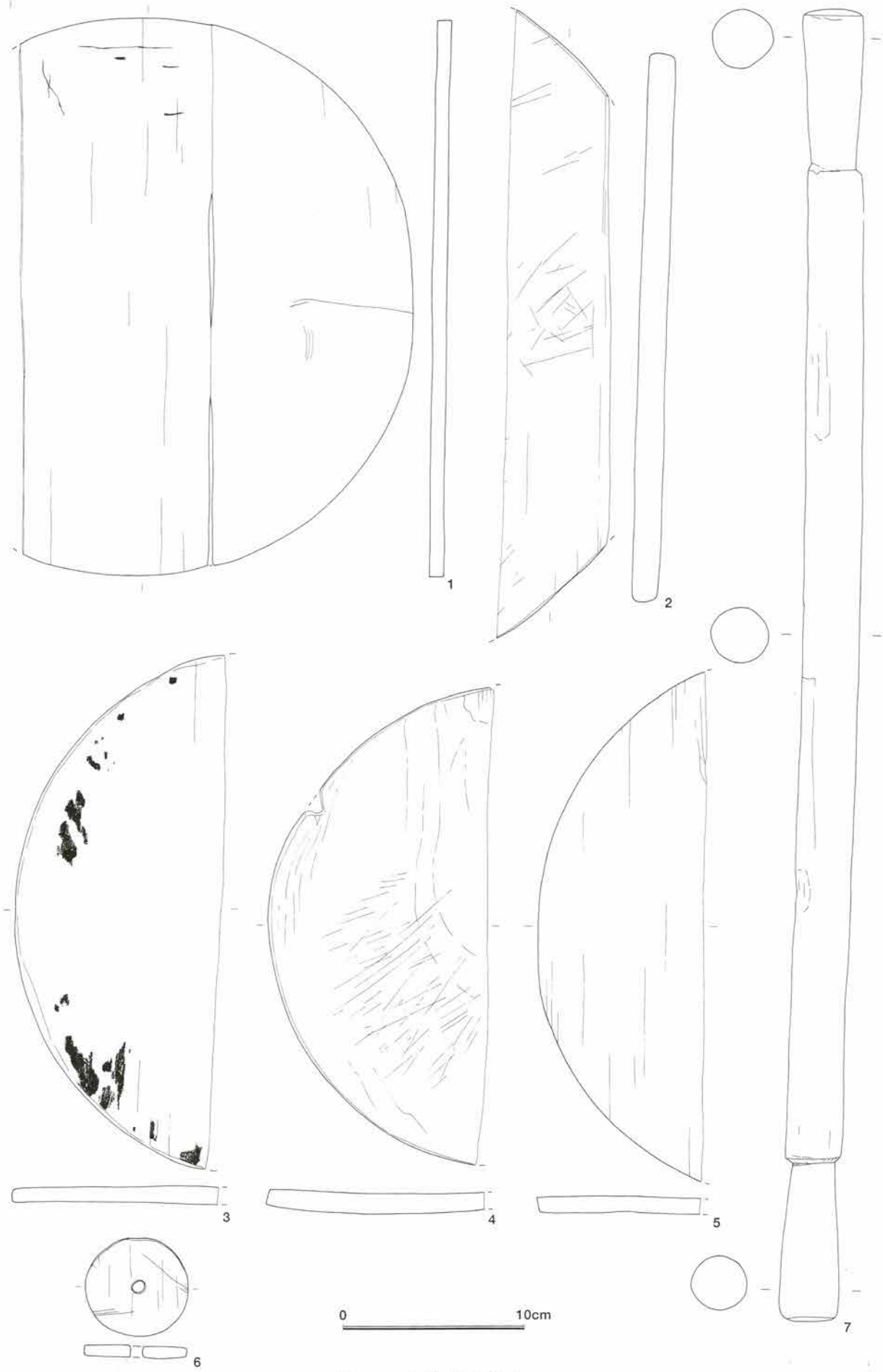


図28　4面出土遺物(5)

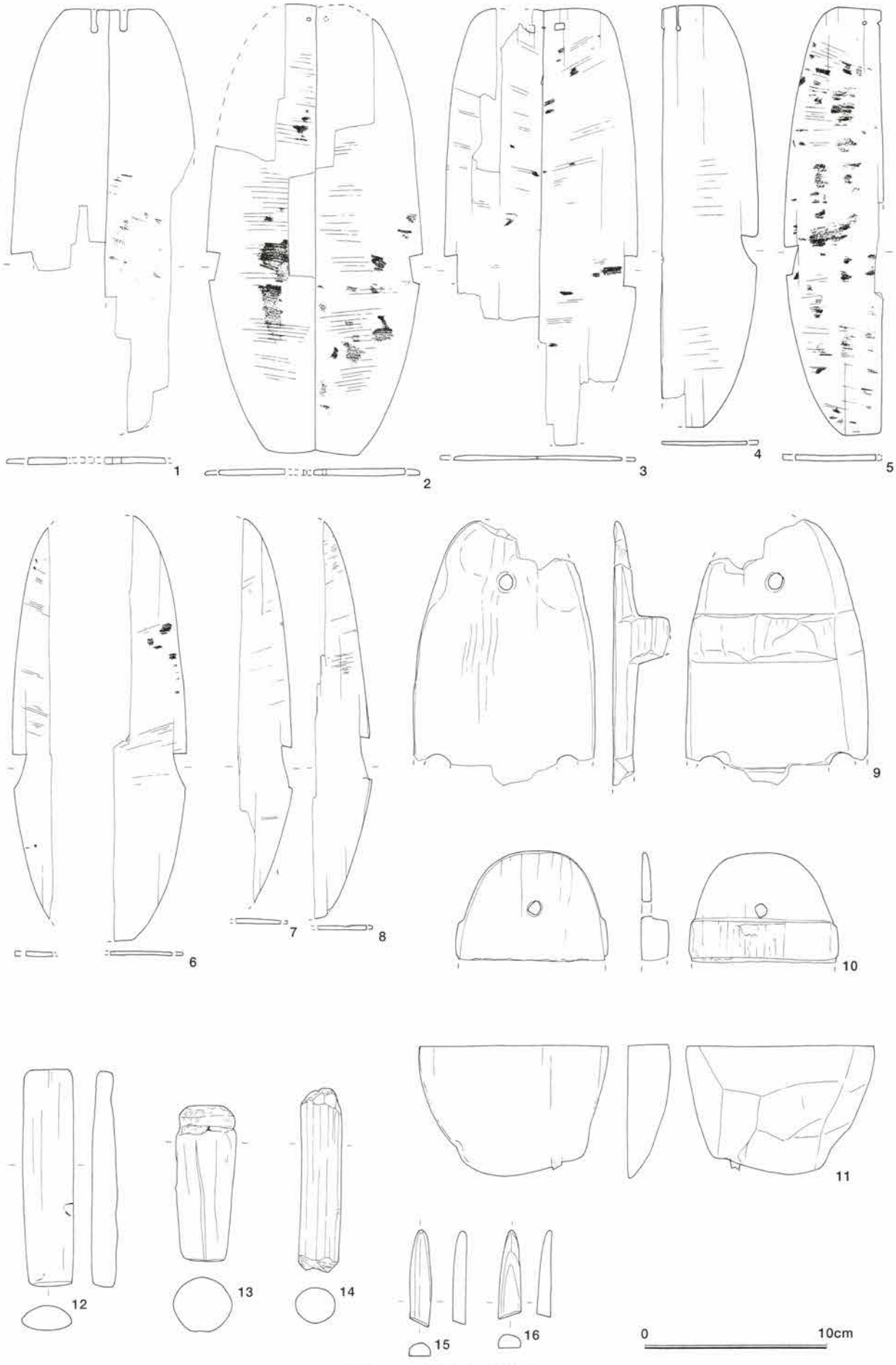


図29　4面出土遺物(6)

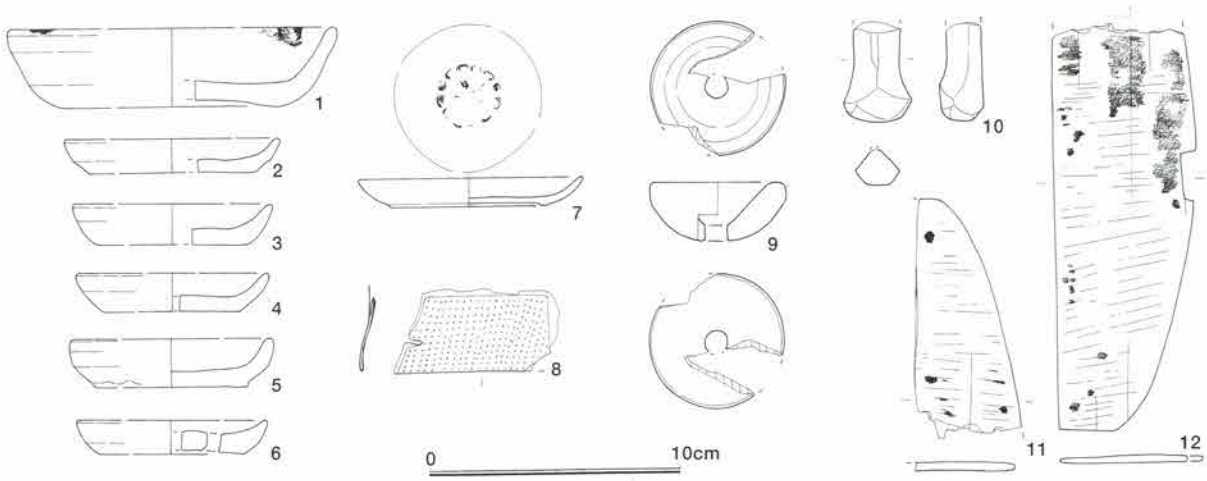


図30　4面建物1出土遺物

図31は糸切りかわらけ。図31－1～20は大皿。21は中皿。1～13は口径に対して、底径が大きく、器壁は比較的直線に立ち上がる。胎部器厚は厚手である。胎土は1～5が橙色、6～10はくすんだ灰色、11～13は淡橙色を呈し、微砂・小礫を多く含み、粉質だが粗く、器表はざらつく。やや粗雑に仕上げられ、4・7・10・11は内底面に渦巻状に筋が残り、その上から軽く撫でられている。14・15は口径が前者に比してやや大きく、器壁丸味を持って立ち上がる。胎土は淡橙色を呈し、微砂・小礫を多く含み、粉質だが粗く、器表はざらつく。16～19は器高がやや深く、器壁上位で角度を変えて立ち上がる。1・3・4・6・13・15は灯明皿で、器表に煤が付着する。20・21はいわゆる薄手丸深型。上層からの混入品。図28－22～92は小皿。22～26は底辺が大きく、口径との差が小さい。浅い器形で、器壁は直線的で側面観は逆台形を呈す。27～77は底辺がやや大きめで、器壁は丸みを持って立ち上がる。78～83は浅い器形だが、底辺は小さめ。22～83の胎土はくすんだ灰色或は橙色を呈し、微砂・小礫を多く含み、粉質だが粗く、器表はザラつく。いずれも器表の仕上げは粗雑。84～92は薄手丸深型。上層からの混入品。84～86は器壁上位に稜を持ち角度を変えて立ち上がる。丁寧に整形される。胎土は、84～86・91・92は灰色、その他は肌色を呈し、粉質できめ細かい。33・36・37・43・60・61・65・74・75・76・77・83・91は灯明皿で器表に煤が付着する。40・47・49・58・59・71・73は再火を受け、器表の一部が変色している。図31－93・94は内折れ小皿。胎土は93が肌色、94が灰色を呈し、微砂を含み粉質。

図32－1～5は磁器。1～4は青磁。1は蓮弁文碗。口径は復元で15.8cmを測る。釉調は淡緑青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は灰白色を呈し、やや粗い。2は蓮弁文小碗。口縁端部は露胎となり、器壁は垂直に近い。釉調は灰色を呈し、微気泡多く失透する。素地は灰白色を呈し、緻密。3は折縁鉢。内側面に陰刻で蓮弁文が施される。口径は復元で13.6cmを測る。釉調は緑青色を呈し、光沢は良いが、微気泡多く透明度はやや悪い。素地は灰色を呈し、堅緻。4は折腰小鉢。口径は復元で9.0cmを測る。釉調は緑青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は灰白色を呈し、堅緻。5は白磁の水注の注ぎ口。釉調は灰白色を呈し、光沢・透明度共に優れる。部分的に再火を受け肌荒れする。素地は灰白色を呈し、黒色微粒を多く含み、堅緻。

図32－6・7は山茶碗窯系こね鉢。6は口縁部片。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗く、硬く焼き締まる。口縁端には自然釉がかかる。7は底部片。底径は復元で12.4cmを測る。内面は磨滅している。胎土は暗灰色を呈し、白色石粒を含む。

図32－8～11は瓦質の手焙り。8の口径は復元で42.5cmを測る。口縁端は内側に摘み出され、口縁上面から外面上位にかけて漆が塗布されている。9は底部片。底径は復元で31.0cmを測る。いずれも胎土は暗灰色を呈し、微砂を多く含み、粗い。

図32－12は手づくねの白かわらけ。口径は復元で10.7cmを測る。胎土は白桃色を呈し、きめ細かい土

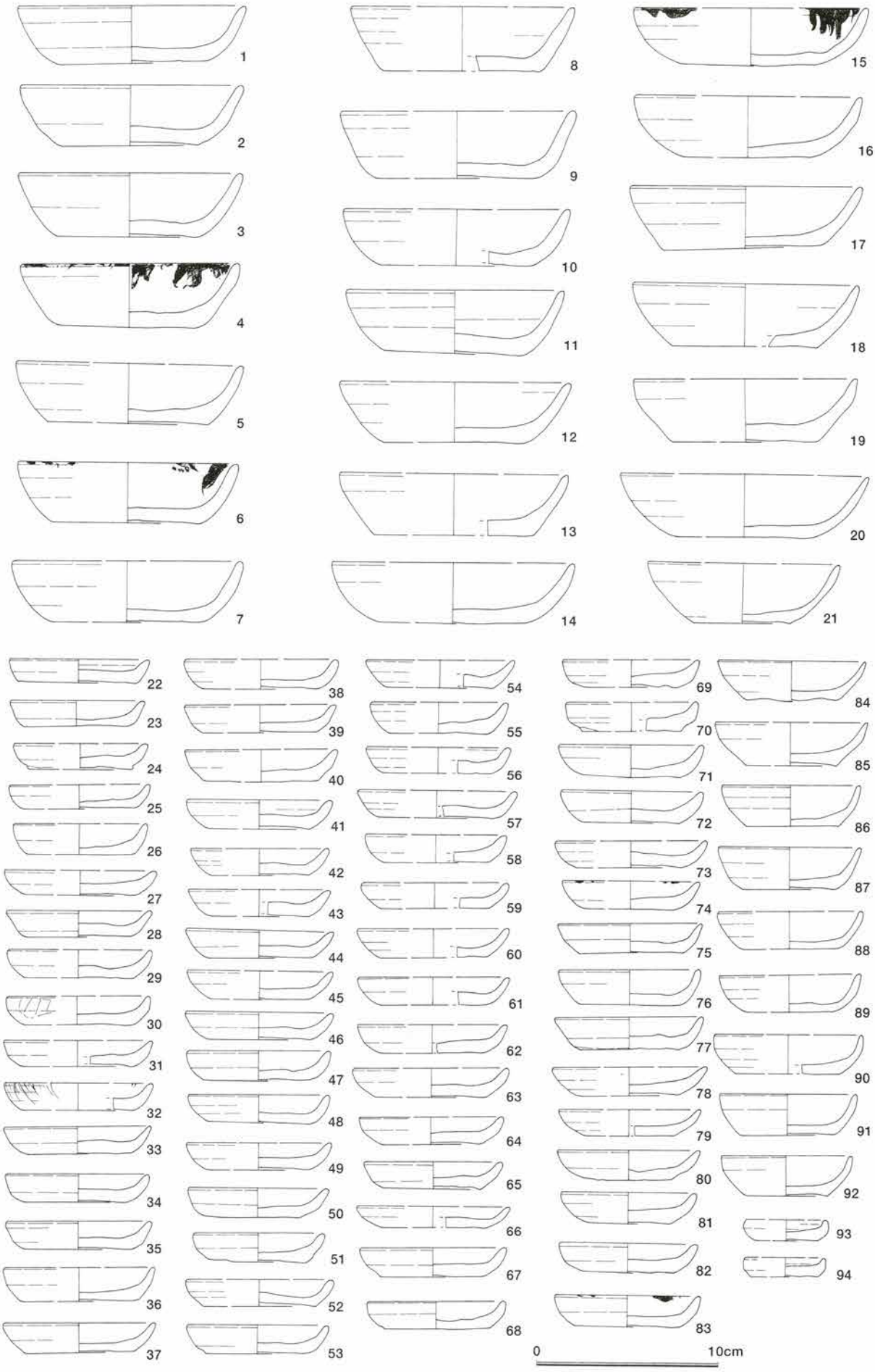

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
0
10cm

図31　5面出土遺物(1)

図31　5面　かわらけ寸法表　（　）は復元・単位はcm

番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高
1	12.8	8.2	3.2	33	8.3	5.7	1.5	65	7.7	5.5	1.5
2	12.5	7.6	3.3	34	8.0	5.6	1.6	66	(8.5)	(5.7)	1.2
3	12.5	7.8	3.6	35	8.2	6.0	1.6	67	8.2	5.8	1.6
4	12.7	7.6	3.5	36	(8.5)	(6.5)	1.9	68	7.7	5.8	1.5
5	(12.7)	(9.0)	3.3	37	8.5	6.0	1.7	69	(7.6)	(5.0)	1.5
6	12.4	8.2	3.3	38	(8.6)	(6.5)	1.7	70	(7.4)	5.5)	1.6
7	(12.9)	(8.5)	3.4	39	(8.4)	(6.3)	1.6	71	8.0	5.5	1.8
8	(12.5)	(8.6)	3.5	40	(8.5)	(6.3)	1.8	72	8.0	5.5	1.8
9	(13.1)	(9.0)	3.7	41	8.1	(5.6)	1.6	73	(8.4)	(6.0)	1.5
10	(12.6)	(8.4)	3.2	42	(7.7)	(5.5)	1.5	74	(7.6)	(5.0)	1.6
11	12.1	7.6	3.5	43	(8.0)	(5.5)	1.5	75	8.0	5.8	1.6
12	(12.8)	(7.8)	3.4	44	8.2	6.0	1.6	76	7.9	5.6	1.9
13	(12.8)	(8.8)	3.4	45	(8.1)	(5.5)	1.6	77	8.2	5.5	1.8
14	(13.5)	(8.3)	3.4	46	8.3	5.8	1.5	78	(8.6)	(5.6)	1.6
15	(13.0)	7.6	3.2	47	8.0	6.1	1.6	79	(7.9)	(5.0)	1.5
16	(12.6)	(7.0)	3.4	48	7.8	5.8	1.6	80	7.9	5.0	1.7
17	13.0	8.7	3.5	49	(8.1)	(5.8)	1.5	81	7.5	4.5	1.7
18	12.5	8.0	3.4	50	7.8	5.4	1..6	82	7.7	5.0	1.7
19	(12.4)	(8.0)	3.5	51	7.4	5.4	1.6	83	8.0	5.7	1.8
20	(13.8)	(7.4)	3.5	52	(8.2)	(6.3)	1.5	84	8.2	5.0	2.3
21	(11.6)	5.5	3.3	53	7.8	5.8	1.6	85	(8.5)	(5.0)	2.4
22	7.8	6.6	1.3	54	(8.3)	(6.0)	1.5	86	7.7	5.2	2.3
23	7.5	6.0	1.4	55	(7.7)	(5.5)	1.7	87	8.0	5.2	2.4
24	(7.5)	6.0	1.5	56	(8.0)	(6.0)	1.5	88	(8.1	(5.4)	2.1
25	(7.8)	(6.4)	1.3	57	(8.8)	(6.6)	1.5	89	(7.9)	(4.9)	2.0
26	(7.5)	(6.1)	1.7	58	(7.9)	(5.8)	1.6	90	(8.3)	(5.8)	2.2
27	(8.5)	(6.3)	1.4	59	(8.2)	(6.0)	1.4	91	7.6	5.2	2.3
28	8.1	6.0	1.5	60	(8.4)	(6.0)	1.6	92	7.3	4.4	2.2
29	(8.1)	(6.0)	1.5	61	(8.4)	(6.0)	1.5	93	(4.7)	(3.3)	1.2
30	(8.0)	(6.0)	1.6	62	(8.4)	(5.8)	1.6	94	(4.5)	(3.6)	1.1
31	(8.3)	(6.4)	1.4	63	(8.7)	(6.2)	1.6				
32	(8.3)	(6.2)	1.5	64	(8.0)	(5.5)	1.5				

に赤色粒・微砂を多く含む。

図32－13は銭。開元通寶。この他に用途不明の銅板が一片出土した。

図32－14～16は石製品。14は京都鳴滝の仕上げ砥。15・16は滑石製品。いずれも西彼杵産。15は鍋。口径は復元で22.0cmを測る。外側は一面に煤が付着している。また、内側から見て左の断面はきれいに切断され、そのすぐ脇には縦に筋目が入っており、再加工した痕跡がある。16は用途不明。鍋転用品。

図33－1・2は常滑の甕。1の口径は復元で36.8cmを測る。1の胎土は黒灰色、部分的に肌色を呈し、白色石粒を多く含み、硬く焼き締まる。器表は茶褐色を呈し、口縁内側から肩にかけて自然釉がかかり、光沢がある。また、内面には煤が付着している。

図34－1～11は漆器。9は黒漆塗りの無文、その他は黒漆地に朱漆で文様が描かれる。1～8は椀。1の底径は7.6cmを測る。低い削り出し高台が付く。内外面に桐と芒の組み合わせ文が描かれる。2は内外面に波と楓の組み合わせ文が描かれる。3・4の文様は小破片のため詳細は不明。4の内側は朱塗。5は同一個体の破片。内面はおそらく鶴と松、外面は松の文様が描かれる。6は亀甲内に菊が描かれる。7は内面に菊花スタンプ文。8は底部片で、底径は7.0cmを測る。内底面に、スタンプで松葉と鶴が捺され、松の幹は手書きで描かれる。9・10は皿。9は無文。復元で、口径は9.7cm、底径は6.8cm、器高は1.2cmを測る。10の寸法は口径が9.7cm、底径が6.8cm、器高が1.1cmを測る。低い削り出し高台が付く。内面に桐と草の組み合わせ文が描かれる。11は脚。黒漆塗りで、底面に朱漆が付くが、意図したもので

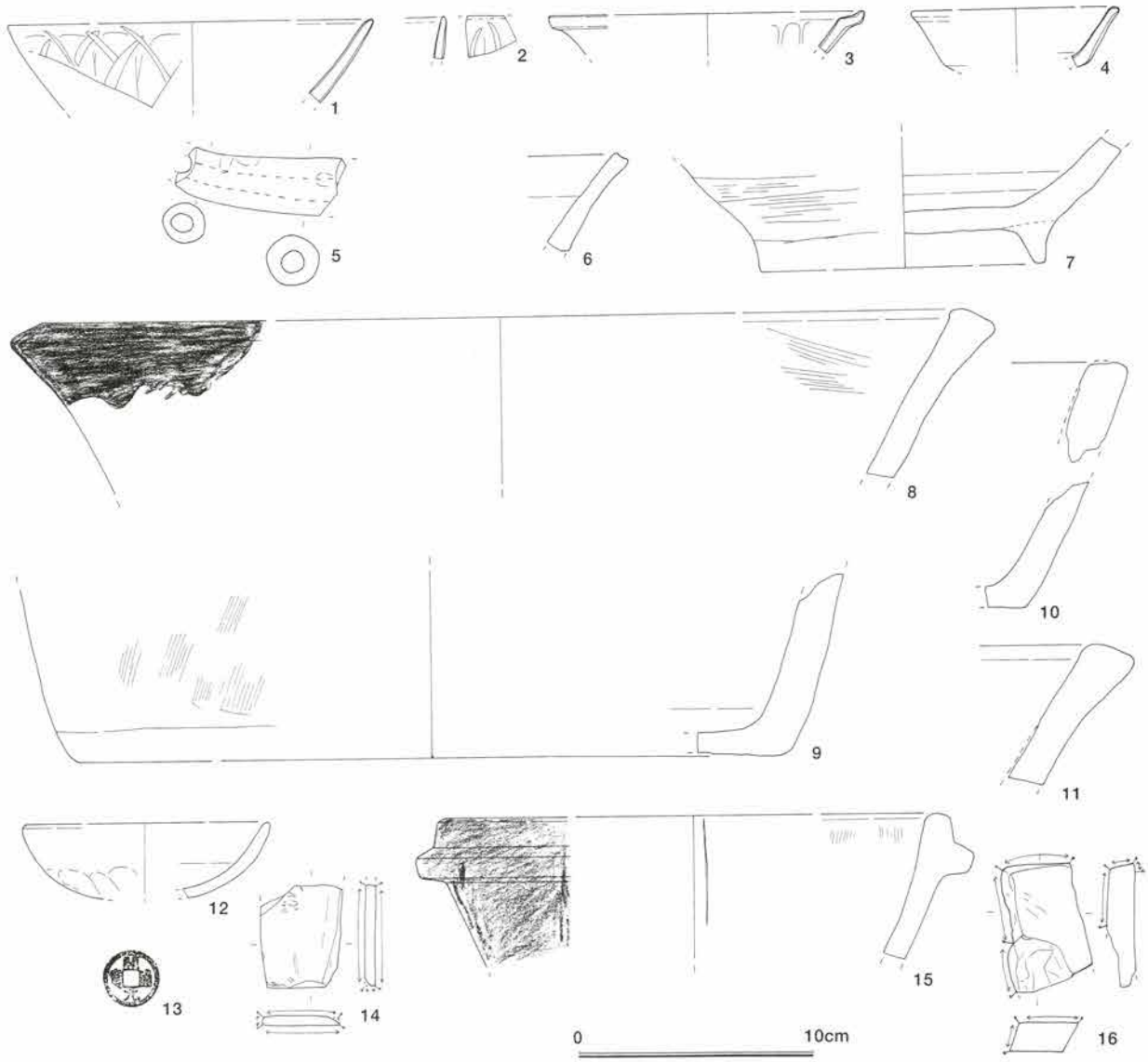


図32　5面出土遺物(2)

はない。

図34－12～73・図35は木製品。図34－12～73は箸。箸は図示した物の他にも大量に出土している。両端が削りだされている。中には一部炭化しているものもある。長さは長い物で26.6cm、短いもので19.4cmを測り、概ね、23.0cm前後を測るものが多い。図35－1～8は菜箸。3・5・6の先端は炭化している。9は箆状製品。10・11は折敷。12は円板。13は板草履の芯。14は連歯下駄。歯の断面形は台形を呈す。15は棒状製品。先端が削出される。16・17は用途不明。

6面出土遺物（図36－1～13）

図36－1～13は6面出土遺物。1～7は糸切りかわらけの小皿。寸法は復元で、各々、7.7cm・8.0cm・8.2cm・8.0cm・8.6cm・8.1cm・8.0cm、底径は5.9cm・6.0cm・6.2cm・6.4cm・6.6cm・5.6cm・5.8cm、器高は1.4cm・1.4cm・1.5cm・1.5cm・1.7cm・1.6cm・1.8cmを測る。底径は広めで、器壁は外向きに立ち上がり、浅い器形。胎土は3・4が淡橙色、その他は灰褐色を呈し、微砂を多く含む。2は灯明皿で器表に煤が付着する。

図36－8は山茶碗窯系こね鉢。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗く、硬く焼き締まる。内面は薄く自然釉がかかり、光沢がある。

図36－9は鉄製釘。

図33　5面出土遺物(3)

図36－10～13は木製品。10～12は箸。若干太い。13は板の片面の一部に黒漆が付着している。

6面溝1出土遺物（図36－14・15）

図36－14・15は糸切りかわらけ。14は大皿、15は小皿。寸法は復元で、各々、口径が13.2cm・8.0cm、底径が7.2cm・6.0cm、器高が3.4cm・1.5cmを測る。胎土は淡橙色を呈し、微砂・小礫を含み、粉質。

7面出土遺物（図36－16～24）

図36－16は糸切りかわらけの小皿。復元で、口径は8.0cm、底径は5.4cm、器高は1.6cmを測る。胎土は

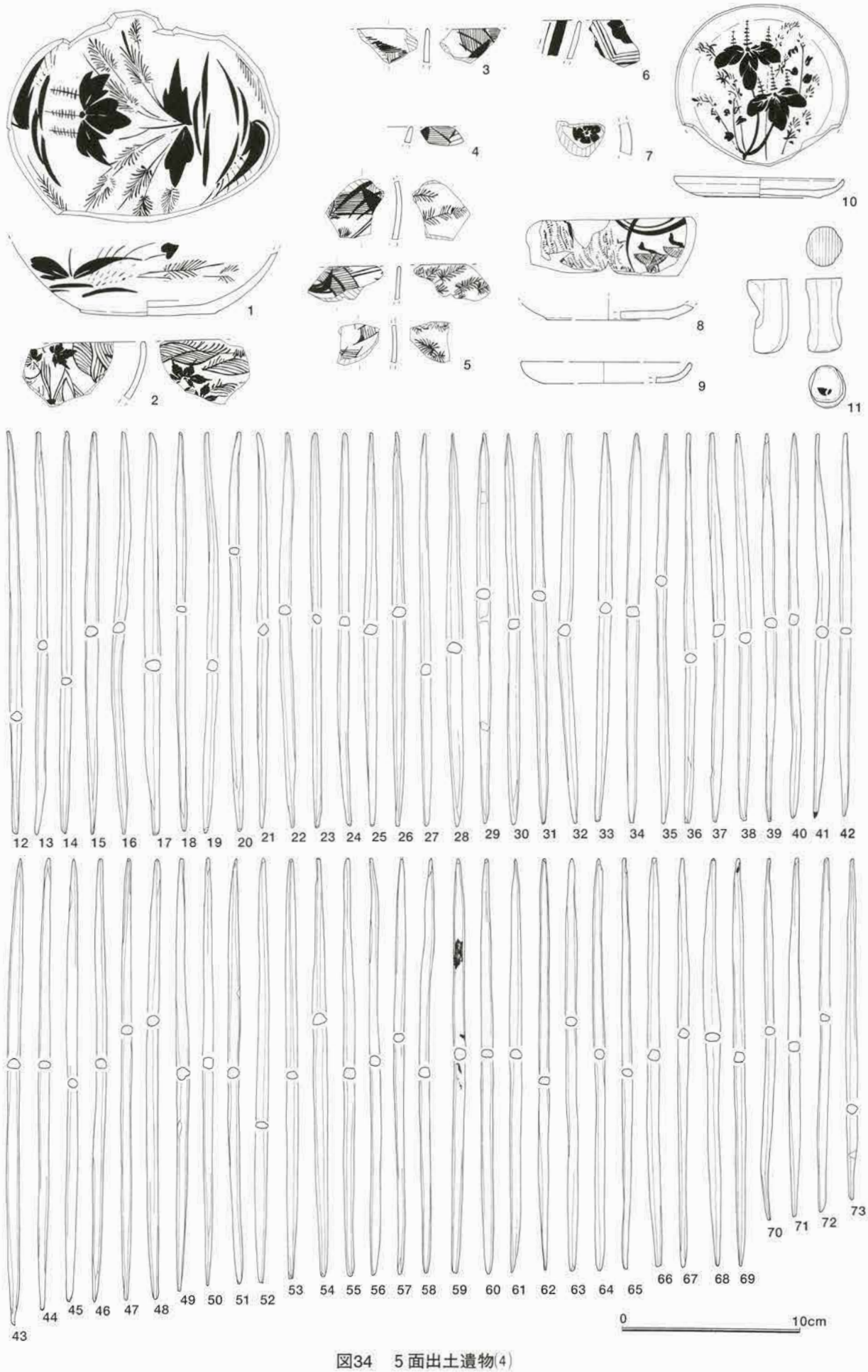

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42
43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73
0
10cm

図34　5面出土遺物(4)

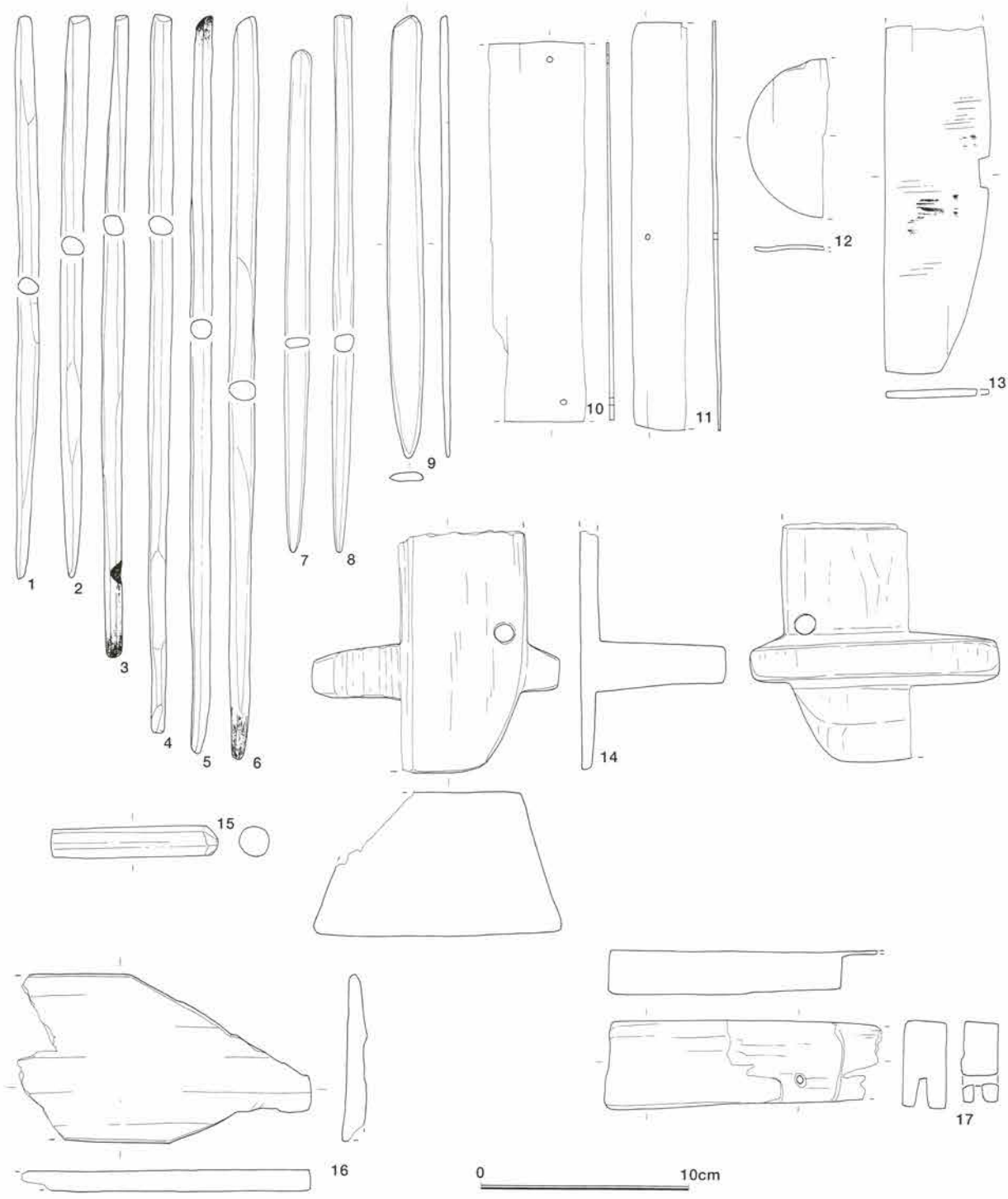


図35　5面出土遺物(5)

橙色を呈し、微砂を含む。灯明皿で器表に煤が付着する。底面中央には孔が穿たれている。図36－17は青磁蓮弁文碗。復元で口径は15.4cmを測る。釉調は緑灰色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は暗灰色を呈し、堅緻。

図36－18は瓦器碗。手づくねで、黒色処理はされていない。内側面には横位の暗文が施される。胎土は灰白色を呈し、水簸され緻密。

図36－19は平瓦。凸面には縄目、凹面には布目がある。胎土は表面は濃灰色、胎芯は紫褐色を呈す。白色微石粒を含み、粘性のある土で硬質。

図36－20は上野産沼田砥。

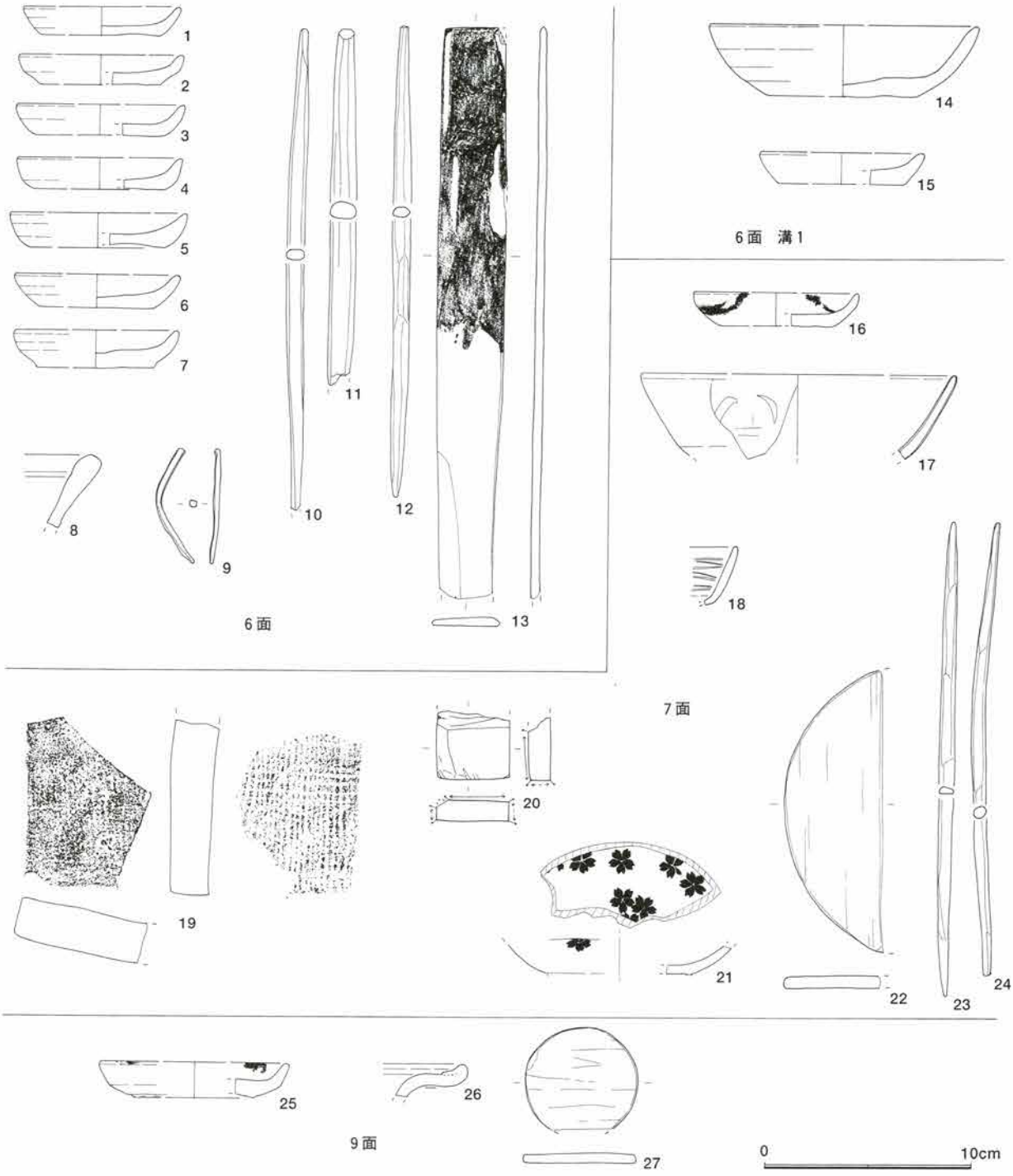


図36　6面・6面溝1・7面・9面出土遺物

図36－21は漆器椀。底径は推定で7.0cmを測る。黒漆地に内外面に朱漆で桜のスタンプ文。

図36－22～24は木製品。22は円板。23・24は箸。

8面出土遺物

8面からは図示し得る遺物は出土しなかった。

9面出土遺物（図36－25～27）

図36－25は糸切りかわらけの小皿。復元で、口径は9.0cm、底径は5.7cm、器高は1.7cmを測る。胎土は灰褐色を呈し、微砂を含み、粉質。灯明皿で器表には煤が付着する。

図36－26は伊勢系土鍋。口縁は外側に水平に折り曲げられ、端部は折り返される。胎土は器表は白褐色を呈し、胎芯は濃灰色を呈す。白色石粒を多く含み、粗い。

図36－27は木製円板。直径は5.4cm、厚さは0.5cmを測る。

10面出土遺物（図37・図38－１～５）

図37－１は手づくねかわらけの大皿。復元で口径は13.2cm、器高は3.0cmを測る。胎土は橙色を呈し、微砂を含み粉質。胎芯は濃灰色を呈す。

図37－２は伊勢系土鍋。口縁部は外側に水平に折れ曲がり、端部は折り返される。胎土は濃灰色を呈し、胎芯は黒色に残る。白色石粒を多く含み、粗い。器表は内外面共に一面に煤が付着する。

図37－３～10・図38－１～５は瓦。10面は調査面積が狭いため、詳細は不明だが、瓦片が集中して出土した。図37－３は軒平瓦の瓦当部。唐草文が捺される。図37－４～10・図38－１～５は平瓦で、いずれも凸面には縄目がある。４・９は粗い縄目、凹面には布目が残る。縄目に直交するように筋の入るものもある。４はカーブがきつい。胎土は４が灰白色、器表は黒色、９が黒灰色を呈し、微石粒・微砂を多く含み、軟質。その他は概ね、灰白色～灰色を呈し、白色石粒を含み粗く、陶器のように硬く焼き締まる。

11面出土遺物（図38－６～９）

図38－６～９はかわらけの小皿。６～８は手づくね。寸法は復元で、各々、口径が9.3cm・10.0cm・9.0cm、器高が3.0cm・1.7cm・1.9cmを測る。６は深い器形で、断面形は潰れた半円形を呈す。胎土は肌色を呈し、微砂を多く含む。７・８は平底で浅い器形。底部との境が強い稜を持ち、急激に立ち上がり、器壁上方はやや開く。胎土は淡橙色を呈し、きめ細かく、粉質である。９は糸切り。復元で、口径は9.0cm、底径は6.7cm、器高は1.5cmを測る。底径が広く、浅い器形。器壁は外向きに直線的に立ち上がり、断面形は逆台形を呈す。胎土は淡橙色を呈し、微砂を多く含み、器表はざらつく。

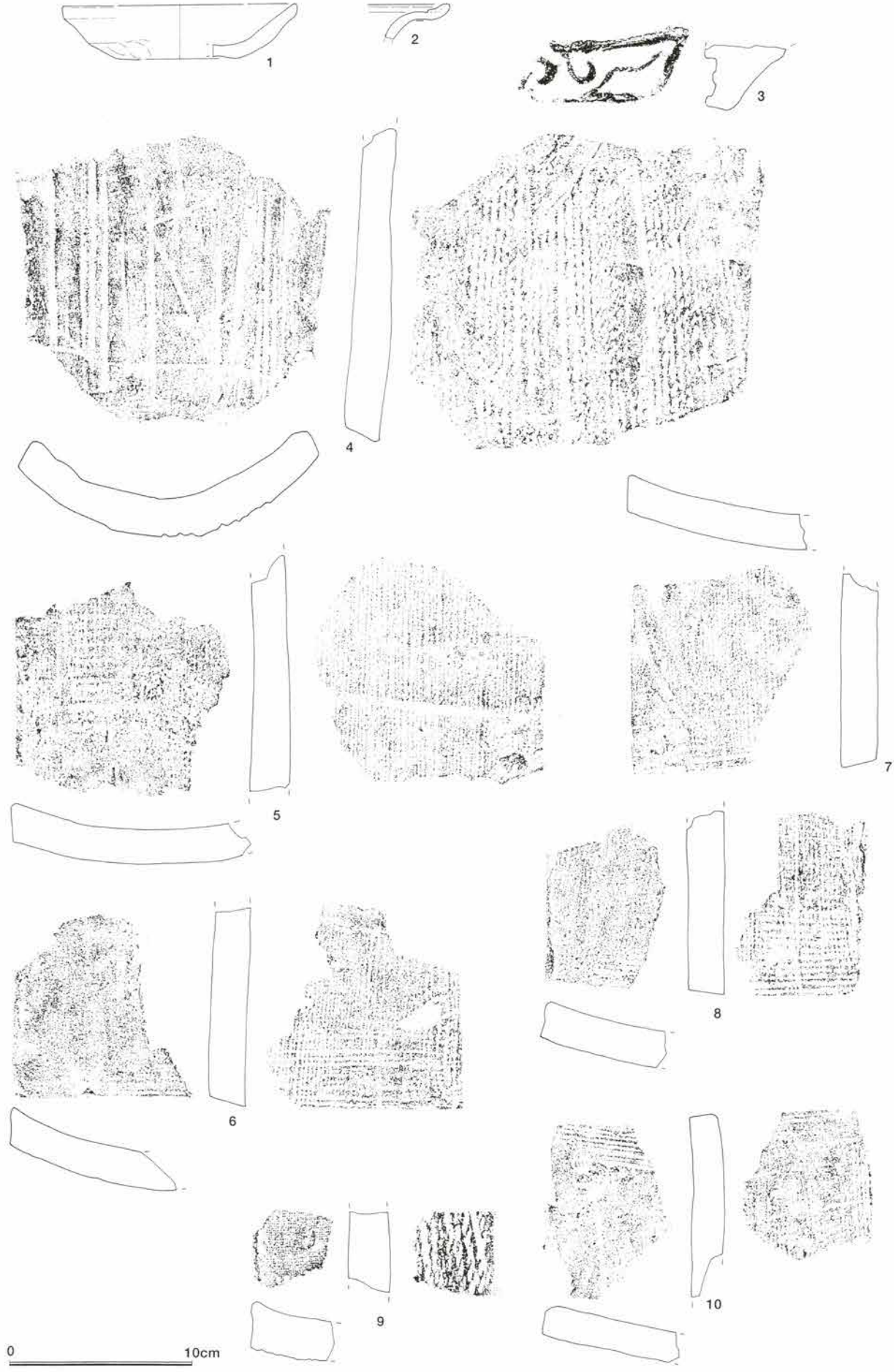


図37　10面出土遺物(1)

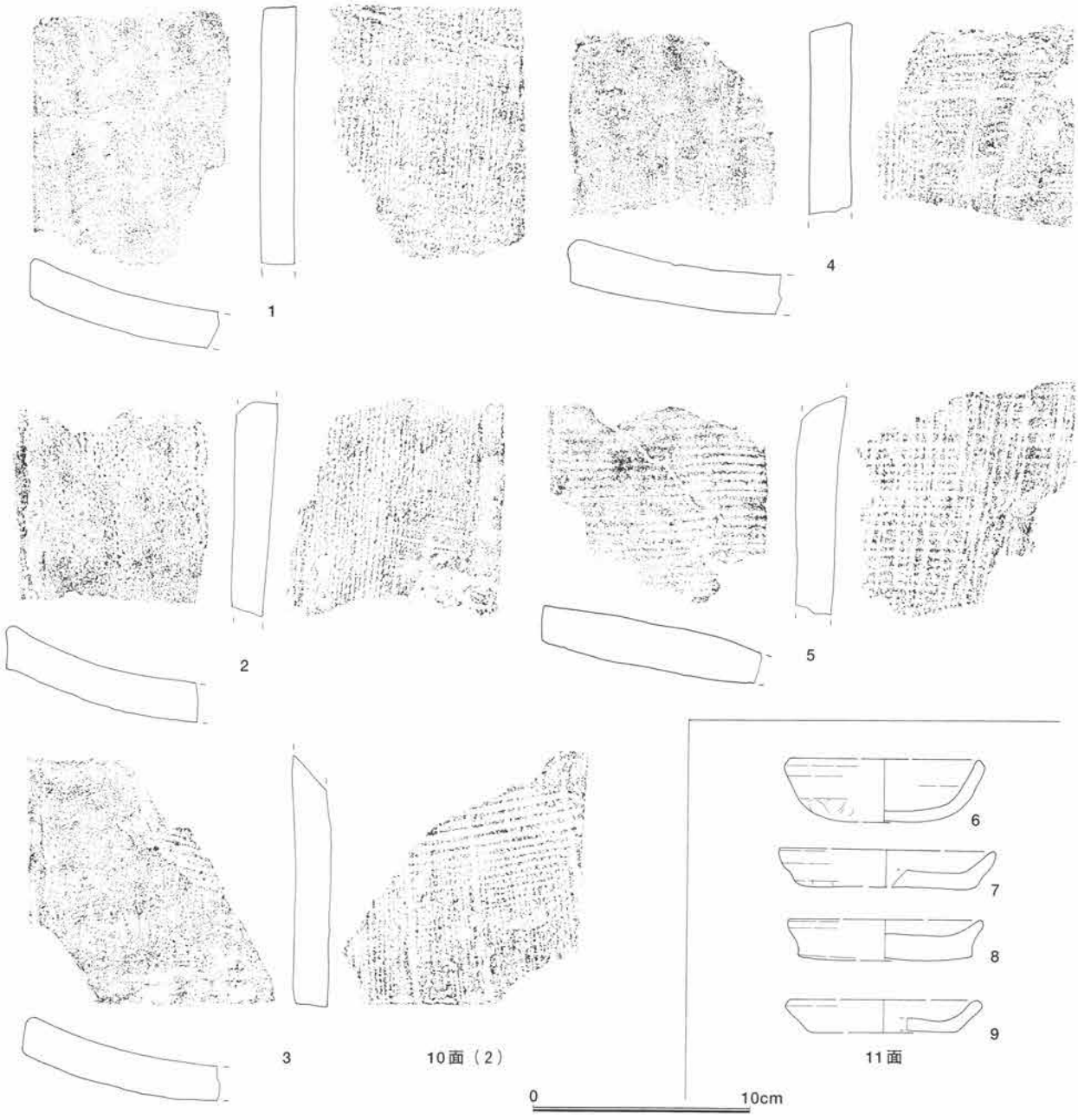


図38　10面(2)・11面出土遺物

第４章　第２地点の調査

第１節　概要

１．層序と面の概要

標高約13.50mの表土から最下層までの深さは３ｍを超え、この間に調査した生活面は、全部で18枚を数える。いずれの面も破砕泥岩などによってしっかりと形成されている。以下順次みてみよう。

１面（図43）　地表下50～60cmほどまで近・現代の土が入っており、それを除くとすぐに、最初の中世包含層（茶褐色粘質土　調査区東・西・南壁土層番号１、標高約13.20m）があらわれる。中世層まで削平が及んでいるという市内によく見られる状況が、ここでも観察される。この層を取り除くと、その下から、主として３つの中世期包含層があらわれる。

第１は直上の茶褐色土と同質だが半人頭大泥岩などを多く含んだ土（調査区東・西・南壁番号３）であり、溝１・土坑１などの遺構がこれに含まれる。第２は土師器細片・炭化物・焼土・泥岩粒で占められ暗赤色化した土で、便宜的に焼成土とよぶこともある。この焼成土は、平面的に層をなしているものと、落込み内を充填している場合とがあるが、両者は重なったり近接したりしている。第３は黄灰色泥岩地行である。版築状のものは焼成土が直上にあり時期は古いが、薄い軟弱なものは焼成遺構などを覆う形で検出されている。（焼成遺構７）これらの層の検出高は約12.8～13.2mの間にある。第１の茶褐色土と散布された焼成土を１ａ面に、焼成土除去後に検出した落込みなどの遺構や泥岩地行面を１ｂ面とした。検出された遺構は以下のとおり。

１ａ面（図43）：溝１条・焼成遺構８基・柱穴様小穴５口・土坑３基

１ｂ面（図43）：落込み（焼成遺構を含む）９基・柱穴様小穴34口・土坑６基

２面（図54・59）　１面の構築層である厚い黄灰色泥岩地行を取り除くと、しまりのない何枚かの２面構成土があらわれる。薄い泥岩地行・炭・明茶褐色粘質土（西壁番号８・南壁番号18）などで構築された面だが、いずれも生活の基盤としては弱く、1面整地時に削平を受けたとも考えられる。

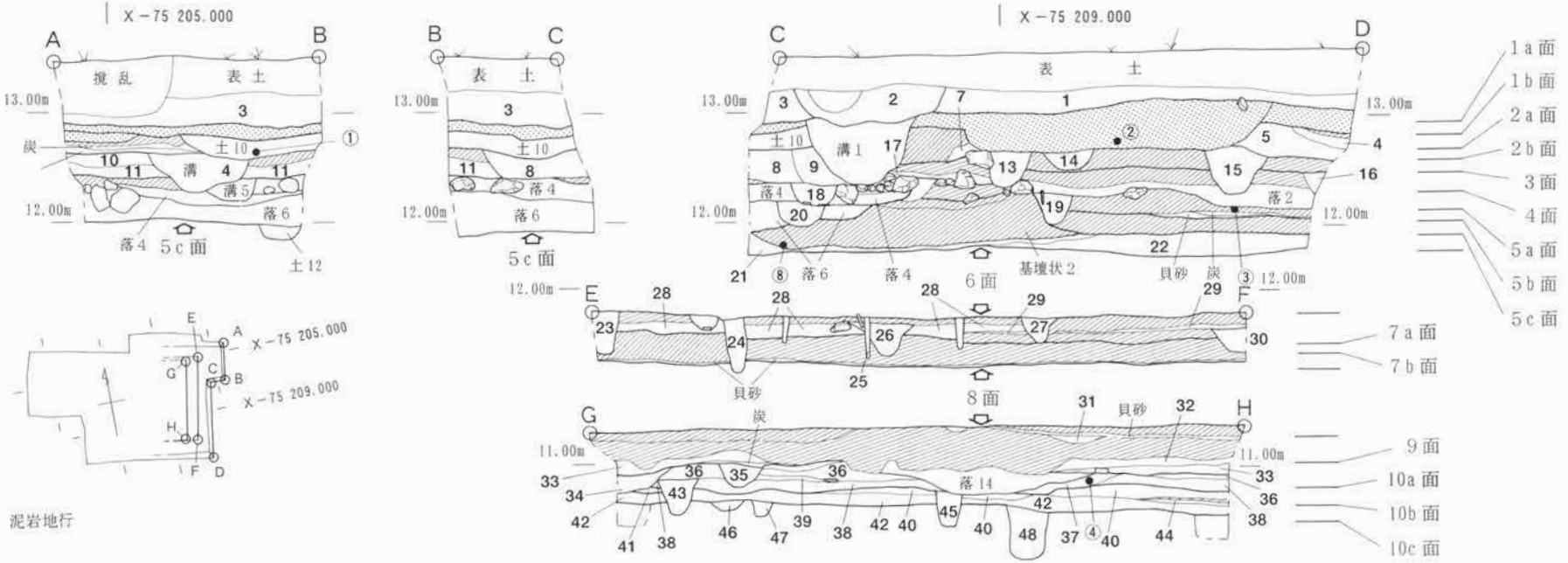
薄い泥岩地行や炭層の下には、同様のしまりのない明茶褐色粘質土・黄褐色砂質土が広がる。これも面ととらえてよいものだったが、遺構の検出は判然としなかった。しかし、３面で検出したもののうちには、のちの土層検討等においてより上位の層からの切込みと判断できるものがあったので、それらを大きくみて２面下部の明茶褐色粘質土・黄褐色砂質土のものと判断し、あらたに２ｂ面を設定した。そして、先に検出した層には２ａ面の呼称を付した。検出高は２ａ面が約12.6～12.8m、２ｂ面が12.55m～12.7mである。それぞれの検出遺構はつぎのとおり。

２ａ面（図54）：建物２棟・溝２条・柱穴様小穴73口（建物柱穴を含む）・土坑４基

２ｂ面（図59）：基壇状遺構１・溝1条・柱穴様小穴７口・土坑１基

３面（図63）　２面を掘り下げて標高12.50m辺りになると、ざらざらとした薄い青灰色砂質土があらわれはじめる。さらにその砂質土下を精査すると、ほぼ全域に版築による安定した泥岩地行面が拡がり、これを３面とした。３面は多数の遺構が検出されたが、その中には先に述べたように２ｂ層から掘られた遺構が含まれている可能性もある。３面検出遺構は以下のとおり。

建物１棟・柱穴列１列・柱穴様小穴78口（建物柱穴・柱穴列を含む）・溝状遺構１



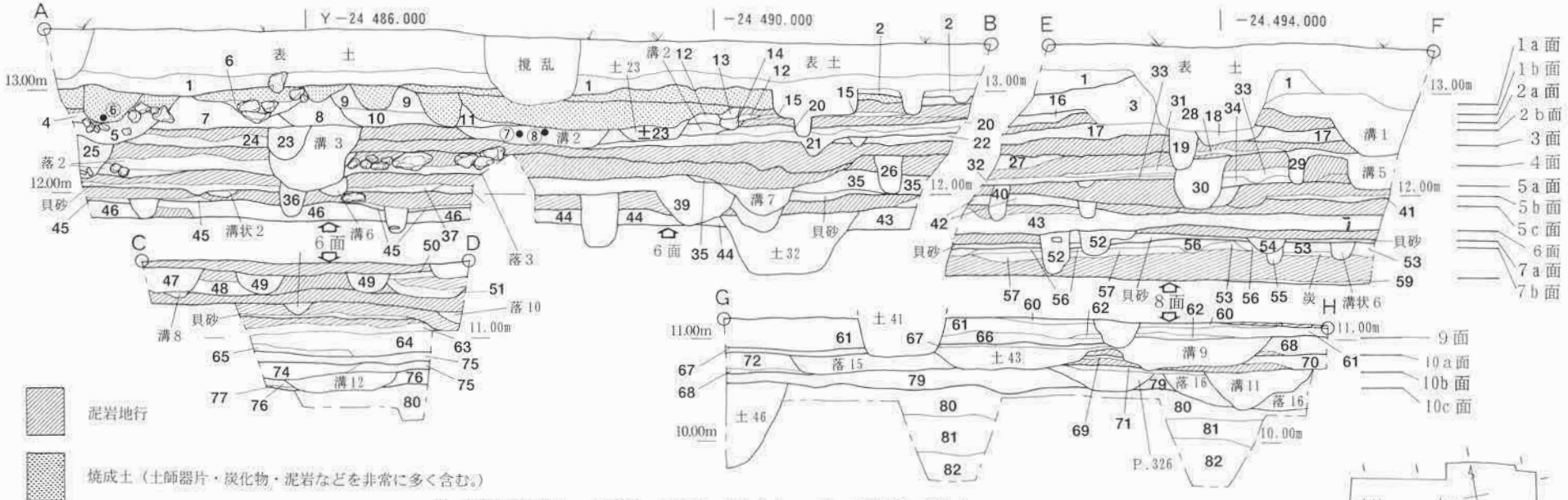
泥岩地行

焼成土（土師器片・炭化物・泥岩などを非常に多く含む。）

1．茶褐色粘質土　土師器小片・泥岩粒・炭化物を含む。
2．茶褐色粘質土　泥岩（小石大）・土師器片を非常に多くに含む。（土坑覆土）
3．茶褐色粘質土　泥岩（半人頭大）が占める。
4．茶褐色粘質土
5．暗茶褐色粘質土　炭化物を多く含む。（上面1b面）
6．暗茶褐色弱粘質土
7．灰茶褐色粘質土　粉砕泥岩を多く含む。
8．暗茶褐色粘質土　（土坑覆土）
9．暗茶褐色粘質土　（ピット覆土）
10．灰茶褐色粘質土　粉砕泥岩を非常に多く含む。（土坑覆土）
11．灰茶褐色粘質土　粉砕泥岩・炭化物・遺物片を含む。
12．暗茶褐色粘質土　泥岩（小石大）を非常に多く含む。
13．暗茶褐色粘質土　泥岩（小石～半人頭大）を多く含む。
炭化物・土師器片が混入する。（建物1－P.11）
14．暗茶褐色粘質土　炭化物・粉砕泥岩・土師器片を含む。（ピット覆土）
15．暗茶褐色粘質土　13と同質。（建物1－P.15）
16．暗茶褐色粘質土　泥岩（粉砕～こぶし大）を多く含む。（ピット覆土）
17．暗茶褐色粘質土　炭化物を含む。
18．灰茶褐色粘質土　泥岩（粉砕～こぶし大）が占める。底部に礎板がある。
（ピット覆土）
19．暗青灰色粘質土　下部に泥岩が占める。（ピット覆土）
20．茶褐色腐植土　遺物（木器等）を非常に多く含む。（ピット覆土）
21．暗茶色腐植土　炭化物と貝殻片を含む。
22．暗褐色粘質土　粉砕泥岩が非常に多い。貝・土師器片が混入する。
23．暗灰褐色粘質土　貝砂・泥岩が混入する。しまり弱い。（ピット覆土）
24．暗茶褐色粘質土　泥岩を多く含む。貝殻片が混入する。（ピット覆土）
25．灰茶褐色粘質土　（杭穴覆土）
26．暗灰褐色粘質土　23と同質。（ピット覆土）
27．暗灰褐色粘質土　23と同質。（ピット覆土）
28．暗灰褐色粘質土と粉砕泥岩層　上面に薄い貝砂がある。
29．暗茶色腐植土
30．暗灰褐色粘質土　泥岩・木片を含む。（ピット覆土）
31．青灰褐色粘質土
32．暗茶色腐食土
33．暗茶色腐食土
34．暗茶色腐食土　炭化物を含む。
35．暗褐色粘質土　木片・貝殻片・炭化物を含む。
36．茶褐色粘質土　木片・泥岩粒・貝殻片を多く含む。（上面9面）
37．暗茶褐色粘質土　粘性強。木片・貝砂・炭化物を僅かに含む。
38．暗褐色粘質土　泥岩粒・炭化物・貝殻片を少し含む。（上面9面）
39．暗褐色粘質土　38と同質。
40．暗褐色粘質土　泥岩（小石大）を多く含む。貝殻片・炭化物が混入する。（上面10a面）
41．暗褐色粘質土
42．青灰褐色粘質土　泥岩（小石大）・茶褐色粘質土
・貝砂の混合土。（上面10a面）
43．黒褐色粘質土　木片・炭化物・貝殻片を多く含む。
（ピット覆土）
44．暗褐色粘質土
45．黒褐色粘質土　貝殻片を多く含む。（ピット覆土）
46．黒褐色粘質土　含有物少ない。（ピット覆土）
47．黒褐色粘質土　（ピット覆土）
48．黒褐色粘質土　（ピット覆土）

0　2m

図39　調査区東壁土層図



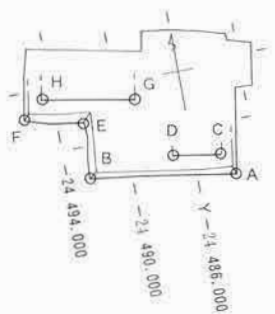


図40　調査区南壁土層図

1．茶褐色粘質土＝東・西壁No.1
2．黄茶褐色粘質土＝西壁No.2
3．茶褐色粘質土＝西壁No.3
4．茶褐色粘質土＝東壁No.4
5．暗茶褐色粘質土＝東壁No.5
6．人頭大泥岩が占める。底部に土師器片がある。
7．暗茶褐色粘質土　泥岩（人頭大）を含む。
8．茶褐色粘質土（土坑覆土）
9．茶褐色粘質土　泥岩（小石大）を非常に多く含む。（土坑覆土）
10．暗茶褐色粘質土　泥岩（小石大）・炭化物・土師器片を含む。（土坑覆土）
11．暗茶褐色粘質土
12．暗褐色粘質土　炭化物・土師器片を含む。
13．明褐色粘質土　泥岩（小石大）・土師器片を多く含む。
14．明褐色粘質土　13と同質。
15．黄褐色粘質土　土師器片が混入する。
16．明茶褐色粘質土　3と同質。炭化物を含む。
17．明茶褐色粘質土＝西壁No.8（上面2b面）
18．暗茶褐色粘質土
19．暗茶褐色粘質土　泥岩（小石大）を多く含む。炭化物が混入する。（ピット覆土）
20．黄茶褐色粘質土＝西壁No.5（2a面）
21．暗褐色粘質土＝西壁No.6
22．暗褐色粘質土　炭化物・土師器片を含む。
23．暗褐色粘質土　泥岩（粒～小石大）・土師器片・炭化物を含む。（ピット覆土）
24．暗茶褐色粘質土　土師器片・炭化物を少し含む。
25．暗茶褐色粘質土＝東壁No.16
26．黄茶褐色粘質土（建物4　P.4）
27．暗茶褐色粘質土＝西壁No.24
28．暗黄茶褐色粘質土
29．暗黄褐色粘質土
30．青灰色粘質土　泥岩（こぶし大）を含む。
31．黒褐色粘質土　木片・炭化物を多く含む。
32．暗茶褐色粘質土＝西壁No.29
33．青灰色粘質土　泥岩（小石大）・砂を含む。
34．暗褐色粘質土　木片・炭化物を含む。
35．青灰色粘質土＝西壁No.30（落ち込み7）
36．黒褐色腐植土に泥岩（小石大）がつまる。
37．黒褐色粘質土　泥岩（小石大）を少し含む。
38．黒褐色粘質土　貝砂が混じる。
39．暗青灰色粘質土　泥岩（こぶし大）・木片（礎板）貝殻片を含む。（上面5a面）
40．青灰色粘質土　泥岩（小石大）・砂を含む。
41．暗青灰色粘質土＝西壁No.38
42．暗褐色粘質土＝西壁No.36
43．暗褐色粘質土＝西壁No.40（上面5c面）
44．暗茶褐色粘質土　腐植土・木片が混入する。（上面5c面）
45．暗茶色腐植土＝東壁No.21（上面5c面）
46．暗褐色粘質土＝東壁No.22（上面5c面）
47．暗灰褐色粘質土＝東壁No.30
48．暗灰褐色粘質土
49．暗青褐色粘質土　泥岩粒・貝殻粒を含む。
50．貝砂と炭の混合土
51．暗茶色腐植土
52．暗灰褐色粘質土　泥岩（小石大）を多く含む。貝殻粒・木片が混入する。（ピット覆土）
53．暗青灰色粘質土＝西壁No.44（上面7a面）
54．暗青灰色弱粘質土　貝砂を非常に多く含む。泥岩粒・木片が混入する。
55．暗青灰色弱粘質土　54と同質。貝砂は少ない。
56．暗青灰色粘質土　泥岩粒・貝砂・土師器小片を含む。（上面7a面）
57．暗茶褐色粘質土　腐植土塊を含む。貝砂が混入する。
58．暗青灰色粘質土　（ピット覆土）
59．暗茶褐色粘質土＝西壁No.45
60．茶褐色砂質土＝西壁No.46（上面8面）
61．暗青灰色砂質土＝西壁No.47（上面8面）
62．暗青灰色砂質土　粉砕泥岩・木製品を含む。
63．暗茶色腐植土＝東壁No.32
64．暗茶色腐植土＝東壁No.33
65．茶褐色粘質土＝東壁No.36
66．暗青灰色砂質土　62と同質。
67．灰黒色砂質土　灰状炭化物を含む。
68．茶褐色腐植土＝西壁No.48（上面9面）
69．暗青灰色砂質土　貝と砂の混合土。
70．暗青灰色砂質土＝西壁No.49（上面10a面）
71．暗青灰色砂質土　泥岩（小石大）・木片を含む。
72．暗灰黒色粘質土　79と同質。色調は少し白く泥岩粒を多く含む。
73．暗褐色粘質土＝東壁No.38（上面9面）　（上面10a面）
74．暗褐色粘質土＝東壁No.40（上面10a面）
75．暗褐色粘質土（上面10a面）
76．青灰色粘質土＝東壁No.42（上面10c面）
77．暗灰黒褐色粘質土　貝殻粒を僅かに含む。
78．暗灰黒色粘質土　79と同質。
79．暗灰黒色粘質土　粘土塊を僅かに含む。
80．黒色粘質土＝西壁No.52（上面10c面）
81．暗青灰色粘質土　地山漸移層
82．青灰色砂泥土　地山

0　2m

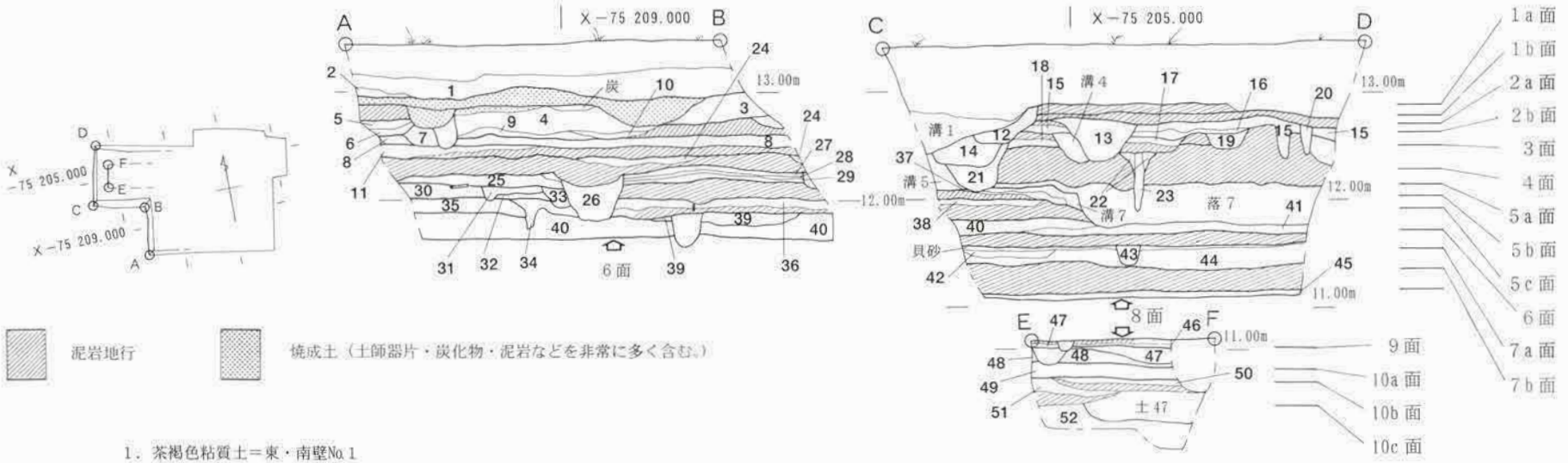


図41　調査区西壁土層図

1．茶褐色粘質土＝東・南壁№1
2．黄茶褐色粘質土
3．茶褐色粘質土　泥岩（小石大）・土師器片を多く含む。（上面1a面）
4．明褐色粘質土　泥岩（小石大）・土師器片・炭化物を含む。
5．黄茶褐色粘質土　泥岩粒・砂が混入する。（上面2a面）
6．暗褐色粘質土　炭化物を含む。
7．明茶褐色粘質土　泥岩粒・炭化物・砂を含む。
8．明茶褐色粘質土　泥岩（～こぶし大）・炭化物を多く含む。（上面2b面）
9．黒褐色粘質土（炭層）　炭化物が非常に多い。土師器片が混入する。
10．黄茶褐色粘質土　泥岩粒・砂を含む。
11．黄茶褐色粘質土　半地行土。土師器片・砂を含む。
12．暗茶褐色粘質土　土師器片を多く含む。
13．暗茶褐色粘質土　泥岩（小石大）・炭化物を含む。（ピット覆土）
14．黒褐色粘質土　泥岩（こぶし大）・炭化物を多く含む。（ピット覆土）
15．暗黄褐色粘質土　炭化物を多く含む。（上面2b面）
16．暗黄褐色粘質土　砂が混入する。
17．暗褐色粘質土　泥岩（小石大）・炭化物を含む。
18．黄褐色粘質土　砂が混入する。
19．暗褐色粘質土　17と同質。泥岩粒を多く含む。（ピット覆土）
20．暗黄褐色粘質土　炭化物を多く含む。（ピット覆土）
21．暗褐色粘質土　（溝状遺構1）
22．暗褐色粘質土　砂が混入する。（23とも杭穴覆土）
23．暗褐色粘質土　22と同質。泥岩粒を多く含む。
24．暗茶褐色粘質土　泥岩粒・炭化物を含む。
25．黒灰色粘質土　半腐植土。木片を多く含む。泥岩（小石大）が混入する。（上面4面）
26．黄茶褐色粘質土　泥岩（小石～人頭大）が占める。礎板がある。建物4－P.4
27．黒褐色粘質土　炭化物を非常に多く含む。（上面4面）
28．暗茶褐色粘質土　泥岩粒・木片・腐植土を含む。
29．暗茶褐色粘質土　泥岩（小石大）を含む。
30．青灰色粘質土　木片を非常に多く含む。腐植土が帯状に入る。（落ち込み7）
31．黒褐色粘質土　木片を多く含む。
32．明茶褐色粘質土　泥岩粒・砂が混入する。
33．明茶褐色粘質土　32と同質。より多くの砂が混入する。
34．暗褐色砂質土
35．青灰色粘質土　木片を多く含む。（上面5b面）
36．暗褐色粘質土　木片を多く含む。（上面5b面）
37．暗褐色粘質土　木片を多く含む。
38．暗青灰色粘質土　木片を多く含む。
39．暗褐色粘質土　泥岩粒・貝殻片を含む。
40．暗褐色粘質土　木製品・貝殻粒・片を非常に多く含む。（上面5c面）
41．暗褐色粘質土　木製品を多く含む。砂が混入する。
42．暗灰褐色粘質土　泥岩粒を含む。
43．暗灰褐色粘質土　上部は泥岩粒が占める。貝砂を非常に多く含む。（ピット覆土）
44．暗青灰色粘質土　貝殻粒・泥岩粒・木片を少し含む。（上面7a面）
45．暗茶褐色粘質土　木片・貝殻・炭化物を非常に多く含む。（8面上 貝・木製品溜り）
46．茶褐色砂質土　木製品を含む。（6面）
47．暗青灰色砂質土　泥岩砕片・木製品を含む。
48．茶褐色腐植土　泥岩（小石大）・貝殻片を含む。（9面）
49．暗青灰色砂質土　泥岩（小石大）・木片・貝殻片を含む。（上面10a面）
50．茶褐色粘質土　木製品を含む。（上面10b面）
51．茶褐色粘質土　木製品を多く含む。（上面10b面）
52．黒色粘質土　（上面10c面）

0　2m

4面（図66） 厚いところで30cmを超える3面の泥岩版築の下から、黄味を帯びた粘質土の間層をはさんで、また新たな泥岩地行面があらわれる。この泥岩地行は3面のような整地はされておらず、黒褐色粘質土内に大小の泥岩が粗く詰まっているだけである。また炭・腐植土がかなりの範囲に堆積しており、落込み遺構の多くをこの土が充填している。標高は12.30m前後。検出遺構はつぎのとおり。

建物1棟・溝1条・落込み5基・柱穴様小穴9口（建物を含む）

5面（図73・81・83） 腐植土を含む柔弱な粘質土を除くと、標高11.80～12.10m付近で平坦な青灰色泥岩地行が数層あらわれる。各地行層間には厚さ数cmの貝砂層・炭層・腐植土などが混入しており、特に南東部において顕著であった。これらを一括して5面とし、さらに上から5a～5c面に細分した。

5～15cm程度の厚みを持つ5a面泥岩地行面の下、海抜12.00m前後にほとんど間層なくあらたに地行面があり、これを5b面とした。調査区東側中央部には泥岩版築による盛り上がりがある。上面はすでに5a面検出時に露頭していた。この盛り上がりは南北に高低差をもち、西側にかけ緩やかに落ちて消滅する。築地や土塁など高さのある施設が削られたものとする積極的な証拠を欠くが、基壇とするには幅約3mと範囲が狭いので、ひとまず築地状遺構としておく。築地状遺構の南側を埋めた泥岩地行の上面が5a面である。築地状遺構のさらに西側には柱穴列が存在する。また北側の落ちは柱穴列2で述べた境界線にほぼ沿って緩やかに降っており、遺構らしきものはほとんど検出されない。

5c面は標高約11.70～12.00mと厚く、さらに細分が可能であったが、5b面泥岩地行から6面泥岩地行にいたる間の層をすべて5cとした。その中で上下に大別するなら、上層は貝・木製品を非常に多く含んだ茶褐色粘質土（腐植土）で（東壁番号21・西壁番号40・南壁番号43）、調査区のほぼ全域にみられる。最も顕著だったのは中央部・木器・貝溜りとした一帯である。これより直下（または同標高上）が青灰色粘質土（西壁番号41下層部）と暗褐色粘質土（西壁番号41）、南東部分で検出した泥岩地行面となる。

5a～5c面、それぞれの検出遺構は次のとおり。

5a面（図73）：建物1棟・柱穴列1列・溝2条・落込み3基・柱穴様小穴24口（建物柱穴・柱穴列を含む）・土坑3基

5b面（図81）：築地状遺構1・建物1棟・柱列1列・溝状遺構1条・柱穴様小穴20口（建物柱穴を含む）

5c面（図83）：木器・貝溜り1・建物2棟・柱穴列1列・落込み1・土坑3基・柱穴様小穴50口（建物柱穴・柱穴列を含む）

6面（図92） 軟質な5c包含層を掘り下げていくと標高11.70m前後から一変して、厚さ約10cmの平坦な青灰色泥岩地行面があらわれる。この明確な生活面を6面とした。また地行面直下からはきめ細かな貝砂や炭（南壁番号50）・破砕泥岩地行土（東壁番号29）・腐植土（東壁番号29）などをはさんで再び地行面（標高約11.60m）があらわれる。しかし6面下は部分的にしか存在せず、6層の遺構との弁別も困難なために、上層部と一括した。なお調査区東半（Ⅰ区）西壁沿いに平坦な泥岩質の一枚岩が検出され（上面標高11.73m前後）、またその東縁に連なって北へ延びる帯状の貝砂面（東西幅約40cm、検出高約11.70m、途中上層遺構・落込み9により消失）と、さらに貝砂層下に炭層も確認した。これらは6面漸位層と認識し、精査時は取り除いて遺構を検出した。検出遺構は次のとおり。

柱穴列3列・溝状遺構3条・土坑9基・柱穴様小穴64口（柱穴列を含む）

7面（図96・99） 7面とした構成土も大きくa・b2つに分かれる。まずは調査区西側一帯でみつかった6面地行直下にある暗青灰色粘質土（西壁番号44、南壁番号53・56）で、検出高は約11.50mになる。

東側は同標高で厚さ30cmほどの泥岩版築があらわれる。版築面直上にあるのが先に述べた6面下層面である。やはり薄い貝砂層が上面を被っており、西側の暗青灰色粘質土に相当する可能性があるが、調査時は検出高の違いからこれを分けた。6面下層面と7a面を同一のものとするかどうかは、今後の周辺調査をまたねばならない。そこで東側は厚い版築面上から7a（7bも兼ねる）面とした。

7a面西側にも同様の版築層が暗青灰色粘質土下にひろがるため、これを7b面構築層とした。検出高は約11.40m前後。厚さ30cmほどの強固で平坦な泥岩版築面が全域に拡がっており、東側（Ⅰ区）では7a面の段階ですでに露頭していたことは先に述べた。とすれば、東側半分（Ⅰ区）で検出された7a面とした遺構中に7b面遺構が含まれていた可能性は否定できない。以下に7b面の遺構としたのは、確実に認定されるもののみにとどめ、そうでないものは7aに帰属させた。

7a面（図96）：建物1棟・柱穴列4列・溝1条・溝状遺構3条・土坑7基・柱穴様小穴70口（建物・柱穴列を含む）

7b面（図99）：建物1棟・落込み2基・柱穴様小穴26口（建物を含む）

8面（図100） 7b面地行土を取り除くと、その直下に貝砂を大量に含んだ炭化層が、弱いながらも調査区全域で検出される。その漸位層の下から腐植土が部分的に存在し、最も顕著な部分が8面直上の貝・遺物溜りとなる（図100）。さらに腐植土を掘り下げてあらわれる泥岩地行面を8面とした。検出高は約11.20mだが、面を構築する層の質は東西で大きく分かれる。東側は厚さ30～40cmの強固な泥岩版築が敷設されていたが遺構はほとんど検出されず、一方西側は薄い泥岩地行面で不安定ではあるが（直下にまた腐植土層がある）、遺構と遺物の量はたいへん多い。検出遺構はつぎのとおり。

貝・遺物溜り1・落込み2基・柱穴様小穴6口

9面（図102） 8面下は木製品を多く含んだ腐植土が全域で検出された。この直下から非常に軟質な泥岩地行面が調査区西側を中心に部分的にあらわれる。またそれ以外は茶褐色粘質土（東壁番号36・西壁番号48・南壁番号68）・暗褐色粘質土（東壁番号38）・灰黒色砂質土（南壁番号67）などがあり、いずれも面としては脆弱であった。標高は11.00m前後になる。検出遺構はつぎのとおり。

溝1条・落込み2基・土坑1基・柱穴様小穴4口

10面（図106・108・110） 標高10.80m前後より、これまでとは違う黒っぽい色調の基盤層、およびごく部分的に軟質の薄い地行を施した面があらわれる。暗褐色粘質土（東壁番号40・南壁番号74・75）・青灰褐色粘質土（東壁番号42）・暗青灰色砂質土（西壁番号49・南壁番号70）・暗灰黒色粘質土（南壁番号72）などからなり、直上（とくに調査区西側）には貝砂面が拡がっていた。下にさらに面の存在が確認されていたが、時代的にさほどの隔たりはないとみて全体を10面ととらえ、それを3枚に分け最上面を10a面と名づけた。10a面は、貝砂を切って掘り込まれている遺構と貝砂下・泥岩面直下に潜在する遺構など、その中でも時期差が認められた。これらの遺構すべてを厳密に分類することは困難であり、8・9面と同様、10a面遺構として包括的にとらえることにした。また構成土は地下水位の影響から全体に脆弱化しているが、暗灰黒色粘質土のような基盤層と同質のものもあらわれはじめている。

10a面構成土を取り除いた直下の土、茶褐色粘質土（腐植土に近い、西壁番号50・51）・暗灰黒色粘質土（最終基盤層と同質、南壁番号79）を10b面とする。標高は10.70m前後になる。10b面の構成土は中世基盤層と同質ながら色調も灰色がかり、挟雑物も少なからず含まれていた。これらを掘り下げた標高約10.50mからは挟雑物のほとんどない（若干の灰状物質・遺物が混入する）黒色粘質土が全域に厚く層をなす。これを中世期基盤層と認識し、10c面とした。

10a～10c各面の検出遺構はつぎのとおり。

10a面（図106）：柱穴列１列・溝１条・落込み１基・柱穴様小穴18口（柱穴列を含む）

10b面（図108）：柱穴列１列・溝２条・溝状遺構１条・落込み１基・土坑１基・柱穴様小穴50口（柱穴列を含む）

10c面（図110）：土坑３基

２．最終確認区

中世層調査中に、古代の土師器や須恵器がかなり出土した。そのため中世最終面とした10ｃ面にいくつかの深掘り調査区を設定し、中世以前の遺構探査をした（図111）。浅いもので海抜約10.50m、最深部で9.60mまで掘り下げた結果、当該部分においては中世以前の遺構は存在しなかった。暗青灰色粘質土（南壁番号81）の下にある青灰色砂泥土を基盤層と確認し、調査を終了した。（鍛治屋・馬淵）

第２節　各説

１．調査区壁出土遺物

調査区の壁面にかかっていくつかの遺物が出土した。層位的に確実な資料なので図示しておく（図42）。詳細については観察表参照（以下同じ）。土師器皿Ｒ種（１～６）・硯（３）・木製品（８）などがある。

２．１面

溝１（図44・45）

位置：Ｘ－75 205.000～－75 208.500　Ｙ－24 482.500～－24 496.000　**規模**：幅約122cm×深さ45～62cm　**断面形**：逆台形　**流下方向**：西→東　**主軸方位**：Ｎ－81°－Ｗ　**重複関係**：焼成遺構７・ｐ.11などを切る　**出土遺物**：土師器皿R種（３～５）・瓦器火鉢（６～８）・常滑こね鉢Ⅱ類（９）・常滑甕（10・11）・瀬戸おろし皿（12）・瀬戸平碗（13）・瀬戸折縁鉢（14）・瀬戸大平鉢（15）・平瓦（16・17）・景祐元宝（18）・石鉢（19）　**特記事項**：調査区中央を東西に走る。１面のうちでは最上層の遺構。壁際や底面の一部に裏込めのような破砕泥岩塊がある。

土坑１（図44）

位置：Ｘ－75 208.500～－75 210.500　Ｙ－24 485.500～－24 486.500　**規模**：長径162cm×短径100cm×深さ８～30cm　**平面形**：三連円　**断面形**：鉢形　**主軸方位**：Ｎ－5.5°－Ｅ　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種（１・２）　**特記事項**：充填土からみて溝１と同時期の可能性が高い

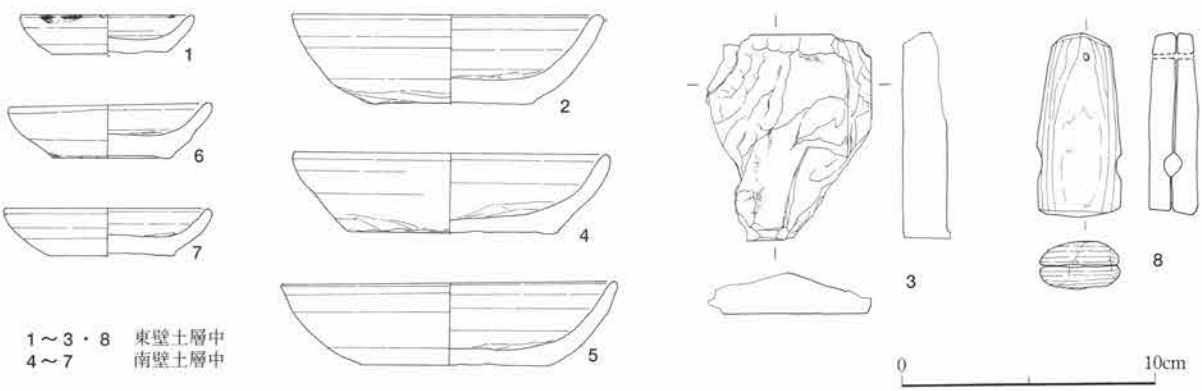
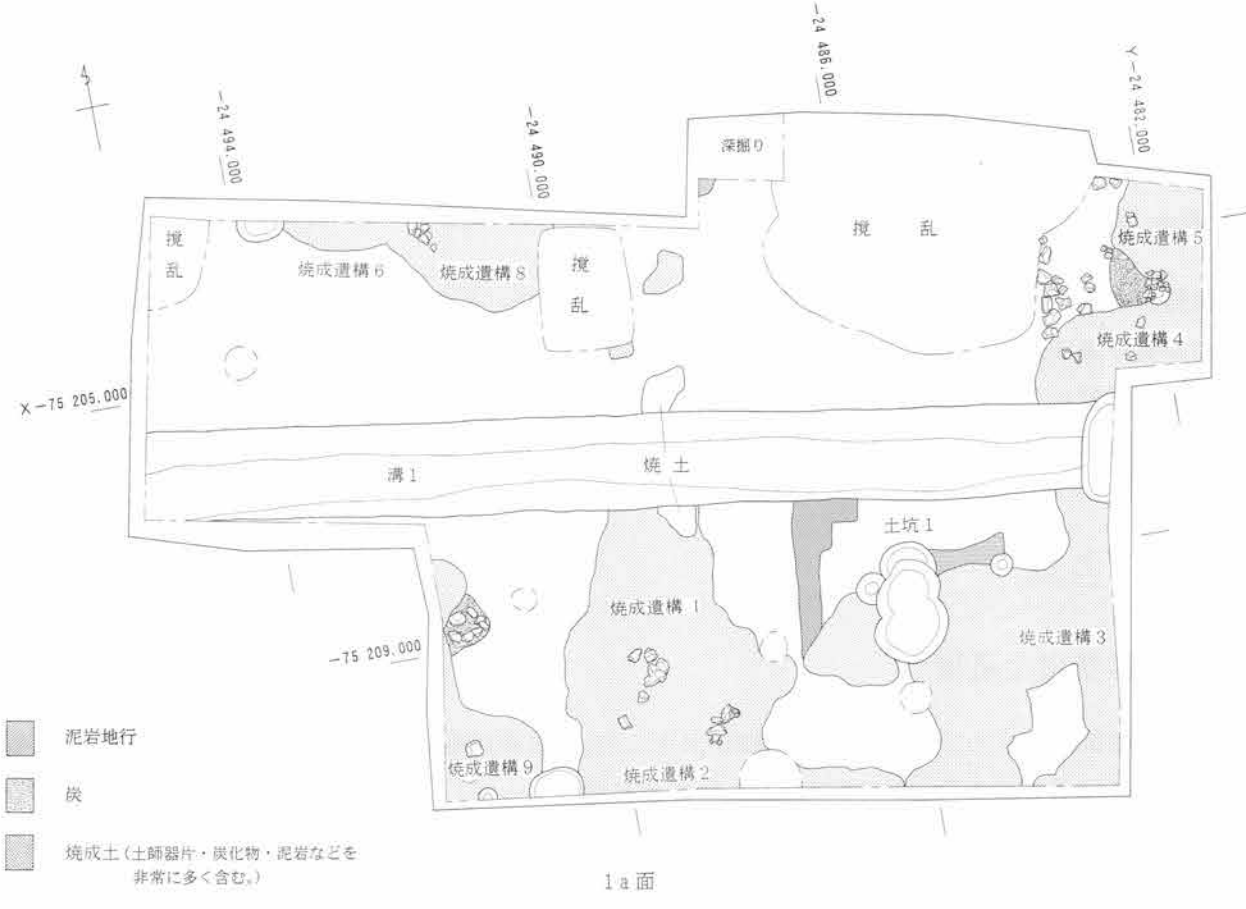
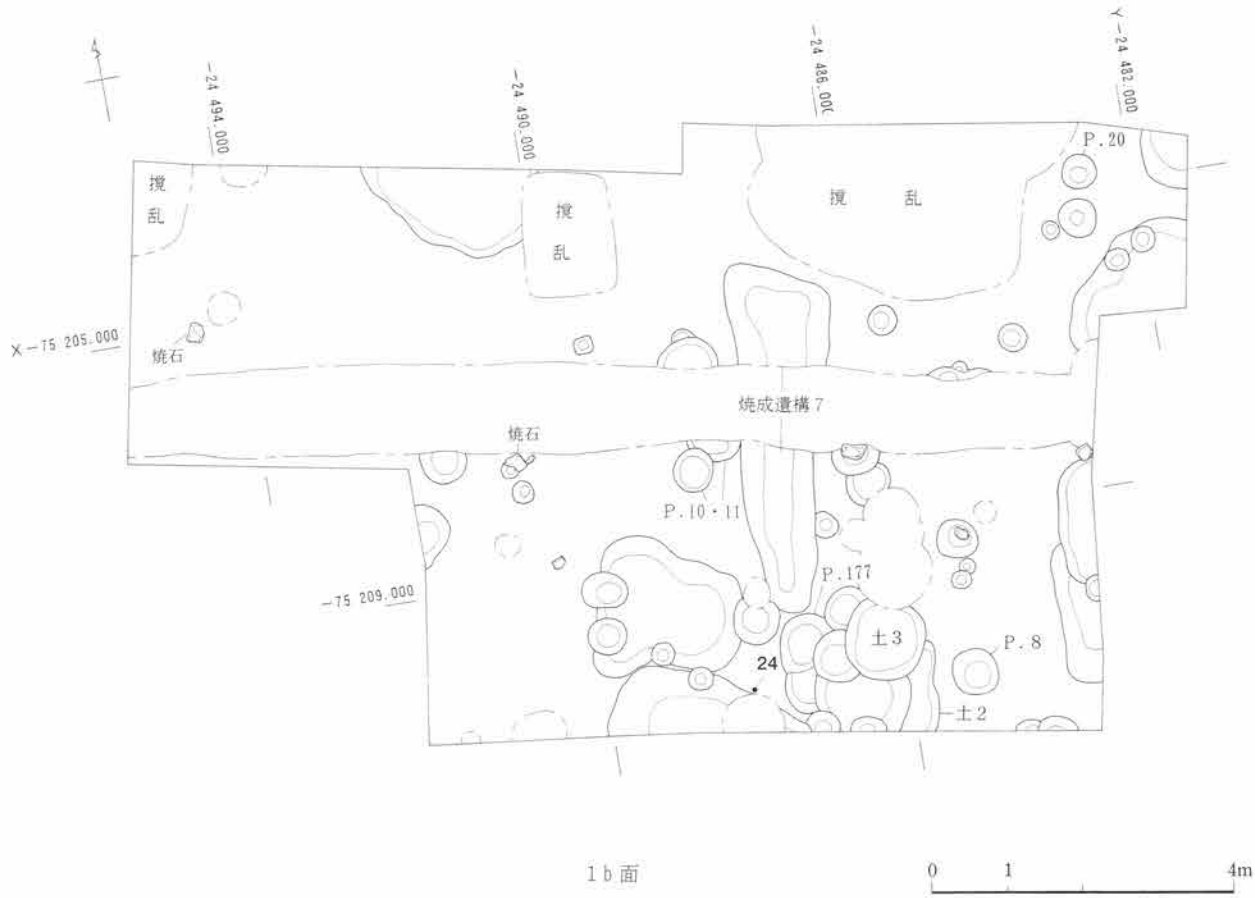


図42　調査区壁出土遺物



1a面



1b面

0 1 4m

図43　1a・1b面遺構全図

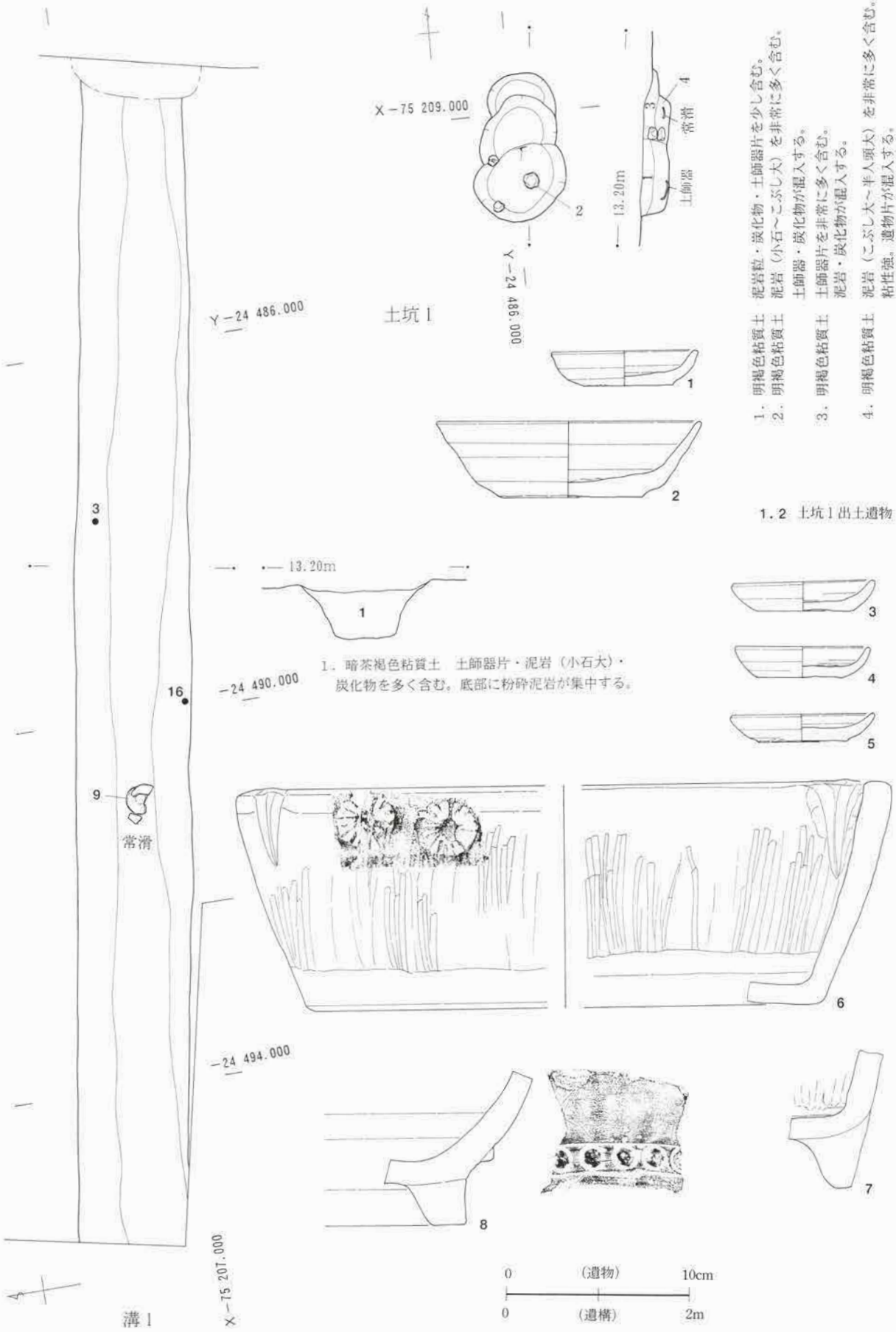


図44　土坑1・溝1、同出土遺物(1)

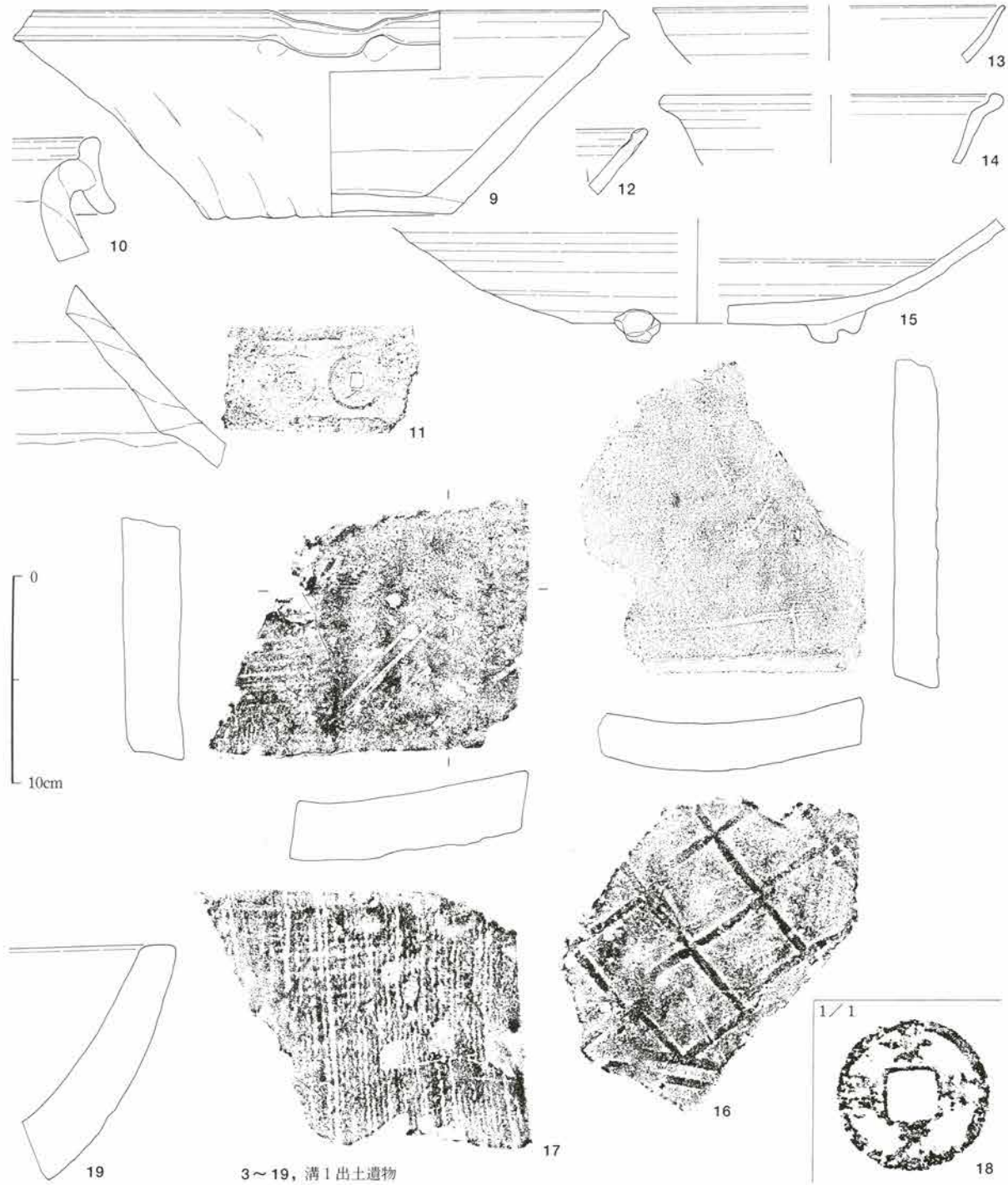


図45　溝1出土遺物(2)

焼成遺構1（図46・47）

位置：X－75 207.000～－75 210.500　Y－24 487.500～－24 491.000　**焼土範囲**：東西278cm以上×南北300cm以上×厚み3～11cm　**落込み規模**：長径194cm×短径144cm×深さ最大47cm　**平面形**：不整楕円　**断面形**：すり鉢形　**主軸方位**：不明　**出土遺物**：土師器皿R種（1～4）・土師器皿R種極小型（5）・常滑こね鉢Ⅱ類（6）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（7）・元豊通宝（8）・砥石中砥（9）　**出土遺物**：p.21・p.190土師器皿R種（1・2）　**特記事項**：調査区中央の溝1以南に拡がる。焼土は落込み充填土と周辺に拡がったものとがあり、後述する他の焼成遺構と同様の状況がある。焼土範囲と落込みとの関係からみて、焼成場所が踏襲されたと推測される。焼土下の落込み内にある土師器は他のものに比べ破損が少なく、焼成後廃棄された可能性がある。さらに半人頭大の泥岩を主に、凝灰質砂岩・安山岩・焼石なども多く含まれていた。焼土範囲北域で、厚さ5cm弱の焼土面（橙色化した土）を検出。

焼成遺構2（図46・47）

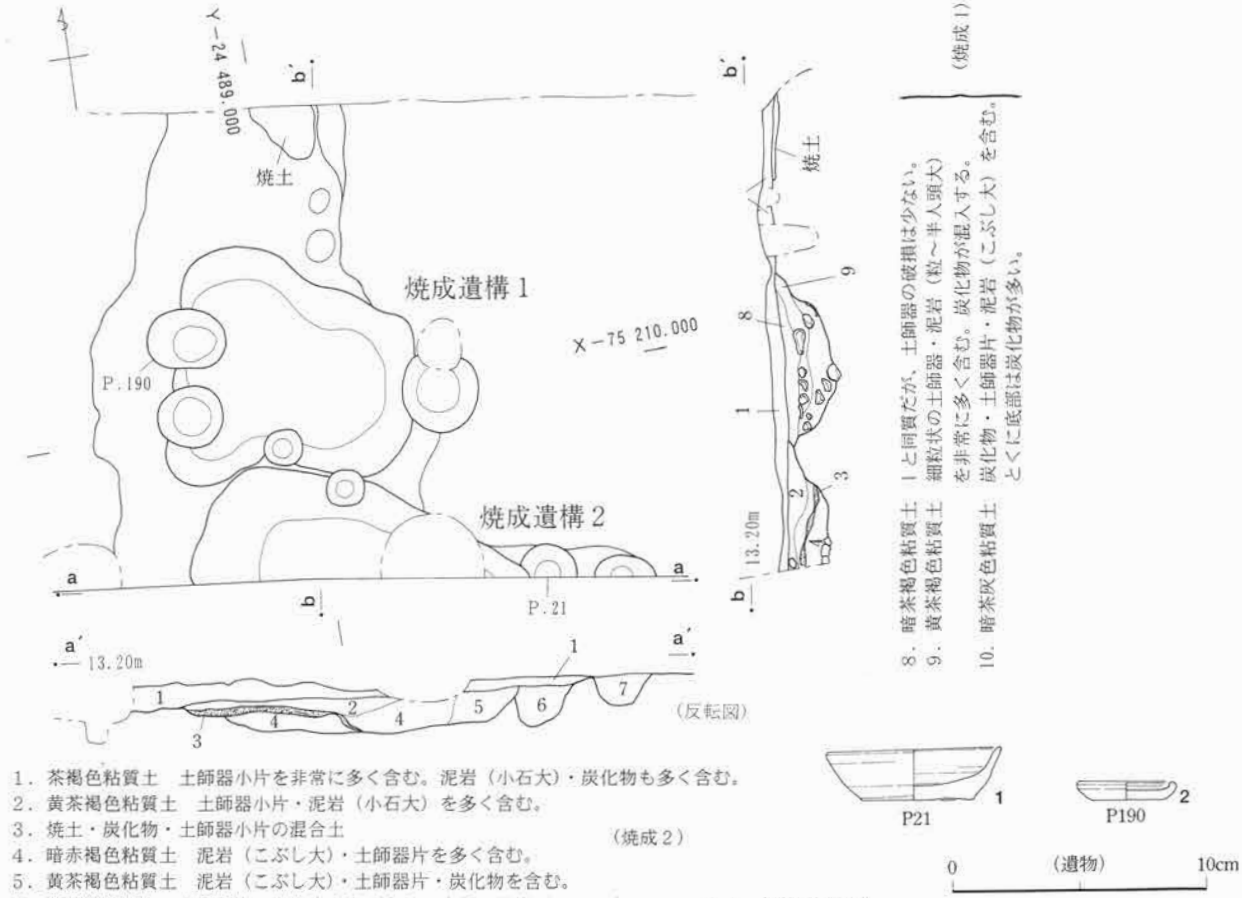


図46　焼成遺構1・2・p.21・p.190、同出土遺物

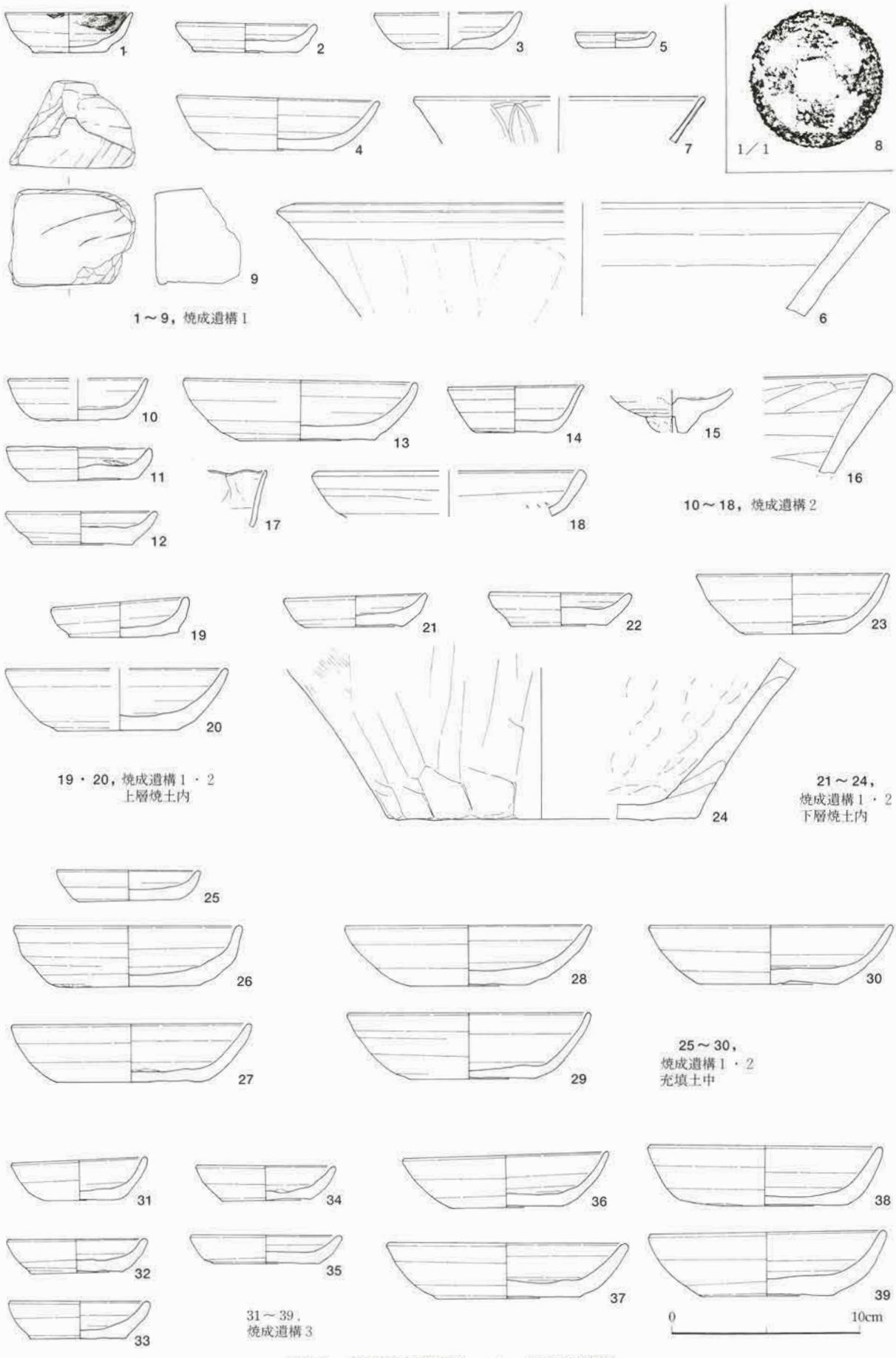
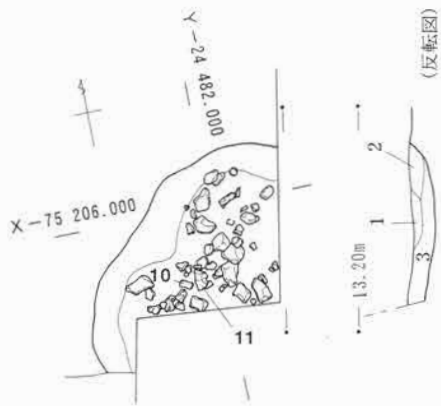


図47　1面焼成遺構1・2・3出土遺物

1．茶褐色粘質土　土師器小片を非常に多く含む。炭化物が少し混入する。
2．茶褐色粘質土　1と同質。
3．茶褐色粘質土　粉砕泥岩を非常に多く含む。土師器砕片も多く混入する。(ピット覆土)
4．茶褐色粘質土　土師器片を非常に多く含む。泥岩粒も多く含む。(ピット覆土)
5．茶褐色粘質土　土師器小片を非常に多く含む。炭化物・泥岩粒が混入する。
6．茶褐色粘質土　5と同質。炭化物を非常に多く含む。焼石（泥・砂岩）が混入する。
7．茶褐色粘質土　5と同質。5より土師器の量がやや少なく、泥岩（小石大）を多く含む。(ピット覆土)
8．茶褐色粘質土　5と同質。
9．茶褐色粘質土　5と同質。5より土師器の量がやや少なく、炭化物を多く含む。
10．暗茶褐色粘質土　炭化物・土師器片を多く含む。泥岩（小石大）が混入する。

1．茶褐色粘質土　土師器小片を非常に多く含む。
　炭化物・泥岩粒が混入する。
2．茶褐色粘質土　1より土師器の量がやや少ない。



1．茶褐色粘質土　泥岩（小石大）が占める。炭化物・土師器片を含む。
2．茶褐色粘質土　土師器片を非常に多く含む。炭化物も多く混入する。
3．暗茶褐色弱粘質土　炭化物を非常に多く含む。泥岩（半人頭大）・遺物片も多く混入する。

0　2m

図48　焼成遺構 3・4・5

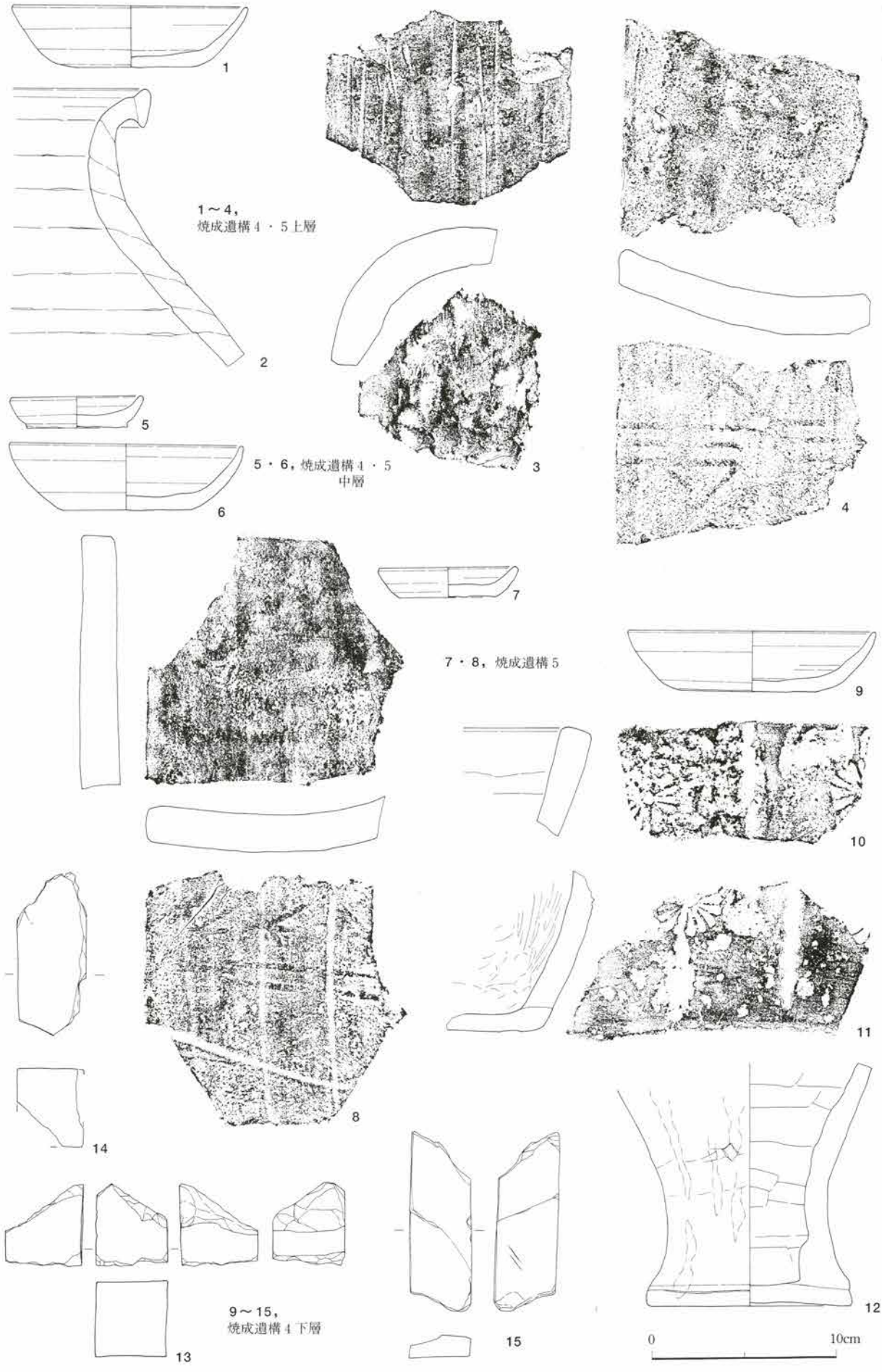


図49　焼成遺構4・5出土遺物

位置：X－75 210.000～　Y－24 486.000～－24 491.000　**焼土範囲**：東西370cm以上×南北92cm以上×厚み３～20cm　**落込み規模**：東西168cm以上×南北92cm以上×深さ最大32cm　**平面形**：不明　**断面形**：皿形　**主軸方位**：不明　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種（10～13）・白色系土師器皿Ｒ種（14）・白色系土師器灯明皿（15）・瓦器火鉢（16）・瀬戸入子（17）・瀬戸おろし皿（18）　**特記事項**：焼土範囲が焼成遺構１とつながっているため、便宜上下部の落込みによって１と区別した。近接した時期の遺構とみられる。また南壁沿いに隣接する落込みも焼土で充_されている。

焼成遺構１・２出土遺物（図47）

上記のとおり焼成遺構１・２の焼土範囲が連結しているため、帰属の判定が困難な遺物が生じた。一括して呈示する。 上層焼土内 ：土師器皿Ｒ種（19・20） 下層焼土内 ：土師器皿Ｒ種（21～23）・常滑こね鉢Ⅱ類（24） 充填土中 ：土師器皿Ｒ種（25～30）

焼成遺構３（図47・48）

位置：X－75 208.000～－75 212.500　Y－24 483.000～－24 488.000　**焼土範囲**：東西384cm以上×南北396cm以上×厚み６～20cm　**落込み規模**：長辺300cm以上×短辺52cm以上×深さ最大45cm　**平面形**：（長方形）　**断面形**：皿形　**主軸方位**：不明　**重複関係**：北側を溝１に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種（31～39）　**特記事項**：焼成遺構１・２とほぼ同じ状況。落込みの上に焼土が拡がる。

焼成遺構４（図48・49）

位置：X－75 205.500～－75 207.500　Y－24 481.500～－24 484.000　**焼土範囲**：東西220cm以上×南北約160cm以上×厚み６～13cm　**落込み規模**：東西151cm以上×南北108cm以上×深さ18cm（上層約13cm）　**平面形**：（不整楕円形）　**断面形**：皿形　**主軸方位**：不明　**下層出土遺物**：土師器皿Ｒ種（９）・瓦器火鉢（10・11）・瀬戸瓶子（12）・砥石中砥（13・14）・砥石仕上砥（15）　**特記事項**：焼成５の南に隣接する。焼土範囲は焼成遺構５と連続しているので厳密に区別できない。上層は焼成遺構１・２・３と同じだが下層部の落込みは焼土を僅かにしか含まず、泥岩が多い。また焼成遺構４と５にはさまれた小穴の周辺には焼けた泥岩群があり、その西側には炭化物が拡がる。

焼成遺構５（図48・49）

位置：X－75 204.000～－75 206.000　Y－24 481.000～－24 482.500　**焼土範囲**：東西120cm以上×南北130cm以上×厚み６～12cm　**落込み規模**：東西60cm以上×南北70cm以上×深さ８cm（焼土部分６～12cm）　**主軸方位**：不明　**平面形**：不明　**断面形**：（皿形）　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種（７）・平瓦（８）　**特記事項**：調査区北東角で検出。直下に落込みらしきものがある。

焼成遺構４・５出土遺物（図49）

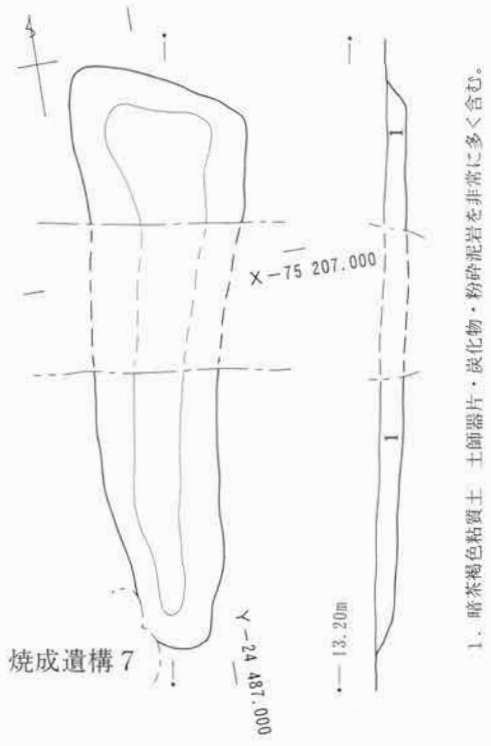
先述したとおり、焼成遺構４と５の焼土は接しており、出土遺物を厳密に区別することは困難であった。両者をあわせて呈示する。 焼成遺構４・５上層 ：土師器皿Ｒ種（１）・常滑甕（２）・丸瓦（３）・平瓦（４） 焼成遺構４・５下層 ：土師器皿R種（５・６）

焼成遺構６（図50）

位置：X－75 202.500～－75 204.000　Y－24 490.500～－24 493.500　**焼土範囲**：東西275cm以上×南北37cm以上×厚み２～18cm　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種（１～３）　**特記事項**：調査区北壁沿いに位置する。本址上面は起伏があり、直上に暗褐色粘質土が載る。この暗褐色粘質土も焼成遺構内と同じく土師器小片が非常に多く、ここまで含めると遺構範囲は溝１近くにまでおよぶ。

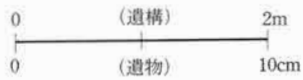
焼成遺構７（図50・51）

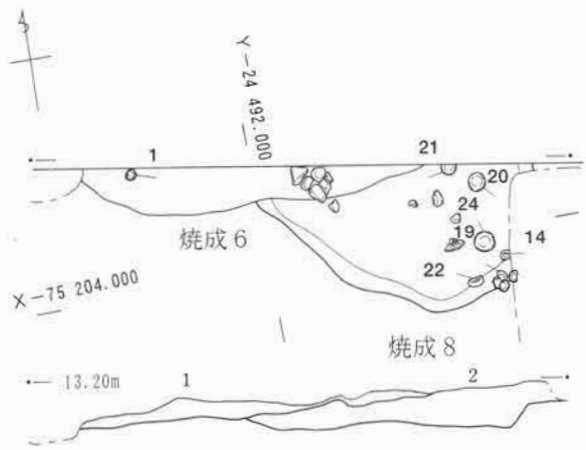
位置：X－75 205.000～－75 210.000　Y－24 486.000～－24 488.000　**規模**：長辺468cm×短辺40cm×



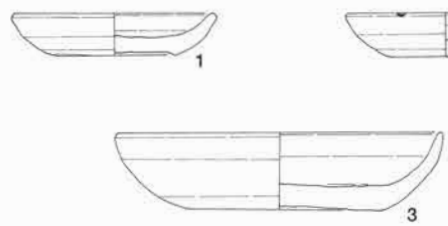
1．暗茶褐色粘質土　土師器片・炭化物・粉砕泥岩を非常に多く含む。

1．明褐色粘質土　土師器片・炭化物を非常に多く含む。泥岩（小石大）が混入する。
2．黄茶褐色粘質土　泥岩（小石大）・土師器片が混入する。
3．暗茶褐色粘質土　土師器片を含む。

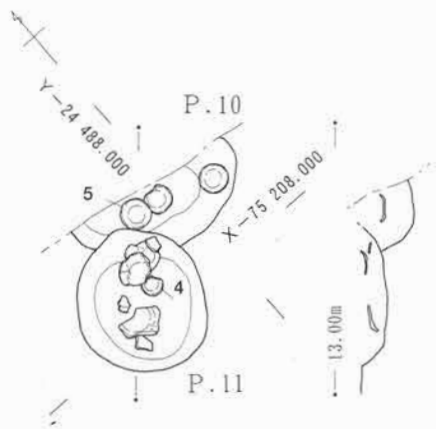


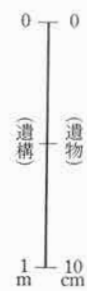


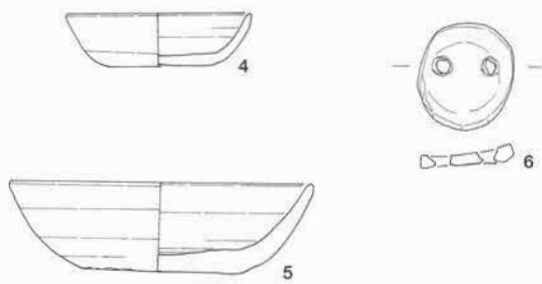
1．暗茶褐色粘質土　土師器片を非常に多く含む。炭化物・泥岩（小石大）が混入する。
2．暗褐色土　1と同質。1より土師器の量がやや少ない。（焼成遺構８）（焼成遺構６）



1～3，焼成遺構６出土遺物







4～6，P10・11　出土遺物

図50　１面焼成遺構６～９、p.10・11、同出土遺物

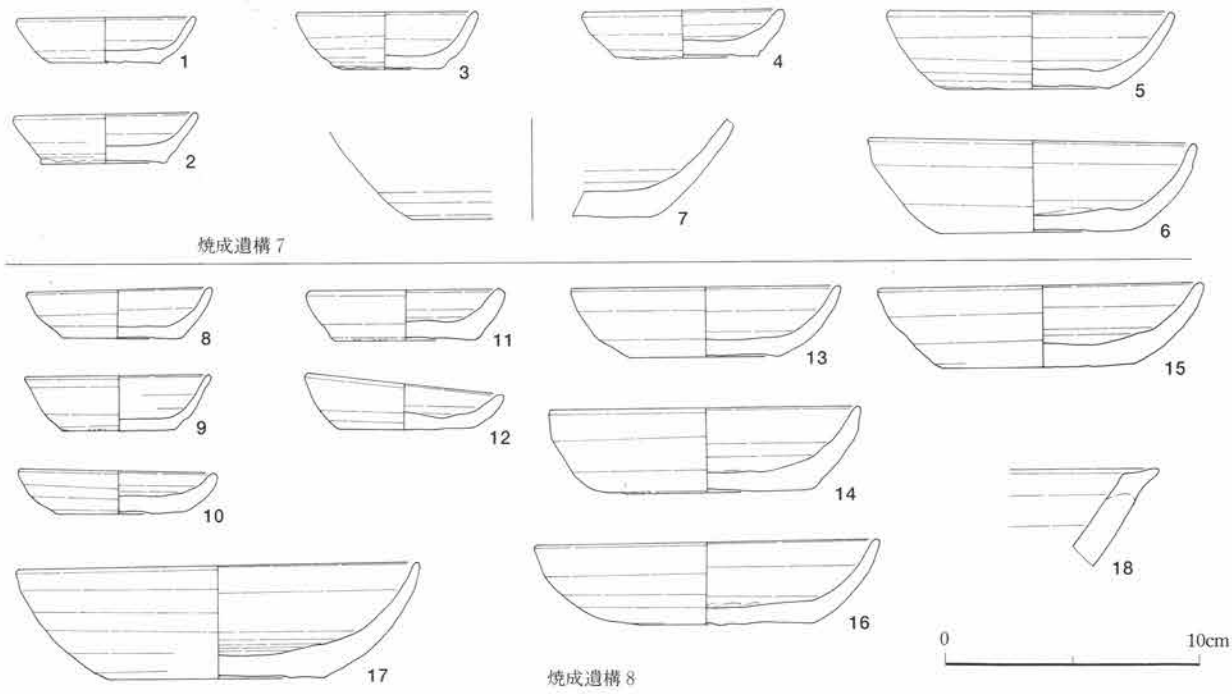


図51　焼成遺構7・8出土遺物

深さ18cm　**主軸方位**：N－7.5°－E　**平面形**：舟形　**断面形**：皿形　**重複関係**：溝1に切られる　**出土遺物（図51）**：土師器皿R種（1～6）・土師器皿R種極大型（7）　**特記事項**：調査区ほぼ中央にある南北主軸の舟形土坑。上部は泥岩地行で覆われる。充填土は焼土を多く含む暗褐色粘質土。

焼成遺構8（図50・51）

位置：X－75 203.000～－75 204.500　Y－24 489.500～－24 492.500　**規模**：東西202cm以上×南北120cm以上×深さ12～38cm　**主軸方位**：不明　**平面形**：（不整方形）　**断面形**：皿形　**重複関係**：焼成遺構6に切られる　**出土遺物（図51）**：土師器皿R種（8～16）・土師器皿R種極大型（17）・常滑こね鉢Ⅱ類（18）　特記事項：落込みをもつ焼成遺構

焼成遺構9（図50）

位置：X－75 207.500～－75 211.500　Y－24 491.000～－24 493.000　**焼土範囲**：東西130cm以上×南北232cm以上×厚み6～22cm　**落込み規模**：東西42cm以上×南北94cm以上×深さ24cm　**主軸方位**：不明　**平面形**：（楕円形）　**断面形**：浅皿形　**特記事項**：調査区西南部で検出。焼成遺構4と同質。環状に並んだ焼石群（泥岩質）一帯に炭が散乱する。北側に土坑状の落込みがある。

P.10・11（図50）

p.10　**位置**：X－75 207.500～－75 208.500　Y－24 487.500～－24 489.000　**規模**：長径73cm×短径不明×深さ22cm　**平面形**：楕円形　**断面形**：皿形　**主軸方位**：N－78.5°－W

p.11　**位置**：X－75 207.500～－75 208.500　Y－24 487.500～－24 489.000　**規模**：長径約60cm×短径約50cm×深さ約10cm　**平面形**：楕円形　**断面形**：皿形　**主軸方位**：N－30°－E

重複関係：10が11を切る。11は溝1に切られる　**充填土**：暗褐色粘質土　**出土遺物（10・11共通）**：土師器皿R種（4・5）・土師器皿転用品（6）　**特記事項**：土師器埋納遺構か。1面遺構中では旧い。

1a面出土遺物（図52）

土師器皿R種（1～10）・土師器皿R種極小型（11）・土師器皿R種極大型（12）・土製品（13）・瓦器火鉢（14）・平瓦（15）・硯（16）・元豊通宝（17）

土師器地行面出土遺物（図52）

土師器皿R種（18）・常滑こね鉢Ⅱ類（19～21）・砥石中砥（22）

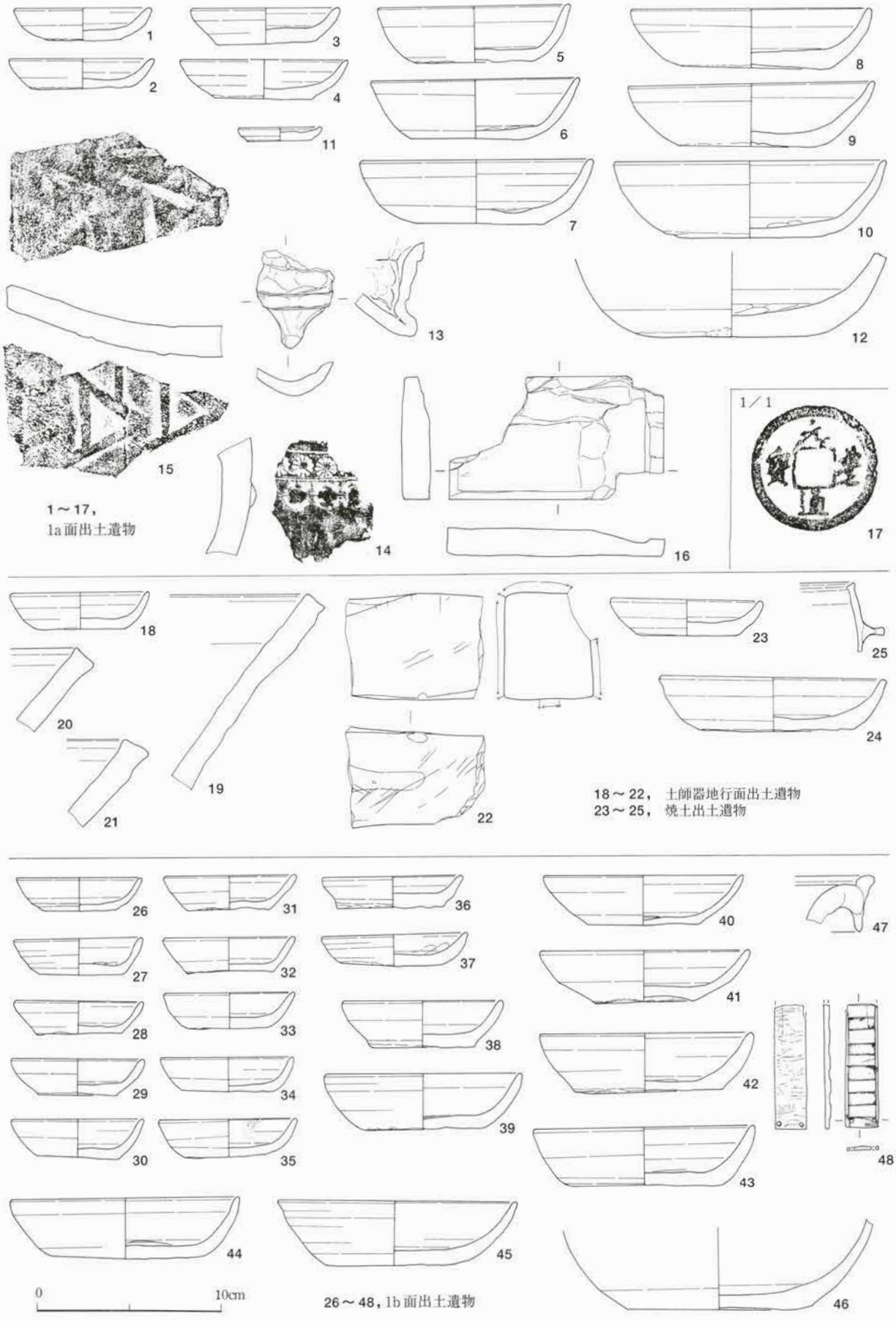


図52　1a面・土師器地行面・焼土・1b面出土遺物

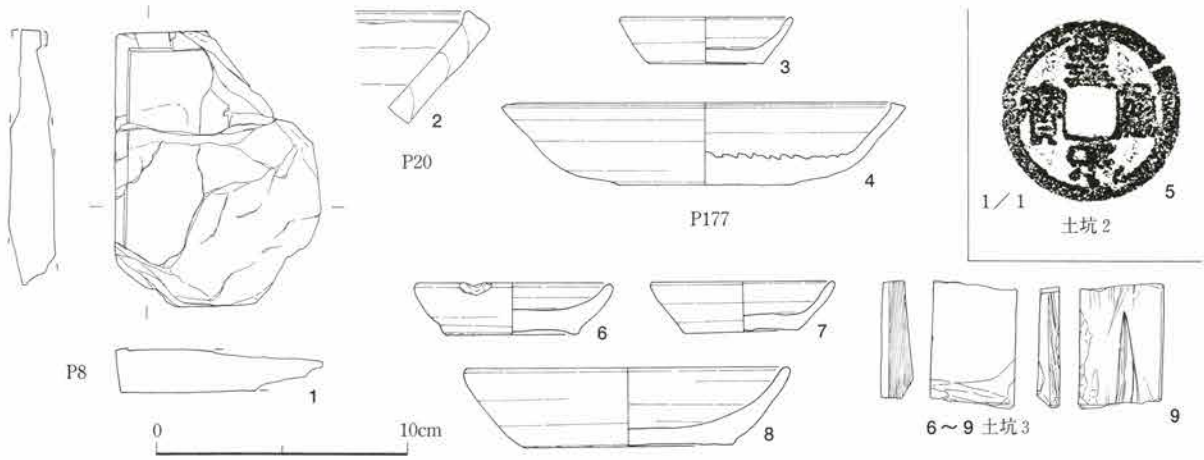


図53　1b面遺構出土遺物

焼土出土遺物（図52）

土師器皿R種（23・24）・鍔鍋（25）

1ｂ面遺構出土遺物（図53）

p.8：硯（1）　p.20：常滑こね鉢Ⅱ類（2）　p.177：土師器皿Ｒ種（3）・瀬戸おろし皿（4）

土坑2：皇宋通宝（5）　**土坑3**：土師器皿R種（6～8）・砥石仕上砥（9）

1ｂ面出土遺物（図52）

土師器皿R種（26～45）・同極大型（46）・常滑甕（47）・骨製品（48）　特記事項：48は腰飾りか

3．2ａ面

基壇状遺構1（図55）

位置：X－75 202.500～－75 205.000　Y－24 487.500～－24 494.000　**規模**：東西634cm以上×南北135cm以上×高低差最大24cm　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種（1～3）　**特記事項**：泥岩（一部凝灰質砂岩を含む）

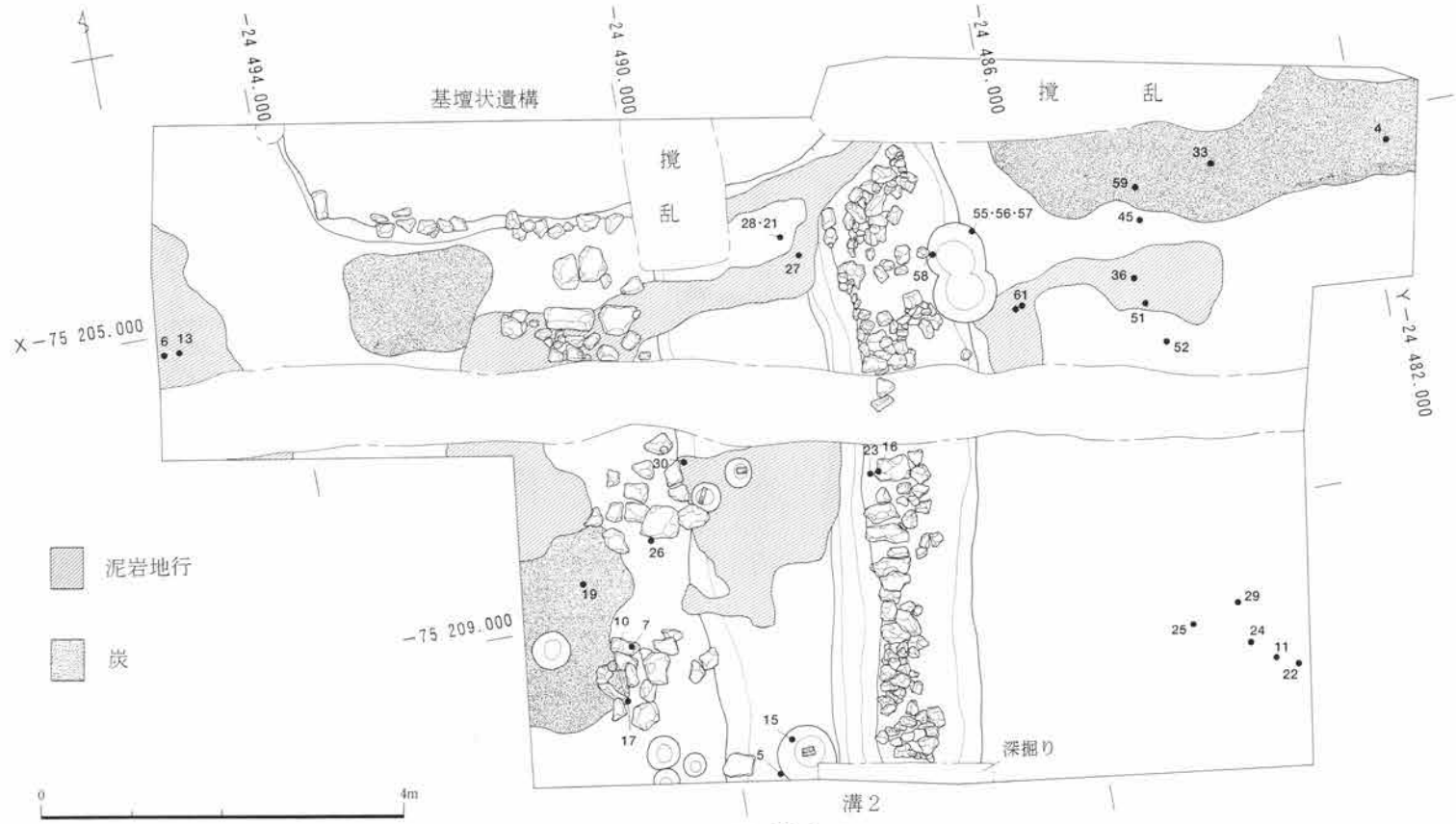
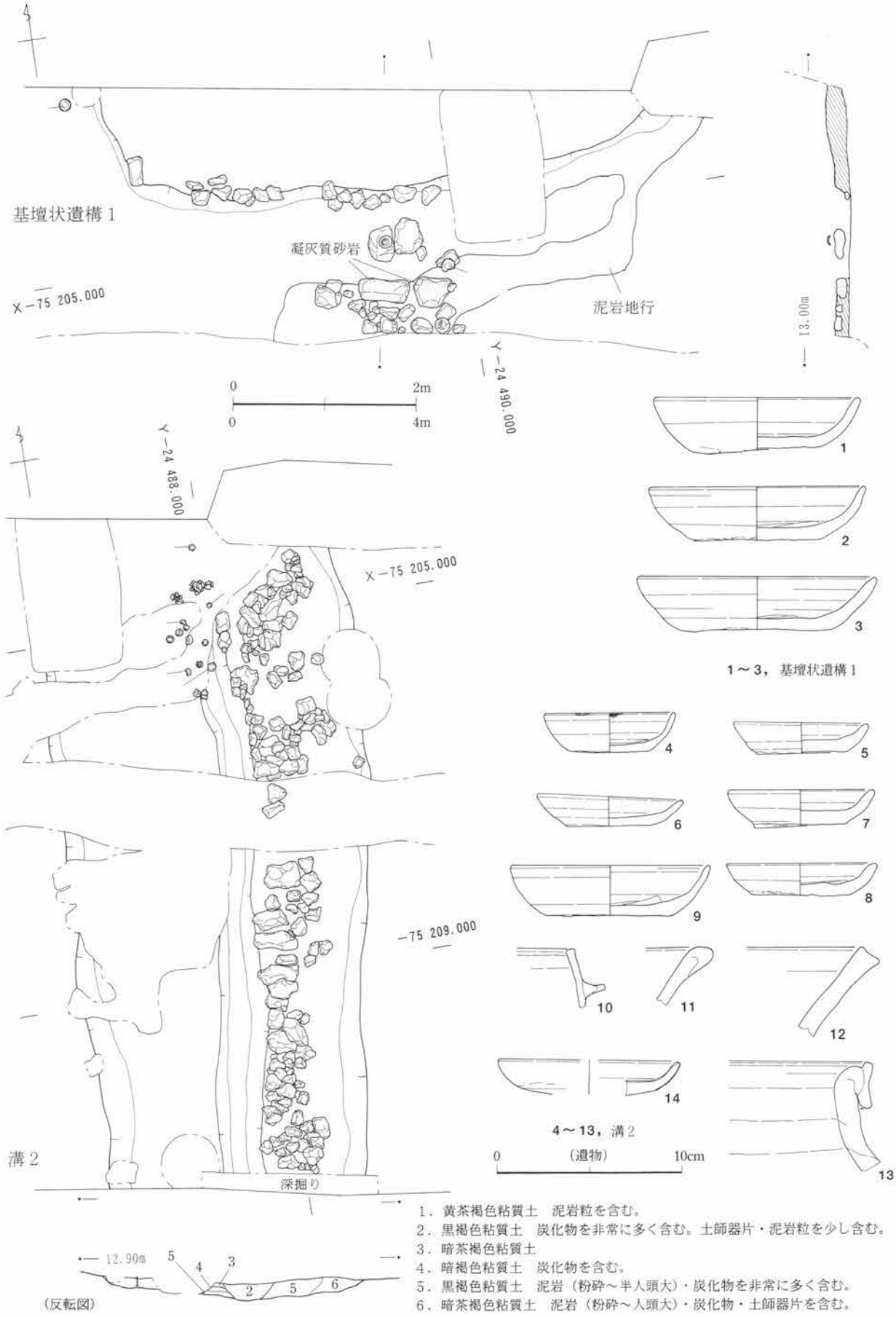


図54　2ａ面遺構全図



1．黄茶褐色粘質土　泥岩粒を含む。
2．黒褐色粘質土　炭化物を非常に多く含む。土師器片・泥岩粒を少し含む。
3．暗茶褐色粘質土
4．暗褐色粘質土　炭化物を含む。
5．黒褐色粘質土　泥岩（粉砕～半人頭大）・炭化物を非常に多く含む。
6．暗茶褐色粘質土　泥岩（粉砕～人頭大）・炭化物・土師器片を含む。

図55　２ａ面基壇状遺構１・溝２、同出土遺物

版築遺構。最大高24cm。１面焼土直下から２面にかけ北壁沿いで検出。南側一帯の弱い泥岩地行の遺存は部分的であるため、全容は不明。２面の内では新しい遺構に属する。

溝２（図55・56）

位置：X－75 204.000～－75 212.000　Y－24 486.500～－24 490.500　**規模**：幅280～344cm（小溝35～52cm）×深さ16cm（小溝19cm）　**断面形**：皿形　**主軸方位**：N－6°－E　**流下方向**：北→南南　**出土遺物**：土師器皿R種（４～９）・鍔鍋（10）・瀬戸こね鉢。類（11）・常滑こね鉢Ⅰ類（12）・常滑甕（13）・白磁皿（14）　**裏込め出土遺物（図56）**：亀山系軟質陶器（15）・平瓦（16）　**特記事項**：調査区中央を走る幅広の南北溝。中央の小溝以外は、東側の泥岩列をはじめ裏込めの可能性もある。北側は基壇状遺構の泥岩地行に接して消滅し、西側の遺構形状も不明瞭。小溝内は炭化物を多量に含んだ黒褐色土で、周辺とは異質な土が堆積。基壇状遺構１と同時期か。白磁皿（14）は下層遺物の混入だろう。

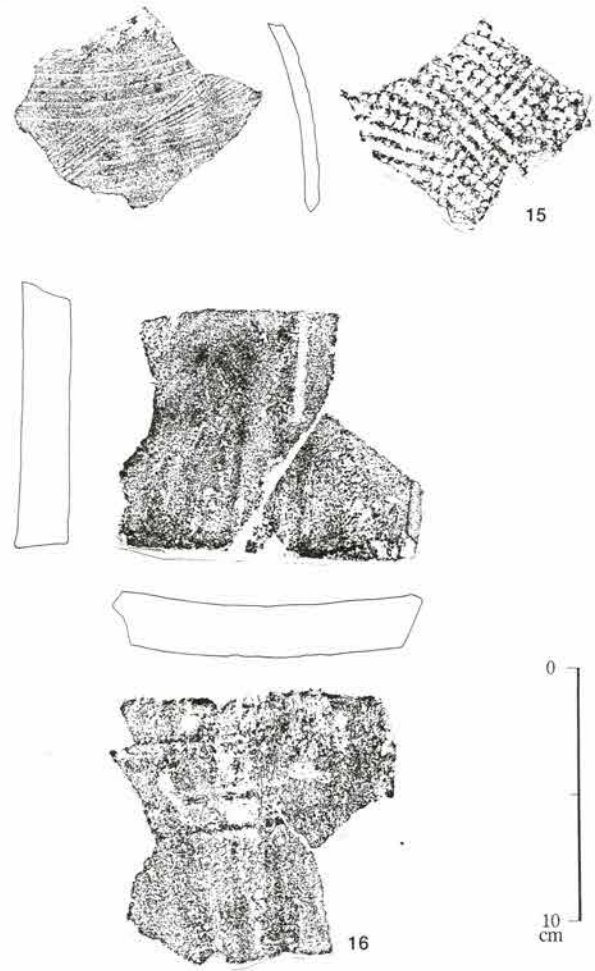


図56　２ａ面溝２裏込め出土遺物

南側炭層出土遺物（図57）

２ａ面上の炭化層からの出土遺物を呈示する。

土師器皿R種中型（１）・瀬戸瓶子（２）・砥石中砥（３）

２ａ面出土遺物（図57・58）

土師器皿Ｒ種（４～31）・鍔鍋(32)・土器火鉢(33)・瓦器火鉢（34～38）・常滑こね鉢。類（39）・常滑こね鉢Ⅰ類（40～43）・常滑甕（44～49）・丸瓦（50）・瀬戸入子（51～53）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（54）・熙寧元宝（55）・聖宋元宝（56）・元豊通宝（57）・皇宋通宝（58）・紹聖元宝（59）・聖宋元宝（60）・大観通宝（61）・砥石仕上砥（62）

４．２ｂ面

建物１（図60・61）

位置：X－75 204.500～－75 211.500　Y－24 482.500～－24 492.000　**規模**：東西４間（平均柱間距離2.06m）×南北３間（平均柱間距離1.91m）　**面積**：31.4㎡　**p．３柱**：10cm×８cm×18cm以上　**p．７柱**：10cm×8cm×30cm以上　**南北軸方位**：N－5°－E　**重複関係**：建物２・溝３に切られる　**出土遺物（図61）**：p.1 常滑甕（１）　p.11 土師器皿Ｒ種（２）・銅製品（３）　p.15 土師器皿Ｒ種（４・５）　**特記事項**：調査区東側中心に検出。西側に広がる可能性は少ない。柱穴充填土の多くは炭化物を多量に含む黒褐色粘質土。２ａ面の包含層と同質であることから上層に近い遺構と推察でき、とすれば位置からみて基壇状遺構関連施設の可能性もある。礎板・礎石・柱の規模から大きいことが予想される。

建物２（図60・61）

位置：X－75 208.000～－75 211.500　Y－24 489.000～－24 492.000　**規模**：東西１間(柱間距離2.00

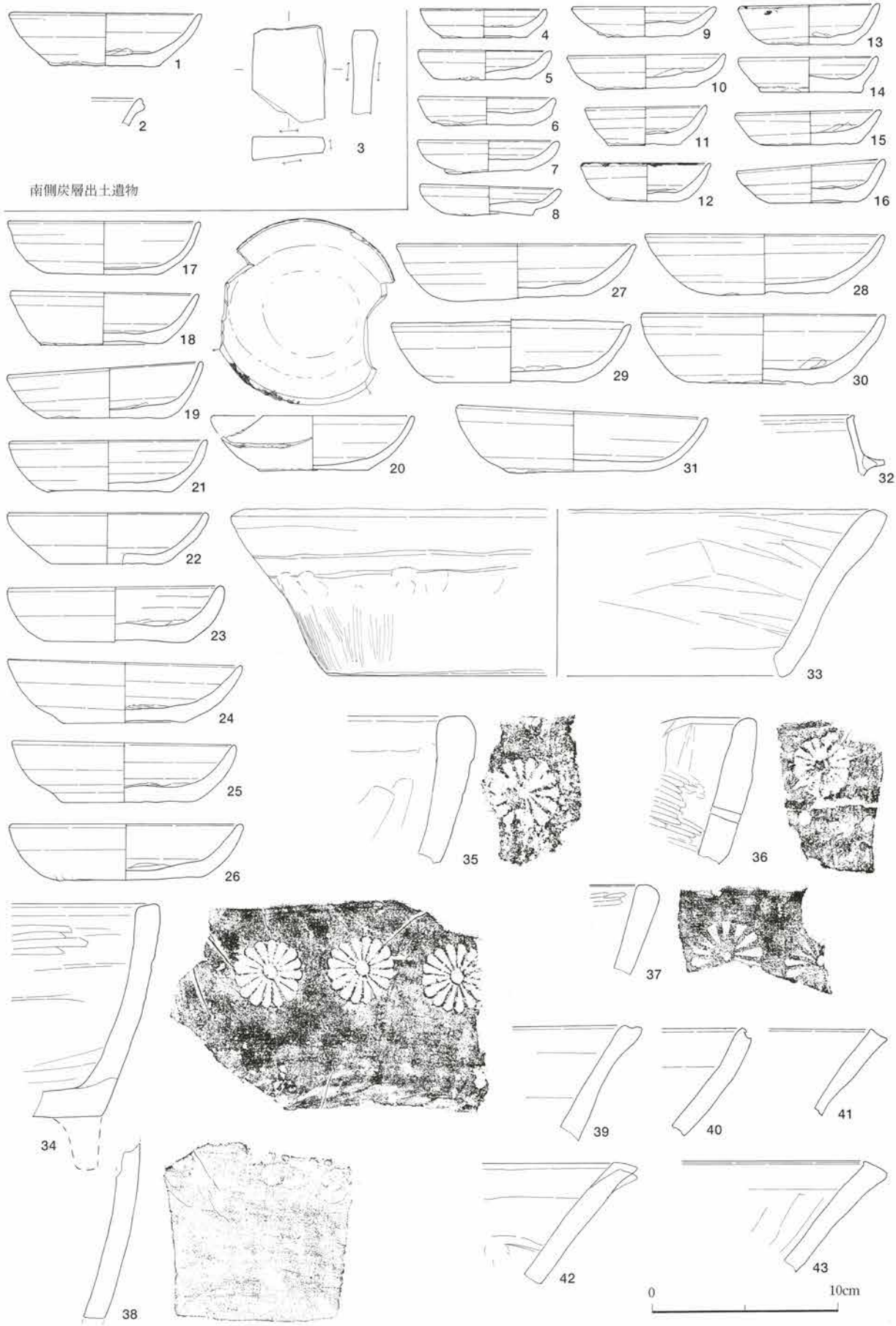


図57　2 a面出土遺物(1)

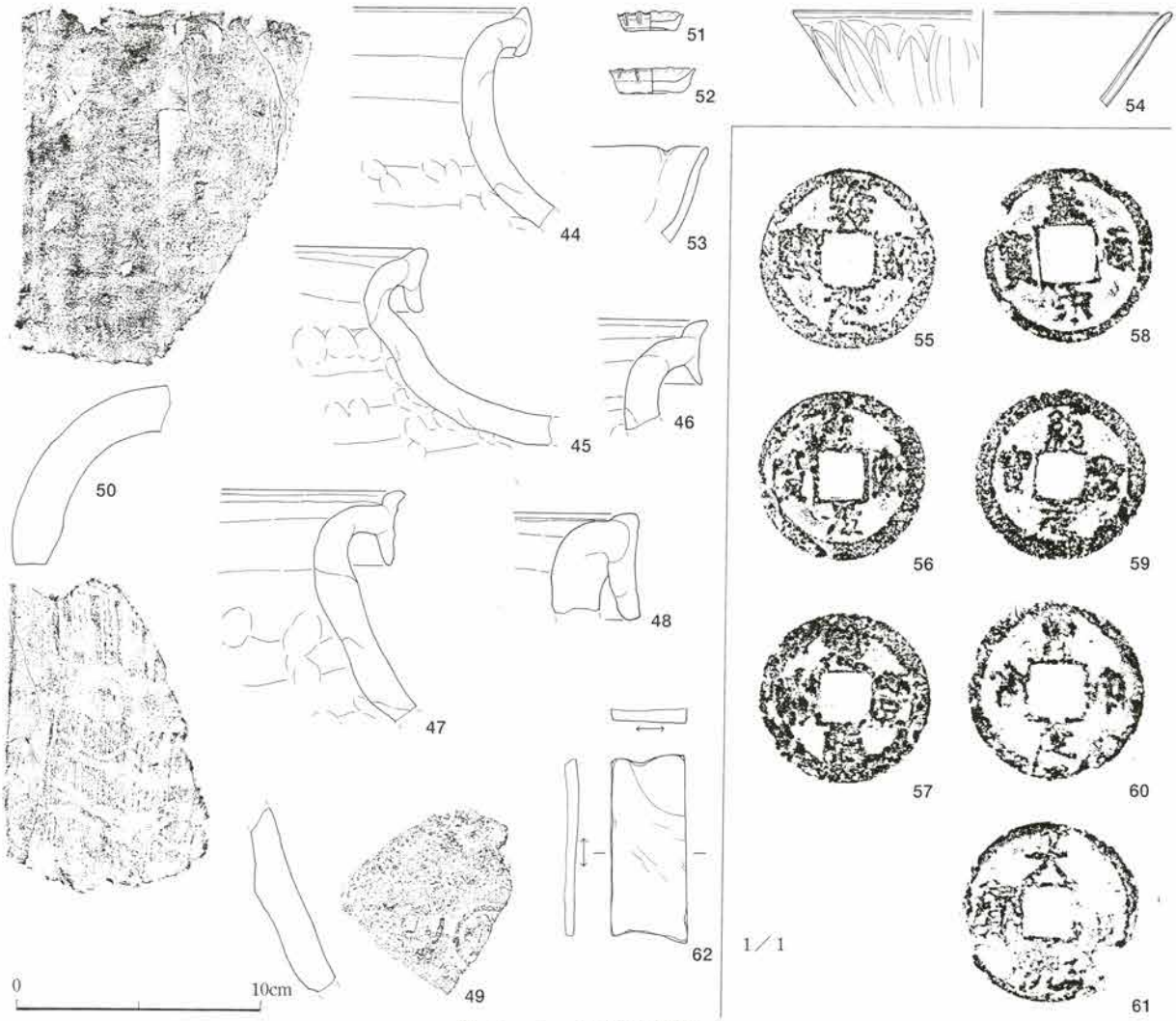


図58　2 a面出土遺物(2)

m）×南北１間（柱間距離2.00m）　**面積**：４㎡　**南北軸方位**：N－4.5°－E　**出土遺物（図56）**：p.2 常滑こね鉢Ⅱ類（６）　**特記事項**：調査区西南角にある。充填土は建物１と同質で近い時期の遺構か。柱穴規模は大きいが建物自体は拡がりを持たない。位置と主軸方位からみて溝３・４との関連も考えられる。

溝３（図62）

位置：X－75 204.500～－75 212.000　Y－24 485.000～－24 487.000　**規模**：幅50～92cm×深さ45～68cm　**断面形**：鉢形　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：N－1.5°－E　**重複関係**：溝４を切る　**出土遺物**：泉州窯黄釉盤（６）　**特記事項**：充填土は図参照。およそ子午線に沿って走る南北溝。溝両壁際には裏込めとみられる破砕泥岩層が部分的に確認される。溝４に直交するが、本址が新しい。

溝４（図62）

位置：X－75 204.500～－75 206.500　Y－24 481.000～－24 495.500　**規模**：幅約50～100cm×深さ約20～37cm　**断面形**：深皿形　**流下方向**：西→東　**主軸方位**：N－86°－W　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種（１～５）　**特記事項**：充填土は図参照。形状が一定せず蛇行しているため、主軸方位には若干の幅がある。他の溝１（１ａ面）や後述の溝５（４面）らとほぼ同軸上に踏襲されているので、単なる排水施設ではなく、地割の役目も担っていよう。溝５（図67）以来の継続性が看取される。

P.79（図62）

位置：X－75 206.500～－75 207.500　Y－24 486.500～－24 487.500　**規模**：長径53cm×短径７cm×深さ26cm　**平面形**：楕円形　**断面形**：すり鉢形　**主軸方位**：N－17°－W　**重複関係**：建物１－ｐ.５を切る　**充填土**：暗褐色粘質土　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種（７～13）　**特記事項**：土師器埋納遺構か

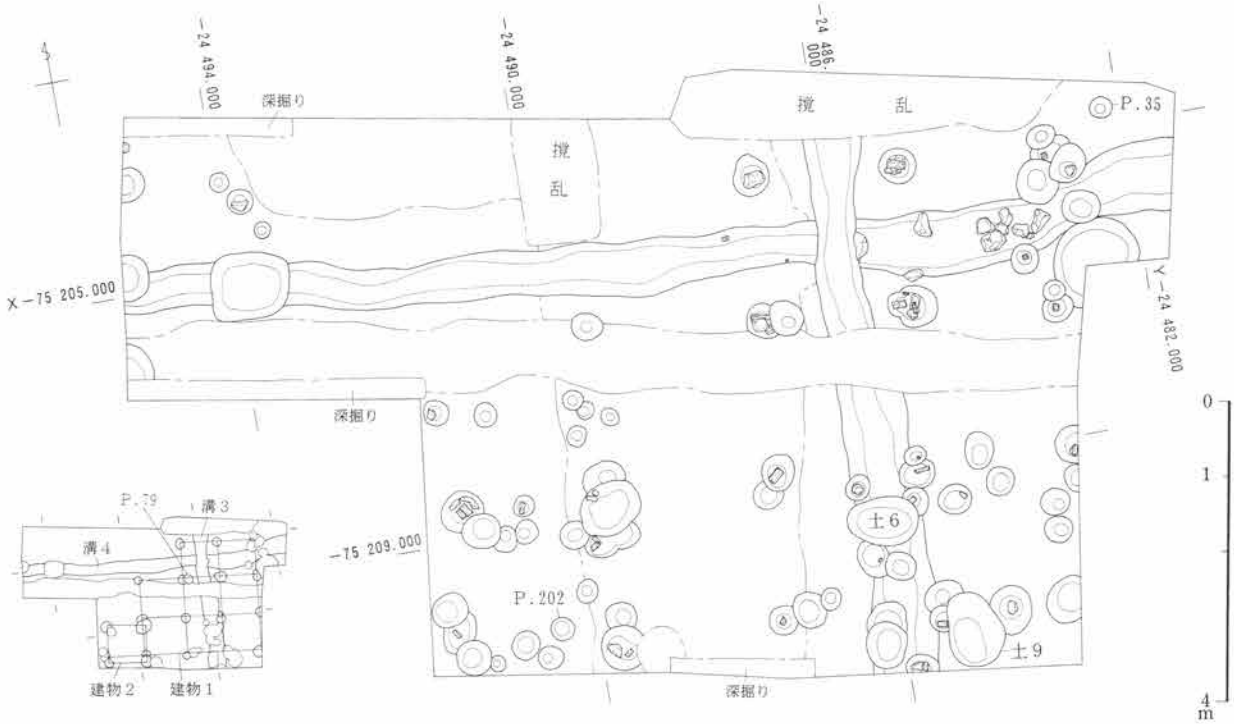


図59　2ｂ面遺構全図

2ｂ面遺構出土遺物（図61）

p.35：淳熙元宝（7）　p.202：土師器皿Ｒ種（8）　土坑6：土師器皿Ｒ種（9・10）・土師器皿Ｒ種極小型（11）・常滑こね鉢Ⅱ類（12）　土坑9：常滑甕（13・14）

5．3面

建物3（図63）

位置：Ｘ−75 204.500〜−75 209.500　Ｙ−24 484.500〜−24 489.000　**規模**：東西2間（平均柱間距離1.74m）×南北2間（平均柱間距離1.93m）　**面積**：6.6㎡　南北軸方位：Ｎ−4°−Ｅ　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：柱穴の充填土はおもに灰褐色砂質土（面直上の堆積土）・暗褐色粘質土（2面包含層）。建物1と同じ主軸方位にあるが、小規模で拡がりをもたない。付帯施設か。

柱穴列1（図63）

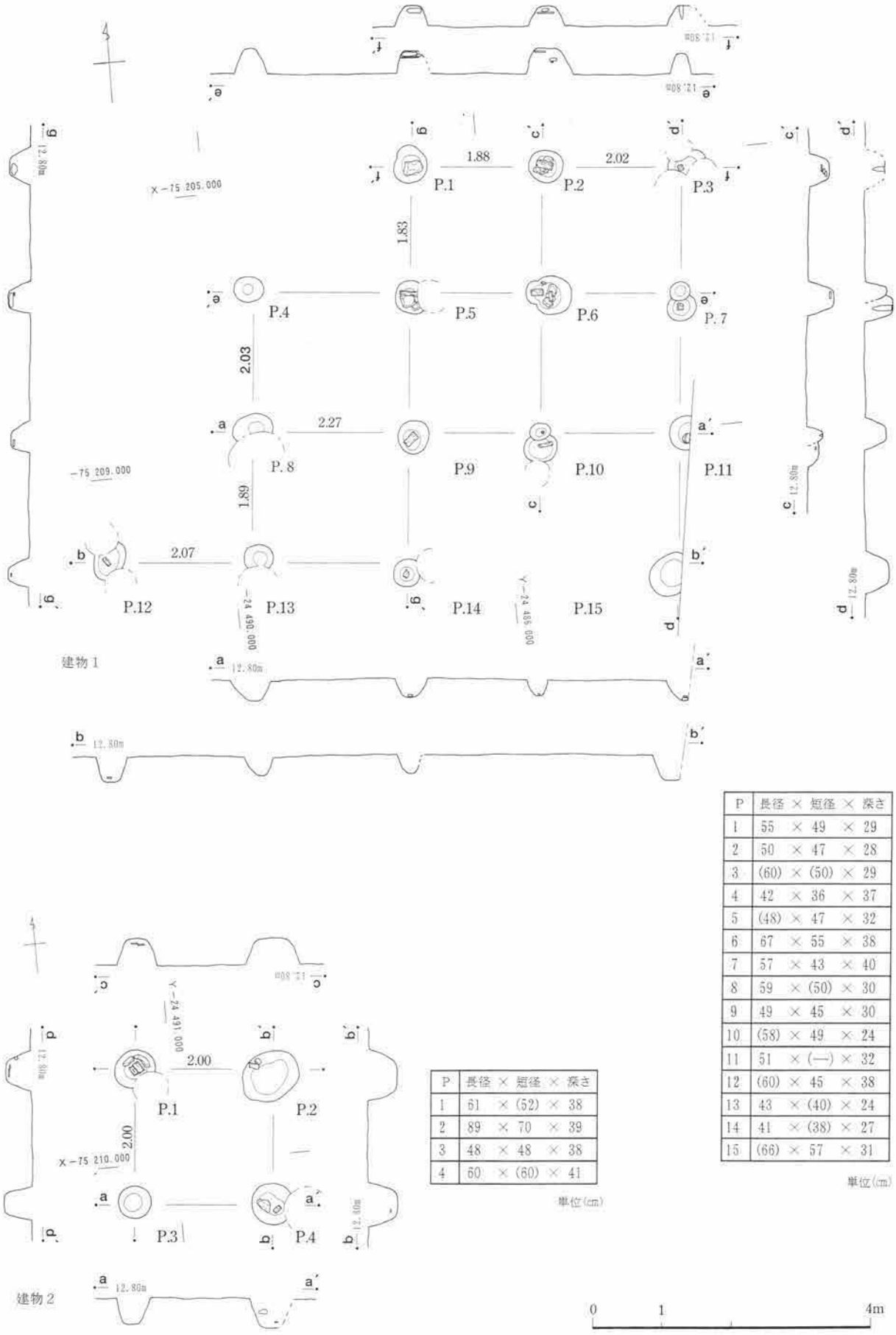
位置：Ｘ−75 204.500〜−75 211.000　Ｙ−24 484.500〜−24 487.500　**規模**：東西1間(柱間距離2.14m)×南北（3）間（平均柱間距離1.75m）　**南北軸方位**：Ｎ−8°−Ｅ　**出土遺物**：鍔鍋　**特記事項**：調査区のほぼ中心で検出。充填土は建物3と同質。全体にカギ形で南へ拡がる可能性がある。

溝状遺構1（図64）

位置：Ｘ−75 203.000〜−75 206.500　Ｙ−24 491.500〜−24 495.500　**規模**：幅18〜46、×深さ15〜33cm　**断面形**：鉢形　**流下方向**：北→南　**南北軸方位**：Ｎ−2.5°−Ｗ　**重複関係**：溝4に切られる　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区北西角で検出したカギ形の小さな溝。充填土は泥岩を含んだ暗褐色粘質土。小規模な上に形状が不明瞭だが、施設に伴う排水溝の一種か。

3面出土遺物（図65）

土師器皿Ｒ種小型（1〜6）・土師器皿Ｒ種大型（7・8）・土器火鉢（9）・渥美こね鉢（10）・常滑こね鉢。類（11）・常滑こね鉢Ⅱ類（12）・常滑甕（13･14）・瀬戸入子（15）・砥石仕上砥（16）・硯（17）・漆器皿（18）・曲物底板（19）



P	長径 × 短径 × 深さ
1	55 × 49 × 29
2	50 × 47 × 28
3	(60) × (50) × 29
4	42 × 36 × 37
5	(48) × 47 × 32
6	67 × 55 × 38
7	57 × 43 × 40
8	59 × (50) × 30
9	49 × 45 × 30
10	(58) × 49 × 24
11	51 × (—) × 32
12	(60) × 45 × 38
13	43 × (40) × 24
14	41 × (38) × 27
15	(66) × 57 × 31

単位(cm)

P	長径 × 短径 × 深さ
1	61 × (52) × 38
2	89 × 70 × 39
3	48 × 48 × 38
4	60 × (60) × 41

単位(cm)

図60　2 b 面建物 1 ・ 2

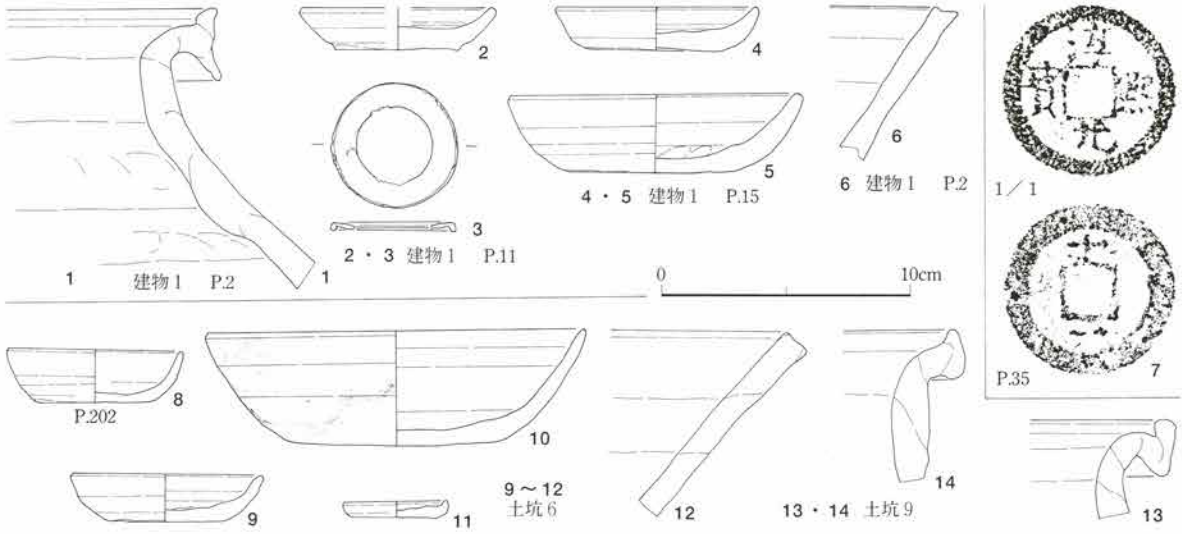


図61　建物1・2ほか2b面遺構出土遺物

6．4面

建物4（図67）

位置：X－75 206.000～－75 209.500　Y－24 489.000～－24 494.000　**規模**：東西2間（平均柱間距離1.90m）×南北1間（柱間距離2.09m）＝7.9㎡（面積）　**南北軸方位**：N－5.5°－E　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：充填土は黄茶褐色粘質土で3面の破砕泥岩が詰まっており、すべての柱穴に礎板がある。西南側に拡がる可能性がある。

溝5（図67）

位置：X－75 205.500～－75 206.500　Y－24 481.500～－24 495.500　**規模**：幅48～62cm×深さ22～35cm　**流下方向**：東→西　**主軸方位**：N－89.5°－W　**重複関係**：落込み5・腐植土により一部消滅　**出土遺物**：土師器皿R種大型（1）　**特記事項**：2b面検出の溝4とほぼ同一の場所にある東西溝。4面の泥岩地行は溝5を境に南側一帯に拡がっており、北側は腐植土を含んだ落込みか、粘性の強い黒褐色土が占めている。溝の中には側板と束柱の部材が一部残存し、底面には僅かながら漆喰が付着していた。地境的性格の施設といえよう。なお該址中の調査区東壁近く南寄りの底面から烏帽子が出土したが（検出高12.33m）、損耗が激しく、原形のまま採集できなかった。形状も不明（図67）。

落込み1（図67）

位置：X－75 210.000～－75 211.500　Y－24 486.000～－24 498.000　**規模**：東西134cm以上×南北96cm以上×深さ最大7cm　**重複関係**：落込み2を切る　**出土遺物**：土師器皿R種小型（2・3）・木製品（4）　**特記事項**：南壁際で検出した。泥岩面が途切れたところに腐植土が廃棄されたような状況で、深さも浅い。遺物片・杭などを含む。

落込み2（図68・69）

位置：X－75 209.000～－75 212.000　Y－24 483.000～－24 486.000　**規模**：東西188cm以上×南北277cm以上×深さ18～25cm　**主軸方位**：不明　**平面形**：（不整楕円形）　**断面形**：（浅皿形）　**重複関係**：溝3に西側が切られる　**出土遺物（図68・69）**：土師器皿R種小型（1～5）・土師器皿R種中型（6・7）・土師器皿R種大型（8・9）・常滑こね鉢Ⅰ類（10）・常滑甕（11）・瀬戸天目茶碗（12）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（13）・漆器皿（14～16）・漆器椀（17）・折敷（18）・円盤型木製品（19）・木製品（20）・箸状木製品（21・22）・草履芯（23・24）・木製部材（25・26）　**特記事項**：調査区東南角で検出。充填土は他の落込みと同様の腐植土だが、木製品・遺物などを大量に含む。底面には粗い泥岩面がある。

落込み3（図67）

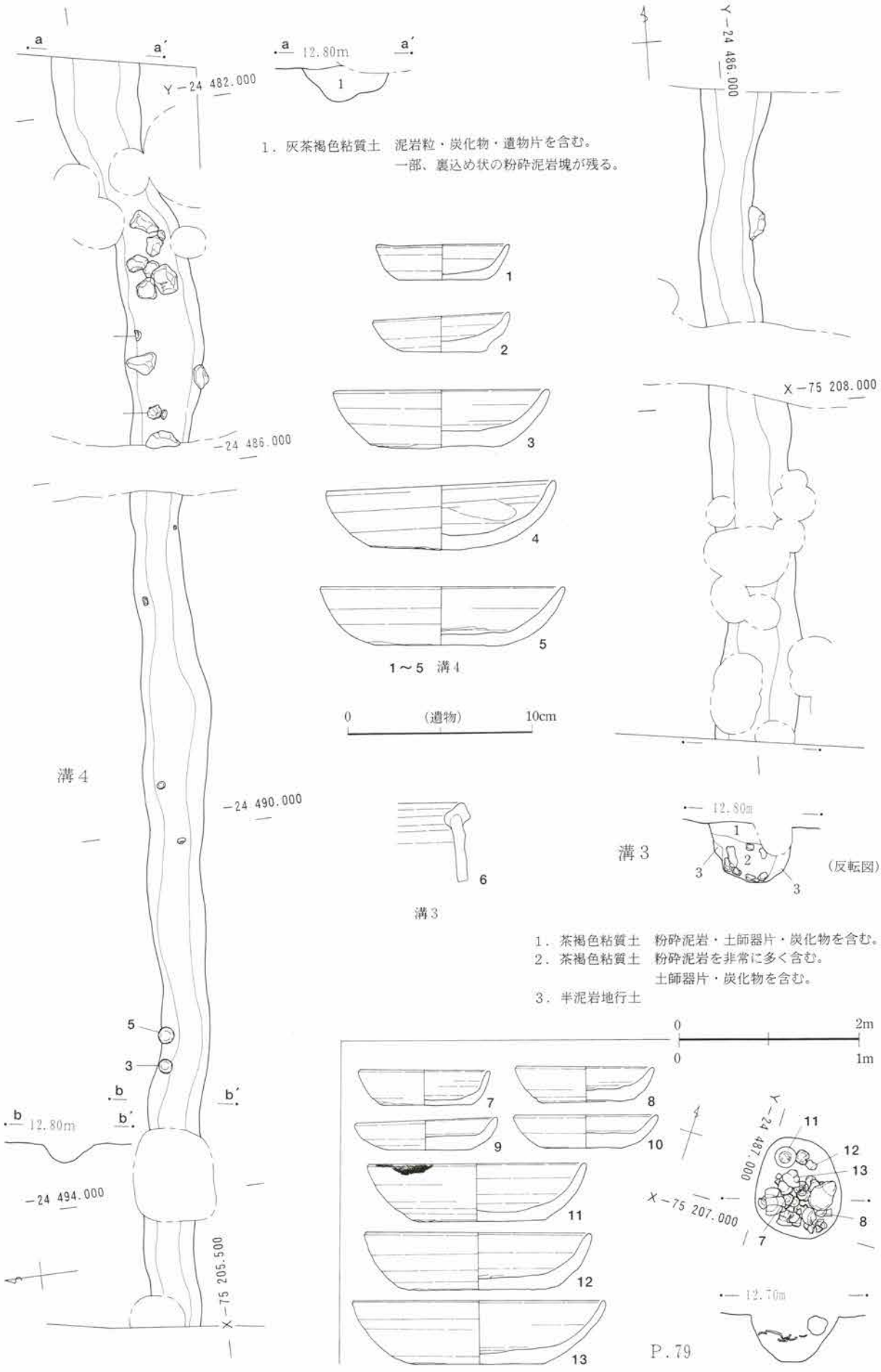
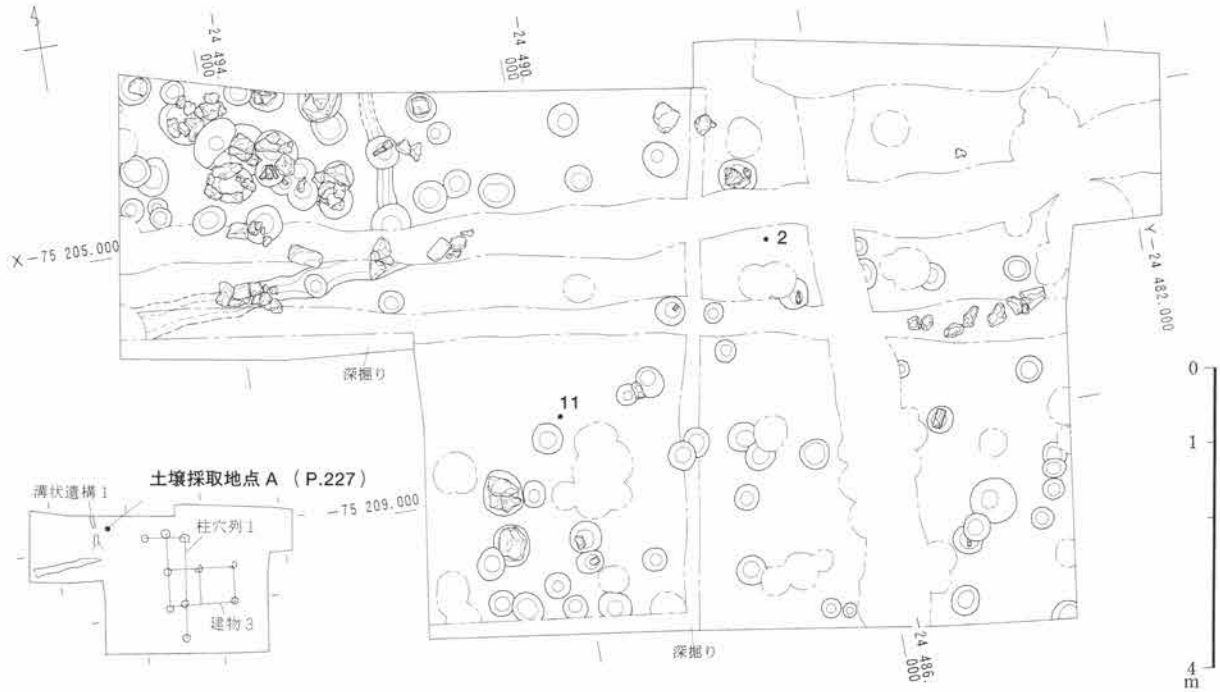
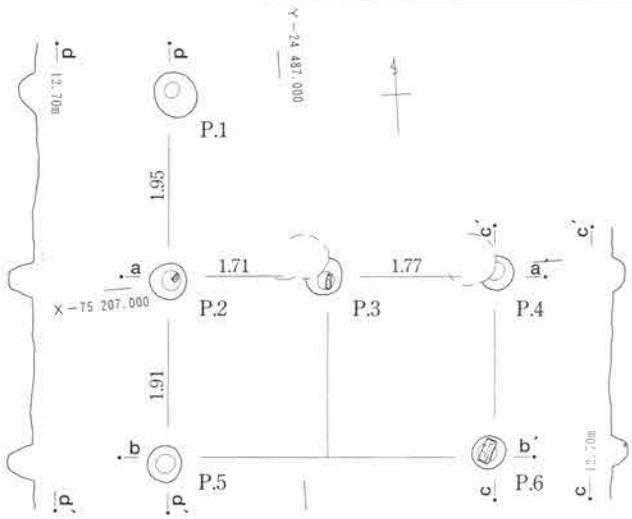


図62　2ｂ面溝３・４、ｐ.79、同出土遺物



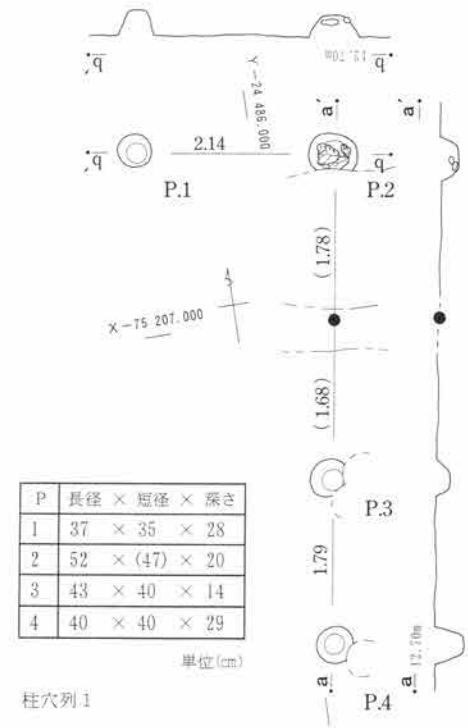
3面遺構全図



P	長径 × 短径 × 深さ	P	長径 × 短径 × 深さ
1	49 × 44 × 19	4	37 × (35) × 17
2	40 × 40 × 26	5	40 × 36 × 28
3	(40) × 38 × 11	6	37 × 35 × 17

単位(cm)

建物3



P	長径 × 短径 × 深さ
1	37 × 35 × 28
2	52 × (47) × 20
3	43 × 40 × 14
4	40 × 40 × 29

単位(cm)

柱穴列1

図63　3面遺構全図（上段）、建物3・柱穴列1、同出土遺物

位置：X－75 208.500～－75 211.500　Y－24 486.500～－24 489.000　**規模**：長辺220cm以上×短辺214cm×深さ18cm　**平面形**：（方形）　**断面形**：（皿形）　**主軸方位**：N－5.5°－E　**重複関係**：落込み１に切られる　**出土遺物**：落込み1と区別できず　**特記事項**：調査区中央部南端に検出。Ⅰ区とⅡ区にまたがる。充填土は落込み１と同質の腐植土で浅い。東側縁辺に側板と束柱・杭が一部残存。

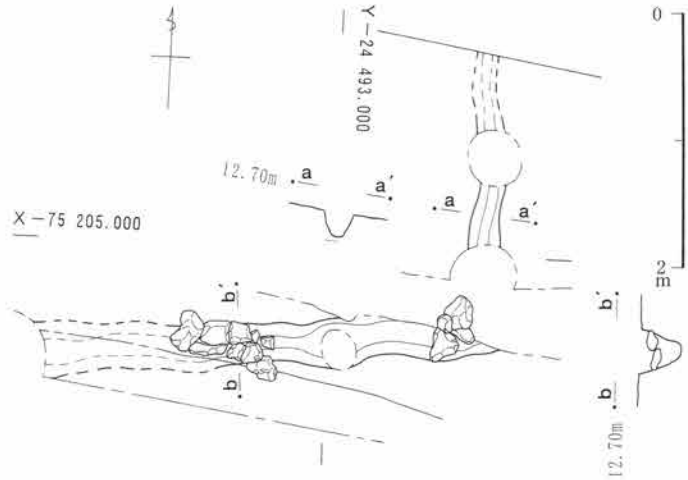


図64　３面溝状遺物

落込み４（図70・71）

位置：X－75 204.000～－75 208.500　Y－24 481.500～－24 485.000　**規模**：長辺345cm以上×短辺320cm以上×深さ２～20cm　**重複関係**：溝５に切られる　**主軸方位**：（N－2.5°－W）　**平面形**：（隅丸方形）　**断面形**：皿形　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（１～３）・土師器皿Ｒ種大型（４～８）・白色系

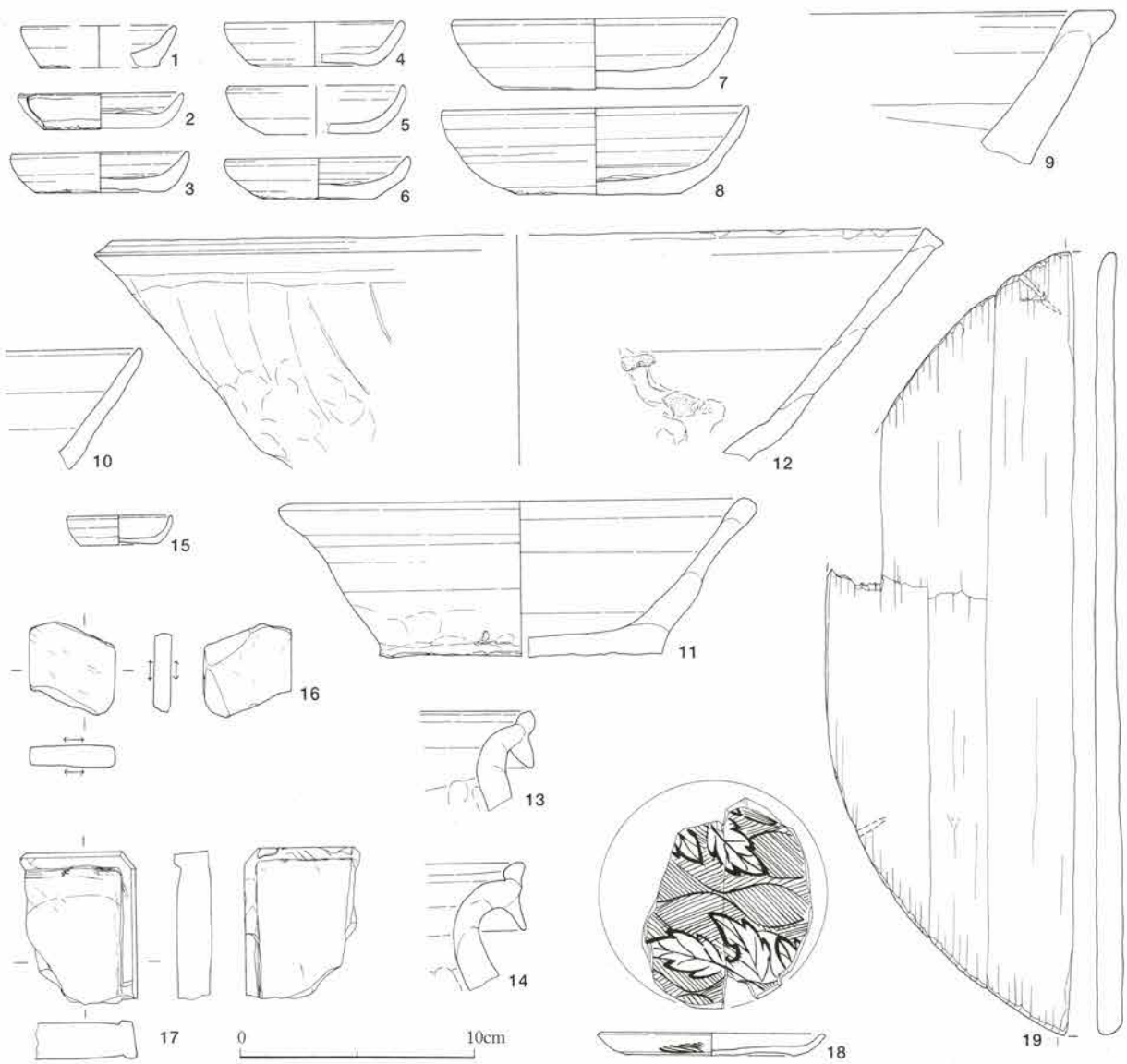


図65　３面出土遺物

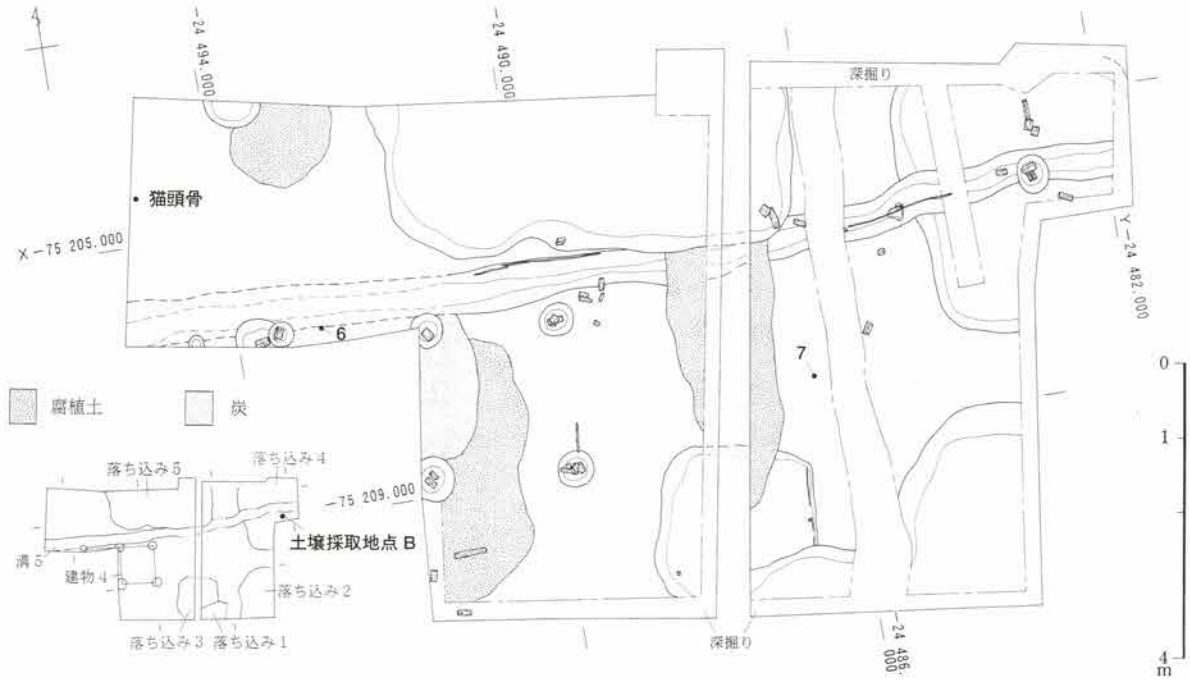


図66　4面遺構全図

土師器皿Ｔ種（９）・瀬戸入子（10）・泉州窯緑釉盤（11）・平瓦（12）・円盤型木製品（13）・折敷（14）・箸状木製品（15～19）・串状木製品（20）・不明木製品（21）・草履芯（22）　**特記事項**：調査区北東角で検出する。精査時では落込みの外まで腐食土が拡がっていた。直下にも同質の落込み６がある。２基の落込みの間には図化不能なほど薄い青灰色貝砂層と炭化層が、互層状に堆積している。

落込み５（図70・71）

位置：Ｘ－75 203.500～－75 206.500　Ｙ－24 486.000～－24 492.000　**規模**：東西540cm以上×南北214cm以上×深さ５～28cm　**重複関係**：溝５を切る　主軸方位：（Ｎ－83.5°－Ｗ）　**平面形**：隅丸方形　**断面形**：鉢形　**出土遺物（図71）**：慶元通宝（23）・箸状木製品（24～27）・草履芯（28）　**特記事項**：調査区中央部北壁際で検出した大きな落込み。形状は不明瞭ながら北へ向かって緩やかに傾斜しているのが確認できた。他の落込みも含め腐植土の集中的な堆積の要因については、投棄かそれともつぶれた家屋の材か（屋根または床材等）、検討課題としたい。

４面出土遺物（図72）

土師器皿Ｒ種小型（１・２）・土師器皿Ｒ種大型（３）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（４）・双六駒（５）・漆器皿（６）・漆器椀（７）・箸状木製品（８）・串状木製品（９）・木製部材（10）・木製部材（11）　**特記事項**：猫頭骨１点が調査区西壁際から出土した（個別図略、地点は図66参照）

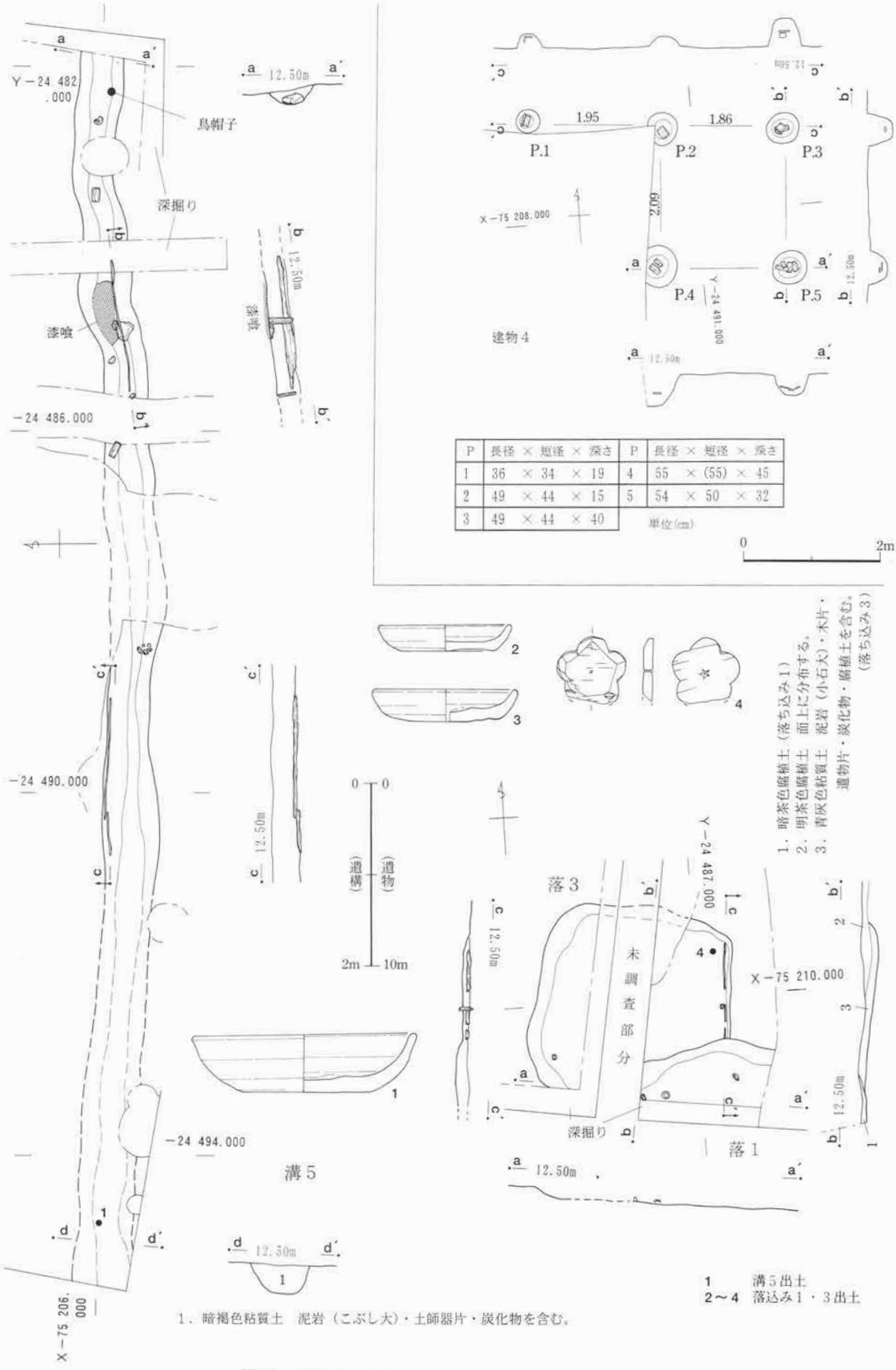
７．５ａ面

建物５（図73）

位置：Ｘ－75 206.500～－75 210.000　Ｙ－24 486.000～－24 491.000　**規模**：東西２間（平均柱間距離2.02m）×南北１間（柱間距離1.90m）＝7.69㎡（面積）　**南北軸方位**：Ｎ－4.5°－Ｅ　**重複関係**：溝７に切られる　**出土遺物**：ｐ．４木製刀子さや（１）　**特記事項**：調査区中央にあり、西側調査区外へ伸びる可能性がある。主軸方位と位置からみて、柱穴列２・溝６との関係が推測できる。充填土は泥岩粒と腐植土が混入した暗茶褐色粘質土（ｐ．１・２・４・５）と青灰色粘質土（ｐ．３・６）がある。

柱穴列２（図73）

位置：Ｘ－75 206.000～－75 207.000　Ｙ－24 483.500～－24 494.500　**規模**：東西（５）間（平均柱間距離2.03m）　**主軸方位**：Ｎ－89.5°－Ｅ　**重複関係**：溝６を切り、溝７・落込み６に切られる　**出土**



P	長径 × 短径 × 深さ	P	長径 × 短径 × 深さ
1	36 × 34 × 19	4	55 × (55) × 45
2	49 × 44 × 15	5	54 × 50 × 32
3	49 × 44 × 40		

単位(cm)

図67 建物4、溝5、落込み1・3、同出土遺物

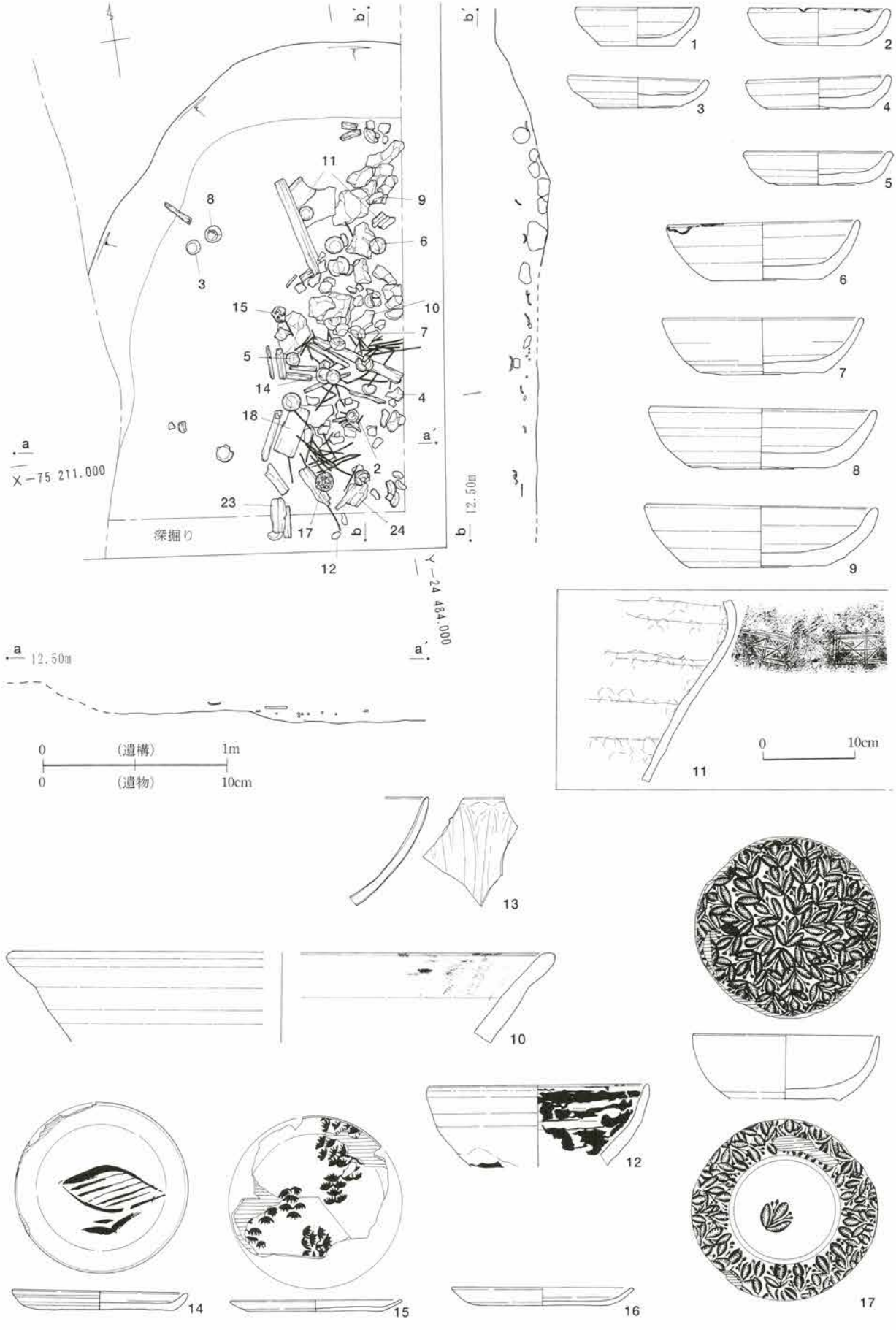


図68　落込み２、同出土遺物(1)

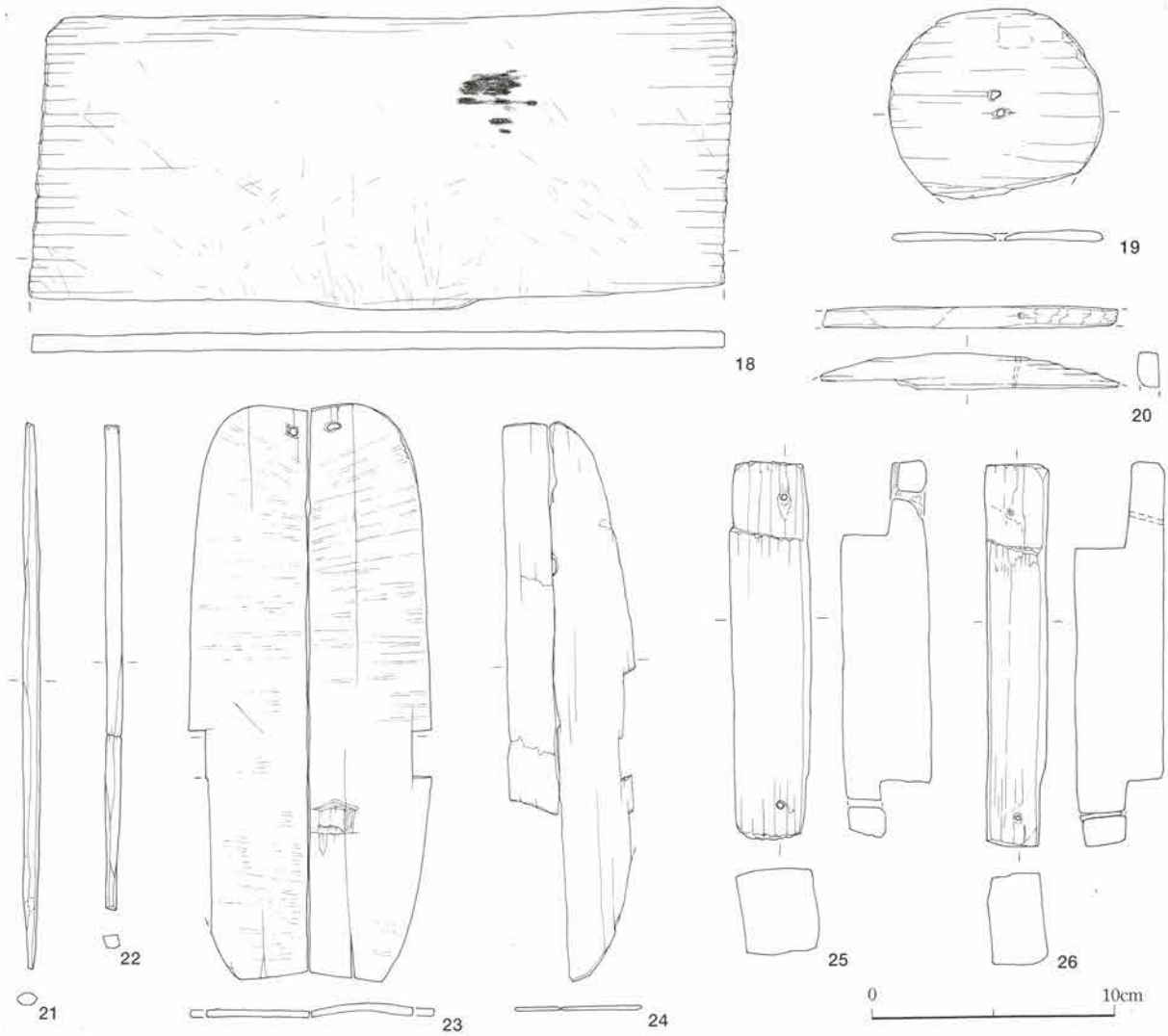


図69　落込み２出土遺物(2)

遺物：p.1 ヘラ状木製品（2）・p.2 土師器皿R種小型（3）　**特記事項**：調査区中央部のほぼ経線に沿った東西柱穴列。先の溝１・４・５と軸方位・位置ともに符合する。本址を境に、以南には建物５がある。柵のような境界線的役割が看取される。充_土は建物５と同質。

溝６（図74）

位置：X－75 204.000～－75 211.500　Y－24 485.000～－24 486.500　**規模**：幅15～42cm×深さ１～23cm　**断面形**：U字形　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：N－4°－E　**重複関係**：柱穴列２に切られる　**出土遺物**：滑石鍋（1）　**特記事項**：調査区東寄りにある南北溝。上層遺構の削平により細くなっており形状も不安定。とくに北側は上層遺構によって大半失われている。

溝７（図74・75）

位置：X－75 205.000～－75 211.000　Y－24 489.500～－24 496.000　**規模**：幅71～94cm×深さ34～42cm　**断面形**：逆台形　**流下方向**：西→南　**南北軸方位**：N－4.5°－E　**重複関係**：落込み７に切られ、建物５・柱穴列２を切る　**出土遺物（図75）**：土師器皿R種大型（1）・東濃型山茶碗（2）・曲物底（3）・杓子状木製品（4）・草履芯（5）　**特記事項**：調査区西側に位置する、カギ形に屈曲した溝。掘立柱建物（建物５）の存在とあわせ、今小路西遺跡（御成小学校内）３面武家屋敷の「遣水」とされた屈曲溝（河野ほか1990）を思わせる。充填土は腐植土と泥岩を含む。

落込み６（図74・75）

位置：X－75 204.500～－75 207.000　Y－24 481.500～－24 484.000　**規模**：東西234cm以上×南北

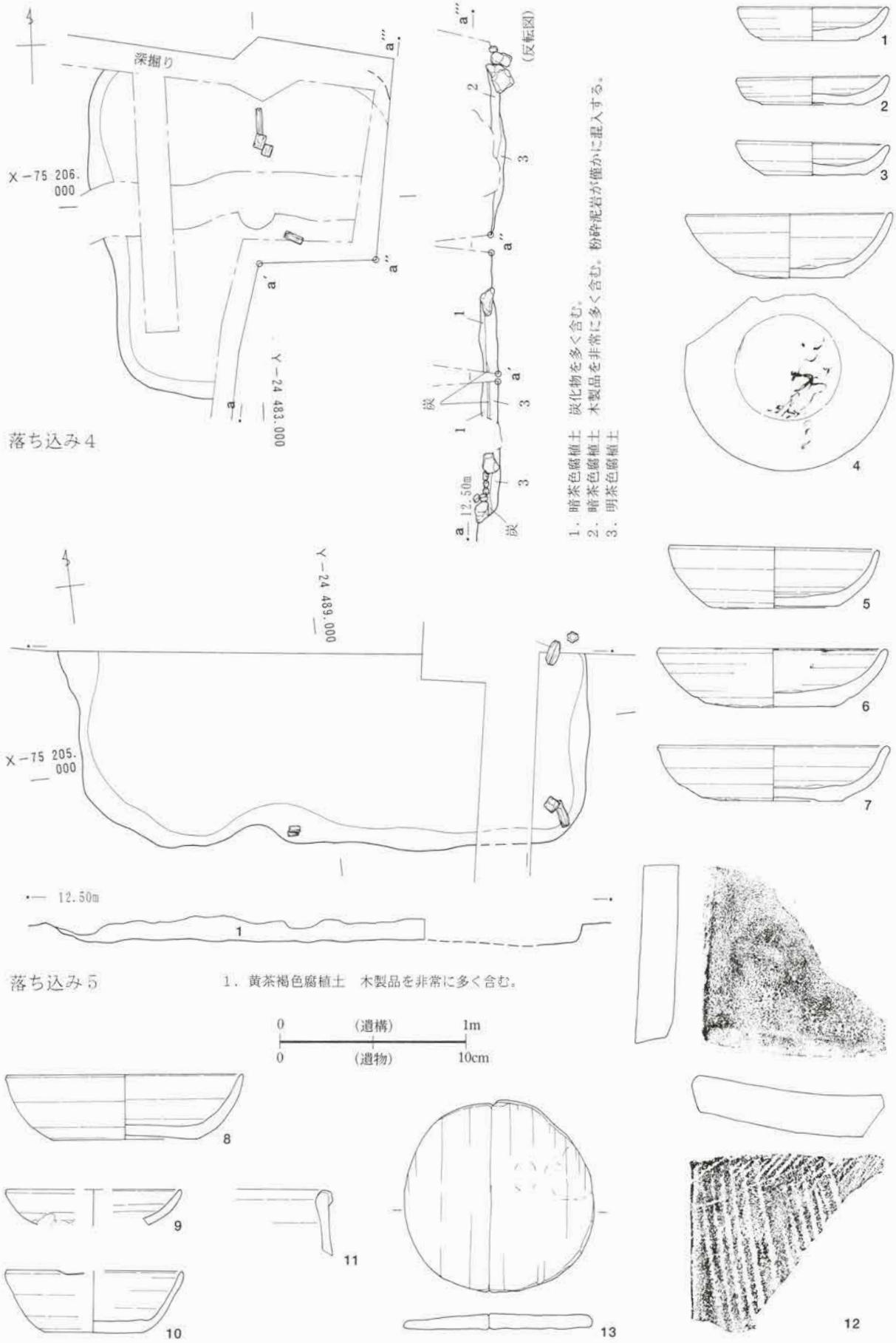


図70　落込み4・5、落込み4出土遺物

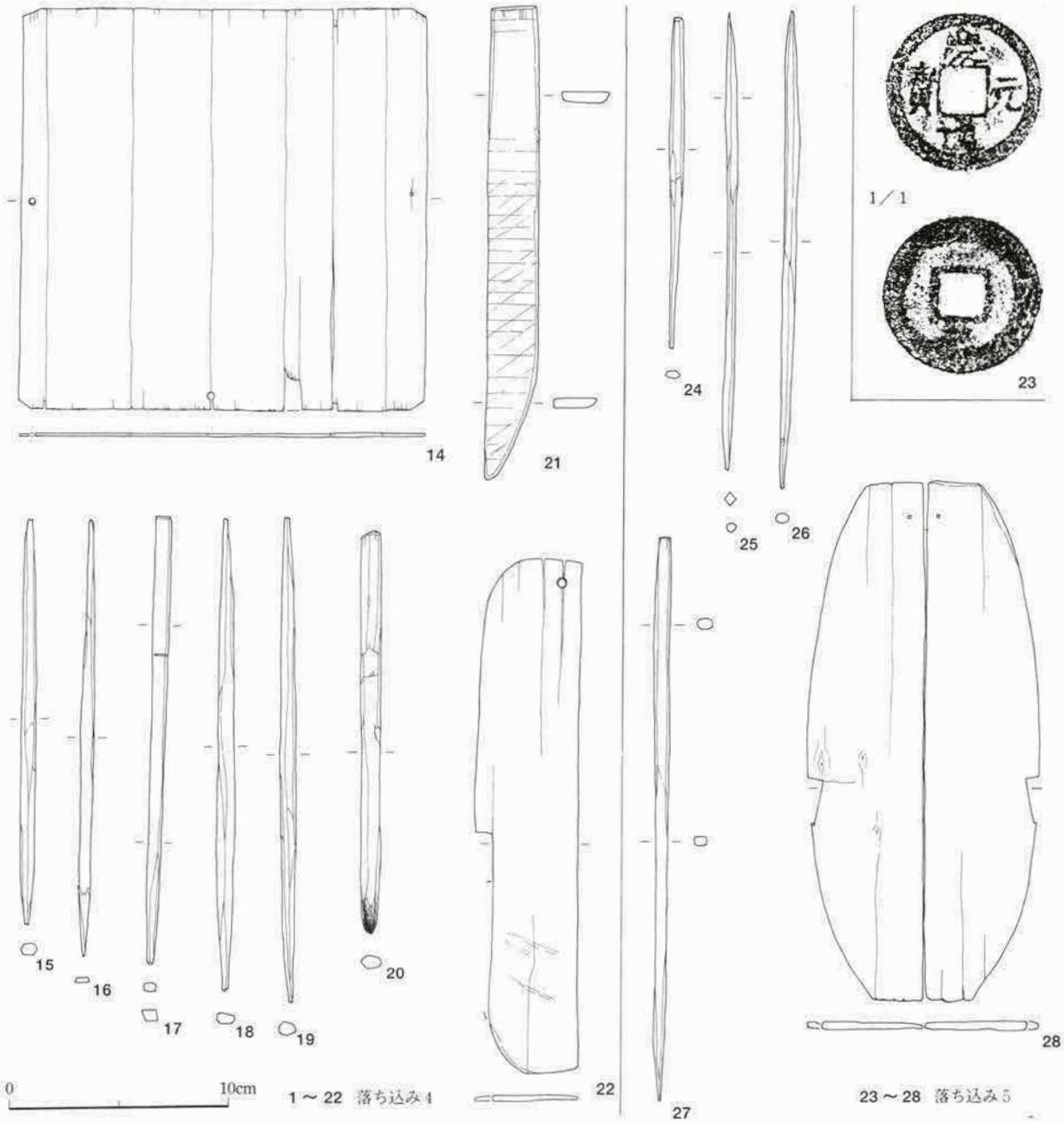


図71　落込み4・5出土遺物(2)

268cm以上×深さ12～32cm　**重複関係**：土坑12を切る　**南北軸方位**：(N－9°－W)　**平面形**：(不整方形)　**断面形**：皿形　**出土遺物（図75）**：土師器皿R種大型（13）・連歯下駄（14）・棒状木製品（15）・箸状木製品（16・17）　**特記事項**：調査区北東角で検出。落込み4と同様の遺構。腐植土となる植物質の素材を廃棄した場か。

落込み7（図76～78）

位置：X－75 203.000～－75 206.000　Y－24 491.500～－24 495.500　**規模**：東西333cm以上×南北213cm以上×深さ8～38cm　**重複関係**：溝7を切る　**東西軸方位**：N－79.5°－W　**平面形**：(不整長方形)　**断面形**：皿形　**出土遺物（図76～78）**：土師器皿R種小型（1・2）・土師器皿R種大型（3・4）・土師器皿R種極小型（5）・土製鋳型（6）・土器火鉢（7）・東濃型山茶碗（8）・常滑こね鉢Ⅱ類（9・10）・常滑甕（11・12）・磨耗陶片（13）・白磁口はげ皿（14）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（15）・元祐通宝（16）・漆器皿（17～21）・曲物底板（図44－22～24・26・27）・円盤型木製品（25）・曲物側板（28～30）・箸状木製品（31～35）・ヘラ状木製品（36・37）・連歯下駄（図78－38・39）・木製脚（40）・不明木製品（41～44）・木製部材（45）　**特記事項**：調査区北西端に位置する。東から西にかけ緩やかに落ち込んでい

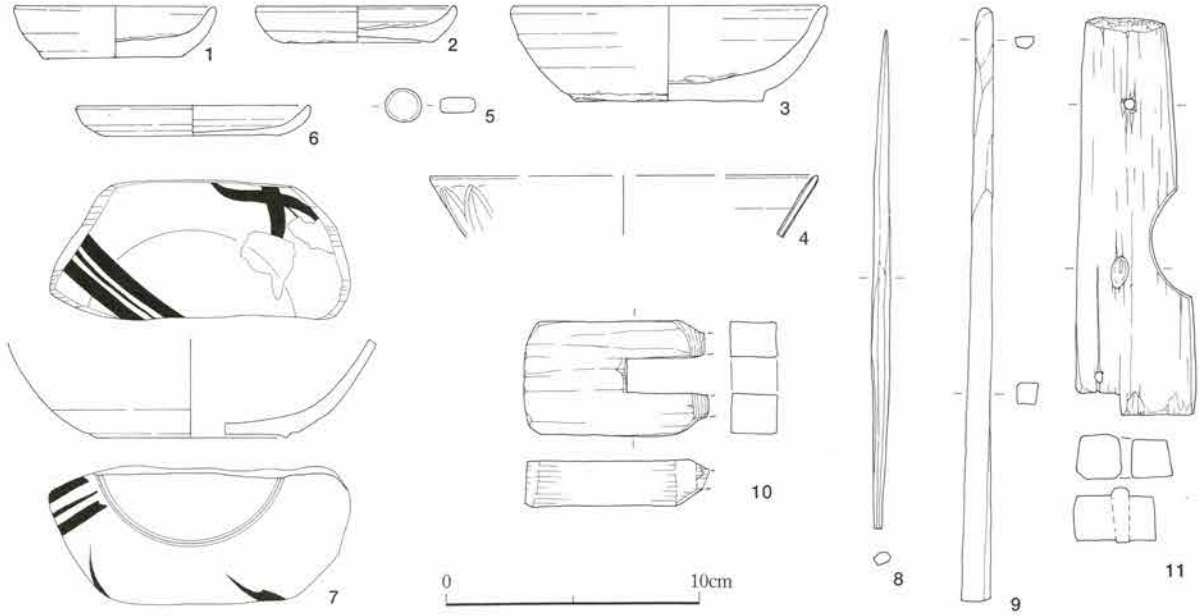


図72　4面出土遺物

るが全容は不明。充填土は貝・木製品を大量に含んだ腐植土質のもの。

落込み8（図74・75）

位置：X－75 208.500～－75 211.000　Y－24 489.500～－24 492.000　**規模**：東西250cm以上×南北182cm以上×深さ20cm以上　**重複関係**：溝7に切られる　**主軸方位**：不明　**平面形**：（不整楕円形）　**断面形**：（皿形）　**出土遺物（図75）**：土師器皿R種小型（18）・土師器皿R種大型（19）・花型木製品（20）・不明木製品（21）・漆塗り棒状木製品（22）　特記事項：調査区南西角にある。全容は不明。木製品を非常に多く含んだ腐植土が入り、落込み7などと同様の状況を示す。

土坑12（図74・75）

位置：X－75 206.000～－75 208.000　Y－24 483.000～－24 484.000　**規模**：東西98cm以上×南北140cm以上×深さ31cm以上　**主軸方位**：不明　**平面形**：（楕円形）　**断面形**：皿形　**重複関係**：落込み6に切られる　**出土遺物（図75）**：土師器皿R種小型（6）・曲物（7）・箸状木製品（9）・草履芯（9～11）・不明木製品（12）　**特記事項**：落込み6の下にある。充填土も同質だが遺物を多く含む。

土坑13（図74・75）

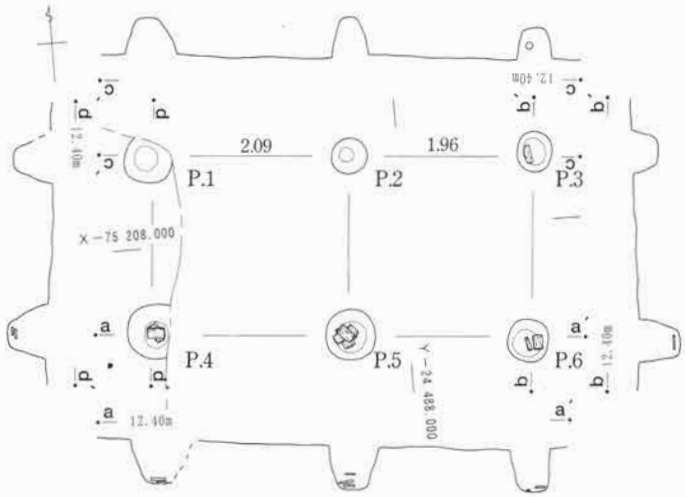
位置：X－75 206.500～－75 208.000　Y－24 486.000～－24 486.5000　**規模**：東西54cm×南北74cm×深さ21cm　**主軸方位**：N－6°－W　**平面形**：楕円　**断面形**：皿形　**重複関係**：溝6を切り、建物5－p.3に切られる　**出土遺物（図74）**：東濃型山茶碗（2）・鉄釘（3）　**充填土**：黒褐色粘質で炭層に近く、木片を多量に含む　**特記事項**：隣接の土坑14と同様、溝6に接する位置にある

土坑14（図74・75）

位置：X－75 207.000～－75 208.000　Y－24 485.500～－24 486.000　**規模**：東西98cm×南北86cm×深さ20cm　**主軸方位**：N－88°－W　**平面形**：不整楕円　**断面形**：皿形　**充填土**：黒褐色粘質で炭層に近く、木片を多量に含む　**重複関係**：溝6を切る　**出土遺物（図74）**：土師器皿R種大型（4）・漆器蓋（5）・箸状木製品（6・7）・板締め染型板（8）　**特記事項**：土坑13に似る。出土遺物10は後出の5a面出土の図80－33とは別個体とみられるが、いずれにせよ染色職人の存在を示唆する。

5a面出土遺物（図79・80）

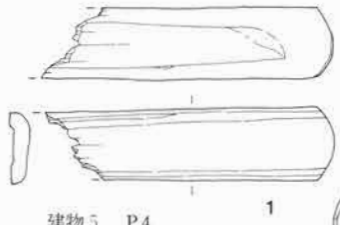
土師器皿R種小型（図79－1・2）・土師器皿R種大型（3～6）・白色系土師器皿T種小型（8）・白色系土師器皿T種（8～10）・東濃型山茶碗（11）・瀬戸入子（12）・常滑こね鉢。類（13）・竜泉窯青磁鎬



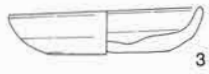
建物5

P	長径 × 短径 × 深さ
1	52 × (50) × 41
2	38 × 37 × 42
3	47 × 37 × 33
4	49 × (46) × 43
5	54 × 52 × 45
6	45 × 43 × 45

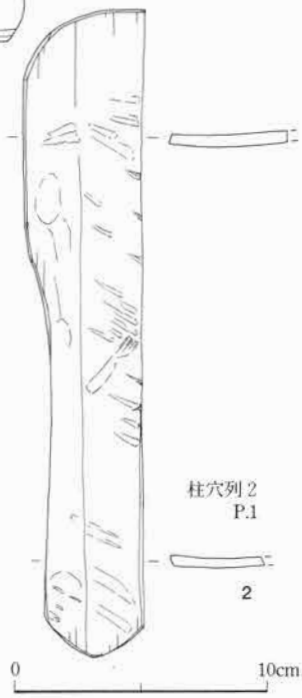
単位(cm)



建物5　P.4



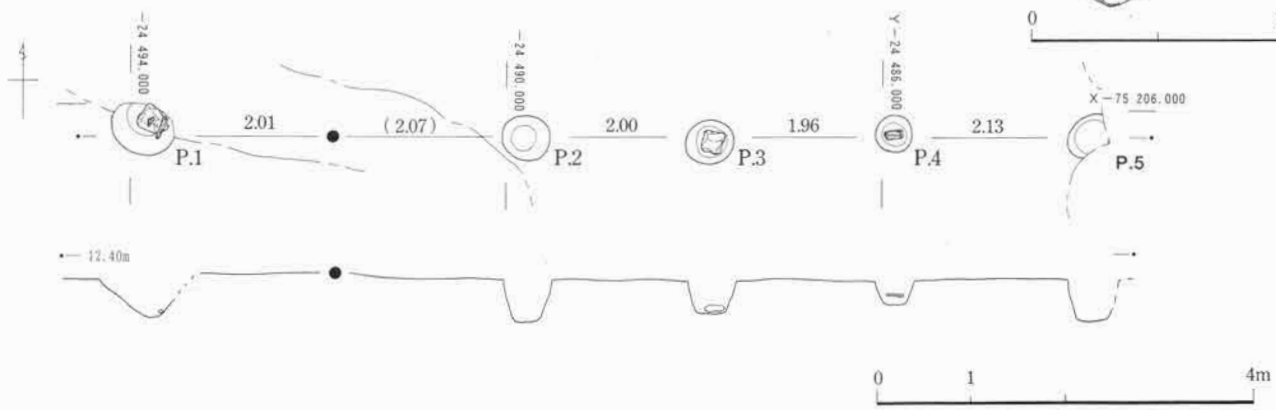
柱穴列2　P.2

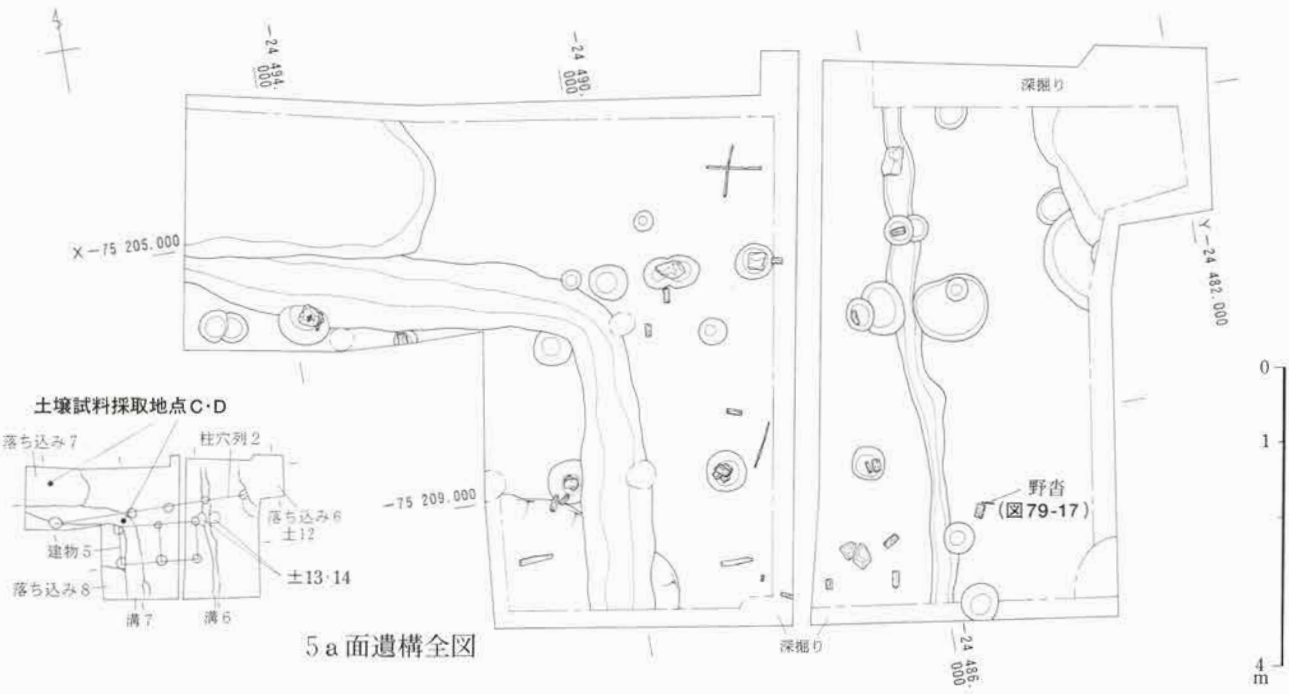


P	長径 × 短径 × 深さ	P	長径 × 短径 × 深さ
1	70 × (—) × 46	4	39 × 39 × 25
2	52 × 48 × 45	5	(56) × (48) × 45
3	50 × 47 × 35		

単位(cm)

柱穴列2





5a面遺構全図

図73　5a面遺構全図、建物5・柱穴列2

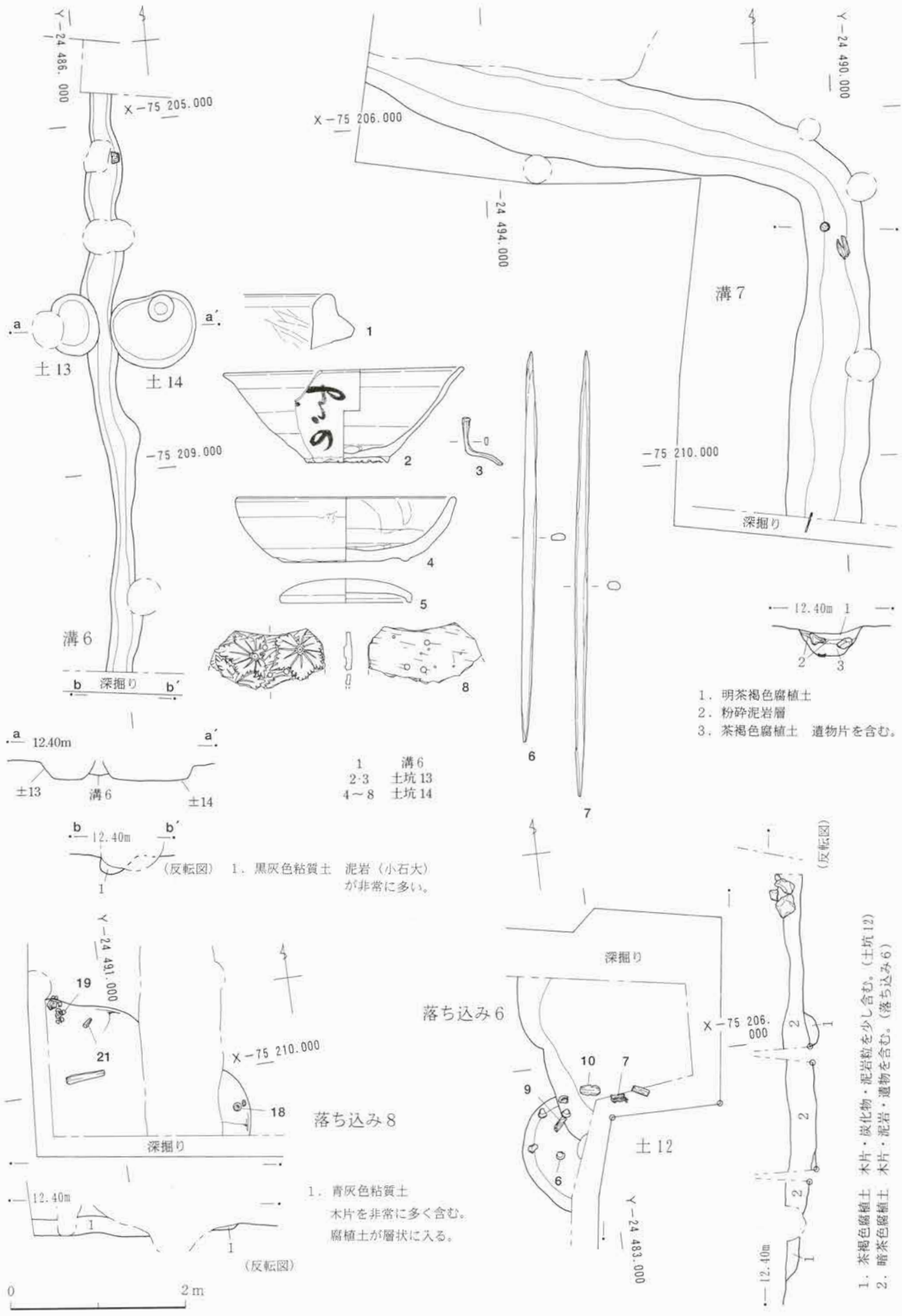


図74　溝6，土坑13·14，同出土遺物、溝7・落込み6・同8・土坑12

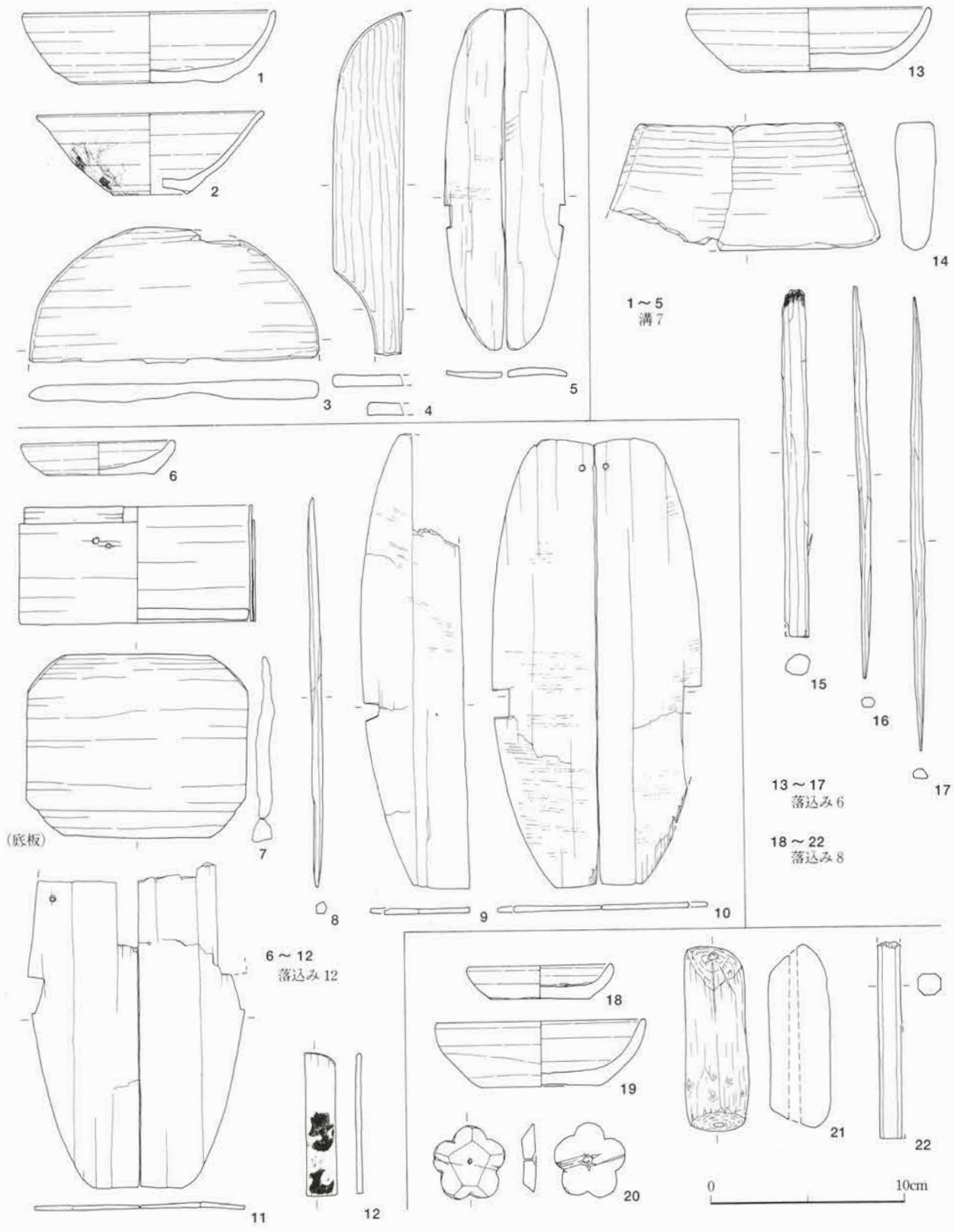
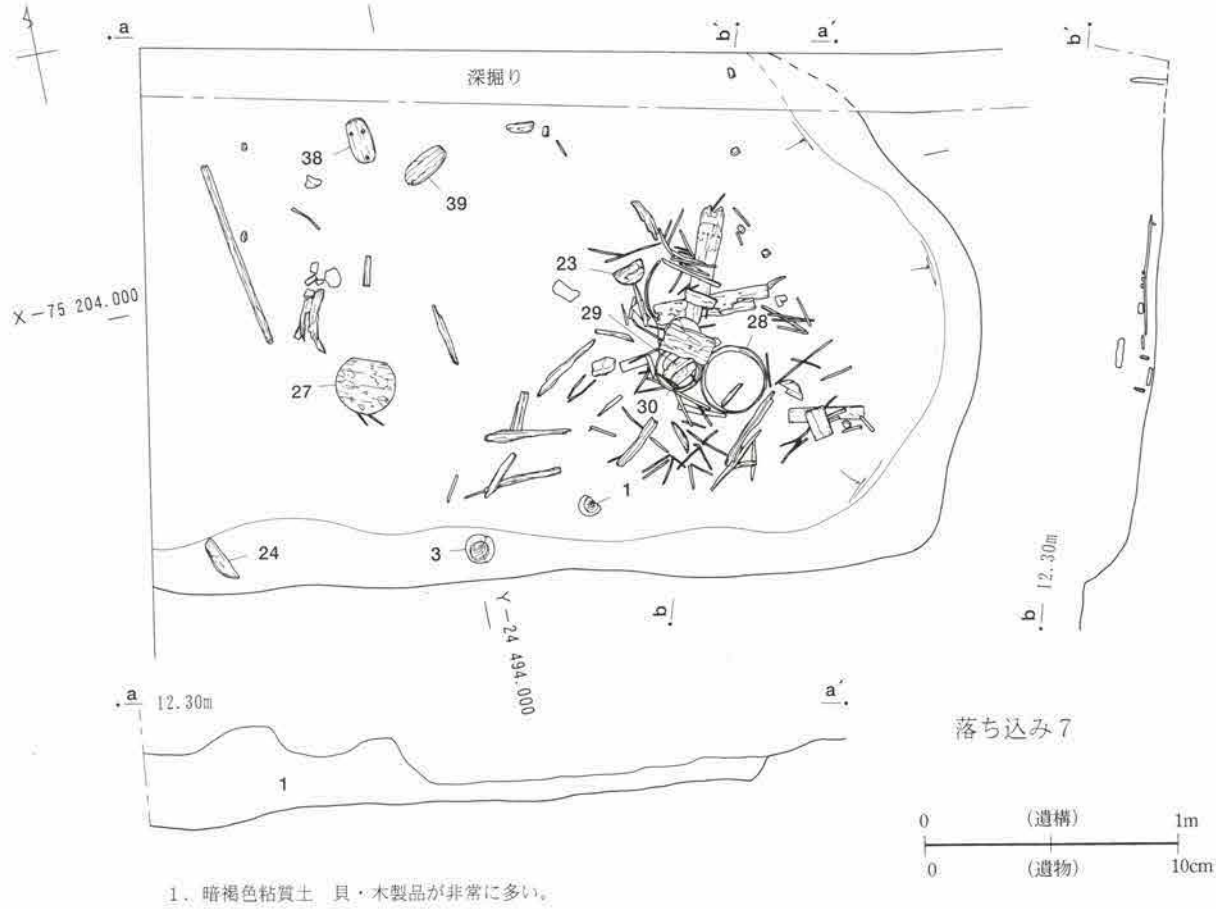


図75　溝7・土坑12・落込み6・同8出土遺物

連弁文碗（14）・天禧通宝（15）・砥石中砥（16）・鹿角製野沓（17）・漆器皿（18～20）・漆器椀（21）・曲物底（22）・箸状木製品（23～26）・串状木製品（27～29）・杭状木製品（図80－30）・草履芯（31）・不明木製品（32）・板締め染型板（33）・不明木製品（34）・漆塗棒状部材（35）・部材（36）・不明木製品（37）・部材（38・39）　**特記事項**：30は毬打に使う毬杖（きゅうじょう）の転用か。33は鎌倉で二例めの発見。多数の小孔



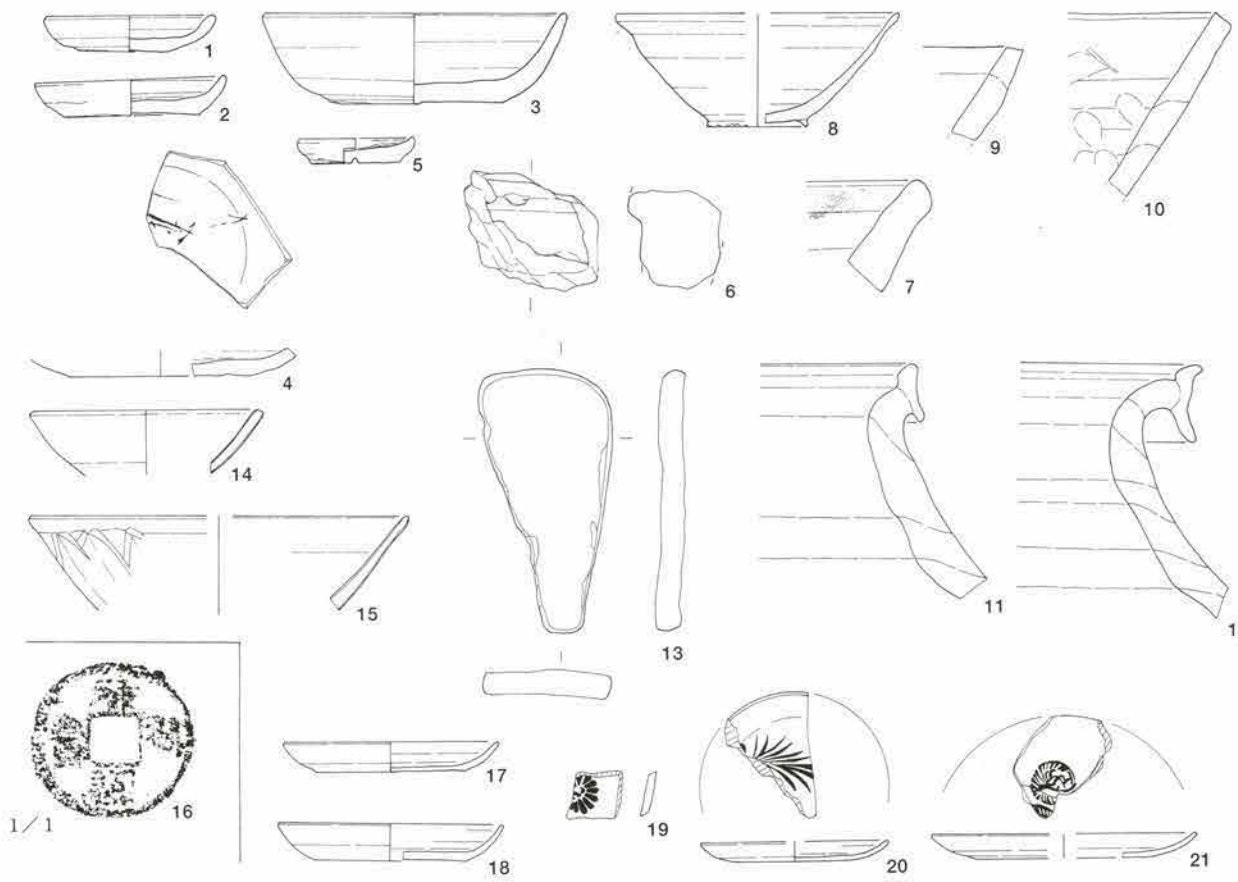


図76　落込み7、同出土遺物(1)

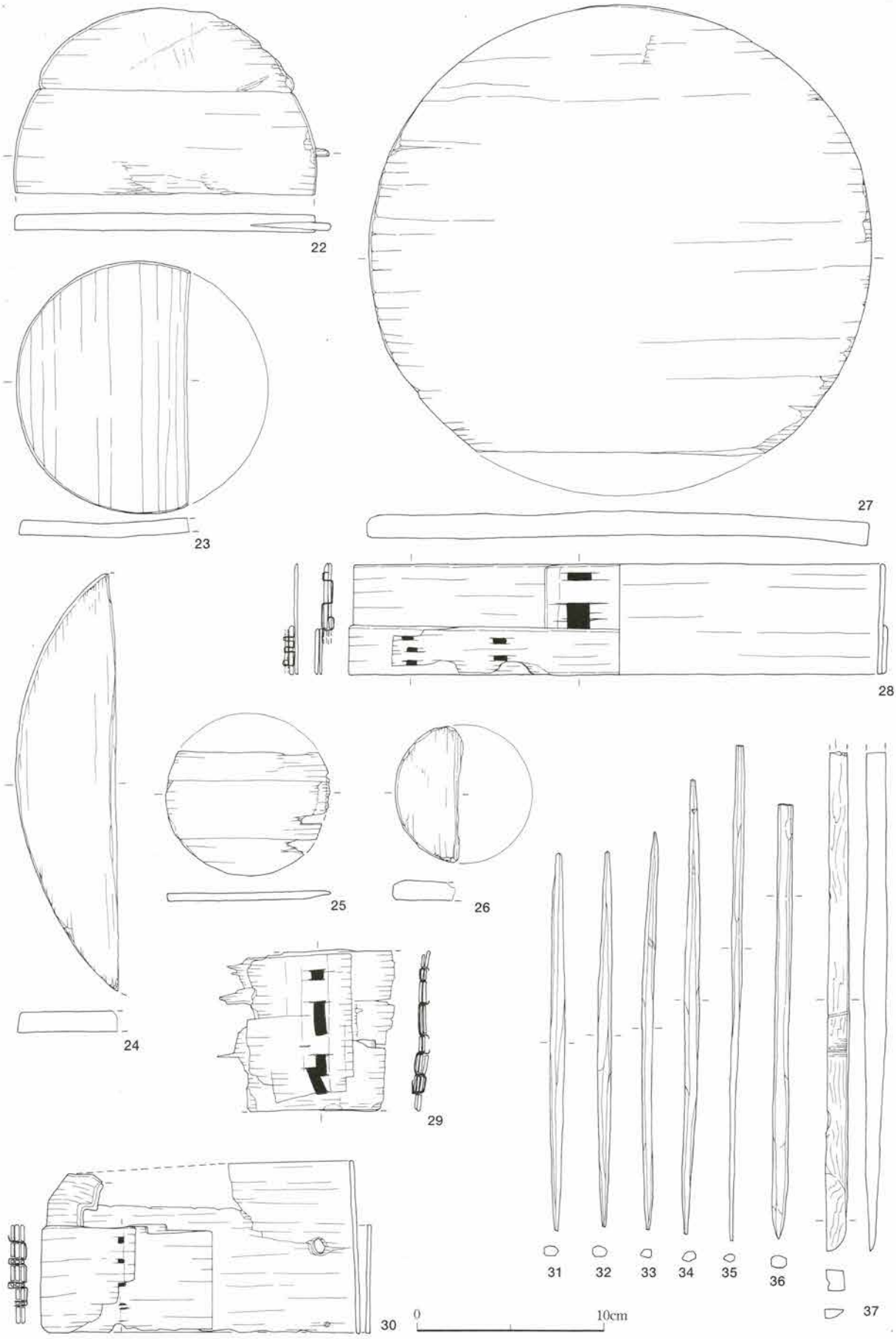


図77　落込み７出土遺物(2)

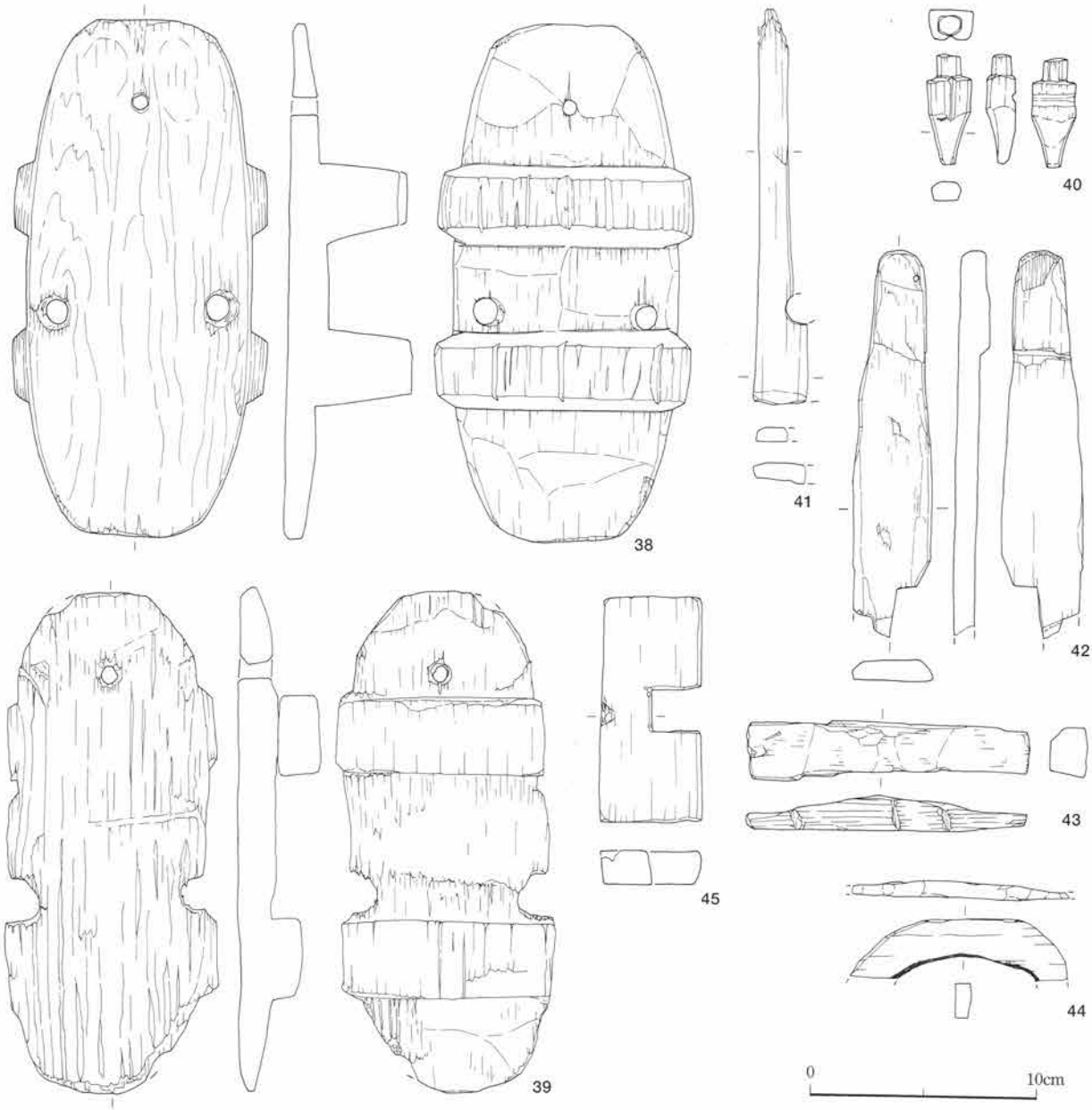


図78　落込み７出土遺物(3)

は染料を浸透させるためのもの。染色職人の存在を示唆する。38と39は接合する。

８．５ｂ面

築地状遺構２（図81・82）

位置：X－75 206.000～－75 210.000　Y－24 483.000～－24 488.000　**規模**：東西386cm以上×南北348cm以上×高さ最大45cm　**出土遺物（図82）**：草履芯（１）　**特記事項**：大小泥岩塊を集めた盛上りが東西に作られる。高さは45cmだが、上部は削られ５ａ面として使用されている。上部は損壊して凹凸がある。５ｃ面包含層の薄い暗茶色粘質土が下に潜っていたため、５ｂ時に構築された築地のような何か周囲と比高のある遺構と判断した。西に向け緩やかに高低差は消滅していく。

建物６（図81）

位置：X－75 208.000～－75 211.000　Y－24 486.000～－24 491.000　**規模**：東西２間（平均柱間距離1.95m）×南北１間（柱間距離2.00m）＝7.8㎡（面積）　**南北軸方位**：N－３°－E　**重複関係**：柱列１を切る　**出土遺物**：p.３ 鉄釘（１）　**特記事項**：調査区南西で検出する。充填土は破砕泥岩を多く含んだ暗灰色粘質土。位置的にみて築地上遺構や北側の落込みに阻まれ、北方への拡がりは考えられない。

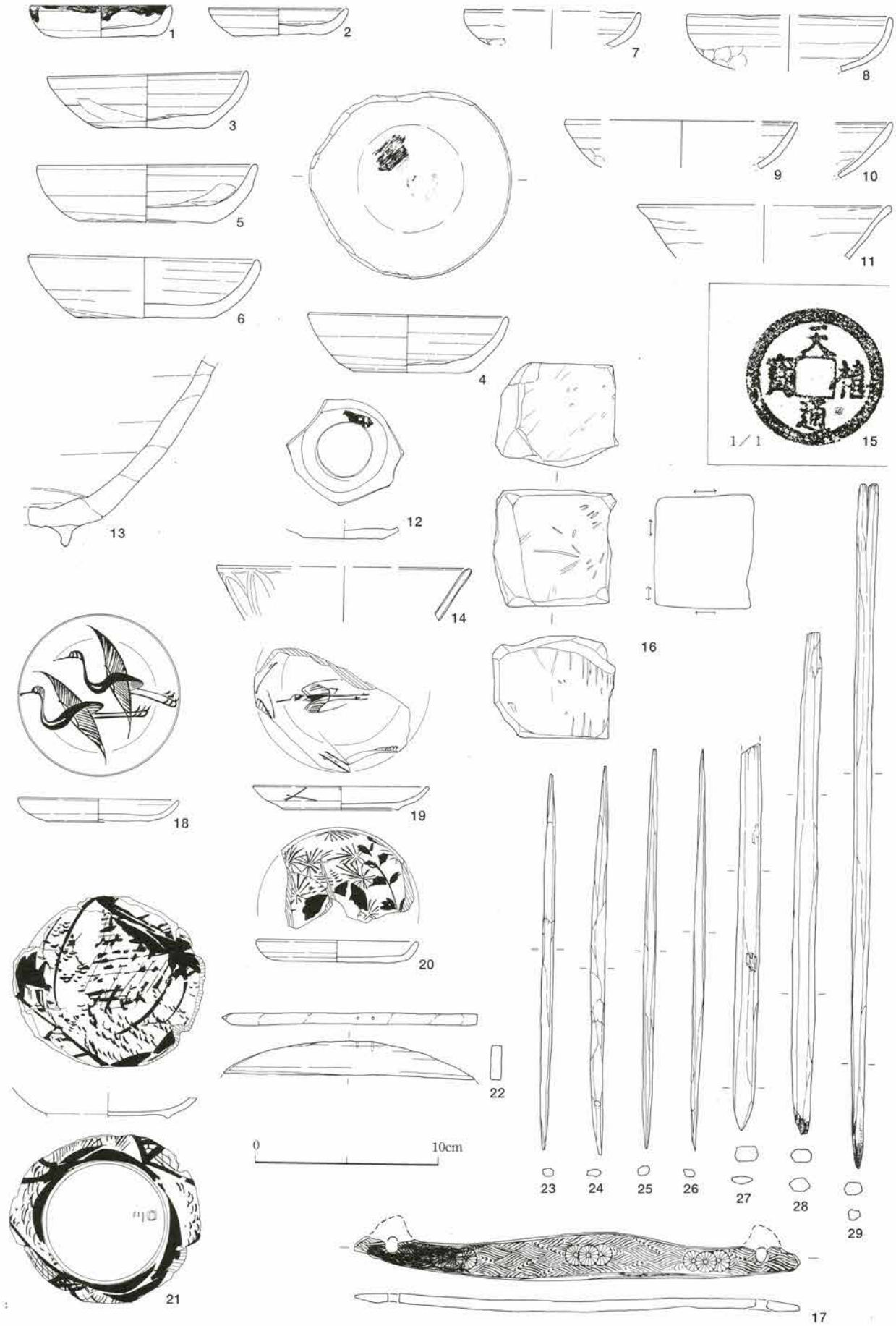


図79　5 a 面出土遺物(1)

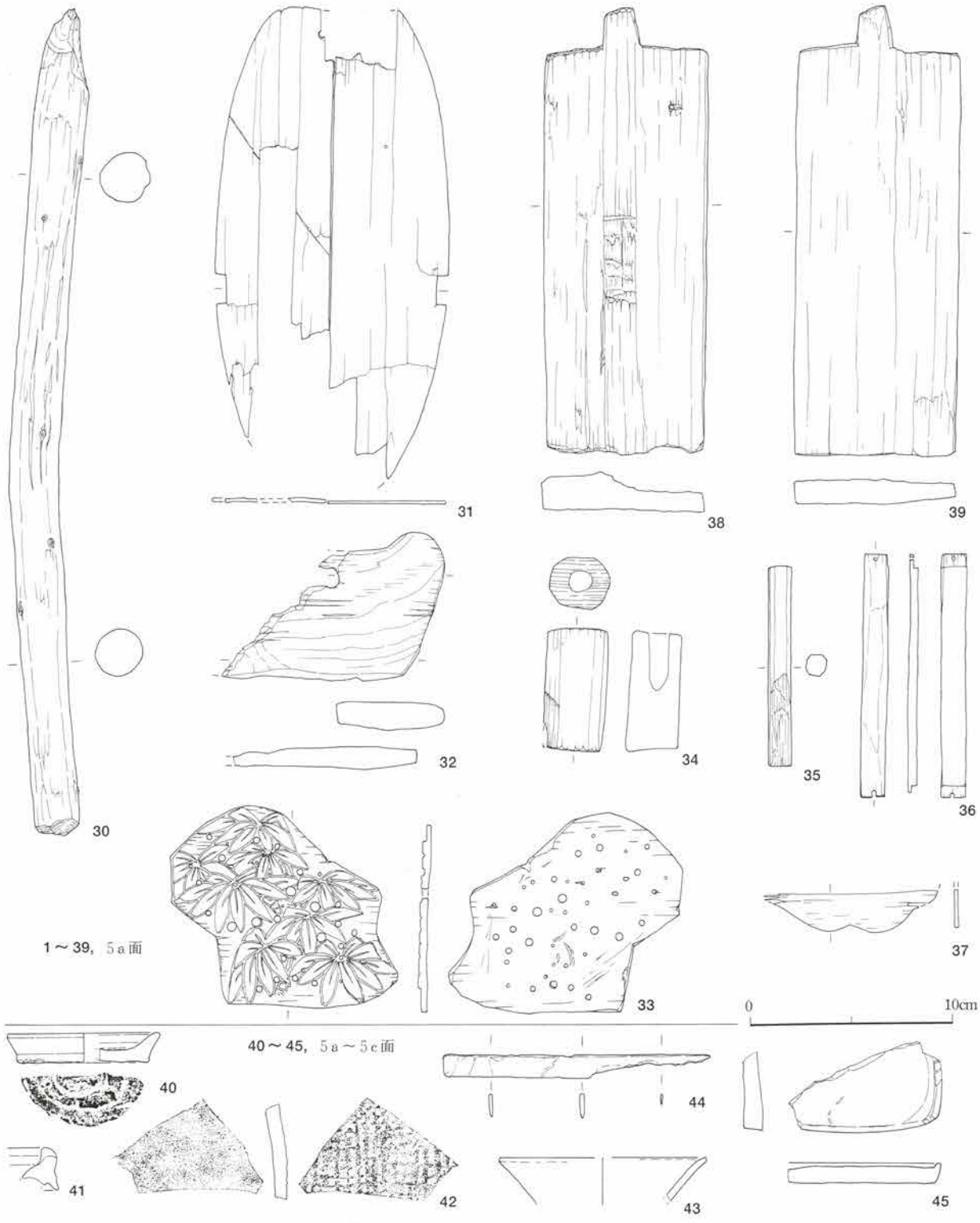
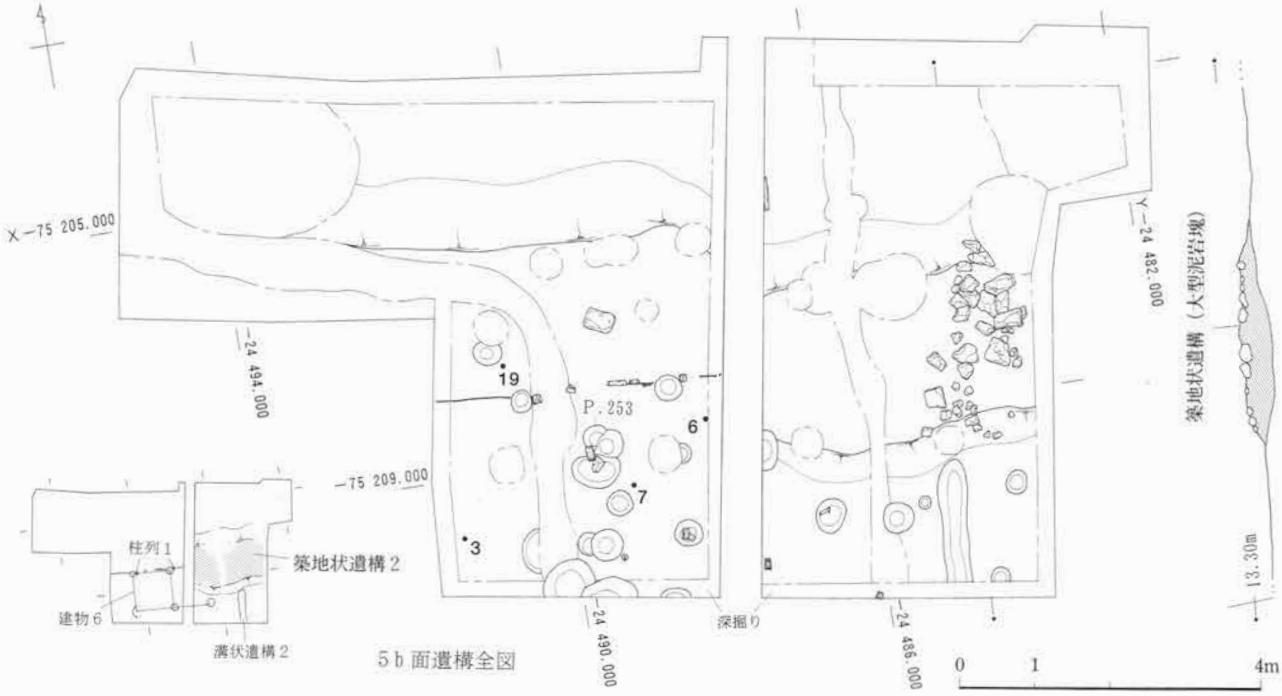


図80　5a面出土遺物(2)、5a～5c面出土遺物

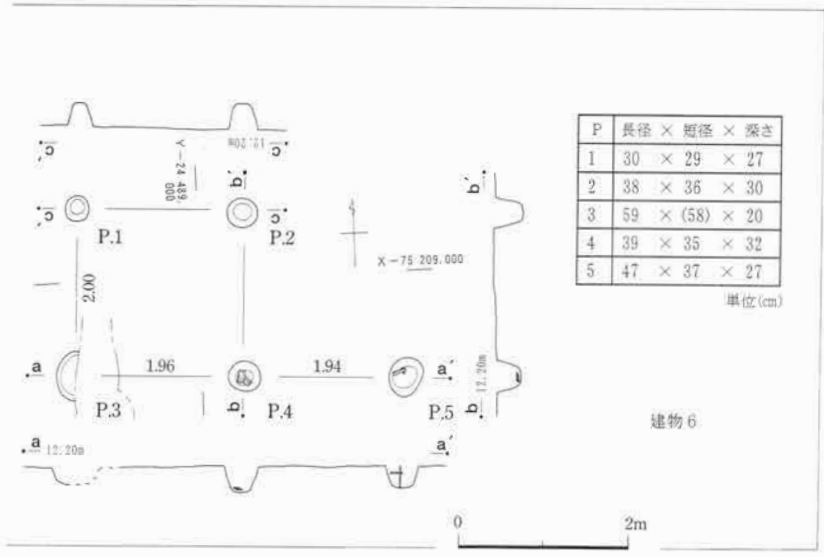
もっと大きな建物とすれば、その北東部分に相当するのであろう。

柱列1（図81）

位置：X－75 207.500～－75 208.500　Y－24 487.500～－24 492.000　**規模**：東西1間（柱間距離1.95m）以上　東側柱10cm×10cm×35cm以上、検出高（11.73～12.09m）　西側柱11cm×11cm×41cm以上、検出高（11.66～12.06m）　**主軸方位**：N－86°－W　**重複関係**：建物6に切られる　**特記事項**：調査区南西寄りの位置から東西に並ぶ角柱2本を検出した。束材で支えられたほぼ同一線上にある側板を切る。南側にある建物の北辺の一部だろう。角柱上端の折損面は火災に遭って炭化しているので、ここが地表面であったと推察できる。したがって、これ以下は地中に埋もれていたことになる。2本いずれも建物



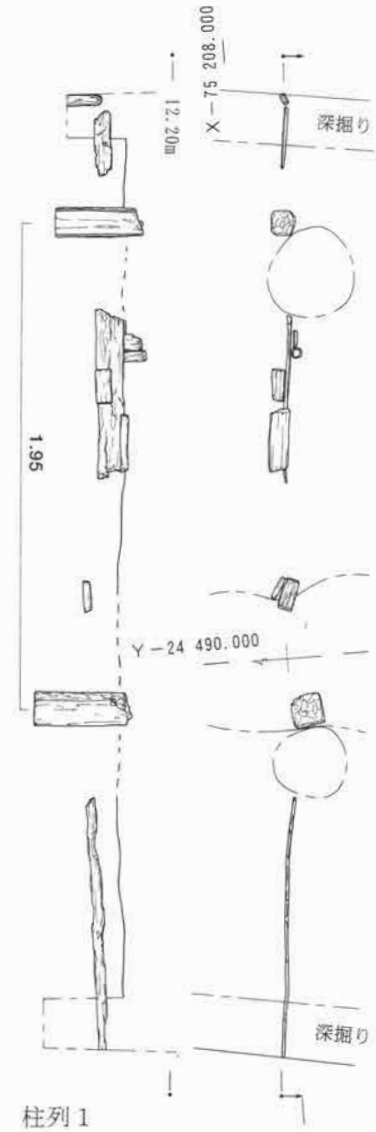
5b面遺構全図



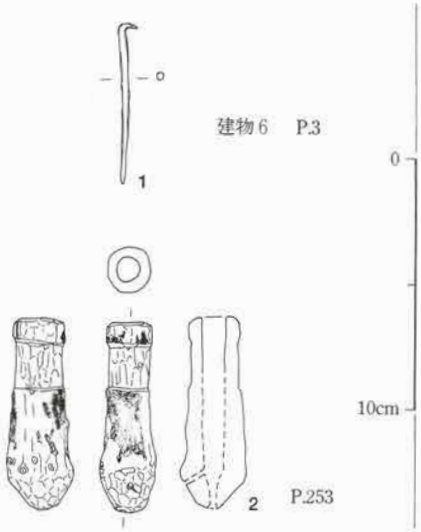
P	長径 × 短径 × 深さ
1	30 × 29 × 27
2	38 × 36 × 30
3	59 × (58) × 20
4	39 × 35 × 32
5	47 × 37 × 27

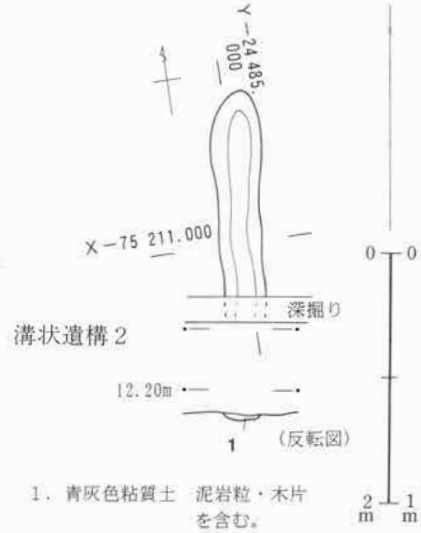
単位(cm)

建物6



柱列1





1．青灰色粘質土　泥岩粒・木片を含む。

図81　5b面遺構全図、建物6・柱列1・溝状遺構2、同出土遺物

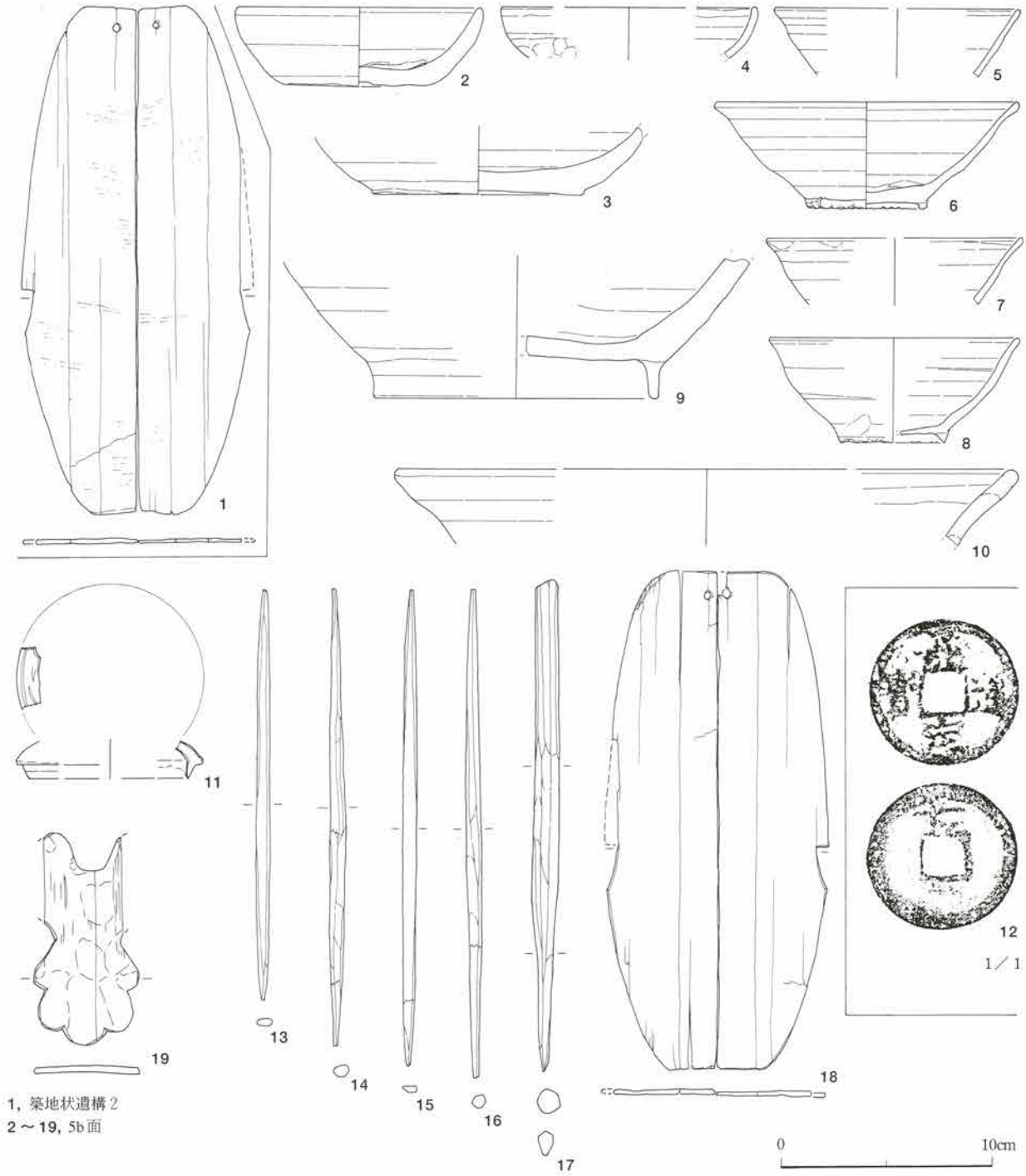


図82　築地状遺構２・５ｂ面出土遺物

６のp.１・p.２と接する位置にあり、建て替えの可能性がある。柱列以南は比較的平坦な泥岩地行面で、築地状遺構の南側とつながっている。

溝状遺構２（図81）

位置：Ｘ－75 209.500～－75 212.000　Ｙ－24 484.500～－24 485.500　**規模**：南北184cm以上×幅35cm×深さ６cm　**断面形**：皿形　**主軸方位**：Ｎ－８°－Ｅ　**流下方向**：北→南　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区南東域、建物６東辺で検出。南側は調査区外に抜け、北側は築地状遺構手前で消滅する。建物６の雨落ち溝か。

５ｂ面遺構出土遺物（図81）

p.253木製鳴鏑（２）　**特記事項**：中心軸を貫通する穴に向かい、先端近くの表面から径1.5㎜の穿孔

５ｂ面出土遺物（図82）

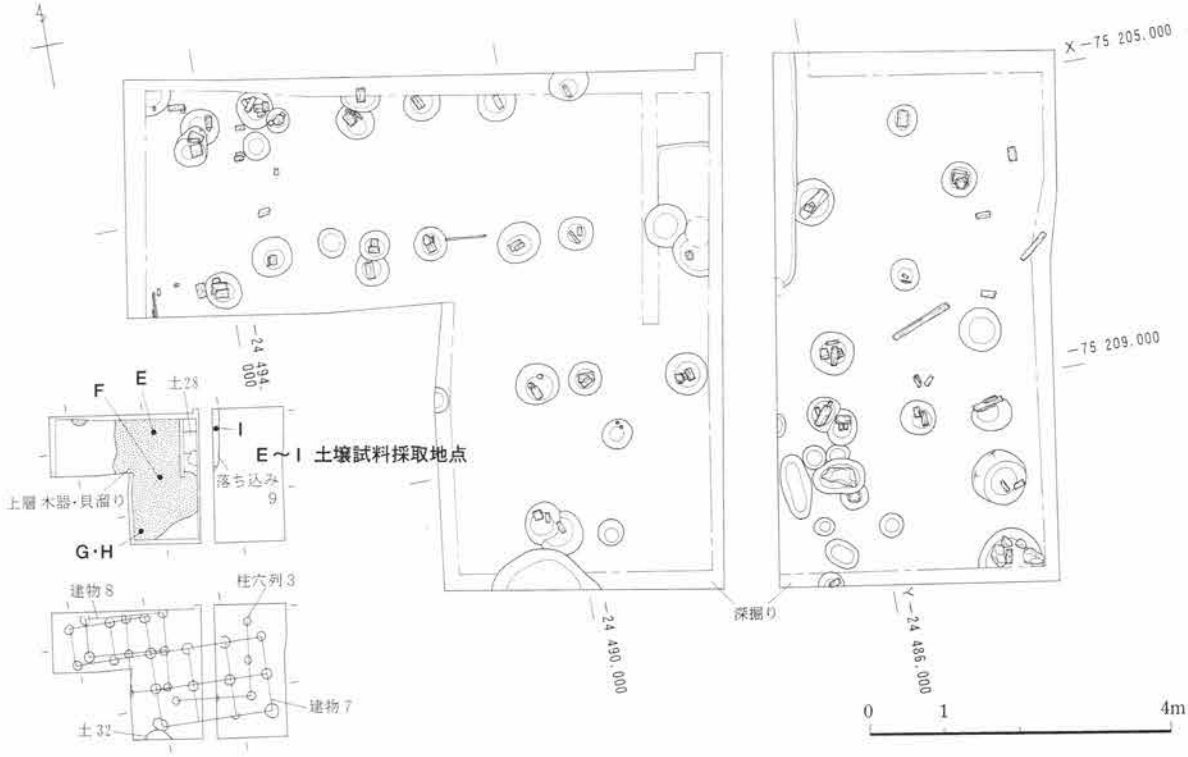


図83　5ｃ面遺構全図

土師器皿Ｒ種大型（２）　土師器皿Ｒ種極大型（３）・白色系土師器皿Ｔ種大型（４）・東濃型山茶碗（５～８）・常滑こね鉢。類（９・10）・竜泉窯青磁合子蓋（11）・嘉定通宝（12）・箸状木製品（13～16）・串状木製品（17）・草履芯（18）・不明木製品（19）

９．５ｃ面

５ｃ上層木器・貝溜り（図83～88）

位置：Ｘ－75 203.500～－75 211.000　Ｙ－24 486.000～－24 492.500　**出土遺物（図84～88）**：土師器皿Ｒ種小型（図85－１～６）・土師器皿Ｒ種中型（７）・土師器皿Ｒ種大型（8～10）　土師器皿Ｒ種極小型（11）・瓦器灯明具（12）・瓦器小型釜（13）・瓦器火鉢（14）・東濃型山茶碗（15）・常滑こね鉢Ⅱ類（16）・瀬戸合子（17）・青白磁合子蓋（18）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（19・20）・皇宋通宝（21）・砥石仕上砥（22）・漆器皿（23～28）・漆器椀（29・30）・漆塗り膳脚（31）・漆塗棒状部材（32）・漆塗り櫛（33）・杓子状木製品（34）・折敷（35・36）・木蓋（図86－37・38）・棒状木製品（39・40）・棒状部材（41）・箸状木製品（42～49）・串状木製品（50～56）・漆ベラ（57・58）・棒状木製品（59）・草履芯（60～63・図87－64～73）・下駄歯（74）・鳥形（75）・不明木製品（76）・木製扇骨（77）・木製物指（78・79）・部材（図88－80）　**特記事項**：５ｂ地行面直下から現れる。検出高は11.68～12.02mでかなりの起伏がある。これまでの腐植土とは異なり、遺存状態の良好な木製品の量が圧倒的に多く、また多様な貝類が原形のまま大量に混入していた。木製品には大量の箸や草履・下駄など日用品のほか、建築の部材や関連施設の側板とみられるものも含まれている。また木枠の中に曲物が入った桝形状の土坑28、落込み９なども検出された。この下には建物７・８がある。おそらくこれらの建物が廃棄され生活面が地行によって更新されるとき、食物残滓などとともにｂ地行層の下に封じ込められたのだろう。出土の扇骨（77）には、「いろ…めかみの」あるいは「れ参らせ候いそき…」などの墨書がある。今様の一部だろうか。物指２点（78・79）はともに一目盛3.4ないしは3.5cmで、完形品（78）の長さ34.3cm。これらの出土もまた、職人の存在を示唆するものだろう。

建物７（図89）

1．暗茶褐色弱粘質土　木片・貝（貝殻片・微小貝）を非常に多く含む，半腐植土，泥岩が混入する。
2．暗褐色粘質土　人頭大泥岩・泥岩粒を含む。
3．暗褐色粘質土　炭化物・木片を含む。　（土坑28）
4．暗褐色粘質土　貝砂を含む。
5．暗茶褐色粘質土　炭化物を多く含む，泥岩粒・貝殻片・木片が混入する。（落ち込み9）

0　2m

図84　5ｃ面上層木器・貝だまり、落込み９、土坑28

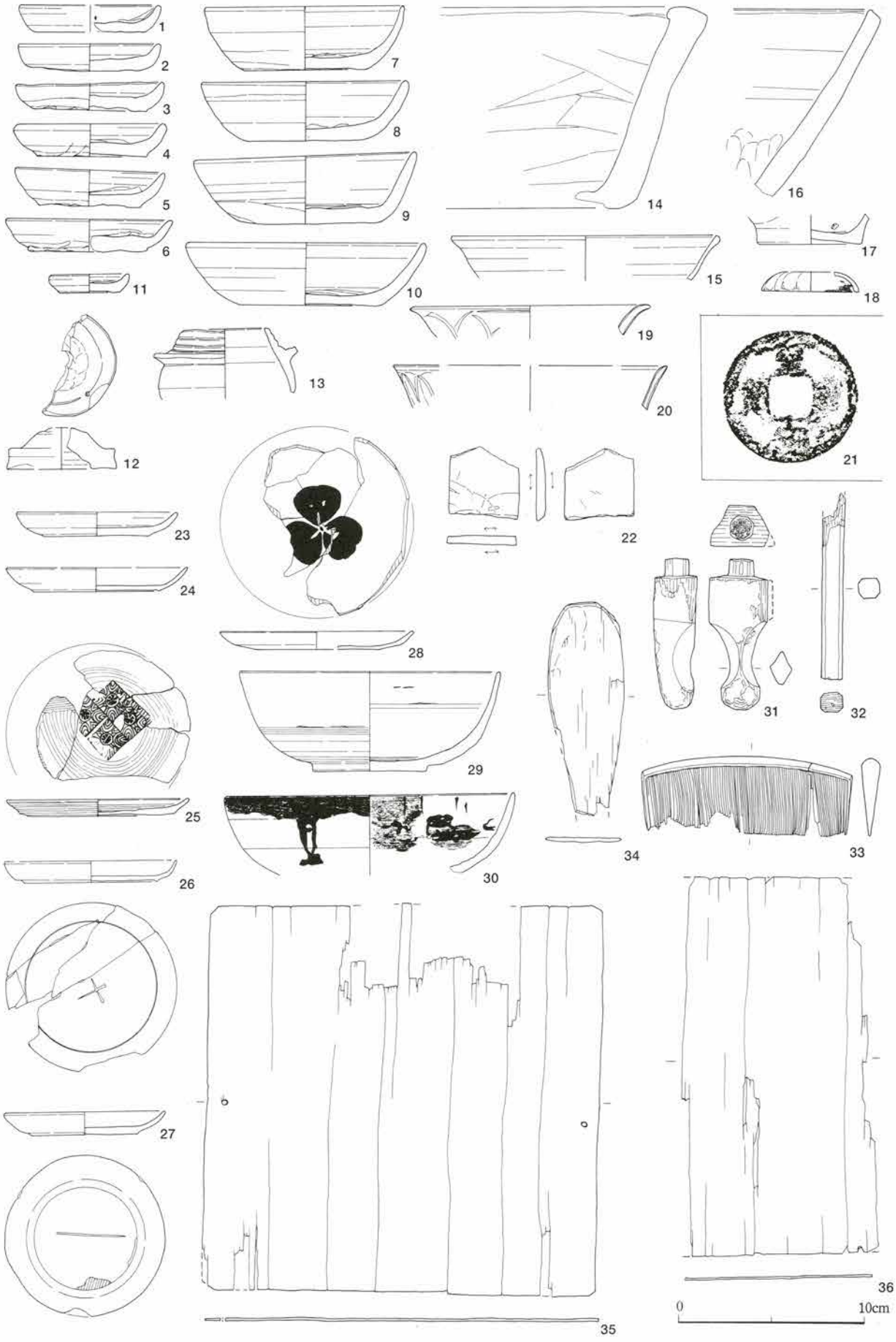


図85　５ｃ面上層木器・貝だまり出土遺物(1)

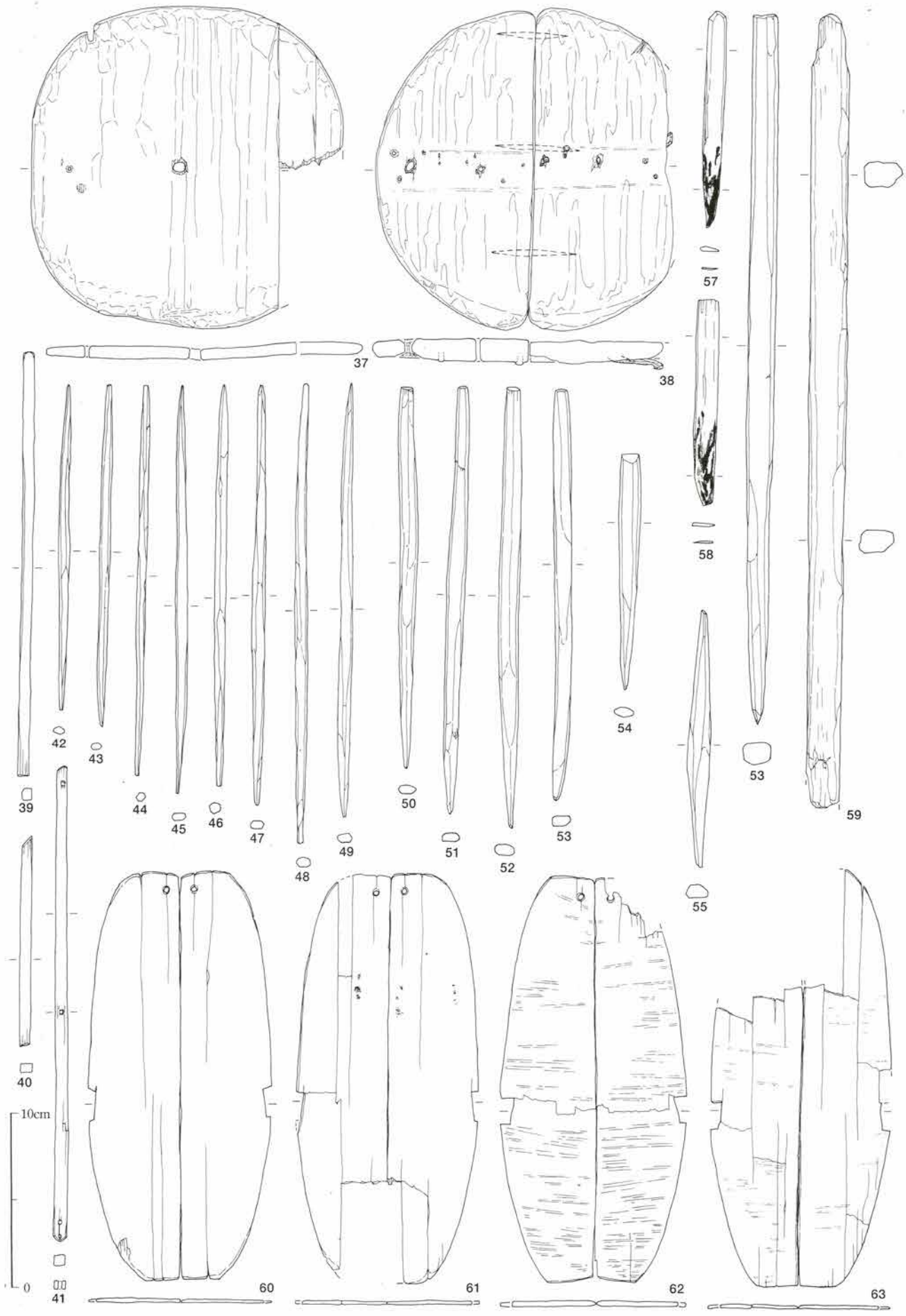


図86　5ｃ面上層木器・貝だまり出土遺物(2)

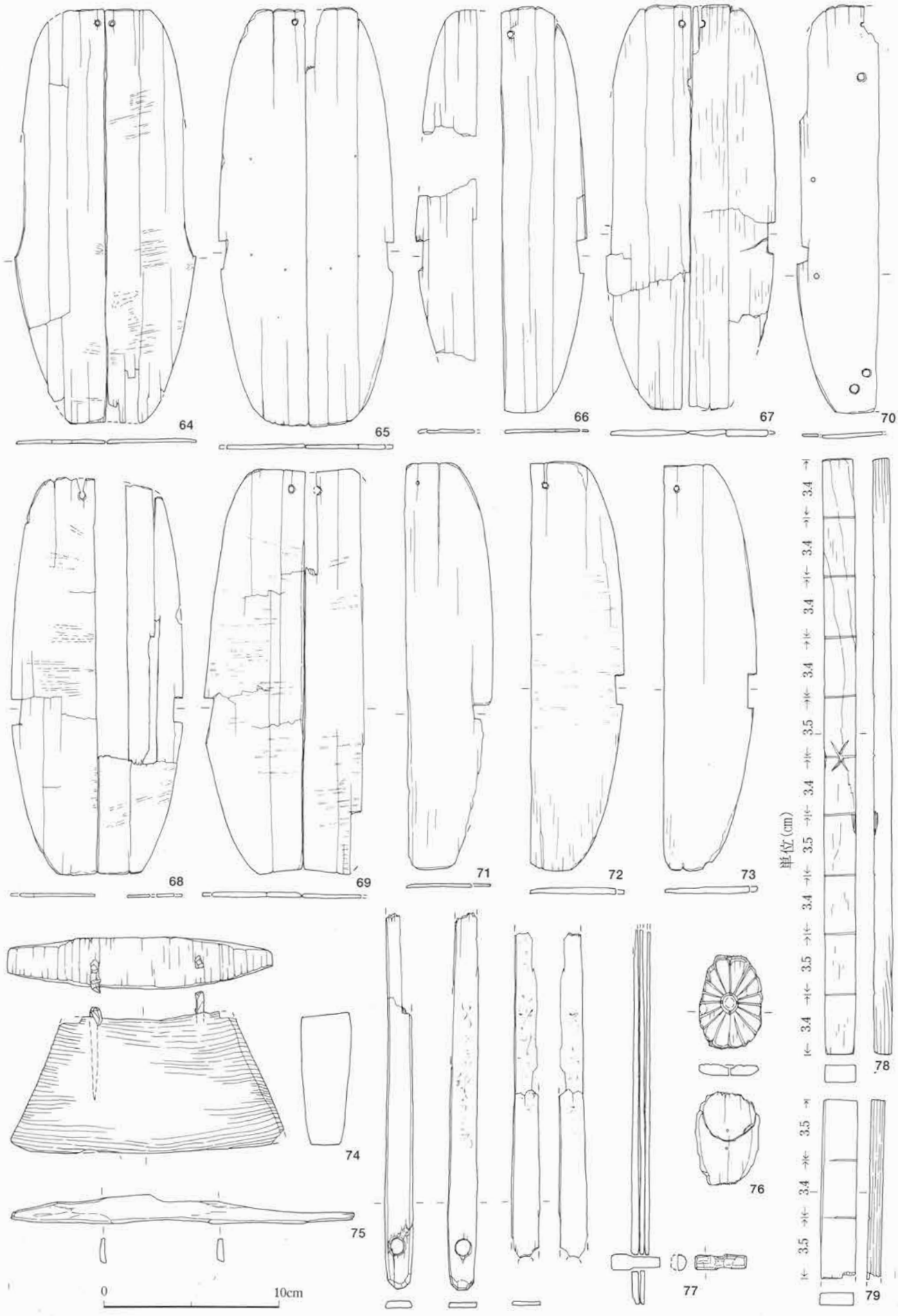


図87　５ｃ面上層木器・貝だまり出土遺物(3)

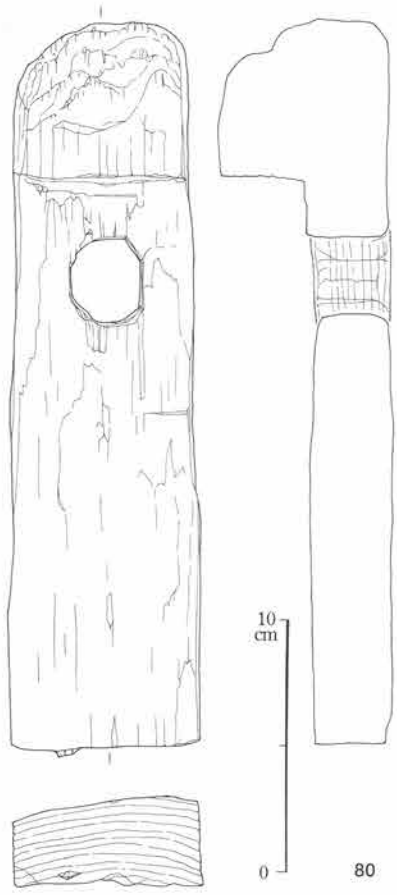


図88　5ｃ面上層木器・貝だまり出土遺物(4)

位置：X－75 203.500～－75 211.000 Y－24 484.000～－24 494.500　**規模**：東西５間（平均柱間距離1.99m）×南北３間（平均柱間距離1.95m）＝31.11㎡（面積）　**南北軸方位**：N－1.5°－E　**出土遺物**：p. 6 土師器皿Ｒ種小型（１）　**特記事項**：調査区全域に拡がる掘立柱建物。調査区外に伸びる可能性は大きい。上層の木器・貝だまり下（一部の柱穴は６面直上）で検出する。柱穴充填土は泥岩（小石大）・貝・木片などを含んだ黒褐色粘質土と茶灰色粘質土で、ほとんどが礎板・礎石をもつ。

建物８（図89）

位置：X－75 203.500～－75 208.500 Y－24 487.500～－24 494.000　**規模**：東西２間（平均柱間距離2.07m）×南北２間（平均中間距離1.99m）＝12.29㎡（面積）　**南北軸方位**：N－6.5°－E　**出土遺物**：p. 6 土師器皿Ｒ種小型（２）　**特記事項**：調査区北西域にある。南北方向に延びる可能性がある。充填土は建物７と同質の黒褐色土で礎板を多く含む。ほとんどの柱穴に礎石・礎板がある。

５ｃ上層遺物だまり（図90）

位置：X－75 203.000～－75 204.000 Y－24 493.000～－24 495.000　**出土遺物**：漆器皿（１・２）・漆器椀（３・４）・漆器盆（５）・部材（６）　**特記事項**：検出高は11.79～80mで、木器・貝だまりと近い。漆器盆（５）の表面には細かな切傷や擦過傷が多く、まな板代わりに使われた可能性があろう。

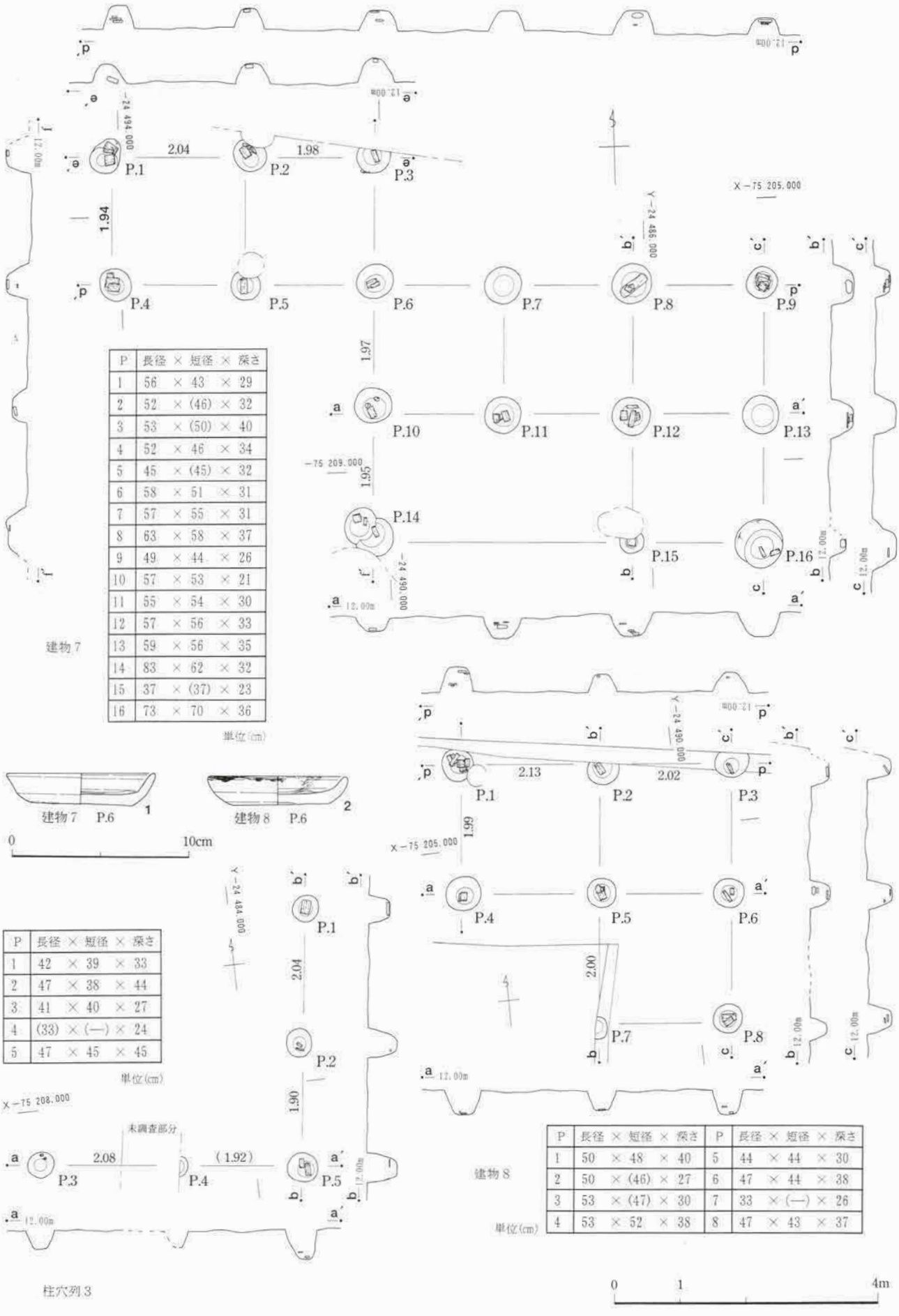
柱穴列３（図89）

位置：X－75 205.000～－75 210.000 Y－24 482.500～－24 488.000　**規模**：東西２間（平均柱間距離2.00m）×南北２間（平均柱間距離1.97m）　**南北軸方位**：N－6.5°－E　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区中央にあるカギ形の遺構。充填土は建物と同質の黒褐色土。建物８と主軸方位が一致しており、柵など付帯施設の可能性もあろう。これも柱穴の多くが礎板をもつ。

落込み９（図84・90）

位置：X－75 204.000～－75 207.500 Y－24 486.000～－24 487.000　**規模**：東西29cm以上×南北310cm以上×深さ24cm　**主軸方位**：N－９°－E　**平面形**：不明　**断面形**：鉢形　**重複関係**：建物７を切る　**出土遺物**：常滑甕（図90－７）・竜泉窯青磁輪花碗（８）・杓子状木製品（９）・箸状木製品（10～12）・部材（13）・不明木製品（14）　**特記事項**：調査区東半分（Ⅰ区）の北西際で検出。西半分側（Ⅱ区）ではそれらしき遺構はみつからず、Ⅰ・Ⅱ区境界の未調査部分中で完結している。同様の木枠をもつ西隣の桝形土坑28と一連のものである可能性もあるが、詳細は不明。充填土は腐食土に近い暗茶褐色粘質土。遺構東側の落込み沿いに側板が３枚重なって検出された。側板の規模は東側のもの186cm（北側延長線上の板を含めて。南側の板単体では110cm）×12.5cm×２cm、中央53cm×10cm×１cm、西側115cm×７cm×１cm。その他板切れや礎板・木製品などもある。部材上面は成形時のままで損壊は受けていない。東側の側版には釘穴や釘の一部が残っていた。これらは他の補強部材を繋ぎとめていたものか、さらに上部に側板が積み重ねられていたかのいずれかであろう。

土坑28（図90）



P	長径 × 短径 × 深さ
1	56 × 43 × 29
2	52 × (46) × 32
3	53 × (50) × 40
4	52 × 46 × 34
5	45 × (45) × 32
6	58 × 51 × 31
7	57 × 55 × 31
8	63 × 58 × 37
9	49 × 44 × 26
10	57 × 53 × 21
11	55 × 54 × 30
12	57 × 56 × 33
13	59 × 56 × 35
14	83 × 62 × 32
15	37 × (37) × 23
16	73 × 70 × 36

P	長径 × 短径 × 深さ
1	42 × 39 × 33
2	47 × 38 × 44
3	41 × 40 × 27
4	(33) × (—) × 24
5	47 × 45 × 45

P	長径 × 短径 × 深さ	P	長径 × 短径 × 深さ
1	50 × 48 × 40	5	44 × 44 × 30
2	50 × (46) × 27	6	47 × 44 × 38
3	53 × (47) × 30	7	33 × (—) × 26
4	53 × 52 × 38	8	47 × 43 × 37

図89　建物7・8、同出土遺物、柱穴列3

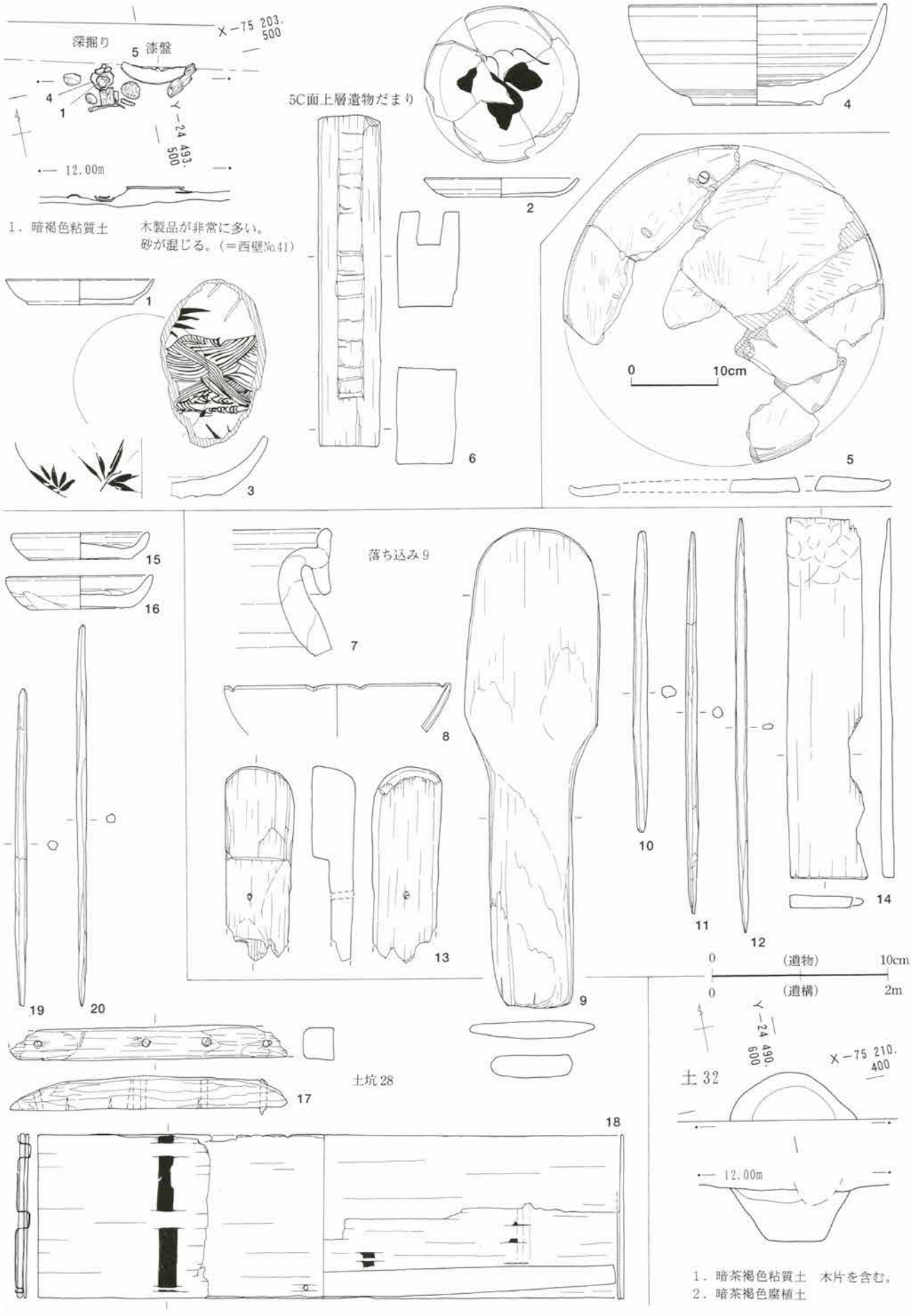


図90　5ｃ面上層遺物だまり、落込み９・土坑28出土遺物、土坑32

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
1／1
0
10cm

図91　5ｃ面出土遺物

位置：X－75 205.000～－75 206.500　Y－24 487.000～－24 488.500　**規模**：長辺113cm以上×短辺71cm以上×深さ23cm　**重複関係**：建物７を切る　**主軸方位**：N－8.5°－E　**平面形**：（方形）　**断面形**：箱形　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（15～16）・木蓋把手（17）・曲物（18）・箸状木製品（19・20）　**特記事項**：調査区中央・北寄りで検出。桝形状に木枠で囲われた土坑。貝・木器だまり同様５ｃ面でも上層に属す。底面に曲物がある。東側は未調査部にかかり不明。木枠の大きさは西側86cm×11cm×１cm、北側78cm×10cm×0.5cm、曲物は径約33cm・高さ約10cm、壁の厚さ0.2cm、底板の厚さ１cm。土坑底面には、木枠の沈下を防ぐため下に敷きこまれた板が遺構外へと伸びている。

土坑32（図90）

位置：X－75 210.000～－75 211.000　Y－24 489.500～－24 491.500　**規模**：径120cm以上×深さ約63cm　**平面形**：円形　**断面形**：逆台形　**主軸方位**：不明　**重複関係**：建物７を切る　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区南壁際で検出。これも上層に属し、腐植土がつまる。

５ｃ面出土遺物（図91）

土師器皿Ｒ種小型（１）・土師器皿Ｒ種大型（２）・土師器皿Ｒ種極小型（３）・常滑こね鉢Ⅰ類（４）・常滑こね鉢Ⅱ類（５）・青白磁梅瓶（６）・開元通宝（７・８）・漆器皿（９）・杓子状木製品（10）・円盤型木製品（11～13）・棒状木製品（14）・箸状木製品（15～25）・棒状木製品（26・27）・連歯下駄歯（28）・草履芯（29～32）・糸巻（33）・陽物（34）・不明木製品（35）・漆べら（36）・不明木製品（37）・不明木製品（38）・不明木製品（39）

５ａ～５ｃ面出土遺物（図80）

５ａ面から５ｃ面までの間層が薄く出土層位の判断をしがたいものがあり、一括して呈示する。
土師器皿Ｒ種（40）・常滑甕（41）・東播系甕（42）・白磁口はげ皿（43）・剃刀（44）・硯（45）　**特記事項**：40は外底部にヘラ起こし痕が残る。瀬戸内系の可能性がある。42は神出か。

10．６面

柱穴列４（図92）

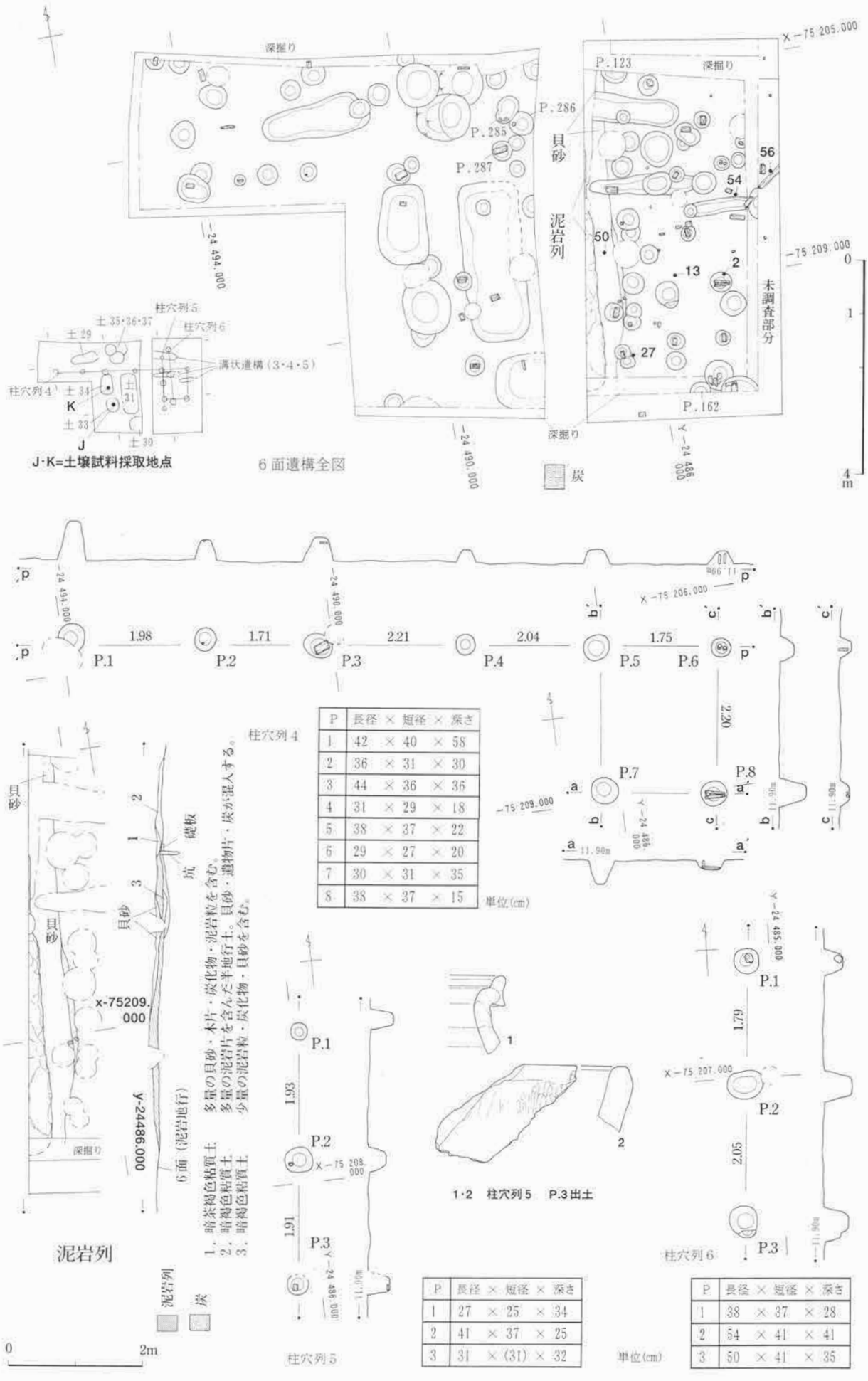
位置：X－75 205.000～－75 209.500　Y－24 484.000～－24 494.500　**規模**：東西５間（平均柱間距離1.93m）×南北１間（柱間距離2.20m）　南北軸方位：N－７°－E　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区中央を東西に走る。充填土は主に暗茶褐色粘質土（貝・泥岩含む）・黒褐色粘質土で礎板や杭柱などが含まれる。東側２穴（ｐ．５・６）の南側軸線上にある１間分の柱穴（ｐ．７・８）をひとまず図に含めておいたが、深さや柱間距離が異なるので連続した建物かどうかは確実でない。また西域の土坑群中を横切る形であるため、地境的遺構かどうかについても決しがたい。

柱穴列５（図92）

位置：X－75 205.500～－75 209.500　Y－24 485.500～－24 486.500　**規模**：南北２間（平均柱間距離1.92m）　**主軸方位**：N－6.5°－E　**出土遺物**：常滑甕（１）・滑石鍋（２）　**特記事項**：調査区東側に位置する。南北に延びる可能性もある。充填土は黒褐色粘質土・青灰褐色粘質土の二種類。

柱穴列６（図92）

位置：X－75 205.000～－75 209.500　Y－24 485.000～－24 486.000　**規模**：南北２間（平均柱間距離1.92m）　**主軸方位**：N－3.5°－E　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区東側に位置する。柱穴列５のすぐ東側に位置し、主軸方位もほぼ共通するので改修の可能性があるが、先後関係は不明。充填土は貝・砂の混入した茶褐色粘質土・青灰褐色粘質土。



P	長径 × 短径 × 深さ
1	42 × 40 × 58
2	36 × 31 × 30
3	44 × 36 × 36
4	31 × 29 × 18
5	38 × 37 × 22
6	29 × 27 × 20
7	30 × 31 × 35
8	38 × 37 × 15

P	長径 × 短径 × 深さ
1	27 × 25 × 34
2	41 × 37 × 25
3	31 × (31) × 32

P	長径 × 短径 × 深さ
1	38 × 37 × 28
2	54 × 41 × 41
3	50 × 41 × 35

単位(cm)

図92　6面遺構全図，泥岩列・柱穴列4～6、同出土遺物

泥岩列（図92）

位置：X－75 205.000～－75 209.500　Y－24 485.000～－24 486.000　**規模**：南北2.78m以上、東西0.36m以上　**主軸方位**：N－6°－E　**出土遺物**：なし　**特記事項**：調査区中央部のⅠ・Ⅱ区境界の未調査部分にかかる位置にある。西半分は隠れており、南側も調査区外に出ているが、状況から南北に細長い遺構であることが推測できる。柱穴列4と直交し、同5および6とほぼ平行している。本址を境に西側は土坑群、東側は建物となるので、何らかの境界標識であることが推測される。上がり框の踏み石だろうか。上面には本址を覆う形で貝・砂のよく締まった層がかなり広範に認められた。貝砂層は全体に薄く散布しており、検出高は顕著に確認できた部分で11.70m前後である。またちょうど柱穴列5以西から本址付近にかけては炭化層がみられた。

溝状遺構3（図93）

位置：X－75 205.000～－75 206.500　Y－24 484.500～－24 486.500　**規模**：長さ162cm以上×幅46～56cm×深さ1～11cm　**断面形**：皿形　**主軸方位**：N－76°－W　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区北東側で検出。充填土は泥岩・木片・貝砂を含む灰褐色粘質土。形状からみて列石の抜き痕、あるいは溝状遺構5のような建物基礎の可能性があろう。底面は西側が低い。

溝状遺構4（図93）

位置：X－75 206.500～－75 207.500　Y－24 484.500～－24 487.000　**規模**：長さ（200cm）×幅20～38cm×深さ11～18cm　**断面形**：U字形　**主軸方位**：N－82°－W　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：状況は溝状遺構3に似るが、幅は細く溝状遺構5の方に近い。舟形で礎板を含む。

溝状遺構5（図93）

位置：X－75 207.500～－75 208.000　Y－24 483.500～－24 485.000　**規模**：長さ108cm以上×幅約26cm×深さ8～11cm　**断面形**：U字またはV字形　**主軸方位**：N－87°－W　**出土遺物**：竜泉窯青磁鎬連弁文碗（7）　**特記事項**：溝状3・4と隣接し、主軸方位もほぼ共通。東壁際に束材が埋込まれている。建物基礎の一部か。底面は西側が低い。

土坑29（図93）

位置：X－75 204.000～－75 205.500　Y－24 490.500～－24 493.000　**規模**：長辺約204cm×短辺約75cm×深さ約21cm　**主軸方位**：N－87°－E　**平面形**：長楕円形　**断面形**：深皿形　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区北西部にある細長い土坑。主軸方位は東西にあり、後述の土坑31・34などと直交する。充填土は5c包含層に似る。この面の調査区西域は東域の柱穴群と異なり、土坑が群集する。形状はいくつかに分かれるが、そのうちのひとつ。以下土坑37まで同様。

土坑30（図93）

位置：X－75 209.500～－75 211.000　Y－24 488.000～－24 489.500　**規模**：長辺105cm以上×短辺94cm以上×深さ25cm　**主軸方位**：（N－9°－E）　**平面形**：（隅丸方形）　**断面形**：皿形　**出土遺物**：土師器皿R種大型（8）・北壁近くに底面から浮いた状態で長方形の板1点が出土（個別実測図省略）　**特記事項**：調査区中央・南壁沿いに検出。これまで落込みや溝に腐食土は含まれてきたが、5c（土坑32）から7面にかけては土坑内を中心に腐植土で充填されるようになる。本土坑もそのひとつ。

土坑31（図93）

位置：X－75 206.500～－75 210.000　Y－24 488.000～－24 489.500　**規模**：長辺300cm×短辺112cm×深さ24cm　**主軸方位**：N－4°－E　**平面形**：隅丸長方形　**断面形**：皿形　**出土遺物**：箸状木製品（9）・南域に底面から浮いた状態で礎板が1点（個別実測図省略）　**特記事項**：調査区中央にある。近在の土坑

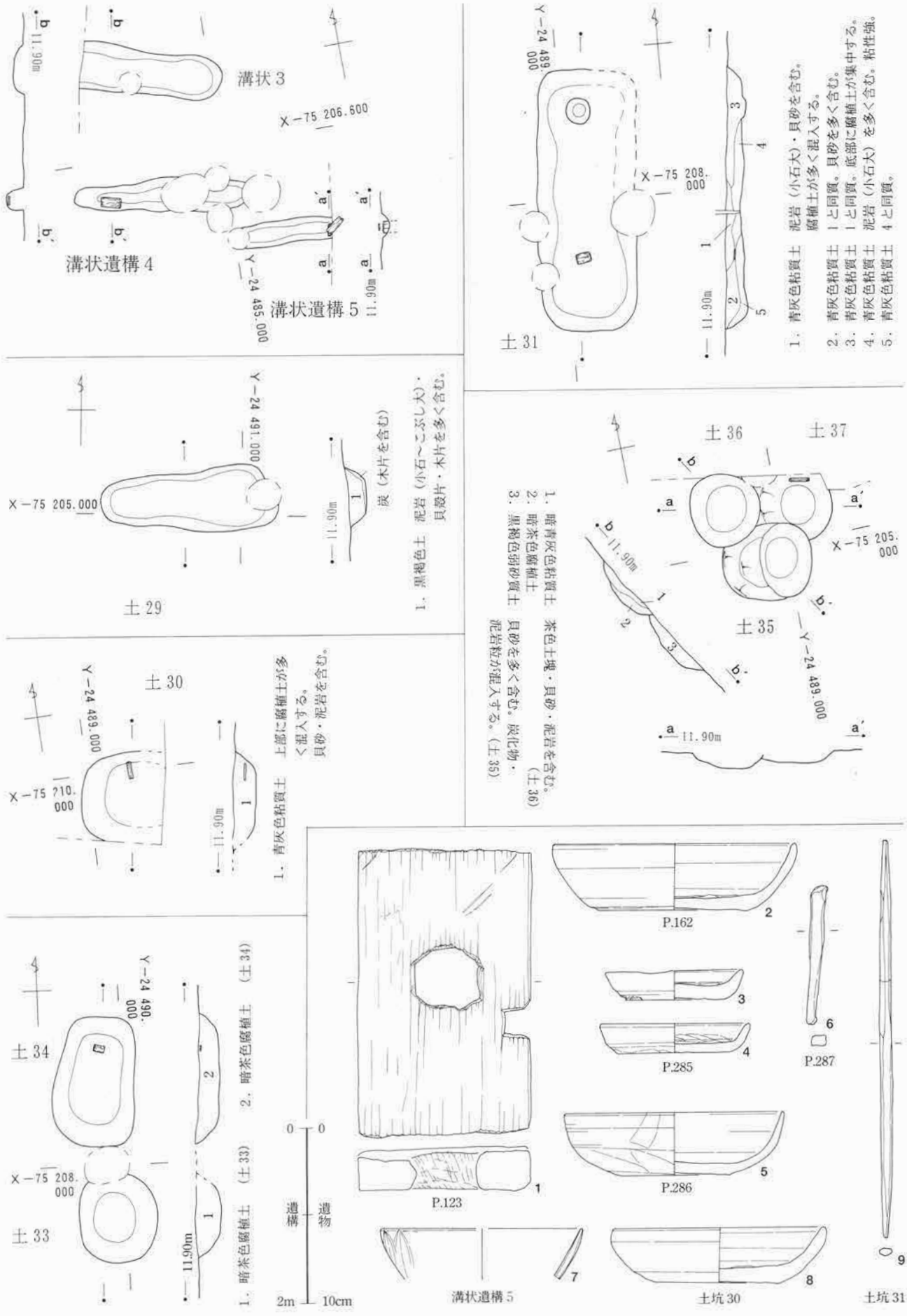


図93　溝状遺構3～5、土坑29～31・33～37、6面遺構出土遺物

33・34と同様の遺構とみられる。その中では最大。

土坑33（図93）

位置：X－75 208.000～－75 209.500　Y－24 489.500～－24 491.000　**規模**：長径約107cm×短径約91cm×深さ約29cm　**主軸方位**：N－1.5°－E　**平面形**：楕円　**断面形**：皿形　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：土坑31西隣、34南隣にある。31・34同様腐植土が詰まっている。

土坑34（図93）

位置：X－75 206.000～－75 208.000　Y－24 489.500～－24 491.000　**規模**：長辺148cm×短径90cm×深さ22cm　**主軸方位**：N－6°－E　**平面形**：隅丸長方形　**断面形**：皿形　**出土遺物**：北域に底面から浮いた状態で礎板1点があるが、図化可能なものなし　**特記事項**：土坑33の北に隣接する遺構。周囲の他の土坑と同種のものか。

土坑35（図93）

位置：X－75 204.500～－75 206.000　Y－24 488.500～－24 490.000　**規模**：長径102cm×短径89cm×深さ15cm　**重複関係**：土坑37を切る　**主軸方位**：N－82°－W　**平面形**：楕円形　**断面形**：すり鉢形　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区中央部北端にある。貝砂を含む。

土坑36（図93）

位置：X－75 204.000～－75 205.000　Y－24 489.000～－24 490.000　**規模**：長径84cm×短径78cm×深さ17cm　**重複関係**：土坑35・37を切る　**主軸方位**：N－3°－E　**平面形**：楕円形　**断面形**：皿状　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：土坑35北西に37と並ぶ形で隣接。腐植土を含む。

土坑37（図93）

位置：X－75 204.000～－75 205.500　Y－24 488.500～－24 489.500　**規模**：長径80cm以上×短径80cm以上×深さ約15cm　**重複関係**：土坑35・36に切られる　**主軸方位**：土坑35と同軸の可能性あり　**平面形**：（楕円形）　**断面形**：浅皿形　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：土坑35・36の北東に隣接しており、これらと一群のものとみてよかろう。

6面遺構出土遺物（図93）

p.123 部材（1）・p.162 土師器皿R種大型（2）・p.285 土師器皿R種小型（3・4）・p.286 土師器皿R種大型（5）・p.287 鉄釘（6）

6面出土遺物（図94・95）

土師器皿R種小型（図94－1～4）・土師器皿R種大型（5・6）・常滑こね鉢Ⅰ類（7～12）・常滑壺（13）・常滑甕（14～16）・滑石鍋転用硯（17）・白磁口はげ皿（18）・竜泉窯青磁折縁鉢（19）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（21～23）・竜泉窯青磁稜花皿（24）・青白磁水注（25・26）・貝製白碁石（27）・漆器椀（28）・漆塗櫛（29）・不明木製品（30）・漆塗棒状部材（31）・曲物底板（32・33）・箸状木製品（図95－34～44）・ヘラ状木製品（45～47）・草履芯（48～51）・不明木製品（52）・連歯下駄（53）・不明木製品（54）・不明木製品（55）・木製自在鈎（56）・不明木製品（57）・不明木製品（58）　**特記事項**：食器・自在鈎・箸状木製品・曲物・履物など日常生活をうかがわせる遺物が多い

11. 7a面

建物9（図97）

位置：X－75 203.500～－75 206.500　Y－24 489.000～－24 494.000　**規模**：東西2間（平均柱間距離1.95m）×南北1間（柱間距離1.99m）＝7.76㎡（面積）　**南北軸方位**：N－8.5°－E　**重複関係**：土

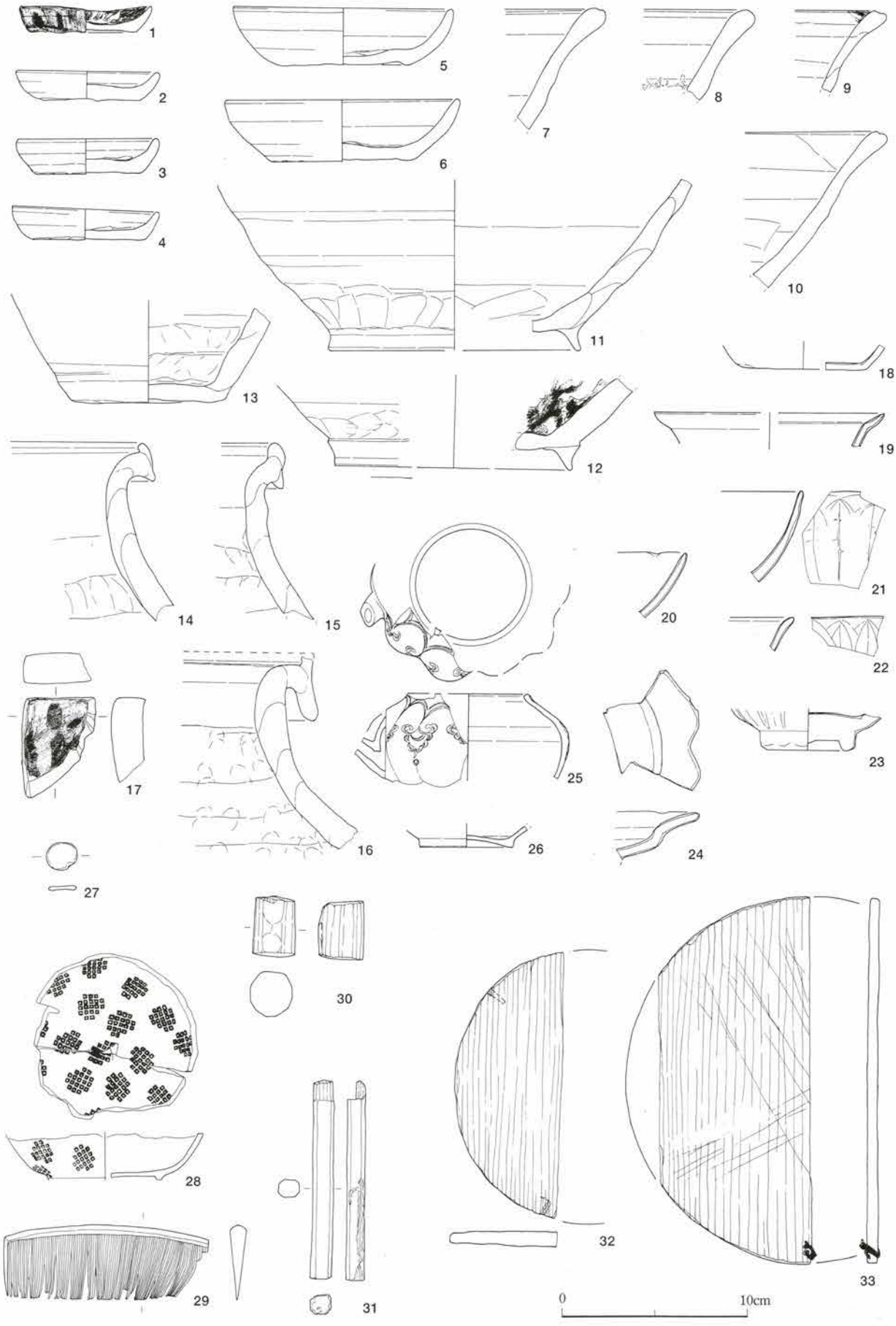

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
10cm

図94　6面出土遺物(1)

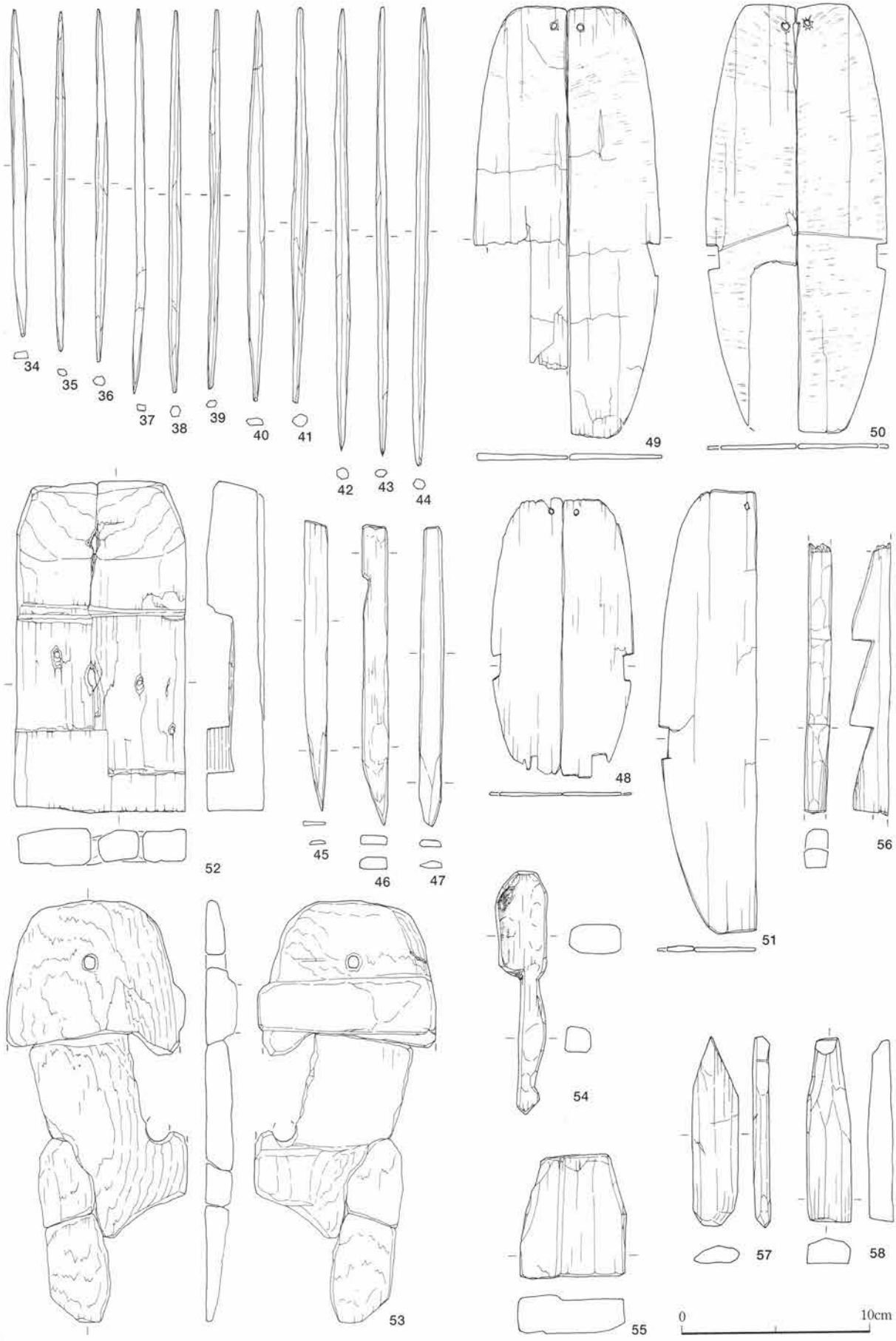
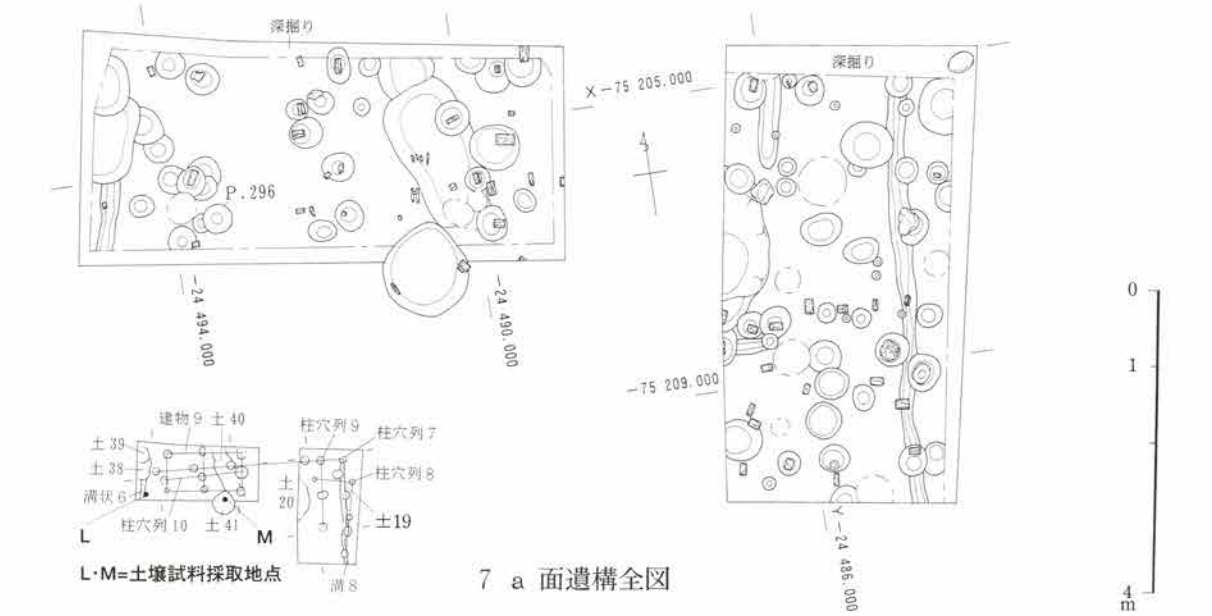

34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
49
50
52
45
46
47
48
56
51
54
57
58
53
55
0
10cm

図95　6面出土遺物(2)



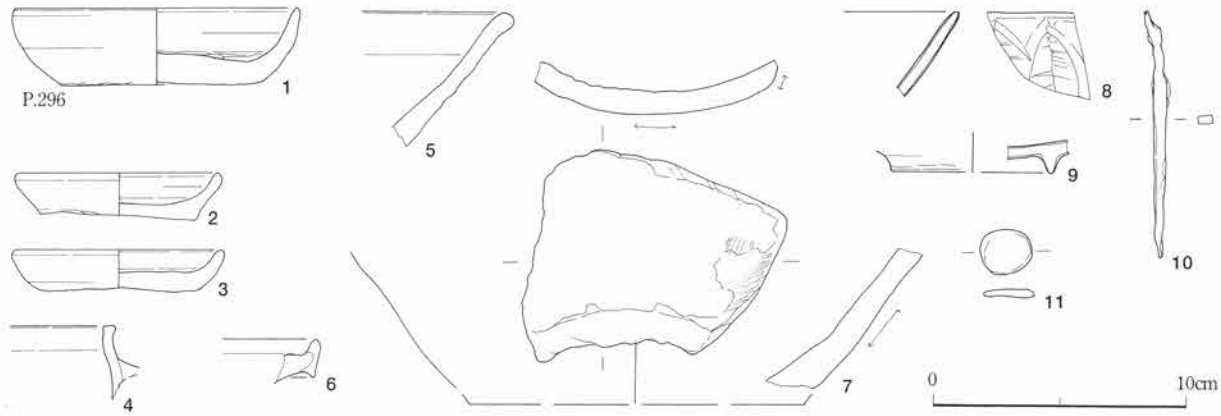


図96　7a面遺構全図、7a面出土遺物、p.296出土遺物

坑40を切る　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区西側にある。充填土は泥岩を多く含む暗褐色粘質土・貝片・泥岩を含む暗茶褐色粘質土。p.4を除く柱穴に礎板・礎石、p.3内には上面切断部分の炭化した柱根（8㎝×6㎝×30㎝）が残る。

柱穴列7（図97）

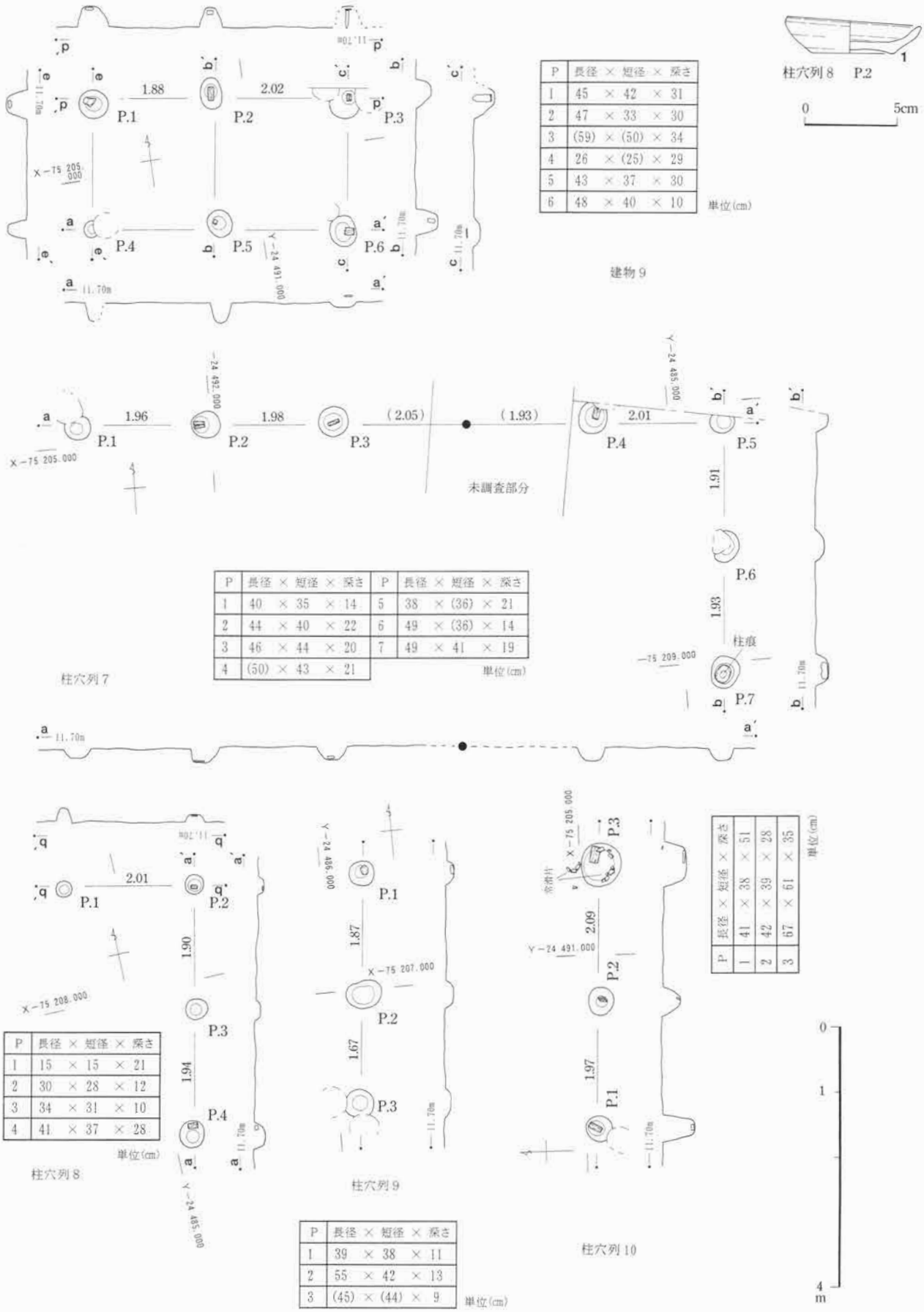
位置：X－75 204.500～－75 209.500　Y－24 486.000～－24 494.500　**規模**：東西（5）間（平均柱間距離1.98m）×南北2間（平均柱間距離1.92m）　**南北軸方位**：N－4°－E　**重複関係**：溝8を切る　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区全域に広がるカギ形をした柱穴列。充填土は建物9と共通する暗茶褐色粘質土・炭化物の多い暗褐色粘質土など。西端のp.1とカギ形の角にあたるp.5を除き礎板・礎石が残存。P.7の礎石（安山岩）に柱の圧痕（6㎝×9㎝、高さ11.42m）らしい窪みを確認。小ぶりの溝8が南北列と同軸上で検出されており、関連施設の可能性がある。

柱穴列8（図97）

位置：X－75 206.000～－75 210.500　Y－24 483.500～－24 486.000　**規模**：東西1間（柱間距離2.01m）×南北2間（平均柱間距離1.92m）　**南北軸方位**：N－12.5°－E　**重複関係**：溝8を切る　**出土遺物**：p.2土師器皿R種小型（1）　**特記事項**：調査区東側にあるカギ形の小規模な柱穴列。南に延びる可能性がある。充填土は暗茶褐色粘質土。主軸方位が他の遺構とずれている。

柱穴列9（図97）

位置：X－75 205.000～－75 209.000　Y－24 485.000～－24 486.000　**規模**：南北2間（平均柱間距離1.77m）　**主軸方位**：N－5°－E　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区東域にある小



P	長径 × 短径 × 深さ
1	45 × 42 × 31
2	47 × 33 × 30
3	(59) × (50) × 34
4	26 × (25) × 29
5	43 × 37 × 30
6	48 × 40 × 10

P	長径 × 短径 × 深さ	P	長径 × 短径 × 深さ
1	40 × 35 × 14	5	38 × (36) × 21
2	44 × 40 × 22	6	49 × (36) × 14
3	46 × 44 × 20	7	49 × 41 × 19
4	(50) × 43 × 21		

P	長径 × 短径 × 深さ
1	15 × 15 × 21
2	30 × 28 × 12
3	34 × 31 × 10
4	41 × 37 × 28

P	長径 × 短径 × 深さ
1	39 × 38 × 11
2	55 × 42 × 13
3	(45) × (44) × 9

P	長径 × 短径 × 深さ
1	41 × 38 × 51
2	42 × 39 × 28
3	67 × 61 × 35

図97　建物9・柱穴列7～10

規模な南北列。柱穴列７のp. ５～７とは約120cmを隔ててほぼ並列しており、柱穴列７の関連施設または改修の可能性がある。充填土も７と同質。切り合った柱穴がなく7との新旧は確認できない。

柱穴列10（図97）

位置：X－75 205.000～－75 205.500　Y－24 489.000～－24 494.000　**規模**：東西２間（平均柱間距離2.03m）　**重複関係**：土坑40を切る　**主軸方位**：N－87.5°－W　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区西域にある東西列。これも位置的にみて柱穴列７との関連が否定できない。新旧は不明。充填土は暗茶褐色粘質土でp. ３とその周辺には常滑片が散乱していた。

溝８（図98）

位置：X－75 204.000～－75 211.000　Y－24 484.000～－24 485.000　**規模**：幅13～31cm×深さ１～８cm　**断面形**：皿形　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：N－5.5°－E　**重複関係**：柱穴列７・８に切られる　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区東域、地行面の切れ目付近にある窪地状の細い南北溝。柱穴列７とほぼ同一軸線上にある。

溝状遺構６（図98）

位置：X－75 205.000～－75 206.000　Y－24 494.000～－24 494.500　**規模**：幅18～25cm×深さ約10cm　**断面形**：皿形　**流下方向**：ほぼ水平　**主軸方位**：N－14°－E　**重複関係**：土坑38に切られる　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区西壁際で検出。土坑38・39付近から南に向かう。

土坑19（図98）

位置：X－75 205.500～－75 206.500　Y－24 484.000～－24 485.000　**規模**：長径70cm×短径52cm×深さ26cm　**平面形**：楕円　**断面形**：逆台形　**主軸方位**：N－75°－W　**重複関係**：溝８を切る　**充填土**：炭化物を多く含む暗褐色粘質土　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種大型（１）　**特記事項**：溝８に接する位置にあるが関係不明

土坑20（図65）

位置：X－75 206.000～－75 208.500　Y－24 486.000～－24 487.000　**規模**：長径121以上×短径62cm以上×深さ18cm　**主軸方位**：不明　**平面形**：（不整楕円形）　**断面形**：浅皿形　**充填土**：炭化物を多く含む暗褐色粘質の腐植土、土坑20と同質　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：浅い落込み。Ⅰ・Ⅱ区間の未調査部分中で完結している。

土坑38（図98）

位置：X－75 203.500～－75 205.500　Y－24 493.500～－24 494.500　**規模**：長辺（120）cm×短辺60cm以上×深さ15cm　**重複関係**：土坑39に切られる　**主軸方位**：N－15.5°－E　**平面形**：隅丸長方形　**断面形**：浅皿形　**出土遺物**：刀形（２）・木製品（３）　**特記事項**：調査区西端で検出。西半部は調査区外に出る。土坑39とともに腐食土が入る。出土遺物のうち３は紡織機の板杼（いたび）か

土坑39（図98）

位置：X－75 203.000～－75 204.500　Y－24 493.500～－24 494.500　**規模**：長径（82）cm×短径38cm以上×深さ約18cm　**主軸方位**：（N－4.5°－E）　**平面形**：（楕円形）　**断面形**：皿形　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：土坑38の北側を切る

土坑40（図98）

位置：X－75 203.500～－75 206.500　Y－24 489.500～－24 491.000　**規模**：長辺160cm以上×短辺約100cm×深さ６～16cm　**平面形**：隅丸長方形　**断面形**：浅皿形　**主軸方位**：N－17.5°－W　**重複関係**：建物９・柱穴列７・10・土坑41に切られる　**出土遺物**：木片数点があるが図化可能のものなし　**特記事**

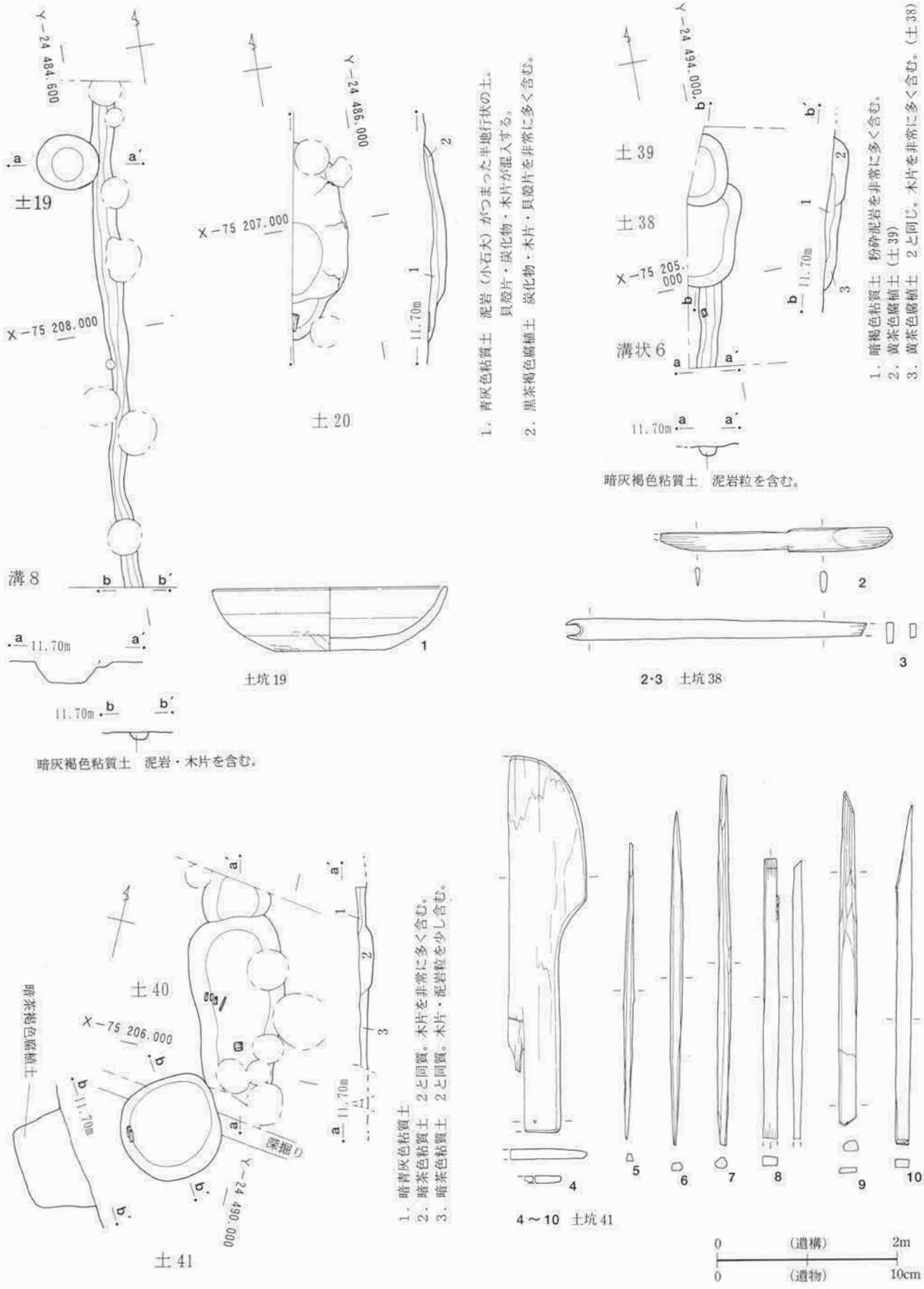
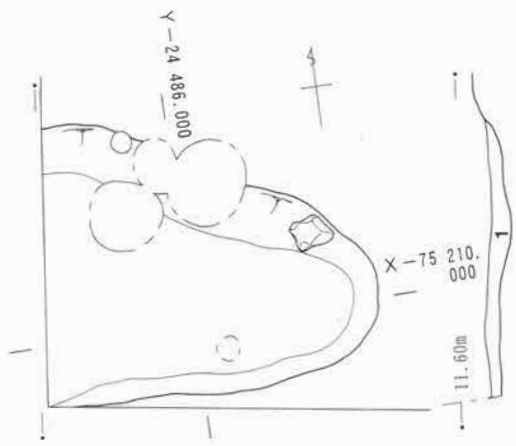
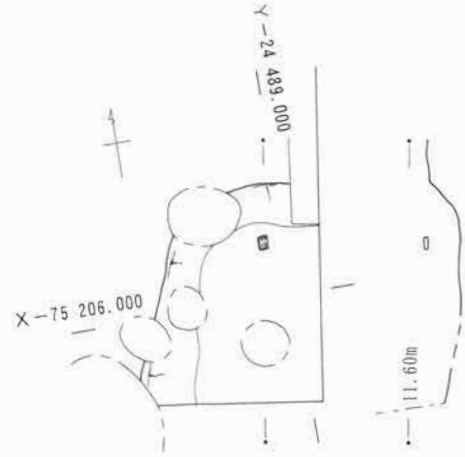


図98 溝8・溝状遺構6・土坑19・20・38～41、同出土遺物



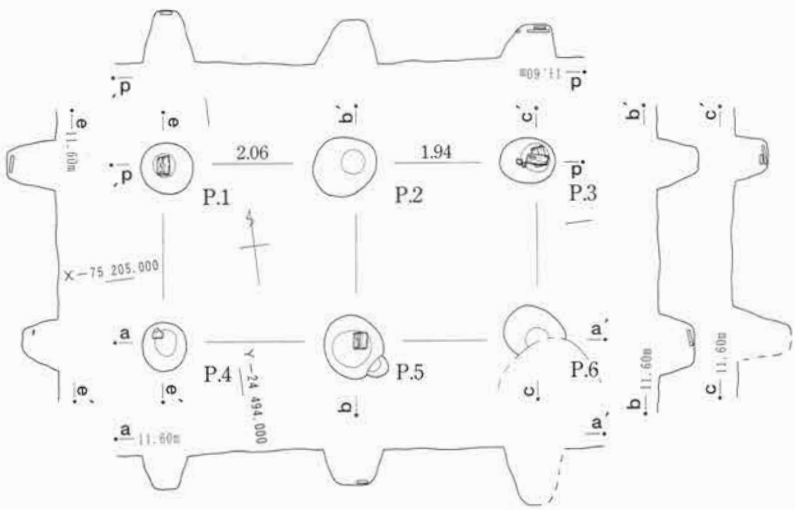
落ち込み10

1．暗青灰色粘質土　含有物が少ない。粉砕泥岩がつまる。



落ち込み9

0　2m

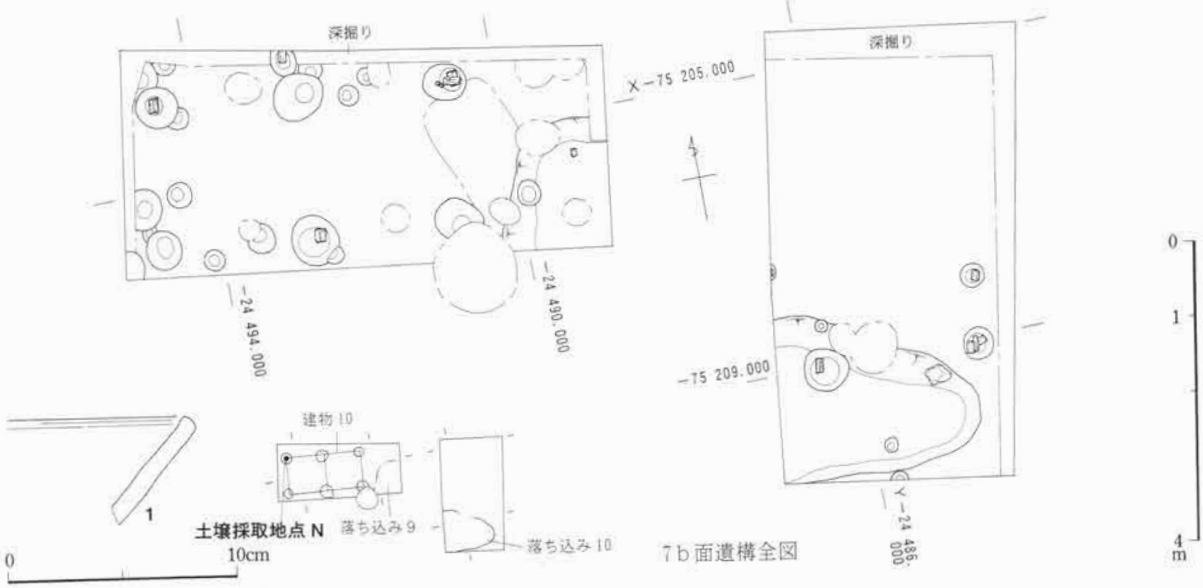


P	長径 × 短径 × 深さ
1	56 × 54 × 52
2	70 × 61 × 41
3	59 × 49 × 34
4	54 × 46 × 36
5	80 × 61 × 38
6	(65) × 55 × 61

単位(cm)

建物10

0　2m



7b面遺構全図

図99　7b面遺構全図、同出土遺物、建物10、落込み9・10

項：調査区中央で検出する。充填土は木片がつまった軟質土で腐植土に近い。

土坑41（図98）

位置：X－75 206.000～－75 207.500　Y－24 490.000～－24 491.500　**規模**：一辺約113cm×深さ約65cm　**主軸方位**：N－59°－E　**平面形**：円形　**断面形**：箱形　**出土遺物**：杓子（4）・箸状木製品（5～7）・棒状木製品（8～10）　**特記事項**：土坑40に南接する。腐植土がつまった土坑。土中には瓜科植物の種子なども含まれており、便槽の可能性がある。5～10のうちいくつかは籌木であろう。

7a面遺構出土遺物（図96）

p.296 土師器皿R種大型（1）

7a面出土遺物（図96）

土師器皿R種小型（2・3）・鍔鍋（4）・常滑こね鉢Ⅰ類（5）・常滑甕（6）・常滑甕転用磨耗陶片（7）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（8）・竜泉窯青磁鉢（9）・鉄釘（10）・貝製白碁石（11）　**特記事項**：8は大宰府新分類の「Ⅱ－b（旧Ⅰ－5）類」（山本2000）に該当。9は同「Ⅲ類」。

12. 7b面

建物10（図99）

位置：X－75 203.500～－75 206.500　Y－24 490.000～－24 495.000　**規模**：東西2間（平均柱間距離2.00m）×南北1間（柱間距離1.90m）＝7.6㎡　**南北軸方位**：N－7°－E　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区西側に位置する。東側に拡張する可能性は低い。柱穴規模からみるとかなり大型の掘立柱建物と推測できる。充填土は暗茶褐色粘質土（泥岩・腐植土・灰状物質が混じる）。検出された全6穴のうち3穴に礎板が残る。

落込み9（図99）

位置：X－75 205.000～－75 207.000　Y－24 488.500～－24 490.500　**規模**：南北174cm以上×東西145cm以上×深さ26cm　**主軸方位**：不明　**平面形**：不整形　**断面形**：浅皿形　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区中央に位置する。充填土は7b泥岩地行面と似ているが泥岩は粗雑に詰まり暗褐色粘質土を含む。建物10に関連する施設か。落込み10とつながる可能性もある。

落込み10（図99）

位置：X－75 208.000～－75 211.000　Y－24 484.500～－24 487.500　**規模**：南北222cm以上×東西264cm以上×深さ8～15cm　**主軸方位**：不明　**平面形**：不整形　**断面形**：不定皿形　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区東南で検出。充填土は落込み9と共通。7b面基盤層と区別しがたく、7面のうちでは最も古い。落込み9とつながる可能性もある。小苑地か。

7b面出土遺物（図99）

常滑こね鉢Ⅱ類（1）　**特記事項**：常滑こね鉢Ⅱ類のうちでも古式に属する

13. 8面

貝・遺物溜り（図100）

位置：X－75 203.000～－75 206.500　Y－24 494.000～－24 485.500　**出土遺物**：土師器皿R種小型（1）・土師器皿R種大型（2・3）・瓦器碗（4・5）　**特記事項**：調査区西端で検出した。検出高は11.15～11.25m。木製品・土師器の他に自然遺体のイガイが多くみつかった。

落込み11（図100・101）

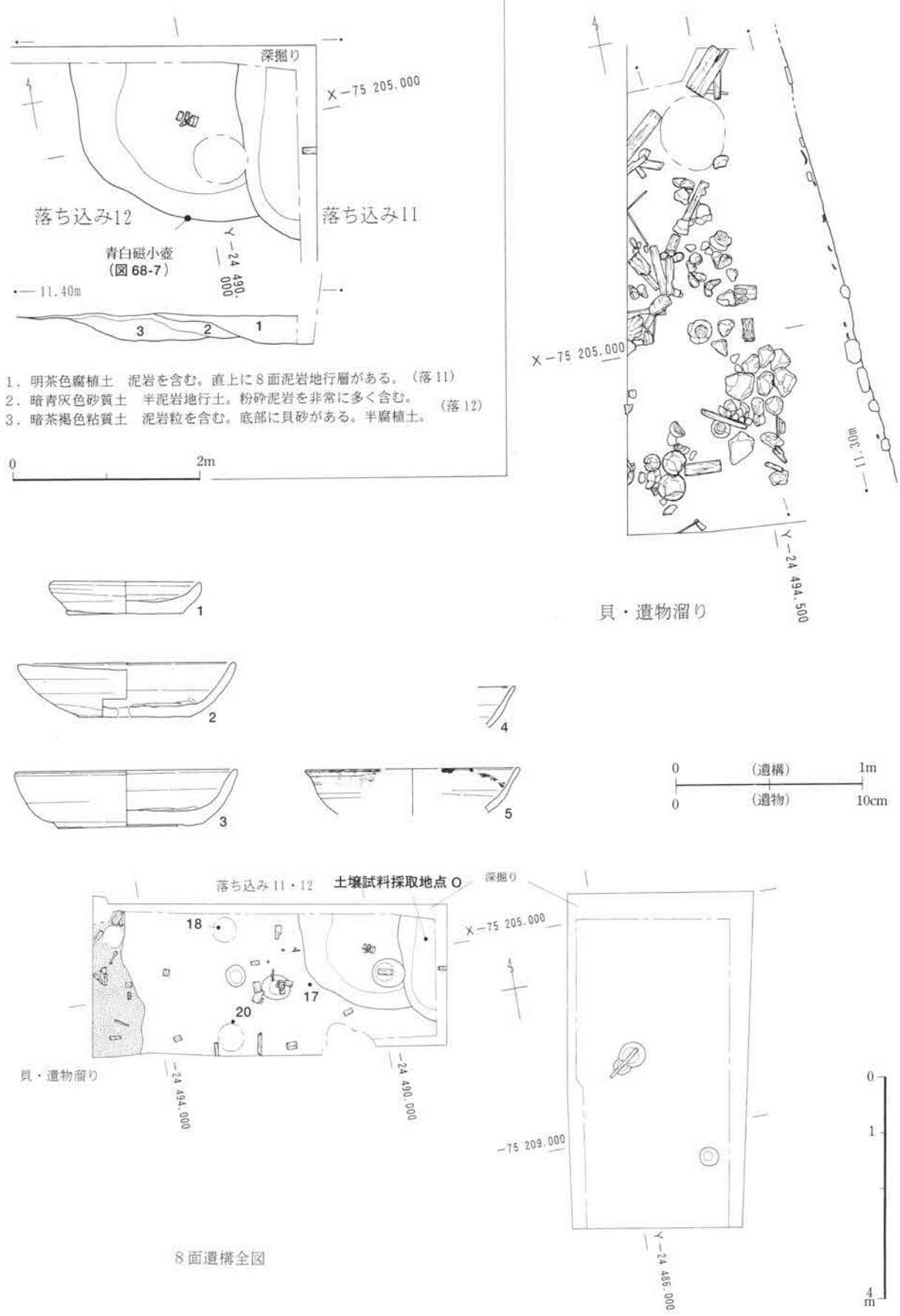


図100　8面遺構全図、貝・遺物だまり、同出土遺物、落込み11・12(1)

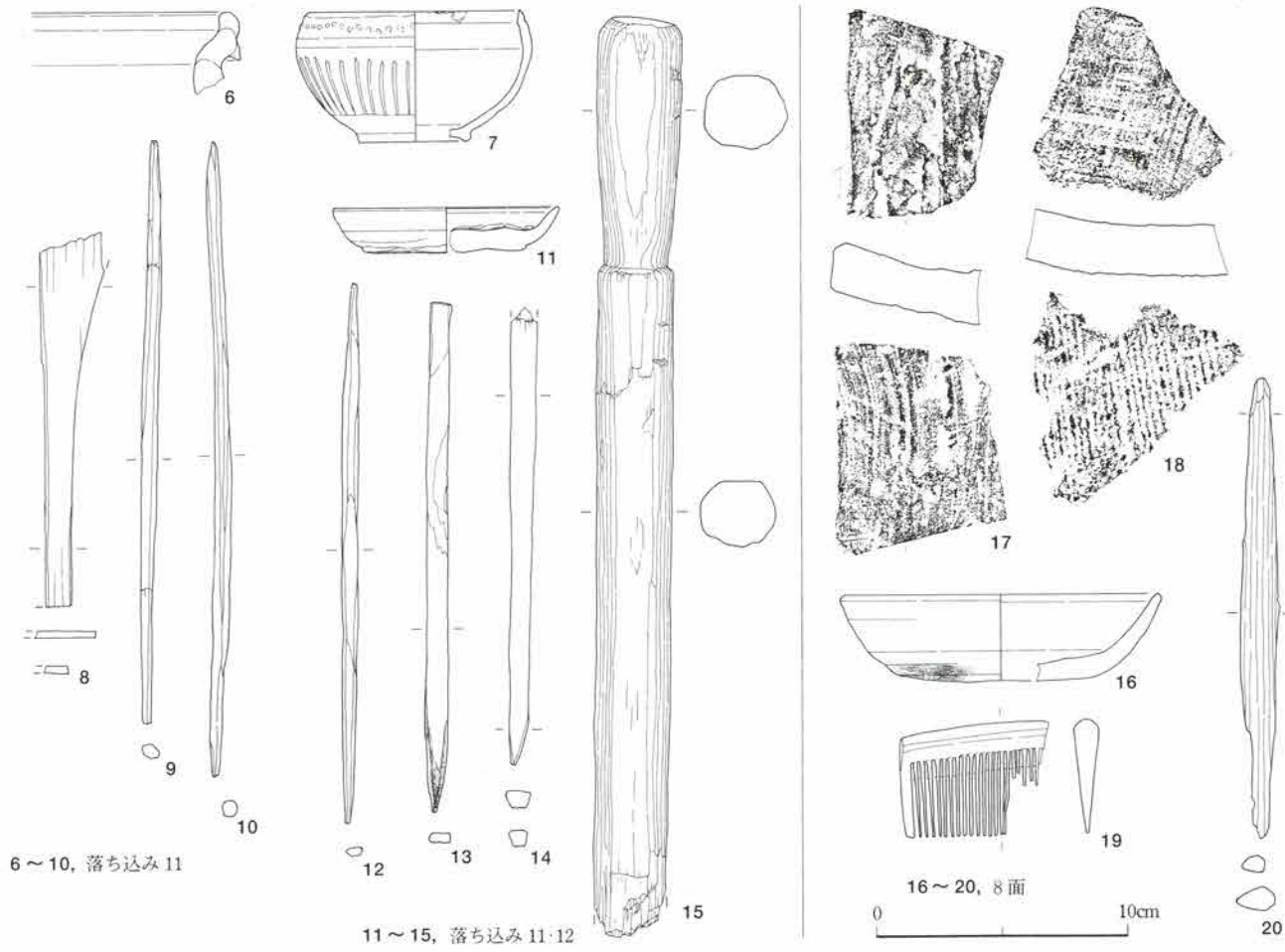


図101　落込み11・同12・8面出土遺物

位置：X－75 204.000～－75 206.500　Y－24 488.500～－24 490.000　**規模**：東西67cm以上×南北182cm以上×深さ30cm　**重複関係**：落込み12を切る　**主軸方位**：不明　**平面形**：不明　**断面形**：（浅皿形）　**出土遺物（図101）**：常滑甕（6）・青白磁広口小壺（7）・不明木製品（8）・箸状木製品（9・10）　**特記事項**：落込み12とともに8面泥岩地行直下で検出。12と重なるが明白な切合い関係があり、別遺構と認識した。先述のとおり調査区東域は地行面が薄くて軟質で、その直下に幾つかの生活面らしきものが確認された（南壁番号60～62・66）。2基ともそこから掘り込まれたもの。

落込み12（図100）

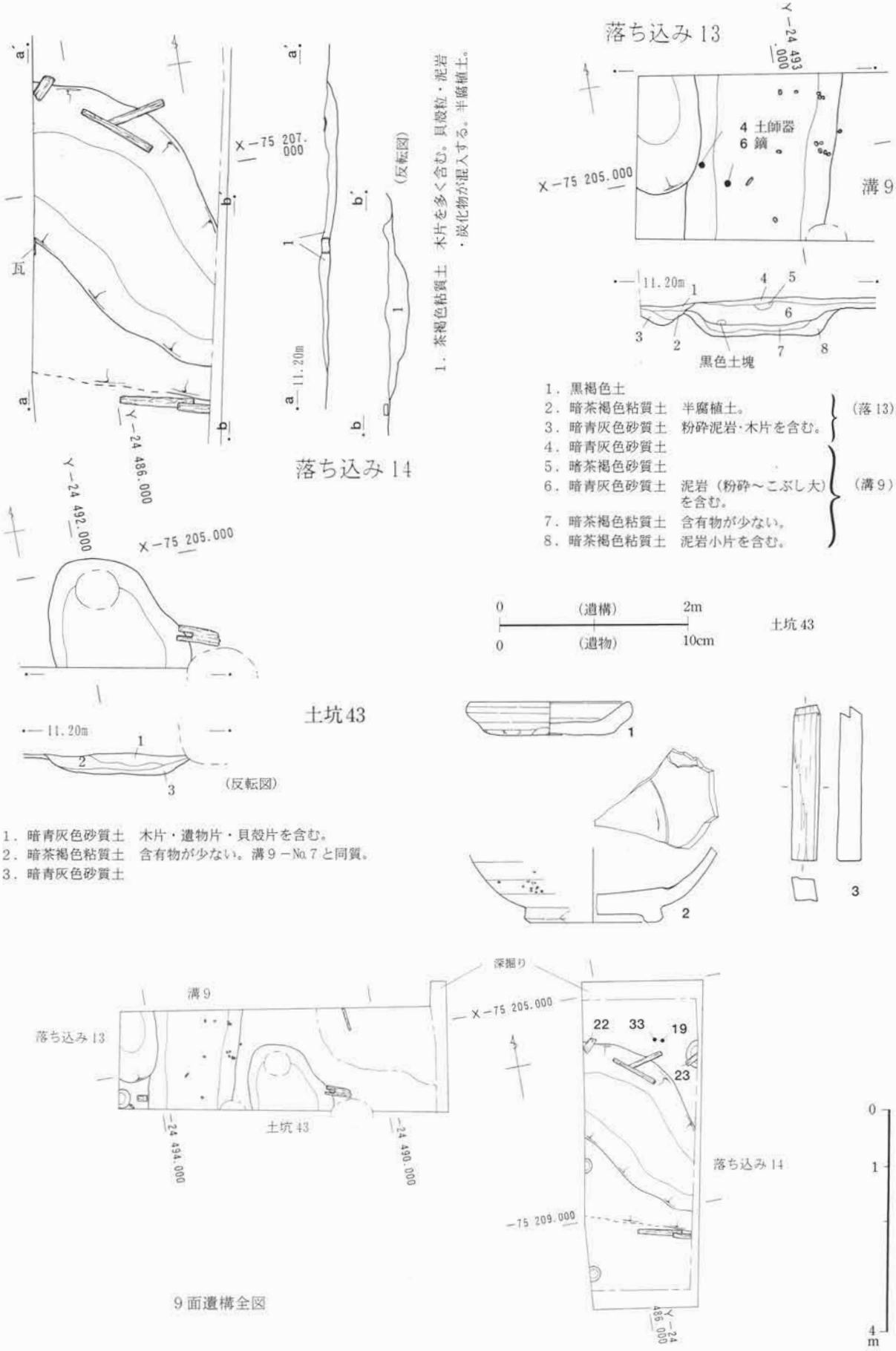
位置：X－75 204.000～－75 206.500　Y－24 489.000～－24 491.500　**規模**：東西184cm以上×南北170cm以上×深さ28cm　**主軸方位**：不明　**平面形**：（楕円形）　断面形：（皿形）　**出土遺物**：次項で落込み11と一括　**特記事項**：東側を落込み11に切られる。底面は10a面直上の貝砂層に達する。上部は泥岩で覆われたようにみえる。

落込み11・12出土遺物（図101）

両遺構のいずれに属するとも判断しがたいものを一括して呈示する。

土師器皿R種小型（11）・箸状木製品（12）・ヘラ状木製品（13）・棒状木製品（14）・張手棒（15）　**特記事項**：15は染色や洗張りのときに布を両端から引っ張るためのもの。これに限らず本地点は板締め染型板（5a面ほか出土、図807－33など）や板杼（いたび）（7a面土坑38出土、図98－8）など染織関係遺物の出土が多い。関連職人の存在を示唆するものだろう。

8面出土遺物（図101）



9 面遺構全図

図102　9 面遺構全図、溝 9 、落込み13・14、土坑43・同出土遺物

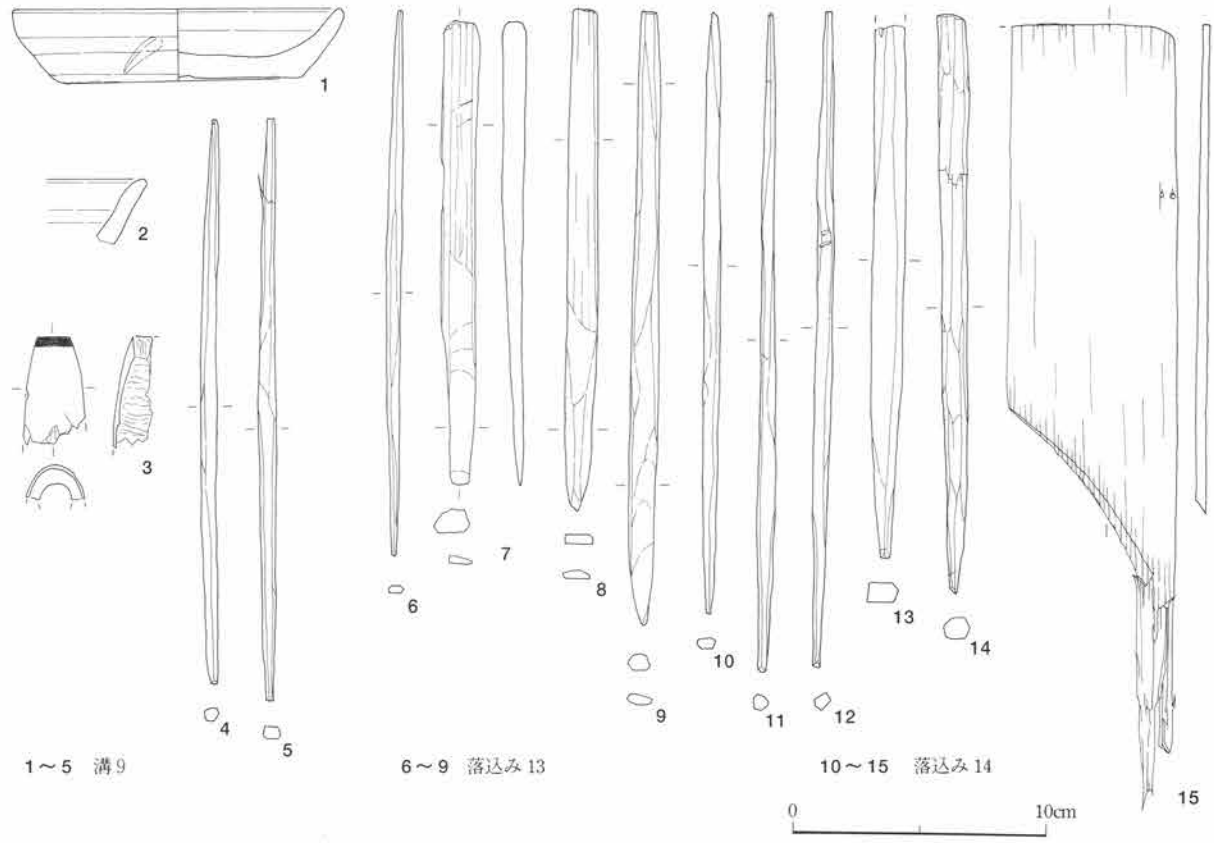


図103　溝9・落込み13・同14出土遺物

土師器皿R種（大型）・平瓦（17・18）・漆塗櫛（19）・不明木製品（20）

14.　9面

溝9（図102・103）

位置：X－75 204.000～－75 206.000　Y－24 492.000～－24 494.500　**規模**：幅約154cm×深さ31～39cm　**断面形**：皿形　**流下方向**：南→北　**主軸方位**：N－12.5°－E　**重複関係**：落込み13に切られる　**出土遺物**：土師器皿R種大型（図103－1）・渥美こね鉢（2）・骨製鏑（3）・箸状木製品（4・5）　**特記事項**：調査区西端で検出した南北の溝。充填土は親指大～拳大の破砕泥岩を含んだ暗青灰色砂質土が主体で、底面近くに茶褐色粘質土（腐植土に近い）が堆積する。流下方向が今までの溝と異なるが、検出距離が短く全容が把握できないため断定はできない。

落込み13（図102・103）

位置：X－75 203.500～－75 205.500　Y－24 493.500～－24 494.500　**規模**：東西69cm以上×南北128cm以上×深さ20cm　**主軸方位**：不明　**平面形**：（楕円形）　**断面形**：すり鉢状　**重複関係**：溝9を切る　**出土遺物**：箸状木製品（図103－6）・ヘラ状木製品（7～9）　**特記事項**：調査区西端にある。腐植土がつまっているが詳細は不明。

落込み14（図102・103）

位置：X－75 205.500～－75 209.500　Y－24 484.500～－24 487.000　**規模**：東西長さ145cm以上×南北幅140～180cm×深さ5～21cm　**主軸方位**：N－43.5°－W　**平面形**：溝状　**断面形**：皿形　**出土遺物**：箸状木製品（図103－10～12）・串状木製品（13・14）・不明木製品（15）　**特記事項**：調査区東側にある。蛇行する溝か。

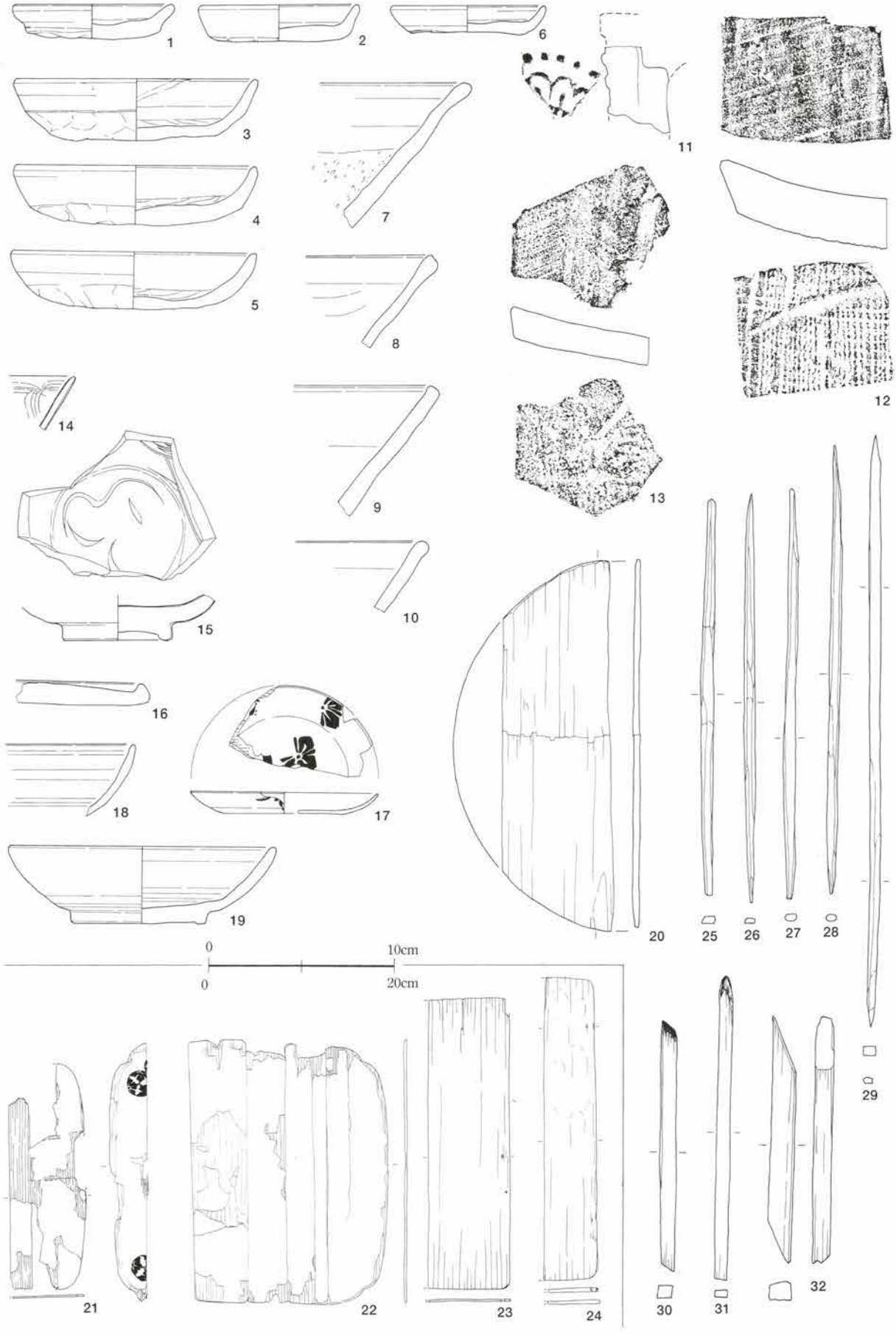


図104　9面出土遺物(1)

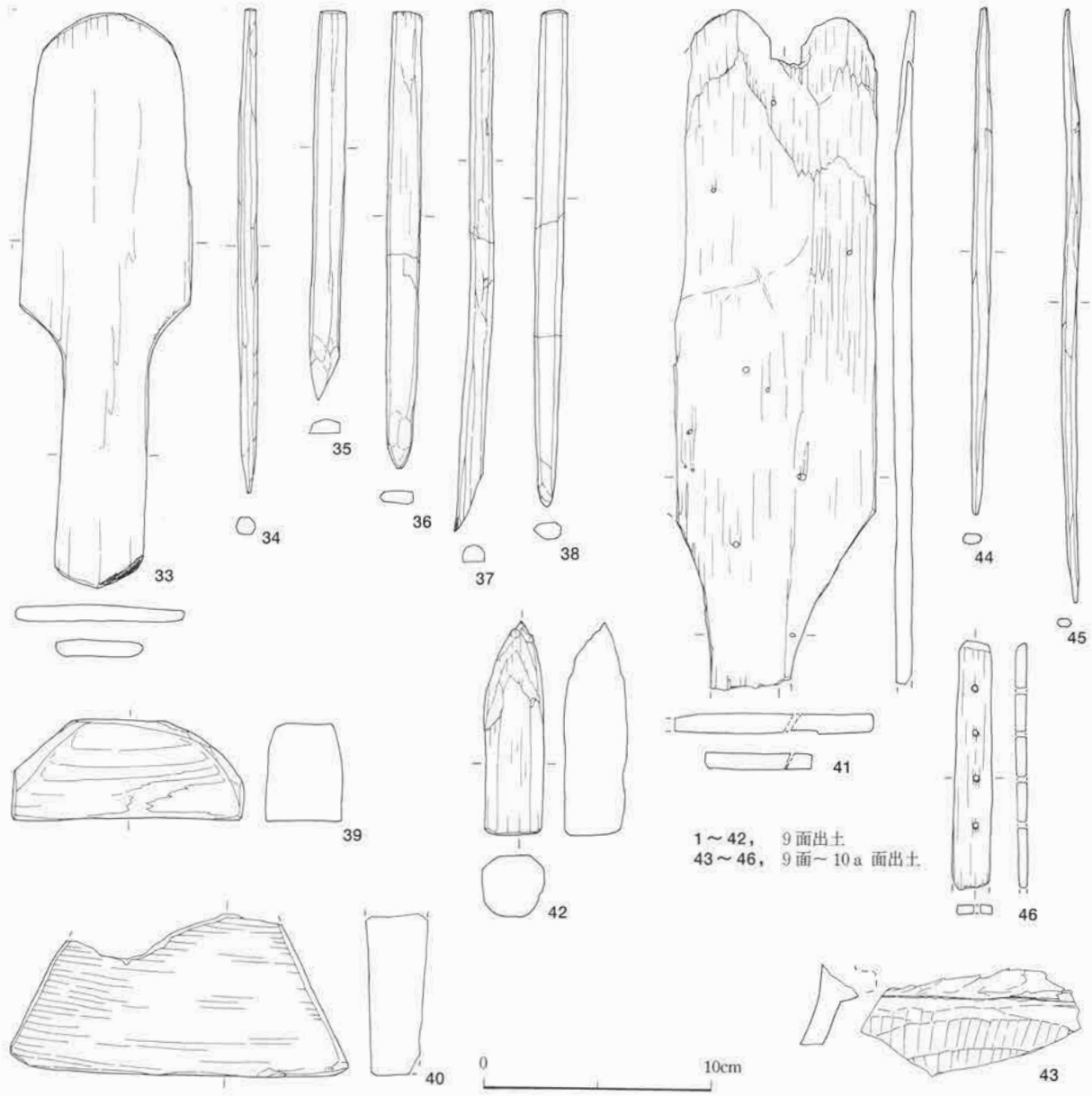


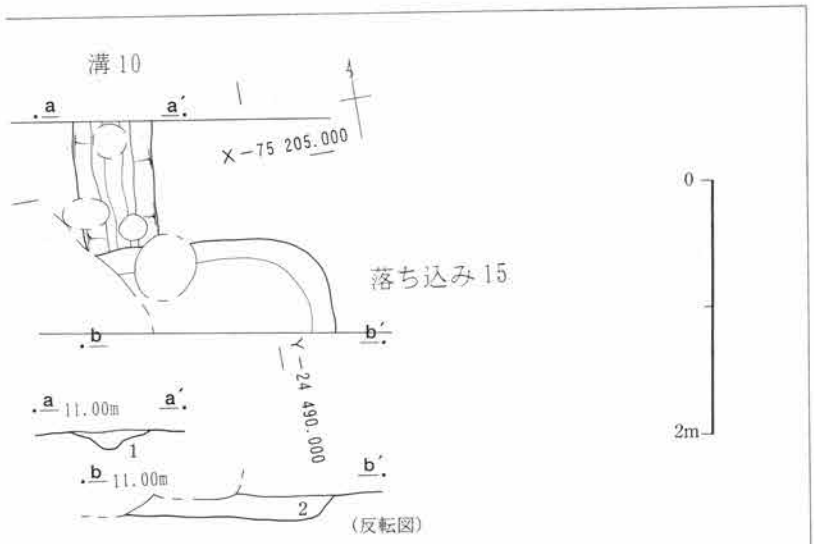
図105　9面出土遺物(2)、9～10a面出土遺物

土坑43（図102）

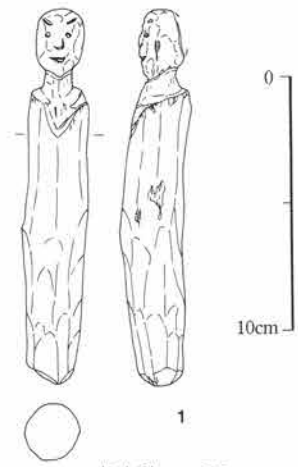
位置：X－75 204.500～－75 206.500　Y－24 490.500～－24 492.500　**規模**：南北118cm以上×東西150以上×深さ22cm　**主軸方位**：（N－5°－E）　**平面形**：不整楕円形　**断面形**：皿形　**出土遺物**：土師器皿T種小型（1）・竜泉窯青磁画花文碗（2）・部材（3）　**特記事項**：溝9の東隣にある。充填土からみて同時期と推測される。

9面出土遺物（図104・105）

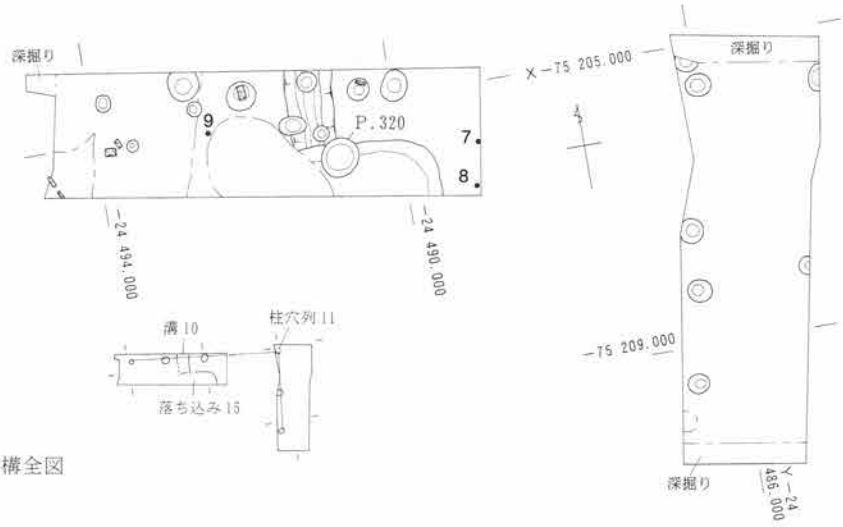
土師器皿T種小型（1・2）・土師器皿T種大型（3～5）・土師器皿R種小型（6）・常滑こね鉢Ⅰ類（7・8）・常滑こね鉢Ⅱ類（9・10）・軒丸瓦（11）・平瓦（12・13）・竜泉窯青磁画花文碗（14・15）・漆器盆（16）・漆器皿（17）・漆器椀（18・19）・円盤型木製品（20）・漆塗折敷（21・22）・折敷（23・24）・箸状木製品（25～29）・棒状木製品（30・31）・不明木製品（32）・板杓子（33）・串状木製品（34）・ヘラ状木製品（35～38）・手押木（39）・下駄歯（40）・不明木製品（41）・不明木製品（42）　**特記事項**：手づくね成形土師器（T種）の出土が注目される。食膳具が多く、日常生活の痕跡を濃くとどめる。



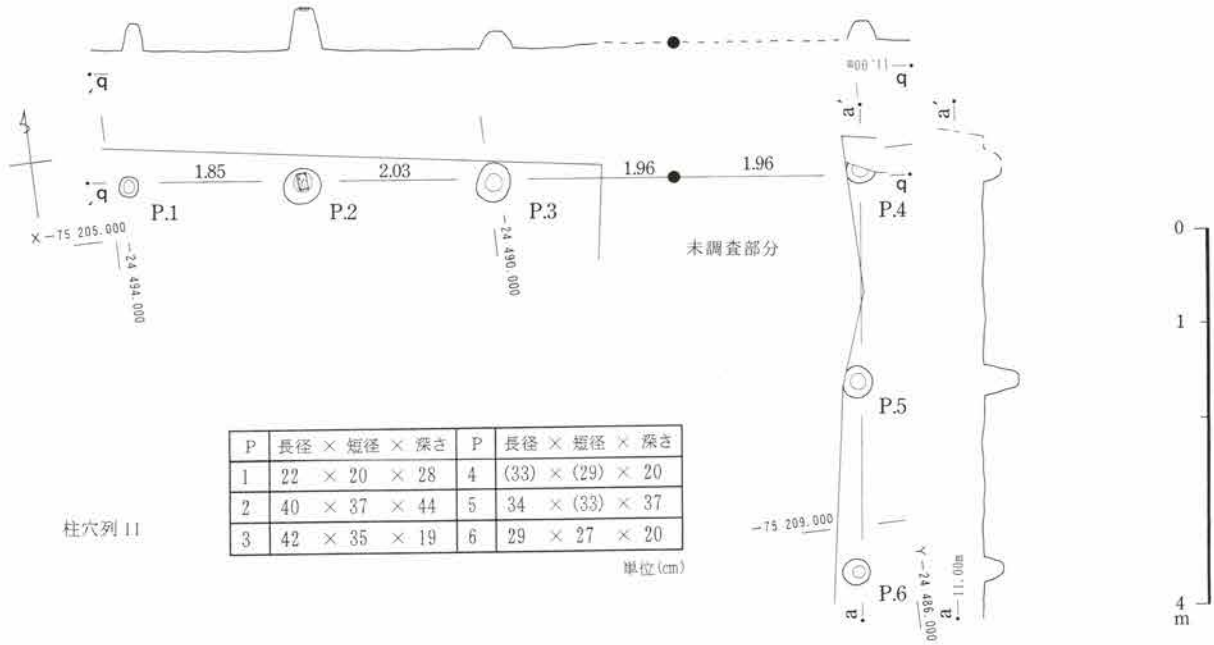
1．黒褐色土　貝砂が混入する。(溝 10)
2．青灰色砂質土　泥岩（小石大～こぶし大）を多く含む。(落 15)



柱穴列 11　P.2



10 a 面遺構全図



柱穴列 11

P	長径 × 短径 × 深さ	P	長径 × 短径 × 深さ
1	22 × 20 × 28	4	(33) × (29) × 20
2	40 × 37 × 44	5	34 × (33) × 37
3	42 × 35 × 19	6	29 × 27 × 20

単位(cm)

図106　10 a 面遺構全図、柱穴列11・同出土遺物、溝10、落込み15

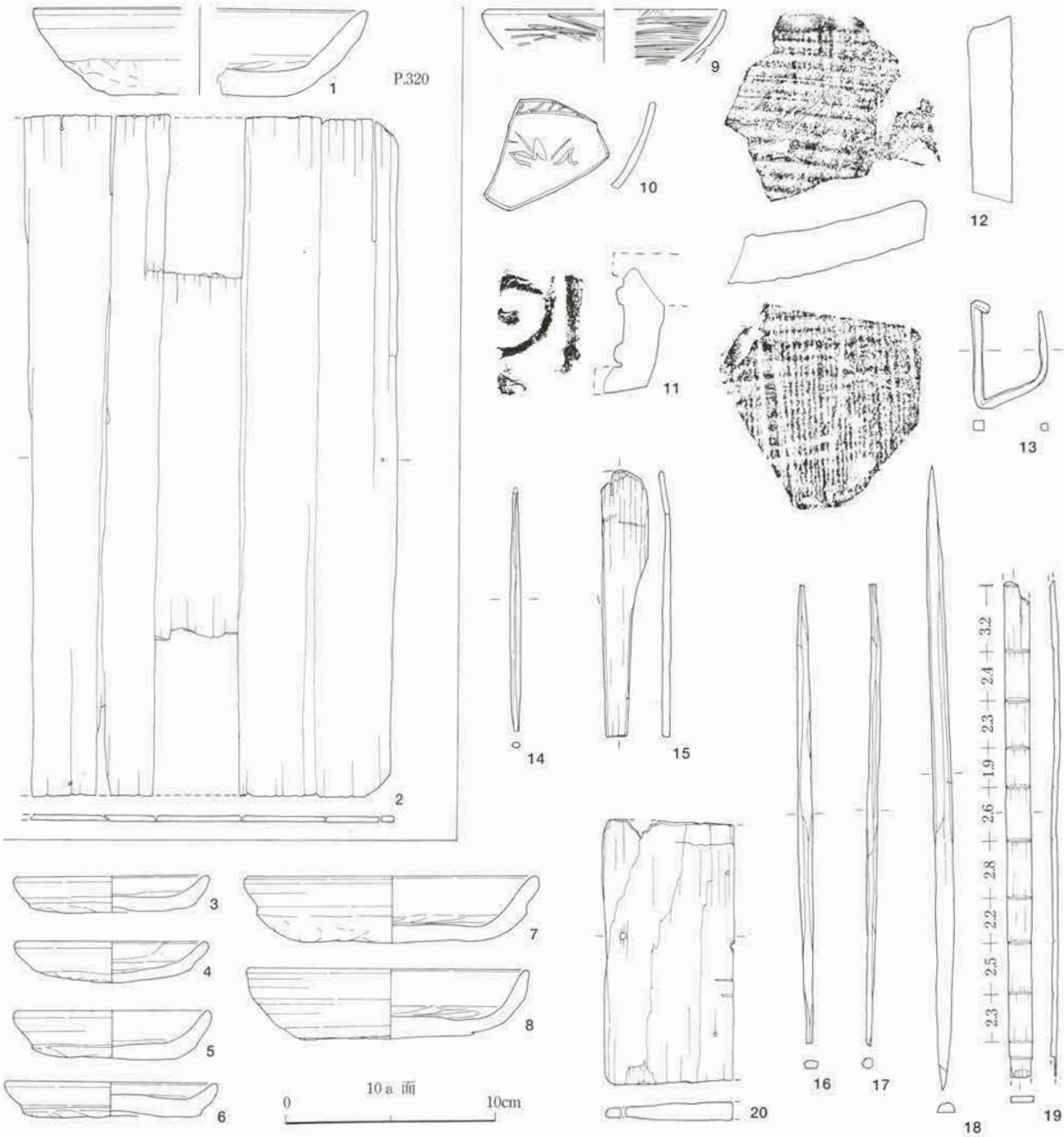


図107　10a面遺構・10a面出土遺物

15. 10a面

柱穴列11（図106）

位置：X－75 204.500～－75 210.000　Y－24 485.500～－24 494.000　**規模**：東西（4）間（平均柱間距離1.95m）×南北2間（平均柱間距離2.13m）　**南北軸方位**：N－6.5°－E　**出土遺物**：p.2　木偶（1）　**特記事項**：カギ型の柱穴列。建物の一部か。充填土は貝砂面上から検出した黒褐色粘質土や含有物のほとんどない暗灰色粘質土など。10a面の中では新しい。平均柱間距離は、東西が位置的にややずれる西端のp.1を除けば1.98m、南北が2.13m。

溝10（図106）

位置：X－75 204.500～－75 205.500　Y－24 490.500～－24 491.500　**規模**：最大幅60cm×深さ15cm

断面形：鉢形　**流下方向**：ほぼ水平　**主軸方位**：N－4°－E　**重複関係**：落込み15に切られる　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：充填土および貝砂層下からの検出という点からみて10a面中でも旧い遺構とみられる。

落込み15（図106）

位置：X－75 205.500～－75 206.500　Y－24 489.500～－24 491.500　**規模**：南北74cm以上×東西144cm以上×深さ20cm　**主軸方位**：N－86°－E　**平面形**：隅丸方形または楕円形　**断面形**：皿形　**重複関係**：溝10を切る　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：貝砂面を切る10a面遺構出土遺物（図107）p.320土師器皿T種大型（1）・折敷（2）　**特記事項**：径55cmの大きめの柱穴中に入っていた

10a面出土遺物（図107）

土師器皿T種小型（3～6）・土師器皿T種大型（7）・土師器皿R種大型（8）・楠葉型瓦器碗（9）・高麗青磁碗（10）・軒平瓦（11）・平瓦（12）・鉄釘（13）・骨角製耳掻き（14）・杓子状木製品（15）・箸状木製品（16～18）・不明木製品（19）・物指（19）・不明木製品（20）　**特記事項**：10は鎌倉時代の早い時期に高麗青磁の碗の搬入があったことの好資料といえる。19は物指とはしたものの、目盛とおぼしい刻み目の間隔が1.9～3.2cmとあまりにも不揃いで（平均2.47cm）、他のものである可能性は残る。

9面～10a面出土遺物（図105）

9面から10a面にかけて帰属層位の判別のしがたいものを一括して呈示する。

滑石鍋（43）・箸状木製品（44・45）・不明木製品（46）

16. 10b面

柱穴列12（図108）

位置：X－75 205.000～－75 209.500　Y－24 485.500～－24 486.500　**規模**：南北2間（平均柱間距離1.86m）　**主軸方位**：N－2.5°－E　**重複関係**：溝12を切る　**出土遺物**：p.1 土師器皿T種小型（2）・土師器皿T種大型（3～5）　**特記事項**：調査区東側にある南北列。狭い調査区中で形状の近似したものを組合せた。充填土は黒褐色土（泥岩粒・炭・貝片・木片を含む）・暗灰色粘質土（含有物微量）からなる。p.1底面には土師器5枚が重なって置かれており、埋納行為とみられる。このp.1からは、R種で内湾する器壁をもち、口縁部がわずかに外反する古式のものも共出している（小片で図化不能）。

溝11（図109）

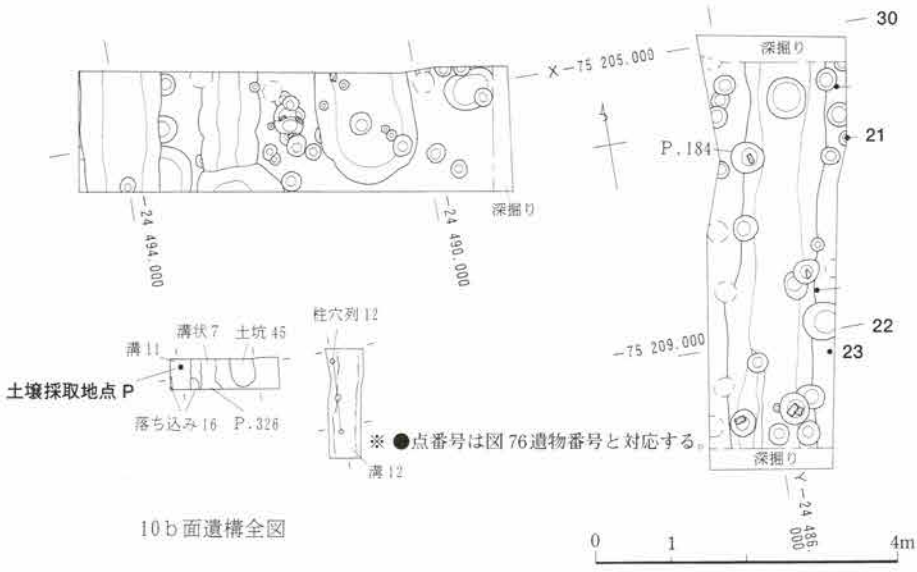
位置：X－75 204.000～－75 206.000　Y－24 493.000～－24 494.500　**規模**：幅99～109cm×深さ26～38cm　**断面形**：皿形～浅鉢形　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：N－7.5°－E　**重複関係**：落込み16を切る　**出土遺物**：土師器皿T種小型（1・2）・土師器皿T種大型（3～6）・箸状木製品（7～9）・棒状木製品（10）・円盤型木製品（11）・不明木製品（12）　**特記事項**：調査区西端に位置する南北溝。軟質な泥岩地行面直下で検出。土師器の出土は集中出土に近い状況を示す。充填土の半腐植土は遺物を多く含む。

溝12（図108）

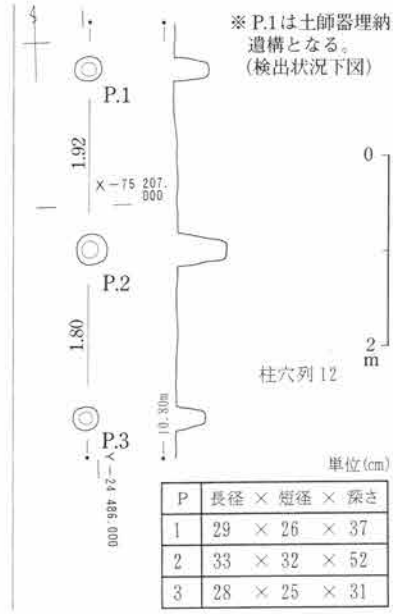
位置：X－75 205.000～－75 211.000　Y－24 484.500～－24 487.000　**規模**：幅100～116cm×深さ22cm　**断面形**：皿形　**流下方向**：ほぼ水平　**主軸方位**：N－10.5°－E　**重複関係**：柱穴列12に切られる　**出土遺物**：糸巻（6）・折敷（7）　**特記事項**：調査区東側を走る南北溝。充填土は基盤層とほぼ同じで微量な含有物しか含まない暗灰黒色粘質土で、これに遺物が混じる。

溝状遺構7（図109）

位置：X－75 204.000～－75 205.500　Y－24 492.000～－24 493.000　**規模**：幅70～82cm×深さ20cm

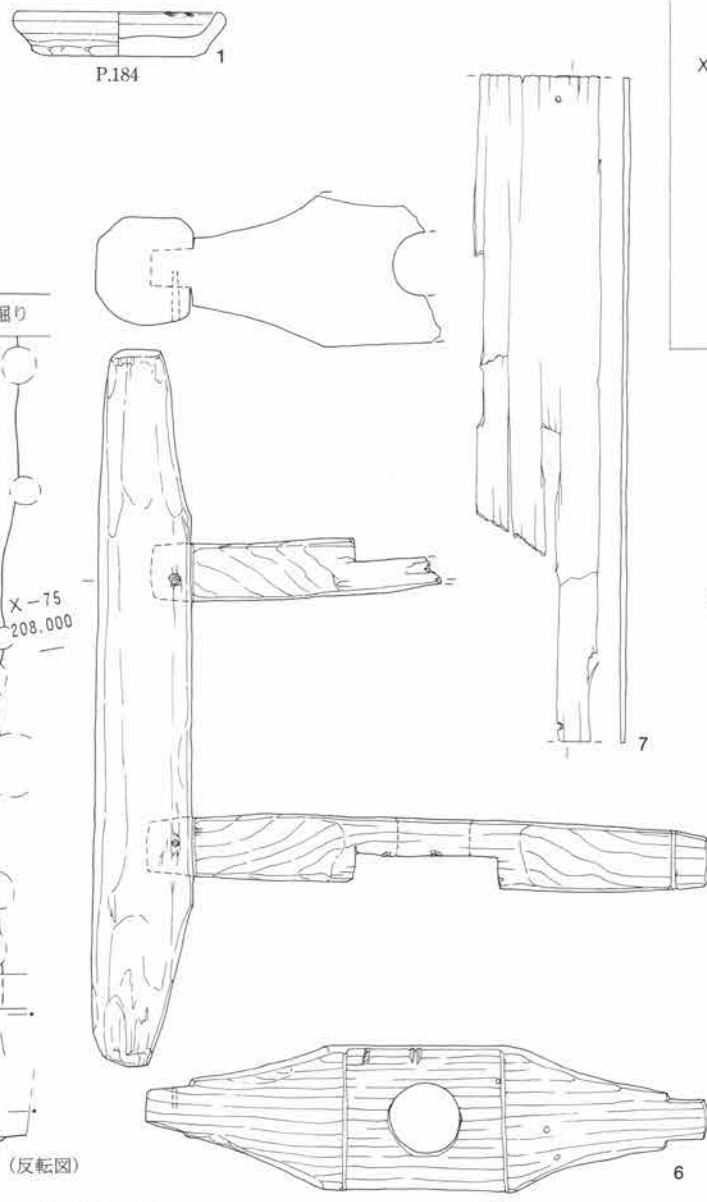


10b面遺構全図



単位(cm)

P	長径	×	短径	×	深さ
1	29	×	26	×	37
2	33	×	32	×	52
3	28	×	25	×	31



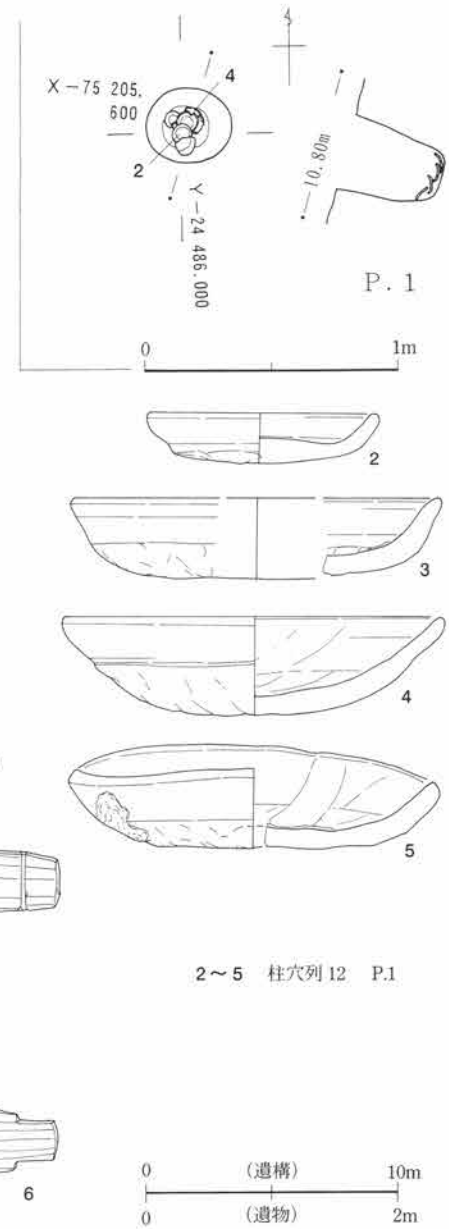


図108　10a面遺構全図、柱穴列11・同出土遺物、溝10、落込み15

主軸方位：N－10°－E　**断面形**：浅鉢形　**重複関係**：p.326に切られる　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：溝11東側に並列する。形状がやや不安定なので溝状遺構としたが、p.326・土坑45を含め溝11関連施設の可能性がある。

落込み16（図109）

位置：X－75 205.000～－75 206.000　Y－24 493.000～－24 495.000　**規模**：南北約60cm×東西約150cm×深さ40cm　**重複関係**：溝11に切られる　**主軸方位**：不明　**平面形**：（隅丸方形）　**断面形**：皿形　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：調査区の西南角にあるうえ溝11に切られており、全容は不明。充填土には腐植土塊（茶褐色粘土）が混じる。

土坑45（図109）

位置：X－75 204.500～－75 206.000　Y－24 490.000～－24 491.500　**規模**：長辺148cm以上×短辺128cm×深さ21cm　**主軸方位**：N－2°－E　**平面形**：（長楕円形）　**断面形**：皿形　**出土遺物**：土師器皿T種大型（13）・土師器内折皿T種（14）・箸状木製品（15～17）・草履芯（18）・連歯下駄（19）　**特記事項**：溝状7の東側に位置する。上層落込みと同質の、腐植土に近い土が堆積。

p.326（図109）

位置：X－75 205.500～－75 206.000　Y－24 491.500～－24 493.500　**規模**：南北40cm以上×東西114cm以上×深さ25cm　**主軸方位**：不明　**平面形**：不整楕円形　**断面形**：皿形　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：充填土は溝状遺構7と同質で、その一部をなす可能性がある

10b面遺構出土遺物（図109）

p.184土師器皿T種小型（1）

10b面出土遺物（図109）

土師器皿T種小型（20・21）・土師器皿T種大型（22～24）・土師器皿R種小型（25）・東濃型山茶碗（26）・鉄製毛抜（27）・箸状木製品（28・29）・下駄未成品（30）・不明木製品（31）　**特記事項**：土師器皿T種はどれも器高が低く平らなものが多い。この時期に東濃型山茶碗26の共伴が注目される。また斜め上方にくさび形に伸びる器壁をもつ土師器R種小型（25）の共伴も、この類型の出現時期についての重要な示唆を含む。下駄未成品（30）については、職人の存在を示すものかどうか議論を要する。

17. 10c面

土坑46（図110）

位置：X－75 204.500～－75 206.500　Y－24 488.500～－24 490.000　**規模**：長径146cm以上×短径109cm以上×深さ86cm　**主軸方位**：（N－9°－E　礎板軸線）　**平面形**：楕円形　**断面形**：逆台形　**出土遺物**：大型礎板2枚があるが（上43cm×34cm×4cm、下38cm×30cm×7cm、高さ9.68～9.83m）、他に図化可能なものなし　**特記事項**：調査区西半分（Ⅱ区）東壁際でみつかった。東壁土層断面の観察の結果、最下層遺構と判断した。充填土は10c面上を覆う層と同じく、暗灰黒色粘質土。底面には大型の礎板2枚が重なり合って敷かれている。掘方円弧から直径は1.5mを優に超えると推定され、柱穴としてはほかと比較にならないほど大きい。ただし掘立柱建物ならばⅠ・Ⅱ区のどこかに検出されていいはずの他の柱穴がないので、あるいは南北方向の柱穴列の可能性もある。とすれば、大倉幕府周辺遺跡群二階堂字荏柄38番1地点で発見された、塀とみられる大型柱穴の長大な列や（馬淵1993）、若宮大路周辺遺跡群小町一丁目322番地点で検出された大型柱穴列（報告書では「土坑」、宮田ほか1997）にも相当するような大型遺構の可能性がある。

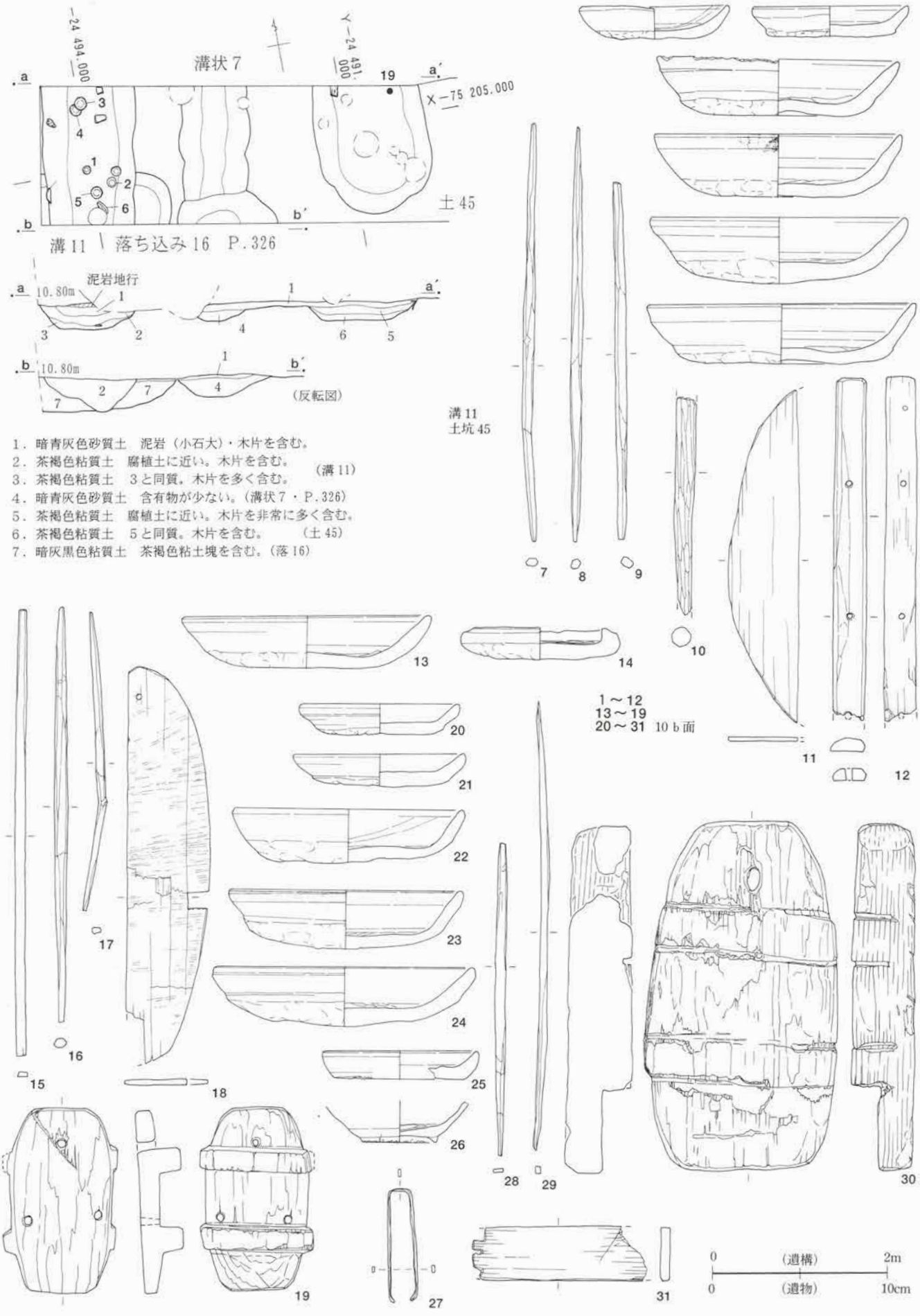


図109　溝11・落込み16・土坑45・p.326、同出土遺物、10b面出土遺物

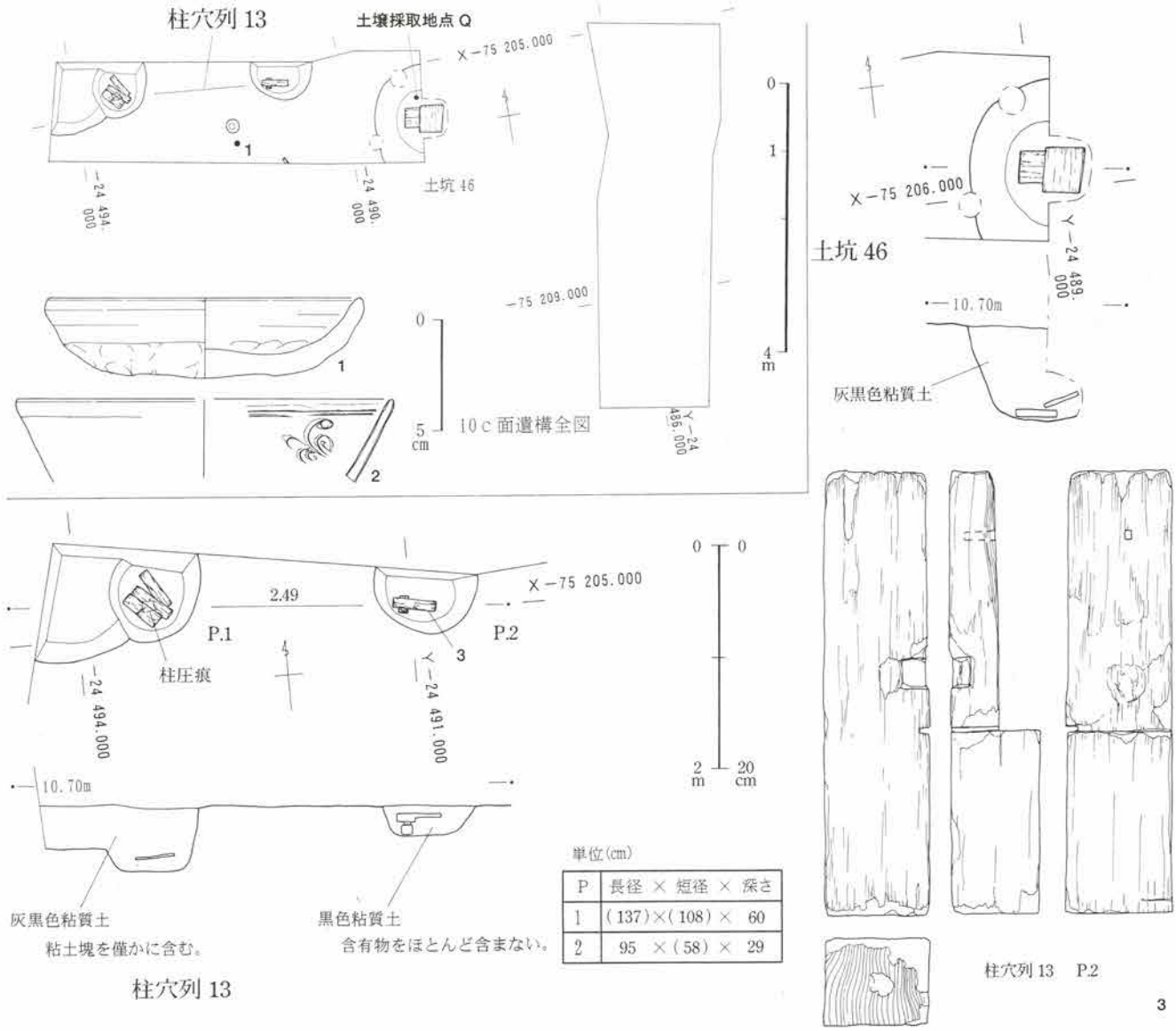


図110　10c面遺構全図・土坑46〜48、同出土遺物

柱穴列13（図110）

位置：X −75 204.500〜−75 205.500　Y −24 490.000〜−24 494.500　**主軸方位**：N −85° −E　**柱間距離**：2.49m（1間）　**出土遺物**：礎板（3）　**特記事項**：2口のいずれも礎板を有する柱穴を調査区北壁沿いで検出した。深さに30cmほどの差があるが、p.1礎板上に残る柱圧痕の主軸方位延長線上にp.2が位置しているため、同一建物の柱であると推測される。充填土は基盤層と同質でもっとも旧い一群に属する。検出層は中世で最下層に属し、『保暦間記』のいう源頼義の居館に関連しているのでなければ、確実に大倉幕府の存続時期と重なる。p.2底面にある上下2枚の礎板のうち上位のものは、元々肘木のような部材の一部を礎板に転用したもの。p.1底面の3枚の大型礎板は元は1枚で（接合後の大きさ40cm×31cm×2cm）、上面には角柱の圧痕（15cm×9cm、標高10.06m）が残る。土坑46との関係は不明だが、充填土はほとんど変らず、同時期と考える。柱穴は、p.1柱穴部分で長径80cm以上×短径80cm以上×深さ58cm、p.1落込み部分で東西100cm以上×南北110cm以上×深さ29cm、p.2は長径92cm以上×深さ24cmと大きい。柱間距離は2.49mで、これは例えば鶴岡八幡宮旧境内研修道場用地内第4面（鎌倉時代以前の層）検出の掘立柱建物の平均柱間（2.44・2.62mなど、馬淵2004）に近い。

10c面出土遺物（図110）

土師器皿T種大型（1）・竜泉窯青磁画花文碗（2）　特記事項：2は飛雲文で、大宰府Ⅰ−4類。

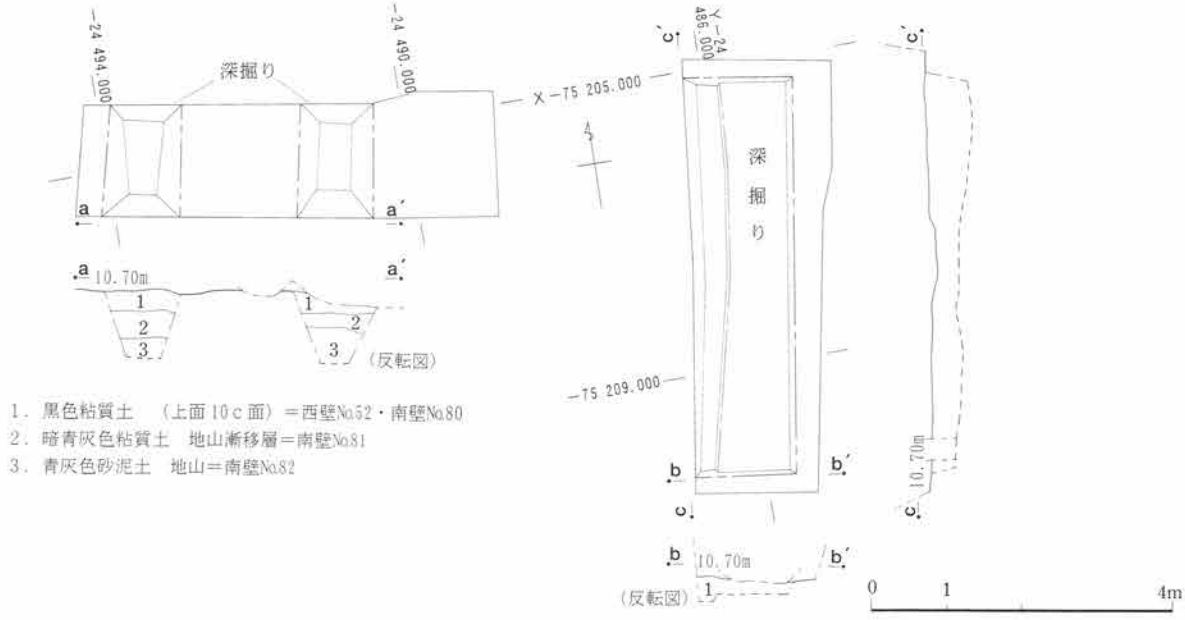


図111　最終深掘り調査全体図

18. 基盤層

第１節で述べたように、中世層調査中に古代の土師器や須恵器が少なからず出土したため、中世遺構の調査終了後10ｃ面に三ヵ所の深掘り調査区を設定し、中世以前の遺構探査をした（図111）。浅いもので海抜約10.50m、最深部で9.60mまで掘り下げた結果、当該部分には中世以前の遺構は存在しなかった。暗青灰色粘質土（南壁土層番号81）の下にある青灰色砂泥土を基盤層と確認し、調査を終了した。

19. 中世以前の遺物

中世層調査中に採集された中世以前の遺物を一括して呈示する（図112）。

縄紋土器（１）・須恵器長頸瓶（２）・須恵器坏蓋（３）・須恵器円面硯（４）・灰釉陶器皿（４）・チャート剥片（６）　特記事項：１は沈線文の入った後期の称名寺ないし堀之内式。すでに近在の横浜国大付属小学校内で後期称名寺式土器が採集されている（赤星1959）。２・３・４に関しては律令期集落の存在も考慮に入れておきたいところである。６は背面や腹面の縁辺に二次加工が施された剥片で、背面には母岩から剥離された後の球心状剥離がやや不規則に認められるものの、剥離作業はそれほど進行しておらず、明確な刃部や基部などは形成されていない。腹面縁辺部には非連続的な小剥離が観察される（６については東国歴史考古学研究所鈴木啓介氏教示）。

20. 採集遺物

撹乱坑や残土中からの採集品を一括して呈示する（図113）。

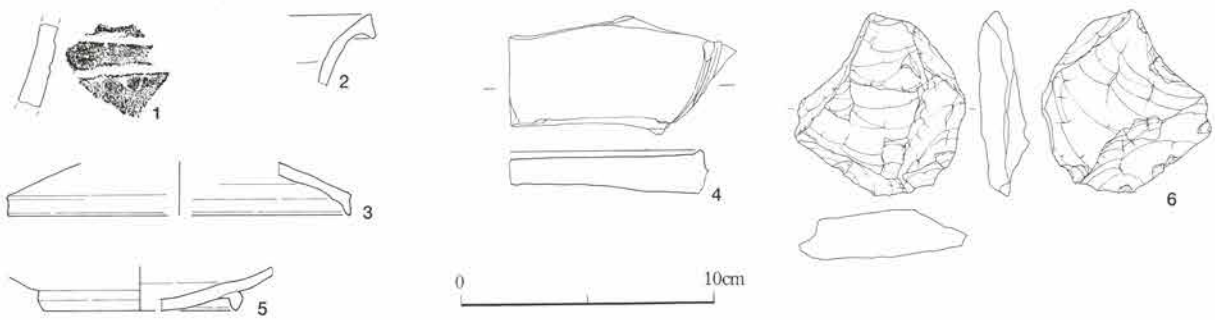


図112　中世以前の遺物

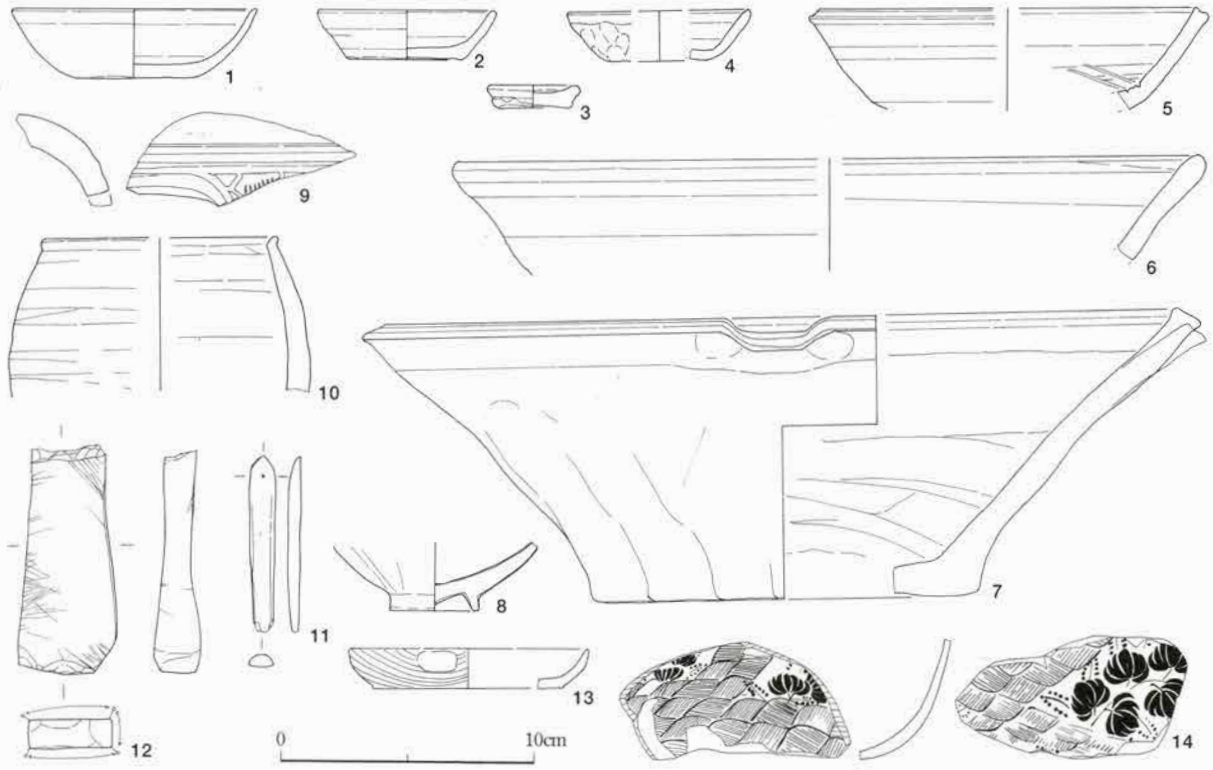


図113　採集遺物

土師器皿Ｒ種中型（１）・土師器皿Ｒ種小型（２）・土師器皿Ｒ種極小型（３）・白色系土師器皿Ｔ種小型（４）・瀬戸おろし皿（５）・常滑こね鉢Ⅰ類（６）・常滑こね鉢Ⅱ類（７）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（８）・朱漆塗土器（９）・土師質広口無頸壺（10）・砥石中砥（12）・骨製品（11）・木器皿（13）・漆器椀（14）
特記事項：９・10は年代不明だが、胎土に金雲母を含む。中世末以降か。

（鍛治屋・馬淵－補綴）

第３節　自然遺体

１．土壌含有物観察結果

本調査では焼土・貝・木片などを多数含む、腐食土を主成分とする特徴的な充填土がいくつかみつかっている。それらの土を採取して、水篩後に残存した自然遺体を肉眼で観察した。採取地点Ａ～Ｑは各遺構全図の概念図内に示した。自然遺体の量的評価に関しては、土壌資料の採取量が地点により異なるため、肉眼観察による以下の５段階の段階にとどめた。

〔**非常に多い**〕＝含有自然遺体の大半を占める主成分　〔**多い**〕＝３・４割程度含む　〔**やや多い**〕＝１・２割程度含む　〔**少ない**〕＝１割前後含む　〔**わずか**〕＝数点含む

この土壌観察は自然遺体の観察を主とするほかに、いまだ評価の定まらない、黄褐色で柔弱な植物質腐食土についての判断材料の提供をも目的とする。それには混入物の総体的な分析が必要であり、場合によっては、自然遺体のほかにも砂礫・泥岩粒子等の量的評価もおこなっている。

地点Ａ－３面ｐ.227（図63　採取高12.39～12.49ｍ）

〔**非常に多い**〕：貝砂粒・貝片（磨耗したものが多い）。貝はイシカゲカイ（ザルカイ）・ウミニナ・アワビの幼貝・フネガイほか不明二枚貝・幼貝の小片がある　**特記事項**：貝片と貝砂粒のつまった柱穴だが、周辺ではこのような充填土の柱穴は見つかっていない

地点Ｂ－４面落ち込み４（図66・図70落込み４土層番号２・３暗茶色腐食土　採取高12.20～12.40m）
〔非常に多い〕：藻屑・木屑・多数の泥岩砂粒・白色砂粒　〔やや多い〕：木片（製品を主とし自然木も含む）・炭化物小片　〔わずか〕：炭化木屑・瓜の種子・不明種子（一部炭化）・蛆の殻（炭化）　**特記事項**：同面で出土した他の落ち込みも同質の腐食土がつまっていた。

地点Ｃ－５ａ面落込み７（図73・図76土層番号1暗褐色粘質土　採取高11.80～12.10m）
〔非常に多い〕：木屑・藻屑・泥岩砂粒・白色粒子　〔やや多い〕：小石粒の泥岩・木片（製品を主とし自然木も含む）〔少ない〕：炭化物小片　〔わずか〕：藻屑・泥土・炭化粒が付着し固まったもの（一部灰化）・松毬片（炭化）・瓜の種子・不明種子・巻貝・ハマグリ貝片・微小巻貝（幼貝）・不明貝片・魚鱗・蛆の殻（炭化）　**特記事項**：落ち込み内には生活用具を中心とした多数の木製品も出土した。

地点Ｄ－５ａ面溝７（図73・図74溝７土層番号３茶褐色腐食土　採取高11.85～12.00m）
〔非常に多い〕：泥岩（砂粒～小石大）〔多い〕：木屑・貝片（ハマグリ・巻貝など）・白色粒子・黒灰色砂粒　〔わずか〕：焼土粒・砂岩・礫（小石大）・松毬（炭化）・瓜の種子・微小貝・魚鱗など

地点Ｅ－５ｃ面上層木器・貝溜り（図83・図84土層番号１暗茶褐色弱粘質土　採取高11.80～11.90m）
〔非常に多い〕：木屑・泥岩砂粒・貝砂粒。貝片はハマグリ・巻貝（キサゴが主。ウミニナ・幼貝・微小貝含む）が大半で、アカニシも少数ある。〔多い〕：木片（製品を主とし自然木も含む）・泥岩（小石大）〔少ない〕：炭化物・小礫　〔わずか〕：松毬（炭化）・桃の果核・梅の果核・瓜の種子・魚骨・魚鱗・鼠の骨など　**特記事項**：ハマグリ・キサゴなど多くの貝殻の表裏には黒茶色の付着物、または黒変が認められる。この地点に限られた特徴である。人為か自然かは不明だが、単なる被熱による炭化現象かどうか、要因については今後分析が必要である。木器・貝溜りは広範囲のため、同じ土壌中でも含有物に変化があらわれている。地点Ｅ～Ｈの４地点を比較すれば違いは明らかである。

地点Ｆ－５ｃ面上層木器・貝溜り（図83・図84土層番号１暗茶褐色弱粘質土　採取高11.80～11.90m）
〔非常に多い〕：木屑・泥岩（白色砂粒～小石粒）〔少ない〕：木片（自然木・製品とも）・炭化物・砂礫・貝砂粒　〔わずか〕：松毬（炭化）・瓜の種子・貝小片（巻貝・ハマグリ等）など

地点Ｇ－５ｃ面上層木器・貝溜り（巻貝溜り・図83　採取高11.90m前後）
〔非常に多い〕：イボキサゴ・泥岩（砂粒～小石大）〔少ない〕：木屑（やや多め）・木炭状小片　〔わずか〕：藻屑・松毬（炭化）・瓜の種子・イシダタミガイ・チョウセンハマグリ・マツムシガイ・スガイ・サルボウガイ（幼貝）・不明幼貝・魚鱗・魚骨など　**特記事項**：木器・貝溜りよりさらに上部で検出した。キサゴはほとんど破損を受けずに原形をとどめている。食用後の一括廃棄と考えられるが、キサゴだけが集中している理由は不明。

地点Ｈ－５ｃ面上層木器・貝溜り（巻貝溜り直下・図83・図84土層番号１暗茶褐色弱粘質土　採取高11.80～11.90m）
〔非常に多い〕：木屑・泥岩（砂粒～小石粒）〔やや多い〕：炭化物・貝砂粒・木片（自然木・製品）〔わずか〕：礫粒・松毬（炭化）・瓜の種子・貝片・魚鱗など

地点Ｉ－５ｃ面上落込み９（図83・図84土層番号５暗茶褐色粘質土　採取高11.70～11.90m）
〔非常に多い〕：藻屑・木屑・白色粒子　〔少ない〕：木片（自然木・製品）・炭化物・泥岩（砂粒～小石粒）〔わずか〕：礫粒・砂岩粒・不明種子・貝片など

地点Ｊ－６面土坑33（図92・図93土坑33土層番号１暗茶色腐食土　採取高11.50～11.80m）
〔非常に多い〕：細かく刻まれた藻・木屑と黒茶色の泥土・白色粒子。またそれらが混ざって固まっている繊維質土　〔少ない〕：泥岩（砂粒～小石粒）・木片（製品・自然木）・藻　〔わずか〕：炭化物小片・瓜

の種子・貝片（巻貝など）・蛆の殻（炭化）など　**特記事項**：〔**非常に多い**〕含有物のほかはごく少量しか含まれていない。壁土の可能性がある。

地点Ｋ－６面土坑34（図92・図93土坑34土層番号２暗茶色腐食土　採取高11.50～11.70m）

〔**非常に多い**〕：黒茶色土に混在する藻屑・木屑・繊維質の白色粒子・泥岩(砂粒～小石大)〔**やや多い**〕：木片（製品を主とする・一部炭化物吸着）・炭化物小片・灰茶色に炭化した土塊（先の黒茶色土の同じ含有物で壁土状のもの）・貝小片(イボキサゴ・コシダカサザエなど)〔**わずか**〕：焼土粒・凝固したカルシウム片・瓜の種子・微小貝・蛆の殻（炭化）など　**特記事項**：主成分は土坑33と同質だが、ほかに泥岩など雑多な自然遺物が混入する。

地点Ｌ－７ａ面直上南西隅焼土層（図96・図96溝状遺構６周辺直上　採取高11.30m前後）

〔**非常に多い**〕：炭化・赤茶けた焼土粒　〔**やや多い**〕：木炭小片　〔**わずか**〕：焼土の付着した薄い漆喰小片（厚さ約1.5㎜）・カルシウム小片・溶融した固形物（厚さ１㎜弱）・泥岩粒・土師器小片など　**特記事項**：南西隅のごく小さい範囲で検出。同じ面上に褐鉄の付着した砂利層と黒褐色化した貝砂層がある。

地点Ｍ－７ａ面土坑41（図96・図98土坑41暗茶褐色腐食土　採取高10.90～11.40m）

〔**非常に多い**〕：藻屑・木屑・白色粒子・それらが混ざり合って凝固した泥土・泥岩(粒子～小石大)〔**多い**〕：木片（製品が主・一部炭化する）〔**やや多い**〕：炭化物小片・瓜の種子・蛆の殻（炭化）〔**わずか**〕：赤く焦げた泥岩小片・礫粒（一部炭化）・カルシウム片・桃の果核・梅の果核・不明種子（一部炭化）・貝片(ハマグリ・巻貝など)・魚鱗・魚骨など　**特記事項**：瓜の種子・蛆の殻が他の充填土に比べ圧倒的に多く、籌木とおぼしい木片も相当数含まれていた。よって便槽であった可能性が高い。

地点Ｎ－７ｂ面建物10ｐ１（図99　採取高10.90～11.40m）

〔**非常に多い**〕：赤茶けた焼土粒（炭化したもの・薄赤いものも含む）〔**やや多い**〕：木炭小片・泥岩粒子・漆喰小片・溶融した固形物（厚さ１㎜弱）〔**わずか**〕：梅の果核（赤茶けて一部炭化する）など　**特記事項**：Ｌ地点の焼土と同質。漆喰小片は厚さ1.5㎜程度で表面にナデ痕がある。漆喰に付着した赤茶土（焼土）の中には壁土などの混和材に用いるすさが含まれている。なんらかの施設の残骸だろう。

地点Ｏ－８面落ち込み11（図100土層番号１明茶色腐食土　採取高：10.90～11.20m）

〔**非常に多い**〕：木屑（半腐葉土化する）〔**少ない**〕：木片（製品・自然木）・泥岩粒・炭化物・貝粒子・砂粒　〔**わずか**〕：蛆の殻（炭化）・不明貝細片

地点Ｐ－10ｂ面溝11（図108・図109土層番号１～３茶褐色粘質土　採取高10.40～10.70m）

〔**非常に多い**〕：木屑・藻屑・貝粒子・砂粒　〔**多い**〕：木片（製品を主とする）・泥岩（砂粒大～小石大）・炭化物　〔**少ない**〕：土師器片・礫粒子　〔**わずか**〕：ハマグリ・チョウセンハマグリなどの貝片・魚鱗・瓜の種子・不明種子

地点Ｑ－10ｃ面土坑46（図110・図110土坑46灰黒色粘質土　採取高9.70～10.50m）

〔**非常に多い**〕：木屑・泥岩（砂粒大～小礫）〔**多い**〕：木片（製品を主とし自然木もあり）〔**やや多い**〕：瓜の種子・貝粒子・砂粒　〔**わずか**〕：不明貝小片・不明種子（一部炭化）・魚鱗・炭化物・砂粒など

（鍛治屋）

２．出土貝類について

当調査区から出土した種別が判別できる貝類約1440個体を面別に集計した(表６)。全体の構成比を多い順に示すと次のようになる。

ハマグリ類60.5%・キサゴ類20.9%・イガイ5.2%・アカニシ3.8%・サザエ2.9%・アワビ2.0%・ウ

ミニナ1.7%・他１%以下

ハマグリ類はハマグリとチョウセンハマグリからなるが、全体の70%を超える個体が熱を受けた結果と思われる変化—表面や周縁部の剥離、白色粉質化が見られ判別しにくいものを多く含むため、一括して示した。またキサゴ類中84%がイボキサゴである。

面別で見ると５面が全体の80.4%を占めるが、その中でも５ｃ面上層木器だまりは934個体と非常に多量の貝を含んでいる。内訳は次のとおり。

ハマグリ類565・キサゴ類285・ウミニナ24・サザエ23・アカニシ19・ダンベイキサゴ６・クボガイ５・アワビ２・サルボウ２・カワニナ１・バテイラ１・ボウシュウボラ１

前述したようにハマグリ類の多くは被熱のあとがみられ、食用に供されたものと考えられる。キサゴ類も小型の貝ながら多量にまとまって出土した場合は何らかの形で食用に用いられた可能性がある。

以上のほかに食用以外の用途を示す例を含んでいることが、この遺構の特徴である。それは漆の付着している貝のグループで、この遺構に集中している。種類と数は次のとおり。

ハマグリ類147・アカニシ２・サザエ３

アカニシやサザエに関しては汚れのように漆が付着した状態だが、ハマグリ類については二つのタイプが見られる。一つは漆が薄く皮膜状に付着しているもので、中にはハケ目がはっきり見て取れるものもある。もう一つは厚くザラザラしたタール状に漆が付いているタイプで、これは数が少ない。また漆が付着した個体には被熱しているものが見られなかった。漆加工の過程で貝殻をパレットとして用いることがあるが、これは中世におけるその例であろう。この遺構からの漆工関係遺物は、漆ヘラ２点の他、漆製品も椀・皿・櫛・円板・脚・部材など種類・点数とも多く、多量の漆付貝殻と併せて考えると、この遺構付近で漆加工が行われていた可能性は高い。なお鎌倉での漆付着貝出土については、1980年調査の千葉地遺跡（手塚ほか1982）でハマグリ・アカニシの例が報告されている。数量は明らかではないが、ヘラで漆を練ったような痕が観察されている。なお、この５ｃ面上層木器だまり出土のキサゴ類の中に表面の黒くなっているものが９点あり、これもあるいは漆の可能性がある。また、この他に漆付着の貝が５・６・10面から計28個体出土しているが、すべてハマグリ類であった。

他に貝の出土で特徴的な遺構としては８面の貝・遺物溜りがある。イガイ68・ハマグリ類２・クボガイ１・マガキ１・アワビ１で、おそらく食用に供したイガイを一括投棄したものであろう。

（松原）

表６　第２地点出土貝類点数

	サザエ	アワビ	イガイ	ハマグリ・チョウセンハマグリ	キサゴ・イボキサゴ	ダンベイキサゴ	アカニシ	ウミニナ	その他	小　計
4面まで	1	1	1	12			4		マガキ１　クボガイ１	20
５面	36	11	3	729	299	6	34	24	マガキ6 ボウシュウボラ1 サルボウ3	
									クボガイ5　バテイラ1　カワニナ1	1159
６面		3		77		1	6	1	ヌノメアサリ２　イタヤガイ１	
									タマキガイ１　サルボウ４	96
７面		2	1	18	2		2			25
８面	1	2	67	2			1		マガキ１　クボガイ１	75
９面		3	3	14		1	2		シオフキ１	24
10面	4	6		20		4	6		クボガイ１　アカガイ１	42
計	42	28	75	872	301	12	55	25	31	1441

第４節　花粉化石分析

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

大倉幕府跡（雪ノ下三丁目701番３地点）において行われた発掘調査で、調査区北壁より土壌試料が採取された。この土壌試料について花粉分析を行い、鎌倉時代以前～13世紀第３四半期ころの遺跡周辺の古植生について検討した。

１．試料

試料は調査区北壁（試料１～12）および土坑47（試料13）より採取された13点である（図１）。

各試料について、試料１（５ａ面）は材片を含む黒褐色の有機質土、試料２（５ｃ面）も黒褐色の有機質土で、材片を主体に土丹や貝片が多く混入している。試料３もしまった黒褐色有機質土である。試料４（６面）も砂質の黒褐色有機質土で、土丹の小片が多く認められる（地行）。試料５（７ａ面）はオリーブ灰色の砂質粘土で、土丹小片・腐った材片・貝小片が散在している。試料５の下位は土丹層（８面）で、基質は青灰色粘土である。試料６（９面）は黒褐色の有機質土で、土丹小片・材片・貝小片が散在している。試料７（９面）はややしまりのある黒褐色粘土、試料８は土丹小片が散在する黒灰色粘土で、下部３～４cmは黒色を呈している。試料９（10ａ面）は褐灰色の砂質粘土で、上部に土丹片が認められる（地行）。試料10（溝11覆土：10ｂ面）は黒褐色の有機質土で、材片が認められる。試料11（地

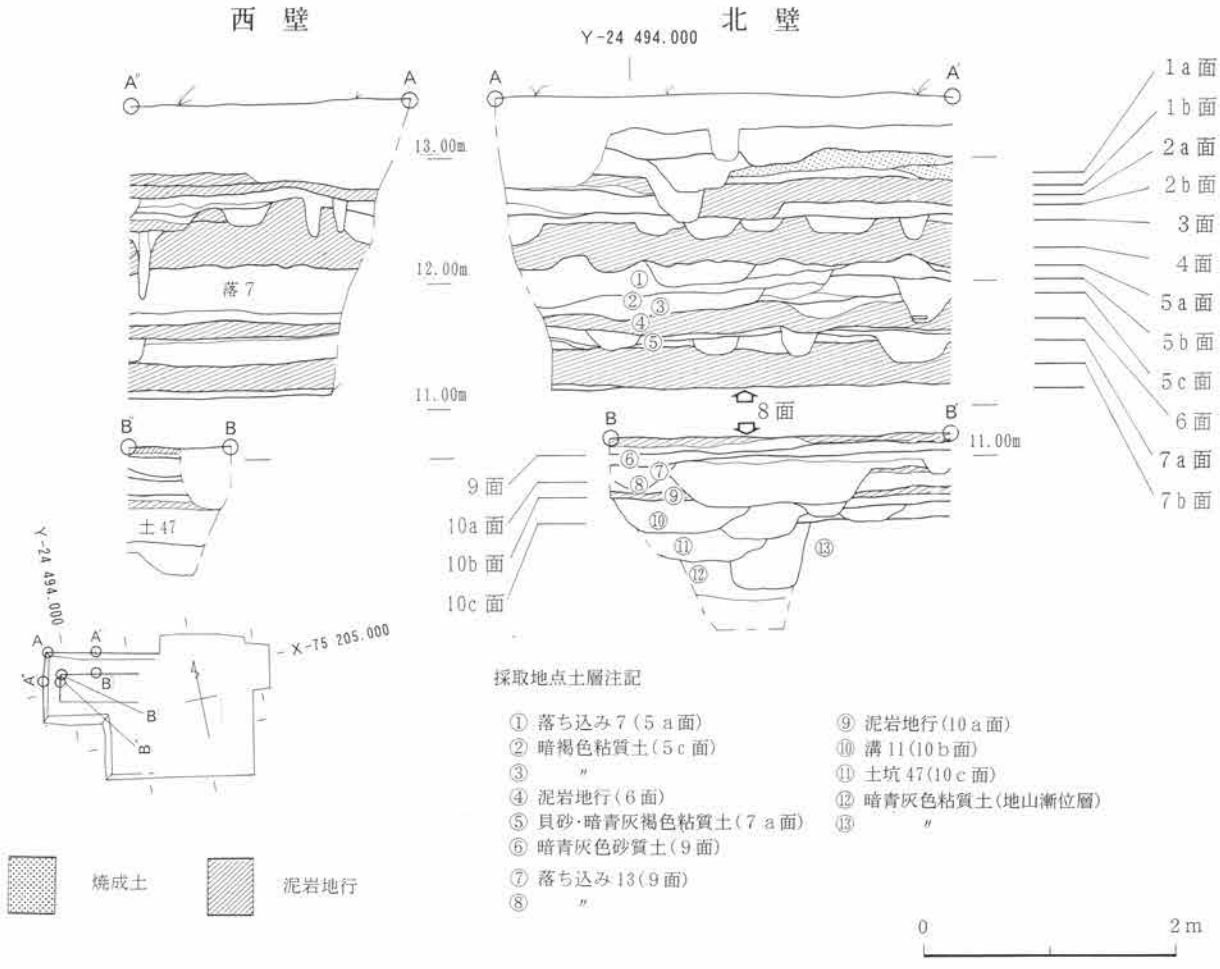


図114　調査区土層断面図（北壁と西壁部分）と資料採取層準

表7　産出粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
樹木														
マキ属	*Podocarpus*	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	1	-	-
モミ属	*Abies*	1	1	-	2	1	-	1	-	1	1	-	-	-
ツガ属	*Tsuga*	-	2	-	2	1	2	1	-	2	-	1	-	1
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	33	58	1	55	29	4	4	5	-	1	1	-	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	6	15	-	12	8	1	2	1	-	-	3	1	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	10	10	2	7	5	13	13	10	1	4	6	-	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	5	-	-	2	1	1	-	1	-	-	-	-	-
クルミ属	*Juglans*	1	1	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	7	4	1	-	2	4	1	1	1	1	1	-	1
カバノキ属	*Betula*	2	2	-	1	1	1	2	-	-	-	1	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	-	2	-	6	1	-	-	-	4	-	-	-	-
ブナ	*Fagus crenata* Blume	1	1	-	2	-	1	1	-	-	1	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	15	18	-	4	1	1	2	1	2	-	2	1	-
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	15	1	-	6	2	1	3	4	4	1	2	-	-
クリ属	*Castanea*	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	2	1	1	1	2	-	1	1	1	1	1	-	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	1	-	-	2	2	-	1	-	-	-	-	-
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トサミズキ属	*Corylopsis*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フウ属	*Liquidamber*	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
シラキ属	*Sapium*	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	*Acer*	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	1	-	-	-	-	1	3	-	-	1	-	-	-
マタタビ属近似種	*cf. Actinidia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本														
ガマ属	*Typha*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	*Alisma*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	883	376	252	436	269	264	328	116	124	182	23	1	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	7	16	4	9	2	9	9	3	2	6	-	-	1
ミズアオイ属	*Monochoria*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ユリ科	Liliaceae	1	1	1	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アヤメ科	Iridaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
クワ科	Moraceae	10	2	1	1	2	2	2	1	-	2	1	-	-
ギシギシ属	*Rumex*	1	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	2	11	12	6	-	-	1	-	-	-	1	-	-
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
他のタデ属	other Polygonum	1	-	-	-	1	-	2	-	4	3	-	-	-
ソバ属	*Fagopyrum*	1	1	1	1	-	1	1	-	-	-	1	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	133	61	4	39	262	17	19	12	33	9	12	-	4
スベリヒユ属	*Portulaca*	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	4	1	-	2	-	-	1	-	1	-	3	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1	1	3	2	2	3	4	2	-	1	-	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	116	94	-	1	-	-	1	3	-	3	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	29	16	3	46	7	-	9	1	-	3	29	-	3
ユキノシタ科近似種	cf. Saxifragaceae	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	3	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マメ科	Leguminosae	3	-	4	1	-	-	4	1	-	3	-	-	-
カラスノゴマ属近似種	*cf. Corchoropsis*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	2	-	3	9	1	-	3	1	-	-
リンドウ属	*Gentiana*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シソ科	Labiatae	1	-	1	-	1	1	2	-	-	2	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	1	-	-	2	2	-	7	-	-	-
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	1	1	1	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-
ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属	*Adenophora - Campanula*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ベニバナ属	*Carthamus*	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	251	38	414	119	11	22	150	25	21	339	22	6	2
他のキク亜科	other Tubuliflorae	52	9	13	16	2	4	12	1	1	56	1	-	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	5	6	-	12	2	2	5	1	-	39	11	1	-
シダ植物														
ゼンマイ科	Osmundaceae	1	-	-	-	-	1	1	1	-	-	2	-	1
単条型胞子	Monolete spore	5	4	2	44	16	5	7	8	3	5	9	27	3
三条型胞子	Trilete spore	3	3	14	2	5	-	2	1	2	1	6	2	-
回虫	*Ascaris*	5	5	13	26	20	2	6	2	1	-	1	-	-
鞭虫	*Trichuris*	175	94	48	228	161	23	19	14	36	8	3	-	-
肝吸虫	*Clonorchis*	3	2	1	3	-	1	3	-	-	-	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	106	124	6	107	65	34	34	25	18	15	22	2	3
草本花粉	Nonarboreal pollen	1504	636	718	701	566	328	567	173	187	664	105	8	11
シダ植物胞子	Spores	9	7	16	46	21	6	10	10	5	6	17	29	4
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	1619	767	740	854	652	368	611	208	210	685	144	39	18
不明花粉	Unknown pollen	21	18	4	6	4	12	7	11	4	2	10	3	2

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

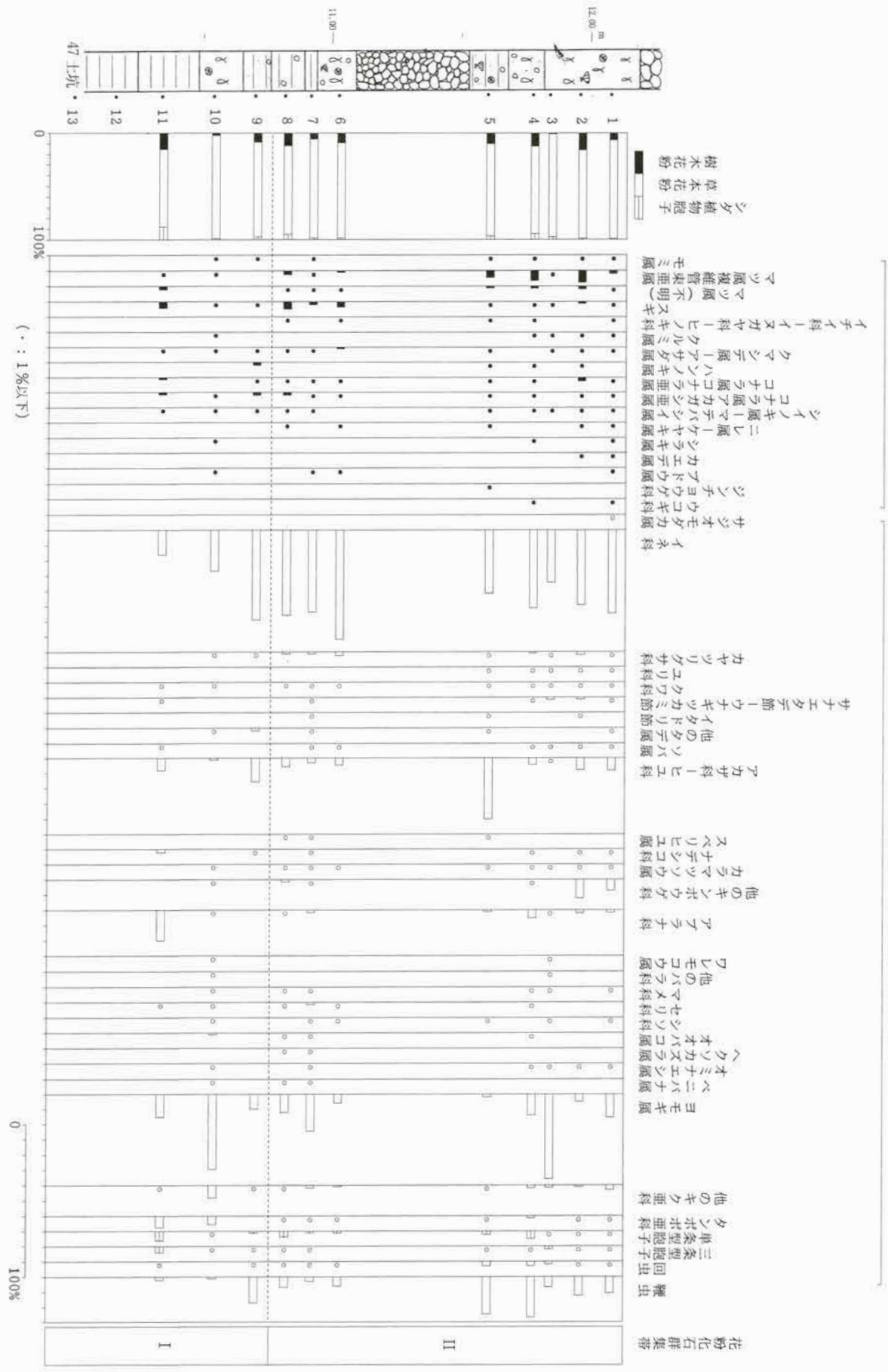


図115　大倉幕府跡の主要花粉化石分布図（出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で計算した）

山漸移層）はボソボソ感のする黒～黒灰色粘土、試料12もボソボソ感のするオリーブ灰色粘土。試料13（土坑47）はやや砂質の黒色粘土質シルトで、かたくしまっている。

年代については出土遺物から、5面が13世紀第3四半期頃、6面が13世紀中葉～同第3四半期、7面が13世紀第2四半期～同中葉、8面、9面が13世紀第2四半期、10面が12世紀第4四半期～13世紀第1四半期と考えられている。

2．分析方法

上記した13試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～5g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

3．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉31、草本花粉36、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計70である。その他寄生虫卵が3分類群観察された。これら花粉・シダ植物胞子・寄生虫卵の一覧を表1に、それらの分布を図2に示した。なお分布図は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。また表および図においてハイフンで結んだ分類群は、それら分類群間の区別が困難なものを示している。

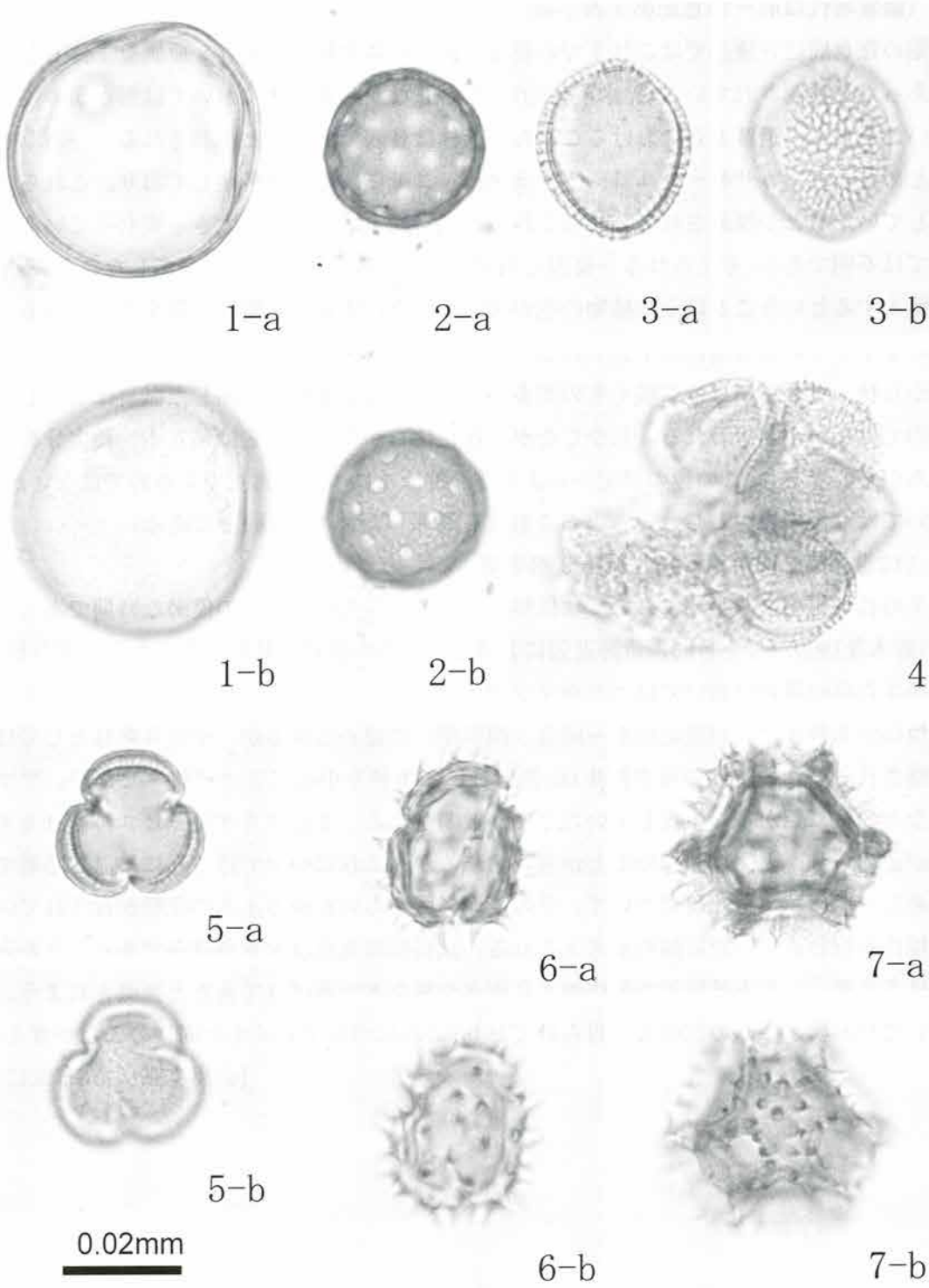
花粉化石の産出傾向から下位より花粉化石群集帯Ⅰ、Ⅱを設定した。

花粉帯Ⅰ（試料9～13）はイネ科の急増で特徴づけられる。樹木花粉では少ない中スギやコナラ属アカガシ亜属に1%を越える試料があるなどやや目立って検出されている。草本類ではイネ科の急増が特徴的であり、試料9では60%近くに達している。その他の分類群では突出した出現が目立ち、ヨモギ属は試料10で50%弱に達し、アブラナ科は試料11で20%を越えている。またアカザ科－ヒユ科は試料9で約16%を示し、その他では、ソバ属が試料11より、また試料10よりベニバナ属がそれぞれ1個体づつ検出されている。寄生虫卵では鞭虫卵が試料9でやや多く観察されている。なお試料12、13については得られた花粉化石数が非常に少なく、特長については不明であり、便宜的に本帯に入れてある。

花粉帯Ⅱ（試料1～8）はイネ科の安定した高率出現（下部は60%前後、上部は50%前後）で特長づけられる。本帯においても樹木類は少なく、その中でマツ属複維管束亜属（アカマツ，クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）が上部でやや目立った出現を示している。スギは下部で連続して1%を越えているが、上部ではほぼ1%未満に減少している。イネ科以外の草本類について、本帯においても突出した出現が目立ち、アカザ科－ヒユ科は試料5で40%を越え、ヨモギ属は試料3で約56%を示している。その他キンポウゲ科が上部2試料でやや多く得られており、ソバ属は少ないながら多くの試料で認められ、ベニバナ属は下部2試料より産出されている。寄生虫卵では試料4、5で鞭虫卵が50%前後を示している。

4．遺跡周辺の古植生

上記した花粉帯を基に大倉幕府跡の古植生について検討した。



図版　大倉幕府跡の花粉分析（scale bar：0.02㎜）

1：イネ科　PLC. SS 3803　番号 3
2：アカザ科　PLC. SS 3809　番号 5
3：アブラナ科　PLC. SS 3808　番号 4
4：アブラナ科（花粉塊）　PLC. SS 3805　番号 4
5：ヨモギ属　PLC. SS 3807　番号 4
6：他のキク亜科　PLC. SS 3806　番号 4
7：タンポポ亜科　PLC. SS 3804　番号 4

花粉帯Ⅰ（鎌倉時代以前～13世紀第1四半期）

この時期の鎌倉周辺丘陵部ではこれまでの花粉分析からスギ林やアカガシ亜属を主体とした照葉樹林が優勢であったと推測されている（鈴木茂1999）。しかしながら本遺跡においては樹木類の占める割合が非常に低いことから、遺跡近辺におけるこれらの森林は貧弱であったと推測される。一方草本類ではイネ科をはじめとしてアカザ科－ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属などが多産しており、これらの雑草類が多く生育していたことが推測される。またこれらは試料により出現率が大きく変わっているが、その要因については不明である。考えられる一要因としてはこれらの花が混入して多産したことが考えられる。この花が混入するということはその植物の花が咲いていた、すなわち開花時期を示している、それは季節的なものを示している可能性も予想される。一般にアブラナ科は春に咲くものが多く、アカザ科－ヒユ科は夏から秋、ヨモギ属は秋に咲くものが多いなどこれら分類群が突出した試料はこうした季節を示しているのではないかと思われる。しかしながら花粉化石から種の同定は難しく、種実分析による種の同定の試みが必要であり、この種の同定からより季節性云々について言及できるのではないかと思われ、季節については今後の課題としたい。なおこれは花粉帯Ⅱについても同様である。

花粉帯Ⅱ（13世紀第2四半期～13世紀第3四半期）

本帯前半の13世紀第2四半期においては依然としてスギ林や照葉樹林の優勢な時期であったと考えられている（鈴木茂1999）が、Ⅰ帯同様遺跡近辺におけるこれらの森林は貧弱であったと推測される。その後の13世紀後半以降の鎌倉においてはニヨウマツ類の二次林が成立したと考えられており（鈴木茂1999）、そうした傾向が本帯後半（13世紀中葉～同第3四半期）に認められるが、やはり森林としては貧弱であったと推察される。この時期の草本植生は、帯同様にイネ科を中心にアカザ科－ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属などの雑草類が多く生育していたことが推測される。またアカザ科－ヒユ科やヨモギ属に突出した出現が認められ、上記と同様のことが考えられるが、これについてはさらに検討が必要であろう。

なお多産しているイネ科花粉について、その表面形態からいわゆるイネの花粉が含まれている可能性があり、稲作が行われていた可能性が考えられる。試料採取地点は大倉幕府跡であることからこの地点での稲作は考え難く、幕府跡周辺の稲作地より流水や風などで運ばれてきたと推測されよう。また花粉帯Ⅱにおいてソバ属が多くの試料より得られており、これについてもイネと同様のことが考えられよう。

【引用文献は第6章末に一括した】

第５章　第３地点の調査

１．１面

本調査地点の地表高は約13.60mで、北隣の第２地点と変わらない。表土を50cmほど掘り下げた辺りから中世遺物を含んだ包含層があらわれる（北壁土層番号１・２）。その直下から１面の基盤を成す大小の泥岩のつまった地行層（暗茶褐色粘質土、土層番号６・８・10）が検出された。標高は約12.80m前後で起伏が激しく、泥岩自体も不整形で積み増しされた箇所も認められる。また調査区中央部には土師器を中心とした遺物が集中して出土した。これらは地行層から掘り込まれた溝状の落ち込み、または窪地の充填土（土層番号３・７）中に含まれている。土師器の遺存状況は良く、物原のような投棄場を想起させるが、第２地点の焼成遺構のような、破片が炭化物と混在する状況とは異なる。１面下層（約12.45m）には若干の炭が検出され、その直下に新たな地行層が拡がっているのを確認した。

１面出土遺物（図116）

土師器皿Ｒ種小型（２～19）・土師器皿Ｒ種中型（20～25）・土師器皿Ｒ種大型（26～37）・不明土製品（38）・土製品脚（39）・瓦器火鉢（40・41）・瀬戸水注（42）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（43・44）・鉄釘（45）・砥石中砥（46）・磨耗陶片（47）

採集遺物（図116）

鉄釘（１）

２．第２地点との関係

本調査区の１面と第２地点の１面は次の点で共通している。まず検出高がほぼ同一であること、また面の構築土が大小の泥岩を主体としていることである。第２地点のような強固な版築面は本調査区ではみつかっていないが、第２地点も全域で強固だったわけではない。また基盤層の中に暗褐色粘質土が含まれることも共通している。これらのことから第２地点で検出された１面は同一面と判断で

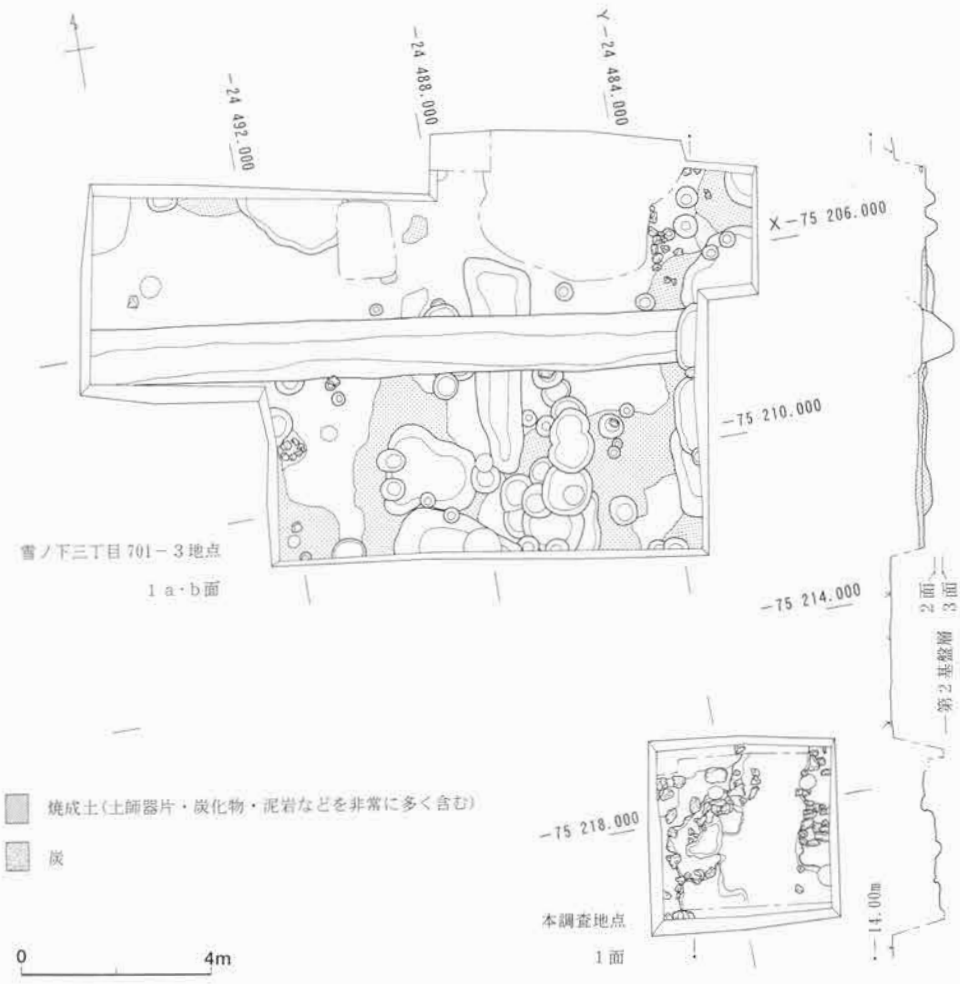
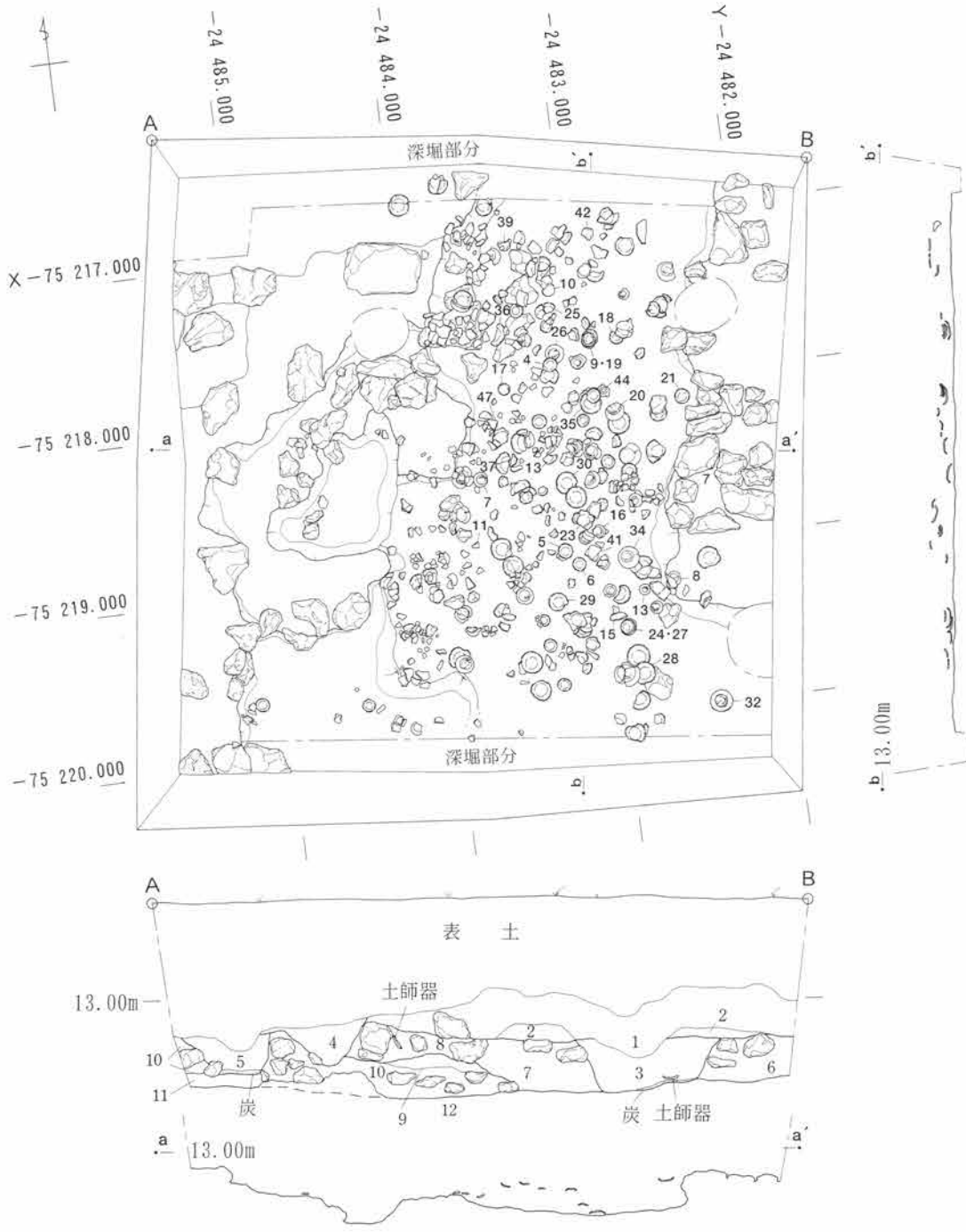


図116　第３地点遺構全図（右下）・第２地点との位置関係図



1.明茶褐色粘質土　土師器小片・泥岩粒を多く含む。炭化物が混入する。
2.茶褐色粘質土　ごく少量の土師器小片・礫・炭化物を含む。
3.灰茶褐色弱粘質土　灰砂状のものを含んだしまり弱い土。土師器片が非常に多く混入する。他、泥岩・炭化物を含む。（落込み覆土）
4.暗茶褐色粘質土　土師器片・炭化物・泥岩粒を含む。
5.暗茶褐色粘質土　4と同質。（ピット覆土）（ピット覆土）
6.暗茶褐色粘質土　泥岩（こぶし大～人頭大）が粗雑に詰まった半泥岩地行土。他に土師器片・炭化物が少し混入する。（上面1面）
7.暗茶褐色粘質土　6と同質。土師器片が多く混入する。
8.泥岩地行土　土師器片・炭化物を含む。（上面1面）
9.茶褐色粘質土　泥岩粒を多く含む。土師器片が混入する。
10.泥岩地行土
11.暗茶褐色粘質土　僅かに炭化物・土師器片を含む。
12.暗青灰色粘質土　第2基盤層か。

0　2m

図117　1面

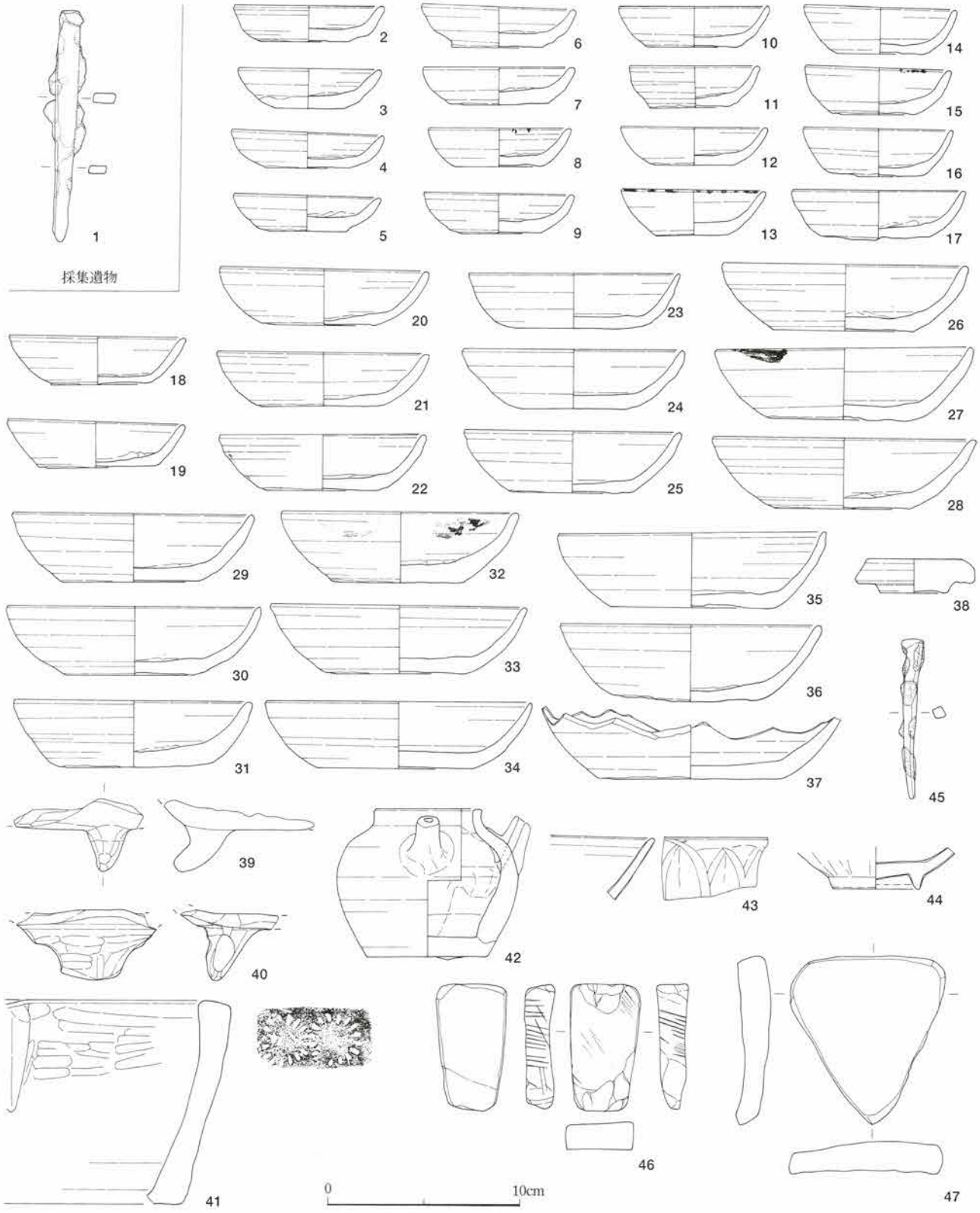


図118　1面出土遺物

きる。ただし第2地点の1面全域で検出した焼成遺構と本調査区の溝状内の遺物集中部は共通して土師器が大量に含まれているものの、検出状況からみて性格はいくらか異なる。また溝状の落込みの主軸方位はおよそN－12°－Eとなり、北へ延びていたとしても第2地点からわずかに東へ外れるだろう。また深掘りの底で確認した地行層が、第2地点の2面か3面のどちらに相当するかは断定できない。

（鍛治屋）

表8　第2地点出土遺物観察表(1)

図42 1	調査区土層中	土師器皿 R種　小型	口径6.8cm　底径4.6cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む　口縁部油煤付着　焼成良好
2		土師器皿 R種　大型	口径12.2cm　底径6.5cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・砂粒を含む　焼成良好
3		硯	残存長6.58cm　幅8.3cm　厚さ1.9cm　灰黒色　赤色頁岩
4		土師器皿 R種　大型	口径12.4cm　底径8.3cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
5		土師器皿 R種　大型	口径13.3cm　底径7.5cm　器高3.43cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・黒雲母・小石・砂粒を含む　焼成良好
6		土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径4・9cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡褐色で黒雲母を含む　焼成良好
7		土師器皿 R種　小型	口径8.2cm　底径5.0cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・砂粒を含む　焼成良好
8		不明木製品	長さ7.4cm　幅3.3cm　厚さ2.0cm　2枚一組の圭頭形やや下膨れの板状木片で、それぞれの片面下部に幅1cm前後の断面半円形の溝があり、面同士合わせると円形の穴が貫通する形になる。上部には紐か何かを通す小孔が貫通。2枚合わせたときの断面は楕円形。
図44 1	土坑1	土師器皿 R種　小型	口径7.75cm　底径4.6cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む　焼成良好
2		土師器皿 R種　大型	口径(14.0)cm　底径8.0cm　器高4.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土はたん橙色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む　焼成良好"
3	溝1	土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径5.4cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒・赤色粒子を含む　焼成良好
4		土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径4.9cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質赤色粒子を含む
5		土師器皿 R種　小型	口径(7.6)cm　底径4.9cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
6		瓦器　火鉢	口径(35.4)cm　底径(27.2)cm　胴部器高12.1cm　輪花型　輪積み成形　内外面縦方向ヘラ調整　外側に菊花文の押印　外底部砂目　器表は暗灰色　胎土は灰白色で雲母・白色粒子含む
7		瓦器　火鉢	底部片　輪積み成形　内外面縦方向ヘラ調整　脚部貼り付け　器表は暗灰色 胎土は灰白色で雲母・白色粒子・小石含む　6と同一個体か
8		瓦器　火鉢	底部片　輪積み成形　内側横ナデ　外側ヘラ磨き、二条の沈線にはさまれ連珠文貼り付け　脚部貼り付け 胎土は灰白色、砂粒・白色粒子を含む
図45 9		常滑 こね鉢Ⅱ類	口径27.7cm　底径11.8cm　器高9.9cm　輪積み成形　外面下位縦方向ヘラ削り 器表面は赤紫色　胎土は橙色で長石・石英・小石を含む　内面は磨耗　外底面に十字の線刻あり
10		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は褐色　胎土は灰色で長石・石英を含む
11		常滑　甕	肩部片　輪積み成形　外面に銭形を2個並べた押印文　降灰あり　胎土は茶褐色 胎土は橙褐色～灰褐色で長石・小石を含む
12		瀬戸 おろし皿	口縁部片　胎土は淡灰色、キメ細かい　淡緑色の灰釉ハケ塗り
13		瀬戸　平碗	口径(16.9)cm　ロクロ成形　浅黄色の灰釉漬け掛け　胎土は灰色でキメ細かい
14		瀬戸　折縁鉢	口径(16.2)cm　ロクロ成形　浅黄色の灰釉漬け掛け　胎土は灰色でキメ細かい
15		瀬戸　大平鉢	底径(12.0)cm　外底部及び外面下位回転ヘラ削り　胎土は淡灰色でキメ細かい　淡緑色の灰釉ハケ塗り
16		平　瓦	厚さ2.2cm　凸面斜目格子の叩き文　凹面は布目ナデ消し　側面ヘラ切り、ナデ 胎土は灰褐色で砂・黒雲母・小石含む
17		平　瓦	厚さ2.8cm　凸面縄目　凹面布目をナデ消し　側面ヘラ切り　胎土は灰色、小石・白色粒子含む　穿孔あり
18		景祐元寶	初鋳1034年　北宋　楷書
19		石鉢	口縁部片　最大厚3.0cm　口縁部及び内面磨耗　暗灰色
図46 1	P.21	土師器皿 R種　極小型	口径6.8cm　底径4.3cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で金雲母・赤色粒子を含む　焼成普通
2	P.190	土師器皿 R種　小型	口径3.74cm　底径2.9cm　器高0.75cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で金雲母・赤色粒子を含む
図47 1	焼成遺構1	土師器皿 R種　小型	口径6.8cm　底径4.0cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で黒色粒子・赤色粒子を含む
2		土師器皿 R種　小型	口径7.3cm　底径5.6cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・土丹粒を含む　焼成良好
3		土師器皿 R種　小型	口径(7.8)cm　底径(4.8)cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
4		土師器皿 R種　中型	口径10.7cm　底径6.2cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で黒雲母・金雲母・赤色粒子を含む
5		土師器皿 R種　極小型	口径(4.1)cm　底径(3.4)cm　器高1.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒粒・金雲母含む　焼成良好
6		常滑 こね鉢Ⅰ類	口径(31.0)cm　輪積み成形　外面縦方向ヘラナデ　口縁部・内面回転ナデ 器表面は茶褐色　胎土は暗灰色で小石を含む　降灰あり
7		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	口径(15.6)cm　ロクロ成形　外面に片切り彫りの鎬連弁文　複弁 素地は灰色　釉薬は暗灰緑色で透明
8		元豊通寶	初鋳1078年　北宋　篆書
9		砥石　中砥	残存長6.5cm　幅5.2cm　厚さ4.6cm　乳白色に橙色の斑が入る　伊予　砥面は3面　1面に刃物による傷痕

表9　第2地点出土遺物観察表(2)

図47 10	焼成遺構2	土師器皿 R種　小型	口径7.4cm　底径4.1cm　器高2.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子を含む
11		土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.7cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質含む　焼成普通
12		土師器皿 R種　小型	口径6.8cm　底径4.0cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で黒粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
13		土師器皿 R種　大型	口径12.5cm　底径7.5cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子・土丹粒を含む
14		白色系土師器 皿T種小型	口径7.2cm　底径4.2cm　器高2.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は乳白色で雲母・微砂粒を含む　焼成普通
15		白色系土師器 灯明台	胎土は乳白色で雲母・微砂粒含む　上部の受け皿の部分か
16		瓦器　火鉢	口縁部片　内面横方向ヘラナデ　胎土は淡橙色～灰白色で砂粒・白色粒子含む
17		瀬戸　入子	口縁部片　ロクロ成形　ヘラ状工具で輪花をつくる　胎土黄白色　降灰あり
18		瀬戸 おろし皿	口径(14.2)cm　ロクロ成形　胎土は灰白色で長石吹き出し　灰釉ハケ塗り　焼成良好
19	焼成遺構 1・2	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径5.5cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒粒・白色針状物質を含む
20		土師器皿 R種　小型	口径(11.8)cm　底径6.4cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で土丹粒・白色針状物質を含む
21		土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径5.4cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状・土丹粒・黒雲母を含む
22		土師器皿 R種　中型	口径7.4cm　底径5.3cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色色で白色針状物質・土丹粒を含む
23		常滑 こね鉢Ⅱ類	口径10.2cm　底径5.4cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色　焼成非常に良好
24		土師器皿 R種　小型	底径(16.6)cm　輪積み成形　外面下位ヘラ削り　内面磨耗、降灰あり　器表茶褐色 胎土暗灰色で長石を含む
25		土師器皿 R種　大型	口径7.7cm　底径5.4cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む
26		土師器皿 R種　大型	口径12.1cm　底径8.0cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・土丹粒・赤色粒子を含む
27		土師器皿 R種　大型	口径12.7cm　底径8.0cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙褐色で小石粒を含む
28		土師器皿 R種　大型	口径13.1cm　底径6.7cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で黒色粒子・赤色粒子を含む
29		土師器皿 R種　大型	口径12.9cm　底径6.9cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で黒色粒子・赤色粒子を含む
30		土師器皿 R種　小型	口径12.9cm　底径7.2cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む
31	焼成遺構3	土師器皿 R種　小型	口径7.1cm　底径4.0cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で金雲母・赤色粒子を含む
32		土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径5.0cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む
33		土師器皿 R種　小型	口径7.3cm　底径5.2cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・赤色粒子・土丹粒を含む
34		土師器皿 R種　小型	口径7.4cm　底径4.5cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む
35		土師器皿 R種　大型	口径8.0cm　底径5.8cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は茶橙色で黒雲母・土丹粒を含む　焼成良好
36		土師器皿 R種　大型	口径10.9cm　底径6.4cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で金雲母・赤色粒子を含む　焼成良好
37		土師器皿 R種　大型	口径12.7cm　底径7.7cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・赤色粒子を含む　焼成良好
38		土師器皿 R種　大型	口径12.4cm　底径8.5cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で白色針状物質・赤色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
39		土師器皿 R種　大型	口径12.5cm　底径7.3cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む
図49 1	焼成遺構 4・5上層	土師器皿 R種　大型	口径位12.8ｃｍ　口径7.0cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で金雲母・赤色粒子・黒色粒子を含む
2		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表面は暗茶褐色　胎土は灰色で長石・小石含む　降灰あり
3		丸瓦	厚さ2.2cm　凸面は丁寧なナデ消し、凹面は布目痕残る　表面は暗青灰色　胎土灰褐色で小石粒含む
4		平瓦	厚さ2.1cm　凸面は斜格子叩き目ナデ消し、凹面は布目ナデ消し　側面ヘラ切り 胎土は灰色～橙褐色で小石粒多く含む
5	同下層	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径5.5cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む　焼成良好

表10　第２地点出土遺物観察表(3)

図49 6	同下層	土師器皿 R種　大型	口径12.8cm　底径6.9cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子を含む　焼成普通
7	焼成遺構5	土師器皿 R種　小型	口径(7.5)cm　底径(5.3)cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
8		平瓦	厚さ2・2cm　凸面斜格子叩き目ナデ消し　凹面布目ナデ消し　側面ヘラ切り 胎土は灰褐色で白色粒子・小石粒含む
9	焼成遺構 4下層	土師器皿 R種　大型	口径13.4cm　底径7.5cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で赤色粒子・黒色粒子含む
10		瓦器　火鉢	口縁部片　輪花型　外面菊花文押印　器表暗灰色　胎土は橙褐色で雲母･砂粒･白色粒子･赤色粒子含む
11		瓦器　火鉢	口縁部片　輪花型　外面菊花文押印　器表暗灰色　胎土は橙褐色で雲母･砂粒･白色粒子･赤色粒子含む
12		瀬戸　瓶子	底径11.3cm　輪積み成形　胎土は淡褐色　灰釉漬け掛け　内面に指頭痕、降灰あり
13		砥石　中砥	残存長4.5cm　幅4.0cm　厚さ4.2m　淡橙褐色　伊予　砥面は4面　表面は火を受けて黒ずむ
14		砥石　中砥	残存長9.1cm　幅3.7cm　厚さ4.3cm　淡橙褐色　伊予　砥面は4面　表面は火を受けて黒ずむ
15		砥石　仕上砥	残存長10.0cm　幅3.4cm　厚さ1.3cm　乳白色に橙色の斑が入る　鳴滝 砥面は２面　側面に切り出し痕　部分的に火を受け黒ずむ
図50 1	焼成遺構6	土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径5.3cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で土丹粒・白色針状物質・黒雲母を含む　焼成良好
2		土師器皿 R種　小型	口径(7.7cm　底径4.7cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・土丹粒を含む　焼成良好　口縁部に油煤付着
3		土師器皿 R種　大型	口径12.8cm　底径7.5cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子を含む　焼成非常に良好
4	P.10・11	土師器皿 R種　小型	口径7.3cm　底径3.8cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子を含む　焼成良好
5		土師器皿 R種　大型	口径12.0cm　底径5.5cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部外周ナデ 胎土は橙白色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む　焼成良好
6		土師器皿 転用品	径4.8～3.2cm　厚さ0.4cm　土師器皿R種底部を円盤状に加工　ロクロ成形　内面ナデ　穿孔２あり 胎土は橙色で白色針状物質・赤色粒子を含む　焼成良好
図51 1	焼成遺構7	土師器皿 R種　小型	口径6.9cm　底径4.2cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
2		土師器皿 R種　小型	口径7.1cm　底径4.3cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で赤色粒子を含む　焼成良好
3		土師器皿 R種　小型	口径7.0cm　底径4.4cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は肌色で赤色粒子を含む　焼成良好
4		土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.7cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・土丹粒・白色針状物質・赤色粒子を含む　焼成非常に良好
5		土師器皿 R種　中型	口径11.1cm　底径6.5cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で赤色粒子含む
6		土師器皿 R種　大型	口径12.8cm　底径7.5cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で赤色粒子・石英・金雲母・小石を含む　焼成良好
7		土師器皿 R種　極大型	底径(9.6)cm　回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は肌色で黒雲母・金雲母・石英・黒色粒子・赤色粒子を含む
8	焼成遺構8	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径4.8cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母を含む　焼成良好
9		土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径4.6cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で石英・赤色粒子を含む　焼成良好
10		土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.5cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
11		土師器皿 R種　小型	口径(7.6)cm　底径(5.1)cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・土丹粒を含む　焼成良好
12		土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.4cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む　焼成良好
13		土師器皿 R種　大型	口径(10.6)cm　底径(6.0)cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
14		土師器皿 R種　大型	口径12.2cm　底径8.5cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
15		土師器皿 R種　大型	口径12.6cm　底径7.0cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で白色針状物質・土丹粒を含む
16		土師器皿 R種　大型	口径13.6cm　底径8.6cm　器高3.3cm　ロクロ　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で赤色粒子を含む
17		土師器皿 R種　極大型	口径15.9cm　底径8.5cm　器高4.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・石英・赤色粒子・黒色粒子を含む　焼成良好
18		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　回転ナデ 器表面は暗褐色　胎土は暗灰色で礫片を含む
図52 1	1a面	土師器皿 R種　小型	口径7.4cm　底径4.4cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で砂粒・白色針状物質・土丹粒含む　焼成良好

表11　第２地点出土遺物観察表(4)

図52 2	1a面	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.4cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質・黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成普通
3		土師器皿 R種　小型	口径8.0cm　底径5.5cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は赤橙色で砂粒・雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む　焼成普通
4		土師器皿 R種　小型	口径(9.0)cm　底径5.3cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
5		土師器皿 R種　中型	口径(10.4)cm　底径3.1cm　器高6.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・砂粒を含む　焼成良好
6		土師器皿 R種　中型	口径11.2cm　底径6.0cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
7		土師器皿 R種　大型	口径12.4cm　底径6.9cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒子・赤色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
8		土師器皿 R種　大型	口径13.0cm　底径8.2cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は赤橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
9		土師器皿 R種　大型	口径13.4cm　底径8.0cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
10		土師器皿 R種　大型	口径(14.7)cm　底径(8.0)cm　器高4.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で金雲母・雲母・白色針状物質・黒色粒子・赤色粒子・砂粒を含む　焼成良好
11		土師器皿 R種極小型	口径7.6cm　底径4.9cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は赤橙色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む　焼成普通
12		土師器皿 R種　極大型	底径(10.4)cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で黒雲母・雲母・赤色粒子・砂粒を含む　焼成良好
13		土製品　脚	脚部か　内・外側に指頭痕　胎土は淡橙色で雲母を非常に多く含む　石英含む
14		瓦器　火鉢	胴部片 内側横ナデおよび指頭痕 外側ヘラ磨き 二条の沈線にはさまれた菊花文の下に連珠文貼り付け 胎土灰桃色
15		平瓦	厚さ1.6cm　凸面斜目格子の叩き文　縄目をナデ消し　胎土橙灰色～灰色
16		硯	長11・6cm　幅6.73cm　厚さ1.5cm　灰黒色　粘板岩
17		元豊通宝	初鋳1078年　北宋　行書
18	土師器 地行面	土師器皿 R種　小型	口径(7.5)cm　底径5.0cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む　焼成良好
19		常滑捏鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　外表面赤褐色　胎土は暗褐色で長石・小石を含む
20		常滑捏鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　外表面及び胎土は暗褐色～暗茶褐色で長石を含む
21		常滑捏鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　器表は赤褐色　胎土は暗褐色で長石を含む
22		砥石　中砥	残存長7.5cm　幅5.0cm　高4.8cm　灰橙色　天草　砥面４面
23	焼土	土師器皿 R種　小型	口径8.0cm　底径5.4cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は黄土色で黒雲母・黒色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
24		土師器皿 R種　大型	口径12.0cm　底径8.5cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は黄土色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒含む　焼成良好
25		鍔鍋	口縁部内外面横ナデ　胎土灰色　器表は肌色　長石・金雲母・赤色粒子含む　焼成良好
26	1b面	土師器皿 R種　小型	口径(6.8)cm　底径4.2cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む　焼成良好
27		土師器皿 R種　小型	口径6.8cm　底径5.0cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で金雲母・黒雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
28		土師器皿 R種　小型	口径6.8cm　底径4.8cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・赤色粒子を含む
29		土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径4.1cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で砂粒・赤色粒子を含む　焼成良好
30		土師器皿 R種　小型	口径7.1cm　底径4.4cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で雲母・砂粒・赤色粒子を含む　焼成良好
31		土師器皿 R種　小型	口径7.1cm　底径4.4cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・砂粒・赤色粒子を含む
32		土師器皿 R種　小型	口径7.1cm　底径4.7cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・白色粒子・砂粒・赤色粒子を含む
33		土師器皿 R種　小型	口径7.0cm　底径5.0cm　器高1.7cm　ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・白色粒子・砂粒・赤色粒子を含む
34		土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径5.0cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で雲母・白色粒子・砂粒・赤色粒子を含む　焼成良好
35		土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径4.6cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で砂粒・黒雲母・雲母・白色粒子を含む
36		土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径6.1cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む　焼成良好
37		土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径5.9cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
38		土師器皿 R種　小型	口径(8.8)cm　底径5.7cm　器高2.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で雲母・砂粒・赤色粒子を含む　焼成良好

表12　第２地点出土遺物観察表(5)

図52 39	1b面	土師器皿 R種　中型	口径10.6cm　底径6.2cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・金雲母・赤色粒子を含む　焼成良好
40		土師器皿 R種　中型	口径10.8cm　底径6.1cm　器高2.8cm　ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子・白色粒子を含む　焼成良好
41		土師器皿 R種　大型	口径(11.2)cm　底径5.4cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・白色粒子・赤色粒子を含む
42		土師器皿 R種　大型	口径11.5cm　底径8.0cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で雲母・黒雲母・白色針状物質・土丹粒・赤色粒子を含む　焼成良好
43		土師器皿 R種　大型	口径12.0cm　底径8.0cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で雲母・黒雲母・砂粒・赤色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
44		土師器皿 R種　大型	口径12.4cm　底径8.3cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で赤色粒子・白色粒子含む　焼成良好
45		土師器皿 R種　大型	口径12.9cm　底径6.9cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・白色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
46		土師器皿 R種　極大型	底径10.00cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で雲母・砂粒・赤色粒子を含む　焼成良好
47		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表面茶褐色　胎土は灰黒色で長石・石英を含む　降灰あり
48		骨製品	残存長6・8cm　幅1.8cm　厚さ0.3cm　一端に0.2cmの穿孔二箇所 表は0.6cm～0.7cm幅の削りが等間隔で施される　裏面は横方向の粗い削り痕あり　装身具か
図53 1	P. 8	硯	残存長10.96cm　残存幅8.3cm　最大厚1.8cm　灰黒色　粘板岩
2	P. 20	常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　口縁部ナデ 器表面暗褐色　胎土は灰黒色で長石・小石片含む
3	P. 177	土師器皿 R種　小型	口径6.8cm　口径4.3cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子を含む　焼成良好
4		瀬戸 おろし皿	口径(15.0)cm　底径(6.9)cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り 胎土は淡橙色、キメ細かい　浅黄色の灰釉ハケ塗り
5	土坑2	皇宋通寶	初鋳1038年　北宋　楷書
6	土坑3	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.2cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む　焼成非常に良好
7		土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径4.4cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で赤色粒子を含む　焼成良好
8		土師器皿 R種　大型	口径12.8cm　底径8.4cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙褐色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む　焼成良好
9		砥石　仕上砥	長さ4.7cm　幅3.3cm　厚さ1.2cm　肌色　鳴滝　砥面は2面　側面に切り出し痕
図55 1	基壇状 遺構1	土師器皿 R種　大型	口径11.1cm　底径7.0cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・赤色粒子・白色粒子を含む　焼成良好
2		土師器皿 R種　大型	口径11.7cm　底径6.8cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で赤色粒子・砂粒・雲母・白色針状物質を含む　焼成普通
3		土師器皿 R種　大型	口径12.9cm　底径8.1cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・雲母・白色針状物質・赤色粒子小石を含む
4	溝2	土師器皿 R種　小型	口径7.0cm　底径4.6cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は肌色で金雲母・赤色粒子・微砂を含み、精良　焼成良好　口縁部に油煤付着
5		土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径4.9cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子・土丹粒を含む
6		土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.8cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は黄土色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む
7		土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.○cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・微砂を含む　焼成良好
8		土師器皿 R種　小型	口径8.1cm　底径5.0cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・土丹粒・砂粒を含む　焼成普通
9		土師器皿 R種　中型	口径10.8cm　底径7.0cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で雲母・赤色粒子・砂粒を含む　焼成良好
10		鍔鍋	口縁部内外面横ナデ　胎土灰色　器表は肌色　長石・金雲母・赤色粒子含む　焼成良好　表2－25と同一個体と思われる
11		瀬戸こね鉢	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色で大き目の長石粒含む　内側に深緑色の自然釉が掛かる
12		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　内外面横ナデ　器表は暗褐色　胎土は暗灰褐色　長石含む
13		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　降灰あり　器表茶褐色　胎土は暗灰色で小石を含む
14		白磁皿	口径(9.7)cm　底径(7.3)cm　残高3.0cm　ロクロ成形　外面下位ヘラ削り、露胎 素地は灰白色で黒色粒子をやや多く含む　釉薬は青白色透明
図56 15	溝2裏込め	亀山系 軟質陶器	甕の胴部か　外面格子叩き目　内面ハケ目ナデ　器表は淡橙色　胎芯は黒灰色で雲母・礫含む
16		平瓦	厚さ2.1cm　凸面斜縄目ナデ消し　凹面布目粗いナデ消し　胎土は青灰色で小石粒含む
図57 1	炭層	土師器皿 R種　中型	口径(10.4)cm　底径(6.1)cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子を含む　焼成良好

表13　第２地点出土遺物観察表(6)

図57 2	炭層	瀬戸　瓶子	口縁部片　胎土は明灰色、緻密　口縁部及び外面は露胎、内面に灰緑色の釉が掛かる
3		砥石　中砥	残存長5.2cm　幅3.9cm　厚さ1.2cm　暗灰色～橙灰色　天草　砥面は4面
4	2a面	土師器皿 R種　小型	口径6.7cm　底径4.6cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母含む　焼成良好
5		土師器皿 R種　小型	口径7.1cm　底径5.0cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡赤褐色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む　焼成普通
6		土師器皿 R種　小型	口径7.3cm　底径5.4cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で雲母・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子・砂粒・土丹粒を含む　焼成普通
7		土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径4.4cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・黒色粒子・赤色粒子・土丹粒・砂粒を含む　焼成良好
8		土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径4.9cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は赤橙色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む　焼成普通
9		土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径4.8cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・赤色粒子・砂粒を含む　焼成良好
10		土師器皿 R種　小型	口径8.5cm　底径5.3cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で雲母・白色針状物質・赤色粒子・砂粒・土丹粒を含む　焼成良好
11		土師器皿 R種　小型	口径6.5cm　底径4.0cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母を含む　焼成良好
12		土師器皿 R種　小型	口径6.9cm　底径4.4cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で赤色粒子・黒色粒子を含む　口縁部油煤付着　焼成良好
13		土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径4.7cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で赤色粒子・砂粒を含む　口縁部油煤付着　焼成良好
14		土師器皿 R種　小型	口径8.2cm　底径6.3cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・砂粒を含む　焼成良好
15		土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.4cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・雲母・白色針状物質・赤色粒子・砂粒を含む　焼成良好
16		土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径5.2m　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を僅かに含む　焼成良好
17		土師器皿 R種　中型	口径10.4cm　底径6.5cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
18		土師器皿 R種　中型	口径10.1cm　底径6.7cm　器高2.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で赤色粒子・雲母・白色針状物質・黒色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
19		土師器皿 R種　中型	口径10.6cm　底径6.6cm　器高2.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む　焼成良好
20		土師器皿 R種　中型	口径(11.0)cm　底径6.0cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で金雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好　口縁部を磨り、その後灯明皿に使用
21		土師器皿 R種　中型	口径10.6cm　底径6.7cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状物質・赤色粒子含む　焼成良好
22		土師器皿 R種　大型	口径11.0cm　底径5.8cm　器高2.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
23		土師器皿 R種　大型	口径11.6cm　底径7.6cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質含む　焼成良好
24		土師器皿 R種　大型	口径12.7cm　底径6.7cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
25		土師器皿 R種　大型	口径12.0cm　底径7.1cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
26		土師器皿 R種　大型	口径12.6cm　底径7.9cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・雲母・赤色粒子・砂粒を含む　焼成良好
27		土師器皿 R種　大型	口径12.9cm　底径7.9cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・白色粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
28		土師器皿 R種　大型	口径12.9cm　底径7.1cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・白色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
29		土師器皿 R種　大型	口径12.9cm　底径7.7cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母を含む　焼成良好
30		土師器皿 R種　大型	口径12.9cm　底径6.9cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で金雲母・白色粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む　焼成良好
31		土師器皿 R種　大型	口径13.6cm　底径8.0cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子を含む　焼成非常に良好
32		鍔鍋	口縁部片　ロクロ成形　横ナデ　器表は乳白色 胎芯は暗灰色　多量の粗い砂粒・黒雲母・金雲母・赤色粒子を含む
33		土器　火鉢	口径(34.3)cm　底径(24.8)cm　器高9.1cm　輪積み成形　内外面ヘラ調整　外面下位縦方向ナデ、指頭痕 胎土は褐色で雲母・白色粒子・赤色粒子・白色針状物質・砂粒・礫含む
34		瓦器　火鉢	底径(39.8)cm　胴部器高11.2cm　輪花型　輪積み成形　内面ヘラ調整、指頭痕　外面は磨き後菊花文押印 外底部に脚部の貼り付け痕あり　器表は暗灰色　胎芯は橙灰色で黒雲母・白色粒子・赤色粒子・砂粒含む

表14　第２地点出土遺物観察表(7)

図57 35		瓦器　火鉢	口縁部片　輪花型　輪積みロクロ成形　内面ヘラナデ、指頭痕　外側に菊花文の押印 器表は灰橙色　胎芯は灰色で黒雲母・雲母・白色粒子・赤色粒子・砂粒含む
36		瓦器　火鉢	口縁部～胴部片　輪花型　輪積みロクロ成形　内面横方向調整痕及び磨き　外面は菊花文の押印 胎土は灰橙色で雲母・白色粒子・赤色粒子・砂粒含む　口縁部下に径0.4～0.5cmの穿孔貫通
37		瓦器　火鉢	口縁部片　輪花型　輪積み成形　内外面ヘラ調整、磨き　外側に菊花文の押印 器表は暗灰色　胎土は橙褐色で雲母・白色粒子・赤色粒子・砂粒含む
38		瓦器　火鉢	胴部片　輪積み成形　内面ヘラ調整　外側に五弁の桜花文の押印 器表は研磨、黒色処理　胎土は灰白色精良で微量の雲母・白色粒子含む
39		常滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ方向ヘラ削り 胎土は灰色で長石・砂粒を含む
40		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　降灰あり 器表面は茶褐色　胎土は暗褐色で長石を含む
41		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形 器表面は暗橙色　胎土は暗橙色～茶褐色で長石含む
42		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形 器表面は茶褐色　胎芯は黒褐色で長石・石英を含む
43		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　内面ヘラ調整及び横ナデ　外面横ナデ 器表面は茶褐色　胎土は暗褐色で長石・石英を含む
図58 44		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表面は赤褐色　胎芯は灰黒色で長石・石英を含む　降灰あり
45	2 a面	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表面は褐色　胎芯は暗灰色で長石・石英
46		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　降灰あり　器表面は茶褐色　胎芯は灰色で長石・石英を含む
47		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表面は褐色　胎芯は灰色で長石・石英を含む
48		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表面は褐色　胎芯は暗灰色～赤橙色で多量の長石・石英を含む
49		常滑　甕	形部片　輪積み成形　外面に銭形二個を横に並べた押印あり 器表面は褐色　胎芯は橙色～茶褐色で長石・石英を含む　表5.11と同一個体か
50		丸瓦	厚さ2・1cm　凸面ヘラあて　凹面布目　胎土は灰黒色で長石多く含む
51		瀬戸　入子	口径2.8cm　底径1.9cm　器高0.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　ヘラ状工具で輪花をつくる 口縁部灰釉　胎土灰白色
52		瀬戸　入子	口径3.6cm　底径2.5cm　器高1.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　ヘラ状工具で輪花をつくる 口縁部灰釉　胎土乳白色　外底面に墨付着
53		瀬戸　入子	口縁部片　ロクロ成形　ヘラ状工具で輪花をつくる　内面に赤色顔料付着　胎土茶灰色
54		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	口径(15.6)cm　ロクロ成形　外面に片切り彫りの鎬連弁文　複弁 素地は灰白色、緻密　釉薬は灰緑色で不透明
55		熙寧元寶	初鋳1068年　北宋　篆書
56		聖宋元寶	初鋳1101年　北宋　篆書
57		元豊通寶	初鋳1078年　北宋　篆書
58		皇宋通寶	初鋳1038年　北宋　楷書
59		紹聖元寶	初鋳1094年　北宋　篆書
60		聖宋元寶	初鋳1101年　北宋　篆書
61		大観通宝	初鋳1107年　北宋　楷書
62		砥石　仕上砥	残存長7.8cm　幅3.1cm　残存厚0.6cm　乳白色に橙色の斑　鳴滝　砥面1面残存　側面切り出し痕
図61 1		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表面は暗茶褐色　胎土は暗灰色で長石・小石を含む　降灰あり
2		土師器皿 R種　小型	口径(7.7)cm　底径(5.1)cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む　焼成良好
3	建物1	不明銅製品	外径5.1cm　内径3.1cm　厚さ0.35cm　平たい円環状で外周裏側に縁が付く　兜の座金か
4		土師器皿 R種　小型	口径8.1cm　底径5.7cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・土丹粒・白色針状物質を含む
5		土師器皿 R種　大型	口径11.6cm　底径7.2cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・赤色粒子えお含む　焼成良好
6	建物２	常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形 器表は茶褐色～暗橙色　胎土は暗褐色で長石・石英を含む　口縁部に降灰
7	P．35	淳熙元寶	初鋳1174年　南宋　楷書　背文、十一
8	P．202	土師器皿 R種　小型	口径7.0cm　底径4.8cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で黒雲母・赤色粒子・白色針状物質・黒色粒子を含む　焼成良好
9	土坑６	土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径4.7cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・赤色粒子を含む　焼成良好
10		土師器皿 R種　大型	口径(15.4)cm　底径9.0cm　器径(4.7)cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・白色粒子・赤色粒子を含む　二次焼成あり
11		土師器皿 R種　極小型	口径4.1cm　底径3.4cm　器高0.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子を含む　焼成良好
12		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形 器表は茶褐色　胎土は灰褐色で長石を含む
13	土坑９	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　降灰あり　器表は暗褐色　胎土は灰黒色で長石を含む
14		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は暗赤紫色　胎土は灰色で長石を含む

表15　第２地点出土遺物観察表(8)

図62 1	溝４	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径4.8cm　器高1.9cm　ロクロ　底部糸切り　口縁部油煤付着 胎土は橙色で黒雲母を含む　焼成普通
2		土師器皿 R種　小型	口径7.3cm　底径4.3cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰褐色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
3		土師器皿 R種　大型	口径11.8cm　底径6.9cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む
4		土師器皿 R種　大型	口径12.6cm　底径7.4cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・多量の白色針状物質を含む　焼成普通
5		土師器皿 R種　大型	口径13.4cm　底径7.0cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は肌色で金雲母・黒雲母・白色粒子・赤色粒子・微砂粒を含む　焼成良好
6	溝３	泉州窯 黄釉盤	口縁部片　輪積み成形　釉薬は黄褐色で表面に白濁した松灰らしき自然釉がかかる　口縁部の釉は剥落 胎土は黄灰色で強粘質
7	P.79	土師器皿 R種　小型	口径7.0cm　底径5.0cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は肌色で金雲母・赤色粒子・黒色粒子を含む　焼成良好
8		土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径5.3cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む
9		土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径4.5cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む　焼成良好
10		土師器皿 R種　小型	口径7.6cm径4.3cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒を含む　焼成良好
11		土師器皿 R種　大型	口径11.8cm　底径7.2cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・土丹粒・赤色粒子を含む　焼成良好　口縁部に油煤付着
12		土師器皿 R種　大型	口径12.3cm　底径8.5cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒色粒子・白色針状物質・土丹粒を含む
13		土師器皿 R種　大型	口径13.7cm　底径7.0cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙白色で金雲母・赤色粒子をふくむ
図63 1	柱穴列１	鍔鍋	鍔部外径(24.3)cm　内面及び鍔以上の外面横ナデ　胴部外面ささら状工具による掻きナデ 胎土は黄白色、胎芯は暗灰色で金雲母・赤色粒子・砂粒を含む
図65 1	３面	土師器皿 R種　小型	口径(6.6)cm　底径(4.8)cm　器高1.8cm　回転ロクロ　底部糸切り 胎土は淡橙色～赤橙色で黒雲母・白色針状物質・砂粒を含む　焼成普通
2		土師器皿 R種　小型	口径7.0cm　底径5.0cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質・砂粒を含む　焼成良好
3		土師器皿 R種　小型	口径7.68cm　底径5.7cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶灰色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
4		土師器皿 R種　小型	口径(7.6)cm　底径(4.8)cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成普通
5		土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径4.5cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰橙色で黒雲母を含む　焼成良好
6		土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径4.9cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質・小礫を含む　焼成良好
7		土師器皿 R種　大型	口径12.1cm　底径8.3cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰橙色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
8		土師器皿 R種　大型	口径(13.1)cm　底径7.2cm　器高3.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
9		土器　火鉢	口縁部～胴部片　輪積みロクロ成形　内外面ヘラ調整 器表は橙色　胎芯は暗灰色で黒雲母・白色針状物質・砂粒含む
10		渥美　こね鉢	口縁部片　輪積み成形　内外面横ナデ　内面磨耗　胎土は灰褐色で長石・石英を含む　焼成良好
11		常滑 こね鉢Ⅰ類	口径19.7cm　底径12.1cm　器高(6.8)cm　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ　内面磨耗 胎土は灰色で長石・石英を含む　焼成良好　高台きれいに剥がれている
12		常滑 こね鉢Ⅱ類	口径(35.0)cm　輪積み成形　内面と口縁部外側横ナデ　外面縦ヘラ削り及び指頭痕 器表面は褐色　胎芯は暗灰色で長石・石英を含む　内面自然釉
13		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は褐色　胎芯は暗灰色で長石・石英・気泡を含む
14		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表面は褐色　胎芯は灰色で長石・石英を含む
15		瀬戸　入子	口径(4.4)cm　底径(3.4)cm　器高1.3cm　ロクロ成形　外底面ヘラ調整　降灰あり 胎土黄白色　長石含む　焼成良好
16		砥石　仕上砥	残存長3.3cm　幅3.4cm　残存厚1.0cm　乳白色　鳴滝　砥面２面　側面切り出し痕
17		硯	残存長6.6cm　残存幅4.9cm　厚1・6cm　方形硯の角を斜めに落とす　表裏両面から使用　墨付着 青みを帯びた黒灰色　粘板岩　海部深さ0.3cm　陸部深さ0.1cm
18		漆器　皿	口径(10.0)cm　底径7.2cm　器高1.3cm　内外面とも黒漆地に朱漆の手描きで木の葉と波の構成文　無高台
19		曲物　底板	遺存長34.1cm　遺存幅10.8cm　厚さ0.6cm　側面に釘穴２箇所　柾目材使用
図67 1	溝５	土師器皿 R種　大型	口径12.0cm　底径7.5cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で赤色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
2	落込み １・３	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径5.5cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡灰褐色で赤色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
3		土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径6.5cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は赤橙色で白色針状物質・小石粒を含む　焼成良好

表16　第２地点出土遺物観察表(9)

図67 4	落込み 1・3	不明木製品	最大径4.0cm　厚さ0.5cm　板目材　輪郭は五弁の花型　上面は五角形　中央に小穴貫通
図68 1	落込み２	土師器皿 R種　小型	口径(6.6)cm　底径径(4.2)cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で赤色粒子・小石粒を含む　焼成普通
2		土師器皿 R種　小型	口径7.4cm　底径5.2cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰褐色で土丹粒・白色針状物質を含む　焼成良好　口縁部に油煤付着
3		土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径4.6cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で土丹粒を含む　焼成良好
4		土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.5cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り 胎土は淡灰褐色で赤色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
5		土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.6cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰褐色で白色針状物質・赤色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
図68 6		土師器皿 R種　中型	口径10.3cm　底径5.7cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で赤色粒子を含む　焼成良好　口縁部に油煤付着
7		土師器皿 R種　中型	口径10.8cm　底径7・0cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰褐色で黒色粒子を含む
8		土師器皿 R種　大型	口径12.1cm　底径7.7cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・赤色粒子を含む　焼成非常に良好
9		土師器皿 R種　大型	口径12.5cm　底径7.6cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・赤色粒子・土丹粒を含む
10		常滑 こね鉢Ⅰ類	口径(29.4)cm　輪積みロクロ成形 胎土は灰色で長石・石英・小石を含む　内面二次被焼
11		常滑　甕	胴部片　輪積み成形　表面は灰褐色　胎芯は暗褐色で多量の長石・石英を含む　外面肩部下に格子叩き目
12		瀬戸 天目茶碗	口径(12.0)cm　ロクロ成形　内面及び外面胴下部まで黒色鉄釉漬け掛け　口縁部茶色　露胎部分は赤褐色を呈す　胎土は灰褐色で黒色、白色粒子を含む　内面と断面の一部に黒漆付着
13		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	口縁部片　ロクロ成形　複弁 素地は灰白色　釉薬は淡灰緑色で不透明
14	落込み２	漆器　皿	口径9.5cm　底径7.5cm　器高1.1cm　内外面とも黒漆塗り　内面朱漆による手描き文　文様不明　無高台
15		漆器　皿	口径(9.4)cm　底径〔6.6〕cm　器高0.6cm　器形は潰れている　内外面とも黒漆塗り　内面に朱漆のスタンプによる植物文(笹か)　無高台
16		漆器　皿	口径(9.8)cm　底径(6.6)cm　器高1.0cm　内面朱漆(錆色)塗り　外面黒漆塗り　無文　無高台
17		漆器　椀	口径10.0cm　底径6.1cm　器高3.5cm　内外面とも黒漆塗りに朱漆のスタンプによる植物文　輪高台
図69 18		折敷	長さ28.5cm　残存幅12.0cm　厚さ0.8cm　粗い木目の柾目材　角を落とす 片面に不規則な傷と炭化部分があり、俎板としての使用がうかがわれる
19		円盤型木製品	径8.8cm　厚さ0.4cm　中央付近に２孔貫通　柾目材　容器の蓋か
20		不明木製品	残存長12.3cm　残存幅1.5cm　厚さ0.9cm　曲げ物底板の一部か　側面に１孔貫通
21		箸状木製品	長さ22.7cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
22		箸状木製品	長20.2cm　残存幅0.7cm　厚さ0.6cm　片口
23		草履　芯	長さ23.9cm　残存幅10.0cm　厚さ0.4cm　植物圧痕残る
24		草履　芯	長23.2cm　残存幅5.3cm　厚さ0.15cm
25		不明部材	長さ15.7cm　幅3.3cm　厚さ3.6cm　両端に釘穴上の小孔2穴貫通
26		不明部材	長さ15.8cm　幅2.7cm　厚さ3.7cm　両端に釘穴上の小孔2穴貫通
図70 1	落込み４	土師器皿 R種　小型	口径8.1cm　底径5.2cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は茶褐色で白色針状物質・黒色粒子・土丹粒を含む　焼成非常に良好
2		土師器皿 R種　小型	口径8.0cm　底径5.4cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡灰褐色で白色針状物質・黒色粒子・黒雲母を含む　焼成良好
3		土師器皿 R種　小型	口径8.1cm　底径5.5cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は黄灰色で黒色粒子を含む　焼成良好
4		土師器皿 R種　大型	口径11.0cm　底径5.8cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で赤色、黒色粒子を含む　外底部に墨書
5		土師器皿 R種　大型	口径11.3cm　底径6.8cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・小石粒を含む
6		土師器皿 R種　大型	口径12.3cm　底径7.4cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は茶褐色で白色針状物質・土丹粒を含む
7		土師器皿 R種　大型	口径12.2cm　底径7.7cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は茶褐色で白色針状物質・赤色粒子・土丹粒を含む　焼成良好
8		土師器皿 R種　大型	口径812.7)cm　底径8.0cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で赤色、黒色粒子を含む
9		白色系土師器 皿T種小型	口径(9.4)cm　手づくね後口縁部ナデ 胎土は乳白色で緻密　焼成良好
10		瀬戸　入子	口径(9.6)cm　底径5.2cm　器高3.4cm　ロクロ成形　底部糸切り　内底部ナデ 胎土黄橙色　小石含む　二次被焼　外底に油煤状の付着物
11		緑釉　盤	口縁部片　輪積みロクロ成形　口縁部玉縁状　緑釉漬け掛け　外側は銀化 胎土は灰黄色で長石を含む　粘性あり
12		平瓦	厚さ2.1cm　凸面は縄目斜格子　凹面は布目ナデ消し　側面ヘラ切り　胎土は暗青灰色で小石粒含む

表17　第２地点出土遺物観察表(10)

図70 13	落込み４	円盤型木製品	径10.4cm　厚さ0.8cm　柾目材　小型曲物の底板か
図71 14		折敷	長さ18.7cm　幅18.3cm　厚さ0.2cm　経木　四隅を直線的に落とす　三辺の中央に0.15～0.3cmの小孔
15		箸状木製品	長さ18.6cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
16		箸状木製品	長さ20.2cm　幅0.6cm　厚さ0.3cm　両口
17		箸状木製品	長さ20.5cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　片口
18		箸状木製品	長さ21.7cm　幅0.8cm　厚さ0.5cm　両口
19		箸状木製品	長さ22.3cm　幅0.8cm　厚さ0.6cm　両口
20		串状木製品	長さ18.5cm　幅1.0cm　厚さ0.6cm　先端部炭化
21		不明木製品	長さ21.6cm　幅2.3cm　厚さ0.52cm　柾目材　表面に斜格子のケビキ状の傷あり　曲物を転用した刀子形か
22		草　履芯	長さ23.7cm　残存幅5.3cm　厚さ0.15cm
図71 23	落込み５	慶元通寶	初鋳1195年　南宋　楷書　背文、二
24		箸状木製品	長さ15.1cm　幅0.7cm　厚さ0.3cm　片口
25		箸状木製品	長さ20.8cm　幅0.5cm　厚さ0.6cm　両口
26		箸状木製品	長さ21.8cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　両口
27		箸状木製品	長さ26.0cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　片口
28		草　履芯	長さ20.2cm　幅0.6cm　厚さ0.3cm
図72 1	４面	土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径5.5cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色～淡橙色で黒雲母・砂粒を含む　焼成普通
2		土師器皿 R種　小型	口径(7.9)cm　底径(6.1)cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・微砂・土丹粒を含む　焼成普通
3		土師器皿 R種　大型	口径(12.3)cm　底径7.5cm　器高3.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成普通
4		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	口径(15.4)cm　ロクロ成形　複弁 素地は灰色　釉薬は灰緑色で不透明
5		双六駒	直径1.4cm　厚さ0.6cm　石製　暗茶褐色
6		漆器　皿	口径(9.2)cm　底径7.0cm　器高1.2cm　内外面とも黒漆塗り　無文　外底面は木地がでている
7		漆器　椀	底径7.6cm　内外面とも黒漆地に朱漆の手描き文　文様不明　輪高台
8		箸状木製品	長さ19.8cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
9		串状木製品	長さ23.5cm　幅1.2cm　厚さ0.8cm
10		部材	残存長7.1cm　幅4.6cm　厚さ1.8cm　ほぞ状に切り込まれる
11		部材	長さ15.7cm　幅4.8cm　厚さ1.8cm　側面半円形に抉れる　釘状の金属2箇所遺存　穴１箇所貫通
図73 1	建物５	木製 刀子鞘	残存長11.5cm　幅2.9cm　厚さ0.8cm　板目材使用 表面は面取り　裏面は平面に刃の形のくぼみを削る　二枚合わせの片身と思われる
2	柱穴列２	ヘラ状木製品	長さ25.8cm　残存幅4.8cm　厚さ0.6cm　板目材使用　草履芯転用か　両面とも植物圧痕残る
3		土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径4.9cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸きり　内底部ナデ 胎土は黄灰色　黒雲母・白色針状物質・砂粒を含む　焼成普通
図74 1	溝６	滑石鍋	口縁部片　外面にノミ状工具痕　青灰味帯びた銀色の滑石
2	土坑13	東濃型 山茶碗	口径13.6cm　底径4.6cm　器高5.3cm　ロクロ成形　内底部ナデ　外底部糸きりスノコ痕 貼り付け高台　籾殻痕あり　胎土は灰白色　外面に墨書「やたの」とあり
3		鉄釘	残存長4.1cm　残存幅0.2cm　厚さ0.45cm　重量1.6ｇ
4	土坑14	土師器皿 R種　大型	口径12.5cm　底径7.2cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は暗橙色で黒雲母・多量の白色針状物質を含む　焼成普通
5		漆器　蓋	口径7.6cm　器高1.3cm　内外面とも黒漆塗り　無文
6		箸状木製品	長さ22.4cm　幅0.7cm　厚さ0.4cm　両口
7		箸状木製品	長さ25.6cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
8		板締め染 型板	最大長3.3cm　最大幅6.5cm　厚さ0.5cm　柾目材 文様(楓)　模様を避けて0.1～0.3cmの小孔9箇所貫通
図75 1	溝７	土師器皿 R種　大型	口径(13.3)cm　底径7.5cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰褐色で黒色粒子を含む
2		東濃型 山茶碗	口径12.0cm　底径3.8cm　器高4.3cm　ロクロ成形　内底部重ね焼き痕　口縁から内面に降灰　外面に油煤痕 貼り付け高台　籾殻痕あり　胎土は灰白色で気泡含む
3		円盤状木製品	径15.2cm　厚さ1.1cm　柾目材　小型曲物の底板か
4		杓子状木製品	残存長17.8cm　残存幅3.6cm　厚さ0.6cm　板目材使用　外縁部面取り
5		草履　芯	17.8cm　幅6.3cm　厚さ0.4cm　わずかに植物圧痕残る
6	土坑12	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.8cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で赤色粒子・白色針状物質を含む　焼成普通
7		曲物	側板２枚(6.0cm×47.4cm×1.5cm　5.2cm×48.8cm×1.5cm　小孔計６箇所貫通) 底板　11.5cm×9.6cm×0.7cm　板目材　四隅を落とした方形
8		箸状木製品	長さ20.3cm　幅0.5cm　厚さ0.6cm　両口
9		草履　芯	残存長23.8cm　残存幅5.3cm　厚さ0.3cm　植物圧痕かすかに残る
10		草履　芯	残存長23.4cm　幅11.0cm　厚さ0.3cm　植物圧痕少し残る
11		草履　芯	残存長17.0cm　幅11.5cm　厚さ0.25cm

表18　第２地点出土遺物観察表(11)

図75 12	土坑12	不明木製品	長さ7.5cm　残存幅1.6cm　厚さ0.3m　板目材使用　片面に黒漆付着
13	落込み６	土師器皿 R種　大型	口径12.6cm　底径7.5cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は褐色で土丹粒・白色針状物質を含む　焼成良好
14		連歯下駄　歯	高さ6.7cm　幅(14.2)cm　最大厚2.1cm
15		棒状木製品	長18.1cm　幅1.2cm　厚さ1.05cm　削りによる調整　先端は火を受け炭化
16		箸状木製品	長20.5cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
17		箸状木製品	長23.7cm　幅0.8cm　厚さ0.6cm　両口
18	落込み８	土師器皿 R種　小型	口径7.4cm　底径5.2cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成普通
図75 1	落込み８	土師器皿 R種　大型	口径10.8cm　底径6.2cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成普通
20		不明木製品	最大径4.0cm　厚さ0.7cm　板目材　輪郭は五弁の花型　上面は五角形　中央に小穴貫通
21		花型木製品	長さ9.7cm　最大径3.3cm　丸木　中央に0.3～0.5cmの穴貫通　未成品か
22		漆塗り 棒状木製品	残存長10.3cm　幅1.2cm　厚さ1.1cm　角柱の四角を面取りし、断面は八角形をなす 側面黒漆塗り　上下面は無漆　同型部材が他に三例出土
図76 1	落込み７	土師器皿 R種　小型	口径6.6cm　底径3.5cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は橙褐色で土丹粒を含む"
2		土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径5.2cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰茶色で白色針状物質を含む　焼成普通"
3		土師器皿 R種　大型	口径11.8cm　底径6.9cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙褐色で黒粒子・赤色粒子・白色針状物質・土丹粒を含む
4		土師器皿 R種　大型	底径7.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕 胎土は淡褐色で赤色粒子・小石粒を含む　焼成良好　内底面に墨書
5		土師器皿 R種　極小型	口径(4.5)cm　底径(3.5)cm　器高1.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面中央に穿孔 胎土は橙色で黒雲母を含む　焼成良好
6		土製品　鋳型	最大厚3.7cm　胎土は黄白色小石粒含み軟質　内側は被熱
7		土器　火鉢	口縁部～胴部片　輪積みロクロ成形　器表は橙褐色　胎芯は灰褐色で黒雲母を含む　焼成良好
8		東濃型 山茶碗	口径(11.3)cm　底径(3.9)cm　器高4.6cm　右回転ロクロ　内底ナデ　重ね焼き痕　内面全体に降灰 貼り付け高台　籾殻痕あり　胎土は淡灰黄色～灰色で緻密
9		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　内面と口縁部外側横ナデ 器表面は褐色　胎芯は灰色で長石・石英・黒雲母を含む　内面自然釉
10		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　内面と口縁部外側横ナデ指頭痕 器表面は褐色　胎芯は茶灰色で長石・石英・黒雲母を含む　内面磨耗
11		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　外表面は茶褐色　胎土は灰色　降灰及び二次被焼
12		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　外表面は赤褐色　胎土は灰褐色　長石・小石含み鉄分の吹き出しあり
13		磨耗陶片	長さ10.6cm　幅5.3cm　厚さ1.0cm　常滑甕破片を使用 表面黒褐色　胎土は淡灰褐色で長石・小石含む　３辺磨耗
14		白磁口はげ皿	口径(8.8)cm　ロクロ成形　口縁部釉面取り、釉拭う　素地は灰白色で黒色微粒子を含む　釉薬は透明
15		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	口径(15.0)cm　ロクロ成形　外面に片切り彫りの鎬連弁文　複弁 素地は灰色　釉薬は灰緑色で透明
16		元祐通寶	初鋳1086年　北宋　篆書
17		漆器　皿	口径(8.5)cm　底径(6.0)cm　器高1.2cm　内外面とも黒漆塗り　光沢なし　無文　無高台
18		漆器　皿	口径(8.8)cm　底径(6.0)cm　器高1.5cm　内外面とも黒漆塗り　光沢なし　無文　無高台
19		漆器　皿	底部片　内外面とも黒漆塗り　内面に朱漆のスタンプ文(菊花)
20		漆器　皿	口径(7.4)cm　底径(4.6)cm　器高0.8cm　内外面とも黒漆塗り　内面に朱漆の手描き文(植物文　笹か) 無高台
21		漆器　皿	口径(10.4)cm　底径(6.6)cm　器高1.0cm　内外面とも黒漆塗り　内面に朱漆のスタンプ文(鶴)　無高台
図77 22		曲物　底板	径16.3cm　厚さ0.9cm　柾目材　側面に１箇所木釘残存
23		曲物　底板	径13.6cm　厚さ0.7cm　柾目材
24		曲物　底板	遺存長22.5cm　遺存幅5.3cm　厚さ1.1cm　柾目材
25		円盤型木製品	径8.9cm　厚さ0.4cm　柾目材
26		曲物　底板	径7.4cm　厚さ1.1cm　柾目材
27		曲物　底板	径27.2cm　厚さ1.2cm　柾目材
28		曲物　側板	(28.6cm×6.0cm×0.2cm　１重　合わせ目を1.2cm幅の樹皮にて綴じる)　(幅2.6cm　合わせ目を0.5cm幅の樹皮にて2箇所綴じる)　以上２枚の側板の組み合わせ　27の底板と１体の可能性有
29		曲物　側板	幅8.5cm　厚さ0.1cm　径は復元不可　三重に重ねた部分を幅0.6cmの樹皮で綴じる
30		曲物　側板	幅9.4cm　厚さ0.2cmの柾目板を２重に巡らし、重ね目を0.4cm幅の樹皮で綴じる 下位に径0.3cmの釘穴４箇所、うち１箇所に木釘残存　中位に径0.6cmの穴１箇所
31		箸状木製品	長20.5cm　幅0.8cm　厚さ0.5cm　両口
32		箸状木製品	長20.3cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
33		箸状木製品	長21.6cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
34		箸状木製品	長24.7cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
35		箸状木製品	長26.8cm　幅0.5cm　厚さ0.4cm　片口

表19　第２地点出土遺物観察表(12)

図77 36	落込み７	ヘラ状木製品	長23.5cm　幅0.8cm　厚さ0.7cm　先端部丁寧な削りで薄く成形
37		ヘラ状木製品	残存長27.6cm　幅1.2cm　厚さ1.3cm
図78 38		連歯下駄	長23.0cm　幅11.4cm　厚さ5.7cm　全体に丁寧な削りで滑らかに調整されている
39		連歯下駄	長22.5cm　残存幅9.5cm　残存厚3.7cm　全体に風化が激しい
40		木製　脚	長4.9cm　幅2.0cm　厚さ1.3cm　家具　獣脚状　前面に縦方向、背面に横方向の溝が刻まれる 本体に接合する円柱状の凸部(径0.8～1.1cm　高さ0.9cm)をもつ
41		不明木製品	残存長17.5cm　残存幅2.4cm　厚さ0.8cm
42	落込み７	不明木製品	残存長17.2cm　幅3.5cm　厚さ1.4cm
43		不明木製品	長17.2cm　幅3.5cm　厚さ1.4cm　一面は平ら、反対の面は中高に削る　側面に不規則な刻み
44		不明木製品	残存長9.7cm　幅2.7cm　厚さ0.7cm　把手または環状製品の一部か 外側は粗い削り、内側は炭化する
45		木製部材	長10.1cm　幅4.6cm　厚さ1.5cm　柾目材　側面中央に四角い切り込み
図79 1	5a面	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.7cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成普通　口縁部に油煤付着
2		土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径5.0cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質を含む　焼成普通
3		土師器皿 R種　大型	口径11.1cm　底径5.8cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は黄白色で黒雲母・赤色粒子を含む　焼成普通
4		土師器皿 R種　大型	口径10.9cm　底径6.5cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で赤色粒子・雲母を含む　内底部に油煤付着　口縁部を意図的に打ち欠く
5		土師器皿 R種　大型	口径12.0cm　底径7.4cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色～灰色で白色針状物質を含む　焼成良好
6		土師器皿 R種　大型	口径12.6cm　底径7.4cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成普通
7		白色系土師器 皿T種小型	口径(9.6)cm　手づくね後口縁部ナデ 胎土は灰白色　口縁部淡橙色　焼成良好
8		白色系土師器 皿T種大型	口径(11.1)cm　手づくね後口縁部ナデ 胎土は灰白色　口縁部淡橙色　焼成良好　７と同一個体か
9		白色系土師器 皿T種大型	口径(12.8)cm　手づくね後口縁部ナデ 胎土は乳白色　焼成良好
10		白色系土師器 皿T種大型	手づくね後口縁部ナデ　胎土は灰白色、胎芯部は灰色　焼成良好
11		東濃型山茶碗	口径(13.7)cm　ロクロ成形　胎土は灰白色　焼成良好
12		瀬戸　入子	底径4.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ハケナデ、黒・朱漆付着 器表は黄灰白色　胎土は灰白色で黒色粒子を含む　焼成良好
13		常滑 こね鉢Ⅰ類	底～胴部片　輪積み成形　内面磨耗　外面横ナデ、下位ヘラ削り　重ね焼き痕あり 器表は橙褐色　胎土は暗灰色で長石・石英を含む　焼成良好
14		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	口径(13.9)cm　ロクロ成形　複弁　断面に黒漆付着 素地は灰白色　釉薬は灰緑色で失透
15		天禧通寶	初鋳1017年　北宋　楷書
16		砥石　中砥	残存長6.5cm　幅6.1cm　残存厚5.5cm　灰色に赤い縞　天草　砥面３面
17		鹿角製　野沓	長さ24.6cm　幅2.6cm　厚さ0.6cm　表面に沈線による文様を描き、その沈線に黒色物質(漆か)を拭きこむ 文様は側面にそって沈線を巡らしその内側を菊水文で埋める　両端部に円形の孔
18		漆器　皿	口径8.8cm　底径5.7cm　器高1.2cm　内外面とも黒漆塗り　内面に朱漆の手描き文(鶴)
19		漆器　皿	口径(9.5)cm　底径6.4cm　器高1.3cm　内外面とも黒漆塗りに朱漆の手描き文(千鳥)
20		漆器　皿	口径(8.7)cm　底径(6.0)cm　器高1.2cm　内外面とも黒漆塗り　内面に朱漆の手描き文(植物文)
21		漆器　椀	底径(6.9)cm　内外面とも黒漆塗りに朱漆の手描き文(情景文と思われる)
22		曲物　底板	残存長13.8cm　残存幅1.8cm　厚さ0.6cm　柾目材　側面に釘穴２箇所
23		箸状木製品	長さ20.7cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
24		箸状木製品	長さ21.5cm　幅0.8cm　厚さ0.4cm　両口
25		箸状木製品	長さ22.1cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　両口
26		箸状木製品	長さ22.1cm　幅0.7cm　厚さ0.4cm　両口
27		串状木製品	残存長21.4cm　幅1.3cm　厚さ0.8cm　先端部丁寧な削りで薄く成形
28		串状木製品	長さ27.7cm　幅1.2cm　厚さ0.8cm　先端部は火を受け炭化している
29		串状木製品	長さ37.8cm　幅1.1cm　厚さ0.7cm　先端部は火を受け炭化している
図80 30		不明木製品	残存長41.5cm　径2.4～2.6cm　やや湾曲した丸木で一端は大き目の削りにより尖る
31		草履　芯	残存長23.3cm　幅11.6cm　厚さ0.3cm　植物圧痕残る
32		部材	残存長9.1cm　幅7.2cm　厚さ1.4cm　板目材　外周面取り
33		板締め染 型板	最大長10.0cm　最大幅10.5cm　厚さ0.5cm　柾目材 文様(笹の葉)　模様を避けて0.1～0.5cmの小孔42箇所貫通
34		不明木製品	径2.6×3.1cm　長さ6.2cm　断面が楕円の円柱で、一端から径1.1cm深さ３cmの穴が穿たれる 加工途中品か

表20　第２地点出土遺物観察表(13)

図80 35	5 a面	漆塗り 棒状木製品	長さ10.3cm　幅1.2cm　厚さ1.1cm　角柱の四角を面取りし、断面は八角形をなす 側面黒漆塗り　上下面は無漆で、一面に釘穴状のもの2箇所あり　同型部材が他に三例出土
36		不明木製品	長さ12.3cm　幅1.2cm　厚さ0.4cm　板目材　両端は段上に薄く、小孔貫通
37		不明木製品	長さ8.7cm　残存幅2.0cm　厚さ0.2cm　板目材
38		不明部材	長さ22.2cm　幅8.2cm　厚さ1.8cm　板目材　小孔一箇所貫通　中央に雑なホゾ穴状の削り１箇所
39		不明部材	長さ22.3cm　幅8.1cm　厚さ1.2cm　板目材　37の部材と接合する

図80 40	5a～5c面	土師器皿 R種　小型	口径(7.5)cm　底径(6.3)cm　器高1.5cm　ロクロ　底部ヘラ起こし　内底部ナデ 胎土は淡灰橙色で黒雲母を含む　焼成良好　瀬戸内系か
41		常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　自然釉　器表は茶褐色　胎芯は灰褐色で長石・石英を含む　焼成良好
42		東播系　甕	胴部片か　外面格子目叩き　内面ハケナデ 器表灰黒色　胎芯は灰色　長石・石英含み堅緻　焼成良好　神出か
43		白磁口はげ碗	口径(10.3)cm　ロクロ成形　口縁部釉面取り　釉拭う　素地は灰白色　釉薬は透明
44		鉄製　剥刀	長さ14.4cm　幅1.2cm　厚さ0.3cm
45		硯	残存長7.5cm　残存幅4.3cm　厚さ1.0cm　断面は逆台形　角を丸く落とす 灰黒色　頁岩　一面使用　墨付着
図81 1	建物６	鉄釘	長さ6.45cm　幅0.3cm　厚さ0.3cm　重量3.2ｇ
2	p.253	木製　鳴鏑	長7.7cm　最大径2.8cm　内側を径1.0cmにくりぬき、先端に細く貫通する　側面に風穴１穴 先端部は細かい削りで丸みをつけ、根元も1.8cm幅の帯状に細かく削り込まれる
図82 1	築地状遺構２	草履　芯	長24.2cm　幅(11.1)cm　厚さ0.25cm　植物圧痕僅かに残る
2	5 b面	土師器皿 R種　大型	口径(11.6)cm　底径(7.1)cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙褐色で白色針状物質を含む　焼成良好
3		土師器皿 R種　極大型	底径(10.0)cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙褐色で金雲母・黒雲母・白色針状物質・白色、赤色粒子を含む　焼成普通
4		白色系土師器 皿T種大型	口径(12.1cm)　手づくね後口縁部ナデ 胎土は黄灰白色　焼成良好
5		東濃型山茶碗	口径(11.6)cm　ロクロヘラナデ調整　内面に降灰　胎土は灰白色で緻密
6		東濃型山茶碗	口径(12.1)cm　ロクロヘラナデ調整　内面に少量の降灰　胎土は灰褐色で緻密
7		東濃型山茶碗	口径(11.8)cm　底径(5.0)cm　器高5.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 貼り付け高台　籾殻痕あり　胎土は灰白色で緻密　焼成良好　内側に薄く赤色物質付着
8		東濃型山茶碗	口径(14.3)cm　底径5.5cm　器高5.05cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 貼り付け高台　籾殻痕あり　胎土は淡灰褐色　焼成良好　内面に少量の降灰
9		常滑 こね鉢Ⅰ類	底径(13.4)cm　輪積みロクロ成形　外側下位ヘラ削り　貼り付け高台　外底面に鉄分付着 胎土は灰褐色で長石・石英・小石粒を含む　内面に降灰
10		常滑 こね鉢Ⅰ類	口径(29.4)cm　輪積みロクロ成形　口縁部内外面横ナデ 胎土は灰色で長石・石英を含む　口縁部に降灰
11		竜泉窯青磁 合子　蓋	口径(7.6)cm　最大径(9.0)cm　ロクロ成形 素地は灰白色　釉薬は青灰色失透　大宰府分類」類
12		嘉定通寶	初鋳1208年　南宋　楷書　背文七
13		箸状木製品	長19.6cm　幅0.6cm　厚さ0.3cm　両口
14		箸状木製品	長22.0cm　幅0.7cm　厚さ0.6cm　両口
15		箸状木製品	長22.9cm　幅0.7cm　厚さ0.3cm　両口
16		箸状木製品	長23.5cm　幅0.7cm　厚さ0.6cm　両口
17		串状木製品	長23.6cm　幅1.2cm　厚さ1.1cm
18		草履　芯	長23.9cm　幅10.5cm　厚さ0.25cm
19		不明木製品	長10.2cm　残存幅5.0cm　厚さ0.5cm　板目材　片面に削り痕
図85 1	5 c上層 木器具溜り	土師器皿 R種　小型	口径(7.8)cm　底径(6.0)cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成良好
2		土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径6.0cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成普通
3		土師器皿 R種　小型	口径8.0cm　底径6.3cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡黄灰色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成普通
4		土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径6.0cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰橙色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成良好
5		土師器皿 R種　小型	口径8.0cm　底径5.6cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰橙色で白色針状物質・黒雲母・砂粒を含む　焼成普通
6		土師器皿 R種　小型	口径(8.9)cm　底径(6.0)cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は黄灰色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成普通
7		土師器皿 R種　中型	口径10.8cm　底径6.7cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成良好
8		土師器皿 R種　大型	口径(11.0)cm　底径(5.9)cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・黒雲母・砂粒を含む　焼成良好
9		土師器皿 R種　大型	口径11.9cm　底径5.8cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成普通

表21　第２地点出土遺物観察表(14)

図85 10		土師器皿 R種　大型	口径12.8cm　底径7.6cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部強いナデ 胎土は灰黄色で黒雲母少量含む　焼成良好
11		土師器皿 R種　極小型	口径(4.1)cm　底径(3.3)cm　器高1.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好
12		瓦器　灯明具	径6.0cm　遺存高2.2cm　灯明台の脚部か　径0.25cmの穿孔(不貫通)１箇所 胎土は橙色　胎芯灰黒色　黒雲母・白色針状物質を含む
13		瓦器　小型釜	口径4.6cm　鍔部最大径7.9cm　ロクロ成形　鍔部貼り付け 胎土は淡灰褐色で雲母・黒色、白色粒子を含む　器表は部分的に黒色炭素吸着
14		瓦器　火鉢	口径(32.7)cm　底径(25.8)cm　器高11.0cm　輪積みロクロ成形　口縁部ヘラ磨き　内面ヘラナデ 胎土は暗灰色で黒雲母・白色針状物質含む
15		東濃型山茶碗	口径(14.4)cm　ロクロ成形　ヘラ調整　胎土は灰白色　口縁部に降灰
16		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　内面横ナデ、指頭痕、やや磨耗　外面横ナデ、縦ヘラ調整 器表茶褐色　胎芯は暗灰色で長石・石英を含む　内面に降灰
17		瀬戸　合子	底径5.5cm　ロクロ成形　内底面に目痕2箇所　胎土淡灰褐色　暗緑色灰釉漬け掛け
18		青白磁 合子　蓋	口径(5.2)cm　器径(1.1)cm　輪花型 素地は灰白色で緻密　釉薬は水青色透明　内側全体に煤付着
19		竜泉窯青磁 蓮弁文碗	口径(12.7)cm　ロクロ成形　外面に鎬を持たない連弁文　口縁部は強く外反する 素地は灰色　釉薬は灰青色で半透明、大き目の貫入がある
20		竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口径(14.8)cm　ロクロ成形　外面に複弁の連弁文　口縁部僅かに外反する 素地は淡灰色　釉薬は灰緑色で失透
21		皇宋通寶	初鋳1038年　北宋　楷書
22		砥石　仕上砥	残存長4.0cm　幅4.8cm　厚さ0.5cm　鳴滝　灰白色　2面使用　側面切り出し痕
23		漆器　皿	口径8.6cm　底径5.8cm　器高1.8cm　内外面とも黒漆塗り　光沢少ない　平高台　無文
24		漆器　皿	口径9.0cm　底径7.0cm　器高1.3cm　内外面とも黒漆塗り　無文 外底部は輪高台で中央部は_漆していない
25		漆器　皿	口径10.0cm　底径8.4cm　器高0.9cm　内外面とも黒漆塗りでロクロ挽きの痕が残る 外底部は平高台で木地が露出　内底面に朱漆でスタンプ文
26		漆器　皿	口径9.3cm　底径7.2cm　器高1.2cm　内外面とも黒漆塗り　外底部輪高台で中央に十字の線刻あり　無文
27		漆器　皿	口径8.8cm　底径5.8cm　器高1.3cm　内外面とも黒漆塗り　平高台で中央に線刻あり　無文
28		漆器　皿	口径(10.4)cm　底径(6.0)cm 器高1.0cm　内外面とも黒漆塗り　内底部に朱漆で手描き文(かたばみ) 無高台
29		漆器　椀	口径14.4cm　底径6.3cm　器高5.5cm　内外面とも黒漆塗り　無文　平高台
30	５ｃ上層 木器貝溜り	漆器　椀	口径16.0cm　内側は全体にざらついた黒漆が付着し、外側は口縁部から黒漆が垂れる下位は木地が露出 未成品あるいは漆の容器として使用した木椀か
31		漆塗　膳脚	高さ8.2cm　残存幅3.2cm　厚さ2.3cm　猫脚状　上部五角形　本体に嵌め込まれる円柱状凸部の頂部は朱漆塗り　脚部表面は黒漆塗り
32		漆塗 棒状木製品	残存長10.3cm　幅1.2cm　厚さ1.1cm　角柱の四角を面取りし、断面は八角形をなす 側面黒漆塗り　一面は無漆で釘穴状のもの2箇所あり　同型部材が他に三例出土
33		漆塗　櫛	長さ11.5cm　幅4.3cm　厚さ1.0cm　黒漆塗り　歯は密
34		杓子状木製品	残存長11.6cm　幅4.1cm　厚さ0.2cm　板目材使用　縁は粗い削りで成形
35		折敷	長さ20.7cm　残存幅10.1cm　厚さ0.1cm　経木
36		折敷	長さ21.4cm　幅21.4cm　厚さ0.1cm　経木　直線的に角を落とす　２辺の中央に径0.2cmの小孔
図86 37		木蓋	径18.5cm　厚さ0.7cm　板目材　やや歪な方円形　中央に把手のつまみ装着部らしき径0.7cmの穴貫通 他に径0.2cmの小孔貫通　縁を削りで面取り　全体に薄く黒漆塗布
38		木蓋	径18.5cm　厚さ1.4cm　半円形の板目材2枚を両端の尖った木釘で留め円盤状にする　継ぎ目に直交方向に幅2.1cmの把手装着痕があり、その部分に両面より鉄釘５本・木釘２本・小孔11穴　縁を削りで面取り 全体に薄く黒漆塗布
39		棒状木製品	長さ24.4cm　幅0.6cm　厚さ0.7cm　断面方形
40		棒状木製品	長さ12.0cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　断面方形　一端を斜めに切断
41		棒状部材	長さ27.4cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　0.1～0.2cmの穴4箇所貫通
42		箸状木製品	長さ18.6cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
43		箸状木製品	長さ19.5cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
44		箸状木製品	長さ22.4cm　幅0.5cm　厚さ0.5cm　両口
45		箸状木製品	長さ23.0cm　幅0.6cm　厚さ0.6cm　両口
46		箸状木製品	長さ23.4cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
47		箸状木製品	長さ24.1cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
48		箸状木製品	長さ26.4cm　幅0.8cm　厚さ0.5cm　両口
49		箸状木製品	長さ24.9cm　幅0.8cm　厚さ0.5cm　両口
50		串状木製品	長さ22.0cm　幅1.0cm　厚さ0.5cm
51		串状木製品	長さ25.5cm　幅1.0cm　厚さ0.5cm
52		串状木製品	長さ25.4cm　幅1.2cm　厚さ0.6cm　柾目材　丁寧な削り調整
53		串状木製品	長さ23.6cm　幅1.0cm　厚さ0.6cm　丁寧な削り
54		串状木製品	長さ13.6cm　幅1.2cm　厚さ0.6cm
55		串状木製品	長さ14.7cm　幅1.3cm　厚さ0.7cm　中太で両端をとがらせる　大き目のはっきりした削り
56		串状木製品	長さ40.5cm　幅1.6cm　厚さ1.3cm　柾目材　両側面丁寧な削りで面取り　一端は細く削る
57		漆ヘラ	長さ12.3cm　幅1.2cm　厚さ0.3cm　先端が刃状に薄く削がれ、黒漆付着

表22　第２地点出土遺物観察表(15)

図86 58		漆ヘラ	長さ11.9cm　幅1.3cm　厚さ0.2cm　先端が刃状に薄く削がれ、黒漆付着
59		棒状木製品	残存長45.8cm　幅2.2cm　厚さ1.4cm　側面は粗く面取り
60		草履　芯	長さ23.5cm　幅10.6cm　厚さ0.3cm
61		草履　芯	長さ23.5cm　幅10.6cm　厚さ0.3cm　60とほとんど同型
62		草履　芯	長さ23.5cm　幅10.7cm　厚さ0.3cm　全体に植物圧痕のこる
63		草履　芯	残存長24.1cm　幅10.3cm　厚さ0.2cm　植物圧痕のこる
図87 64		草履　芯	長さ23.8cm　幅10.4cm　厚さ0.2cm　僅かに植物圧痕のこる
65		草履　芯	長さ24.0cm　幅10.1cm　厚さ0.3cm　緒穴以外に針穴大の小孔が左右対称の位置に計６箇所
66		草履　芯	長さ23.1cm　復元幅(10.4)cm　厚さ0.15cm
67		草履　芯	長さ23.2cm　残存幅9.7cm　厚さ0.5cm
68		草履　芯	長さ23.0cm　残存幅9.9cm　厚さ0.15cm　一部にかすかに植物圧痕のこる
69		草履　芯	長さ23.4cm　残存幅9.2cm　厚さ0.25cm　植物圧痕のこる
70	５ｃ上層 木器貝溜り	草履　芯	長さ23.4cm　残存幅4.7cm　厚さ0.2cm　緒穴のほかに大小の穴5箇所あり
71		草履　芯	長さ23.4cm　残存幅5.0cm　厚さ0.2cm　71と対の可能性あり
72		草履　芯	長さ23.5cm　残存幅5.3cm　厚さ0.4cm　一部にかすかに植物圧痕のこる
73		草履芯	長さ23.5cm　残存幅5.3cm　厚さ0.4cm　一部にかすかに植物圧痕のこる　72と対の可能性あり
74		下駄　歯	高さ7.9cm　残存幅16.0cm　厚さ2.9cm 上部に鉄釘が２本(5.3cm×0.6cm×0.4cm、－×0.5cm×0.4cm)残存
75		鳥形	長さ19.7cm　幅1.5cm　厚さ0.4cm
76		不明木製品	最大長3.5cm　最大幅5.4cm　厚さ0.6cm　板目材　表面は十六弁の菊花を彫る　小孔４箇所貫通 裏面に２孔を通って線上のきずあり　板締め染型板の部分か
77		木製 扇骨	残存長21.8cm幅1.6cmの３枚の骨(板目材)と径0.9cm残存長2.9cmの要からなる　外側の骨は厚さ0・4mで表面面取り　内側の骨､厚さ0.3cm(片面墨書「いろ…めかみの」)、厚さ0.2cm(両面墨書「れ参らせ候いそき…」「ろ…か…」)
78		木製　物指	残存長10.4cm　幅2.0cm　厚さ0.8cm　板目材　片面に3.4～3.5cm間隔の刻み目
79		木製　物指	長さ34.3cm　幅1.8cm　厚さ1.0cm　板目材　片面に3.4～3.5cm間隔の刻み目　中央に米印の刻み
図88 80		不明部材	長さ29.0cm　幅7.6cm　厚さ6.8cm　径2.7×3.3cmの穴貫通　用途不明
図89 1	建物７	土師器Ⅲ Ｒ種　小型	口径8.3cm　底径5.9cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は黄灰色で白色針状物質・黒雲母・砂粒を含む　焼成良好
2	建物８	土師器Ⅲ Ｒ種　小型	口径7.6cm　底径5.5m　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は暗橙色で白色針状物質・黒雲母・小礫を含む　焼成良好　口縁部油煤付着
図90 1	５ｃ上層 遺物溜り	漆器　皿	口径8.5cm　底径6.2cm　器高1.5cm　内外面とも黒漆塗り　無文 外底部平高台　内面に擦過痕あり
2		漆器　皿	口径(9.6)cm　底径径(6.0)m　器高1.05m　内外面とも黒漆塗り　内底部に朱漆で手描き文(蔓状植物　葛か) 外底部無高台で木地が露出するが、朱漆の痕がかすかにある
3		漆器　椀	口径(14.6)cm　底径(8.8)m　内外面とも黒漆塗り　内面に朱漆で手描き文(流水と竹葉) 外面に朱漆手描き文(竹葉)　外底部腐食し木地露出
4		漆器　椀	口径15.0cm　底径7.6m　器高5.7cm　内外面とも黒漆塗り　無文　内面はロクロの挽き痕が顕著で漆は薄め 内底面は擦れ木地が見える　外底部は木地が露出し、縁に沿って太い沈線が巡る
5		漆器　盆	径37.0cm　厚さ1.8cm　内外面とも黒漆塗り 無文　低い縁を巡らせ外側面はロクロ挽きで丸みをつける 内面は漆の下に鑿状工具痕が観察される　外底部は木地が露出 径1.5cmの孔２箇所貫通、内１箇所は木が詰まる　脚部が嵌め込まれていた可能性あり
6		部材	長さ18.8cm　幅3.5cm　厚さ5.5cm　幅1.4cm深さ1.9cmのの鑿によるホゾが穿たれる
7	落込み９	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表面は暗褐色　胎土は灰褐色で長石・小石含む
8		竜泉窯青磁 輪花碗	口径(12.9)cm　ロクロ成形　口縁部に切込みを入れ輪花とする　胎土は灰白色　釉薬は透明度の低い水青色、二次焼成を受け光沢を失する　図61-20と同一個体の可能性あり
9		杓子状木製品	長さ27.8cm　幅7.6cm　厚さ1.3cm　板目材　縁を粗く面取り
10		箸状木製品	長さ17.4cm　幅0.8cm　厚さ0.6cm　両口
11		箸状木製品	長さ22.0cm　幅0.6cm　厚さ0.6cm　両口
12		箸状木製品	長さ24.0cm　幅0.6cm　厚さ0.35cm　両口
13		不明木製品	残存長11.2cm　幅3.9cm　厚さ0.4cm　柾目材　小孔1箇所貫通　先端および周囲は丸く面取り
14		不明木製品	長さ20.9cm　幅4.4cm　厚さ0.8cm　柾目材　一端は削りにより薄くなっている
15	土坑28	土師器Ⅲ Ｒ種　小型	口径8.3cm　底径6.3cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成良好
16		土師器Ⅲ Ｒ種　小型	口径(8.2)cm　底径(5.7)cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・黒雲母・砂粒を含む　焼成良好
17		木蓋　把手	残存長16.0cm　幅1.9cm　厚さ1.9cm　木釘5箇所残存　裏面から穴３箇所
18		曲物	底板は径31.5～32.6cmやや歪、厚さ1.5cmの柾目材　側板は幅9.5cm、厚さ0.2cmの柾目材を1.1cm幅樹皮により1箇所0.7cm幅樹皮で2箇所綴じ合わせる　下辺に小孔４箇所
19		箸状木製品	長さ18.3cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　両口
20		箸状木製品	長さ22.1cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　両口
図91 1	５c面	土師器Ⅲ Ｒ種　小型	口径(7.6)cm　底径(5.8)cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は暗灰色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成普通

表23　第２地点出土遺物観察表(16)

図91 2		土師器皿 R種　大型	口径13.9cm　底径8.3cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は灰橙色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成普通
3		土師器皿 R種　極小型	口径(4.4)cm　底径(3.5)cm　器高0.95cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は灰橙色で黒雲母を含む　焼成良好
4		常滑 こね鉢Ⅰ類	底部片　輪積みロクロ成形　外側下位ヘラ削り　貼り付け高台 胎土は灰色で長石・黒雲母を含む　内面著しく磨耗
5		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ、指頭痕 器表茶褐色　胎芯は暗灰色で長石・石英を含む　内面に降灰
6		青白磁　梅瓶	底径(10.6cm)　ロクロ成形　削り出し高台　素地は白灰色で緻密　釉薬は淡灰青色で不透明
7		開元通寶	初鋳621年　唐　楷書
8		開元通寶	初鋳621年　唐　楷書
9		漆器　皿	口径(8.4)cm　底径(6.6)cm　器高1.3cm　内外面とも黒漆塗り　外底部は木地　無文
10		杓子状木製品	長16.9cm　残存幅4.4cm　厚さ0.6cm　板目材使用
11		円盤型木製品	径7.8cm　厚さ0.6cm　板目材　表面は縁を削りにより面取り　蓋か
12		円盤型木製品	径(10.0)cm　厚さ0.8cm　柾目材　斜めに切断されている
13		円盤型木製品	径8.0cm　厚さ0.6cm　板目材　表面は細かい削りで中高に面取り　裏面は0.1cm幅の極低い縁をつけ平らに調整　蓋か
14		ヘラ状木製品	長さ15.5cm　幅0.7cm　厚さ0.4cm
15		箸状木製品	長さ22.1cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
16		箸状木製品	長さ19.4cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
17		箸状木製品	長さ19.1cm　幅0.5cm　厚さ0.4cm　両口
18		箸状木製品	長さ22.1cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
19	5c面	箸状木製品	長さ22.8cm　幅0.8cm　厚さ0.6cm　両口
20		箸状木製品	長さ23.4cm　幅0.7cm　厚さ0.7cm　両口
21		箸状木製品	長さ23.1cm　幅0.8cm　厚さ0.5cm　両口
22		箸状木製品	長さ23.8cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　両口
23		箸状木製品	長さ23.6cm　幅0.7cm　厚さ0.45cm　両口
24		箸状木製品	残存長23.9cm　幅0.8cm　厚さ0.6cm　真魚箸状木製品か
25		箸状木製品	残存長24.5cm　幅1.1cm　厚さ0.4cm　真魚箸状木製品または箆の一部か
図91 26		棒状木製品	長さ43.3cm　幅1.4cm　厚さ1.2cm　一端を細く削る　先端から4cmの所に裂け目があり、 1.1cm×0.4cm×0.1cmの木片挟まる
27		棒状木製品	長さ40.9cm　幅1.2cm　厚さ1.0cm　両端を細く削り、一端は炭化する
28		連歯下駄　歯	残存長8.2cm　幅12.2cm　厚さ3.0cm　上部に径0.2cmの木釘３本残存
29		草履　芯	長18.4cm　残存幅4.2cm　厚さ0.3cm　植物圧痕のこる
30		草履　芯	長18.3cm　残存幅4.1cm　厚さ0.3cm　植物圧痕のこる
31		草履　芯	長23.9cm　残存幅5.5cm　厚さ0.3cm　植物圧痕のこる
32		草履　芯	長23.0cm　残存幅4.2cm　厚さ0.4cm　植物圧痕のこる
33		糸巻	残存長13.4cm　1.1cm　厚さ1.3cm　枠木部材　表面は丁寧な面取り 横木がはまるホゾ穴(径0.8cm　深さ0.8cm)が穿たれる
34		陽物	長さ13.1cm　径2.1cm　丸木の一端をこまかい削りで成形　底面は平らに整えられる
35		不明木製品	長さ16.8cm　幅1.2cm　厚さ0.7cm　一端は杭状に尖らせ、一端は細かい削りで成形　斎串または人形か
36		漆ヘラ	長さ12.7cm　幅2.0m　厚さ0.4cm　側面面取り　一端が斜めに削がれている　表裏とも黒漆付着
37		不明木製品	残存長18.6cm　幅2.3m　厚さ1.1cm
38		不明木製品	長さ17.6cm　残存幅3.1m　厚さ0.5cm　柾目材　３方の縁に小孔計４箇所　箱状の製品の部材か
39		不明木製品	長さ18.0cm　幅0.9m　厚さ0.5cm　斜めの刻み目がほぼ等間隔に(1.6～1.8cm)施される 漆状の黒色物質付着
図92 1	柱穴列５	常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ　器表は暗褐色、胎芯灰黒色で長石・礫含む
2		滑石　鍋	口縁部片　内面にノミ状工具痕　青灰銀色　滑石　口縁部外側が平らに磨り減っている
図93 1	P.123	部材	長さ16.4cm　幅9.9cm　厚さ2.5cm　柾目材　中央に径3.3～4.0cmの穴貫通側面に1.5×1.8cmの切り込み１箇所
2	P.162	土師器皿 R種　大型	口径(12.9)cm　底径(6.2)cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は黄灰色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成良好
3	P.285	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.6cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は黄灰色で白色針状物質を含む　焼成良好
4		土師器皿 R種　小型	口径8.3cm　底径6.3cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰茶色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成良好
5	P.286	土師器皿 R種　大型	口径(12.4)cm　底径(6.2)cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母を含む　焼成良好
6	P.287	鉄釘	長さ(7.9)cm　幅0.8cm　厚さ0.5cm
7	溝状遺構5	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口径(11.3)cm　ロクロ成形　外面に連弁文 素地は灰色から灰白色で堅緻　釉薬は青緑色で半透明、気泡含む
8	土坑30	土師器皿 R種　大型	口径11.9cm　底径7.1cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は灰茶色で白色針状物質・黒雲母・砂粒・礫を含む　焼成普通
9	土坑31	箸状木製品	長さ22.6cm　幅0.7cm　厚さ0.4cm　両口

表24　第２地点出土遺物観察表(17)

図94 1		土師器皿 R種　小型	口径7.17cm底径5.9cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質を含む　焼成良好　内外面とも炭化物付着
2		土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.5cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰茶色で白色針状物質・赤色粒子・礫を含む
3		土師器皿 R種　小型	口径(7.6)cm　底径5.7cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成普通
4		土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径5.9cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 器表は淡橙色、胎土は赤橙色で黒雲母を含む　焼成良好
5		土師器皿 R種　大型	口径11.8cm　底径7.0cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 器表は淡橙色、胎土は赤橙色で白色針状物質・黒雲母・砂粒を含む　焼成良好
6		土師器皿 R種　大型	口径12.6cm　底径7.5cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡茶褐色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成良好
7		常滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　口縁部に沈線　内外面横ナデ、指頭痕、薄く煤付着 胎土は灰褐色で長石・石英を含む
8		常滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ 器表は灰褐色、胎芯明灰色で長石・礫含む　内面磨耗
9		常滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　口縁部に沈線　内外面横ナデ　胎土は灰褐色で長石・石英含む
10		常滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部～胴部片　輪積みロクロ成形　口縁部に沈線　内外面横ナデ　外面下位横方向ヘラ削り 胎土は灰褐色で長石・石英含む　内面磨耗
11		常滑 こね鉢Ⅰ類	底径14.6cm　輪積みロクロ成形　外面下位横方向ヘラ削り　貼り付け高台 器表面橙褐色、胎芯は暗灰色で長石・礫含む　内面磨耗
12		常滑 こね鉢Ⅰ類	底部片　輪積みロクロ成形　外側下位ヘラ削り　貼り付け高台 胎土は灰色で長石・石英・黒雲母を含む　内面磨耗
13		常滑　壺	底径8.3cm口縁部片　輪積みロクロ成形 器表は茶褐色、胎芯は暗灰褐色で長石・石英・礫含む　外側に一部自然釉
14		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形 器表は茶褐色、胎芯は灰色で長石・石英・気泡を含む　口縁部から外側にかけて自然釉
15		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は茶褐色、胎芯は黄灰色で長石・石英含む　外面自然釉
16		常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は赤褐色、胎芯は暗灰色で長石・石英含む
17		滑石鍋転用硯	残存長5.5cm　残存幅4.0cm　厚さ1.7cm　灰白色　外面に鑿状工具痕　内面を硯として使用、墨付着
18		白磁口はげ皿	底径(6.6)cm　ロクロ成形　素地は灰白色　釉薬は淡灰緑色で透明
19	6面	竜泉窯青磁 折縁鉢	口径(12.5cm)　ロクロ成形　無文　素地は灰白色　釉薬は灰緑色失透
20		竜泉窯青磁 輪花碗	口縁部片　ロクロ成形　口縁部に切込みが入り輪花を成す 胎土は灰白色　釉薬は透明度の低い水青色　図57－8と同一個体の可能性あり
21		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	口縁部片　ロクロ成形　外面に片切り彫りの鎬連弁文　複弁 素地は灰白色、黒色微粒子含む　釉薬は青緑色半透明、大き目の貫入
22		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	口縁部片　ロクロ成形　外面に片切り彫りの鎬連弁文　口縁部やや外反 素地は明灰色で緻密　釉薬は青緑色半透明、表面は二次焼成により光沢を失う
23		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	底径4.9cm　ロクロ成形　外面に片切り彫りの鎬連弁文　削り高台　畳付き途中まで施釉 素地は灰色、緻密　釉薬は灰緑色で透明、大き目の貫入
24		竜泉窯青磁 稜花皿	縁部片　ロクロ成形　外周は輪花をなす　素地は灰色　釉薬は灰緑色不透明で厚く掛かる
25		青白磁　水注	胴部片　型押し成形　瓜型　肩部に植物らしき印花を巡らす 素地は灰白色緻密　釉薬は淡青緑色透明で外面にのみ施釉
26		青白磁　水注	底径(5.0)cm　ロクロ成形　薄い削り出し高台　胴部下位から底部にかけて露胎　胎土は灰白色緻密
27		貝製　白碁石	長径1.70cm　短径1.5cm　厚さ0.2cm
28		漆器　椀	底径(6.2)m　内外面とも黒漆塗り　内外面に朱漆でスタンプ文　外底部輪高台
29		漆塗　櫛	残存長11.2cm　幅4.2cm　厚さ0.9cm　黒漆塗り　歯は密
30		不明木製品	長さ3.22cm　径2.3～2.5cm　円柱形　栓か
31		漆塗 棒状木製品	残存長10.9cm　幅1.1cm　厚さ1.0cm　角柱の四角を面取りし、断面は八角形をなす　側面黒漆塗り 一端は無漆で釘穴状のもの1箇所あり、もう一端は切れ込みにて段差をつける　同型部材が他に三例出土
32		曲物　底板	径(15.0)cm　厚さ0.8cm　柾目材　側面に釘穴2箇所残存
33		曲物　底板	径20.2cm　厚さ0.6cm　柾目材　表裏とも傷あり　縁に小孔貫通し、0.2cm幅の樹皮が残る
図95 34		箸状木製品	長さ17.6cm　幅0.8cm　厚さ0.4cm　両口
35		箸状木製品	長さ18.3cm　幅0.5cm　厚さ0.4cm　両口
36		箸状木製品	長さ19.1cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　両口
37		箸状木製品	長さ20.6cm　幅0.5cm　厚さ0.3cm　両口
38		箸状木製品	長さ20.5cm　幅0.6cm　厚さ0.6cm　両口
39		箸状木製品	長さ20.4cm　幅0.5cm　厚さ0.4cm　両口
40		箸状木製品	長さ21.0cm　幅0.9cm　厚さ0.4cm　両口
41		箸状木製品	長さ21.2cm　幅0.8cm　厚さ0.6cm　両口
42		箸状木製品	長さ23.9cm　幅0.6cm　厚さ0.6cm　両口

表25　第２地点出土遺物観察表(18)

図95 43	6面	箸状木製品	長さ24.3cm　幅0.6cm　厚さ0.3cm　両口
44		箸状木製品	長さ24.8cm　幅0.7cm　厚さ0.6cm　両口
45		ヘラ状木製品	長さ15.4cm　幅1.3cm　厚さ0.2cm　板目材　薄い板状で一端が削りにより斜めに尖る
46		ヘラ状木製品	長さ16.2cm　幅1.5cm　厚さ0.7cm　板目材　一端が削りにより斜めに尖り、側面に1箇所切り込みあり
47		ヘラ状木製品	長さ16.2cm　幅1.2cm　厚さ0.4cm　板目材　一端は両側から薄く削る　やや丁寧な整形
48		草履　芯	長さ15.0cm　幅7.7cm　厚さ0.2cm
49		草履　芯	長さ23.2cm　幅10.0cm　厚さ0.4cm　植物圧痕僅かにのこる
50		草履　芯	長さ23.1cm　幅9.8cm　厚さ0.3cm　植物圧痕のこる
51		草履　芯	長さ24.0cm　依存幅5.3cm　厚さ0.25cm
52		不明木製品	長さ17.7cm　幅9.1cm　厚さ3.2cm　一面から切り込み、削り、小孔(貫通４箇所・不貫通１箇所)などの加工痕あり　下駄加工途中に転用を試みたか
53		連歯下駄	長さ22.8cm　幅9.7cm　残存厚1.9cm　風化が激しいが、歯を切り出した鋸痕は残る
54		不明木製品	長さ13.2cm　幅2.8cm　厚さ1.6cm　柾目材　木偶の頭状の形が削り出されているが、目鼻の表現は無い　一部炭化
55		不明木製品	長さ6.6cm　幅5.6cm　厚さ2.1cm　手押し木か
56		自在鈎	残存長14.6cm　幅1.3cm　厚さ2.1cm　鋸歯状の刻み(長さ4.5cm、深さ1.1cm)が連なる 織り機の吊り框の高さを調節する部品の可能性もある
57		不明木製品	長さ10.3cm　幅2.5cm　厚さ0.9cm　板目材使用　用途不明
58		不明木製品	長さ10.0cm　幅2.4cm　厚さ1.4cm　板目材使用　用途不明
図96 1	P.296	土師器Ⅲ R種　大型	口径11.3cm　底径7.8cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質を含む　焼成良好
2	7ａ面	土師器Ⅲ R種　小型	口径8.0cm　底径6.2cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・赤色粒子を含む
3		土師器Ⅲ R種　小型	口径(8.1)cm　底径6.2cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は黄灰色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成良好
4		鍔鍋	口縁部片　内外面横ナデ　胎土灰色　器表は肌色　長石・金雲母を含む　内側は火を受け黒色に変化
5		常滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ　器表は灰褐色、胎芯灰色で長石・石英を含む　降灰釉あり
6		常滑　壺	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は茶褐色、胎芯灰褐色で長石・礫含む　堅緻
7		磨耗陶片	長さ9.9cm　幅7.8cm　厚さ1.3cm　常滑甕胴部下位を使用 胎土は灰色で長石と礫片を含む　内面に降灰釉　１辺と外面磨耗
8		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	口縁部片　ロクロ成形　外面に片切り彫りの鎬連弁文 素地は灰色　釉薬は緑灰色透明　貫入あり
9		竜泉窯青磁 鉢	底部片　ロクロ成形　畳付きのみ露胎　素地は明灰色で緻密　釉薬は青灰色半透明　貫入あり 大宰府分類Ⅲ類
10		鉄釘	長さ9.9cm　幅0.6cm　厚さ0.35cm　先端が鋭い　未使用か
11		貝製　白碁石	長径1.7cm　短径1.8cm　厚さ0.35cm
図97 1	柱穴列８	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.2cm　底径4.5cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒色・赤色粒子・小石を含む　焼成非常に良好
図98 1	土坑19	土師器Ⅲ R種　大型	口径(12.9)cm　底径(6.2)cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・赤色粒子を含む
2	土坑38	刀形	残存長12.8cm　幅1.2cm　厚さ0.4cm　柾目材　丁寧な削り　刀形か
3		不明木製品	残存長16.7cm　幅1.2cm　厚さ0.4cm　板目材　一端に丸いくぼみが削りこまれている 機織の板杼の可能性がある
4	土坑41	杓子状木製品	長さ20.8cm　残存幅4.3cm　厚さ0.6cm　板目材　周辺は面取り　柄に小孔貫通
5		箸状木製品	長さ16.4cm　幅0.5cm　厚さ0.4cm　両口
6		箸状木製品	長さ18.5cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
7		箸状木製品	長さ16.5cm　幅0.5cm　厚さ0.4cm　両口
8		棒状木製品	残存長15.5cm　幅0.8cm　厚さ0.5cm　柾目材の角棒の一端を斜めに切断
9		棒状木製品	長さ18.6cm　幅1.0cm　厚さ0.6cm　板目材　一端は薄く削られ、一端を斜めに切断
10		棒状木製品	長さ19.0cm　幅0.8cm　厚さ0.5cm　板目材　角棒の一端を斜めに切断
図99 1	7b面	常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ及び指頭痕 器表は灰褐色、胎芯灰色で長石を含む
図100 1	貝・遺物溜り	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.9cm　底径6.2cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡灰橙色で白色針状物質・黒雲母を含む
2		土師器Ⅲ R種　大型	口径11.5cm　底径6.0cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・黒雲母・砂礫を含む　底部に穿孔1箇所貫通
3		土師器Ⅲ R種　大型	口径(11.8)cm　底径7.7cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は暗灰橙色で白色針状物質・黒雲母を含む　焼成良好
4		瓦器　碗	口縁部片　ロクロ成形　胎土は灰白色　口縁部内外側黒色　焼成良好
5		瓦器　碗	口径(11.4)cm　ロクロ成形　胎土は灰白色　口縁部内外側黒色　焼成良好　二次焼成を受ける
図101 6	落込み11	常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ　器表は茶褐色、胎芯黄灰色で長石・石英を含む　降灰釉
図101 7	落込み11	青白磁 広口小壺	口径(8.5)cm　底径(4.5)cm　器高5.2cm　胴部外面に珠文と沈線による蓮弁状の文様を配す　口縁部釉拭う 素地は灰白色　釉薬は水色透明　胴部下位から外底面にかけて無釉

表26　第２地点出土遺物観察表(19)

図101 8	落込み11	不明木製品	残存長15.1cm　残存幅2.5cm　厚さ0.3cm　柾目材
9		箸状木製品	長さ23.4cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
10		箸状木製品	長さ25.4cm　幅0.7cm　厚さ0.6cm　両口
11	落込み 11・12	土師器皿 R種　小型	口径(8.9)cm　底径(6.0)cm　器高1.8cm　ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は黄茶褐色で白色針状物質・黒雲母を含む
12		箸状木製品	長さ21.8cm　幅0.7cm　厚さ0.3cm　両口
13		ヘラ状木製品	長さ20.3cm　幅0.8cm　厚さ0.4cm　先端炭化する
14		棒状木製品	残存長18.4cm　幅1.1cm　厚さ0.6cm　角棒の一端を斜めに切断
15		張り手棒	残存長36.9cm　径2.9～3.3cm　やや扁平な丸木で、端は取っ手状に削る
16	8面	土師器皿 R種　大型	口径(12.7)cm　底径(7.9)cm　器高3.5cm　ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で多量の赤色粒子・白色粒子・雲母を含む　外底部に煤付着
17		平瓦	厚さ2.2cm　凸面は糸切り、ナデ消し　凹面は砂目　側面ヘラ切り 表面は暗橙色　胎土は明灰茶色陶質土　12世紀代
18		平瓦	厚さ2.1cm　凸面は縄目　凹面はナデ消し、縄目若干残る 胎土は明灰色、白色粒子・砂・小石混入
19		漆塗　櫛	残存長6.0cm　幅4.6cm　厚さ1.0cm　黒漆塗り　歯は疎
20		不明木製品	長さ18.5cm　幅1.6cm　厚さ0.9cm　柾目材　両端が窄まる紡錘形に滑らかに調整　断面はかまぼこ型
図102 1	土坑43	土師器皿 T種　小型	口径8.6cm　底径(5.6)cm　器高1.8cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・黒雲母を含む
2		竜泉窯青磁 碗	底径(6.3)cm　ロクロ成形　削り出し高台 素地は灰色、胎芯は黄灰色　釉薬は緑灰色透明　貫入若干あり　高台内露胎
3		不明木製品	長さ8.4cm　幅1.4cm　厚さ1.3cm
図103	溝９	土師器皿 R種　大型	口径13.0cm　底径9.5m　器高2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は灰褐色で白色針状物質・黒雲母を含む　内外面、割れ口とも煤付着
2		渥美こね鉢	口縁部片　輪積みロクロ成形　内外面横ヘラ調整　胎土は灰褐色で長石・石英を含む
3		骨製　鏃	残存長4.3cm　残存幅2.4cm　厚さ0.3cm　表面は滑らかに磨かれ、鏃を差し込む孔の縁に0.3cm幅で黒漆が塗られる　内側に削り痕がみられる
4		箸状木製品	長さ22.5cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　両口
5		箸状木製品	長さ23.1cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
6	落込み13	箸状木製品	長さ21.7cm　幅0.6cm　厚さ0.3cm　両口
7		ヘラ状木製品	長さ18.4cm　幅1.5cm　厚さ1.0cm　一端が薄く削られる
8		ヘラ状木製品	長さ19.9cm　幅1.2cm　厚さ0.4cm　柾目材　先端のみ削りで整形
9		ヘラ状木製品	長さ24.3cm　幅1.1cm　厚さ0.7cm　全体に細かい削りで調整
10	落込み14	箸状木製品	長さ23.8cm　幅0.7cm　厚さ0.4cm　両口
11		箸状木製品	長さ26.1cm　幅0.6cm　厚さ0.6cm　両口
12		箸状木製品	長さ26.0cm　幅0.6cm　厚さ0.7cm　両口
13		串状木製品	残存長21.1cm　幅1.3cm　厚さ0.8cm　板目材　片面を削り、先端を細く整形
14		串状木製品	長さ22.9cm　幅1.2cm　厚さ0.8cm　全体に削りを施し先端を尖らせる
15		不明木製品	残存長30.2cm　幅6.6cm　厚さ0.3～0.4cm　一隅が丸く落とされている　縁に小孔二個　弧を描く切断面あり
図104 1	9面	土師器皿 T種　小型	口径8.6cm　底径5.2cm　器高1.8cm　手づくね後口縁部内底部ナデ　板状圧痕あり 胎土は橙色で白色針状物質・白色、赤色粒子・黒雲母を含む
2		土師器皿 T種　小型	口径(8.4)cm　底径6.6cm　器高1.9cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・赤色粒子を含む
3		土師器皿 T種　大型	口径13.0cm　底径8.4cm　器高3.4cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状物質・赤色粒子を含む　焼成良好　口縁の一部に煤付着
4		土師器皿 T種　大型	口径(12.9)cm　底径8.6cm　器高3.4cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は灰褐色で白色針状物質・赤色粒子・雲母・礫を含む
5		土師器皿 T種　大型	口径13.1cm　底径6.7cm　器高3.1cm　手づくね後口縁部内底部ナデ　板状圧痕あり 胎土は橙色で白色針状物質・赤色粒子・黒雲母・礫を含む
6		土師器皿 R種　小型	口径8.2cm　底径6.3cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・赤色粒子・黒雲母・雲母を含む
7		常滑 こね鉢Ⅰ類	口縁から胴部片　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ　内面下位磨耗 器表、胎芯とも明灰色で長石・石英・礫を含む
8		常滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ　器表、胎芯とも灰茶色で長石・石英・礫を含む 口縁部に沈線
9		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ　器表は赤褐色、胎芯案灰色で長石・石英を含む 内面全体に降灰
10		常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ　器表、胎芯とも灰褐色で長石を含む 口縁から内面全体に降灰
11		軒丸瓦	複葉八弁蓮花文　周辺に連珠　胎土は灰橙色で雲母・白色粒子含む
12		平瓦	厚さ2.6cm　凸面は縄目、ナデ消し　凹面は丁寧なナデ消し　側面ヘラ切り　胎土は灰色で白色粒子含む
13		平瓦	厚さ1.6cm　凸面はナデ消し、縄目若干残る　凹面はナデ消し　側面ヘラ切り 胎土は灰色で白色粒子・黒色粒子・雲母含む
14		竜泉窯青磁 画花文碗	口縁部片　ロクロ成形　内面に画花文 素地は灰色　釉薬は緑灰色透明　気泡含む

表27　第２地点出土遺物観察表(20)

図104 15	9面	竜泉窯青磁 画花文碗	底径6.0cm　ロクロ成形　内面に画花文 素地は黄灰色　釉薬は緑灰色透明　細かい貫入　高台内は露胎
16		漆器　盆	黒漆塗り　裏面は木地露出
17		漆器　皿	口径(10.6)cm　底径(6.4)cm　器高1.2cm　内外面とも黒漆塗りに朱漆で手描き文(花菱) 外底部輪高台で木地が露出する
18		漆器　椀	口縁部片　内外面とも黒漆塗り、無文
19		漆器　椀	口径14.6cm　底径7.3cm　器高4.2cm　内外面とも黒漆塗り、無文　外底部輪高台
20		円盤型木製品	径(20.4)cm　厚さ0.4cm　柾目材
21		漆塗　折敷	長24.5cm　残存幅8.2cm　厚さ0.2cm　柾目財　片面黒漆塗り　角を丸く落とす
22		漆塗　折敷	長さ28.8cm　残存幅29.8cm　厚さ0.3～0.4cm　柾目財　角は四葉状に整形　削り出しの低い縁が一部に残る 上面は黒漆塗りに朱漆の三つ割花菱文を二個所に施す
23		折敷	長さ31.5cm　残存幅8.8cm　厚さ0.2cm　柾目材　角を直線的に落とす　辺中央に小孔
24		折敷または 曲物底板	長さ32.9cm　残存幅5.8cm　厚さ0.5cm　柾目材　角を丸く落とす　手斧痕微かに残る 縁に小孔二つずつ2箇所(側板との結合孔か)
25		箸状木製品	長さ21.5cm　幅0.7cm　厚さ0.4cm　両口
26		箸状木製品	長さ22.1cm　幅0.55cm　厚さ0.25m　両口
27		箸状木製品	長さ22.2cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
28		箸状木製品	長さ24.3cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
29		箸状木製品	長さ32.2cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口　真魚箸状木製品
30		棒状木製品	長さ13.6cm　幅0.8cm　厚さ0.7cm　断面方形　一端を斜めに切断　一端は炭化
31		棒状木製品	長さ16.4cm　幅0.7cm　厚さ0.4cm　断面方形　先端は炭化
32		不明木製品	長さ13.5cm　幅1.2cm　厚さ1.0cm　両端を斜めに切断
図105 33		杓子状木製品	長さ25.6cm　幅7.6cm　厚さ0.7cm　板目材　柄の端が炭化
34		串状木製品	長さ21.4cm　幅0.9cm　厚さ0.9cm　全体を丸く削り先端を尖らせる
35		ヘラ状木製品	長さ17.2cm　幅1.4cm　厚さ0.6cm　粗い削りで先端を尖らせる
36		ヘラ状木製品	長さ20.2cm　幅1.5cm　厚さ0.6cm　やや丁寧な削りで先端を薄く整形
37		ヘラ状木製品	長さ23.1cm　幅1.0cm　厚さ0.8cm　断面蒲鉾型に削り、一端は斜めに切断
38		ヘラ状木製品	長さ22.0cm　幅1.2cm　厚さ0.7cm
39		手押木	長さ10.3cm　幅4.5cm　厚さ3.4cm
40		下駄　歯	残高7.2cm　幅15.0cm　厚さ2.3cm
41		不明木製品	残存長30.2cm　残存幅9.0cm　厚さ1.0cm　羽子板状の輪郭で先端は薄く削り、柄以外の側面は面取り 板目材　径0.5～3mmの小孔11箇所
42		不明木製品	長さ9.5cm　径残2.8cm　角柱状の材の角を落として丸みを付け、一端を尖らせる　栓か
43	9面～ 10a面	滑石鍋	胴部片　外面にノミ状工具痕　青灰銀色　滑石
44		箸状木製品	長さ22.4cm　幅0.8cm　厚さ0.5cm　両口
45		箸状木製品	長さ26.3cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
46		不明木製品	残存長11.1cm　幅1.7cm　厚さ0.5cm　柾目材 中央に1列に径3mm弱の貫通孔が4箇所等間隔(芯々で2.1cm)に並ぶ
図106 1	柱列11	木偶	長さ15.0cm　径2.1cm　丸木から頭部と襟を表す斜めの刻みを彫り出し、簡単な陰刻で眉・目・鼻・口を刻む 胴部はやや大きな削り痕　下方は斜めに尖らせてある
図107 1	P.320	土師器皿 T種　大型	口径(14.4)cm　底径(7.0)cm　器高4.2cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は灰茶色で黒雲母を含む
2		折敷	長さ32.8cm　残存幅18.0cm　厚さ0.3cm　柾目材　小孔３箇所
3	10a面	土師器皿 T種　小型	口径(9.2)cm　底径(6.5)cm　器高1.7cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状物質・赤色粒子・黒雲母を含む
4		土師器皿 T種　小型	口径9.1cm　底径5.7cm　器高1.2cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は灰褐色で白色針状物質・白色粒子を含む
5		土師器皿 T種　小型	口径9.3cm　底径6.0cm　器高2.4cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状物質・白色粒子・赤色粒子・雲母を含む
6		土師器皿 T種　小型	口径10.1cm　底径7.1cm　器高1.7cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状物質・白色粒子・赤色粒子・雲母を含む
7		土師器皿 T種　大型	口径(13.9)cm　底径9.6cm　器高3.3cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状物質・白色粒子・赤色粒子・雲母を含む
8		土師器皿 R種　大型	口径13.5cm　底径8.4cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で赤色粒子・白色粒子・黒雲母を含む　焼成良好
9		楠葉型瓦器碗	口径(11.5)cm　内外面暗文　器表面灰黒色　胎土は灰色
10		高麗青磁 碗	胴部片　ロクロ成形　内面に白土の象嵌、文様は葡萄か 素地は黄灰色　釉薬は黄みを帯びた緑灰色で透明　貫入あり
11		軒平瓦	宝相華唐草文　胎土は灰橙色で赤色粒子・白色粒子含む
12		平瓦	厚さ2.2cm　凸面は縄目の残るナデ消し　凹面は丁寧なナデ消し　側面ヘラ切り 胎土は灰橙色で白色粒子・赤色粒子・雲母含む
図107 13	10a面	鉄釘	長さ11.2cm　幅0.5cm　厚さ0.5cm
14		骨角器　耳掻き	残存長11.8cm　幅0.5cm　厚さ0.3cm
15		杓子状木製品	長さ13.0cm　残存幅2.2cm　厚さ0.4cm　柾目材

表28　第２地点出土遺物観察表(21)

図107 16	10a面	箸状木製品	長さ22.2cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
17		箸状木製品	長さ22.3cm　幅0.5cm　厚さ0.5cm　片口
18		箸状木製品	長さ30.5cm　幅0.8cm　厚さ0.5cm　両口
19		木製　物指	残存長24.1cm　幅1.2cm　厚さ0.3cm　柾目材　9箇所に浅い刻み目が入る 目盛の間隔が1.9～2.7cmと不揃いなので物指ではない可能性も残る
20		不明部材	長さ12.8cm　残存幅6.3cm　厚さ0.8cm　板目材　小孔4箇所貫通
図108 1	P.184	土師器皿 T種　小型	口径(8.6)cm　底径(5.2)cm　器高1.8cm　手づくね後口縁部内底部ナデ　板状圧痕あり 胎土は淡褐色で白色針状物質・黒雲母を含む　口縁部に煤付着
2	柱穴列12	土師器皿 T種　小型	口径9.0cm　底径5.7cm　器高2.0cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は橙色で白色粒子・赤色粒子・黒雲母を含む
3		土師器皿 T種　大型	口径14.6cm　底径7.1cm　器高3.2cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状物質・黒雲母を含む
4		土師器皿 T種　大型	口径15.1cm　底径6.5cm　器高4.0cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状物質・赤色粒子・礫を含む
5		土師器皿 T種　大型	口径14.4cm　底径6.5cm　器高4.1cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡橙色、胎芯灰黒色で白色針状物質・赤色粒子・白色粒子・雲母を含む
6	溝12	糸巻	高さ28.7cm　幅(27.2)cm　枠木と横木を固定する木釘残存　十字に組み合わさる横木の中央の孔は径2.9cm
7		折敷	長さ26.5cm　残存幅5.0cm　厚さ0.3cm　柾目材　小孔２箇所貫通
図109 1	溝11	土師器皿 T種　小型	口径8.4cm　底径4.1cm　器高1.3cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は橙色で白色針状物質・黒雲母を含む
2		土師器皿 T種　小型	口径8.7cm　底径4.2cm　器高1.7cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は灰橙色で白色針状物質・黒雲母・砂粒を含む
3		土師器皿 T種　大型	口径13.8cm　底径7.6cm　器高3.2cm　手づくね後口縁部内底部ナデ　口縁部打ち欠き 胎土は淡灰橙色で白色粒子・黒雲母を含む
4		土師器皿 T種　大型	口径14.0cm　底径7.0cm　器高3.6cm　手づくね後口縁部内底部ナデ　板状圧痕あり 胎土は淡橙色で白色針状物質・黒雲母を含む　口縁部に煤付着
5		土師器皿 T種　大型	口径14.5cm　底径6.4cm　器高3.8cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡黄灰色で白色針状物質・黒雲母・礫を含む
6		土師器皿 T種　大型	口径15.2cm　底径8.0cm　器高3.4cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡黄灰色で白色針状物質・黒雲母・白色粒子・砂粒を含む
7		箸状木製品	長さ24.0cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
8		箸状木製品	長さ23.8cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　両口
9		箸状木製品	長さ20.5cm　幅0.7cm　厚さ0.7cm　片口
10		棒状木製品	残存長12.6cm　径1.1cm　細かい削りで先細に整形
11		円盤型木製品	残存長19.0cm　残存幅4.0cm　厚さ0.3cm　柾目材　縁は歪な弧をなす
12		不明木製品	残存長19.7cm　径1.9cm　厚さ0.7cm　上側面面取りのため断面は蒲鉾型をなす 小孔（貫通３箇所、不貫通１箇所）
図109 13	土坑45	土師器皿 T種　大型	"口径14.1cm　底径5.8m　器高3.0cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は灰橙色で白色針状物質・黒雲母を含む　"
図109 14		土師器内折皿 T種　小型	口径7・6cm　最大径9・1cm　底径5.2cm　器高1.8cm　手づくね後口縁部内底部ナデ　縁は紐で内折を作る 胎土は淡褐色で白色針状物質・黒雲母を含む
15		箸状木製品	長さ17.4cm　幅0.5cm　厚さ0.4cm　両口
16		箸状木製品	長さ24.0cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
17		箸状木製品	長さ25.7cm　幅0.6cm　厚さ0.3cm　両口
18		草履　芯	長さ22.8cm　残存幅4.8cm　厚さ0.4cm　両面全体に植物圧痕のこる
19		連歯下駄	長さ10.6cm　幅6.5cm　高さ2.5cm　板目材　台上面は小判型　歯の下辺は台の幅より広い
20	10b面	土師器皿 T種　小型	口径(9.0)cm　底径(5.9)cm　器高1.7cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色粒子・赤色粒子・黒雲母を含む
21		土師器皿 T種　小型	口径9.8cm　底径5.9cm　器高1.8cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は橙色で白色粒子・赤色粒子・黒雲母・白色針状物質を含む
22		土師器皿 T種　大型	口径13.1cm　底径8.1cm　器高3.1cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色粒子・赤色粒子・黒雲母・白色針状物質を含む
23		土師器皿 T種　大型	口径13.3cm　底径8.1cm　器高3.4cm　手づくね後口縁部内底部ナデ　口縁部煤付着 胎土は淡褐色で白色粒子・赤色粒子・雲母・白色針状物質・礫を含む
24		土師器皿 T種　大型	口径14.8cm　底径7.7cm　器高3.4cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色粒子・・雲母・黒雲母を含む
25		土師器皿 R種　小型	口径8.9cm　底径7.4cm　器高1.7cm　ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で多量の赤色粒子・白色針状物質・雲母を含む
26		東濃型 山茶碗	底径4.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 貼り付け高台　籾殻痕あり　胎土は灰白色　焼成良好　内側に降灰釉
図109 27	10b面	鉄製品　毛抜	長さ6.7cm　幅0.4cm　厚さ0.2cm
28		箸状木製品	長さ17.9cm　幅0.6cm　厚さ0.2cm　片口
29		箸状木製品	長さ25.9cm　幅0.5cm　厚さ0.4cm　両口

表29　第2地点出土遺物観察表(22)

図109 30	10c面	下駄 未成品	長さ20.2cm　幅11.0cm　厚さ3.7cm　左右から歯となる部分に切り込み、連歯を削り出す途中と思われる 前穴貫通　側面炭化
31		不明木製品	残存長10.1cm　幅3.1cm　厚さ0.6cm　柾目材
図110 1	10c面	土師器皿 T種　大型	口径13.9cm　底径8.0cm　器高3.6cm　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・赤色粒子・黒雲母・砂粒を含む
2		竜泉窯青磁 画花文碗	口径(17.0cm)　ロクロ成形　内面に画花文 素地は灰色　釉薬は緑灰色透明　貫入あり
3	柱穴列13	礎板	長さ39.0cm　幅8.9cm　厚さ7.5cm　切り込み、釘孔あり
図112 1	中世以前の遺物	縄文土器	内外面横ナデ　外側に横・斜め方向の沈線 器表面橙灰色　胎芯灰黒色　白色粒子・黒色粒子・多量の黒雲母含む　後期称名寺または堀之内式
2		須恵器長頸瓶	口縁部片　ロクロ成形　器表は茶褐色　胎土は灰色　口縁部から内側にかけて降灰あり
3		須恵器 坏 蓋	径(13.5)cm　ロクロ成形　胎土は灰色　上面に降灰あり
4		須恵器円面硯	残存長9.1cm　残存幅4.5cm　厚さ1.7cm　円面硯の陸部および海部の一部　表面は淡紫灰色、胎芯灰褐色 陸部表面磨耗、陸部と海部の境界に突帯を削り出す　海部は深さ0.85cm、暗緑色の釉付着
5		灰釉陶器　皿	底径(7.7)cm　ロクロ成形　底部糸切り　付け高台　胎土は灰色でやや粗い 内底面に重ね焼きの熔着痕があり、その内側は無釉、外側は灰釉ハケ塗りか　外面体部に灰釉の垂れがある
6		剥片石器	長さ7.4cm　幅6.9cm　厚さ2.0cm　重量89.3g　石材チャート　二次加工が施された剥片 背面に母岩から剥離された後の球心状剥離、腹面縁辺部に非連続的な小剥離が観察されるが、明確な刃部や基部などは形成されていない
図113 1	採集遺物	土師器皿 R種　中型	口径(9.6)cm　底径5.1cm　器高2.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子・白色粒子・雲母・砂粒を含む
2		土師器皿 R種　小型	口径(6.9)cm　底径4.6cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子・白色針状物質・土丹粒を含む
3		土師器皿 R種　極小型	口径3.5cm　底径3.1cm　器高0.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で赤色粒子・白色針状物質・雲母・砂粒を含む
4		白色系土師器皿 T種　小型	口径(7.4)cm　底径(4.0)cm　器高2.0cm　手づくね後口縁部ナデ　胎土は乳白色　焼成良好
5		瀬戸おろし皿	口径(15.0)cm　胎土は灰茶色　灰釉ハケ塗り
6		常滑 こね鉢Ⅰ類	口径(29.7)cm　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ　胎土灰色で長石・石英を含む　鉄分融解付着、 降灰あり
7		常滑 こね鉢Ⅱ類	口径(31.5)cm　底径(15.5)cm　器高11.3cm　輪積みロクロ成形　内外面横ナデ、外面下位縦方向ヘラ調整 器表面赤褐色、胎芯暗灰色で長石・石英を含む　降灰あり　内面磨耗　外底部離れ砂
8		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	底径(3.6)cm　ロクロ成形　外面に蓮弁文　削り出し高台　畳付き露胎 素地は灰色、緻密　釉薬は濃灰緑色で透明　貫入あり
9		漆塗　土器	土器の外面に沈線等で施文した朱漆を塗る　へりに透し窓の円弧の一部を残す　内面は横ナデ 胎土は茶褐色でやや粉っぽく軟質
10		土師質 広口無頸壺	口径(9.3)cm　胎土はやや精良な土師器質土　白色針状物質・黒色粒子・石英・雲母を含む
11		骨製品	残存長7.1cm　幅1.0cm　厚さ0.5cm　断面は半円形　表面は滑らかに磨き 端部は尖り端から0.9cmのところに小孔貫通　用途不明
12		砥石　中砥	残存長9.3cm　幅4.0cm　厚さ2.1cm　上野　淡灰緑色　4面使用
13		木製　皿	口径あ9.4cm　底径7.6cm　器高1.6cm　内外面に黒色が残っており渋下地が塗ってあった可能性が大である 高台は無く、外側面に粗型のあとが残る
14		漆器　椀	胴部片　内外面とも黒漆塗りに朱漆で手描き文(葛と波の構成文)

表29　第3地点出土遺物観察表(1)

図118 1	採集遺物	鉄釘	長さ12.1cm　幅1.1cm　厚さ0.5cm
2	1面	土師器皿 R種　小型	口径(7.8)cm　底径4.8cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・砂粒を含む
3		土師器皿 R種　小型	口径7.4cm　底径3.8cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で白色針状物質・黒色粒子・砂粒・礫を含む
4		土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径4.5cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む
5		土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.0cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子・黒色粒子を含む
6		土師器皿 R種　小型	口径8.0cm　底径4.8cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む
7		土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.1cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・赤色粒子・礫を含む
8		土師器皿 R種　小型	口径7.4cm　底径4.6cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む　口縁部に少量の煤付着
9		土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.6cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む
10		土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.6cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む

表30　第３地点出土遺物観察表(2)

図118 11		土師器皿 R種　小型	口径6.8cm　底径4.3cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙褐色で黒雲母・雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む
12		土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径4.2cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む
13		土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径3.8cm　器高2.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡灰橙色で黒雲母・白色針状物質・砂粒・黒色粒子を含む　口縁部に煤付着
14		土師器皿 R種　小型	口径3.9cm　底径4.5cm　器高2.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む
15		土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径4.0cm　器高2.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む　口縁部に煤付着
16		土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.9cm　器高2.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子・礫を含む
17		土師器皿 R種　小型	口径9.2cm　底径5.7cm　器高2.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子・黒色粒子を含む
18		土師器皿 R種　小型	口径9.2cm　底径4.9cm　器高2.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む
19		土師器皿 R種　小型	口径9.3cm　底径6.3cm　器高2.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む　歪みあり
20		土師器皿 R種　中型	口径11.0cm　底径5.7cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・砂粒を含む
21		土師器皿 R種　中型	口径11.0cm　底径6.3cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙褐色で黒雲母・雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む
22		土師器皿 R種　中型	口径（10.8）cm　底径6.3cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子・礫を含む　内面薄く炭化
23		土師器皿 R種　中型	口径11.0cm　底径6.0cm　器高2・9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡灰橙色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子・黒色粒子を含む
24		土師器皿 R種　中型	口径11.8cm　底径5.3cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子・多量の黒色粒子と土丹粒を含む
25		土師器皿 R種　中型	口径11.3cm　底径6.4cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む
26		土師器皿 R種　大型	口径12.8cm　底径7.3cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・赤色粒子・砂粒・礫を含む
27		土師器皿 R種　大型	口径13.7cm　底径7.0cm　器高3.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・多量の砂粒・黒色粒子を含む　内外面に薄く煤付着
28		土師器皿 R種　大型	口径13.9cm　底径7.4cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む
29	1面	土師器皿 R種　大型	口径12.6cm　底径7.4cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・砂粒・礫を含む
30		土師器皿 R種　大型	口径13.2cm　底径7.3cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子・礫を含む
31		土師器皿 R種　大型	口径12.4cm　底径8.3cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む
32		土師器皿 R種　大型	口径12.4cm　底径7.0cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・礫・赤色粒子を含む
33		土師器皿 R種　大型	口径13.6cm　底径6.7cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・黒色粒子・砂粒・赤色粒子を含む
34		土師器皿 R種　大型	口径13.9cm　底径8.1cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子・黒色粒子を含む
35		土師器皿 R種　大型	口径14.0cm　底径8.4cm　器高3.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒子・赤色粒子・砂粒を含む
36		土師器皿 R種　大型	口径13.6cm　底径7.6cm　器高4.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で黒雲母・雲母・白色針状物質・礫・赤色粒子・砂粒含む
37		土師器皿 R種　大型	底径9.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　故意に縁を打ち欠く 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・砂粒を含む
38		不明土製品	最大径5.3cm　厚さ1.8cm　ロクロ整形　蓋又は土師器皿製作時に柱状に残った部分(その場合は天地逆か) 胎土は橙色で黒雲母・雲母・赤色粒子・砂粒を含む
39		土製品 脚部	右回転ロクロ　底部糸切り　脚部は貼り付け後ヘラ削り　香炉か口径12.4cm 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を含む　焼きは堅い
40		瓦器 火鉢	底部片　輪積み成形　脚部貼り付け、ヘラ調整　外底部砂目 器表は暗灰色　胎土は灰白色で雲母・白色粒子・赤色粒子含む
41		瓦器 火鉢	胴部器高10.8cm　輪花型　輪積み成形　内外面縦方向ヘラ調整　外側に菊花文の押印　外底部砂目 器表は灰色　胎土は明灰色で黒雲母・白色粒子・黒色粒子含む
42		瀬戸 水注	口径（5.7）cm　底径6.4cm　器高7.8cm 胎土は灰色で黒色粒子を含む　灰釉漬け掛け
43		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	口縁部辺　ロクロ成形　複弁 素地は淡灰色　釉薬は灰緑色で透明　外側に大きい貫入入る　内面に無数の擦瑕痕
44		竜泉窯青磁 鎬連弁文碗	底径4.6cm　ロクロ成形　外側に蓮弁文　削り出し高台　畳み付きのみ露胎 素地は肌色で一部灰色　釉薬は灰緑色で不透明、細かい貫入が入る
45		鉄釘	長さ8.5cm　幅0.7cm　厚さ0.6cm
46		砥石 中砥	残長6.7cm　幅3.7cm　厚さ1.5cm 灰橙色　伊予か　砥面は４面　側面に刃物による傷痕
47		磨耗陶片	長さ8・9cm　幅8.1cm　厚さ1.5cm　常滑甕の破片を使用 器表面茶褐色　胎土灰褐色で長石・小石含む

第6章　まとめと総括

今回第1地点と第2地点で、はじめて大倉幕府の時代と推測される層まで到達した。深さ3mを越えるため、安全上の配慮から下層に行くにつれ調査面積は限られたものとなったが、意義はきわめて大きいといわねばならない。

第1節　第1地点調査のまとめ

今回の調査は調査区の状況に制限があった。下層では崩落の危険、上層では現代の撹乱があり、調査対象範囲は面積的には狭いものであった。しかし、今まで「大倉幕府跡」地区内での数少ない調査例に新たな発見を付け加える成果があげられた。

調査区からは合計11面の生活面が検出された。面はいずれも、比較的薄い層位で変遷しており、頻繁に造り替えが行なわれていた様相が見て取れる。短期間に生活面が造り変えられるため、各々の面について年代観を提示する事は無理があるため、時間の流れの中で特徴のある面について取り上げる。

今回の調査では11面として、中世地山が確認された。中世地山は海抜10.3m、現地表から3.3m下に検出された。調査面積が狭いため、残念ながら遺構を確認することは出来なかったが、その覆土からは13世紀初頭の編年観を持つかわらけが出土した。10面についてもほぼ11面と同じような時期が想定し得る。また、その覆土からは瓦の破片が大量に出土した。9面は土丹版築直上に小粒の玉砂利と貝殻片が敷かれ、丁寧に造られている。一方、8面からは柱穴が密に検出されている。このような面の検出状況から推測すると9面と8面の間に土地利用に変化があったように見受けられる。8面～6面の覆土からは手づくねかわらけは出土していない。遺物の出土量が少ないため、詳細は不明だが、13世紀前半に置けるであろう。5面の出土かわらけは厚手で浅い器形を呈し、口径がやや小ぶりで、大皿は12.5cm前後、小皿は8.0cm程度を測る。13世紀中頃～後半の編年観を持つ糸切りかわらけで主に構成される。また、各面の調査面積の差を考慮に入れても、遺物の出土量が多くなる。4面になると、その覆土からは、薄手で寸法が大中小の3つに分かれる13世紀最末～14世紀前半の編年観を持つ糸切りかわらけが多く出土する。4面もまた、遺物の出土量は多い。3面も4面同様の傾向を示す。特に4面は漆器と木製品の出土量が多く、漆器類には見事な図柄が施されている。また、4面の調査対象面積は今回の調査区内においては広く、建物1や鎌倉石の切石が検出された。2面・1面は14世紀後半～15世紀前半に置けるであろう。

大倉幕府は、源頼朝が治承四年（1180）12月に大蔵（大倉）に居館を新築、最初に鎌倉幕府を置いた場所である。その地名を採り大倉幕府と呼ばれている。後に幕府は、嘉祿元年（1225）火災に遭い消失し、翌年に若宮大路東側、宇津宮幕府に移転した。

上記のように個々の生活面を通してみると、「大倉幕府」が置かれた中世初期（中世地山）面が現地表下3.3mに確認され、その後、15世紀に至るまで11面もの生活面が確認されたことは、この地の重要性を証明している。13世紀～14世紀前半にかけてピークがあり、中でも、13世紀初頭の面と遺物が出土したことは大倉幕府跡とされるこの地区に何ら矛盾しない結果が得られた。また、9面までとそれ以後とで検出遺構の傾向に差があることや、10面覆土から瓦の破片が大量に出土したことなどは「大倉幕府」が移転した時期と関連性があることが考えられ、さらに5面・4面に一気に物量が増えることなどは幕府

移転後の土地利用の変化を示していると思われるが、今回の調査面積で多くのことを語るにはあまりにも資料が足りなく、憶測の域を出ず、これ以上言及するのは行き過ぎであろう。今後、さらに周辺の調査により資料が増えていく事を期待している。

（滝澤）

第２節　第２・第３地点調査のまとめ

１．遺構の変遷とその年代

前章で述べた遺構面は大きく10枚とした。しかし、そのうちのいくつかはさらに細分され、総面数はじつに18枚にもなった。これは、決してひとつの面上の錯綜した遺構群を整理段階で切合い関係から分別した結果ではなく、現地で実際に調査した面の数である。呼称上10面にまとめたのは、現地調査の段階でそれぞれの構築層と間層の厚さによって、面相互の近接度と連続・非連続性を判断したことによる。しかし、あらためて検討してみると、細分されたそれぞれの面でさえ、上下で著しい相違を見せるものも少なくない（例えば５ｃ面上層と下層）。したがってここでは、大別であると細別であるとを問わず、すべての検出面を等しく呈示して変遷を追うことにする。

第１期　10ｃ面

本地点中世面中最下層の遺構面になる。第１地点にいう「11面」がこれに相当しよう。非常に大型の柱穴３穴が検出され、うち２穴は同一掘立柱建物の可能性がある（柱穴列13）。礎板中心でみた柱間距離は2.49mで、これは例えば、鶴岡八幡宮旧境内研修道場用地内第４面で見つかった鎌倉時代以前の掘立柱建物平均柱間2.44m・2.62m（斉木ほか1983により馬淵計測、馬淵2004ｂ）や、東京都日野市落川遺跡検出の12世紀初頭前後とされる建物の2.45m（服部2001）に近い。もう１穴（土坑46）の底面にも大型礎板２枚が重なり合って敷かれており、柱穴と推測される。直径は1.5mを優に超えると推定され、柱穴としては異例なほど大きい。南北方向柱穴列の１穴である可能性もあり、とすれば、大倉幕府周辺遺跡群二階堂字荏柄38番１地点で発見された、塀とみられる大型柱穴の長大な列や（馬淵1993）、若宮大路周辺遺跡群小町一丁目322番地点で発見された大型柱穴列（報告書では「土壙」、宮田ほか1997）にも相当するような大型遺構の可能性がある。

面の年代については、中世最古という層位的観点のみに依拠するなら、（『保暦間記』の記事が正しければ）源頼義の時代まで遡りうる。しかし、ここでは面上から出土した竜泉窯青磁画花文碗（図110-2）の存在からみて、12世紀後半から13世紀初頭までのあいだとするのが妥当であろう。つまり、確実に大倉幕府の存続時期と重なる。この点を念頭におきながら上層との相対的な関係を顧慮すれば、鎌倉時代でもごく初期に属することになる。とすればこの面で検出された遺構は、大倉幕府でも最初期の施設の一部をなすとみて間違いない。なお、もう１点の面上遺物である土師器皿Ｔ種（図110-1）は、層位的に確実な資料として留意しておきたい。

第２期　10ｂ面

これも基盤層上面に形成された、やや挟雑物の多い灰色味を帯びた土の上面にある。諸要素から勘案して、第１地点「10面」が相当しよう。南北方向の溝（溝11・溝状遺構７）と柱穴列（柱穴列12）、土坑などで構成される。遺構の状況は、大型柱穴のあった前代とはなはだしく異なる。

面の年代は、遺物の大半が土師器皿Ｔ種なので、まずは大きくみて13世紀前半までと規定できる。こ

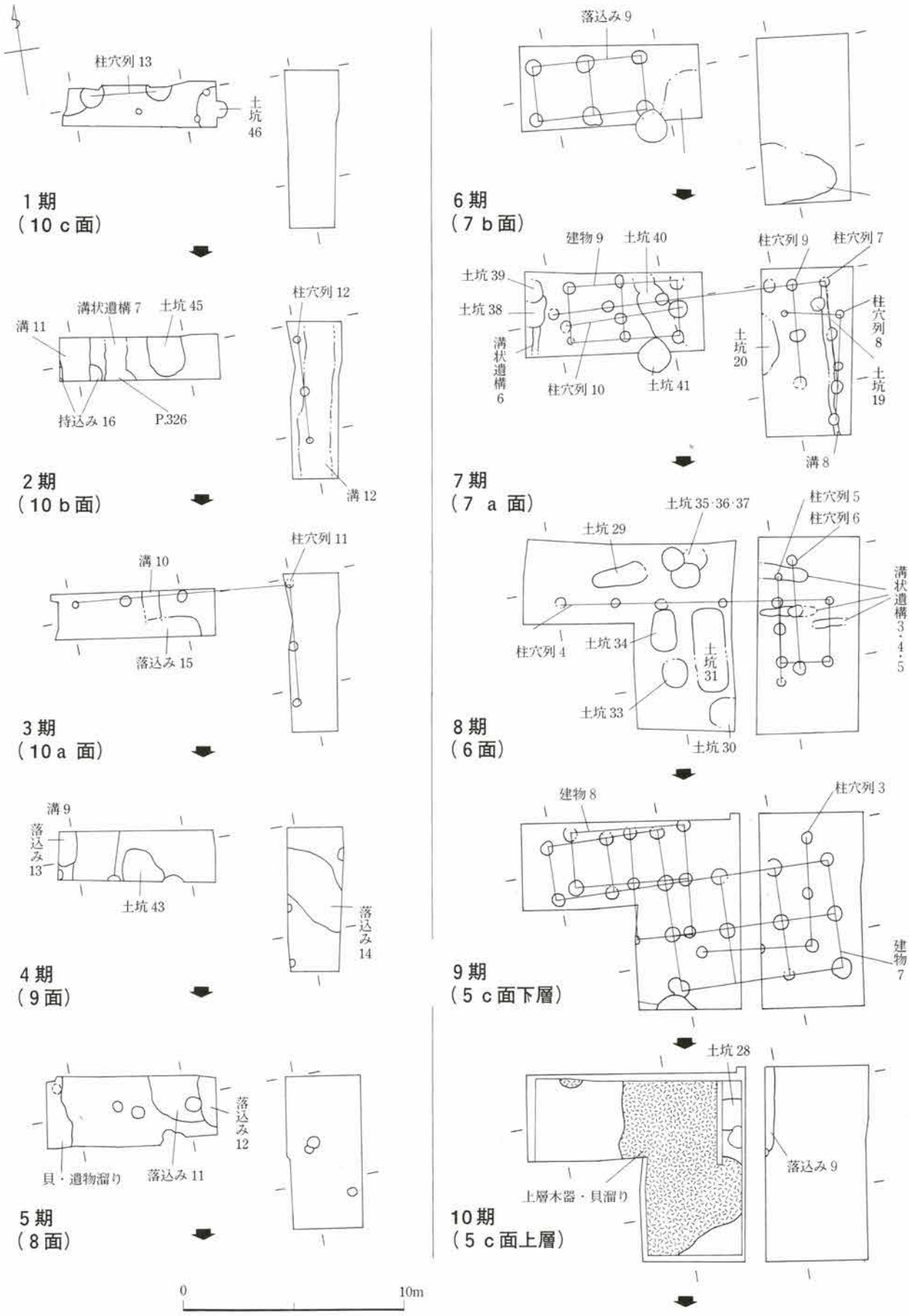

柱穴列 13
土坑 46
1 期
（10 c 面）
溝状遺構 7
土坑 45
溝 11
柱穴列 12
持込み 16
P.326
溝 12
2 期
（10 b 面）
柱穴列 11
溝 10
落込み 15
3 期
（10 a 面）
溝 9
落込み 13
土坑 43
落込み 14
4 期
（9 面）
落込み 12
貝・遺物溜り
落込み 11
5 期
（8 面）
落込み 9
6 期
（7 b 面）
建物 9
土坑 40
柱穴列 9
柱穴列 7
土坑 39
土坑 38
溝状遺構 6
柱穴列 10
土坑 41
土坑 20
柱穴列 8
土坑 19
溝 8
7 期
（7 a 面）
土坑 35·36·37
柱穴列 5
柱穴列 6
土坑 29
溝状遺構 3·4·5
柱穴列 4
土坑 34
土坑 31
土坑 33
土坑 30
8 期
（6 面）
建物 8
柱穴列 3
建物 7
9 期
（5 c 面下層）
土坑 28
落込み 9
上層木器・貝溜り
10 期
（5 c 面上層）
0
10m

図119　遺構変遷図(1)

のうちいくつかは溝11への一括投棄的状況を示している。注意を要するのは東濃型山茶碗１点の出土で（図109-26）、内底面中央部の指なでによる凹部の形成状況から、白土原窯前後の時期に属するとみたい。これは、藤澤良祐に従えば、13世紀前半の時期となる（藤澤1997など）。土師器の年代は12世紀末まで含む可能性があるのに対し、図109-26の場合は、上層遺構の掘り残しでなければ13世紀第２四半期を大きくは遡らない。とすればこの面は、次代第３期と時期的にかなり近接した、大倉幕府存続期間でも後半にかかる時期のものかもしれない。

もうひとつ忘れてならないのは、機織関連の遺物（図108-6）や下駄未成品（図108-30）の存在で、ここがこの時期職能民の活動した場所だったことを物語る。図108-6は溝12からの出土だが、幕府の郭内だとすれば、場所によってはそのような空間が形成されていたのだろうか。

第３期　10a面

標高からみて、この面が第１地点の「９面」に相当するのであろう。建物の一部とおぼしいカギ型の柱穴列（柱穴列11）と、その柱の間を抜ける溝（溝10）、および建物の範囲におさまる落込み（落込み15）などがある。柱間距離は、東西1.98m、南北2.13mと、鎌倉時代前期までに通有のあり方を示す。すなわち、北条泰時以後地行によって街区が本格的に整備され、柱間がほぼ２mに統一される13世紀第２四半期（馬淵1994など）までは降らないと考える。

面からの出土遺物は、土師器Ｔ種を主とする中にＲ種の低い器高のもの（図107-8）が混じる。後者は口縁直下が浅くくびれ、さらに器壁と外底部の境界より若干小さな径の糸切り部をもつもので、鎌倉時代前期の層から出土する例が多い（向荏柄遺跡Ⅱ面上など、馬淵1985）。

以上を勘案すれば、この面も大倉幕府の時代のものとみてよい。またそうだとすれば、大倉幕府期をすでに抜けている次代第４期との相対的関係から、13世紀第１四半期頃ということになる。高麗象嵌青磁碗（図107-10）は鎌倉時代でも早い時期の貴重な例である。目盛のような刻みの入った木製品（図107-19）は、刻み目の間隔が1.9～3.2cmと不揃いだが、物指とすればこれも鎌倉時代前期の職能民に関する数少ない資料である。目盛間の平均は2.47cmで、佐助ヶ谷遺跡佐助一丁目566番１地点出土品に2.491cmの例がある（斉木ほか1993、平均値は田畑2000による）。

第４期　９面

この面が第１地点の「８面」に相当するとみられる。南北方向の溝（溝９）と、腐食土の入ったいくつかの落込みにより構成される。東半部を斜めに過（よぎ）る落込み14は、蛇行する溝である可能性もあるものの、西半部では検出されていない。上層の８面にはちょうど落込み14を延長した位置に落込み11・12があるが、切込み肩に20cm近い比高差があるので別遺構と判断した。全体に腐植土層に覆われ、泥岩地行面は弱い。なお第１地点では柱穴らしき落ち込みが、多数検出されている。

出土遺物にはこね鉢・漆器・箸状木製品・折敷等、日常生活をうかがわせる遺物が多い。年代的には２点の常滑こね鉢（片口鉢）。類が含まれる（図104-7・8）とともに、同Ⅱ類の初期形態があり（図104-9・10）、これは13世紀第2四半期～中葉前後を示す。貿易陶磁では、竜泉窯青磁画花文碗が数点含まれる（図102-2／図104-14・15）一方で、同鎬連弁文碗はみられない。土師器にはＴ種が多く、Ｒ種は大小いずれも全体に楔形の器壁をもつ（図103-1／図104-6）。竜泉窯青磁画花文碗といい土師器皿Ｔ種といい、おおむね13世紀中葉までに搬入あるいは生産の終末を迎える（馬淵1998ｂ pp.247・248ほか）。以上の諸要素から、面の年代は大きく13世紀第２四半期のうちにおさまるとみてよかろう。したがってこの層の段階で、年代的にははやくも大倉幕府の時代を脱していることになる。

第５期 ８面

第１地点における「７面」がこれであろう。しっかりとした泥岩地行の上にある。泥岩層は東半部で厚く、西半部で薄い。西端部に貝や遺物の集中する箇所がある（貝・遺物だまり）。面上には礎板が散見され、市内でしばしば発見されるほとんど掘り込みを持たない町屋風の建物と似た状況が看取される。それを裏付けるように、板杼（７a面土坑38出土、図98-8）、張手棒（図101-15）など染織関係遺物の出土が多い。関連職人の存在を示唆するものだろう。

面の年代は、小さな破片ではあるが常滑甕口縁部（図101-6）に13世紀中葉前後の様相が認められることと、前後の層との相対関係から、13世紀中葉近くの同第2四半期と考えたい。

第６期　７b面

標高、様相ともに、第１地点における「６面」に共通する。厚さ30cmの良好な泥岩地行の上面に礎板をもつ掘立柱建物（建物10）や、浅い皿状の落込み（落込み９・10）で構成される。建物柱穴はいずれも一抱えもある大きなもので、これがかなり大型の建物であることを示唆する。東西方向の柱間距離は平均でちょうど２m、大倉幕府期の10ｂ面柱穴列13の2.49mより50cmほども短い。２mの柱間は、嘉禄元年（1225）幕府の宇津宮辻子への移転時に北条泰時が導入した「丈尺制」にともない、統一的に採用された規格と考える（馬淵1992ほか）。

出土遺物に乏しく面の暦年代を決めるのは難しいが、13世紀中葉前後と考えて大過あるまい。

第７期　７a面

第１地点の「５面」に相当する。掘立柱建物（建物９）や柱穴列（柱穴列７～10）、土坑群（土坑19・20・38～41）・溝のような落込み（溝状遺構６）等から構成される。柱穴列のうちいくつかは、建物として調査区外へ伸びるであろう。土坑41は瓜の種子などを多く含んでおり、便槽の可能性を指摘できる。ここにみられるのは掘立柱建物と便所の組み合わせであり、住民の階層はともかくも、居住空間の一つの例が示されている。なお、都市民の居住域に特徴的なごく浅い掘り込みを持つ建物ではないことから、居住階層を敢えていうとすれば武士の可能性のほうが高いと考える。

年代は、竜泉窯青磁鎬連弁文碗（図96-8）や同青磁鉢（大宰府分類Ⅱ類、図96-9）の存在、また常滑こね鉢Ⅰ類の存在、および前後の層との相対的な位置関係から勘案して、13世紀中葉～第３四半期とするのが妥当だろう。

第８期　６面

第１地点「４面」は標高と面の様相でこれとよく一致するが、次代５ｃ面下層とも矛盾しない。

本地点では二つの調査区の境界付近で遺構のあり方が異なる。すなわち以東では南北柱穴列（柱穴列５・６）など柱穴が多く、加えて東西の細長い土坑（溝状遺構３・４・５）がいくつか存在する。これに対し、以西では浅いが大きな土坑群を主体とする。調査区境界付近には南北に長い泥岩塊が置かれており、これが例えば上がり框の踏み石のような何らかの境界標識であることが推測される。この一帯には貝・砂のよく締まった層がかなり広範に認められた。このような空間構成は、筆者の知るところでは若宮大路周辺遺跡群雪ノ下一丁目210番地点下層遺構（馬淵1990）など町屋とされる遺構に多い。

面の年代は常滑こね鉢Ⅰ類の多いこと（図94-7～12）、竜泉窯青磁では鎬連弁文碗Ⅰ類（大宰府新分類による、図94-21・23）・Ⅲ類（図94-22）ともにあること、また常滑甕の口縁形態などからみて、第７期よりは若干降る第３四半期と考えたい。遺物にはこね鉢のほか曲物底（図94-32・33）や自在鈎（図95-56）など、日常生活を感じさせるものが多い。また下駄未成品の存在は（図95-52）、職能民の存在を示唆している。以上の諸要素からみて、この面の住民を、武士ではない都市民階層と推測するのが適当だろう。

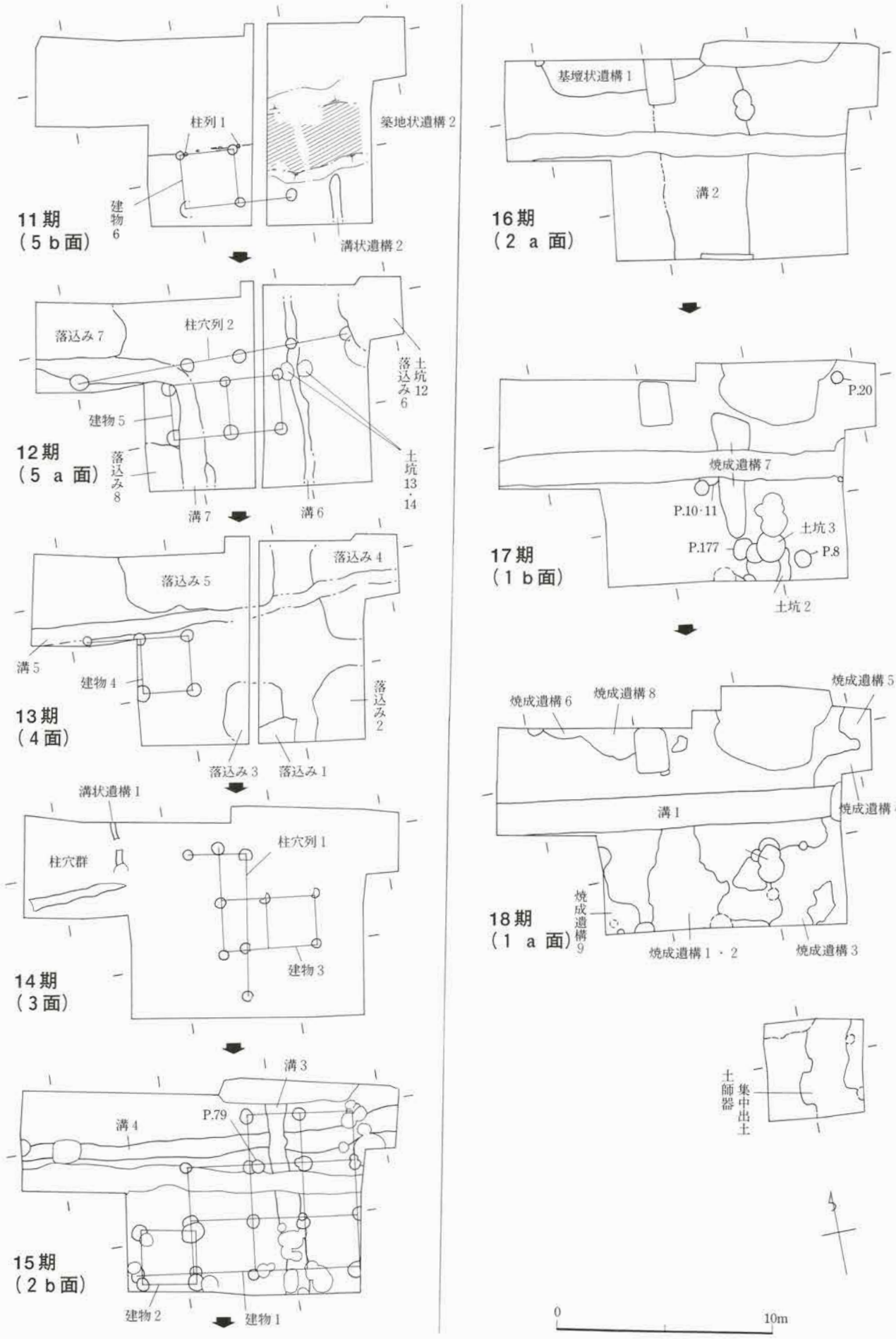

11期
（5b面）
柱列1
築地状遺構2
建物6
溝状遺構2
12期
（5a面）
落込み7
柱穴列2
落込み6
土坑12
建物5
落込み8
土坑13・14
溝7
溝6
13期
（4面）
落込み5
落込み4
溝5
建物4
落込み2
落込み3
落込み1
14期
（3面）
溝状遺構1
柱穴群
柱穴列1
建物3
15期
（2b面）
溝3
溝4
P.79
建物2
建物1
16期
（2a面）
基壇状遺構1
溝2
17期
（1b面）
P.20
焼成遺構7
P.10·11
土坑3
P.177
P.8
土坑2
18期
（1a面）
焼成遺構6
焼成遺構8
焼成遺構5
溝1
焼成遺構4
焼成遺構9
焼成遺構1・2
焼成遺構3
土師器集中出土
0
10m

図120　遺構変遷図(2)

第９期　５ｃ面下層

面の状況からみて、これも第１地点「４面」の可能性がある。掘立柱建物２棟（建物７・８）と柱穴列１列（柱穴列３）などの遺構がある。多くが礎板を持っている。建物は調査区外に伸びることが予想され、かなり大型であることは確実である。武士の住居である可能性は高い。その一方で、織機部材（図91-33・37）、杓子（図91-12）や箸状木製品など食膳具の大量出土は、ここが紡織を営む人びとの日常生活の場でもあったことを示している。

出土遺物からみた層の年代は、常滑こね鉢Ⅱ類の早い形態（図91-5）を含むことと、同Ⅰ類の存在から、13世紀第３四半期とすべきだろう。

第10期　５ｃ面上層

５ｃ面上部を覆う、木製品や食物残滓とみられる貝類を大量に含む厚い層。第１地点「４面」を覆うという、木質のよく遺存する土がこれであろう。湿潤・柔弱な腐植土で、先の５ｃ面下層とまったく様相を異にする。この層からは建物は発見されなかった。下層同様に大量の日常什器や生活用品を含んでいる。あるいは下層の建物７・８が住居、この上層面がその生活痕跡で、地行により面が更新されるとき、後者が共々にゴミとして封じ込められたのだろうか。箸や折敷が草履などと共伴しているのは、何か突発的な要因でこの住居を放棄せざるを得なくなったのかもしれない。物指（図87-78・79）の出土は、職能民の存在を示すものだろうか。あるいはこれらの木製品を使った呪術性を帯びた儀式の存在した可能性を視野に入れておいてもよいだろう。

年代は、竜泉窯青磁の大宰府分類でⅢ類の鎬連弁文碗があり、（図85-19・20）、また土師器皿の小型品（図85-１～６）は斜め上方に楔形に伸びる形状のものが多いことから、下層とあまり時期差のない13世紀第３四半期と考えたい。

第11期　５ｂ面

築地のような盛上り（築地状遺構２）が東から伸び、建物１棟（建物６）と柱の列１列（柱列１）がその西側にあり、南に向かっては溝状の細い落込み（溝状遺構２）が生まれる。後述の５ａ面の諸建物もほぼ調査区中央部に東限があるので、基本的にはその地割の名残かもしれない。築地状盛上りの意味はこれだけではつかみにくい。柱列の角柱は一辺10～11cmほどもあり、３尺ないし４尺の値を示す。これまで市内の町屋とされる遺構から検出されたもの（先述の若宮大路周辺遺跡群雪ノ下一丁目210番地点遺構など）に比べて太く、しっかりした印象がある。

出土遺物には、常滑こね鉢Ⅰ類（図82-９）とともに東濃型山茶碗数点（図82-５～８）が含まれている。したがって、やはり13世紀第３四半期ではあるとしても、５ｃ面との相対関係から第４四半期に近い頃としておきたい。この面からも箸や板草履といった生活臭のあるものが出土しているが、一方で鳴鏑（図81-２）の出土もあり、柱の太さからみても、いちがいに町びとの居住空間とは決められまい。

第12期　５ａ面

建物と柱穴列（建物５・柱穴列２）、腐食土のつまったいくつかの土坑や落込み（土坑12～14・落込み６～８）、そして屈曲溝（溝７）などで構成される。建物は柱穴列以南にあるが、さらに南の調査区外に伸びる可能性は少ない。建物の東縁には細い溝があり（溝６）、雨落ち溝の役目を果たしているのかもしれない。西北から入ってきた屈曲溝は柱穴列と建物をくぐるように直角に南に折れ、さらに調査区外に抜ける。屈曲溝は逆台形の整った断面で、今小路西遺跡（御成小学校内）３ｂ面北側武家屋敷で検出された「遣水」に似ているようにも見えるが、詳細は不明である。あるいは、断面観察ではうかがえなかったが、建物と屈曲溝との間には、短時日のうちにも時間的先後関係が存在するのだろうか。

出土遺物の年代は、複数の東濃型山茶碗の存在（図74-4・図75-2・図79-11）からみて、広く13世紀後半として大過なかろう。多種多様な食膳具・生活用品とともに、板締め染型板（図80-33）が出土しているのは、やはり染色職人の存在を想定してよいのだろう。

第13期　4面

第1地点「3面」に相当しよう。溝があり（溝5）、それに接して建物が建ち（建物4）、近くには腐食土のつまった隅丸方形に近い落込みがいくつかある（落込み1～5）。落込みはいずれも浅く、木製品等の遺物を多く含む。ときには落込み2のように、土師器の大量出土をみることもある。この腐植土が何なのか。5c面上層にみられたように、ある生活空間が面の更新にともなって地行下に封じ込められたのだとすれば、それは何を契機に起きるのか。あるいは例えば宴会のような、限定的時空間（じくうかん）の事物を廃棄する際、それらの載っていた植物質のござのようなものも一緒に封じ込められるのだろうか。ここにはおそらく、たいへん重要な問題が含まれている。

この面の年代は、判定の材料を欠くため、これも大きく13世紀後半といっておきたい。遺物にはここでも板草履など生活用具が多い。

第14期　3面

建物があり（建物3・柱穴列1）、これとは別にカギ形の溝（溝状遺構1）がその西北部に配置される。カギ形溝の内側には多くの柱穴があり、組み合わせは不明確ながら、建物の存在は十分に想定できる。

遺物からみた年代は、渥美山茶碗（図65-10）や常滑こね鉢Ⅰ類（図65-11）が含まれていることから、若干時代が13世紀中葉にまで遡行したかのような印象がある。しかし、2点の常滑甕（図65-13・14）の口縁形態や同こね鉢Ⅱ類（図65-12）の存在を考えると、13世紀後半とするのが妥当だろう。出土遺物には食膳具や台所用品が多く、生活感が漂う。

第15期　2b面

次代2a面とともに、第1地点「2面」に相当する。2棟の建物（建物1・2）と、それにほぼ主軸方位の直交ないし平行した溝（溝3・4）によって構成される。2本の溝には先後関係があるが、建物との関係は明瞭でない。建物のうち1棟（建物1）は狭い調査区内でもかなり広範に柱穴が見つかり、多くに礎板があることを確認した。

出土遺物は土師器が主で、年代判定の可能な搬入品を欠く。しかし、おおむね13世紀後半代、それも前後の層との相対関係からみて、第4四半期主体と推測されよう。

建物の性格については、ここまでのように生活用具が豊富ではなく、また総柱建物であることから武士階級を想定したいが、確証を欠くといわねばならない。生活用具の少ないことについては、この層はすでに湧水層より高く土中に水分が乏しいため、木質が残りにくいことが理由の一つかもしれない。

第16期　2a面

これも第1地点「2面」に相当する。2b面とは大きく異なる様相をもつ。

調査区北域に隅丸方形（と推測される）の基壇状の盛り上がりがあり（基壇状遺構1）、基壇状遺構南辺の壇下には一抱えもある凝灰岩が2個並べて置かれる。その南側には泥岩あるいは凝灰岩の散在する細長い場所がある。後者は何らかの通路であり、前者はそこから壇上にのぼる踏み石のようなものか。一帯には礎板が散見されるが、相当攪拌を受けており、建物とするには足りない。調査区中央部には南北の幅広溝（溝2）がある。溝の東縁には泥岩や凝灰岩が、やや雑に並べられており、おそらくその東側にある平坦部の西側境界を示す。

出土遺物には、瀬戸のこね鉢Ⅰ類（図55-11）や常滑こね鉢Ⅰ類（図57-39）、また瀬戸入子（図58-51

～53）や竜泉窯青磁鎬連弁文碗（図58-54）など13世紀中葉～後半のものも少なくないが、少なからぬ量の瓦器火鉢（図57-34～38）の出土と、常滑甕類の口縁形態（図58-44～48）は、この面がもはや13世紀末以降までかかることを示している。すなわち、主体を14世紀第１四半期頃に置き、同第２四半期まで視野に入れるべきだろう。

鍔鍋（図55-10・図57-32、同一個体か）の出土も注意を要する。従来これらは14世紀後半頃からの出土を指摘されることが多いが、14世紀前半であれば早い形態が成立していた可能性を考慮に入れておきたい。遺構の性格は、はかりがたいが、基壇上に何か小堂のようなものがあったのではないか。全体に大きな地割が示されるところから、あるいは武士居館内の持仏堂とその周辺なのかもしれない。

第17期　１ｂ面

次代18期とともに第１地点「１面」に相当する。上層１ａ面の土師器焼成遺構群を剥ぎ取った面で、いくつかの土坑（土坑２・３）や土師器の入った小穴（p.10・11など）などがあるほか、細長い焼成遺構１基（焼成遺構７）がある。この地はこの時点から、土器生産にたずさわる人々の活動する場になった。一帯に当地点の焼成遺構は不整形で深さも一様でないが、この面の焼成遺構７は平面的にはほぼ舟形で、整っている。掘り込みは深くない。

年代は、土師器のみでは判断しがたいものの、わずかにp.177から出土した瀬戸おろしⅢ（図53-４）を指標にするとすれば、明らかに古瀬戸中Ⅲないし Ⅳ期に入っている。14世紀前半～中葉、すなわち鎌倉時代終末を前後する時期としておきたい。本地点における土師器の焼成はこの時期に始まり、以後何度も繰り返される。面からの出土遺物には15世紀のものが含まれているが、焼成遺構群自体がそこまで下るかは疑問としておく。しかしいずれにせよ、これは市内で先に発見された杉本寺周辺遺跡の土師器焼成址（馬淵ほか2002）よりも時代を下るものである。

第18期　１ａ面

第１地点「１面」に相当。本地点の最上位層。第２地点では、全体に焼土と土師器が散在する状況であったが、いくつかの濃密なまとまりは認められ、それぞれを単体の焼成遺構と見做した（焼成遺構１～６・８・９）。これにはごく浅い落ち込みをともなう平面的なもの（４・４下・５・６・８・９）と、やや深い掘り込みを持つもの（１・２・３）との二種類がある。両者の違いが何にもとづくのかは明瞭でない。

第３地点で検出された土師器の集中的な出土は、第２地点ではこの面に相当する。土器焼造にともなう物原・灰原の可能性もあるが、焼損じとは見えないものが大半で、あるいは剰余なのかもしれない。年代的には第17期とそれほどの差はなく、14世紀前半～中葉が充てられよう。

土師器生産址の検出は、杉本寺周辺遺跡（馬淵ほか2002）に次いで鎌倉で二例目である。平安時代後期以降、土師器の窯は周知のように垂直焔式で天井のない、いわゆる「煙管窯」と呼ばれる形式のものが多い（関口1983・中山2001ほか）。杉本寺周辺遺跡のものといい、本遺跡のものといい、明瞭に窯体構造を示す痕跡は乏しいが、二つの隅丸方形土坑が縦に連なる焼成遺構３や、不整形ながらも同様に２基の土坑が連接した６・９に、その可能性を見出すことができるのではないか。

平安時代末期以降の土師器には、それ以前の土器と異なり、いわゆる黒斑の発生が少ない。とりわけ鎌倉時代後期になるとまったく見られなくなる。黒斑は一般に、稲藁や灰などによって被覆された部分が完全に酸化しないために起きるとされる。だが、何段も積み重ねられた場合の中間層に位置するものには、灰などが被らないため、生じないという（久保田1989）。そのためにはたとえば煙管窯などの構造を必要とする。ここもそうであった可能性が高い。

以上、鎌倉時代の初め、大倉幕府の頃から濃密な人の活動痕跡がうかがわれる。廃絶後も頻繁に住民の交代があったことがわかる。

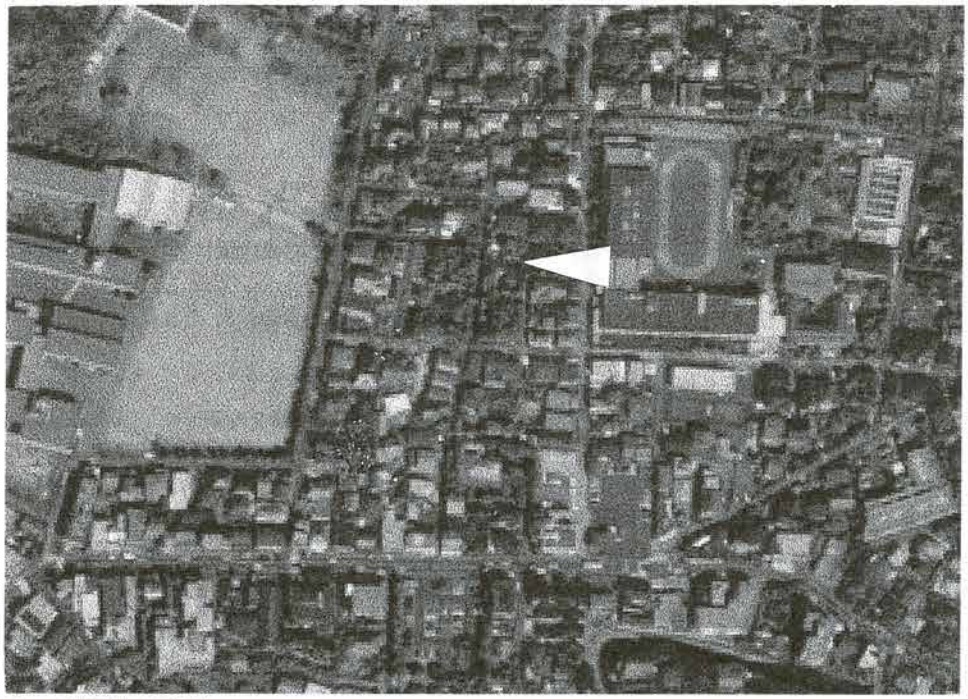
（馬淵）

引用・参考文献（本報全体に共通）

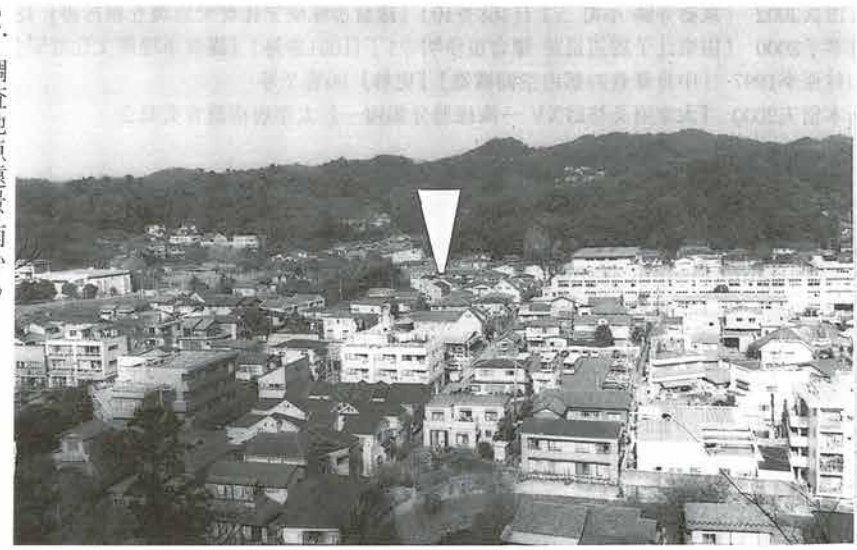
赤星直忠1959 『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
赤星直忠1977 『東勝寺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
赤星直忠1983 『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 19. 東勝寺跡』鎌倉市教育委員会
石井進1986 「中世六浦の歴史」『三浦古文化』40号 三浦古文化研究会
伊藤正義1992 「鎌倉・大倉幕府から宇津宮辻子幕府へ」安田元久編『吾妻鏡』の総合的研究』
上本進二2000 「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『神奈川県逗子市 池子桟敷戸遺跡』東国歴史考古学研究所
宇田川政宏1980 『鎌倉考古１ 鶴岡八幡宮境内遺跡』
太田静六1992 『寝殿造の研究』吉川弘文館
鎌倉市教育委員会編1971 『としよりのはなし』
河野眞一郎1980 『鎌倉考古４ 雪ノ下南御門遺跡の第Ⅱ期調査』鎌倉考古学研究所
河野眞一郎1980 『鎌倉考古２・４ 雪ノ下南御門遺跡の第Ⅰ期調査』鎌倉考古学研究所
河野眞一郎ほか1990 『今小路西遺跡（御成小学校内）』鎌倉市教育委員会
菊川泉2001 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下字大倉耕地562番16」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 第２分冊
菊川英政1989 「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目432番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』５
菊川英政1989 「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目395番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』５
菊川英政1991 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下大倉耕地565番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』７ 第３分冊
菊川英政1993 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下三丁目606番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』９ 第３分冊
菊川英政1994 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下三丁目607番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10 第１分冊
菊川英政ほか1998 『東勝寺跡』鎌倉市教育委員会
久保田正寿1989 『土器の焼成１―土師器の焼成実験―』
斉木秀雄ほか1983 『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』鶴岡八幡宮
斉木秀雄ほか1993 『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
斎木秀雄ほか2004 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下三丁目607番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20 第２分冊
佐伯真一・高木浩明1999 『校本 保暦間記』和泉書院
汐見一夫1999 「大倉幕府跡 雪ノ下三丁目651番８外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15 第２分冊
汐見一夫ほか2001 「東勝寺跡 小町3丁目523番14地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 第２分冊
汐見一夫2002 「大倉幕府跡 雪ノ下三丁目618番４地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 第１分冊
宗臺秀明ほか 「政所跡 雪ノ下三丁目989番４地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 第１分冊
鈴木茂1996 「宇津宮辻子幕府跡の花粉分析」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 第１分冊
鈴木茂1999 「神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊」『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集ｐ.131-139
鈴木千歳1976 「鎌倉史蹟疑考」『鎌倉古絵図・紀行 ―鎌倉紀行篇』東京美術
関口広次1983 「天井のない窯の話」『佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集』
瀬田哲夫1992 「政所跡 雪ノ下三丁目965番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』８
瀬田哲夫1992 「政所跡 雪ノ下三丁目966番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』８
高橋慎一朗2003 「中世鎌倉における将軍御所の記憶と大門寺」『年報 都市史研究』11
高柳光寿1959 『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
手塚直樹1990 『釈迦堂田楽辻子遺跡』釈迦堂田楽辻子遺跡発掘調査団
手塚直樹ほか1993 「政所跡 雪ノ下三丁目988番」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』９ 第３分冊
田畑衣理2000 「鎌倉市内出土の「ものさし」」『鎌倉考古』』46 鎌倉考古学研究所
中山雅弘2001 「瓦器・かわらけの生産」小野正敏編『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会
貫達人・川副武胤1980 『鎌倉廃寺事典』有隣堂
野本賢二1998 「横小路周辺遺跡 雪ノ下五丁目557番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14 第２分冊
野本賢治1999 「政所跡 雪ノ下三丁目970番２外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15 第２分冊
服部実喜2001 「南関東地域における中近世建物遺構の変遷」『埋もれた中近世の住まい』同成社
原廣志ほか1996 「北条高時邸跡 小町三丁目426番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 第１分冊
原廣志ほか2001 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目580番10外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 第２分冊
原廣志ほか2002 「大倉幕府周辺遺跡群 二階堂字荏柄58番4外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 第１分冊
原廣志ほか2003 「横小路周辺遺跡 二階堂字荏柄10番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19
藤澤良祐1997 「中世瀬戸窯の動態」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第５輯

福田誠ほか1996 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下字天神前562番29地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 第1分冊
福田誠ほか2000 「横小路周辺遺跡 二階堂字荏柄10番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 第2分冊
松尾宣方ほか1985 『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』鶴岡八幡宮
馬淵和雄1983 『鑢ヶ谷北遺跡』鑢ヶ谷北遺跡発掘調査団
馬淵和雄1990 「若宮大路周辺遺跡群 雪ノ下一丁目210番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6
馬淵和雄1992 「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉』69 鎌倉文化研究会
馬淵和雄1993 「大倉幕府周辺遺跡群 二階堂字荏柄38番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9 第2分冊
馬淵和雄1994 「武士の都 鎌倉 —その成立と構想をめぐって—」『中世の風景を読む2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社
馬淵和雄1998a 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14 第2分冊
馬淵和雄1998b 『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
馬淵和雄1999 『大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地点』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬淵和雄2002 「北条小町邸跡 雪ノ下一丁目400番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 第2分冊
馬淵和雄2003 「北条小町邸跡 雪ノ下一丁目401番5ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19
馬淵和雄2004a 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目567番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20 第2分冊
馬淵和雄2004b 「中世都市鎌倉成立前史」『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院
馬淵和雄ほか1985 『向荏柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
馬淵和雄ほか1990 『大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下字大倉耕地569番1地点』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
宮田真ほか1983 『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』鶴岡八幡宮
宮田真ほか1991 『政所跡』政所跡発掘調査団
宮田真ほか1997 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 小町一丁目322番地点』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
宮田真ほか2000 『東勝寺跡発掘調査報告書』東勝寺跡発掘調査団・宮田事務所
宮田真2002 「東勝寺跡 小町三丁目468番10」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 第1分冊
森孝子2000 「田楽辻子周辺遺跡 鎌倉市浄明寺1丁目661番外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 第1分冊
山村亜季1997 「中世鎌倉の都市空間構造」『史林』80巻2号
山本信夫2000 『大宰府条坊跡XV —陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会

図版 1



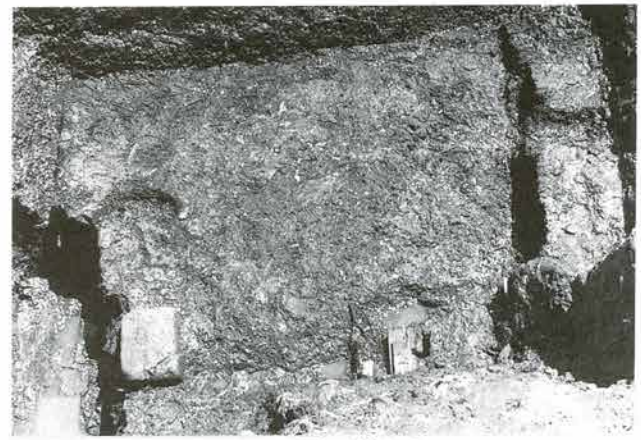
1．調査地点鳥瞰



2．調査地点遠景 南から

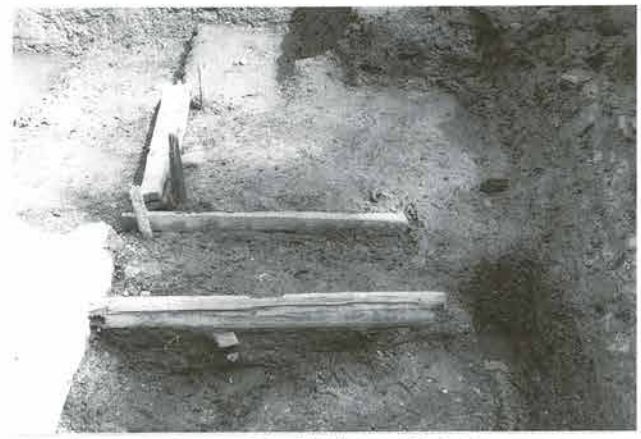
3．調査地点近景（奥右工事中建物が第1地点）

1．1面　北から



5．4面　西から

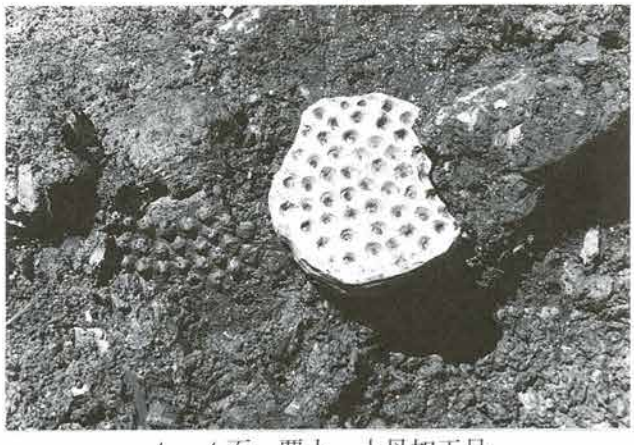
2．2面　北から



6．4面　建物1　西から

3．3面　西から

7．4面　建物1　南から



4．4面　覆土　土丹加工品

8．4面　遺物出土状況　南から

第1地点

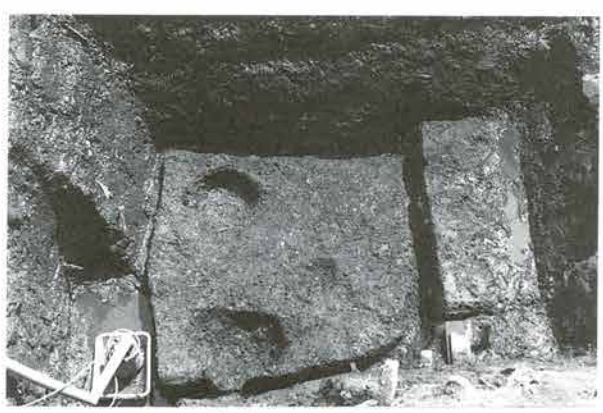
図版 3

1．4面出土漆器

2．同上内容物

3．5面　西から

4．6面（溝1）　西から



5．7面（P4・5）　西から

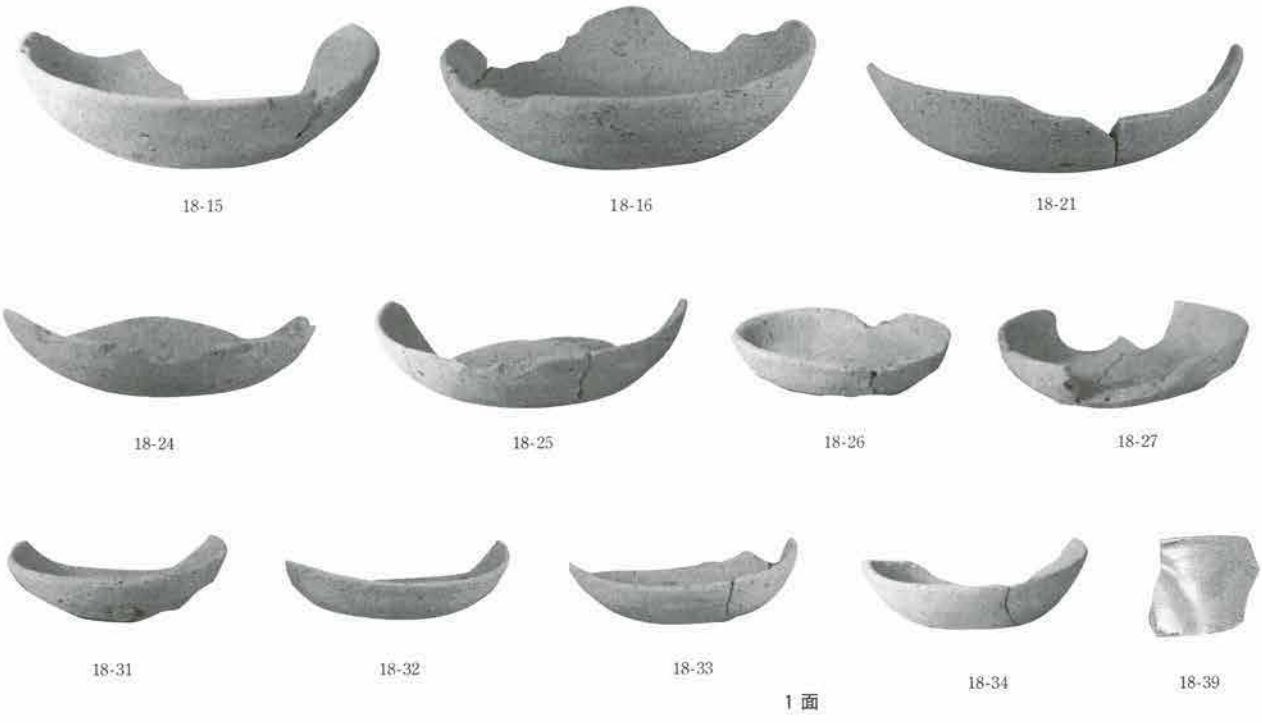
6．8面（P6～12）　西から

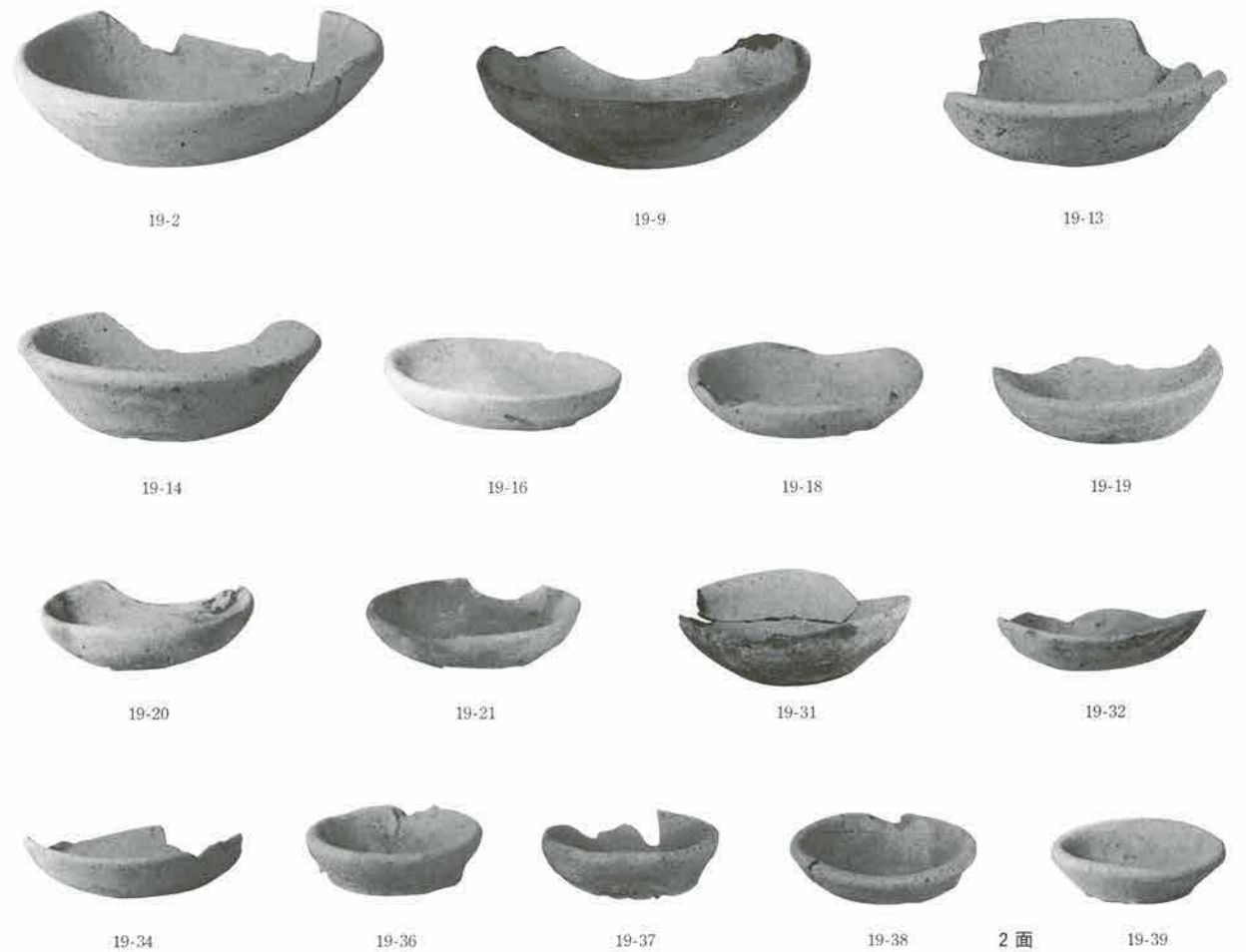
7．9面　西から

8．10面　西から

9．11面（中世地山）　南から

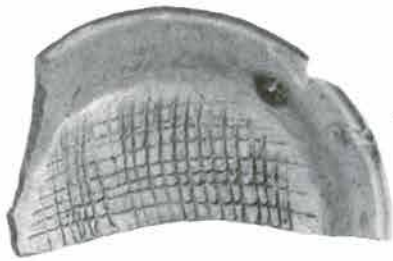
第1地点


18-15
18-16
18-21
18-24
18-25
18-26
18-27
18-31
18-32
18-33
18-34
18-39
1 面

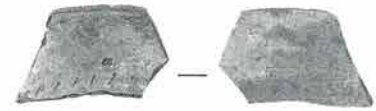

19-2
19-9
19-13
19-14
19-16
19-18
19-19
19-20
19-21
19-31
19-32
19-34
19-36
19-37
19-38
2 面
19-39

第 1 地点　出土遺物(1)

図版 5

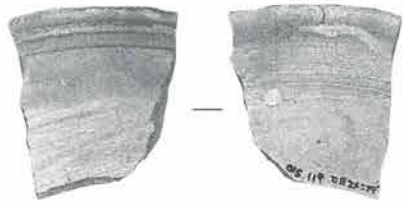


19-42

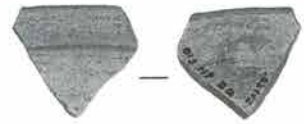


19-43

19-44



19-45



19-46

19-47

19-48

19-50

19-51

19-54

20-6

2 面

21-1

21-2

21-3

21-7

21-9

21-19

21-27

21-29

21-39

21-40

21-41

21-44

21-53

3 面

21-60

第 1 地点　出土遺物(2)

18-64　21-65　21-66　21-68

22-2

23-6

3 面　22-11

24-1

24-3

24-5

24-7

24-3

24-15

24-16

24-18

24-24

24-38

24-47

4 面

24-51

第 1 地点　出土遺物(3)

図版 7

24-56

24-57

24-58

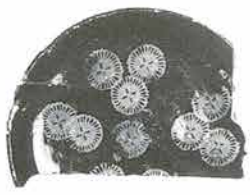
24-62

24-63

25-13

25-14

25-15



25-16

25-17

25-18

25-19

25-20

25-21

25-27

30-3

30-4

30-5

4 面建物 1

31-3

31-4

31-23

31-44

31-47

31-50

31-65

31-71

31-72

31-76

31-83

31-86

31-87

5 面

31-91

第 1 地点　出土遺物(4)

32-1

32-2

32-3

32-4

32-5

33-1

34-1

34-10

5面

36-3

36-6

36-7

36-14

6面

36-16

7面

36-17

38-6

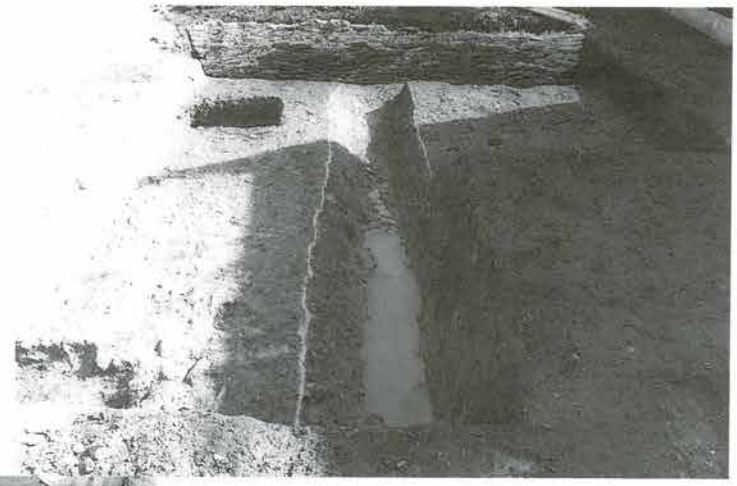
38-4

38-8

38-9

第 1 地点　出土遺物(5)

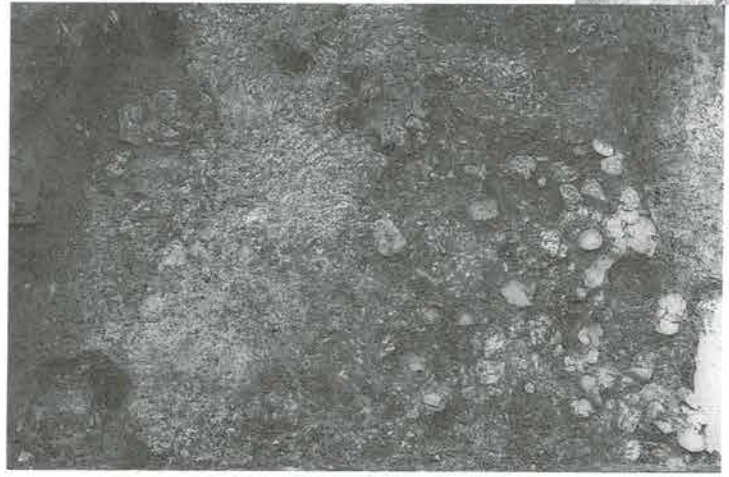
図版 9



1．Ⅱ区1面　溝1　▶
西から

◀2．Ⅱ区1a面　全景
東から

3．Ⅰ区1a面　焼成遺構1・2　▶
東から



◀4．Ⅱ区1a面　焼成遺構1・2
南から

第2地点

1．Ⅰ区1a面　焼成遺構4・5

2．Ⅰ区1a面　焼成遺構4・5中の焼石　西から

3．Ⅰ区1b面　全景　西から

4．焼成遺構3　南から　Ⅰ区1b面

5．Ⅰ区1 1b面　焼成遺構4・5

6．Ⅰ区1b面　P.10・11

7．Ⅰ区2a面　全景　西から

8．Ⅱ区2a面　全景　東から

第2地点

図版11

1．Ⅱ区2a面　溝2内　土師器集中部

2．Ⅱ区2b　全景　東から

3．Ⅰ区2b面　全景　西から

4．Ⅰ区3面　P.79東側遺物溜り

5．Ⅱ区3面　全景　東から

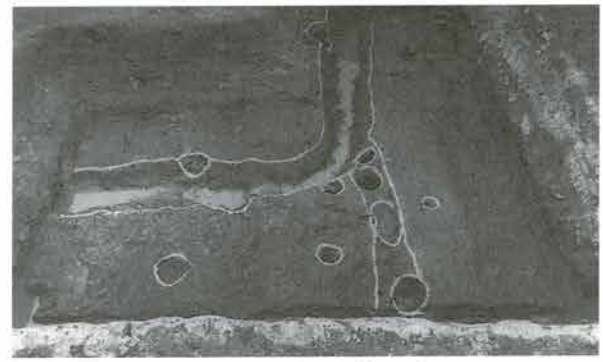
6．Ⅰ区4面　全景　西から

7．Ⅰ区4面　落込み2　西から

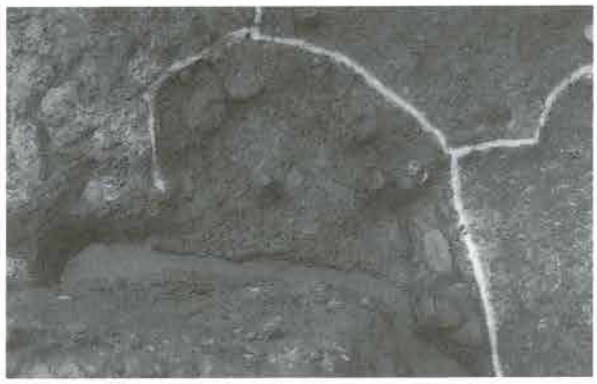
8．Ⅰ区4面　溝5完掘状況

第2地点

1．Ⅰ区5a面　全景　北から



2．Ⅱ区5a面　全景　東から



3．Ⅰ区5a面　土坑12　東から

4．Ⅱ区5a面　落込み7　北から

5．Ⅰ区5a面　野杏（図79-17）出土状況

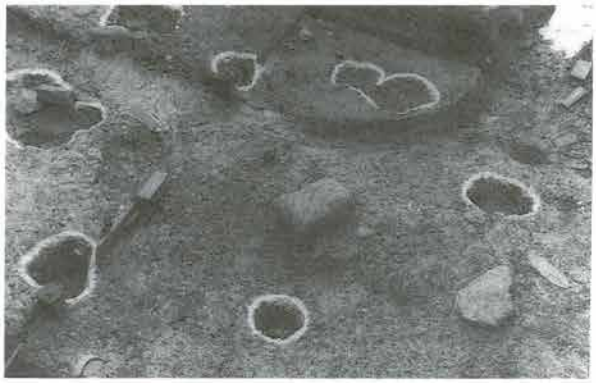
6．Ⅱ区5a面　板締染型板（図80-33）出土状況

7．Ⅰ区5b面　築地状遺構　西から

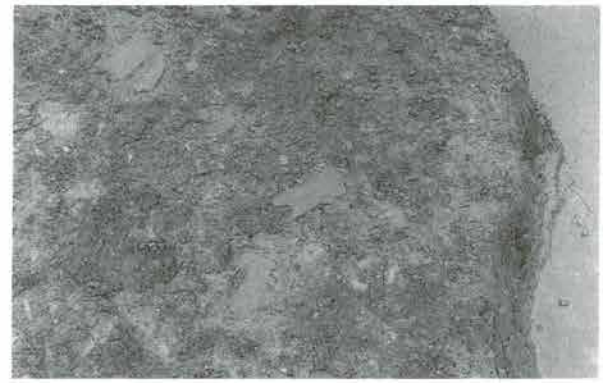
8．Ⅱ区5b・5c面　全景　南から

第2地点

図版13



1．Ⅱ区５b面　柱列１、側板　南西から



2．Ⅱ区５b面　不明木製品（図82-19）出土状況

3．Ⅱ区５c面上層　全景　東から

4．Ⅱ区５c面上層　木器貝溜り　北から

5．木器貝溜り（部分）　西から

6．Ⅱ区５c面上層　木器・貝溜り　東から

7．Ⅱ区５c面　物差（図87-78）出土状況

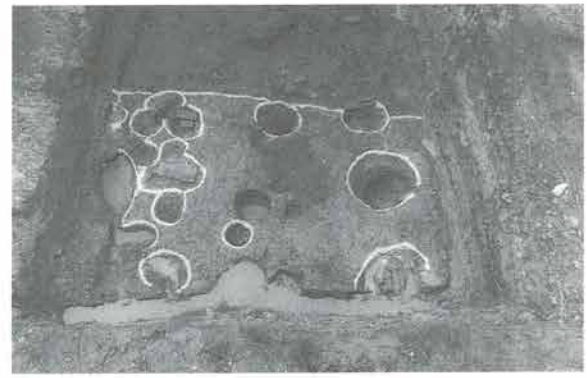
8．Ⅱ区５c面　折敷等（図85-35）出土状況

第２地点

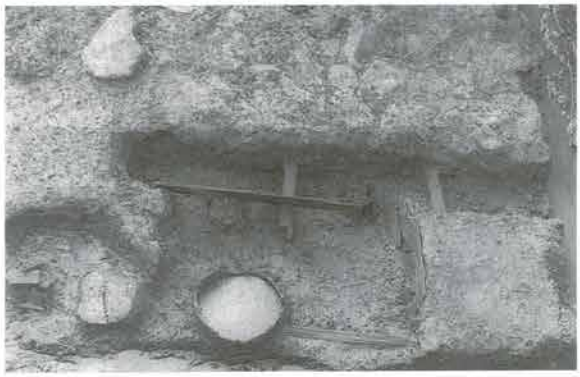
1．Ⅱ区５c面上層　板草覆芯出土状況

2．左板草覆芯取上げ後（表面の植物質部分）

3．Ⅱ区５c面上層　遺物溜り

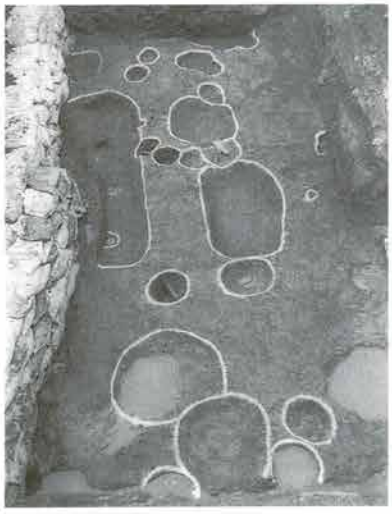


4．Ⅰ区５c面　調査区南部分　南から

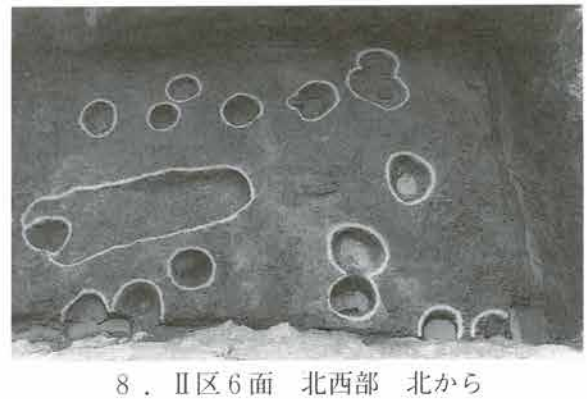


5．Ⅱ区５c面　土坑28　東から

6．Ⅰ区６面　全景　北から



7．Ⅱ区６面　全景　北から

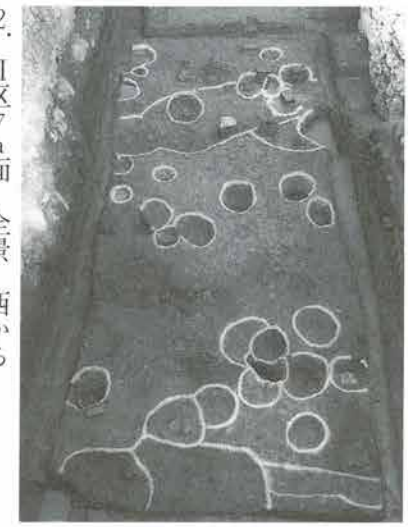


8．Ⅱ区６面　北西部　北から

第２地点

図版15

1．Ⅰ区7a面　全景　南から

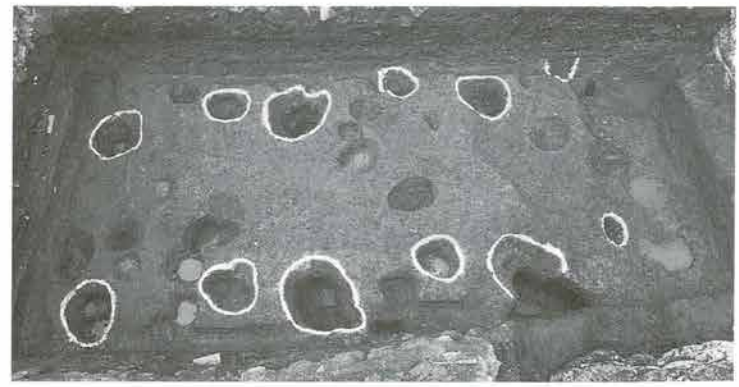


2．Ⅱ区7a面　全景　西から

3．Ⅱ区7a面　土坑41　東から

4．Ⅰ区6a面　木偶状木製品（図95,54）出土状況

5．Ⅰ区7b面　全景　南から



6．Ⅱ区7b面　全景　南から

7．Ⅰ区8面　全景　西から

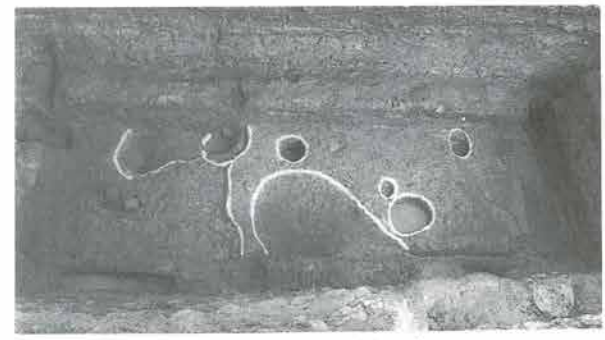
8．Ⅱ区8面　全景　北から

第2地点

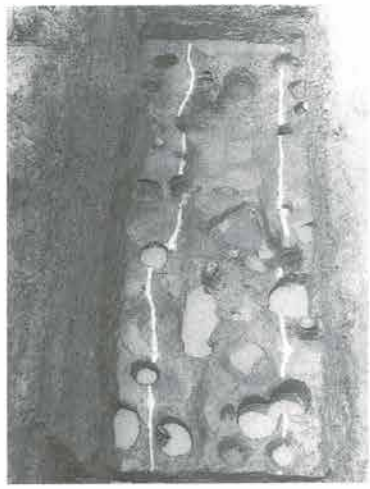
1．Ⅱ区８面　貝・遺物溜り　東から

2．８面　青白磁小壺（図101-７）出土状況

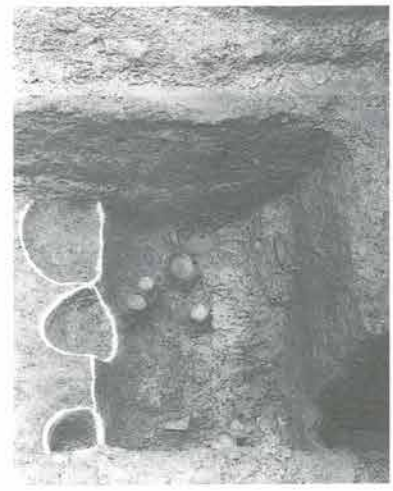
3．Ⅱ区９面　全景　北から



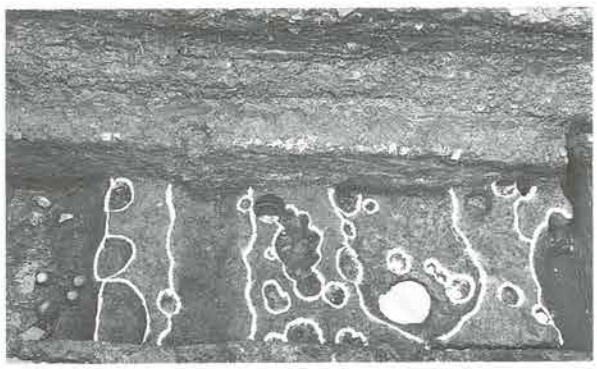
4．Ⅱ区10a面　全景　南から



5．Ⅰ区10ｂ面　全景　南から



6．Ⅱ区10ｂ面　溝11　北から



7．Ⅱ区10b面　全景　南から

8．10b面　子供用下駄出土状況

第２地点

図版17

1．Ⅰ区10c面　全景　北から

2．Ⅰ区10c面　土坑46　西から

3．Ⅱ区10c面　柱穴列13P.1（礎板中央部に柱圧痕残る）　西南から

4．Ⅰ区　最終深掘り　南から

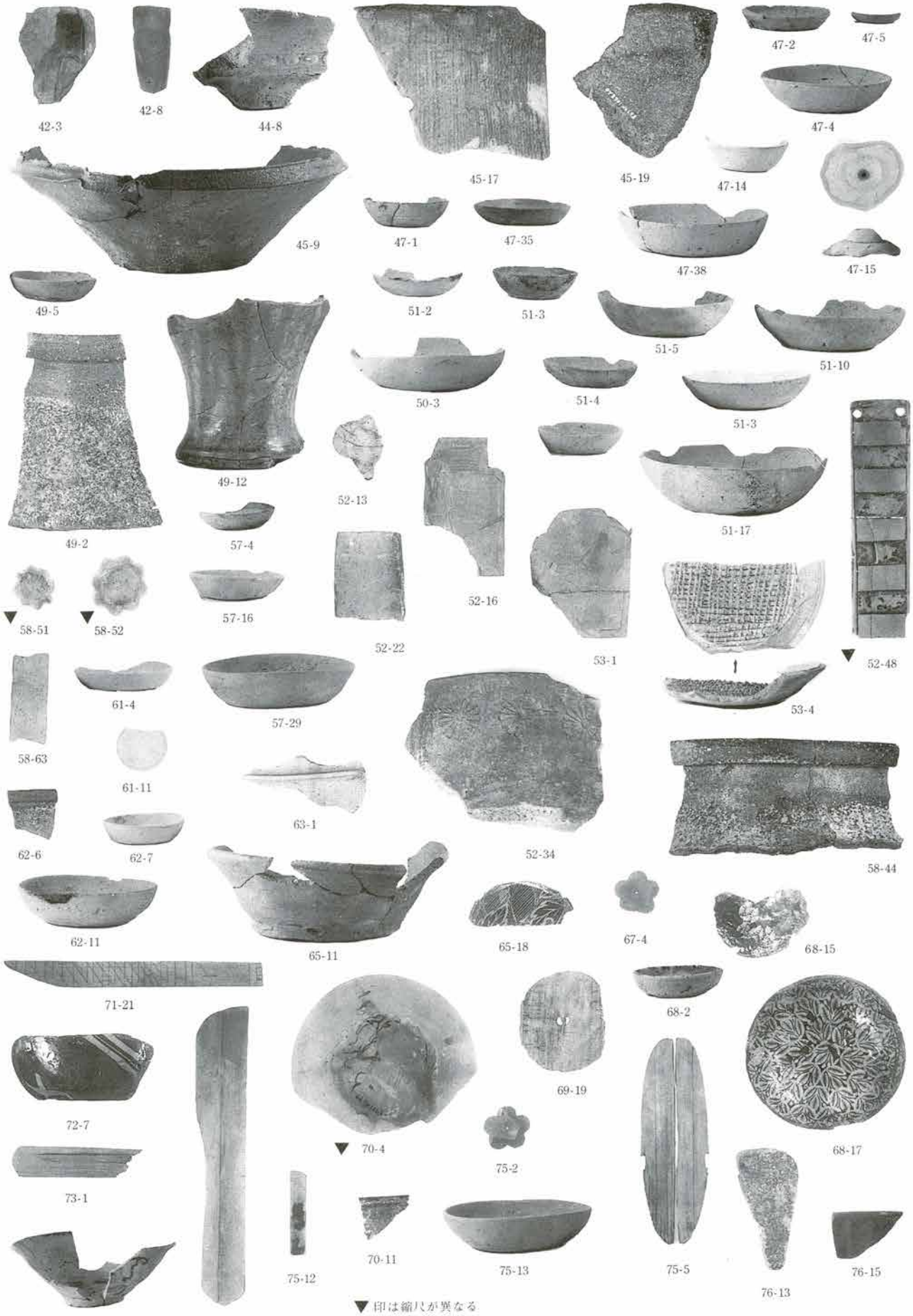
5．Ⅱ区　最終深掘り全景　南から

6．Ⅱ区　東側最終深掘り　西から

7．Ⅰ区　東側上層土層断面

8．Ⅱ区　南側南壁土層断面

第2地点

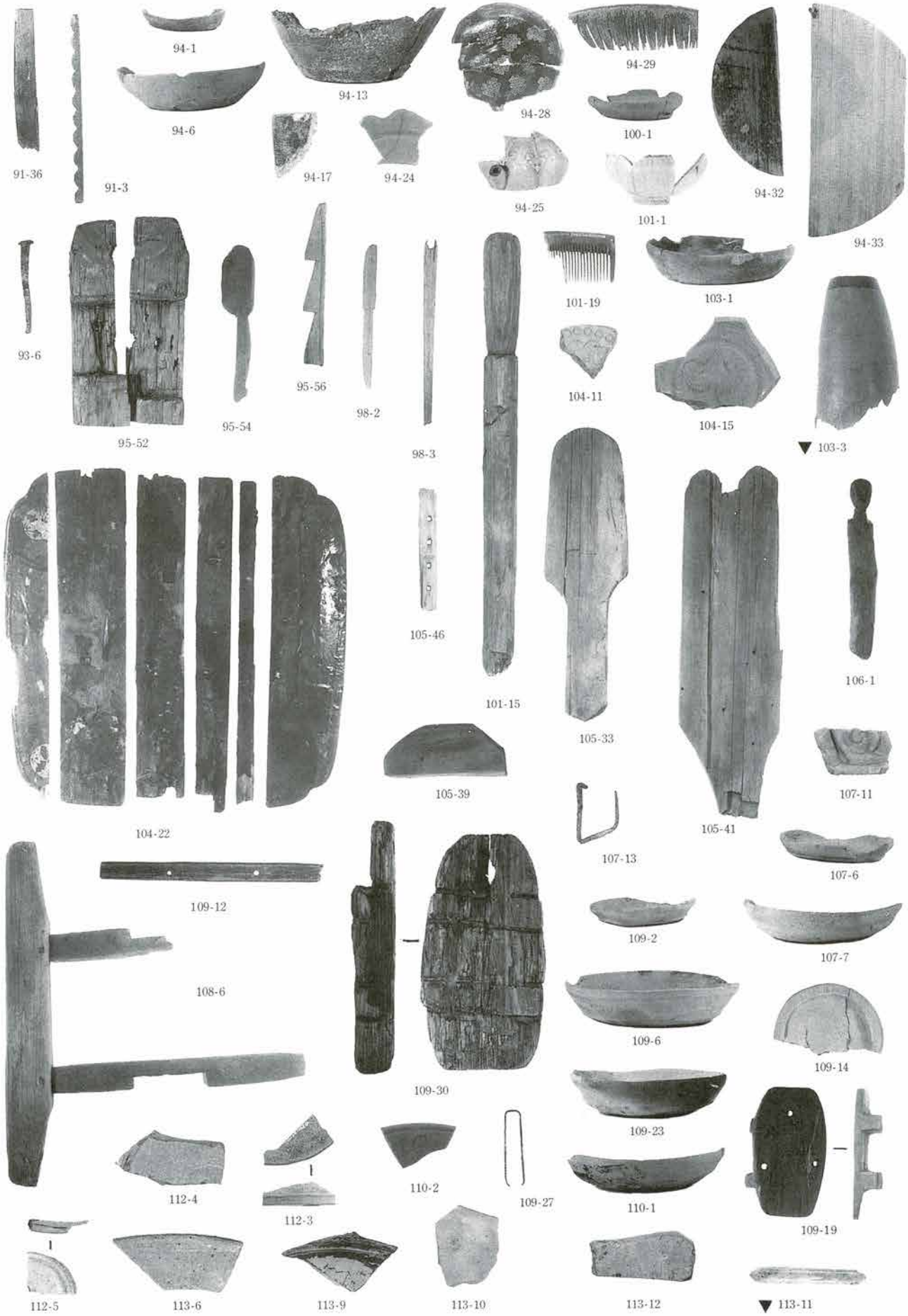


▼印は縮尺が異なる

第2地点　出土遺物(1)

図版19

第２地点　出土遺物(2)


94-1
94-6
94-13
94-28
94-29
100-1
94-32
94-33
91-36
91-3
94-17
94-24
94-25
101-1
93-6
95-52
95-54
95-56
98-2
98-3
101-19
103-1
104-11
104-15
▼ 103-3
104-22
105-46
101-15
105-33
105-41
106-1
105-39
107-11
107-13
107-6
109-12
109-2
107-7
108-6
109-6
109-14
109-30
109-23
110-2
109-27
110-1
109-19
112-4
112-3
112-5
113-6
113-9
113-10
113-12
▼ 113-11

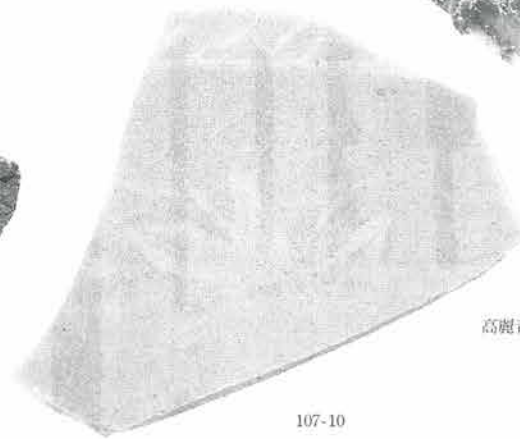
第1地点　出土遺物(3)

図版21

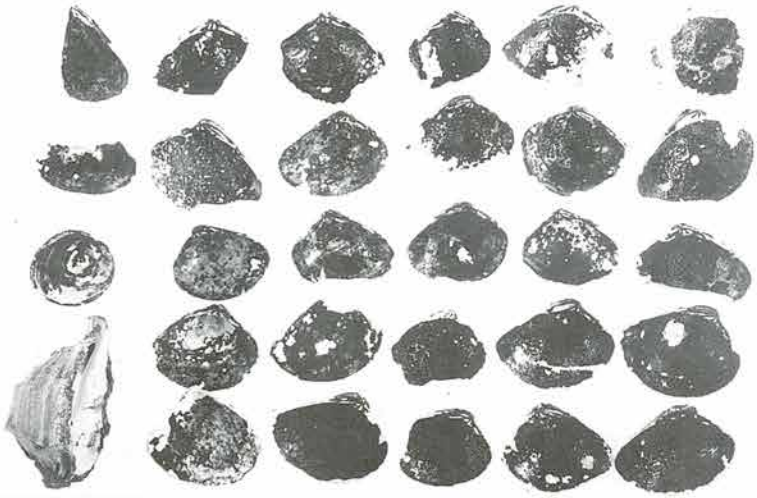
板締め染型板　74-8

剥片石器　112-6

板締め染型板　80-33

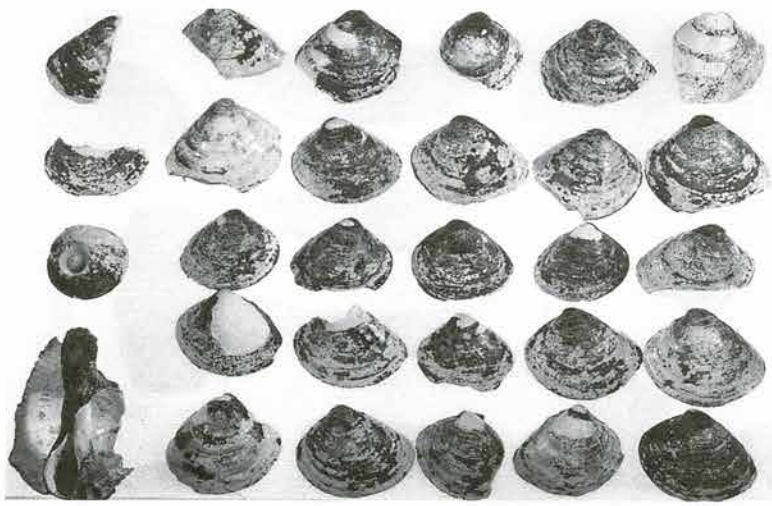


高麗青磁碗　107-10



漆付着貝類　5c上層木器溜り出土（内側）

漆付着貝（拡大）



同上　（外側）

4面出土　猫頭骨

第1地点　出土遺物(4)

1．1面　全景　南から

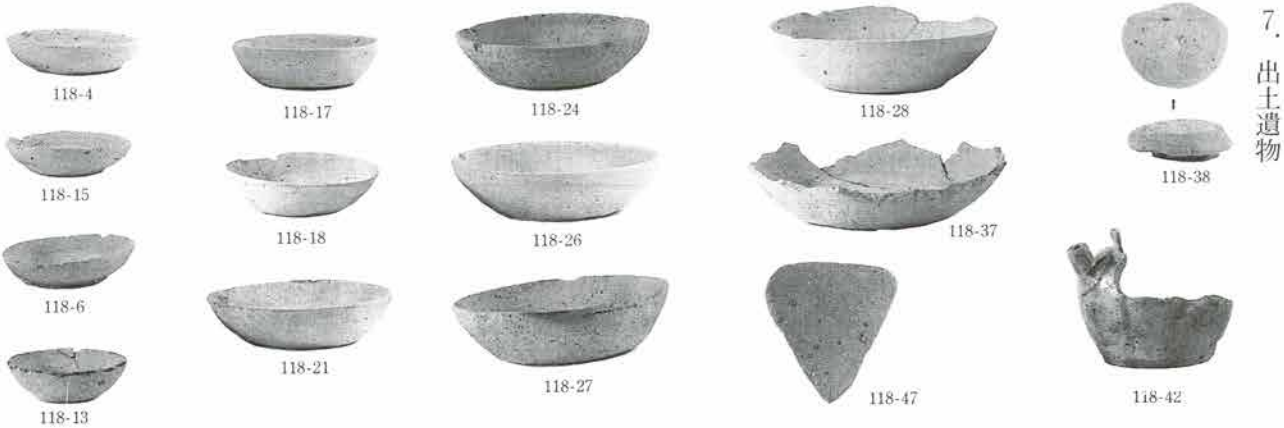
2．1面　全景　東から

3．1面土師器集中出土　東から

4．1面土師器集中出土　南から

5．遺物出土状況

6．北壁土層断面



7．出土遺物

第3地点

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成16年度調査報告
巻次	21（第1分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	福田誠・菊川泉・古田土俊一／斉木秀雄・降矢順子・根本睦子／馬淵和雄・滝澤晶子・鍛冶屋勝二・松原康子・鈴木茂
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
北条時房・顕時邸跡	神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目264番4	14204	278	35°19'12"	139°33'28"	20020204～20020430	188.00	自己用店舗併用住宅
材木座町屋遺跡	神奈川県鎌倉市材木座六丁目647番15	14204	261	35°18'8"	139°33'26"	20020812～20020910	21.00	個人専用住宅（杭基礎構造）
材木座町屋遺跡	神奈川県鎌倉市材木座六丁目647番10	14204	261	35°18'7"	139°33'27"	20020812～20020926	34,30	個人専用住宅（杭基礎構造）
材木座町屋遺跡	神奈川県鎌倉市材木座六丁目647番8外	14204	261	35°18'7"	139°33'26"	20021008～20021108	35.00	個人専用住宅（地盤の柱状改良）
材木座町屋遺跡	神奈川県鎌倉市材木座六丁目647番9	14204	261	35°18'7"	139°33'26"	20021216～20030131	34.40	個人専用住宅（地盤の柱状改良）
大倉幕府跡	神奈川県鎌倉市雪ノ下三丁目701番14	14204	253	35°19'17"	139°33'50"	20020729～20020906	45.00	自己用店舗併用住宅（杭基礎構造）
大倉幕府跡	神奈川県鎌倉市雪ノ下三丁目701番3	14204	253	35°19'18"	139°33'50"	20021116～20030228	81.00	個人専用住宅（杭基礎構造）
大倉幕府跡	神奈川県鎌倉市雪ノ下三丁目701番	14204	253	35°19'17"	139°33'50"	20030724～20030808	16.00	個人専用住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北条時房・顕時邸跡	城館	鎌倉時代	礎石建物跡、堀立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙	舶載陶磁器、国産陶器、かわらけ、金属製品、漆器、木製品、石製品	大きな屋敷内における区画の変遷が判明
材木座町屋遺跡	都市	鎌倉時代～室町時代	柱穴、土壙、溝跡、井戸跡、版築面	かわらけ、銭、石製品、舶載陶磁器、国産陶器、金属製品、須恵器等	
材木座町屋遺跡	都市	鎌倉時代～室町時代	柱穴、土壙、溝跡、井戸跡、版築面	かわらけ、銭、石製品、舶載陶磁器、国産陶器、金属製品、須恵器等	
材木座町屋遺跡	都市	鎌倉時代～室町時代	柱穴、土壙、溝跡、井戸跡、版築面	かわらけ、銭、石製品、舶載陶磁器、国産陶器、金属製品、須恵器等	
材木座町屋遺跡	都市	鎌倉時代～室町時代	柱穴、土壙、溝跡、井戸跡、版築面	かわらけ、銭、石製品、舶載陶磁器、国産陶器、金属製品、須恵器等	
大倉幕府跡	官衙	鎌倉時代～室町時代	堀立柱建物跡、柱穴、土壙、溝跡	かわらけ、銭、木製品、舶載陶磁器、国産陶器、金属製品、漆器、瓦等	鎌倉時代初期の幕府跡推定地の一角と考えられる遺構を確認
大倉幕府跡	官衙	鎌倉時代～室町時代	かわらけ焼成遺構、堀立柱建物跡、柱穴、土壙、溝跡	かわらけ、銭、木製品、舶載陶磁器、国産陶器、金属製品、漆器、瓦等	鎌倉時代初期の幕府跡推定地の一角と考えられる遺構を確認
大倉幕府跡	官衙	鎌倉時代～室町時代	かわらけ焼成遺構、堀立柱建物跡、柱穴、土壙、溝跡	かわらけ、銭、木製品、舶載陶磁器、国産陶器、金属製品、漆器、瓦等	鎌倉時代初期の幕府跡推定地の一角と考えられる遺構を確認

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　21

平成16年度　発掘調査報告（第１分冊）

発行日　平成17年３月31日

編　集
発　行　鎌倉市教育委員会

印　刷　グランド印刷株式会社